
魂の樹形図

旅がらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂の樹形図

【Nコード】

N5862F

【作者名】

旅がらす

【あらすじ】

幼い頃から抱き続けてきた夢。様々な形の『それ』を抱いた少年たちは、大自然の脅威に立ち向かう。出逢いが少年たちを成長させ、そして、彼らを『夢の先』へと導いていく……。

Prologue (前書き)

これは、カプコンのゲーム『モンスターハンター』のファンフィクションです。

一応は『2ndG』がベースですが、ちよいちよオリジナルの設定が加わっております。

若輩者ではありますが、どうぞよろしくお願いします。

12/15

主人公の描写をちょっと変えました。

キャラ作ってたらイメージ通りのヤツがあっただんです(＜|＞)

Prologue

高度な機械文明が衰退し、長い氷河期を終えた矢先の世界。

ヒトはかつての権力を失い、異常な進化を遂げた獣たち　モン
スターに脅える日々を過ごしていた。

しかし、やがてヒトは、そのモンスターの爪や骨、そして皮が、
ヒトを脅かす存在であると同時に、モンスターから身を守るための
武器になることを知る。

知識を得たヒトは、モンスターを狩ることでそれらの素材を剥ぎ
取り、そして加工する術を身につける。

そして、それらの防具を身に纏い、武器を背負った勇士たちは、
後にハンターと呼ばれ、ヒトの世界をどんどんと広げる立役者とな
る。

そして現在では、ハンターによってもたらされるモンスターから
の恩恵が、ヒトの暮らしを支え、なくてはならないものになってい
た。

世は、正に弱肉強食の狩猟時代。

緑豊かな森。花は生い茂り、木々は実を結ぶ。

そんな森の外側に沿って作られた街道を、一台の馬車が進んでい
た。家畜として一般的な大型の草食獣、アプトノスがゆっくりとし
た足取りで馬車を引く。

街道沿いに生えた木立の間を、ケルビと呼ばれる小型の草食獣が二匹、軽やかに跳び跳ねた。

「うわ、今のがケルビかな？ へえ、結構可愛いなあ」

荷台を作り替えた客車を覆う幌の隙間から、一人の少年が顔を出した。まだ成人（十五歳）を過ぎて一年しか経っていない少年は、鮮やかなミカン色の髪を、ドスシャギーという髪型に纏めている。髪で隠れて見えないが、ちょっぴり尖った耳が少年の特徴だ。

少年は馬車から身を乗り出すと、街道のすぐ側を走る草食獣に目を輝かせた。少年の声を聞き、前で手綱を取る老運転手が笑う。

「ハハハ。坊主、ケルビも見たことがねえのか？ 珍しいなあ、王都の出身かえ？」

ケルビは、森丘や密林など、温暖な気候ならばどこにでも住んでいる、とても繁殖能力の強いモンスターだ。その毛皮は人の衣服に増強作用を持つ角は、薬の材料になるなど、人々の生活には欠かせない生物の一つである。

そんなモンスターをはじめて見るといふ者は、大概は一生を城壁の内側で過ごすという王都や、共和国の首都に住んでいた者くらいだ。

しかし、少年は首を横に振った。

「いいや。ドーラ火山の麓の村だよ。オレ、ケルビは毛皮でしか見たことないんだ」

少年が答えると、老運転手は感嘆の声を漏らした。

「ほう。あのラティオのン・ガンガと並ぶ、武具職人の聖地メッカから来

たのか？ しかし、坊主は人間だろ？ あすこにゃあ竜人ばかりが住んでると聞いたが」

「正確には、村の九割かな。オレは親父が竜人だけど、母さんが人間なんだ」

「へええ。ハーフなんて珍しいなあ。」

「ハハ。よく言われる」

珍しい珍しいと繰り返す老運転手にそう言うと、少年は首を引っ込めた。そして、定期的にガコン、ガコン。と揺れる馬車に身を委ねる。

少年の名は、ヴァン・ドラグニル。

幼いころから抱いてきた夢をかなえる第一歩として、一流のハンターとなるべく、故郷の村を離れ、父親の知り合いだというハンターに教えを乞うために彼の住む町に向かっていた。

ヴァンは、今度は老運転手の後ろからヒョコツと顔を出した。

「おじさん。ミミルの町はまだ遠いのか？」

「まだまだだなあ。あと山を二つにドンドルマつつつ町を一つ通らにゃいかん。ドンドルマはあともう少しかかるなあ」

老運転手の言葉に、ヴァンはケルビを見たときと同じように、目をキラキラと輝かせた。

「ドンドルマ！ ハンターズギルドの本拠地がある、あのドンドルマか？」

「それ以外に何のドンドルマがあるだあよ？ ドンドルマはいい町だ。着いたら小一時間ほど休憩するから、坊主も少し見学するとええ」

「うん！」

ヴァンは頷いて顔を引っ込めると、まだドンドルマまでしばらくかかるという老運転手の言葉を忘れ、持ってきた荷物の中から財布やらメモ帳やらを取り出して腰のポーチに詰め始めた。

第一話 桜色の彼女（前書き）

ドンドルマの説明を直しました。

資料は物語を書く前に集めておくべきだと身に沁みた瞬間でした…。

そんな感じで、『たまじゆけ』記念すべき第一話目です

第一話 桜色の彼女

交易都市・ドンドルマ

この地方でも有数の大都市であり、さらにここ一帯の流通の中心でもある土地。かつては、その立地条件から発展が難しいと言われていたにも拘らず、国中が目を見張るスピードで発展した場所だ。

ドンドルマはこの地方をまとめるハンターズギルドの本部の他、大きな武具工房やマーケットが存在し、その名の通り、人々の生活を支える、商業の町である。

ヴァンの乗った馬車は、ドンドルマの検問を抜けると、町の端にある馬車置き場に止まった。ヴァンはすぐさま幌を捲って馬車から飛び降りる。

馬車を降りたヴァンが一番最初に見たのは、人でごった返しになっているドンドルマの広い街道だった。様々な衣服を身につけた人々が、いろいろな商品を扱った店を行ったり来たりしている。

「広っ！ 人多っ！ すげえ！」

単純明快、分かりやすい感想を漏らしたヴァンは、十六歳の少年にしては子供っぽい、キラキラとした目を輝かせた。

それを微笑ましいとも言いたげな顔で、アプトノスの手綱を外しながら老運転手が見つめる。

「坊主。ちよいとここで休憩だ。一時間したら、西側の馬車置き場に来るんだぞえ。いいか、西側だ。間違えんなあ」

「うん、ありがとな、おじさん！」

ヴァンはペコリと一礼をすると、アプトノスの頭を数回撫でてから、ダッシュで街へと繰り出した。

数秒して、アプトノスの手綱を外し終わった老運転手がハッと顔を上げる。

「ああ、坊主う。間違えたよお。ミミルは東側だあ」

しかし、既にヴァンは街の中へと姿を消していた。

ドンドルマは様々な商品を扱う大きな店が、所狭しと建てられている。武具職人だらけで、さらに工房だらけのドーラとは大違いだ。

「うわあつ。これが商業都市かあ。どれもこれもみーんなでっかいなあ」

ヴァンは街を見学しながら、度々感嘆の声を漏らしていた。それを見て田舎ものだと思われながら笑うものもいたが、ヴァンは全く気づかずにしきりに感心し続ける。

しばらく歩いていると、ヴァンの鼻腔を嗅ぎ慣れた匂いがくすくすした。

「ん、この匂い……工房だ！」

煙突と炭の匂いを嗅ぎ付け、ヴァンは一気に走り出した。

五分と掛からずに着いた工房は、前がショーウィンドウになっていて、様々な武器や防具が飾られている。並べられている武具を見て、ヴァンはこれまでで一番目を輝かせた。

隣で武具を見ている青年がいることなど全く気にせず、ヴァンはショーウィンドウに文字通り張り付く。

「すげえ！ ドーラの武具とほとんど同じだ！ 素材の味がめっちゃめっちゃよく出てる。やっぱりドンドルマは良い職人がいるんだなあ」

ヴァンの実家は、昔からドーラに住まう鍛冶職人の家だ。ヴァンは工房の隅で、鉄を打つ音と溶けた鉄の熱で育った。彼自身、物心ついたときには、見よう見まねで工房の手伝いをはじめ、父や高祖父、そして工房の男たちの背中から、鍛冶の技術を教わった。背中に背負っている弓、『ハンターボウ』も、ヴァンが自分で拵えたものだ。

そんな生活を送ってきたせいか、ヴァンは武具については同年代の若者に比べてずっと詳しく、また素晴らしく目利きであった。彼は武具を一目見れば、だいたいの素材の質や量、武具としての完成度を判断することができる。

「『黒刀【零の型】』か。竜骨を基盤に、追加素材はカンタロスの甲殻に頭、あとドスヘラクレスかな。剥ぎ取り方も丁寧だし、刀身にカンタロスの素材の良さがちゃんと出てるぜー」

うつとりとした表情でショーウィンドウに張り付くヴァン。彼の目の前には、黒塗りの太刀が飾られている。

すると、隣でバサバサ。と何かが落ちる音がした。

「ん？」

ヴァンが音のした方を見ると、隣で武具を見ていた青年が、しゃがんで何かを拾っていた。

本だ。それも、かなりの量の。

「わ……」

ヴァンはあまりの書物の多さに一瞬言葉を失いかけたが、青年と一緒に書物を拾い始める。

ヴァンが一緒になって拾っているのに気づいた青年は、慌ててペコペコと何度もヴァンに頭を下げた。

「あ、ご、ごめんなさい。あ、いや違うか、ありがとうございます」

青年は書物を全部拾い終えると、ヴァンに人の良さそうな笑顔を向けた。青年は、ゲネポスショートでまとめた黒髪に、ヴァンよりも大柄な逞しい体つきをしていたが、身なりから大学か研究所の間であることが分かる。

「いや、別にいいですよ。……にしても、すごい量ですね」

「ハハハ。僕の悪い癖なんです。気になると買わずにいらなくなるもので……」

青年はそう言うと、気まずそうに苦笑いをした。書物は一人で持つには多く、青年とヴァンの二人でやっとちょうどいい量だ。これをずっと一人で持っていたのかと、ヴァンは心の奥で驚いていた。すると、それよりも。と青年がヴァンに話しかけてきた。

「さっき言ってたけど、君、見ただけで武具の素材やその質が分かるんですか？」

「え？ あ、ああ、まあ一応。オレ、ドーラの工房の子供だから」

ドーラでは当たり前前のようになっていたことなので、ヴァンは普通じゃない。とでも言いたげな顔で言う。

しかし、青年は突然、ヴァンに尊敬に近い眼差しを向けた。

「ドーラ！ 武具の聖地じゃないですか！ なるほど、だからそんなに目が良いんですね！」

そうかそうか、なるほどなあ。と感心する青年に、ヴァンはただただ圧倒された。

予想外の青年の反応にポカんと口を開けたまま立っていると、青年はシヨールウインドウの中を指差し、ヴァンに話しかけてきた。

「じゃ、じゃあ、あのハンマーは？」

「え、ああ、あれは『工房試作品ガンハンマー』。火竜の体液と爆薬をマカライト鉱石製の火打石で反応させて、攻撃した瞬間に着火および爆発を起こすハンマーだ。爆撃の威力は使わないと分からないけど、あの質のマカライト鉱石なら、三百回は使っても壊れはしないだろうな」

「じゃあ、あのボウガン！」

「ヘビイボウガンの『イヤンクック砲』。イヤンクックの甲殻や鱗、それに骨が主な素材だけど、衝撃吸収剤に使われているのはフルフルの皮だ。フルフルの皮がちょっと頼りないかもな。アレを使うなら結構頑丈な奴じゃないと」

「あの双剣！」

「『スノウヴェノム』。元々はギアノスの素材で作られた双剣にドスイーオスの牙と皮を組み合わせた、氷と毒の二つの属性を持つ剣だ。牙は相当デカイ奴の鋭利なヤツみたいだから、ありや痛いだろうなあ」

青年が示す武具を、ヴァンは淡々とした口調で評価する。二人がしばらくそんな会話を続けていると、何だ何だと二人の会話を聞き付けた人々で、人だかりができあがっていた。

しかし、当の二人はそんなことを気にもせず、会話を続ける。

「あそこの片手剣！」

「あれは『デスパライズ』。素材は……」

「どけ」

「うわあっ！」

突然、青年が誰かに肩を掴まれ、後ろに倒された。青年は尻餅をつき、また書物が地面にばら蒔かれる。青年は慌てて書物を拾いはじめた。

「あっ！」

青年が最後の一冊に手を伸ばした瞬間、その一冊が誰かに思い切り踏まれた。そいつは書物を踏んだまま、ヴァンを正面から見据えた。

男だ。男はゴムのような皮と金属を繋ぎ合わせた鎧を装着し、三角帽のような兜を被っている。背中にはガンランスと呼ばれる、砲撃機能のついたランスを背負っていた。

男は、まるで見下すように顎を軽く上げながら、ヴァンを見ている。

「お前、武具職人でもねえのに何偉そうなことやってんだ？ 調子こいてんじゃないぞ、ガキが」

男がそう毒を吐くと、周りにいた人々がざわざわとざわつき始めた。それを聞いて、しゃがんで本を拾っていた青年が、バツと顔を

上げる。

「そんな、言いがかりです！」

青年の言葉に、男は仰け反ってゲラゲラと下品に笑った。それから、足下の本にぐりぐりと力を入れる。本を見た青年の顔が青くなつた。

「ああ！」

「……オイ、足どける。彼は関係ねえだろ」

ヴァンは自分より背の高い男をギツと睨む。しかし、男はどこ吹く風とでも言うように、本から足を退けなかった。本が少しずつ変形する。青年の顔が、更に青くなった。

それを見て、ヴァンは手法を変えることにした。あまり使いたくない手だが、致し方ない。

「あんたの装備……」

「んあ？」

男が見下すようにヴァンを見る。一瞬で防具の情報を掴んだヴァンは、一気に捲し立てることにした。

「毒怪鳥・ゲリヨスの素材だな。繋ぎの金属はマカライト鉱石に、ゲリヨスの毒を防ぐ抗菌石、それに大地の結晶とドラグライト鉱石を使ってるな。ああ、ちよつとゲネポスの素材も入ってる。武器は鉱石製の『ステイルガンランス』だな」

「……だから何だよ。んなもん、カタログ見りや分かることだ」

そつだそつだ。と、どこからか野次が飛ぶ。それを聞いて、男は

フン、と勝ち気に鼻を鳴らした。
だが、本題はここからだ。

「あんだ、基本ができてないだろ？」

「……何だと？」

ヴァンの言葉に、男の声が低くなる。兜で見えないが、きっと怒りで片方の眉がピクピク震えてるに違いない。

「使っている鉱石、ちょっと荒削りだな。採掘時に傷つけて余計な成分が混ざってる。抗菌石も、にが虫のすりつぶしが足りなくて性能が出しきれてないな。ゲリヨスの皮も傷が多い。大方、狩猟時にパニックってやたらめつたらに攻撃したせいだろうな」

「……………」

男はプルプルと震えながら、一歩後ずさった。青年が待つてましたと言わんばかりの猛スピードで、地面の本を拾う。

ヴァンの攻撃は、更に続く。

「そのガンランスもおんなじだ。質の低い鉱石ばかりで切れ味が落ちやすい。その上あんだ、研ぐのも下手みたいだから、もう砲撃部分がいかれはじめてるぜ」

「こ、このガキが……………」

男の震えが大きくなった。どうやら凶星のようだ。人々はヴァンの言葉に聞き入り、いつ出てきたのか、工房の職人らしき竜人も、うんうんと頷いていた。男は震える拳をゆっくりと上げる。

ヴァンは止めの一発を決めようと口を開く。

「あんだ、ハン」

「ニヤニヤ、ギルドナイツだニヤー！」

突然、人だかりの中から女の子の音が響き、ヴァンの言葉を遮った。声を聞いて、人々はすぐさまバラバラと方々に散っていく。ゲリヨスの男も、チツと舌打ちを打ちながら何処かへと去っていった。

「……何だ、今の？」

一人状況が読めないヴァンは、ポカンとその場に突っ立っていた。青年が踏まれた本についた土を丁寧に払いながら、ヴァンに近寄る。

「ギルドナイツがいるみたいですけど……」

「ああ、あれはウソだニヤ」

首を傾げようとしたヴァンの足下から、先ほどの女の子の音が聞こえてきた。下を見ると、緑の甲冑を着た、レモン色の毛並みの二本足で立つネコ。アイルーがヴァンを見上げている。

レモン色のアイルーは、両手を腰に当ててヴァンに話しかけてきた。

「あの男、貴殿の言う通り、基本のできていない愚か者だけど、腕つぶしだけは本物ニヤ。あのままじゃ、貴殿は今頃その地面でピクピクしてたニヤ」

レモン色のアイルーは、そう言って持っていたピッケルのような武器で、ヴァンの近くの地面をコンコンとつついた。なるほど。あの拳は臨戦態勢だったということか。

ヴァンはしゃがんでアイルーと視線を合わせた。

「ありがとな。えっと……」

「ウチはナタリーニヤ。それに、お礼なら旦那さんに言っただけニヤ。貴殿のピンチに気づいたのは旦那さんの方ニヤ」

「旦那さん？」

ナタリーの言葉にヴァンが首を傾げると、ヴァンの頭上に一つの影ができた。見上げると、桜色の鎧を身につけた少女がヴァンの視界に入る。

少女は前屈みの体勢で左手を腰に当て、右の人差し指をヴァンの前で上下に振った。

「あのさ、君、確かに目利きみたいだけど、あれは言い過ぎ。もっと短気なヤツもいるんだから、気を付けた方が良くわよ」

歳はヴァンとそんなに変わらないだろう。綺麗な銀髪をガウシカテールで一つに結っている。瞳は最高級のマカライト鉱石のように澄んだ、綺麗な青色をしている。ヴァンは目を丸くした。

目の前の少女は、はつきり言っただけで美少女だ。可愛らしいドレスを着て街を歩けば、きっと十人が十人、彼女を振り向くだろう。それでいて気取っている雰囲気もなく、むしろ親しみやすい空気を纏っていた。事実、ヴァンの隣の青年は少女を見て顔を真っ赤にしている。

しかし、ヴァンだけは、他の男たちとは全く違う観点で少女を見ていた。

ヴァンは真剣な表情でスクツと立ち上がると、書物がナタリーの上に落ちるのも気にせず、ガシツと少女の両肩を掴む。少女は突然のヴァンの行動に着いていけず、頭の上にクエスチョンマークを浮かべていた。

「あんだに、頼みがある」
「……え？」

次の瞬間、ヴァンはとんでもないことを口にした。

「今すぐこの鎧を脱いでくれ！」

「……はい？」

空気が、凍った。

ヴァンの発言に、周囲の空気がまるで鉄と化したかのような固さになる。少年は再三本を落とし、本の山から抜け出たナタリーがそのままのポーズで固まる。唯一、少女のこめかみのみがピクピクと震えていた。

そんな中、一人全く空気の読めていないヴァンが、再び少女に頼み込もうと口を開く。

「今すぐこのよろ」

「誰が脱ぐかこのド変態がああっ！」

ヴァンが全てを言い終える前に、少女の右アッパーがヴァンの顎にクリーンヒットした。

第二話 立ちはだかるは、『陸の女王』

「……………いてえ」

「自業自得ですよ」

武具工房の中で、ヴァンは顎に氷嚢を着けて悶絶していた。その隣では、青年が男に踏まれた本をパラパラと捲っている。

「ガツハツハ。まさかレラちゃんにあんな切り込み方をするたあなあ。坊主。なかなか面白かったぜ」

そう言いながら、ヴァンと青年にお茶を出すのは、この工房の武器職人だった。ゼックスと名乗った職人に、ヴァンは片手を上げて、青年はペコリと頭を下げてお礼を言う。

ヴァンは、ゼックスの言った名前に首を傾げる。

「レラ？ 変わった名前だな」

「昔あった、極東の国にいた部族の古い言葉で『風』という意味ですな」

ヴァンの隣で青年がスラスラとその意味を答えると、ゼックスは腕をくんで感心した。

「お、そっちの坊主は博識だな。なんだ、よく見りゃ書士官じゃねえか」

「書士官？」

再び今度は逆方向にヴァンが首を傾げると、青年はコクリと頷いた。

「はい。名乗り遅れましたが、僕はヒューゴ・レペンスといいます。王都の王立学術院で書士官として働いています」

ヒューゴはそう言って、ヴァンに右手を差し出した。ヴァンは顎に氷嚢を当てたまま、握手を交わす。

「ドーラ村『ドラグニル工房』のヴァン・ドラグニルだ。よろしく、ヒューゴさん」

二人が互いに自己紹介を終えて手を離すと、いきなりゼックスが前のめりになってヴァンを見た。

「ドラグニル！ まさか坊主、『神の手』と呼ばれる、ジン・ドラグニルの血筋か！？」

そう訊ねるゼックスの顔は、興奮で真っ赤になっている。心無しか、鼻息も荒い。ヴァンは余りの圧倒感に、椅子ごと後ろに下がる。

「じ、ジン・ドラグニルは、オレのひいひいじいさんだよ。今でも工房でピンピンしてる。あと二百年は生きそうだ」

ヴァンはそう答えると、後頭部を掻きながら小さなため息をついた。

ヴァンにとって、『神の手』『ジン・ドラグニルはこの世で一番恐ろしい相手なのだ。小さいころに、顔に落書きをした罰でまだ動いている竈の上に吊るされたことは、決して忘れられない恐怖として、ヴァンの記憶に残っている。』

しかし、そんなことなど全く知らないゼックスは、そうかそうかとしきりに感心していた。

「竜人族が長命なのは知っていましたが、ひいひいおじいさんがまだ生きてるなんて、すごいですね」

「御年今年で五百と三十八なんだとさ。オレの親父も今七十九だけど、はつきり言って三十代後半くらいにしか見えないぜ」

ヴァンがそう言うと、ヒューゴがヴァンを疑いの眼差しでジッと見つめているのに気づく。

「どうしたんだよ、ヒューゴさん」

「まさか、君もその姿で既に四十歳を超えていたりとかは……」

「オレは今年で十六だったのー！」

ヴァンは言われて思わず立ち上がる。と、先ほど打たれた顎がまた痛みだした。

「つてえ〜。まだヒリヒリしやがる……」

再び椅子に座り、氷嚢を顎に当てると、ヒューゴが本をパタンと閉じた。

「そう言えば、ヴァンくんは何であんなこと言っただんですか？」

「……………何でって、何で？」

「いや、さすがにあれば、非常識極まりないかなと……」

ヒューゴは頬を掻きながら、そう言って苦笑いを浮かべた。しかし、ヴァンは首を傾げながらヒューゴに訊ねる。

「防具を見せてもらっこと、どこが非常識なんだ？」

「……………へ？」

ヴァンの言葉を聞いて、ヒューゴとゼックスは言葉を失った。今、この男は何と言ったんだ。

しかし、ヴァンはそんな二人など気にせずに、うっとりとした表情を浮かべた。

「いや、しかし、あの桜色の鎧、リオレイアの亜種の素材だったよなあ。『陸の女王』でその上亜種の素材は、ドーラでも数ヶ月に一回くらいしか見れねえのになあ。ああ、もうちょっとじっくり見たかったぜ〜」

まるで、恋する乙女のような（ヴァンが若干中性的な顔つきにもよる）、恍惚とした表情を見せるヴァンを見て、ヒューゴとゼックスはしばらく放心。数秒して、同時に笑い声を上げた。ヴァンは不審そうに突然笑いはじめた二人を見る。

「何が可笑しいんだ？」

「ヴァンくんたら、すごく紛らわしいじゃないですか、それ！」

「まったくだ！ あんなべっぴんさんに話しかけられたのに、顔じやなくて鎧を見るたあな。坊主、お前は良い職人になれらあ！」

「ゼックスさん、それは褒め言葉ではないでしょう！ でも、本当に可笑しいなあ！ さすがは武具職人の聖地、ドーラの出身ですね！」

「……何かよく分からんが、最後のヒューゴさんのも、絶対に褒めてねえよな」

相変わらず笑い止まない二人を見て、ヴァンは苦笑いを浮かべつつ、ふと、壁の時計に目をやった。

ヴァンが町に繰り出したのは、ちょうど昼すぎの二時ごろ。

現在の時刻、三時十分前。

『一時間後に、西側の馬車置き場だあ』

「やっつべえ！」

老運転手の言葉を思い出したヴァンは、慌てて立ち上がった。ヒューゴとゼックスが笑うのを止めてヴァンを見る。

「どうした、小僧？」

「あと十分後に、ミミル行き馬車が出ちゃうんだよ！ すっかり時間忘れてた！」

「何ですって！」

ヴァンの言葉に、何故かヒューゴまで慌て始めた。一人、仲間に入れないゼックスが、ヒューゴに訊ねる。

「おいおい、坊主はともかく、なんであんたまで焦るんだ？」

「僕もミミルに行くからですよ！ そんな、急がないと！」

「ヒューゴさんもミミルに？」

ヒューゴの言葉に、ヴァンも反応した。ヒューゴはブンブンと首を上下に振る。本をすべて積み上げると、ヒューゴはナツプサックを肩に下げた。

「とにかく、急がないと！ ミミル行き馬車はどこから？」

「西側だ！」

ヴァンも自分の荷物をポーチに詰めて、席を立った。それから、ヒューゴが積み上げた本の上半分を持ち上げる。

「あ、ありがとうございます！」

「礼は後でいい、急ごう、ヒューゴさん！」

「はい！……あ、お茶、ごちそうさまでした！」

「あつ、オレも氷嚢ありがとう！」

「お、おい、坊主ども！」

「「じゃあ！」」

ゼックスの制止も聞かず、ヴァンとヒューゴは猛ダッシュで工房を後にした。

一人残されたゼックスが、ポツリと呟く。

「ミミルは東なんだぞ……」

十分後、二人はなんとか馬車置き場に到着した。ヴァンはゼエゼエと肩で息をする。

「な、なんとか、ま、間に合ったあ……」

しかし、安堵するヴァンの横で、ヒューゴがポカンと口を開いたまま動かない。

「……どうしたんだ、ヒューゴさん」

「ヴァンくん……」

ヒューゴが、まるでからくり人形のように、カタカタと首をヴァンに向ける。その顔は、今にも泣きそうだった。

「ここ、西じゃなくて、東……」

ヴァンの手から、本がバサバサと落ちる。ヒューゴは顔中冷や汗だらけになっていた。

今から戻っても、馬車には間に合わない。そう二人は諦めかけていた。

だがしかし、

「おお、坊主う。待つとつたぞお」

聞き覚えのある声に、ヴァンは自分の耳を疑った。まさか、と思つて声のした方を見る。

「おじさん！」

「おお、街は楽しかったかあ？」

そこには何故か、西にいるはずの老運転手とその馬車がいた。ヴァンは落とした本を拾い集めて、老運転手の元へと走る。遅れて、それにヒューゴが続いた。

「おじさん、何でこっちにいるんだ？ ミミルは西じゃなかったっけ？」

ヴァンがそう訊ねると、老運転手は首を横に振った。

「ミミルはこっちで合ってるぞお。ちゃんと言い直したはずだがな」

「……え？」

老運転手の言葉に、ヴァンの顔が固まる。ちなみに、確かに老運転手の言葉は正しいが、ヴァンはそれを聞く前に、既に街へと繰り出していたのだ。

「え、えっと、まあ、終わり良ければすべて良しですよ。おじさん、僕も乗ってもいいですか？」

固まるヴァンの横で、ヒューゴがあたふたしながらもその場を取り繕うとする。マイペースな老運転手は、固まるヴァンのことなど既に忘れ、ヒューゴにゆっくり頷く。

「ええぞお。ここからなら一千ゼニーで乗せてやるぞえ」

「ありがとうございます。さ、乗りましょう、ヴァンくん」

「え、あ、おお」

ヒューゴに背中を押され、ヴァンはようやく我に帰る。そのまま、後ろから馬車に乗車した。

「あれ……?」

「あっ!」

馬車に乗ると、二人は見覚えのある顔を見つけた。桜色の少女レラと、レモン色のアイルー　ナタリーだ。二人もヴァンたちに気づくと、目を丸くした。

「あ、さっきのド変態」

「ド変態だニヤ」

「ちげーよ!」

開口一番に酷いことを言われたヴァンは、間髪入れずに否定する。しかし、レラたちはツンとそっぽを向いた。

「坊主う、乗ったなら出発するぞお」

中のことなど露とも知らない老運転手の声が、ヴァンたちに訊ねてきた。分かった、もういいよと答え、ヴァンとヒューゴがレラたちと向かい合うように座ると、前から手綱を引く音と、アプトノスの鳴き声が聞こえてきた。馬車がゆっくりと動き出す。

「あなたたちもミミルに行くなんて、奇遇ね」

馬車が動き出すと、レラからヴァンたちに話しかけてきた。先ほどのことがまだ少し堪えているヴァンは、無言で気まずそうに頭を掻く。

すると、レラの隣でナタリーが小さく噴き出した。

「別に、旦那さんはもう気にしてないニャよ。さっきのは、ちょっとした仕返しニャ」

「……………」

それでもまだ黙るヴァンに、今度はレラが話しかける。

「一応、マナーとして、女性にあんな頼みするもんじゃないってことよ。まあ、ゲリヨス野郎のときみたいに、防具目当てだったんでしょっけど」

レラはそう言うつと、おもむろに両腕の籠手を外し、ヴァンに向かって投げた。ヴァンは、慌てて両手を空中に出してそれをキャッチ

する。

「…………え？」

「さすがに今全部を脱ぐのは嫌だけど、籠手くらいならどうぞ」

「…………マジで？」

「別にいいなら」

「見る見る見ます！ うおお、やったぜ！」

レラの言葉を遮って、ヴァンはじつくりと籠手を見始める。その隣でヒューゴが、

「良かったですね」

とヴァンに話しかけるが、既にヴァンは、自分の世界に入ってしまった。
っていた。

「ハアア。この桜火竜の鱗の艶！ なかなかこの艶は出ないぜえ。
このリオレイア、すげえ立派だったんだろうなあ」

「一ヶ月前に、すぐ近くの丘に出たのよ。確かに少し大きかったわ
ね」

「それに、この甲殻の輝き！ 最っ高だぜ〜！ あのゲリヨス野郎
と違って、無駄な傷が最小限で済んでる。武器は太刀か？」

「え、ええ、そうよ」

使用した武器を言い当てられ、レラはコクリと頷いた。ヴァンの隣で、ヒューゴが目丸くする。

「え、ヴァンくん、そんなことも分かるんですか？」

「まあな。片手剣と双剣だとちょっと判別しづらいけど、傷のこの細さは太刀特有の筋だ。そうとう良い武器で挑んだんだな」

「べ、別に、そこまで良い武器じゃないわよ」

レラはそう言いながらも、照れているのか頬を赤く染めていた。主人のそんな一面を見て、ナタリーが小さく微笑む。

「旦那さん、照れてるニヤ」

「照れてるな」

「照れてますね」

「う、ううつるさいわね！ 照れてなんかいいわよ！」

ナタリーにヴァンとヒューゴも便乗すると、レラは更に顔を真っ赤にした。馬車の中の空気が一気に和やかなものになる。

が、しかし、

「うわあっ」

「きゃっ」

「ああ、本が！」

「ウニヤッ」

突然、馬車が大きく揺れた。レラが運転席に訊ねる。

「おじさん、どうしたの！」

「ああ、ああああ……」

レラの問いに、老運転手は答えなかった。ただ、呻き声だけがレラたちの耳に届く。

「……ごめん、籠手返してもらおうね。ナタリー！」

「はいニヤー！」

レラの呼び掛けにナタリーは頷くと、脇に置いてあった自分の武

器と、布に包まれた長い包みから、一振りの黒い太刀を取り出す。レラはヴァンの腕から籠手を取ると、素早くそれを装着し、ナタリから太刀を受け取る。

「貴方たちは、ここにいて！」

「あ、おい！ ちょっと待ってっ！」

レラはそれだけ言うと、馬車から飛び下りた。ヴァンは、先ほどのレラの言いつけを守らずに、弓と矢筒を背負って馬車から飛び下りる。遅れて、ヒューゴも続いた。

「な……っ！」

「これは……っ！」

馬車から降りた瞬間、二人は戦慄した。自分たちのような矮小なものとは違う、『王』の風格を目の当たりにする。

そこにいたのは、馬車の二倍はある、巨大な生き物だった。全身を緑の鱗に覆われ、甲殻は鋼に匹敵するだろう、幾重にもついた傷は、皮膚まで届いてはいなかった。翼と尻尾についた棘からは、毒々しさを感じる。その足下で、二つの影が動いていた。

「まさか、これが……っ！」

ヒューゴが、震える口を何とか開くが、言葉が続かない。だが、それより早く、ヴァンが小さく呟いた。

「『陸の女王』 リオレイア……っ！」

第三話 二つの戦い(前書き)

初のモンスターとのバトルシーン。読みづらいかもしれません。
・:
)

第三話 二つの戦い

ヴァンは、はじめて見る飛竜から溢れるあまりに巨大な圧迫感に、指一本動かすことができなかつた。

(あれが、女王……！)

リオレイアの素材なら、何度か目にしたことがあつた。父親の後ろで何度も、その甲殻の加工の難しさや、そこから作り出される武器の強さを体に染み込ませてきた。

だが、『それは、ヴァンの想像をはるかに超えていた。』陸の女王』と呼ばれるに相応しいその飛竜は、ヒトでは決して出すことのできない、自らをまとう鎧の凶悪な存在感を、ヴァンに見せつけていた。手が震え、足が竦む。それと同時に、今自分が抱いている夢への、あまりにも長い道のりを思い知らされた。

「はあぁっ！」

レラの力強い声に、ヴァンは我に帰つた。よく見ると、リオレイアの足下でレラとナタリーが武器を構えているではないか。レラは、カントロスの甲殻で鍛えた黒塗りの太刀『黒刀【弐の型】』でリオレイアの足を斬りつけている。リオレイアの足から真っ赤な鮮血が迸る。

「ナタリー！」

「ハイニャー！」

レラはナタリーに呼び掛けると、一步後ろに大きく後退した。それと同時に、ナタリーがタル製の爆弾を持ってリオレイアに突っ込む。

「これでも喰らうニヤ！」

ナタリーはそう言うと、爆弾をリオレイアの足下に投げた。爆弾は地に着いた瞬間に爆発し、リオレイアの傷ついた足に火傷を負わせる。リオレイアの叫び声が、ヴァンたちの耳にも届いた。

（まずい……！）

ヴァンは焦っていた。レラとナタリーの攻撃は確かに効いている。しかし、リオレイアを倒すには全然足りない。その上、リオレイアはレラたちに気付いたのか、こちらに焦点を合わせ始めた。

（このままじゃ、全員やられる！）

ヴァンは、背中の弓を取り、展開させた。もう片方の手で、動かない足を殴る。

（動け。動くんだ！）

そう自分に言い聞かせるが、足はなかなか動かない。それでも、ヴァンは一歩前へ踏み出した。

「ヒューゴさん、おじさんを、中へ」

「……え？」

ヴァンの隣でガタガタと震えていたヒューゴが、ヴァンを見る。そして、展開した弓を見て、目を丸くした。

「ま、まさかヴァン君！」

「オレはあいつらに加勢しに行く。このままじゃ、全滅しちゃうだろ」

「でも、君の装備じゃ！」

ヒューゴは必死にヴァンを止めた。ヴァンが今着ているのは、レザーライトシリーズという、初心者が初めに装備する、防御力などほとんどないに等しい防具である。武器の弓も、駆け出しのハンタ

ーが入門用として使うものだ。はっきり言って、飛竜に挑んで無事に帰れる装備ではない。

しかし、それでもヴァンは考えを変えるつもりはなかった。

「考えがある。でも、それは弓じゃないとできないんだ」

「え……?」

「頼んだぜ、ヒューゴさん!」

「あ、ヴァン君!」

ヒューゴの制止も聞かず、ヴァンはリオレイアに向かって走り出した。走りながら、ヴァンは腰のポーチから赤色の液体が入ったビンを取り出し、弓に組み込む。

一人残されたヒューゴは、オロオロと辺りを見回した。

「と、とにかくおじさんを中に!」

まずは老運転手を馬車の中に入れようと、ヒューゴは運転席に飛び乗る。アプトノスは脅えてその場へたり込んでいる。幸い、老運転手は体を震えさせながらも、意識はしっかり保っていた。

「おじさん、大丈夫ですか!??」

「ああ、ああ、わしは平気だよお」

「とにかく、中に入りましょう」

ヒューゴは小柄な老運転手を背中におぶさると、運転席を降り、後ろに回った。

「え……」

そこでヒューゴは、街道寄りの木立に人影があることを見つけた。

その影は、真つ赤な血で濡れていた。

「そ、その人、大丈夫ですか!？」

ヒューゴは老運転手を座席に下ろすと、人影に駆け寄った。

「せえいつ!」

一方、レラはリオレイアに果敢に斬りかかっていた。しかし、すでに血糊で汚れた刀はリオレイアの甲殻に跳ね返され、ダメージは皆無である。

「せめて森に入ってくれば……!」

レラは舌打ちをする。今日は故郷に帰るだけだったので、閃光玉せんこうたまやトラップは持ち合わせていない。隙を作れないのに砥石を使えば、リオレイアはここぞとばかりにレラたちの後ろの馬車を襲うだろう。それだけは避けなければならなかった。レラたちにリオレイアの注意を引かせ、馬車に攻撃しないように配慮をしなければならない。

「旦那さん!」

「私に構わなくていい! もう一度爆弾を!」

「り、了解ニヤ!」

太刀が弾かれたのを見て、ナタリーが叫ぶ。しかし、レラは再び血糊まみれの太刀でリオレイアに斬りかかった。

突如、リオレイアが飛び上がった。そのまま体を前に回転させる。遠心力によって力が増加した尻尾の一撃が、レラを襲う。

「きゃああっ！」

太刀とは、大剣の派生武器で余分な刃をここぞとばかりに削り、攻撃力を上げた武器だ。大剣と違い、重い一撃は出せない分、身軽になったことで鋭く、そして疾くモンスターを切りつけることができる。

しかし、それは逆を言えば、防御において弱体化したとも言える。刃を削った分、モンスターの強い一撃を喰らえば、すぐに性能が劣化する危険性を孕んでいた。

よって、レラは尻尾の一撃を防御することができず、直撃は免れたものの、体勢を崩してしまった。そのまま風圧によって街道脇の木立まで飛ばされる。

「しまった！」

レラが舌打ちするのも束の間、リオレイアが首を上を持ち上げる。口の端から、赤い炎が漏れていた。

「やめろおおお！」

レラが叫ぶ。ナタリーも止めさせようとジャンプして斬りかかるが、リオレイアの頭までは届かなかった。

レラもナタリーも諦めかけ、リオレイアが火球を吐こうとした、
そのとき、

「当たれええ！」

突然、リオレイアの咽喉元に、三本の矢が刺さった。リオレイアは突然自身を襲った痛み悶え、火球を馬車ではなく空に向けて吐く。

「え？」

「な、何ニヤ？」

何の前触れもなく視界に現れた矢に、レラとナタリーが目を丸くしている。再びリオレイアの咽喉元に矢が刺さった。今度は甲殻に突き刺さるだけでなく、その皮膚をも突き破り、リオレイアの咽喉に穴を空ける。

「き、貴殿は！？」

ナタリーが矢の飛んできた方向を見て、驚いたような声を上げた。同じ方向を見て、レラもさらに目を丸くする。

そこには、矢を番えたヴァンが立っていたからだ。ヴァンは、木立にいるレラに向かって叫ぶ。

「オレがアイツの動きを止める！ お前はその間に武器を研ぐんだ！」

「な、貴方、死にたいの！？」

ヴァンの提案に、レラは声を荒げる。もし、相手が熟練のハンターならば、レラは何も言わずに従っただろう。しかし、ヴァンを見る限り初心者だ。装備だって、レラのものに比べたら余りにも貧しすぎる。

しかし、ヴァンは退かなかった。キリキリと弓を引き、穿つ。今

度は翼を射抜いた。

「よしなさい！ 今の貴方じゃ……」

「おい、ナタリー！」

「ニヤ！？」

レラの制止を遮り、ヴァンはナタリーの名前を呼んだ。突然名指しされたナタリーは、オロオロとした表情でヴァンを見つめる。

「策があるんだ。ちよつとの間、あいつを引きつけてくれないか？」

「ちよ、ふざけないで！」

レラが叫ぶ。しかし、ヴァンは真剣な表情でリオレイアを睨んでいた。ナタリーは二人を交互に見て、最後にヴァンを見つめる。

「……それは、みんなが生き残れる策かニヤ？」

「ああ、絶対大丈夫だ！」

ナタリーの問いに、ヴァンは頷いた。すると、ナタリーもコクリと頷いたのだ。

「了解したニヤ。貴殿を信じるニヤ」

「ナタリー！」

「旦那さん、できるだけ早く頼むニヤ！」

ナタリーはそう言うと、爆弾を取り出してリオレイアに向かって突っ込んだ。ヴァンは再び矢を番え、放つ。今度は、三本同時にリオレイアの腹に突き刺さった。ナタリーが引きつけているおかげで、リオレイアはヴァンやレラの方を向いていない。ヴァンは弓から空になったピンを外し、今度は黄色の液体の入ったピンを取り出した。

「……ちっ」

レラは舌打ちをしつつ、早く戦線復帰するために砥石を取り出した。

「大丈夫ですか、しっかりしてください！」

時を同じくして、ヒューゴは先ほど発見した人影を馬車の中で介抱していた。それはヒューゴたちとほとんど変わらない歳の青年で、その身にはゲネポスと呼ばれる鳥竜種の鱗と皮でできた鎧を纏っていた。怪我をして動けないでいる青年の隣には、彼の武器らしい、棘のついたハンマーが置いてある。

青年は、ガタガタと震え、とても脅えていた。

「お、俺、ランポスを、狩っていたんだ……そ、そしたら、いいきなりアイツが……」

アイツとは、十中八九リオレイアのことだろう。おそらくこの青年は、飛竜に挑んだことが一度もないのだ。そして、ここまで逃げてきたのだという。

「アイツの吐いた火が、俺の腕に当たって、俺、こ、怖くて……！」

青年はそう言うと、嗚咽を漏らし始めた。確かに、彼の右腕は酷い火傷を負っている。けがを負った青年を見て、はつきりと意識を戻した老運転手が、彼の火傷に丁寧の水をかけていた。

と、そのとき、突然外でギヤアギヤアと何かが泣きわめく声が聞こえた。続けて、アプトノスの叫ぶ声が聞こえる。

「な、何だ!？」

ヒューゴが慌てて馬車から顔を出すと、六匹の青い鳥竜　ランポスが馬車を囲んでいた。老運転手が、顔を出して目を丸くする。

「な、なんでここにランポスがいるだよ!　ここはこいつらの縄張りじゃないぞえ」

すると、今度は青年が目を丸くした。

「そ、そいつら、多分俺が狩りきれなかった奴らだ……」

「何ですって!」

「お、俺、そいつらを狩っている途中でアイツに襲われたんだ……。で、でも、俺、もう……」

青年はそう言うと、再び大きく震えだした。ヒューゴはそれを見て考える。今、ここにいて、ランポスと渡り合える可能性が例え少なくとも一番高い人間、それは……。

「これ、お借りしますね」

「え?」

それは、自分だと、ヒューゴは判断した。幸い、青年の持っていたハンマーは、ヒューゴが持つのにちょうど良かった。一度だけ軽

く振り、感覚を確かめる。すると、それを見た老運転手がランポスを見た時よりもさらに大きく目を丸くした。

「坊主、いったい何をする気だあ」

「倒します。おじさんはこのまま、彼の看病をお願いします」

ヒューゴはそれだけ言うと、ハンマーを持って馬車から飛び降りた。ランポスたちが、降りてきたヒューゴを鋭い目つきで見つめる。ヒューゴは一瞬だけ身震いしたが、ハンマーを強く握りしめ、恐怖に耐える。

「うおおおおっ!」

ヒューゴは、目の前のランポスに向けて、力いっぱいハンマーを振り下ろした。

第四話 命知らずの馬鹿共

ヴァンの手から、三本の矢が放たれる。それは、三本ともリオレイアの咽喉元に深く突き刺さった。

「鬼さんこちら、爆弾の方へニヤ！」

続けて、ナタリーがリオレイアの足下に爆弾を投下する。ヴァンはその隙に、矢筒から一本の矢を取り出し、弓に取り付けたビンの中の黄色い液体を矢に塗った。

（こいつなら、きつと、アイツの動きを止められる！）

ヴァンが扱っている弓という武器は、ほとんど場所を気にせずに攻撃ができる武器だ。分類としては、銃撃士ガンナーに区分されているものの、敵との距離が近い場合には、矢自体を振り回して攻撃することもできる。

さらに、様々な成分や毒素が調合された液体のビンを弓に取り付けることで、さまざまな状態異常の属性を持つことができることも、弓の強みの一つである。ヴァンが今弓に取り付けているのは、マヒダケの毒素を抽出した液体が入った、『麻痺ビン』だ。

（……問題は、どこに当てるか）

しかし、弓はボウガンと違い、人の力で矢を放つ武器だ。それは裏を返せば、武器の火力で弾を飛ばすボウガンと違い、使う人間の力によって攻撃力が左右されてしまうとも言える。また、矢もモンスターモンスターの骨に鉄を取り付けただけのもので、他の武器と比べると非力でもある。

だからこそ、ヴァンは穿つ場所を一定に絞っていた。比較的肉質の弱い翼膜や喉元を狙って撃っていたのは、そのためだ。しかし、これから打つ矢の目的は、麻痺毒が素早くリオレイアの体内を回り、浸透すること。最も肉質の弱いところを穿ち、麻痺毒を効かせる可

能性を高める必要があった。

(……やっぱり、あそこしかないよなあ)

その場所を、既にヴァンは見定めていた。弦に矢を巻きつけ、できるだけ攻撃力を高める。

「ナタリー、こっちに来てくれ！」

「ハイニャー！」

それまで足下や尻尾に斬りかかっていたナタリーをヴァンは呼び寄せた。こちらに駆け寄ってくるナタリーは、いつの間にも斬り落としたのか、リオレイアの尻尾を担いでいる。それを見て、ヴァンは目を丸くした。

「おま、それ……!!」

「貴殿は旦那さんを助けに来てくださったニャ。全てが終わり、皆が無事生還した暁にはこれを差し上げるニャ」

ナタリーはそう言うと、ヴァンの隣に駆け寄った。喜ぶのも束の間、尻尾を切られて怒りに震えるリオレイアが、こちらを振り向く。ヴァンは笑いながら、一点に狙いを定めた。

「よし、絶対にみんなでミミルに行くぜ！」

「行くニャー！」

「行つけえええ！」

そして、ヴァンは矢を放った。弦に巻かれて回転をつけた矢は、まっすぐにヴァンの狙い通りの場所に向かって飛ぶ。

狙うは、ただ一点、リオレイアの眼だ。

「何なの、あの子……」

時間は少し遡り、太刀についた血糊を布で簡単に拭き取り、砥石で刃こぼれを削りながら、ヴァンの戦いを見ていた。

（普通、あんな装備でレイアに立ち向かおうなんて考えない。でも、あの弓の扱い方は初心者力量なんかじゃない……）

そう、レラが見ていたのは、ヴァンの弓矢の扱いの上手さだった。ヴァンが今着ているのは、初心者が訓練所で着るような、本当に簡素な装備である。なのでレラは、彼がまだ一皮も二皮も剥けていない、ハンターの卵だと思っていたのだ。

しかし、ヴァンの弓の扱い方が、レラの考えを改めさせた。彼は比較的肉質の柔らかい場所だけを狙って、矢を放っている。しかも、狙った場所にナタリーにいと、うまく当たらないように弓を微調整しつつ、しっかりとリオレイアの弱点に矢を当てていた。

「よし……！」

刃を研ぎ終わり、レラは立ち上がる。木立を抜け、戦線復帰しようとしたそのとき、何とヴァンが、自分の方向へとナタリーを呼び寄せていた。ナタリーはリオレイアの尻尾を担いでヴァンのもとに向かっている。

「な、あの子、馬鹿なの!？」

レラは驚愕した。銃撃士で、しかもレーザーライトシリーズを着た

初心者が、何故仲間を呼び寄せせる必要がある。あれではどうぞ狙ってくださいと言っているようなものだ。

「くそおっ！」

レラは駆け出した。リオレイアがヴァンを見る。レラは太刀を横に構え、すぐに斬りかかれるようにする。しかし、リオレイアはまっすぐにヴァンの方へと駆け出した。ヴァンは動かない。このままでは、レラの太刀がリオレイアに届く前にヴァンがやられてしまう。万事休す。そうレラが思った矢先のことだった。ヴァンたちのところまであと数メートルのところまで、リオレイアが突然悶絶し始め、その場で動かなくなってしまったのだ。

「…………え!?!」

レラは、自分の目を疑った。よく見ると、モンスターが麻痺状態に陥った時によく見られる電流が、リオレイアの体の周りでバチバチと弾けている。

何とヴァンは、あの状況で矢を放ち、それでリオレイアの右目を穿ったのだ。矢には麻痺毒が塗られていたらしく、リオレイアはそれによって、突如自分を襲った痺れに悶絶し、動けなくなってしまうっていたのである。

(偶然、まさか、それとも…………)

レラは言葉を失っていた。ヴァンの言っていた『策』とは、このことだったのだろうか。

しかし、レラはそこで我に返って頭かぶりを振る。今はそんなことを考えている暇ではない。

「ナタリー！」

「あ、旦那さん！」

ナタリーに呼び掛けると、ナタリーはレラを見て担いでいる尻尾をブンブンと振り回した。その間にも、ヴァンはリオレイアのもう片方の目に向けて矢を放った。

「ナイスタイミング！ さっさとあいつの頭を切り落としてくれ！ この毒もすぐに抗体が作られちまう！」

ヴァンはレラを見ずにそう言うと、大きくバックステップをした。それから、再び矢を三本同時にリオレイアの片翼に向けて放つ。

レラは太刀を前に構えなおし、上に振り上げた。

「言われずとも……！」

レラはそのまま、駆け出した勢いでリオレイアの首の真横に飛ぶ。レラの手の中で、『黒刀【弐の型】』が真っ赤な光を発する。そしてそのまま、リオレイアの首に太刀を振り下ろした。

「はあああぁっ！」

レラの太刀は、リオレイアの首の半分を断ち切り、リオレイアは血を大量に撒き散らしながら、最期の咆哮を上げてゆっくりと絶命した。

「いってえ〜！ 何も殴るこたねえだろ！」

ヴァンはそう言って、つい今しがた殴られた頭を押さえる。すると、

「じゃあ、蹴る」

今度は脛当てを着けたままの足で、思いっきり強く急所を蹴られた。ヴァンの脊髄に電撃が走り、呻き声だけを残して、ヴァンはその場にうずくまる。

それを見て、ナタリーは冷や汗をかいた。武器のにゃんピッケル（とナタリーがヴァンに説明した）でヴァンをツンツンとつつくが、ヴァンは全く反応を示さない。

「だ、旦那さん、これはやりすぎだニヤ……」

「分不相応な戦いを挑んだ罰よ。まったく、今回は運が良かったとしか言いようがないわ」

レラはそう言うと、大きなため息をついた。ヴァンはまだ、動かない。

それを見て、傷だらけのヒューゴがレラに恐る恐る話しかけた。

「あの、レラさん……」

「何、あなたも蹴りたい？」

「……滅相もございません」

ヒューゴはそれ以上何も言えず、土下座をした。その頬には、明らかに引つ叩かれた跡である紅葉マークがついている。その横では、ヒューゴが助けた青年が、同じように頬に紅葉マークを作っていた。

あのあと、ヴァンたちはリオレイアを倒すと馬車に一目散に戻った。レラがランポスを見つけたからだ。しかし、すでにレラが見つけたランポス以外は、馬車の後ろで絶命しており、その中心に、ハンマーを持ったヒューゴが立っていた。ヒューゴはレラが見つけた最後の一匹を一撃で絶命させると、ヴァンたちに気づき、そのまま安堵とそれまでの精神疲労で腰を抜かしてしまったのだ。

その後、倒したのにそのままにしておくのは命に対する冒瀆である。というヴァンの主張で、全員でリオレイアとランポスたちに五分間の黙祷を捧げた。

それから、動けるレラとヴァン、それにナタリーでリオレイアとランポスができる限り綺麗に解体し、馬車にできるだけ詰め込んだ。それでもリオレイアの皮なんか余ってしまい、老運転手が乗せてあった荷物を運ぶ用のリヤカーを取り出して馬車と連結、さらに残りを乗せる作業をしたため、既に日はとっぷりと暮れかかっていた。

そして、現在に時は戻り、ヒューゴは狩りの知識もないのにランポスに立ち向かった命知らずとしての罰、ハンマー使いの青年は、冷静さを欠き街道にリオレイアを誘導してしまった罰、そしてヴァンは、最も命知らずで無謀の最高に大馬鹿野郎としての罰を、それぞれレラから喰らったのである。しかし、ヒューゴと青年が素手で頬にビンタで済んだのとは違い、ヴァンには籠手をつけたままのゲッコツ（わざわざ籠手をつけ直してまでやった）に脛当てを付けたままの急所蹴りが加わっていた。

「てめえ、いつか、いつか絶対に後世にまで残る恥ずかしい思いをさせてやる……」

ようやく意識を取り戻したのか、ヴァンは恨めしそうにレラを睨みつけた。しかし、まだ痛いのかうずくまったままで、大事な場所を抑えていた。

それを見て、レラはフン、と鼻を鳴らす。

「あら、それって一体どんなものなのかしらね。一応楽しみにしておいてあげる」

「ごんの尻ぁ……!」

ヴァンは悪態をつくが、やはりうずくまったままなので、はっきり言ってかっこ悪かった。レラはどこ吹く風で、座席に座る。ヒューゴと青年は、それを苦笑いで見つめていた。すると、ナタリーがヒューゴに近づいて小声で話しかけてくる。

「あの、あれって、そんなに痛いニヤ？」

「……………」

ヒューゴと青年は、その問いに対してしばらく黙った後、

「そりゃあもう」

「レイアの火球よりも痛いぜ」

と、ほとんど同時に答えた。

「坊主どもお。ミミルに着いたぞお」

運転席から、老運転手の声が聞こえてくる。リオレイアを討伐し

た翌日の夕方、馬車はようやくミミルに到着したのだ。

客車の幌からは、まず一番最初にレラとナタリーが出てきて、それからヒューゴとハンターの青年、そして、最後にヴァンが、リオレイアの尻尾を持って馬車から下りた。

「じゃあよお、リヤカーは明日の昼に馬車置き場に持ってきとくれよお」

「うん、ありがとな、おじさん！」

「ええのよお。こっちは危うくアプトノスが死ぬところだったんだあ。こんぐらい何でもねえ」

老人はそう言うと、馬車置き場で受付に声をかけ、さらにもう一台リヤカーを貸してくれた。ヴァンたちはそれにリオレイアやランポスから剥ぎ取った素材の残り、それにヒューゴがドンドルマで買った本を詰め込み、老運転手に別れの挨拶をして馬車置き場を出た。

「じゃあ、俺も病院に行くから。あとギルドに報告もあるしな」

馬車置き場の出口で、今度はハンマー使いの青年と別れた。ヒューゴが、

「今度は気を付けてくださいね」

と言うと、青年は頭を掻きながら、

「善処する」

とだけ答えた。そして、しばらく歩いてからもう一度振り向き、

「あんた、ハンマー使いとしてハンターやってけるんじゃないか？
おススメするぜ」

と、笑いながらヒューゴに言った。それに対し、ヒューゴも笑顔で返す。

「はい、僕はそのためにここに来たんです。武器は、参考にしときます」

「お、なんだそうなのか。……俺はワット。ワット・グールだ。また会えるといいな」

「はい、僕はヒューゴ・レペンスです。また会いましょう、ワットさん」

「おう、またな、ヒューゴ！」

青年　ワットは怪我をしていない方の手を振って、そのままヒューゴたちとは逆方向に走って行った。ヴァンとヒューゴ、そしてレラとナタリーは、町はずれの方に向かって歩き始める。しばらくして、ヴァンが口を開いた。

「おつどろいた。ヒューゴさん、ハンター目指してんの？」

「え、ああ、うん。そうですよ」

「でも、あんた王立学術院の書士官なんじゃ」

「だからですよ」

「……え？」

ヒューゴの言葉にヴァンが首を傾げると、今度はレラがヒューゴに訊ねた。

「貴方、もしかして『イクスプロイヤー秘境探し』なの？」

「はい、その通りです」

「『秘境探し』？」

二人の会話についていけないヴァンに、ナタリーが補足を加える。

「王立学術院の書士官の中でも、まだ誰も踏み込んだことのない、

所謂『秘境』を探す書士官のことニヤ。この書士官は、本当に危険な場所に行くこともあるから、ハンターを目指すものが多いのニヤ」
「へええ、すごいんだな、ヒューゴさん！」
「まだ僕は見習いですよ。でも、いつか必ず僕は自分の力で『秘境』にたどり着きたい。だから、ハンターになりたいんです」

そう言いながらも、ヒューゴは照れ臭そうに後頭部を掻いた。それから、今度はヴァンに訊ねてくる。

「ヴァン君も、ハンターを目指しているんでしょう？ それはどうしてなんですか？」

「あ、オレ？ オレは自分で取った素材で、世界最強の武具を作りたいんだ」

ヴァンはそう言って、楽しそうに笑う。それを聞いて、レラが目を丸くする。

「世界最強の武具？」

「ああ、ひいひいじいさん、『神の手』ジン・ドラグニルの武具を超える、世界最強の武具を作る。でも、その素材はだれかが獲ったものじゃなくて、自分の力で手に入れたものを使うんだ。自分の力で手に入れた素材で、世界最強の武具を作り、それをオレが認めた最高のハンターに使ってもらう。それがオレの夢」

『神の手』ジン・ドラグニル。口では悪く言っても、それは確かに、ヴァンがこの世で最も尊敬する武具職人なのだ。その武具職人を超えるという、あまりにも遠い夢を、ヴァンは小さい頃から抱いてきた。

「……そうなんだ、あなた、あの『神の手』の……」

レラはそう言いながら、ヴァンを先ほどとは違う目で見つめてきた。命知らずの愚か者ではなく、夢を追う若者としてヴァンを見る目。そこでようやく、ヴァンはレラが美少女であることに気づいた。それを認識した途端、火が噴き出したように顔が真っ赤になる。

「な、なんだよ」

「……ううん、別に。だからあんなに丁寧に武具を扱ったって思っただけ」

レラはそれだけ言って前を向くと、ヴァンたちの一歩先を歩き始めた。

「あなたたち、ハンターになりたくてここに来たってことは、もちろん、訓練所に行くのよね」

「ん？ ま、まあな」

「そうですけど……」

二人が答えると、レラはにっこりとほほ笑んだ。

「じゃあ、行き先は同じね」

「……へ？」

「……どういうことですか？」

同時に二人の青年が訊ねると、レラは二人の方を振り向き、言った。

「私の名前はレラ・グランエスト。ここの訓練所の元教官、『疾風迅雷』ゴードン・グランエストの娘、そして、現在の教官、『赤王』フラディオ・グランエストの妹なの」

第四話 命知らずの馬鹿共（後書き）

ひとまず、バトルが終わりました。……難しい。
読みづらいところがありましたら、アドバイスをお願いします。

第五話 ハンター養成所

「さあ、着いたわよ。ここが、この町唯一の訓練所！」

馬車置き場から歩いて十五分程度。町外れにその建物はあった。扉の少し上に『ハンター養成所 ミミル支部』と書かれた看板がかかったその建物は、二階はなく、横に長い形をしていた。

レラは、家の壁にくっつける形で二人にリヤカーを止めさせた。すると、リヤカーのすぐ近くの窓が開き、一人の男が顔を出した。男はレラを見つけると、一気に表情を明るくさせる。

「レラ、遅かったじゃないか！」

男は、明るい茶髪を短く刈り上げた髪型で、端正な顔立ちをしていた。歳は二十代後半くらいか、おそらく、彼がレラの兄なのだろう。

レラは青年と目を合わせると、気まずそうに頭を掻いた。

「ごめん。ちょっといろいろあつてさ。……それより、兄さん。入門希望者を連れてきたわよ」

「何、本当か!？」

レラはコクリと頷くと、横に動いてヴァンとヒューゴを前に出した。二人は何を言えばいいか分からず、とりあえず無言でお辞儀をする。

すると、青年は二人を見て笑った。

「そう固くならなくてもいい。もしかして、君らがヴァン・ドラグニルとヒューゴ・レペンスかい？」

「あ、はい！」

「そ、そうです！」

すっかりガチガチに固まった二人の返事を聴いて、青年は確かめるように一度頷いた。

「そうか。それぞれに手紙で話は聴いている。俺はこの教官、フラディオ・グランエストだ。とりあえず、レラと一緒に中に入りな話は……」

くきゅつつう。

そこで突然、誰かのお腹が鳴き、フラディオの話が遮られた。ヴァンたちの足下で、ナタリーがへろへろになっていた。

「お腹、空いたニヤ……」

ナタリーはそれだけ呟くと、その場にへたれこんでしまった。それに続いて、他の三人のお腹も鳴る。三人とも、同時に顔を赤くした。それを見て、またフラディオが笑う。とても優しそうな笑みだ。それから、こう提案した。

「まずは、食事を済ませようか」

訓練所の中は、少し広い民家と造りはほとんど変わらなかった。ただ、一面しか見えなかったので気づかなかったが、この訓練所は所謂『口の字』型をしているようだ。壁に囲まれた中庭は、闘技場のようになっていて、脇にはトレーニング用の鉄棒やバーベル、射的的が置いてある。

ヴァンが立ち止まってそれを見てみると、レラが隣で説明をしてくれた。

「あれは初心者演習用の闘技場よ。最初はアプトノスやガウシカから始まって、最後はランポスやイーオスと戦わせるの」

「その為にモンスターをわざわざ狩るんですか？」

レラの言葉に、ヒューゴが反応した。ヴァンも疑問に思う。しかし、レラは首を横に振った。

「違うわよ。ギルドを通じた依頼で、教官ならきちんと申請をすれば討伐しないでここに連れて来れるの」

「へえ」

ヴァンはそれを聴いて納得した。最初はまず武器の扱いから覚えさせられるようだ。

すると、廊下の向こうの部屋から、フラディオが顔を出す。

「おい、みんな早くおいで。飯が冷めちまうよ」

「ウニヤツ。シチューの匂いニヤ」

どうやら、そこが食堂らしい。シチューの匂いをいち早く嗅ぎ付けたナタリーが、一目散に駆け出した。レラは小さくため息をつくと、ナタリーの名前を呼ぶ。

「ナタリー。その前にご挨拶よ」
「ウニヤアツ。し、失礼しましたニヤ！」

レラに言われ、ナタリーはすぐにフラディオの前で立ち止まる。
フラディオはそれに笑顔で返した。

「ハハツ。挨拶はご飯を食べながらで構わないよ。俺ももうペコペコだからさ。早く食べよう」

フラディオはナタリーを中に招き入れながら言つと、自分も中に入つていった。レラは肩を竦めつつ、フラディオの後に続く。ヴァンとヒューゴもそれに続いた。

「ニヤ、お嬢、お帰りなさいニヤ！」

食堂に入ると、コック帽とコックスーツを着た五匹のアイルーたちが、シチューやサラダの皿をテーブルに運んでいた。その中でも、赤いスカーフを巻いた黒いアイルーが、レラにペコリとお辞儀をする。レラはそのアイルーに片手を上げて返事をした。

「ただいま、ピコ」

「ニヤニヤ、それはもしや、飛竜の鎧。お嬢、遅くなったニヤ！」

今度は、オレンジの毛並みをしたアイルーがレラの鎧を見て目を丸くする。レラは恥ずかしそうに頭を掻いた。

「遅しくって、それ、褒めてるの？ テキサス」

「ウニヤツ。褒めているニヤ！ だって、子分まで連れてるニヤ！」
「子分？」

レラが首を傾げると、今度はハツカ色のアイルーがヴァンとヒューゴを見た。

「ニヤ。そこのごついお兄ちゃんと、ひよろい竜人のお兄ちゃんニヤ。ごつい方はともかく、もう片方は頼りなさげニヤ」

「うおおい、誰が頼りなさげだと！ ってか、オレは子分じゃねえ！」

アイルーの言葉に、ヴァンはすかさず突っ込みを入れる。すると、その隣でレラがクスクスと笑った。ヒューゴも笑いを抑えている。

「あら貴方、私の蹴り一発で悶えてたじゃないの」

「あれはお前がオレのキ」

「皆まで言っなこのドバカ！」

すかさず、レラがヴァンの急所に蹴りを入れる。

「二度も喰らえるかこの野郎っ！」

しかし、今度はヴァンも蹴りに対応してレラの足を受け止め、そのまま回転をつけてレラを倒してしまった。

「なっ……」

「うわっ」

「おお」

ヴァンの体術に、レラとヒューゴは驚き、フラディオは歓声を上げる。アイルーたちはパチパチと拍手をしていたが、その中でピコだけが怒りで顔を真っ赤にしていた。

「……ご飯の近くで暴れるニヤー！」

ピコは背中からフライパンを取り出すと、一発ずつレラとヴァンの頭を叩いた。

「ハハハ。レラのお転婆は一年経ってもとうとう治らなかつたか」

ちぎったパンを口に放りながら、フラディオは大きな声で笑う。食卓にはフラディオとその隣にピコ、オレンジ色のテキサス、それからレラとナタリー。その向かいにヒューゴとヴァンが座り、ヴァンの隣から、ハツカ色のジンジャーとアメシヨールのランマル、そして、白色のファーが座ってご飯を食べていた。

フラディオの笑いが気に入らないのか、レラは頬を膨らませる。

「もう、私、お転婆なんかじゃないわよ」

「……でも旦那さん、ヴァン殿の顎にアッパーやったり急所に蹴り入れたりしてたニヤ」

小さな手で人間用のスプーン（アイルー用は五個しか無かったのだ）を使い、器用にシチューを口に運びながら、ナタリーが呟く。それを聴いて、レラは狼狽した。

「ちよ、ナタリー！」

「お嬢、やっぱりお転婆だニヤ」

「テキサスまで！」

レラが顔を真っ赤にすると、今度はすかさずヴァンが茶々を入れた。

「……お嬢ねえ。似合わねえな」

「貴方、まだ殴られたい？」

レラは拳を振り上げるが、ヴァンは全く意に介さない。

「あれ、さっきオレに倒されたのは、どこのお嬢だったかな」

「この……っ」

余裕綽々のヴァンに、レラは空のマグカップを投げようとする。

しかし、すかさずピコがレラに睨みを利かせた。

「お嬢」

「……ごめんなさい」

さすがにフライパンはもう嫌らしく、レラは素直に従う。ピコはそれを確認すると、今度はヴァンを見据えた。

「その竜人殿も、あまりお嬢を刺激しないで欲しいニヤ。お嬢が本気で怒るとアタシらの手には負えないのニヤ」

ピコはそう言いながら、背中の後ろに手を回している。フライパンをそこに見たヴァンは、ブンブンと首を縦に振った。それを見て安心したのか、ピコは手を戻して食事を再開する。

そこで、ヒューゴが首を傾げた。

「あれ？ そういえば、ピコさんたちはどうしてヴァン君が竜人だ
って分かったんですか？」

「あ、そういやそうだよな。まだちゃんと名乗ってないし、たいて
いはオレのことは皆、人間と間違えるのに」

言われて、ヴァンも首を傾げる。顔が人間の母親似で髪で少し尖
った耳を隠しているヴァンは、初対面だとよく間違われるのだ。

すると、ヴァンの隣に座るジンジャーが、鼻をヒクヒクさせなが
らヴァンに説明をする。

「オイラたちの鼻を甘く見ちゃダメニヤ。アンタからは、竜人の匂
いがちゃんとしてるニヤ」

「でも人間の匂いも混じってるニヤ。一体アンタ、何者ニヤ？」

続けて、アメシヨールのランマルがヴァンに話しかけてくる。ヴァ
ンが竜人と人間のハーフであることと、少し尖った耳を見せると、
ヒューゴ以外は目を丸くして驚いていた。それから、アイルーたち
が次々とヴァンに質問を浴びせ始めた。

「どっちが竜人なんだニヤ？」

「親父」

「親父さんは今おいくつニヤ？」

「七十九。でも見た目は三十代後半」

「……まさか、アンタまでそれで」

「オレは今年で十六」

「竜人ってどのくらい生きるのニヤ？」

「さあな。オレのひいひいじいさんは五百と三十八だけど、まだ生
きてるし」

「ニヤ、ニヤなんて長さニヤ……！」

「……あー、みんな、そろそろ本題に移りたいんだが」

しばらくして、フラディオが軽く咳をしながらアイルーたちに呼び掛けた。アイルーたちは主人の言葉に直ぐ様従い、きちんと席に座り直す。ヴァンとヒューゴも、自然と姿勢を正した。

フラディオはよろしい。と笑顔で言うと、ヴァンとヒューゴに向き直る。

「改めて、こここの訓練所の教官を務める、フラディオ・グランエストだ」

「あ、僕はヒューゴ・レペンスです。王立学術院で『秘境探し』の見習いをしています」

「ドーラ村の鍛冶職人見習い、ヴァン・ドラグニルです」

二人が挨拶を返すと、フラディオはコクリと頷いた。

「二人のことは、君らのお父上もしくはお師匠様から手紙で聞いている。生憎、二人の共通の知り合いである、ゴードン・グランエストはつい半年ほど前に怪我でハンターを引退してしまっていてね。俺が教官に就任したんだ。俺自身、君らが教官となつてはじめての訓練生になる。至らない所もあるかもしれないが、そこら辺も含めて、これからよろしくな」

「はい！」

「こちらこそよろしくお願いします！」

ヴァンとヒューゴがハキハキと、そして先ほどよりもいくらかリラックスした声で返事をする。フラディオは訓練所の説明を始めた。

訓練所というものは、三日を一サイクルに予定を組んでいるのが普通で、こここの訓練所もそれに準じている。

まず、午前中は学科。ハンターとしての心得や基礎知識を主に学ぶ。午後は闘技場でモンスターとの実施訓練、それに慣れたら、実際に簡単なクエストをこなしていく。それを二日間行った後、一日の休息を取るのが、基本的なサイクルだ。

三日目とそれ以外の時間は自由行動。勿論、訓練生なので門限があるが、それを守れば好きなどころに行つて構わない。しかし、基本的に、ハンターとして認定されるまでは、この訓練所で寝泊まりをすることが義務づけられているため、特別な理由以外で外泊は認めない。これは、例えば実家が同じ町にあつても変わらない。

「あとは、うちの訓練所は必ず全員でご飯を食べることにしている。ここの食堂で一番偉いのはピコだから、こいつに逆らうのはオススメしない。ピコは規則にうるさいからね」

フラディオの説明に、ピコが頬を膨らます。

「うるさくもなりますニヤ。今はご主人がご不在で、アタシはアイルー一番の古株として、お坊つちやまと同じくご主人から家を任されている身。ならば、アタシが模範を示さなければなりませんぬのニヤ」

「ハハハ。頼りにしてるよ」

フラディオは笑いながら、ピコの頭を撫でる。ピコは最初は不機嫌そうにしていたが、猫としての性なのか、しばらくするとゴロゴロ口と喉を鳴らした。

「そういえば、どうして父さんがいないの？ よくあることだから、特に気にしてなかったけど」

そこへ、レラが思い出したようにフラディオに訊ねた。

「ああ、ハンター協会に呼ばれたのさ。まあ、あの人のことだから、何か役職について欲しいとかって依頼だろう。どうせ、また断って帰ってくるさ」

いつものことだよ。と、フラディオは慣れた口調で答える。レラも慣れているのか、そう。とだけ答えると、食事を再開した。

「とりあえず、今日は旅の疲れを癒してくれ。明日は午前中に町を案内して、午後から訓練開始だ。まずは体力テストだからな」

最後にフラディオはそう言うと、食事を終えて席を立つ。その際に、白色のファーにヴァンたちを食後に部屋に案内するように命じた。そして、ドアの近くで、あ、そうそう。とこちらを振り向く。

「ちなみに、朝ご飯は七時からだから、遅れないようにな」

「あ、はい！」

「分かりました！」

訓練生二人の返事を聞くと、フラディオは笑顔で食堂を後にした。それから程なくして、ヴァンが席を立った。

「ごっそーさん。俺、もう部屋に行くわ。ファーだっけ？ 案内よろしくな」

「あ、ハイですニヤ」

「あ、僕も行きます！」

ファーは頷くと、急いで席を立ち、ヴァンの前を歩く。それに慌ててヒューゴも続く。ヒューゴはそのままファーの後に続いて外に出たが、ヴァンだけは、先ほどのフラディオと同じように、ドアの

ところで食卓を振り向く。

「レラ。一ついいか？」

「え？」

ヴァンがレラの名前を呼ぶと、レラは今しがたシチューを口に運んでいた手を止める。ヴァンはニヤニヤと笑いながら、言葉を続けた。

「その歳で、アイルーパンツは止めた方がいいぜ」

「……………なっ！」

「ヴ、ヴァンくん！」

レラとヒューゴの顔が、同時に火を噴く。レラはマグカップに手を伸ばし、ヴァンに向けておもいつきり強く振りかぶる。

「じゃ、おやすみー」

ヴァンはそれだけ言い残すと、そそくさと食堂を後にした。そのすぐ後に、レラのマグカップが壁に当たる音とピコのフライパンの一撃が、ほとんど同時にヴァンたちの耳に届いた。

第五話 ハンター養成所（後書き）

まだ自分はアイルー三匹です。

ウニャウニャと可愛くて癒されます（笑）

行間 一 (前書き)

2000アクセス突破！
ありがとうございます！

行間 一

空は漆黒の闇に包まれ、その中で、月だけが異様な輝きを見せる。『ハンター養成所 ミミル支部』は、そんな月明かりに照らされていた。

「……………」

その月明かりに照らされながら、フラディオは自分の部屋で書類の整理をしていた。父が教官の職を降り、自分がそれを引き継いでからはじめてやってきた訓練生、ヴァンとヒューゴの履歴書だ。

「ふむ……………」

フラディオはそれを見て少し唸るように口元に手を当てると、今度は別の書類を手にとった。それは、今日、ワット・グールというハンターが提出した、ランポス討伐依頼の結果報告書だ。

フラディオは既に何度もそれに目を通していたが、もう一度、隅から読み直す。

「……………」

「お坊っちゃん、どうかしたですかニヤ？」

先ほどからずっと書類とにらめっこを続けている主人を見かねて、黒色のアイルー、ピコがフラディオに茶色の液体が入ったカップを渡した。フラディオはそれを無言で受け取って口にする。すると、一瞬だけ目を丸くし、再びカップに口をつけた。

「紅茶の茶葉に、ラベンダーという花を混ぜたものですニヤ。疲れ

た体にはちょうどいいですよのニヤ」

「……美味い」

「それは何よりですよニヤ」

ピコは直ぐに空になったフラディオのカップを受け取ると、ポットに被せていたティーコゼーを外し、もう一度お茶を注ぐ。今度は、可愛らしい柄の皿にビスケットも何枚か乗せた。

「どうですかニヤ？ はじめての弟子候補は？」

お茶とビスケットを乗せたトレイをフラディオの隣に置きながら、ピコは訊ねた。フラディオはそれに対し、小さく唸る。

「これは……、ちょっと恐ろしいよ」

「ニヤ？」

「さつき、お前の前にレラが来てただろう？」

「ニヤ。ナタリーとかいうアイルーを連れて、部屋から出てきましたのニヤ。……それが？」

「うん。ナタリーの紹介と、今日遅れた理由について、話していた。今日、彼らの乗っていた馬車が、雌火竜に襲われたんだとさ」

「ニヤ！？ あの恐ろしい竜にですよニヤ？」

フラディオの話聞いて、ピコは目を丸くした。それと同時に、ピコはある疑問を抱く。

「それが、彼らとどう関係するのですかニヤ？」

「ん。その雌火竜、確かに止めを指したのはレラなんだが、その前に雌火竜を麻痺させて動きを止めさせたのが、あのヴァンなんだと」

「……ニヤ？」

ピコは言葉を失った。無理もない。あんなひ弱な装備でリオレイアに挑もうとするハンターなど、ピコは見たことも聞いたこともない。

「レラの話では、ヴァンの弓は全てリオレイアに命中。さらにその箇所はすべて肉質の弱い部分。恐らくこれは天性のものだろうな。彼のお父上からの手紙でも、火山で鉱石を掘らせていたら、自己防衛の手段として、いつの間にか身につけていたと書いてあるし」

「……人は見かけに寄らないですニヤ。……では、あのヒューゴという青年は？」

ピコに訊ねられ、フラディオはギルドの報告書を再び読み直す。

「うん。彼は、他人のハンマーを使って、ランポスを六匹倒した。しかも、装備なんて呼べない、学院の制服でだ」

フラディオが笑って言うと、ピコは小さな頭を抱えた。

「……そちらも随分と命知らずですニヤ。そういえば、ヒューゴ殿は生傷が多かったですニヤ」

「ああ。しかも、こちらもびっくりすることだが、ランポスはすべて一撃。死因は脳挫傷、または折れた肋骨が心臓や肺に届いたことによるもの。狩りの知識はなくても、学院で古生物学や医学を専攻していたそうだから、それが生かされたんだろうね」

「はあ……、ニヤンかともない若者ですニヤ」

「どちらが？」

「両方」

ピコがキツパリと言い放つと、フラディオはうん。と頷いた。それから、ゆっくりと大きく伸びをする。

「さてさて、『神の手』ジン・ドラグニルの曾曾孫と、『至高の探検家』ロビン・グレンジャー唯一の弟子。どう訓練しているのか…

…」

「坊っちゃん、頑張ってくださいニヤ」

「ああ……」

ピコへの返事もそこそこに、フラディオは再び書類とのにらめっこを始めた。

そんな、前途多難な主人のため、ピコはお茶を淹れ直そうと、静かに食堂に戻った。

第六話 ミミルの町

東から太陽が顔を出し、夜の闇が少しずつ西に避けていく。太陽の優しい陽射しは、そのままミミルの町を柔らかく照らした。

「お、きれーだな」

訓練所の近くを流れる川で、ツナギ姿のヴァンが、ブラシを片手に何かの作業をしていた。ヴァンは東の山から顔を出した太陽を見て、目を細める。

「ニヤ、ヴァン様。何をなさってるのニヤ？」

と、そこへ、訓練所で働く白色のアイルーが、ヴァンの横、川の上流側にやって来て腰かけた。その両手には、洗濯物が山盛りに入った籠を抱えている。

「ああ、おはよう。えっと……ファー」

「おはようございますニヤ。ヴァン様は早起きですニヤ。まるで、太陽が寝坊したみたいですよニヤ」

「習慣。親父たちはもつと早起きだった」

ヴァンが笑って返すと、ファーは白い毛並みをほんのり桜色に染めた。それから、ヴァンがブラシで擦っているものを見て、目を丸くする。

「……ヴァン様。それはもしかして、雌火竜の皮ですかニヤ？」

「ん、そうだよ。昨日は捌くだけで血やらゴミやらの掃除をしなかつたからな」

ヴァンが洗っていたのは、昨日討伐したりオレイアとランポスから取れた素材だった。ポポと呼ばれる雪山に住む草食獣の毛でできたブラシで、ヴァンは甲殻や鱗を洗う。その手つきは慣れているのか、素早く、それでいてとても丁寧なものだった。ファーはそれを見つつも、自分の仕事をしようと洗濯板を取り出す。

「あれ、二人とも、早いんですね」

すると、今度は首にタオルをかけたヒューゴが、二人の近くを通りかかった。ファーはすぐに立ち上がると、ヒューゴに向き直ってお辞儀をする。

「ヒューゴ様。おはようございますニヤ」

「ファーさん、おはようございます。あと、ヴァン君も」

「おう。ヒューゴさんも随分と早いじゃん」

ヴァンがそう言うと、ヒューゴは習慣なんです。僕の師匠はもっと早起きなんですよ。と笑いながら答える。先ほどと全く同じやり取りに、ヴァンとファーは目を合わせて、それから小さく噴き出した。一人、事情を知らないヒューゴが小さく首を傾げている。

ヒューゴはそのまま、ヴァンたちの側にやってきた。そして、ヴァンが洗っている物を見て、目を輝かせる。

「それ、昨日のリオレイアのですか？」

「そうだよ。早く綺麗にしないと、すぐに血やゴミで質が落ちちゃうからな。職人にまず必要な技術でもあるし」

ヴァンは洗い終えた甲殻に着いた水を丁寧に切ると、それを近くの大木にできた影の下に置いたシートの上に干す。シートの上には、

既にリヤカー一台分の素材が洗い終わって干されていた。

「ヴァン君、慣れてますね……」

「これができなきゃ、ウチではハンマーを握らせてくれないからな。ここで諦めて止めてく奴も少なくない」

「へええ〜。あ、僕も手伝っていいですか？」

「ん、ああ、じゃあ、オレの後ろに手袋があるから、ソレをつけて牙と爪をこのブラシで綺麗に擦って。素手でやると絶対に初心者はスパツといくから」

「はい！」

ヒューゴはヴァンからブラシと手袋を受け取ると、ランポスの牙を一生懸命に擦る。途中、ヴァンに擦りすぎとか、ここの汚れがまだ落ちてないとかと注意を受けつつ、ヒューゴはランポスの牙と爪それにリオレイアの翼爪を洗った。

「では、お二方。朝食に遅れないよう、お願いしますニヤ」

一時間ほど作業を続けていると、ファーは洗濯を終えて立ち上がった。二人にペコリとお辞儀をすると、洗濯籠を持ち上げる。

「分かりました」

「また後でな」

ファーは二人にニコリと笑いかけると、駆け足で訓練所に戻っていった。

「じゃあ、オレらも早く終わらせちまおう。今度は手袋を外してこれを濯いで」

「はい！」

ヴァンが洗い終えたりオレイアの甲殻を渡すと、ヒューゴは大きく頷いた。

「二人とも、ここがハンターたちの拠点、ハンターズギルドだ」

町の中心に立つ建物の前で、フラディオは立ち止まる。ヴァンとヒューゴの目の前には、訓練所とほとんど変わらない大きさの二階建ての建物があった。

あれから、リヤカーに積んであった素材を全部綺麗にし、アイルたちの朝食に舌鼓を打ったヴァンとヒューゴは、フラディオとレラに連れられてミミルの町を歩いていた。

ミミルの町。

北から東側を山に、西側を小さな湖に囲まれた、ドンドルマよりも小さな町だ。人口もわずか五百人足らずで、町というより村に近い。二十年ほど前までは人口は三倍近くあったそうだが、ある『事件』により、町の人口はわずかこれだけになってしまったのだと言う。

町自体は大陸の東側に位置し、夏は過ごしやすいが、冬は山から下りてくる風の影響でとても寒い。冬になると、ご近所で集まって複数の家庭が一つの家で冬を越すのが通例となっている。

夏は避暑地として賑わい、馬車の護衛依頼が増える。土地も肥えていて、農業も盛んだ。

「俺たちは『クエスト』と呼んでるけど、住人や付近の村からの依頼は、必ずここに届けられる。俺たちはそれを選んで受注し、依頼金を支払う。これで手続きが完了し、俺たちは狩りができるというワケだ」

今日は君らのハンター登録だけだね。と付け足しながら、フラディオはギルドのドアを開ける。中は酒場のようになってるが、まだ時間が早いせいか、客はいない。

「ギルドは大抵、酒場も兼ねている。ここの飯でオススメはビーフカレーだな」

フラディオはそう言って酒場をまっすぐに突き進むと、カウンターでグラスを磨いている妙齢の女性に声をかけた。

「ルーシィ」

「あら、フラディオ。久しぶりね。訓練所が閑古鳥って聞いてたから、心配してたのよ」

フラディオの声に顔を上げた女性、ルーシィは、フラディオを見るなりニコリと微笑んだ。それから、フラディオの隣にいるヴァンたちを見て、首を傾げる。

「……その子たちは？ 見ない顔ね」

「ああ、俺の生徒たち。今日は彼らの登録に来たんだ」

「あ、ヴァン・ドラグニルです」

「ヒューゴ・レペンスと言います」

ルーシィと目が合い、ヴァンたちはペコリとお辞儀をする。する

と、ルーシィは綺麗に微笑みながら片手を上げた。

「よろしく。ルーシィ・ブラックよ。一応、ここの受付嬢の元締めみたいなことをしてるわ」

ルーシィはそう言うと、ヴァンたちに手招きをする。ヴァンたちがカウンターに近寄ると、ルーシィは何やら色々書いてある紙と羽ペン、それにインクを出してきた。

「これ、ハンター登録書ね。ここに名前と年齢。あとは、訓練所の教官の名前を書いてちょうだい」

ルーシィが指で記入する場所を指し示しながら説明をする。ヴァンとヒューゴがコクリと頷くと、フラディオが再びルーシィに話しかけた。

「それとルーシィ。もう一人、書類が必要なんだが」
「え？」

ルーシィが目を丸くすると、フラディオの後ろから、レラがヒョコツと顔を出した。

「ルーシィさん、やつほー」
「レラ！」

レラの顔を見た次の瞬間、ルーシィがカウンターの向こうから身を乗り出してきた。そのまま、カウンターを飛び越えてレラの頭を抱きしめる。

「ふわぁっ!?!」
「」

「あー、もうレラったら！ 帰って来てるなら、早く言いなさいよお！ お姉さん、久しぶりの再会で涙出ちゃいそう！」

ルーシイはそのまま、レラをギュウツと抱きしめる。確かに、その目には涙が溢れんばかりに溜まっていた。

レラは、突然の抱擁にあたふたしながらも、ルーシイを何とか引き離す。ルーシイは明らかに不服そうだった。

「私にも登録変更願い書かせて！」

「え〜、お姉さん、まだレラのこと抱きしめ足りないわ〜」

「何で抱きしめる必要があるのよ……」

「だって、レラってば可愛いんだもん。しばらく見ない内に、綺麗に色々育っちゃって、お姉さん嬉しいわ〜」

ルーシイはそう言うと、唾を呑んだ。何でかはよく分からないが、餓えた獣のような目をしている。レラは思わず後退った。

「な、何で人をそんな目で見るのよ……」

「ハアア〜。スタイルは正にお姉さんの理想のまま。髪を伸ばしたら、大人の魅力と子供のあどけなさがいい具合にミックスして……も、もう、我慢できない……」

ルーシイはそう言うと、レラに向かってジャンプした。ランポス顔負けの大ジャンプだ。レラは、素早い身のこなしでそれを避けた。ルーシイは素晴らしい身のこなしで着地を決めると、そのまま猛ダッシュでレラを追いかける。もちろん、レラも全速力で逃げる。

「待ちなさいレラ！ 抱きしめさせる！ 愛でさせるー！」

「断固拒否！ 拒否ったら拒否ー！」

二人は飛んだり跳ねたりの、超ハードな鬼ごっこを繰り返すが、他に人がいないせいか、被害はほとんど皆無である。それを、フラディオは楽しそうに、ヴァンとヒューゴは物珍しそうに見る。不意に、ヒューゴが心配にフラディオに訊ねた。

「あの、グランエスト教官、あれ、止めないでいいのでしょうか？」
「ん、ああ、大丈夫大丈夫。そのうち、ルーシイの方が疲れるだろうし。……あと、俺のことは『先生』と呼んでほしい。そっちの方が俺は好きだ」

「はあ……」
「それより、はやく書類を書いちゃいな」

フラディオは二人にそう言うと、再び鬼ごっこに視線を戻した。ヴァンとヒューゴは半ば呆れつつも、書類に必要な事項を書き込んでいく。

「ルーシイ、そろそろ良いだろ？」

ヴァンたちが書類を書き終わると、フラディオはルーシイに呼びかけた。元々体力が無いのか、ルーシイはゼエゼエと肩で息をしながら、カウンターに戻ってくる。

「お、お姉さん、疲れたわ……」
「仕事しろ、仕事。あと、レラの登録変更も」
「うー、この鬼め……」

ルーシイはフラディオを睨みつつも、紙をもう一枚取り出してカウンターに戻ってきたレラに差し出し、ヴァンたちの書類に目を通していく。

書類の確認をし終わると、ルーシイは大きな判子を一回ずつ書類

に押印した。

「ん、オツケー。……では、ヴァン・ドラグニルならびに、ヒューゴ・レペンス。二人を正式にフラディオ・グランエストの弟子とし、ミミルでの訓練を許可する。一日でも早く卒業をし、この町のハンターとして活躍することを望む。以上！」

「はい！」

「ありがとうございます！」

二人がもう一度礼をすると、今度はレラが書類を差し出した。ルーシィが素早くその手に自分の手を重ねようとしますが、それよりも早くレラの体が後退する。ルーシィの口元で、明らかに舌打ちをする音が聞こえた。

「…………ぐすつ」

「あからさまなウソ泣きをしないでよ、ってか、モロに舌打ちしたでしょうが！」

レラの言葉を無視し、ルーシィは書類に判子を押しすと、それをヴァンたちの書類と一緒に纏めた。

「で、今日はこれだけ？」

「ああ。今日はこの後、工房と道具屋、それと病院に挨拶周りに行くんだ」

「ふーん。ねえ、レラだけ置いてかない？」

「断る」

ルーシィの提案に、レラが間髪入れずに反対する。ルーシィは今度はさつきよりも大きく舌打ちをした。

「……じゃあ、ヴァンにヒューゴだっけ？ これからよろしくね」
「お、おう」
「よろしくお願いします……」

ルーシイは二人に営業スマイルを向けたが、先ほどの奇行でルーシイの人柄を大体理解してしまった二人は、ルーシイに苦笑いを返す。フラディオは笑いを耐えるようにしながら、ルーシイに手を振って、ギルドから出ていく。

ギルドから出てしばらく歩いた後、フラディオは大きな声で笑った。

「あー、今日の朝イチがアイツでラッキーだったな、レラ」

「面白がらないで。っていうか、兄さん、絶対わざと止めなかったでしょ！」

「当たり前だ。ルーシイの人柄を見るには、あれが一番良い」

兄の笑っている理由が面白くないのか、レラは頬を膨らます。ヒューゴが恐る恐るフラディオに訊ねた。

「あの、ルーシイさんって、もしかして……」

「ああ、アイツ基本はノーマル。アレはレラに対してだけだよ。昔っからアイツのお気に入りなんだわ、コイツ」

「そ、そうですね……」

「だから、あそこであんまりレラと仲良くしとくと、アイツの怒りが飛んでくるぜ」

「はあ……」

最早ついて行けないらしく、ヒューゴは小さなため息をつく。ヴァンも同様に、小さく肩を竦めた。

しかし、フラディオはそんな二人など気にも止めていない。

「さ、あとは工房と道具屋、それに病院だ。挨拶回りが終わったら、早速訓練を始めるから、二人とも覚悟しろよ」

「はい！」

「が、がんばります！」

フラディオとレラの後ろを歩きながら、ヴァンとヒューゴは先行きに大きな希望と小さな不安を胸に抱えていた。

第七話 フルコース争奪体力テスト

「はい、次は腹筋二百回！ 制限時間は十五分！」

「オス！」

「はい！」

昼下がりの気持ちの良い日差しの下で、ヴァンとヒューゴは汗だくになりながら腹筋運動をやっていた。フラディオが木でできたボードを片手に、二人に指示を送る。その隣では、レラが時計をじっと見ていた。

「っしやあ！ 二百回終わったぜ！」

「ヴァンの記録、一分と三十二秒」

「ふむ、ヒューゴは？」

「只今百五十を超えたところじゃ！」

ヴァンが終わったことを聞いて発破をかけられたらしい、数を数えるレモン色のナタリーの隣で、ヒューゴのピッチが上がった。

「お、終わりです！」

「ヒューゴの記録、十二分と三秒」

「うう、十二分切れなかった」

悔しがるヒューゴの隣で、ヴァンがガッツポーズを取る。

「晩飯のデザート、オレの勝ちだな！」

「うう、楽しみにしてたのに」

「バーベル上げの魚料理はそっちのモノだろ？」

「……その前の腕立ての肉料理と反復横飛びのスペシャルドリンク

は、そつちのモノじゃないか」

「まだ砲丸投げの前菜と外周マラソンのスープがあるじゃん」

小さくため息をつくヒューゴを、ヴァンは笑いながら励ます。ヒューゴはそれでもまだ残念がっていた。

事の発端は、昼食での会話だった。ピコが二人とナタリーの歓迎会として、今夜の食事を豪華なフルコース仕立てにすると言ったのである。

「ふるこーす？」

聞き慣れない言葉に、ガブリブローズとシモフリトマトのサンドイッチを頬張りながら、ヴァンが首を傾げる。すると、白色のフアーが助け船を出した。

「時間を置いて、一品ずつ料理を出すことですよのニヤ。格式ある場所や、パーティーなどでよく振る舞われる料理の出し方ですよのニヤ」

「ふ〜ん」

「一応、サラダはセルフニヤけど、その後、スープ、前菜、魚料理、肉料理、そして最後にデザート順番を考えていますのニヤ。スペシャルドリンクもご用意してますのニヤ」

「おお〜、何かわかんねえけどスゴいな！」

「かなり本格的ですね」

ヴァンとヒューゴが手放しで寝めると、ピコは気を良くしたらしく、ニコニコ顔で、腕を奮うから楽しみにするニヤ。と言った。すると、ピコの隣でコーヒーを飲んでいたフラディオが、ふむ。と何かを思案するように呟く。

「……二人とも、それなら争奪戦をやらないか？」

「へ？」

「争奪戦、ですか？」

突然のフラディオの提案に、ヴァンとヒューゴは首を傾げる。斜め向こうの席で、ナタリーがレラに訊ねた。

「旦那さん。どういうことですニヤ？」

「フルコースの各料理を賭けて競い合うことよ。今日は確か体力テストの予定だし、ちょうど良いんじゃない？」

半分はナタリーに、もう半分はヴァンとヒューゴに言いながら、レラは楽しそうに笑う。それを聞いて、ヴァンは面白そうに答えた。

「やろうぜ！ 面白そうじゃん！」

「……僕は普通に食べたいですけど」

一方、乗り気になれないヒューゴは、困ったように頬を掻いた。すると、フラディオがボソツと呟く。

「参加しないのなら、筋トレの量を十倍に」

「やるやるやります！」

フラディオの言葉に、ヒューゴは慌てて意見を変えた。フラディ

才は、よろしい。と笑顔で言う。

「じゃあ、一時間の食休みを置いたら、早速始めようか。レラ、ナタリー、あとファー！。手伝ってくれ」

「はい」

「了解ニヤー！」

「は、はいですニヤー！」

そんな訳で、ダイナーの各料理争奪戦の火蓋は切って落とされた。

「ふうん、結構意外な記録ね」

フラディオのボードを覗きながら、レラは感心したような声を出した。その横で、フラディオも満足気に頷く。

「予想以上だ」

そう、二人の結果は予想よりもずっと良かったのだ。
まず、ヒューゴ。

王立学術院で働いていたと聞いていたため、てっきり根っからのインドア派かと思っていたが、違ったようだ。何でも両親は開拓団に所属しているそうで、彼自身、幼いころから両親の手伝いで重い機材や農具を運んでいたらしい。今年で二十一になるという青年は、その歳には類稀なる重量の筋肉を高密度でその身体に秘めていた。

はじめてハンマーを使ったにも関わらず、難なく扱えたという理由が、ようやく分かった。大剣やハンマー、ガンランス、それにヘビイボウガンを持たせたら、一気に頭角を表すだろう。

続いてヴァン。こちらは同年代の竜人の少年と比べて細身の体軀ではあるが、筋肉量は負けておらず、また、まるでバネのようにしなやかであった。ヒューゴのように重たい一撃必殺の強さは持つていないが、代わりに身体のバネと持ち前の器用さを利用した戦術を取れそうだ。リオレイアの目を穿ったことから、視力や観察力がずば抜けていることも窺える。双剣や片手剣を持たせても面白いかな。ああ、ランスもやらせてみたい。とフラディオは思った。

「レラはどう思う？」

「んー、素質はあると思う。あとは、知識と経験でしょ」

「ん、可もなく不可もない意見だな」

「私だって、まだハンター始めて一年だし。あんまり偉いことは言えないわよ」

レラは小さくため息をついた。しかし、その目は未知数の能力を秘めた二人を、羨ましそうに見つめる。

そして、そんな兄妹の会話など露とも知らない二人はというと、

「うおおああああっ！」

「負けてたまるかああああ！」

最後の競技である外周二十周マラソンを、全く同時にゴールインしていた。ちなみに、砲丸投げはわずか五センチの僅差で、ヒューゴに軍配が上がっている。

「やるなあ、ヒューゴー！」

「ヴァンくんこそ。あーあ、学院じゃ一番だったのになあ」

ゴールしたまま仰向けに倒れた二人は、すっかり仲良くなっていた。いつの間にか、ヒューゴの敬語もなくなっている。

レラは、それを見て小さく微笑むと、フラディオを見た。

「兄さん、本当の狙いはコレだったんでしょ？」

「さて、何のことかな？」

レラの言葉を、フラディオはうまくかわす。それから、何でもないようにヴァンとヒューゴの元へと歩いていった。

「二人とも。走り終わってすぐに座るんじゃない。もう一周歩いてきな」

「お、オス！」

「はい！」

フラディオに注意された二人はすぐさま立ち上がると、歩きながら先ほどの勝負の結果を語り合っていた。

「戻ったら、飯の前に汗を流すからなー！」

後ろからフラディオが呼びかけると、二人の元気な返事が帰ってきた。

「くあゝ、生き返るぜ〜！」

訓練所に隣接された露天風呂に浸かりながら、ヴァンは大きく伸びをする。その隣では、ヒューゴが首まで温泉に浸かっている。

「本当。気持ち良い〜」

「二人とも、今日はたくさん動いたからな。しっかり今日の疲れを取って、明日に残さないように」

ヒューゴの隣で、フラディオが笑ってそう言った。二人はそれまでのお疲れモードから、一気に姿勢を直す。

「オス！」

「はい！」

「ハハハ。風呂の中でまで畏まる必要はないよ。裸の教官なんかないさ。肩書きは服の上から着るものだよ」

急に畏まる自分の生徒たちを見て、フラディオは笑う。その笑みは、まるで太陽のように明るい。

よく笑う人だな。と、ヴァンは思った。まだ一日しか一緒にいないが、フラディオは笑みを絶やさない。生まれたときから笑っているくらいだ。

「先生って、よく笑うんですね」

ヒューゴもそう思っていたのか、フラディオにそう話しかける。すると、フラディオはコクリと頷いた。

「ん。これはな、親友の遺言なのさ」

「…………え？」

あまりにもあっさりとした口調で言われたので、ヴァンとヒューゴは一瞬、フラディオが何を言ったのか、理解できなかった。しかし、フラディオは相変わらず同じ口調で話を続ける。

「古竜種、テオ・テスカトル、またの名を『炎王竜』。そいつの討伐依頼で、俺の親友は粉塵爆発に巻き込まれて死んだんだ」

「……………」

「俺もその場においてね。奴の最期の一撃を、アイツは俺を庇って一人で受け止めた。テオが死んで、アイツもいよいよ事切れそうになったとき、言われたんだよ。『笑ってくれ。ずっとずっと笑ってくれ。俺の為に泣くな。泣いたら末代まで恨んでやる』……それから、泣くのは止めたよ。笑っていた方がアイツの供養にもなるしね」

フラディオはそこまで言うと、小さく息をついて空を仰ぎ見た。その目は、どこも見ていない。おそらく、死んだ親友を思い出しているのだろう。

しばらくして、フラディオは二人に向き直った。

「引き返すなら、今だよ」

「…………え？」

フラディオの言葉にヒューゴが頭を上げる。フラディオの目は、真剣だった。

「今、俺が話したように、ハンターは常に死と隣り合わせだ。二人とも、技術や能力を持っているから、他の仕事でも生きていける。死ぬ確率は格段に低くなるしね」

それでもやるかい？ と、フラディオは二人に訊ねてきた。二人

は考える間もなく、すぐに答える。

「やります！ 僕には夢がある。そのためなら、なんだってやります」

「オレもです。この町に来るのを決めた時点で、覚悟はしています」
フラディオは、間髪入れずに答えを出した二人をジッと見つめる。二人は目を逸らさずにフラディオを見つめ返した。少しして、フラディオの顔が緩む。

「分かった。君らは良い目をしている。俺の取り越し苦労だったね」
フラディオはそう言うと、ゆっくりと温泉から出た。左腕に、何か鋭い牙で噛まれたような古傷が見える。

「じゃあ、明日から本格的な訓練だ。二人とも、音を上げるなよ」
「オス！」

「はい、お願いします！」

二人がそう言うと、フラディオはまた微笑んだ。それから、そうそう。と思い出したように付け足す。

「そう言えば、今日のデザートは無しになったそうだよ」
「……へ？」

フラディオの言葉に、ヴァンが固まった。ヒューゴも目を丸くしている。

「な、無くなったって、どういうことですか？」

「ああ、何でも、デザートに使う予定だった熱帯イチゴを乗せた馬

車が、近くでコンガの群れに襲われたらしい。運転手に被害は無かったけど、積んでた熱帯イチゴは根こそぎ食われたんだと
「な……………」

ヴァンは言葉が続かなかった。大の甘党であるヴァンは、『ふるこーす』の中でも、特にデザートを一番楽しみにしていたのだ。

「まあ、他の料理は大丈夫だとさ。そろそろ出来上がるだろうし、湯冷めしないうちに上がろう」

フラディオはそれだけ言い残すと、脱衣室に戻っていった。ヒューゴもその後が続く。途中、ヴァンの横で

「残念だったね」

と、肩を叩いてヴァンを励ましたが、その顔には明らかに安堵も混じっていた。ヒューゴが脱衣室の引き戸を閉める音が、静かに温泉に響く。

「……………ふ、ふざけんじゃねええええっ！」

ヴァンの悲鳴混じりの叫びが温泉に響き渡ったのは、それから数秒後のことだ。

第八話 武器と素質（前書き）

ども。何故かサイトの検索に引つ掛かってくれない『たまじゅけ』の作者、旅がらすです。

……いや、これ不思議ですよね？ ケータイでの検索は引つ掛かるのに、PCはまったくダメって……。What's!？ 謎です。なので、強行策でキーワードに『モンスターハンター』を入れることにしました。これでダメなわけではないだろう！

では、お知らせの後は本編です。

第八話 武器と素質

「……よって、ハンターはモンスターの生態系を維持することも必要であり、ハンターズギルドへの報告は必須である。……ヴァン」

『ハンター養成所 ミミル支部』の一室、第一学習室と書かれた部屋の中で、本を片手にフラディオは教鞭をとっていた。フラディオは、小さく舟を漕いでいる自身の生徒の名を、やんわりとした口調で呼ぶ。

「はいいっ—」

名前を呼ばれたミカン色の髪の少年 ヴァンは、返事をすると同時に背筋をピンと伸ばす。

「ヴァン、俺の話、聞いてたかい？」

「あ、ええつと……」

フラディオに言われ、ヴァンは視線を宙に泳がせる。フラディオは小さくため息をついた。

「レラ。ピコにヴァンの昼飯から一品抜くよう言ってきてくれ」

「はい」

「え、ちよっ、それだけは勘弁してください、先生！」

部屋から出ていこうとするレラを止めようと、ヴァンは席を立つが、それよりも速く、レラはドアの向こうへ消える。部屋を出る間際、

「ざまあみる」

レラはヴァンにそう言うと、小さくあっかんべをして顔を引っ込めた。ヴァンは拳を震わせる。

「あんの尼あ……」

「ヴァン、もう一品減らそうか？」

「ごめんなさい！」

フラディオのニコニコ顔での提案に、ヴァンはすぐさま前言撤回をする。それを見て、同じく生徒のヒューゴが笑いを堪えていた。

「……続けようか。ハンターが報告を怠った場合、最悪の結果として挙げられるのが、この世界自体の破滅だ」

「……世界の破滅？」

ヴァンが首を傾げると、フラディオはコクリと頷いた。

「例えば、アプトノスやケルビなどの草食獣。もし、彼らを乱獲した結果、子孫を繁栄できなくなり絶滅したとする。すると、今度はランポスやギアノスなどの鳥竜種が絶滅。さらに、それを食べていた更に大きな飛竜種が死ぬだろう。多分、ヒトも大体鳥竜種と同じ頃に死滅するだろうね」

フラディオの口調は至って穏やかであったが、その内容はあまりにも深刻である。ヒトは弱い生き物だが、それを可能にするくらいには強い生き物なのだ。

「だから、俺たちハンターは決して必要以上に狩りをすべきじゃない。命を刈り取ることの重さ。ハンターは常にそれを背負って生き

るんだ」

フラディオの言葉に、ヴァンとヒューゴは強く頷いた。フラディオの表情が和らぐ。

「それじゃあ、今日の講義はここまでだ。午後は演習場に集合すること」

フラディオはそう言って本を閉じ、部屋から出ていく。ヴァンは大きく伸びをした。

「うう、終わった終わったー」

「ヴァンくん、最後寝てたよね」

「いや、意識が飛んだんだ」

「……それは、寝たんだよね」

ヒューゴに苦笑いをされ、ヴァンは小さく唸る。

「オレ、昔から机に向かって勉強って苦手なんだよなー。トンカチ握って修行ならイケんだけど」

ヴァンがそう愚痴ると、ヒューゴは小さく笑った。

「勉強だと思わなきゃ良いんじゃないかな？ ちょっとしたゲーム感覚でやると面白いよ。まあ、ヴァンくんの場合は、ご飯抜きにされないことを考えれば」

「それじゃあ、まるでオレが食い意地張ってるみたいじゃねえか」

ヒューゴの言葉にヴァンは抗議をするが、ヒューゴはどこ吹く風だった。余裕の表情でニコリと笑う。

「違うの?」

「……違うないけどよ」

太刀打ちできないと判断したのか、ヴァンは拗ねたようにそっぽを向いた。

何さ。お前は私の保護者かってーの。

(……え?)

突然、ヒューゴの脳裏に『彼女』の顔が浮かんだ。理由は分からない。ヴァンの拗ねた顔が、何故か『彼女』を彷彿させた。

「……」

「どうしたんだ。ヒューゴ」

「あ……」

ヴァンに呼び掛けられ、ヒューゴは我に返る。危なかった。もう少しで名前を呼びそうだった。

「別に何でもないよ」

「ん、ならいいけどさ……。昼飯行くか」

ヴァンはそう言うと、もう一度大きく伸びをしてから席を立った。ヴァンが部屋を出ていくまで、ヒューゴは先ほどのことを考えていた。

(何で、ヴァンくんを見て思い出したんだろ……)

今まで、他人を通して『彼女』を見ることはなかった。しかし、ヴァンのあの表情を見た瞬間、まるで歯車が噛み合ったかのように、ヒューゴの脳裏に『彼女』が浮かんだのだ。

(それとも、早速引き摺ってるのかな、僕は)
そうだとしたら、笑える。自分は夢を叶えるため、そして、一刻も早く『彼女』への想いを断ち切るために、この町に来たというのに。来て早々にこのざまでは世話がない。

「ヒューゴ、飯行かねえの？」

部屋から一向に出てこないヒューゴを見かねたのか、ヴァンが顔を出してきた。ヒューゴは先ほどのことを忘れようと、大きく頭を振る。

「行く行く。ちょっと待ってて」

ヒューゴはヴァンに笑って返すと、自分の荷物をまとめ始めた。

「では、午後の実習を開始する」

「お願いします！」

「お願いします！」

昼食を終え、ヴァンとヒューゴは訓練所の『ロの時』型の内側にある、演習場にいた。二人はフラディオから渡された『チェーンシリーズ』の装備を着ていた。ちなみに、フラディオとレラの二人は普段着である。

二人の目の前には、十一種類の武器が置かれていた。

「今から二人には、『メインの武器』を選んでもらう」
「メインの武器……ですか？」

ヒューゴが首を傾げると、フラディオは小さく頷いた。

「もちろん、戦う相手によっては打撃武器に変えたり、切断系統の武器に変える必要があるけれど、一応メイン、つまりは主力の武器は持っておくといい。今日は、二人にそういう武器を選んでほしいんだ」

「じゃあ、先生のメインはどれなんですか？」

ヴァンが訊ねると、フラディオは武器の中から小振りな剣と盾を手を取った。

「俺は一応、全部の武器を使えるようにしてはいるが、メインはこの『片手剣』だ。片手剣は剣と盾で一つのセットになった武器で、一撃一撃は軽いが、その代わりに手数が多し。まあ、『双剣』の手数には負けるが、代わりに盾で防御が可能。回避行動も素早く行えるし、強化をする際に付加できる属性能力の種類も豊富だ。他の武器で突出した長所を削った代わりに、短所という短所を埋めた、ある意味『万能』な武器と言えるかな」

フラディオはそう言いながら、右手で片手剣を振る。その手つきは手慣れたもので、剣をクルクルと軽く回して鞘に納めた。

ヴァンは、次にフラディオの隣に立つレラに訊ねた。

「じゃあ、レラは？ 確かこないだは『太刀』を使ってたよな」

「ええ。たまに、ザザミを狩るときとかはランスに変えたりするけど、メインは『太刀』よ。『太刀』は『大剣』の派生武器で、攻撃

力は『大剣』に多少劣るけど、フットワークも軽くて手数も多いし、攻撃範囲も広い。兄さんの『片手剣』と違ってガードはできないけど、その分モンスターに与えるダメージが多いのが特徴ね」

「ふ〜ん……」

「武器にもいろいろあるんですね……」

ヴァンとフラディオは、二人の意見を参考にしつつ、さまざまな武器を手にとってみる。ヒューゴが最初に手に取ったのは『ハンマー』だった。

「『ハンマー』はどんな武器なんですか？」

「『ハンマー』は打撃属性の武器だ。重量はあるが、『大剣』と違ってフットワークが軽い。モンスターの頭にヒットさせれば、めまいを起こさせてチャンスを作ることできる」

フラディオはヒューゴからハンマーを受け取ると、それを両手で思いきり地面に叩きつけた。地面が軽く揺れ、フラディオが叩きつけた箇所が若干陥没している。

ヴァンとヒューゴが口の端をひくつかせたが、フラディオはそんなことなど気にせず話を続けた。

「また、コイツは切断系と違って出血を起こす外傷は与えられないが、代わりに震動をモンスターの体内まで響かせることによって、内側にダメージを与えることが可能だ。例えば、『鎧竜』グラビモス。いくら硬い皮膚を持っていても、内臓までは硬くすることはできない。そう言った意味では、『大剣』以上の攻撃力を誇る武器とも言えるだろうな」

「へえ〜。ワットさん、そういう武器を使ってたのか……」

フラディオの説明を受けて、ヒューゴは先日であったハンターの

青年を思い出す。彼は今も、どこかで狩りをしているのだろうか……。
そんな思いを馳せているヒューゴの隣で、ヴァンは弓を手にとった。

「やっぱり、オレは弓かな。こいつが一番使い慣れてる」

「そういえば、ヴァンくんはどうして弓を？」

ヒューゴが訊ねると、ヴァンは腕を組んで小さく唸った。

「……オレ、小さい頃に死にかけたことがあるんだ」

「……へ？」

武器の話をしていたのに、なぜそんな話をするのだ、とでも言うようにヒューゴは首を傾げる。ヴァンは目を瞑って思い出すように言葉を発した。

「えつとだな、まだオレが六歳くらいだったかな。親父がオレにピッケル持たせて、火山に鉱石を取ってこいって言ってだな……」

「ろ、六歳の子供に！？」

「……なんて親よ、それ……」

ヴァンの言葉に、ヒューゴは目を丸くし、レラは小さくため息をついた。火山は環境は厳しいが、それに対応するために進化したモンスターが多く、密林や森丘に比べるとモンスターのレベルが桁違いに違う場合があるのだ。

「ん。まあそれで頂上の辺りかな、鉱石掘ってる途中で、さつき先生が言ってた『鎧竜』、その幼体の『岩竜』バサルモスト、『鎌蟹』ショウグンギザミにいきなり挟み撃ちにされたんだ」

「か、鎌蟹と岩竜の挟み撃ちですって!？」
「いや、あんどきは怖かったな。シヨウグンはあの鋭い鉄でど突いてきたり薙ぎ払ってきたりするし、バサルモスなんて口からビーム出すんだぜ、ビーム! 何とか逃げたけど、シヨウグンが俺のリュックを切り裂いちまってせつかく採った鉱石は全部落としまわし、それで親父には怒られて飯抜きにされたし。あの後一週間はおんなじ夢見て汗だくで起きてたっけ」

ヴァンはへらへらと笑って話しているが、それを聞いたレラは開いた口が塞がらないらしく、ポカンとした表情でヴァンを見つめていた。顔には『信じられない』と書いてあるようだ。ヒューゴもレラと同様だったが、フラディオだけが小さく笑いを堪えていた。

「……で、それでどうして弓を選んだんだい、ヴァン」
「えつと、まあ、それで『どうにか奴らの攻撃範囲外から反撃できないかな』って思ったのがキツカケっすね。最初はボウガンを考えてたんすけど、弾切れになったら大変だし、弓なら紐さえ持っていれば鉱石とそこら辺に落ちてる骨で矢が量産できると思ったんで。矢なら近くに来た敵も攻撃できるから、一石二鳥じゃないすか」
「ふむ。なるほどね……」

普通、一度に二体の大型モンスターと対峙して無事に済むのは、相当に腕の立つ、それも『称号持ち』のハンターである。六歳の少年がそれを成し遂げたというのは、今までに記録すらされていないだろう。まあ、ヴァンの場合は『討伐』ではなく『逃走』なのだが、それでもかなりの異例ではある。

(しかし、そこでめげずに対策を考えてしまつとはね……)
フラディオが驚いたのはそこだった。フラディオが六歳だった時、そんな経験をしていたらおそらくハンターなんて死んでもやらないと決めていただろう。大抵の子供がそう思うに違いない。自身の命

を危険にさらされる恐怖を目の当たりにして平常心を保てるほど、子供は強くないのだ。

しかし、ヴァンは違った。単に神経が図太いのか、それとも他の子供と違う『何か』を持つていたのか。とにかく、それによって彼はモンスターに対抗する術を身につけたのだ。はっきり言って、感嘆に値する。

「あ、あなた、怖くなかったの……?」

おそらく、フラディオと同じことを考えていたのだろう。レラが恐る恐るとヴァンに訊ねた。ヴァンは小さくため息をついた。

「怖いさ。当たり前だろ」

「でも、なんでそこでモンスターに対抗しようなんて考えたのさ？普通逆だと思っけど……」

続けて、ヒューゴがヴァンに訊ねる。そうだ、普通は逆なのだ。しかし、ヴァンの答えは意外なものだった。

「あんときのオレには、もっと怖いものがあつたし、それに比べりゃな」

「え……?」

「もっと怖いもの?」

しれっとした表情で答えるヴァンに、レラとヒューゴは揃って眉をひそめたが、ヴァンはそれ以上話す気はないようだ。そのまま黙って手に持った弓を展開させたり矢を番えたりしている。

(……なるほどね)

ヴァンのその『無言の回答』に、フラディオはようやく合点があった。どうやら、彼は後者のようだ。ならば、話をここで終わりに

したいのは当然のことだろう。もしかしたら、心の中で『話しすぎた』と小さく舌打ちをしているかもしれない。

「うん、分かった。じゃあ、ヴァンは弓をメインってことにするかい？」

話をそれ以上引き延ばすのは良くないと判断したフラディオは、話題を変えた。レラはまだ納得がいかない顔をしていたが、フラディオと視線が合うとしぶしぶとした表情で頭を振る。

「それでもいいですか？」

「それを決めるのは俺じゃなくて君だからね。ヴァンの好きにしない！」

しかし、ヴァンはもう頭からそのことを切り離しているようだ。すぐにフラディオの話に乗り、笑顔で弓をいじくっている。

一方、ヒューゴはまだ思案顔だった。

「ヒューゴは何で悩んでるんだい？」

「あ、えっと、大剣にしようか、ハンマーにしようかで悩んでるんです。どちらも振ってみたら結構手応えがあったので……」

そう言っつて、ヒューゴは大剣を手に取り、片手で一閃する。超重量の刃が地面すれすれのところまでピタリと止まった。続けてハンマーも同様に振る。こちらもちかなり地面からすれすれの位置で止まった。

それを見て、フラディオの心は小さく躍っていた。これはかなりの大器である。そう確信する。

「そうか。……なら、しばらくは両方を使うといい。何回かの実習

を通して最終的にどちらの武器にするかを決めても全然遅くはないからね」

「あ、は、はい！」

フラディオに言われて、ヒューゴはホツと胸を撫で下ろした。自分がどれほどに大きな器であるかを知らないヒューゴに、フラディオは大きな期待と小さな不安を抱く。

「じゃあ、今日はここまでにしよう。明日からは本格的な演習に入るからな。各自、覚悟しておくように」

「はい！」

「オス！」

ヴァンとヒューゴは、終了の言葉を聞いた後も、その場に残って他の武器を手にしていた。フラディオがそれを見届けて家の中に入ると、その後をレラが追いかけてくる。

「兄さん」

「ん。どうした、レラ」

「いや、あの二人さ……、相当スゴいと思うんだけど……」

レラの言葉に、フラディオは目を丸くした。ちなみに、彼の記憶違いでなければ、この妹は相当の負けず嫌いである。その妹が他人に良い評価をすることは珍しいのだ。

しかし、その評価はあながち間違いではなかった。フラディオはコクリと頷く。

「ああ。片や、幼少時に飛竜と対峙したにも拘らず、恐れることをせずにそれに対抗する術を手にした少年。片や、通常は『両手』で扱う武器を『片手』で難なく制御する青年。……鳥肌が立つね」

「な〜んか、自信なくなっちゃうなあ……」
「……レラ、なんか悪いものでも食ったか？ お前がそんな事を言うなんて珍しすぎるぞ」
「食べてません」

レラはそう言ってフラディオをキツと睨むが、すぐに小さくため息をついた。一年間のハンター修業を終えて、リオレイアの亜種、『桜火竜』を一人で狩れるほどの急成長を遂げたことに、まだこの少女は気付いていないらしい。フラディオは微笑むと、妹の頭を優しく撫でた。

「大丈夫。お前にも、お前にしかない『能力』^{チカラ}がある。俺や親父がお前に『太刀』を勧めた時に言っただろう」

「兄さん……」
「自身を持ってよ。その若さで『覇気』を自在に操る人間なんて、なかなかいないんだぜ？」

フラディオがそう言って力強く笑うと、レラは小さく、しかし力強く頷いた。

「よし、じゃあ、そろそろピコたちに夕食の準備をするように頼むか」
「そうね。ん〜、今日の夕飯は何かな〜？」

先ほどの空気とは打って変わって和やかな空気をまといながら、レラとフラディオはピコたちのいる食堂へと向かっていった。

第八話 武器と素質（後書き）

一挙三話掲載！

いや、実は元からストックしていたのですが、そのうちだんだん自分一人だけで物語が進んでるのに公表しないために展開が遅いような錯覚にとらわれてしまったのです。ただいま完全にテンパッてます。手なんてガタガタでタイピングが上手く出来ません！……言ってる文章滅茶苦茶ですよ（苦笑）

戦闘シーンはもう少しお待ちください><；
訓練編、もう少し続きます。

第九話 豪傑の帰宅（前書き）

ユニークアクセス1000件突破！

ありがとうございます！

第九話 豪傑の帰宅

桜が散り、深緑が深まり始めた五月の陽気。活火山の活動による地熱で一年中暖かいドーラに住んでいたヴァンにとって、この町は新鮮なものが多い。

「おはよう、イレーヌばあちゃん」

訓練所のサイクルで休日当たるその日、ヴァンがやって来たのはミミルの町の工房だった。

工房の手前、売店となっているカウンターに座っている竜人の老女に、ヴァンは声をかける。イレーヌと呼ばれた老女は、ヴァンの顔を見てシワだらけの顔を可愛らしく微笑ませた。

「おお、来たね、未来の鍛冶職人」

この老女こそ、この町唯一の鍛冶職人、イレーヌ・ホペットだ。通称『鍛冶バア』で通っているこの老女、侮ることなかれ。なんと自分よりも遥かに重いハンマーで武器を鍛える強者だ。彼女の武器はかなりの『名品』として、ドンドルマまで伝わっているとか。イレーヌは、ヴァンが『神の手』ジン・ドラグニルの曾曾孫だと知ると、まるでヴァンを自分の孫のように接してくれた。イレーヌ自身もドーラの出身であり、ジン・ドラグニルをよく知っているのだという。

「今日は随分と上機嫌だね、ヴァン。何か良いことでもあったのかい？」

「あ、やっぱ分かる？」

「そんだけニコニコしてりゃあ、誰だって分かるよ」

イレーヌは戸棚から茶菓子を出してヴァンに勧める。ヴァンは礼を言つと、イレーヌの向かい側に腰かけて、笑顔の理由を言った。

「実は、明日からいよいよ実戦なんだ！」

ヴァンの話は、昨日の夜、夕食の時間までさかのぼる。

「本当ですか、先生！」

夕食を頬張りながら、ヴァンは嬉しそうな声を上げた。フラディオはいつもの笑顔で頷く。

「ああ、二人とも大体の学科と演習は終わったし、もうここに来て二週間になる。ちよつと早いが、二人の実力ならちよつどいい頃合いだろう」

「じゃあ……」

ヴァンの横でヒューゴが同じように目を輝かせる。フラディオはもう一度大きく頷いた。

「次からは本格的な依頼を受ける。それをしばらく続けたら、ハンター認定試験だ」

ヴァンとヒューゴがミミルにやって来て、二週間が経過した。二人はフラディオの教えの下、学科と演習を順調にこなしていた。特に、演習ではフラディオが捕まえてきたランポスを一度に三頭も倒せる程に、腕を上げていたのだ。

そこで、少し早い二人に依頼をこなさせようと、フラディオは二人に提案した。これで実力を示すことができれば、ヴァンたちは卒業試験、つまりはハンター認定試験を受ける権利を手に入れることができる。

「ただし、これまでの演習と実践は違う。ちよつとの油断が死に繋がりがねない。心しておくように」

「オス！」

「はい！」

フラディオの言葉に頷きつつも、ヴァンとヒューゴは本格的な修行に入ったことに、胸を躍らせていた。

「そうかい。じゃあ、もうすぐお前も一人前になるんだねえ」

ヴァンがキラキラとした目で昨日のことを話すと、イレーヌは自分のことのように、嬉しそうに笑った。ヴァンも頷く。

「そしたら、ばあちゃんの工房もいつでも手伝えるようになるもんな」

「アタシももう歳だからねえ。若いのに、しかも、本場仕込みの見習いが来てくれるなら、大歓迎だよ」

「何言ってるのさ。オレ、ばあちゃんの武具、すっげえ好きなんだ。うちの武具よりも繊細だし、それでいて魂がこもってるさ」

ヴァンがそう言っただけで、イレーヌは柔らかく微笑んだ。

「お前さんの弓もなかなかのものだよ、ヴァン。荒い部分はあるが、しかしそれでいて強く自己を主張している。『俺を使え!』とな。相応の実力を持ってはじめて手懐けられるじゃじゃ馬だが、その力は本物だ」

「ばあちゃん褒めすぎ。でも、じゃじゃ馬ってのは合ってるかな」

ヴァンとイレーヌは、そうしてしばらくの間、談笑を楽しんだ。

「……………ん？」

数時間ほど工房で過ごしたヴァンが訓練所に戻ると、見慣れぬ男が訓練所の前に立っていた。

(でっけえ……………)

ヴァンは心の中で呟いた。およそ二メートル近い身長、巨漢は、大体四十代後半くらいだろうか、明るい茶色の短髪には多少白髪が混じっているが、その肉体は無駄な贅肉などなく、筋骨隆々だ。

(身長はうちのオヤジに負けるけど、筋肉は良い勝負かもな……………)

そんなことを考えながら、ヴァンが男を見つめていると、ヴァンの視線に気づいたのか、男の目がヴァンを捕まえた。

「坊主。見ない顔だな」

「え、あ、ああ……」

男はヴァンを見下ろすと、背中の中の弓を見て目を細めた。

「んん？ お前、ハンターか？」

「いいや。まだ違う」

「こここの生徒か？」

「そうだけど……」

男の質問にヴァンが頷くと、男は何かを思案するように腕を組んだ。

「ふむ。ミカン色の髪、背負った弓、ハンター見習い……」
「？」

突然ブツブツと呟き始めた男にヴァンが首を傾げると、男は近くの杭を指差した。杭は、ここまでが町の領域であることを示すもので、一定間隔で立っている。

「五本。一気にアレを射抜いてみる」

「え？」

「いいからやれ」

男はヴァンの背中を押した。ヴァンが戸惑うなか、男は手を縦に振って『早くやれ』とジェスチャーを示す。ヴァンは附に落ちない表情のまま、弓を展開、矢筒から五本の矢を抜いた。

(つたく、何なんだ、あのオッサン……)
ヴァンは心の中で悪態をつきつつ、五本一遍に矢を番えた。
(角度は、右に二度と三度、左は四度と一度強……こんなものかな)
指先の微妙な感覚を頼りに、ヴァンは矢の位置を調整する。そして、それを一気に放った。

「……見事」

後ろから、男の拍手が聞こえた。ヴァンが放った矢は、一本残らず杭に刺さっている。

ヴァンは男に向き直った。

「これでいいか？ オッサン」

ヴァンの問いに、男は満足そうに頷いた。

「満点だ。さすがは、エドガー・ドラグニルとレビイの息子だな」
「ちょ、何でオッサンがオレの親の名前を知ってたんだよ！」

いきなり見ず知らずの男に両親の名前を言われ、ヴァンは戸惑った。男は楽しそうにフンと鼻を鳴らす。

「ワシか？ ワシの名前はな……」

「ニヤニヤ、ご主人！」

突然、男の言葉を遮って、少女の声がその場に響いた。声のした方を二人が見ると、訓練所のドアの向こうから、お玉を手にしたコックスーツの黒色のアイルー、ピコが顔を出している。

ピコは男を見るなり、ぱあっと顔を明るくさせて、男の元へと駆け出した。

「ご主人〜！」

「おお、ピコ。随分遅くなっちゃった。すまなかつたな」

ピコにご主人と呼ばれた男は、駆け寄って来たピコを抱き上げる。ピコは首をブンブンと高速で横に振った。

「そんなことないですニヤ。ご主人はご多忙の身。そんなご主人の為に尽くすことが、アタシの幸せであり、喜びなのですニヤ」

「ガハハハハ。ワシは良いアイルーに恵まれとるな！ ありがとうよ、ピコ！」

ピコの忠誠心百二十%の言葉を聞いて、男は嬉しそうに豪快に笑った。

「ご主人、ってまさかオッサ」

「父さん！」

今度は、ヴァンの言葉が遮られた。この声はレラだ。二人が視線を移す間もなく、レラが男の胸に飛び込む。

「お帰りなさい、父さん！」

「……やっぱりかよ」

満面の笑みで男に抱きつくレラの隣で、ヴァンは小さく呟いた。男はレラとピコに抱きしめられたまま、再びヴァンに向き直る。

「改めて名乗ろう。ワシはこの訓練所の先代教官、ゴードン・グランエストだ。よろしくな、ヴァン・ドラグニル！」

男 『疾風迅雷』ゴードン・グランエストは、相変わらず豪快に笑いながら、その名を名乗った。

「おお、君がああのグレンジャーの弟子か！ こりゃまたでかいのう！」

「は、はあ。恐縮です……」

夕食の席で、ゴードンはヒューゴの隣に腰かけて、彼の肩をバシバシと叩いていた。ヒューゴはゴードンの迫力に圧倒されてしまっている。

しかし、そんなことなど全く気づいていないゴードンは、すぐにまた夕食に注意を戻していた。まるで子供のように、焼きたての肉を口いっぱい頬張っている。

この日の夕食は、ゴードンの帰宅を祝って演習場でバーベキューをすることになった。主君の帰宅がかなり嬉しいらしく、ピコは鼻歌を歌いながら肉を焼いている。ちなみに、肉は最上級のマトングレートだ。

「親父、ハンター協会はどうだった？」

「ほが、ほがほがふがもぐおがああ！」

「……ごめん。訊いた俺が馬鹿だったよ」

口に食べ物ものを入れたまま話す父親を見て、フラディオは呆れたように言った。

ゴードンは数秒でステーキを呑み込むと、大きな声で笑う。

「ガハハハハ！ ハンター協会は相変わらずだったぞ、フラディオ
！」

「ってことは、また断ったんだね。評議会入りの話」

「当たり前だ！ ワシはハンターは好きだが、デスクワークは大嫌
いだからな！」

「……ガキの言い訳みたいだぞ、親父」

フラディオは呆れていたが、ゴードンは意に介していないらしく、
相変わらず豪快に笑っていた。この親子、よく笑うところはそっく
りだが、それ以外は全く似ていない。

「本当に変わってないのね、父さん……」

同じく、ドコに同じ遺伝子があるのか全く分からない、銀髪の娘

レラが兄同様に小さくため息をついた。こちらは丁寧にステー
キをナイフで切り分けてから口に運んでいる。

「レラは一年経って随分べっぴんになったじゃないか！ 父さんは
嬉しいぞ！」

「ハイハイ。ありがとうございます」

全身で喜びを表す父親を、レラは軽くあしらった。先ほどの抱き
ついた時の態度とは全く違う娘の反応が面白くないのか、ゴードン
は子供のように口を尖らせる。

「昔は『パパ、パパ』と言って沢山甘えてきたのになあ。ワシに超
ベツタリだったんだぞ」

「『目に入れても痛くない』ってヤツですね」

ヒューゴが相づちを打つと、ゴードンはそれぞれ。と指を鳴らして頷いた。

「他にも、『大きくなったらパパのお嫁さんになる』と言ったのお」

「はあ、想像できねえ」

からかうネタができたことにヴァンがほくそ笑むと、ゴードンは豪快に笑った。

「ワシはお前さんの小さい頃も知つとるが、あんまり変わらんかったぞ。よくジン殿の後ろを着いていたじゃないか。『じいじ、じいじ』と」

「ええっ、オレが！」

ゴードンの言葉にヴァンが目を丸くすると、今度はレラが小さく吹き出した。

「あら、とっても可愛いじゃない。今と違って」

「うるせえぞアイルーパンツ！」

「ち、違っわよ！」

ヴァンの言葉をレラは慌てて否定するが、その顔は火を噴くのはと疑うほどに真っ赤になっていた。

「違わねえじゃん、アイルーパンツ」

「繰り返してんじゃないわよ、バカ！」

レラは顔を真っ赤にしながら、いきなり近くに置いてあった木刀

を手に取って、ヴァンに斬りかかった。ヴァンはそれをギリギリの位置で避ける。

「危ねえだろうが、アイルー」

「問答無用！」

ヴァンの言葉を遮ってレラは木刀を振るい続ける。

ヒューゴは冷や汗をかきながら、二人を見て笑っているゴードンとフラディオに訊ねた。

「あの、あれ、止めないでいいんですか？」

「構わん構わん。子供はあぁやってデカくなるものさ」

「はぁ……」

良いのかなあ。と心の中で呟くヒューゴの背中を、フラディオが軽く押した。

「ほら、ヒューゴも参加してきな」

「ええっ!？」

「おう、行け行け！」

「や、イヤですよ!」

何故か、ゴードンも一緒になつてヒューゴの背中を押し始めた。

その顔は二人とも確実に楽しんでいる。

「ぼ、僕は遠慮します！　というか、あなた方確実に楽しんでますよねこの状況!？」

「なんだ、面白くない。ノリが悪いと嫌われるぞ、ヒューゴ」

フラディオが小さく口を尖らせると、ゴードンが何かを思い出し

たように手を叩いた。

「そういえば、グレンジャー准教授が面白いことを言っておったな」
「……へ？ 教授とお会いしたんですか？」

自身が師と仰ぐ人物が突然話に出てきたことに目を丸くするヒューゴを見て、ゴードンはムフフ。と怪しい笑い声を上げた。

「うむ、なんでもお主、以前グレンジャーに『口では言えないようなこと』をしたそうじゃないか」
「なっ!?!」

言われて、ヒューゴの顔が真っ赤になる。どうやら、嘘がつけない性格らしい。

それを聞いて、フラディオが短く口笛を吹いた。

「へえ、意外とやるんだなあ。ヒューゴ」

「ち、違います!」

「ニヤニヤ。いったい何の話ニヤ？」

慌てて否定するヒューゴの横で、いつの間にかいたのか、ステーキをつつきながらナタリーが暢気に話しかけてきた。しかし、ヒューゴはそんなことにかまっっている余裕を持っていなかった。

「な、なんでもありません!」

「ふむ。是非とも聞きたいものだがなあ」

「聞きたいニヤ」

フラディオが爽やか百二十%の笑顔で、ナタリーが『ワクワク』とジェスチャーをしながらヒューゴに詰め寄る。ヒューゴの顔は更

に赤くなった。

「だああっ！ 聞こうとしないでください！」

「なんなら大声で言っつてやるうか？ んん？」

「こんなこというのは失礼だという前提で言いますが、性格悪いですよ、ゴードンさん！」

「む、言いおつたな。キッチンアイルーたちよ！」

「ニヤニヤ！ 何でしょうか、ご主人？」

ゴードンの呼びかけに、それまで話に参加していなかったピコたちがゴードンの元にやって来る。かなり話に興味を持っていたらしく、その目は全員キラキラと輝いていた。

ゴードンは満足げに頷くと、ビシッとヒューゴを指差した。

「む、こやつをあの修羅場の中に放り込むのだ！」

「了解ニヤ！ 皆、行くニヤー！」

「ニヤー！」

全員が一斉に敬礼をしたかと思うと、アメシヨアのランマルが、どこからともなく板に車輪をつけた簡単な造りの車を取り出した。ピコの掛け声で、全員がヒューゴに群がる。何故かそこにナタリーまで混じっていた。

「え、ちょ、やめ」

「ニヤニヤニヤニヤニヤー！」

「うわー！」

アイルーたちは見事な連携プレーでヒューゴを乗せると、猛スピードでヴァンとレラの元へと突進していった。

数秒後、ヒューゴの叫び声とゴードンの豪快な笑い声が、訓練所

に響き渡った。

第九話 豪傑の帰宅（後書き）

ようやく親父を出せました。

ハンターとしてなら、フラディオが作中で一番強いですが、単純なパワーなら恐らく最強のゴードンさん。個人的にこういう筋骨隆々キャラが好きなんです。なので、基本的に弱々しいキャラを旅がらすは書きません（モンハンの世界観的なものもありますが）。

次からいよいよモンハンらしい、狩りの話に入ります！

『この話モンハンっぽくないよね……』

と思っていた貴方！ 次から旅がらすは苦手なアクションシーンを頑張りますのでちょっと待っていてください！

今はまだ影の薄い主人公も、遂に本領発揮！？

第十話 命を狩る(前書き)

訓練編、ようやく折り返しです。

第十話 命を狩る

テノスの丘。ミミルの町から歩いて一時間ほどのところにある、小さな丘だ。周りを森に囲まれ、丘からはミミルの町を見下ろすことが出来る。ハイキングをしたら気持ち良さそうだな。とヴァンは思った。

「ヴァン、そっちの杭を打ってくれ」

「あ、ウス！」

フラディオオからハンマーを手渡されたヴァンは、テントの端の杭を地面に打ち付ける。その横では、ヒューゴが同じように杭を打ちつけていた。

しばらくして、半球形のテントが出来上がる。ヴァンとヒューゴは額の汗をぬぐった。

「できたな、ヒューゴ」

「うん。これで拠点の準備が整ったね」

二人が顔を見合わせて笑うと、後ろからフラディオオが二人に呼びかけてきた。

「二人とも、今日のクエストの話をするから、ちょっと来てくれ」

「ウス！」

「はい！」

ゴードンが帰ってきた次の日、ヴァンとヒューゴはフラディオオに連れられてこのテノスの丘にやって来ていた。二人にとって、初めてのクエストが行われるのだ。

フラディオは木箱を並べただけの簡単なテーブルの上に、地図と今回の依頼書に乗せた。

「今回の演習は、鳥竜種・ランポスの大量討伐だ」

「ランポスって、この間の演習で倒したヤツですか？」

ヒューゴが訊ねると、フラディオはコクリと頷く。

「ああ、ただし、前回の演習とは数が全く違う。今回俺たちが討伐するのは全部で二十頭だ」

「二十！？ そんなに討伐するんすか？」

「ああ、どうやら、いくつかの群れがこのテノスの丘に集結したらしくてね。この数がこれ以上町に近づくといろいろと厄介なんだ。

この近くにはいくつか農場もあるから、討伐しないと農場が荒らされてしまう」

農場とは、町付きのハンターが町長の許可を得ることで借りることが出来る土地のことである。

薬草を育てたり、道具の調合素材となる虫を取れたりするこの農場は、ハンターにとつてとても貴重な場所だ。フラディオも、教官に就任する前までは農場を借りていたと言う。

しかし、依頼の内容を聞いてヒューゴは首を傾げた。

「でも、それは乱獲には繋がらないんですか？」

「大丈夫だ。というより、最近はランポスによる農場への被害が頻発していてね。こちら辺で一掃しておかないと更に被害が広がる恐れがある。ランポスたちは追い出してもまた戻ってくるから、討伐しないといけないのさ」

フラディオがそう言うと、ヒューゴは小さく唸った。しかし、す

ぐに首を横に振る。

「先生。ランポスたちの大体の位置は？」

「ああ、奴らは頻繁に餌場を変えるから、一定の場所に留まること
があまりない。しらみつぶしに探していくしかないだろうね」

「しらみつぶしか……。あまり町に近づかなきゃ良いんだけどな」

フラディオの言葉を聞いて小さくため息をつくヴァンに、フラデ
イオは小さく微笑んだ。

「ならば、急ごう。ここを拠点に丘と隣接する森を一周。ランポス
を見つげ次第、討伐だ」

「はい！」

鳥竜種。

生態系の中層に位置する、肉食のモンスターの中では小ぶりで細
身のものが多いモンスターだ。『イグルエイビス』という鳥脚亜目
の生物を共通の祖先とし、小型のランポスなどの走竜下目は『ケプ
トス』、大型のイヤンクックなどの鳥脚下目は『ボルドル』という
モンスターを祖先としている。

今回狩るのは、前者の走竜下目に属する『ランポス』というモン
スターだ。この種には多くの亜種が存在し、それぞれが住処の違い
によって独自の進化を遂げている。

その中でランポスは、これらの走竜下目の中で最も原型に近いモ

ンスターだ。全身を青い鱗に覆われており、発達した脚力と強力な顎の力で獲物をしとめる。一体ずつならば簡単に対応できるため、初心者ハンターにとってはちょうどいい相手だが、複数になると中型の飛竜種と同じくらいに厄介になる。そのため、人里近くで発見された際、早急に討伐しなければ被害は増える一方となるのだ。

フラディオの説明を受けて、ヴァンが立ち上がる。

「よし、それじゃあ早速……」

「？ ヴァンくん？」

突然言葉を切ったヴァンに、ヒューゴは首を傾げた。ヴァンは何も言わずに、後ろにある木立を見据えて、背中の弓「ハンターボウⅠ」を展開させる。そのまま、矢筒から矢を三本抜き、素早く弓に番え、木立に向けて放った。

次の瞬間、木立の向こうから甲高い声が三つ、ヴァンたちの耳に届いた。

「……えっ!？」

ヒューゴは目を丸くしたまま、木立に駆け寄る。そこには、青い鱗を纏ったモンスター、ランポスが三匹、心臓や眉間に矢を刺されて絶命していた。

ヴァンが弓を背中に戻しながら、ヒューゴの元に駆け寄る。

「やっぱりいたか」

「え、やっぱりって……」

ヒューゴはヴァンの言葉に戸惑っていた。ここは木が生い茂っていて視界が悪い。実際に、ヒューゴはここに来て確認をするまで、

ランポスには気づかなかった。

「……驚いたな」

フラディオが、目を丸くして呟いた。それから、ヴァンの前髪を上げて、彼の目をじっと見つめる。

フラディオの視線に戸惑いながら、ヴァンは首を傾げた。

「な、何すか、先生」

「ヴァン、君は何故ランポスが見えた？」

「そうだ。ヴァンくん、なんでランポスが見えたの？」

フラディオの質問に、ヒューゴも重なる。すると、ヴァンはちょっと困った顔をした。

「んー、見えたつつうより、『感じた』って感じですよ」

「『感じた』？」

「はい。なんとなく、はつきりとじゃなくて、すごく曖昧だけど、ランポスの形が浮かんでいて……」

「ど、どういうこと？」

ヴァンの説明に、今度はヒューゴが首を傾げた。ヴァンは面倒くさそうに頭を掻く。

「オレもよく分かんないんだよ。昔、シウグンとバサルモスの時
にはじめて『感じて』以来、地下にいるモンスターとかの位置が、
何でか曖昧だけどぼんやりと分かるようになって……」

ヴァンはどう説明すれば良いのか分からず、小さく唸り始めた。
ヒューゴはフラディオに視線を移す。

「先生。何だか分かりますか？」

「うん。俺の見解で合っているなら、おそらく『千里眼』だな」

「『千里眼』？」

聞き慣れない言葉に、ヴァンとヒューゴは揃って首を傾げた。フラディオは口元に手を当てながらコクリと頷く。

「人が稀に生まれつき持っている『能力^{スキル}』の一つだよ。『千里眼』は、生物の放つ『気』を見ることで、目の前に障害があっても、その生物の位置を把握したり、生物の『気』の節目にあるという、謂わば『弱点』を見抜くことができると言われてる。俺も見たのはじめてだ」

「へえ、『千里眼』か……」

フラディオの説明を聞いて、ヴァンは自分の目に手をやる。自分にそんな力があつたことが嬉しいのか、ヴァンの顔は少し明るかった。

それを見て、フラディオは安堵したように微笑んだ。

「うん。これなら、ただしらみ潰しにランプスを探す必要はなさそうだな。頼むよ、ヴァン」

「あ、オス！」

こうして、ヴァンとヒューゴのはじめてのクエストが始まった。

あれから数分後、ヴァンとヒューゴはフラディオから借りた地図を片手にテノスの森の中を歩いていった。ヒューゴは今日はハンマーを背負っている。

ちなみに、フラディオはというと、

「俺はただの付き添いだから。ランポスくらいなら二人でも大丈夫さ」

と言つて、拠点に残っている。そういえば、今更だがフラディオは防具を着ていなかったのをヴァンは思い出した。

「ヴァンくん、見えるかい？」

「ん、ちよつと待ってくれ」

ヒューゴと呼ばれ、ヴァンは目を凝らした。ぼんやりとだが、木々の影の向こうにランポスの形をした『気』が見える。

「二十メートル先、一時の方向。数は三だ」

「了解。作戦通りによろしくね」

「分かった」

ヴァンはそう言つて近くの茂みに身を隠して背中中の弓を展開すると、ポーチから小さな黄色い虫を取り出して矢の先に縛りつけた。そのまま、矢をランポスたちのいる方向に向けて弓に番える。ヴァンが動く僅かな音を聞きつけ、ランポスたちが、ヴァンが隠れている茂みに向かって甲高い声を上げる。

ヴァンは立ち上がつて弓を引き、ランポスたちの中心に向けて矢を放った。

「光れ！」

ヴァンの放った矢が地面に突き刺さった瞬間、矢の先にいた虫が絶命し、強い閃光を發した。視覚が發達したモンスターには強すぎる閃光が、ランポスたちの視界を一気に奪う。

ヴァンが矢に縛り付けたのは、光蟲という、絶命時に閃光を發する虫だ。ハンターは主にこれを、目くらまし用の『閃光玉』の素材として利用している。ここに来る前にそれを見つけたヴァンは、矢を量産するために持ち歩いているクモの糸で光蟲を矢に縛り付け、即興で『閃光玉』ならぬ『閃光矢』を作ったのだ。

「ヒューゴ！」

「了解！」

続けて、別の茂みからランポスたちに近づいていたヒューゴが、ランポスたちに向けてハンマーを振りかぶった。

「せえええいつ！」

超重量のハンマーがランポスの頭に直撃する。脳を潰されたランポスは、悲鳴を上げることなく絶命した。

二人の作戦は、まずヴァンが閃光矢でランポスたちの視界を奪い、その間にヒューゴがランポスを討伐する。というものだ。ヴァンの矢では一発で仕留められなくても、ヒューゴの一撃必殺のハンマーならば自分たちが傷つかずにランポスを討伐できる。もしもヒューゴがランポスに襲われても、後ろに下がって『千里眼』の範囲を広げたヴァンが、急所を狙ってランポスを打ち抜き、ヒューゴを援護できる。

仲間を殺され、ランポスが一際高い声を上げ、ヒューゴに飛びか

かる。しかし、そのランポスは横から一気に三本の矢に貫かれた。脳天、咽喉元、そして心臓を貫かれたランポスは、ゆっくりと断末魔を残して絶命する。

「一人じゃないぜ」

ヴァンはニヤリと笑うと、続けてまだ目くらましの効果が残っているランポスに、ヒューゴのハンマーが当たる。今度はランポスの胸部に超重量のハンマーがめり込む。肋骨を折られ、その肋骨によって心臓を一突きにされたランポスは、ゆっくりと地に倒れ伏した。

「……はあ、はあ……」

ヒューゴはランポスが倒れ伏したのを確認すると、ゆっくりとその場に腰を下ろした。たった今、生物を殺した感触が再び蘇る。

「……うっっ！」

これまで何度も感じてきた生々しい感触に、ヒューゴの中で何かが逆流を起こす。それまで意識していなかった、いや、意識しないようにしていた『命を奪う行為』に、ヒューゴは吐き気を覚えている。思わず腹と口を押さえる。

しかし、

「絶対吐くなよ、ヒューゴ」

後ろから、ヴァンがヒューゴの肩を叩く。ヴァンはそのままランポスたちの元に歩くと、腰に差してあるマガライト鋼製の剥ぎ取りナイフを抜いた。それをゆっくりとランポスの腹に当て、引く。そのまま、ヴァンはランポスを綺麗に捌き始めた。

ヒューゴはそれを見て、咽喉元まで競りあがっていたものを無理やり飲み込む。とてつもなく気持ち悪いが、我慢した。

「ねえ、ヴァンくん……」

「ん？」

ヒューゴに話しかけられ、ヴァンは首だけをヒューゴに向ける。ランポスとヒューゴの間にヴァンがいてくれたおかげで、ヒューゴは血まみれの肉塊と化したランポスを見ずに済んだ。もし見ていたら、我慢できなかったかもしれない。

ヒューゴは顔を青くしたまま、ヴァンに訊ねた。

「気持ち、悪くないの……？」

「悪くない」

ヴァンはヒューゴの問いに、間髪入れずに答えた。強い声だった。ヒューゴはもう一度訊ねた。

「どうして？」

「どうしてって、何でだよ？」

「だって、僕らが殺したんだよ！」

首を傾げるヴァンに、ヒューゴは思わず苛立った。何故、ヴァンはこんなにあっさりを受け入れることができるのか、ヒューゴには理解できなかつた。

「僕らがそいつを殺したんだ！ そいつにだって、ちゃんと命があつて、もしかしたら、こ、子供もいたのかもしれない……」

「そつだな」

「そつだなんて……」

ヒューゴの言葉を単調に受け止めるヴァンに、ヒューゴは言葉を失った。ヴァンは小さくため息をつく、二体目の解体を始める。

「でも、ここでこいつらを殺さないと、オレたちが殺されるんだ」
「……………でも」

「ヒューゴは『秘境』を見つけないんだろ？ モンスターに襲われたとき、『殺したくない』なんて理由で、夢を諦めてモンスターに殺されて良いと思うのか？」

「……………あ……………」

夢のことを言われ、ヒューゴはハツとなった。もし、あと一步のところまで夢が叶うのに、その手前でモンスターによって命を奪われる。それは、考えたくもない最期であった。

ヴァンの言葉は続く。

「確かに、こいつらを殺すのはオレたちのエゴだよ。でも、それでもオレたちは生きたいんだ。夢のためとか、家族のためとか。こいつらだって、そうやって獲物を殺し、それを食べて生きている」

セカイは弱肉強食なんだよ。とヴァンは言った。強いものが生き残り、弱いものはその糧となる。

「でも、こいつらはそうして奪った命を無駄にしない。その命を喰らい、次の世代に続けていく。そうして、総ての魂は受け継がれていくんだ」

「受け継がれる……………」

「今ここでオレたちがランポスたちをこのままにしたら、こいつらの命はどこに行く？」

「……………」

「オレたちは、こいつらを次に繋げていかなくちゃいけない。自分のしたことから逃げちゃいけないんだ」

まあ、全部親父とかじいさんの受け売りだけだな。とヴァンは付け足して、解体作業を続けた。ヒューゴはただ、黙ってその背中を見つめる。

「……うし。これで全部だな」

程なくして、ヴァンはすべてのランポスを捌き終えた。ただの肉塊と化したランポスに、簡単な黙祷を捧げる。そして、取れた素材を持っていた糸で小さく纏めた。結局、ヒューゴは捌くことができなかった。

ヴァンは、まだしゃがみこんでいるヒューゴに手を差し伸べる。

「行けるか、ヒューゴ？」

「……うん」

ヒューゴはコクリと頷くと、ゆっくりと立ち上がった。

「ヴァンくん」

「……ん？」

ヒューゴが顔を上げる。その目は、先ほどの弱々しいものとは違い、強い光を放っていた。

「さつきは、ごめんね」

「ん、別に気にしてねえよ」

ヴァンはそう言いながら、オレも偉そうなコト言っちゃったしな。

と付け足して苦笑いをした。

しかし、ヒューゴは表情を崩さぬまま、言葉が続ける。

「……次は、僕も捌くのをやるよ」

ヒューゴの言葉に、ヴァンは苦笑いを止める。その目は、心配そうにヒューゴを見ていた。

「……大丈夫か？」

「うん。僕がやらなきゃ、ダメだからさ」

「ん。そっか」

ヒューゴが強く頷くのを見て、ヴァンは小さく微笑む。

「よし、じゃあ行くぜ、ヒューゴー！」

「うん！ あと十四頭もいるからね！」

二人の若きハンターは、再び森の中を歩き始めた。

第十話 命を狩る（後書き）

ようやくモンスターとのアクションシーンが出ました。

……え？ 短い？

……だつて難しいんですもん（オイ）

いや、本当はもう少し長くアクション書くつもりでしたが、書士官のヒューゴにはちょっとバイオレンスかなあ。と今更思ったので、こういう運びにしましたんです。

いつもカッコ悪いヴァンも、ちょっとはカッコ良くしようと思ってはいたので、まあ、いいかなあ。なんて（コラ）

この話を通して言いたいことの一つを、触り程度にですが言えたかな。と思います。

拙い上に、スローペースなヴァンの物語ですが、これからもよろしくお願いします。

第十一話 豪傑の弟子（前書き）

新キャラ登場！

タイトル最近まんまなのしか思いつきません（笑）

第十一話 豪傑の弟子

ゆっくりと西の湖に沈んでいく夕陽。金色に光るそれは、訓練所に向かう三人のハンターを優しく照らしていた。

「うわ、きれーだな」

「本当。こんな夕陽、めったに見れないよ」

その日討伐したランポスの素材を荷車で引きながら、ヴァンとヒューゴは感嘆の声を漏らした。その横で、フラディオが何故か淋しそうな瞳で夕陽を見つめている。

「……先生？」

フラディオの表情にヴァンが首を傾げる。呼びかけてみたが、フラディオは聞こえないのか、何も返事を返さなかった。

不思議に思っ、もう一度名前を呼ぼうとしたとき、フラディオの口が小さく開いた。

「トオイ……」

「トオイ？」

ヴァンがフラディオの言葉を繰り返すと、フラディオはハツとなつてヴァンを見た。その真剣な眼差しに、ヴァンは思わず萎縮する。

「あ、あの、今先生がその名前を呼んでたから……」

「俺が？俺が言ったのか？」

「そうですよ。憶えてないんすか？」

ヴァンがコクリと頷くと、フラディオは困ったように苦笑いをした後、いつもの優しい微笑みに戻って首を横に振った。

「そうか。……すまん。今のは忘れてくれ」

「え？ 先生、なん」

「二人とも。早くしないと夕飯に遅れますよー！」

ヴァンがフラディオに訊ねる声が、ヒューゴによって遮られる。いつの間にか、ヒューゴがずっと前を一人で歩いていった。

フラディオは分かったよ。とヒューゴに答えると、ヴァンの前を歩き出した。

「ヴァン、急ごう」

「あ……ウス」

それ以上もう話す気はないらしく、フラディオは早足で前を歩く。ヴァンはまだ腑に落ちなかったが、それでもフラディオの後を追ってヒューゴの元へと急いだ。

三人が訓練所に帰ると、すぐに食欲をそそる匂いが三人の鼻に届いた。どうやら、今日はカレーライスのようなようだ。

それと同時に、なんだか騒がしい声が食堂の方から響いてくる。

「でねでね。そいつ、私が『馬車に残ってなさい！』って言ったの

に、レイアのところにやってきたのよ！ しかも、レザークライトシリーズで！」

大きな声でジェスチャーを交えながらそう話すのは、レラだ。今日は腰まで届く銀髪を結わずに下ろしている。

「へえ〜。そいつはまた命知らずだなあ！」

それに苦笑いをしながら返すのは、ツンツンと所々に逆立った深緑の髪が特徴の、背の高い青年だった。全身をフルフルというモンスターから作る白い防具『フルフルシリーズ』で固めている。

「本当。とつてもすごいわあ。普通じゃ考えられないものお」

のんびりとした口調でそう答えるのは、まるで蝶が擬人化したような防具『パピメルシリーズ』を来た少女だ。ニコニコと笑みを絶やさずにレラの話に頷いている。

レラは首を何度も縦に振った。

「そうでしょ！ 普通、あんな格好でレイアに立ち向かうなんて考えないわよね！ 今回は何とかなっただから良かったものの、危うく死ぬところだったわよ」

「ふむ。それで、その後どうしたのだ？」

ゴードンは面白そうに話を促す。レラは楽しそうに含み笑いをした。

「でね、そんなことした罰に、あいつに籠手つけたまま拳骨して、脛当てつけたまま蹴りを急所に一発入れてやったわ！」

「……レラ、貴女って相変わらずお転婆ですね」

楽しそうに語るレラを見て、丁寧な口調の少女が小さくため息をつく。こちらの少女も、隣にいるのんびり口調の少女と同じく『パピメルシリーズ』を着ていた。

レラは丁寧口調の少女に首を傾げる。

「あら、当然のことをしたまでじゃない。だいたいねえ」

「うるせえぞ、アイルーパンツ」

「ひゃあっ!」

さすがに苛立ったヴァンが、レラの後ろで怒りのオーラを漂わせながら両腕を組んでいた。

突然後ろから呼びかけられて、レラは座ったまま飛び上がった。

「うっわ。器用なヤツ」

「い、いつからいたのよアンタ!」

「ついさっきだよ。ってか、さっきから聞いてりゃ人の事勝手に笑い話にしゃがって。いい加減にしるアイルーパ」

「私の名前はレラ! それに、あれはパンツじゃなくてスパッツ!」

「どちらにしる色気ねえじゃん」

「アンタに言われたか無いっての!」

レラはそのまま立ち上がってヴァンに回し蹴りを仕掛ける。ヴァンはそれをバックステップで避ける。

「あんましお転婆だとお嫁に行けないぜ!」

「アンタに関係ないでしょうが!」

そのまま二人は蹴りと拳の応酬に入った。レラの蹴りをヴァンが避け、ヴァンの拳をレラが受け止める。

それをドア付近で見っていたヒューゴは小さくため息をついた。フラディオは楽しそうに笑いを堪えている。

「あら、フラディオさん、お帰りなさい」

ドアの近くにいる二人に気づいたのんびり口調の少女が、フラディオに話しかけてきた。フラディオはそれに片手を上げて答える。

「ノンノちゃんたちもお帰り。今回はずいぶん長かったな」

「リオレイアとリオレウスの大量討伐に参加したんです。町に向かいそうだったので防衛線を張ったりしていたら、すっかり長引いてしまいましたわ」

フラディオの言葉に丁寧口調の少女が答える。今更気づいたが、パピメルシリーズを着た二人は、装備だけでなく顔までそっくりだった。

すると、今度はフルフル装備の青年がヒューゴを指差した。

「フラディオのアニキ。そいつが師匠せんせいの言ってたアニキの一番弟子？」

「ん、そうだよ。ヒューゴ・レペンスだ」

「あ、どうも。はじめまして」

フラディオに紹介されたヒューゴが頭を下げると、青年は歯を見せて笑った。

「へえ、体つきがちょっとええ割に、話し方えらく丁寧なんだな。…で、アニキ。アレ止めなくていいのか？」

青年はそう言って、ヴァンとレラを指差した。二人はまだ取っ組

み合いをしている。

それには、フライデオではなくゴードンが答えた。

「なに、うちには優秀なお目付け役があるからな！ ほれ」

ゴードンがキッチンを指差すと、超特大のフライパンを掲げた。ピコが二人に向かって猛ダツシユをするのが見えた。ピコはそのまま、体重を乗せてフライパンを振りかぶった。

「おミヤーら一体、食卓で暴れるニヤと何回言えば分かるのニヤー
ー！」

次の瞬間、ピコの怒号とフライパンが二人の頭にクリーンヒットする音が、訓練所中に響き渡った。

「まったく、お嬢もヴァン殿も常識がないニヤ。喧嘩がしたいニヤ
ら外でやれニヤ！」

「……ごめんなさいい」

「ひゅんまひえんれひた」

夕食の席で、ピコが眉間に皺を寄せながらヴァンとレラに説教を垂れる。二人は先程のフライパンがかなり聞いたらしく、素直に頭を下げた。ヴァンに至っては、先ほどの一撃で舌を噛んだらしく、うまく発音すらできていない。

しかし、ピコの機嫌は直らないらしく、まだブスツと頬を膨らませている。

「あらあら。やっぱりここの訓練所で一番強いのはピコちゃんなのねえ」

夕食のカレーに舌鼓を打ちながら、のんびり口調の少女がニコニコ顔でピコに起こられているヴァンとレラを見ていた。その隣で、丁寧口調の少女がナプキンで上品に口を拭いていた。

「まったく、あんなお転婆少女が『桜火竜』を一人で討伐した猛者だなんて、信じられませんか」

「いや、あのお転婆さだからこそ出来たんじゃね？」

カレーを頬張りながらフルフル装備の青年が笑うと、ナタリーがスプーンをブンブンと振った。

「ウニヤ！ ウチを忘れないで欲しいニヤ！」

「お、そうだったな。ってか、ハンターのアイルーって珍しくね？」

青年が首を傾げると、ナタリーはスプーンを口に当てて、フフフと含み笑いをする。

「ウチらアイルー族の体力を舐めないでほしいニヤ。レイアの火球くらいなら、一発二発喰らっても、すぐに回復しちゃうニヤ！」

エヘンと小さな胸を張るナタリーの隣で、今度はレラが笑った。

「でも貴女、ランゴスタの麻痺毒でビリビリ痺れて、湖に浮かんだまま危うくガノトトスの餌になりかけてたじゃない」

「ニヤグハツ！ 旦那さん、それはトップシークレットだニヤ！」
「ガハハハハ！ なかなか面白い出会いじゃないか！」

あたふたとレラの口をふさぐナタリーを見て、ゴードンが豪快に笑う。その斜め隣りでは、フラディオが楽しそうに笑いを堪えていた。

「あ、あの、ところで、彼らは誰なんですか？」

そこへ、一人蚊帳の外のヒューゴが、ポツリと呟くように訊ねた。笑いを堪えていたフラディオが、思い出したようにポンと両手を叩いた。

「ああ、そういえば紹介がまだだったな。彼らは、数少ないこの町つきのハンターでレラの幼なじみ、そして、親父の最後の弟子だよ」
「んー！ おれはアレン・マ克蘭サってんだ。実家はミミルの雑貨屋。得物は狩猟笛。よろしくな！」

フルフル装備の青年、アレンが歯を見せて笑いながら敬礼をする。その横で、のんびり口調の少女が小さくお辞儀をした。

「ノンノ・ユニフローラといいますう。武器は大剣を主に使ってるんですよお。よろしくお願ひしますねえ」

「ピリカ・ユニフローラですの。ノンノはわたくしの双子の姉。武器はライトボウガン。よろしくお願ひしますわ」

ノンノに続けて、ピリカもお辞儀をした。この二人、お辞儀の角度やタイミングまでピッタリである。

「あ、ヒューゴ・レペンスです。王立学術院で書士官見習いをして

います」

「うあ……ヴァン・ドラゲニル。ドーラの村で鍛冶職人見習いをしていた」

ヒューゴとようやく普通に喋れるようになったヴァンは三人と同じように自己紹介をした。ヒューゴは顔を上げると、ノンノとピリカを見た。

「あの、貴女たち、もしかして『ユニフローラ商会』の方ですか？」

ノンノとピリカは、ヒューゴの問いに互いのそっくりな顔を見合った後、ぴったり同時に頷いた。

「ええ、そうですわ」

「わたしたちの父が、ユニフローラ商会の会長なんですう」

「『ユニフローラ商会』？」

「ドンドルマや王都でも幅を利かせてる、商業会社さ。ちなみに、おれんち雑貨屋も世話になってる」

三人の会話に首を傾げるヴァンに、アレンが補足を加える。しかし、商業のことなどさっぱりりのヴァンは、よく分からずとりあえず頷くだけだった。

「ガハハハハ。お嬢様だからといって、甘く見ちゃいかんぞ。実力はしっかりあるからな」

ゴードンが豪快に笑いながらそう言うと、ピリカが頬を赤く染めた。

「嫌ですわ、師匠。わたくしたち、まだまだ師匠の足下にすら及び

ませんのに」

「ガハハハ。その謙虚さを持っているなら大丈夫だ！　ワシはお主らに期待しとるからの！　もちろん、レラたちもだ！」

ゴードンは豪快に笑いながら、コップの水を一気に飲み干す。食卓に、和やかな空気が流れる。

しかし、そのとき、

「フラディオ！　フラディオ！」

突然、玄関の方から必死にフラディオの名前を叫ぶように呼ぶ声が聞こえた。フラディオがそれまでの穏やかな表情を一変させ、玄関に走る。ヴァンたちも全員立ち上がり、フラディオに続いた。

「ああ、良かった！　いたのね、フラディオ！」

玄関にいたのは、ルーシイだった。綺麗に纏まっていた黒髪は乱れ、顔は汗だらけ。肩も激しく上下していた。

ルーシイは、今にも泣きそうな目でフラディオに何かを言おうとしている。

「フラ、ディオ。た、たいへ、んな、の……」

「落ち着け、ルーシイ。深呼吸して、ゆっくり話せ」

フラディオは、ルーシイを落ち着かせようと、一緒に深呼吸をする。数秒してようやく落ち着いていたルーシイは、一気に話し始めた。

「ドルウイドの森に、クックのつがいが出たのよ！」

「何だと！」

ルーシイの言葉に、フラディオの表情が険しくなる。

ドルウイドの森は、ミミルの東側を覆うかなり広い密林だ。繁殖期の今、モンスターが集まるのはよくある話だが、しかし、ルーシイの慌て方は尋常ではない。

「ふむ。しかし、それが一体どうしたのだ？ 町や畑に被害はないのだろうか？」

ゴードンが不思議そうに訊ねると、ルーシイは首を横に振った。

「鍛冶バアが、今、森にいるのよ……」

「な……」

「ばあちゃんか!？」

ルーシイの言葉に、フラディオは言葉を失い、ヴァンは大声を上げた。

「鍛冶バア、昼過ぎに農具の修理に必要な鉱石を取りに、森に行きたみたいで……。クツクのことを聞いたときに、まさかと思って工房に行っただけ、まだ帰ってきてないらしくて……」

「そんな……」

ヴァンは愕然とした。いくら巨大なハンマーを振るうイレーヌでも、狩りの知識は皆無の上に、老人だ。イヤンクツクからすれば、簡単に捻り潰せる相手。

絶望的な状況だった。

ルーシイが話し終わると同時に、フラディオは強く頷いた。

「……分かった。一分で支度をする。レラ、一緒に来てくれ!」

「了解！」

「ノンノちゃんとピリカちゃんは、駐屯所に連絡を頼む！」

「分かりましたあ！」

「任せてください！」

フラディオは、的確に指示をすると、身を翻した。ヴァンは、その後を駆け足で着いていく。

「先生！」

「ダメだ」

ヴァンが何かを言う前に、フラディオがその言葉を遮る。

「相手はランポスとはレベルが違う。今のお前じゃ話にならない」

フラディオの言う通りだった。今日やっとクエストに出たハンターで相手ができるほど、クックは生易しいモンスターではない。二匹なら尚更だ。

しかし、ヴァンは食い下がった。

「でも、オレの『千里眼』なら……」

「それ以上言うなら、破門にする」

「っ!?!」

『破門』の言葉を聞いて、ヴァンは言葉に詰まった。フラディオは、悲しそうな顔でヴァンを見る。

「済まない。ヴァン」

「あっ……」

次の瞬間、ヴァンとフラディオの距離が一気に縮まった。数秒して、ヴァンは自分の鳩尾にフラディオの拳が埋まったことを理解した。少しずつ、意識がブラックアウトしていく。

「せん、せ……」

徐々に消え行く意識の中、最後にヴァンが見たのは、済まなそうにヴァンを見るフラディオの瞳だった。

第十一話 豪傑の弟子（後書き）

キャラが増えると、セリフが大変。

一応、一人称がそれぞれ違ったりはしています。

ピリカは書きづらい！。お嬢様口調があれでいいのか分かりません。

今回は、フラディオのアニキがカッコ良くなります。

第十二話 怪鳥の襲来（前書き）

総アクセス数が10000を超えました！

めちゃめちゃ嬉しいです。何気にコレよりも前に連載を始めていた小説を一気に引き離しています。

そして、ついに話数まで超えてしまいました……。

ははは。いや、別に放っているわけじゃないですよ？

ネタが思いつかないだけなんです！（同じじゃないか

ってなわけで、これからも『魂の樹形図』をよろしくお願いします
！

第十二話 怪鳥の襲来

ヴァンは、どこか知らない洞窟の中にいた。なぜか、体が動かない。まるで、岩になったかのようなようだった。

辺りを見回すと、洞窟の隅で震えている小さな人影を見つけた。見覚えのあるそれを、ヴァンは目を凝らして見る。

それは、イレーヌだった。イレーヌが小さな体を大きく震わせて、洞窟の真ん中辺りを見ている。

(ばあちゃん……)

ヴァンはイレーヌに手を伸ばそうとした。しかし、体はヴァンの言うことを聞かない。イレーヌとの距離は縮まらなかった。

イレーヌの震えが、更に大きくなった。いったい何を見てそこまですで震えているのだろう。ヴァンはイレーヌと同じほうを見た。

そこにいたのは、真っ赤な甲殻を纏った、鳥と竜の中間のような生物だった。地面から頭まで、三メートル近くある。大きなくちばしはいかにも硬そうで、足に生えた爪は鋭く、イレーヌなど簡単に握り潰せそうだ。唯一、大きなイチョウ型の耳が、若干その生き物に愛嬌を持たせていた。

鳥竜種、『怪鳥』イヤンクツク

イヤンクツクがキョロキョロと辺りを見回していた。イレーヌは洞窟に生えている大きな葉に身を上手く隠しているのが、イヤンクツクには見つかっていないようだ。

不意に、イレーヌの傍で小さく石が転がる音がした。イレーヌの隣で、採掘の途中だったのか、崩れかけた壁の割れ目から石が転がっていた。

音を聞きつけ、イヤンクツクがイレーヌの方を向く。イレーヌは思わず大きく後ずさった。

それが、いけなかった。

イレーヌが後ずさった途端、洞窟にイレーヌの出した音が響く。侵入者に気づいたイヤンクックが、首を大きく上にもたげる。くちばしの端から、ゆらゆらと陽炎が立つ。

イレーヌが恐怖で身を縮めた瞬間、イヤンクックの口から、大きな火球が放たれた。

「ばあちゃん！」

ヴァンは、イレーヌを呼びながら、バツと目を覚ました。しかし、目の前にはイヤンクックもイレーヌの姿もなく、見慣れた木の壁があるだけだった。

「あれ……いつつ！」

ヴァンは、突然景色が変わったことに困惑した。

しかし、起き上がると同時に鳩尾の辺りに鈍い痛みを覚え、そこでようやく、自分はフラディオによって気絶したことを思い出した。

「起きたか」

「あ……」

どうやら、自分はソファに寝かされていたらしい。斜め隣の一人掛けのソファに、深緑の髪の青年、アレンが腰掛けている。

「えっと、アレン、だっけ？」

「その通り。まったく、ここは傍迷惑な奴らが多いぜ。おれだって行きたかったのにさ」

「……は？」

アレンは開口一番に愚痴を溢すと、ヴァンを睨んだ。

「あのさ、お前、なに考えてんの？」

「……え？」

「訓練生のくせにクック討伐に参加しようとするなんて、バカにも程があるってことだよ」

「っ！」

言われて、ヴァンは言葉につまる。

それは確かに、アレンの言う通りだ。自分がフラディオに申し出ようとしたことは、今のヴァンにとっては自殺行為に等しいものだった。

「でも、ばあちゃんが」

「ああ、さっきヒューゴから聞いたけど、お前、鍛冶バアと仲良いんだってな。だったら、尚更行くべきじゃない」

「え……？」

アレンの言葉を、ヴァンは理解できなかった。今、助けに行かずにいつ行くというのだ。

「今のお前じゃ、はつきり言って足手まといだ。鍛冶バアも助けられずに死んだら、鍛冶バアが何て思うか分かるか？」

「……」

「鍛冶バアを本当に想っているなら、お前は行くべきじゃない」

アレンの言葉は、強かった。強く、ヴァンの中に響く。

しかし、それでも尚、納得することのできない自分がいた。

「……くそおっ！」

ヴァンは自分の弱さに苛立ちを覚えた。今日、ランポスを討伐しただけで喜んでいた自分が、とても小さく見える。

「ばあちゃんが危ないのに、何にもできねえのかよ………！」

イレーヌの無事を、神に祈るしかできない自分が悔しかった。

すると、アレンが立ち上がった。アレンはヴァンの元に歩み寄ると、ヴァンに右手を差し出してきた。

「……？」

「さっき言ったが、今のお前にゃ『クック』は無理だ」

「……なんで繰り返すんだよ」

ヴァンが恨めしそうにアレンを見ると、アレンは小さくため息をついた。

「おれは『クック』は無理だと言ったんだ。意味分かれ」

「……？」

「今から『お前でもやれること』をしに行く。ついてこい。ヒューゴはもう準備万端だぜ」

アレンはそう言うと、歯を見せてニカッと笑った。

一方その頃、ドルウィドの森を全速力で駆ける二つの影があった。

「兄さん、本当に鍛冶バアはあそこにいるのかしら？」

その内の一つ、桜色の鎧『リオハートシリーズ』を身に纏った少女　レラが、隣を走る赤色の影　フラディオに話しかける。
フラディオはレラの質問に、コクリと頷いた。

「おそろくな。この森で鉱石が取れるとすれば、あそこしかない」

そう答えるフラディオは、いつもの爽やかな笑みを消し、ハンターとしての真剣な表情になっていた。『赤王』の称号は、伊達ではない。

レラは、そんな兄を見て、少しだけホツとしていた。

(兄さん、チームで狩りができるようになったんだ……)

フラディオ・グランエストは、ソロの片手剣使いとして名を馳せたハンターである。

『金獅子』ラージャン
『迅竜』ナルガクルガ
『霞竜』オオナズチ
『炎妃竜』ナナ・テスカトリ
『浮岳竜』ヤマツカミ

討伐したモンスターを数えるだけで一苦労する。

しかし、それ以上の数と種類のモンスターを、フラディオはチームを組むことをせずに、たった一人で討伐し続けた。

そして彼は、弱冠二十一歳の若さで、『赤王』の称号をハンター協会より授けられたのだ。

フラディオが身に纏う深紅の防具は、『炎王竜』テオ・テスカトルから取れた素材の中でも、特に最上級のをふんだんに使った、『カイザーXシリーズ』だ。

『炎王竜』は、フラディオが十九歳ではじめて討伐した古竜であり、『赤王』という称号も、ここに由来している。

しかし、一体、誰が知っているだろうか。

『炎王竜』を討伐するまで、フラディオはソロではなかったことを。ただ一人、互いに『親友』と呼び合った銃撃士にのみ、その背中を預けていたことを。

(トオイお兄ちゃん……)

レラは、心の中で兄の親友の名を呼んだ。

今でも思い出せる。かつては、今からは想像できないほどに酷く無愛想で常に仏頂面だった兄を、不器用に、でも優しく支え、そして『親友』と呼んでいた青年。

(兄さんは、もう大丈夫みたいだよ……)

親友を目の前で失ってから、誰かと組むことをやめた兄。その兄が、緊急事態とはいえ、今、自分と狩りに出ている。

不謹慎だとは分かっているけど、レラは兄の変化に喜びを覚えていた。

「レラ。着いたぞ」

フラディオの声に、レラは我に返った。いつの間にか、目的地である洞窟の入り口まで来ていたのだ。

「あ、うん！」

レラは強く頷いて、背中に背負った刀『斬破刀』に右手を添える。フラディオも、腰に差した『ハイフェザーソード』を抜いた。

「俺が陽動する。その間にお前は鍛冶バアの安全を確保。いいな」

「了解！ 安全を確保でき次第、助太刀する！」

「それでいい。……行くぞ！」

「うん！」

二人のハンターは、洞窟に向かって駆け出した。

そのころ、ノンノとピリカの二人は、町から少し離れたところにある駐屯地に来ていた。

しかし、

「ふざけてやがりますわ！」

メラルーのぬいぐるみの中にライトボウガンを隠した仕込み銃『メラルーラグドール』を背負ったピリカが、顔を真っ赤にして毒を吐いた。

「ピリカちゃん、落ち着くのよお」

「落ち着け！？ お姉さま、本気で言ってますの？」

ピリカの隣で、彼女と全く同じ顔に、全く同じ防具を身につけた双子の姉、ノンノが相変わらぬのんびりとした口調で、ピリカを落ち着かせようとした。

しかし、結局は焼け石に水のように、ピリカの怒りは更にヒートアップする。

「なんで、この大事なときに、ハンターが一人もいないんですのー！」

そう、駐屯地には、ハンターが一人もいなかったのだ。

受付の青年が言うには、クックの出現情報が出たのとほぼ同時に、森の反対側でドスランポス率いるランポスの大群と、ドスファンゴが出たらしい。

そのとき、駐屯地には三人のハンターがいたのだが、その内一人がまだ新人でランポスもやっと倒せる程度の実力。よって、他の二人もそちらに行くことになってしまったのだ。

それを聞いて、ピリカは憤慨。ノンノはのんびりと小さくため息をついたのだった。

「無駄足になってしまったわねえ」

「キーツ！ この鬱憤、どうやって晴らせばいいんですのー！」

いつの間に出したのか、ハンカチの裾をギリギリと噛みながらピリカが唸った。

そのとき、不意にノンノが空を見上げた。最初は朗らかだった表情が、急に真剣なものに変わる。

「町に戻るわよ、ピリカちゃん」

「え？」

それまでとは打って変わって、ハキハキとした口調でノンノはピリカに言った。姉が突然口調を変えたのを不思議がるピリカを置いて、ノンノは町に向かって走り出す。

ピリカは姉の後を慌てて追った。

「お、お姉さま！ 一体どうしたんですの？」

「どうもマズイことになったみたいだわ」

「……………」

「上、正確には斜め前方を見るのよ」

「斜め前って…………… ああっ！」

姉に促され、斜め前方をピリカは、そこに居る『モノ』を見て、驚愕の声を上げる。

「お姉さま、今、町には……………」

「彼らが無茶をしなければいいんだけど……………」

はるか上空を飛ぶ青い怪鳥を見ながら、ノンノとピリカは更にスピードを上げた。

時は少し戻り、ここはドルウイドの森とミミルの町の境界線。

「……………で、俺たちにもできることって何なんだよ？」

自前の弓『ハンターボウエ』を背負ったヴァンは、全身をフルフルの装備で固めた青年　アレンに訊ねた。

アレンは、こちらもフルフルの素材で作られた狩猟笛『フルフルホルン』を肩に担ぎながら、ニカツと笑った。

剣士用のフルフル装備はフードを目深に被る形なので、何だか危ないお兄さんに見えてしまう。

「ん。クツクが森に来たせいで、ランポスやらファンゴやらが森から出てくる可能性があるわけだ。んで、おれらはもしそういうモンスターが町に近づいたら、ソツコーで討伐するってこと」

「……それ、モンスターが来なかつたら意味ないじゃん」

アレンの言葉にヴァンが悪態をつくくと、ヴァンの頭にアレンの『フルフルホルン』が見事にクリーンヒットした。フルフルの弾力性の高い皮を使った笛とはいえ、元は骨を基盤にして作られたものだから、もちろん、当たればかなり痛い。

「あだっ！」

「お前バカかっつーの。来ない方が良いに決まってるだろが！」

ぶたれた頭を抑えて悶えるヴァンに、アレンが怒鳴りつける。確かに、ヴァンの言葉は不謹慎極まりない。ヒューゴは小さくため息をついた。

「ヴァンくん。僕らは僕らにできることをしよう。無茶をして怪我したら、鍛冶バアが泣いちゃうよ？」

「う……」

鍛冶バアの名前を出されて、ヴァンが小さく呻いた。やはり心配

なのだろう。頭を押さえつつも、その目はドルウィドの森をじっと見つめていた。

「ん……？」

すると突然、ヴァンがスクツと立ち上がった。徐に弓を展開させ、森ではなく空を見上げる。

そんなヴァンの変化に、ヒューゴは首を傾げた。

「どうしたの、ヴァンくん」

「……来る……」

「え？」

つられて、アレンも空を見上げた。しかし、そこには何も見えな
い。

「来るって……何もいないぜ？」

しかし、ヴァンは首を横に振った。

「いや、来る。ランポスじゃない。ファンゴでもない。何か、デカイ何かが来る」

「はあ？」

ヴァンの言葉に、アレンは更に首を捻る。ヒューゴがヴァンの『千里眼』のことを教えると、アレンは目を丸くして驚いた。

続けて、ヴァンの『千里眼』がその大きさを感ずる。そのあまりの大きさに、ヴァンは驚きで更に目を見開いた。

「何だ、これ……バサルモスやショウグンと同じくらい、でかい……」

…！」

「ちよ、おいおいおい！ 森の奥ならまだしも、この近辺には、そこまででかいモンスターはいないぞ！」

「それに待ってください！ 空からってことは、まさか……」

ヴァンの言葉を聴いて、アレンとヒューゴが焦る。今、ドルウィドの森で人里の近くにいた大型モンスター。それは……。

「もうすぐ、あと少し………来た！」

『千里眼』でモンスターの襲来を感じとったヴァンは、まっすぐに森の上空を指差した。

瞬間、強風が巻き起こった。木々がざわめき、空が唸る。森を越え、ヴァンたちの目の前に、一体のモンスターが降り立った。

「……マジかよ……！」

モンスターを見て、アレンが唇をひくひくとさせた。予想外だと小さく舌を打つのが聞こえる。

そこにいたのは、ヴァンが夢の中で見たのと全く同じモンスターだった。ただ、大きさも遥かにこちらの方が大きいし、何より甲殻の色が晴れた青空のように綺麗な空色をしている。

青色の甲殻を纏ったそれは、目の前のヴァンたちに気づくと、まるで威嚇するように飛び跳ねた。それが着地をするたびに、大地が揺れる。

「なんでここに、クツクの亜種が来るんだよ……！！！」

毒づくアレンを嘲笑うかのように、『青怪鳥』イヤンクツク亜種の鳴き声が響き渡った。

第十二話 怪鳥の襲来（後書き）

ハハハハハハハハハ。なに考えてんでしょね〜、私。
ども、最近あとがきを書くのが楽しい旅がらすです。

いきなりクツク出しちゃいました（笑）（笑いじゃねえ）

ドス 系を完全にすっ飛ばしました。いや、本当はランポストド
スファンゴを向かわせるつもりだったんですけど、途中で変えたん
です。……こりゃ、死ぬかな（何

って、別に死ぬわけではないので（主人公殺してどうするよ、私）、大
丈夫ですよ？（汗

訓練生ごときの主人公たちが、どうクツクに挑むのか。はたまた挑
まず逃げるのか？（アレんいるから彼に任せるかも）そして、
赤王』フラディオの実力は！？ 鍛冶バアって無事なの！？

次回いつ投稿するか未定ですが、なるたけ早く更新しますので、し
ばしのお待ちを〜。
ではでは。

第十三話 青怪鳥と赤虎（前書き）

新キャラ登場&作者の苦手な戦闘シーンです。

とてつもなく拙い戦闘シーンではありますが、長い目で見てやってください。

第十三話 青怪鳥と赤虎

夜が更け、空には星がキラキラと輝いている。まるで、たったいま二体の怪鳥が襲来しているのが、嘘のようだ。

「はあぁ……………」

そんな静かなミミルの裏通りを、一匹のアイルーがとぼとぼと歩いていて。

毛並みは、なかなかお目にかかれない赤虎模様。しかし、その体軀は、普通のアイルーよりも随分と小柄だった。

「またダメだったニヤ……………」

赤虎のアイルーは、肩をガツクリと落として、誰に言うでもなく小さな声で呟いた。

(これで通算九百と九十九回目の失業ニヤ……………)

赤虎のアイルーは、腰のどんぐり型のポーチからメモ帳を取り出すと、膨大な量の肉球スタンプを見て、更に大きいため息をついた。すべて、履歴書もしくは顔合わせで雇われずに終わった仕事の数である。

「父上。拙僧は何故にこのような小さき身体で産まれたのですニヤ……………」

遙か遠い砂漠の向こうにある故郷を思い出しながら、アイルーはメモ帳をポーチに戻した。

それから、何を思い出したのか、アイルーは突然イライラと地団駄を踏み始める。

「だいたい、拙僧は既に成年だニヤ！ 立派な大人ニヤ！ 一人前に働けるニヤ！」

しかし、アイルーの必死のアピールは、常に同じ言葉で断られるのだ。

「『子供のアイルーなんか雇えるか……なに、大人？ 笑わせんな。大人なら尚更ダメだ。そんなちっこい身体じゃ一人分も働けねえだろ』……拙僧をバカにするかニヤ！ 拙僧は武僧の生まれ。鍛練ニヤらば他のアイルーニヤんか目じゃないっつーのニヤ！」

普通のアイルーに比べて三分の二程度しかない体躯。生まれつきの病気で大きくなれなかった赤虎アイルーは、プリプリと頬を膨らませた。

多分、怒りでヒートアップしているのだろうが、元が赤いせいで全く分らない。

「誰か、拙僧を馬鹿になどせぜ、一人前として扱ってくれる殿方はいないかニヤ……」

しかし、これまで一度も会わなかったということは、これからは会えないかもしれない。いやいや、三度目の正直という言葉があるではないか。と考えても、すぐに『二度あることは三度ある』という言葉を思い出す。

(ウニヤ〜！ もうどうにでもなれニヤー……！)

イライラの頂点に到達したアイルーは、近くにあった小石を森の方へと放り投げる。すると、投げた先で何かが呻き声を上げた。

「ニヤんニヤ!?!」

アイルーがその声に動きを止めると、森の方から青い鱗を纏ったモンスター　ランポスが現れた。その数、三体。

「ウニヤニヤ!?!」

おそらく一番前のランポスに石が当たったのだろう。小さなたんこぶを作ったランポスが、アイルーを恨めしそうに睨んでいる。

「せ、拙僧、食べてもきつと美味しくないニヤ……」

ランポスのガン飛ばしにすっかり萎縮したアイルーは、後ずさりながらブンブンと首を横に振った。しかし、ランポスたちが目の前にいる『獲物』を易々と見逃すわけがない。

三体のランポスは、アイルーに向かって一斉にジャンプ攻撃を仕掛けた。

「ギニヤアーツ!」

元々の小柄な体躯と武僧として常に行ってきた鍛錬のおかげで、アイルーは何とかランポスの間をすり抜ける。

しかし、それでランポスが諦めるわけがなく、再びアイルーに向かって爪を向けた。

アイルーは身の危険に身震いしながらも、必死にランポスの爪から逃げる。

「だ、誰か、助けてニャー！ー！」

赤虎のアイルーは、叫びながらランポスの魔の手から逃げるべく、一気に駆け出した。

大きな黄色いクチバシに、アレンが十人横に並んでやっと届くくらい大きな両翼。イチヨウ型の耳は愛らしく見えなくもないが、しかしそれはヒトにとつてただの天敵の象徴でしかない。

『青怪鳥』 イヤンクック亜種

予想外のイヤンクック亜種の襲来に、アレンが舌を打つ。

「なんでよりによって亜種がここに来るんだよ……」

亜種。

突然変異とも呼ばれる、元々の原種とは異なった色の甲殻や皮膚を纏うモンスター。姿かたちは原種とそっくりではあるが、肉質や弱点に違いのあるものが多く、総じて原種よりも凶暴な性質を持つことが知られている。

しかし、不運はそれだけではなかったようだ。イヤンクックの後ろから、ギアアギアアと鳴く声が幾重にも重なって聞こえる。すぐに、ランポスの大群が森から姿を現した。

「おいおい嘘だろ……!!」

アレンが毒づく間もなく、イヤンクックが頭をもたげる。口の端から、ゆらゆらと陽炎が立っていた。

「っ！ 避けるお！」

アレンが叫び、ヴァンとヒューゴが反応すると同時に、イヤンクックの口から火球が放たれる。リオレイアの吐くそれとは違う、粘着性の高い炎。アレンが先ほどまでいた場所に放たれたそれは、地に着いても消えることなく燃え続ける。

「うげっ……」

未だに燃え続ける炎を見て、ヴァンはゾツとした。もし、あれが町に放たれたら、どれだけの被害が出るのか。考えただけで恐ろしい。

「ったく、お前ら一体どんな星の下に生まれてんだ！」

「僕らのせいですか！？ ……っとうわぁ！」

アレンの言葉にヒューゴが突っ込む。しかし、すぐにランポスに飛びつかれ、ハンマーで何とか振り払い、頭に一撃。ランポスはキユアアと小さく呻くように鳴いてその場に倒れた。

「オレじゃねえからな、絶対！」

そう答えるヴァンは、矢筒から三本の矢を抜いて弓に番え、放つ。こめかみや脳天に矢を食らった三匹のランポスが、小さく鳴きながら絶命した。続けて更に今度は五本の矢を一気に放つ。イヤンクッ

クの翼膜に二本、足に二本の矢が当たるが、イヤクックはそ知らぬ顔だ。

「ちっ、意外と硬いな……」

「ばっかやろう！ 初心者の弓でクック倒せるわけねえだろ！ っつーか、逃げる！ ギルドに行けば、助けを呼べる！」

ランポスを蹴散らしながら、アレンが叫ぶ。

「ここまで来て退けるか！ やれるだけやらなきゃわかんねえだろ！」

しかし、ヴァンには退く気など一切ないようだ。ヒューゴもランポスの対処に追われ、逃げ出すことが出来ない。

ヴァンは、腰のポーチから黄色い虫 光蟲とネンチャク草と呼ばれる白い草を取り出し、それを矢筒から抜いた矢に貼り付けた。

「コレでもくらえ！」

即興で作った『閃光矢』を、ヴァンはイヤクックの目の前に放つ。地に刺さった瞬間、光蟲が絶命して強烈な閃光が弾ける。

閃光に弱いランポスとイヤクックは、突然の目への刺激に怯んで動きを止めた。

「……ごめんよ」

そこへ、ヒューゴのハンマーがランポスの頭や胸を強打し、その命を次々に奪っていく。

更に、ヴァンの矢が次々とランポスの脳天や心臓を貫いていき、ついにはそこにいたランポスはすべて絶命した。

残りは、イヤンクック一匹。
それを見て、アレンが意外そうに口笛を吹く。

「意外とやるなあ、お前ら……って逃げる馬鹿共！」
「ごたごた言っただったらクック攻撃しろよ！ 俺らの武器じゃダメなんだから！」

褒めた後に大声で突っ込むが、ヴァンの怒号がアレンの言葉を遮った。イヤンクックに太刀打ちできない自分に苛立っているらしく、歯軋りをしながら唸っている。

それを見て、アレンはチツと舌を打った。

「あーっ、もう、なるようになれだこのヤロー！」

アレンは『フルフルホルン』を構えなおすと、ようやく意識を取り戻したイヤンクックに向かって駆け出した。
しかし、

「助けてニャー！ー！」

「んなっ！？」

突然向こう側から、赤虎の毛並みのアイルーが駆けてきた。その後ろからは、新たに三匹のランポスがこちらに向かって駆けてくる。アイルーの登場に思わず動きを止めてしまったアレンに、イヤンクックの火球が襲い掛かった。

「つくしょう！」

慌ててバックステップで火球を避けるが、さらにそこへイヤンクックの連続ついでに降りが注ぐ。

「どわっ！」

今度は『フルフルホルン』でガードをするが、もともと『狩猟笛』はガードする性能など持ち合わせていない。『フルフルホルン』は真ん中から折れ、アレンの脳天にイヤンクツクのくちばしがヒットする。

「がっ！」

あまりの衝撃に、頭がぐらりと揺れる。なんとか踏ん張るが、完璧に防戦態勢にはいつてしまった。

「アレン！」

ヴァンがアレンに駆け寄ろうとしたが、ヴァンの目の前で赤虎のアイルーが派手に転んだ。

「ウニヤニヤーツ！」

パニックで周りのことなどもう見えていないのだろう。目の前にイヤンクツクが、後ろからは三体のランポスがいるにもかかわらず、赤虎のアイルーは恐怖からかその場にしゃがみ込み小さく丸まってしまった。

「ちいっ！」

ヴァンは小さく舌打ちをすると、アイルーの元へと走りながら、ランポスに向けて三本の矢を放つ。うち二本は先頭とその後ろのランポスを貫いたが、そのうち一本はランポスにジャンプをされてか

わされてしまった。

そのまま、ランポスは牙と爪を立てながら、赤虎のアイルーに向かって跳んでいく。赤虎のアイルーは、その身を縮めて震えている。近づく二つの影。その間に、一つの影が割り込んだ。

次の瞬間、ランポスの爪が、牙が、真つ赤な血飛沫を空气中に舞い散らせる。

「……ウニャ？」

赤虎のアイルーが、丸めていた体を起こした。もうダメかと思っていたのに、何ともない自分を不思議そうに見た後、振り返り様にその理由を知って大きく目を見開いた。

ランポスの牙が食い込んでいたのは、ヴァンの右腕だった。チエーンアームの布地の部分から、血が滲んでいる。鉄製の防具のおかげで食い破られずに済んだが、逆にランポスの牙が抜けなくなってしまう、ブチブチと皮下組織が切られる音が鈍く響いた。

「ぐ、あぁっ！」

ヴァンは呻きながら、開いている左手で矢筒から矢を抜く。

「うああああっ！」

ヴァンはそれを逆手に持つと、力任せにランポスの右目に突き刺した。柔らかいものを突き通る感触が、ヴァンの手に残る。しかし、ヴァンはためらわずにそれを後ろに引いた。脳みそを突き抜けられたランポスが、まるで破裂した水道管のように、後方に大量の血飛沫を上げて絶命する。

「う、ぐう……！」

ヴァンは、ランポスの顎を無理やり腕から剥がし取ると、あまりの痛みにその場にしゃがみ込んだ。赤虎のアイルーが、ヴァンの元に駆け寄る。

「だ、大丈夫ですかニヤ!？」

「ヴァンくん!」

それを見て、イヤンクックとアレンの向こう側にいたヒューゴがヴァンの元へ駆け出した。しかし、

「馬鹿ヤロウ!今こっち来るな!」

「え?」

アレンの怒号に、ヒューゴの足が止まる。次の瞬間、イヤンクックの長い尻尾が、ヒューゴのすぐ脇に迫っていた。

「がはっ!」

遠心力で威力が倍化された尻尾が、ヒューゴのわき腹を直撃する。ガードを取れなかったヒューゴは、そのまま森の方へと吹き飛び、背中と後頭部を木に打ちつけた。

「あう……」

モロに後頭部に衝撃をくらったヒューゴは、脳震盪でも起こしたらしくそのまま気絶して倒れこむ。何とかしゃがみ込んで尻尾をかわしたアレンは、そのままイヤンクックの足元で半分に折れた『フルホルン』で攻撃をするが、威力が半減したせいでイヤンクックには全くダメージが与えられない。

「ちつくしょうが！」

アレンは周りを見回す。腕にランポスの鋭利な牙をくらって弓を引けないヴァン。イヤンクツクの尻尾をもろに受けて昏倒するヒューゴ。そして、今現在武器を折られて成す術もない自分。

「どん詰まりかよ……！！」

毒づくアレンの目の前で、再びイヤンクツクが火球を吐くために首をもたげる。逃げて後ろは町だ。逆に被害が広がってしまう。袋の鼠じゃないか。とアレンが半ば諦めかけたそのときだった。

「ニヤンてだらしない男たちニヤ」

突然、アレンとイヤンクツクの間、小型のタルに信管を詰めただけの簡単なつくりの爆弾。小タル爆弾が投下される。爆弾はイヤンクツクの足元で爆発を起こし、爆発音に驚いたイヤンクツクは、火球を吐くのを止めてその場に立ちすくんだ。

「えあ？」

一体何が起きたのか一瞬理解できなかったアレンは、変な声を出しながら後ろを振り向いた。そして、目を丸くしながら思わず顔を綻ばせ、ニカツと笑いながら、後ろにいる彼女たちに毒づいた。

「おせえぞ、バーカ」

「あら、助けに来たのになんて言い草なのでしょう。ねえ、お姉さま」

ズガガガガガガガガガガッ！

ライトボウガン『メラルーラグドール』で通常弾Lv.1をイヤ
ンクックに向けて速射させながら、パピメルシリーズを纏った少女
ピリカが、隣で大剣を構える、自分と全く同じ顔をした少女に
話しかける。

「そうよねえ。コレでも私たち急いで来たのよお。ナタリーちゃん
が案内してくれなかったら、もつと遅かったわあ」

のんびりとした口調でそう答える少女 ノンノは、てくてくと
これもまたのんびりと歩きながらアレンの横を通り過ぎ、大剣『ソ
ウルオブキヤット』を怯んでいるイヤンクックに向けて振り下ろす。
それまで無傷だったイヤンクックの甲殻に、初めて血飛沫が舞った。
そこで、ようやくイヤンクックが我に返った。突然驚かされたこ
とに怒っているらしく、そのくちばしからは陽炎が漏れ出ている。
しかし、

「お口ががら空きニヤー！」

ナタリーが、イヤンクックの口目掛けて、小タル爆弾を投下する。
爆弾はうまいことイヤンクックの口の中に入り、口内で起爆。内側
からのダメージに、イヤンクックは飛び跳ねながら悶えた。さら
にそこへ、ピリカの通常弾Lv.1の雨が降り注ぐ。

「ヒヨコちゃんは大人しくおうちにお帰りなさい！」

耳に目掛けて弾を撃ちながら、ピリカが叫ぶ。速射機能によつて
通常の倍以上のスピードで弾が放たれ、イヤンクックの両耳は既に
ポロポロだった。

続けて、イヤンクツクの右翼に大剣『ソウルオブキャット』が振り下ろされる。

「でも、おうちに帰したらまた来ちゃうわあ。だから、申し訳ないけどここでおしおきねえ」

ニコニコ顔で、しかし細身の体躯からは信じられないほど軽々と大剣を振り回すノンノ。イヤンクツクが暴れそうになると、すぐに背中に剣を納めて後ろにバックステップを取る。ノンノが後退する間もなく、再び驟雨の如き弾の乱れ撃ちがイヤンクツクに襲いかかる。

「ピヨコはピヨコらしくピヨピヨ言っていれば良いんですわー！」

ピリカの通常弾Lv.1が切れると、今度はナタリーの小タル爆弾だ。

「これでもくらってピヨピヨしてるニヤ！」

先ほどよりも火薬の量を奮発したらしく、先の一発よりも強烈な爆発がイヤンクツクを襲う。腹部を守っていた鱗が、甲殻が、爆弾によって弾け飛んでいく。

「ピリカ殿！」

「了解ですわ！」

ナタリーの掛け声に、リロードをし終えたピリカが即座に反応する。通常弾の嵐が、甲殻が剥がれむき出しになったイヤンクツクの腹部に収束される。

腹部からは膨大な量の血が噴き上がり、イヤンクツクが悲痛そう

な叫び声をあげる。

「お姉さま、ラストですわ!」

「オツケーよお」

ピリカの声に、今度はノンノが反応した。イヤンクツクの腹部目がかけて、『ソウルオブキャット』を振り下ろす。

「これで、終わりよお!」

ノンノの大剣が、イヤンクツクの何度も傷つけられてきた腹部を抉り、その切っ先は背中にまで到達する。下半身を一刀両断にされたイヤンクツクは、本来ならば自分よりもはるかで矮小であるはずの少女を、自身の体から噴き出した鮮血で染めながら、ゆっくりと最後の断末魔をあげて絶命した。

第十三話 青怪鳥と赤虎（後書き）

一週間ぶりの更新です。メリークリスマスですよ！

去年のクリスマスはケーキ屋さんのバイトで二日連続保冷車で過ごした旅がらすです。

とうとうキッチンアイルーが五匹になりました！ 村長下位のレウス&レイアならもう怖くありません！

でも、古龍は怖くてまだキリンとクシャルしか挑戦してません！
ついでに集会所のシヨウゲンも大嫌いです。

ハンターランク3になりました！ アイルーフェイクでボマー発動
ガザミ装備で『閃光玉 シビレ罠 大タル爆弾G』コンボで捕獲！

弓で倒せるわけがねえ！ でも、近づけるわけがねえ！ ……はい、結局チキンただけなんです。

……うわ、まったく本編と関係ないあとがき……。個人的にはこういうあとがきが好きなのですが、どうなんでしょう？

次回はあの素敵な笑顔がものすごいいことになります！（何

第十四話 『赤王』の怒りと二人の約束

イヤンクック亜種を討伐した後、ヴァンとヒューゴ、そしてアレンは、ナタリーたちに連れられてルピナス病院に来ていた。

「はい、これでもう平気よ」

「った！ ちよ、はたか必要なくね？ 先生」

「自業自得よ。ねえ、ヒューゴくん」

「えっと……はい……」

今しがた包帯を巻き終えたヴァンの右手を軽くはたきながら、ミルの町唯一の医者、エレノア・ルピナスはニコリと微笑んだ。今年で二十五になるといふ彼女は、つい二年ほど前に亡くなった唯一の身内である祖父の後を継いで、この病院を一人で切り盛りしている。腕も確かであり、また、こざっぱりとして清潔感のある女性だ。診察の結果、ヒューゴは脇腹の打ち身に軽い脳震盪で今晚は安静。ヴァンの傷も神経まで到達していなかったので、全治一週間程度。イヤンクックに後頭部をど突かれて一番深手だと思われていたアレンは、大きなたんこぶを一つ作った程度で特に心配する必要もないという。フルフルから作られた弾力性の高い防具が、彼を守ったのである。

「まったく、人騒がせ且つだらしない方たちですわ」

そう言って憤慨するのはピリカ。彼女は『メラルーラグドール』に仕込んでいた機関銃をぬいぐるみから取り出して、丁寧に分解し、中身を掃除している。

「そうよねえ。私たちが来るまで待っててくれて良かったのにねえ」

ピリカの言葉に同意するのは、ノンノだ。こちらは、イヤンクックの血糊で汚れてしまった『ソウルオブキャット』を砥石で丁寧に研いでいる。

「まったくもって、お二方の言う通りニヤ」

同じく同意するのは、レモン色のアイルー、ナタリーだ。こちらはすでに防具を脱いで、布で汚れを拭いている。

しかし、それに反対をする声があった。アレンだ。

「おれはこいつらに逃げろって言ったんだ！ でも、ランポスは来るわ、ヴァンが馬鹿をするわでなあ！」

「オレのせいだよ！」

「つたりめえだこのスットコドッコイ！」

「んだとお！」

「ちょ、やめなよ二人とも！」

互いに互いを睨みあう二人。ヒューゴが止めようと声をかけるが、聞こえていないらしく互いの胸倉を掴み始める。そこへ、一匹の赤虎のアイルーが二人の間に割って入った。

「お待ちくださいニヤ！ 此度の皆様の怪我の原因は拙僧にありますのニヤ！ ですから、喧嘩はお止めくだされニヤ！」

必死に二人を交互に見ながら嘆願する赤虎のアイルー。その目は涙でうるうるとなっていて、二人の少年に精神的ショックを与えるに十二分の威力を放っていた。

「うっ……」

「わ、悪かった……」

言いようのない罪悪感に駆られた二人が、気まずそうに顔を背ける。赤虎のアイルは、二人が言い争いを止めたことに胸を撫で下ろしつつも、やはりこちらにも気まずそうに顔をうつむけた。

そこへ、誰かが玄関のドアをノックする音が聞こえてきた。エレノアがすぐに反応し、病室を出て、玄関のドアを開けに行く。エレノアは玄関のドアを開けた途端、あら。と口を開いた。

「意外と速かったのね。フラディオ」
「っ！」

エレノアが呼んだ名前を聞いて、ヴァンがスクツと立ち上がる。部屋の向こうから、今度はフラディオの声が響いた。

「まあな。ところで、うちの大馬鹿共はどこにいる？」
「……！」

それは、ヴァンやヒューゴが今まで一度も聞いたことのない、とても厳しい声だった。いつも笑顔を絶やさないあの青年が、今、とつもない怒りを抱いているのがすぐに分かる、厳しい声。

一方、エレノアは先ほどと変わらずに穏やかな声でフラディオに対応した。

「大馬鹿共って、あなたの生徒さん？」
「それ以外に誰がいる？ どこにいるんだ？」
「……ねえ、フラディオ。落ち着いて。彼らだって」
「うちの大馬鹿共はどこかと訊いたんだ！」

ドゴツ！

フラディオの怒号と一緒に、何かを強く殴りつける音が病院中に響き渡る。病室にいた全員が委縮する中、事情を知らない赤虎のアイルーだけが、オロオロとしきりにヴァンたちを視線を泳がせる。ドアの向こうで、エレノアが小さくため息をつくのが聞こえた。

「フラディオ。今日は帰って。ヴァンくんはともかくとして、ヒューゴくんは今日は安静にしないとイケないの。話なら明日でも」
「そのヴァンとヒューゴはどこにいる！」

最早、エレノアの話聞く気など微塵も無いらしい。フラディオの声は、今までで一番大きく、また怒りに満ちていた。ヴァンとヒューゴは、フラディオの怒号に大きくその身を震わせた。

しばらく沈黙が続いた後、エレノアの大きなため息が聞こえ、病室のドアがゆっくりと開く。

「ごめんなさい。ヴァンちゃんとヒューゴくん以外は、席を外してもらえる？」

エレノアの後ろで、フラディオが冷たい眼をヴァンとヒューゴに向けていた。まるで、氷のような、冷たくて鋭い眼。

エレノアの言葉に、ピリカたちは誰一人逆らうことなく、それぞれが小さく頷くと一人ずつ部屋から出て行った。アレンが出ていく際、フラディオがアレンに小さな声で怪我の様子を訊ねるのが聞こえた。アレンが大丈夫だと頷くと、フラディオはその肩を優しく叩いていた。

最後に部屋を出たのは赤虎のアイルーだった。赤虎のアイルーは部屋を出てすぐに、フラディオの前で土下座をした。

「拙僧、流浪のアイルーで名をベンケイと申しますニヤ！ 貴殿をあちらにいるお二方の師匠とお見受けし、このベンケイに一つ進言することをお許しくださいませニヤ！」

赤虎のアイルー　ベンケイの突然の行動に、フラディオは驚きながらも進めようとしていた足を止める。もちろん、ベンケイを跨いで病室に入ることもできたのだが、フラディオはそれをしなかった。

それを肯定と感じたのか、ベンケイが更に言葉を進める。

「此度のお二方の怪我の原因は、このベンケイにありますのニヤ！ 拙僧が青怪鳥の元にランポスを連れて来なければ、お二方が怪我をすることはなかったのですニヤ！　ですから、ですから、お二方をどうかお叱りなさないでほしいのですニヤ！」

　お願いしますニヤ。とベンケイは床に頭を下げ続けた。すると、フラディオはゆっくりと腰を下ろし、ベンケイの背中を撫でる。

「優しいのだね、君は」

「……ニヤ？」

「でも、俺が怒りたいのは違うことなんだよ」

　フラディオはそれだけ言うと、再び立ち上がり、今度はベンケイの横を通り過ぎて病室へと入ってきた。フラディオの手でドアが閉められる瞬間、ベンケイの心配そうな瞳と、ヴァンの目が合った。ベンケイの目からは、一筋の涙が流れていた。

　ドアが完全に閉められ、そこにはフラディオとヴァンたちの三人だけとなった。フラディオが険しい表情で二人を射抜くように見つめる。

「さて、何か言うことはあるか？ お前たち」

いつもの穏やかなものとは全く違う、怒りに満ちたフラディオの声。それを聞いた瞬間、二人とも、何も言えずにただその場で動けなくなってしまうた。

「……………」

フラディオは無言で、ゆっくりと二人に近づいていく。

不意に、フラディオの左手がヴァンの右腕を、右手がヒューゴの頭を掴んだ。いきなり強い力で患部を掴まれ、二人の中に鈍い痛みが走る。

「つてえ！」

「あぐつ！」

二人は小さく悲鳴を上げたが、フラディオは手を離さなかった。

二人の患部を握ったまま、小さく呟くように話し始める。

「……………今日、お前たちはある意味『死ぬ』かもしれなかったんだぞ」

「……………え？」

「『死ぬ』……………？」

フラディオの言葉に、ヴァンとヒューゴはキョトンとなった。フラディオの視線が、ヒューゴの方へと移る。

「ヒューゴ。『秘境探し』になるために、『至高の探検家』の弟子となるまで、そしてそれから、どれだけ勉強をしたんだ？ どれだけの知識を、この頭に詰め込んできたんだ？」

「……………あ……………」

言われて、ヒューゴはフラディオの言いたいことに気づいたらしい。小さく声を上げながら、ギョツと拳を握り締めた。

今度は、ヴァンの方にフラディオの視線が移る。

「ヴァン。『神の手』に少しでも近づぐために、お前はどれほどの鍛錬を積んだ？ どれほどの数の武器を、この右手で作ってきたんだ？」

「……………っ！」

ようやく、ヴァンもフラディオの言葉の意味に気づいた。二人の様子を見て、フラディオは小さくため息をつく。

「その努力を、お前たちはたった一晩で潰したかもしれないんだけど」

そう。『死ぬ』のはヴァンたち自身ではなく、二人が自身の夢のために築いてきたもの。知識、経験、そしてそれを実現するための力そのもの。

それは、確かに二人にとっては命と同等か、それ以上に大切なものであった。

「分不相応な戦いによって得るものなど何もない。ただ、何よりも大事なものを失っただけだ」

フラディオはそう言うと、二人から手を離れた。しかし、ヴァンもそしてヒューゴも、ただ茫然となってフラディオを見つめる。

「……………先生」

「お前たちに、実戦はまだ早すぎたのかもな」

ヴァンの言葉を遮って、フラディオは短く言いきった。それから、これ以上何も言うことは無い。とでも言うように、踵を返して病室のドアを開ける。部屋を出る瞬間、フラディオは立ち止まり、振り返らずに独り言のように言う。

「……ああ、一つ言い忘れていた。……鍛冶バアなら大丈夫だ。怪我もない」

「……あ……」

ヴァンはそれを聞いて何かを言いかけたが、それよりも早くフラディオがドアを閉めた。エレノアに一言だけ謝罪をする声が聞こえ、続けてピリカたちに家に帰るよう促すのが聞こえる。玄関のドアが閉まる音が、鈍く病室に響いた。

しばらくして、病室のドアが小さく開き、ベンケイがヒョコツと顔を出した。立ちすくんだままのヴァンを見ると、小さな足でヴァンの元に駆け寄る。

「……ヴァン殿。大丈夫ですかニヤ？」

「ん、ああ、大丈夫だよ。ありがとな、ベンケイ」

ベンケイに微笑みかけながら、ヴァンはゆっくりとヒューゴのベッドに腰を下ろす。両手で頭をグシャグシャと掻き回しながら、ウーッ。と小さく唸る。

「……先生、きっと失望しただろうなあ……」

「……かもね……」

先程の短い説教が相当応えたらしく、ヒューゴもヴァンと同様に疲れきった顔をしていた。そのままベッドに身を投げ出したヒュー

ゴは、長い溜め息をついた。

「ちょっといいかしら？」

そこへ、ドアの向こうからエレノアの声が聞こえてきた。すかさずベンケイがジャンプしてドアノブを回してドアを開ける。ドアの向こうから、湯気が立つ四つのカップをトレイに乗せて、エレノアが部屋に入ってくる。甘い匂いが、二人と一匹の鼻孔をくすぐった。

「えへへ。エレノア特製・ハチミツミルクよ。疲れた体にはこれが一番。一緒に飲みましょ」

エレノアはニツコリと笑うと、ベンケイに椅子を勧め、カップを三人に配ると、自分も診察用の椅子に腰かけた。ミルクを口に運び、至福の笑みを浮かべる。

「ぶはーっ。生き返るわ。キミたちも冷めないうちに飲みなさいな」

エレノアに勧められ、ヴァンたちもミルクに口をつける。ハチミツの甘い味が身体中にゆっくりと浸透していく。

確かに、疲れた体にはちょうど良かった。

「フラディオはね、あなたたちのこと、本当に大事に思ってるんだよ」

全員が一口飲み終えたのを見て、エレノアはそう切り出した。ヴァンとヒューゴが、ほとんど同時に顔を上げる。

エレノアはそれを見て、フツツと口元を綻ばせた。

「フラディオは、自分の命と同じくらいに大事な人を、目の前で亡くしているから」

「あ……」

「それって、もしかして……」

「あらやだ。二人とも知ってたの？」

二人の反応に、エレノアはまるで意外だとも言うように目を丸くさせた。

ヒューゴが、フラディオが風呂場で二人にそのことを話したときのことを告げると、エレノアは更に目を大きく丸くさせた。

「……フラディオ、あのことを話せるようになっていたのね」

「あの、それとオレたちのことと、どう繋がるんですか？」

ヴァンが訊ねると、エレノアは少し考えるように天井を見上げ、それからゆっくりと話し始めた。

「フラディオは、十九のときに、テオ・テスカトルの討伐に彼が唯一親友と呼んでいた銃撃士と、たった二人で挑んだの。」

出発から二週間程経ったある日の夕方、フラディオはテオ・テスカトルの亡骸を乗せた馬車を引いて、たった一人で帰ってきた」

それから、フラディオは半年以上もの間、睡眠薬無しでは眠れない体になってしまったのだという。

「本当に酷い有り様だったわ。目は虚ろで、ただ動くだけの人形みたいだった。夜は夜でいくら寝付こうとしても眠れず、睡眠薬を使っても、テオ・テスカトルとの死闘と親友の最期が、每晚悪夢のように何回も再現されて、彼をどんどん蝕み続けた」

実際、リストカットや薬の異常摂取で何度も死にかけたのだという。その度に、フラディオは親友の名を呼び続け、まるでお化けの話に怯える子供のように泣いては自分を罵り続けた。

「それでも彼が死ななかつたのは、親友の最期の言葉が、彼をこの世に縛りつけたから」

エレノアは、その言葉までは教えてはくれなかつた。ただ、記憶の中から今言うべきことだけを少しずつ紡いでいく。

「フラディオが再び狩場に行けるようになるのに、だいたい半年以上かかった。でも、彼はそれから、誰かと狩りに行くことをやめてしまったの。二度と誰かが自分の為に死なないように。二度と、親友の二の舞にならないように」

そんなの、ただの『逃げ』なのにねえ。と、エレノアは困ったように付け足した。

「……でもね、彼は、失う辛さを誰よりも強く知っている。キミたちを想うからこそ、キミたちに自分と同じ思いをさせたくないんだと思うの」

分かってあげて。とエレノアは言つと、残りのミルクを一気に飲み干した。

「さてと、私はそろそろ寝るかなあ。ヴァンさんとベンケイちゃん
は、空いてるベッド使つて良いわよ。ミルクは飲み終わつたらトイレにまとめといて頂戴ね」

じゃあねえ。と三人に手を振りながら、エレノアは自分のカッ

ブだけを持って、部屋から出ていった。

残された三人は、ただ、ジッと各々のカップを見つめている。

（あの先生が、そんな風になっていただなんて……）

エレノアの話、ヴァンは半分信じられなかった。

ヴァンが知っているフライディオは、いつも笑顔を絶やさないう、爽やかで、それでいて頼れるカッコいい大人の男だ。彼が自殺未遂をしたり、自分を罵り続けるところなど想像もできない。

「……意外だったね」

ヒューゴも同じことを思っていたらしく、ポツリと呟くようにそう言った。ヴァンはその言葉に小さく頷くと、クイツとカップを傾けてミルクを飲み干す。それから、ゆっくりと立ち上がった。

「オレさ、先生からはあちゃんの無事を聞いたとき、すげえ悔しかった」

「……どうして？ 鍛冶バアが無事だったなら良かったじゃないか」「そこじゃない。先生は誰も傷つけずに依頼を遂行した。それに比べて、オレなんて全員ケガさせちまった上に、何にもできなかったんだ」

そう。今回のことで、ヴァンは自分とフライディオとの圧倒的な差を、思い知ったのだ。あまりにも圧倒的な、経験という差を。

それを聞いて、ヒューゴもコクリと頷いた。

「うん。でも、先生も昔はそうだったんだ。先生だって、自分の非力を呪ったことがあった」

今度は、ヒューゴの言葉にヴァンが頷いた。ヴァンはそれから、自分の傷ついた右腕を見つめ、そこに左手を添える。

「ああ。だから、オレ、強くなりたい。もう誰も傷つけたくない。自分も含めて、誰も、傷つけさせたりはしない。……先生の昔のこと聞いて、すごく思った」

この傷は、その誓いの証だとヴァンは思った。自分の夢と大切な人々、両方を守るための、誓いの証だ。

すると、ヒューゴが後ろで小さく笑うのが聞こえた。

「奇遇。僕も同じこと、考えてた。……僕も、ヴァンくんと一緒に強くなりたい。今夜みたいなことは、二度と繰り返さない為に」

ヴァンが振り返ると、そこには強い意志をその瞳に秘めた青年がいた。自分と同じ思いを、その胸に抱いている青年が。

ヴァンは、その青年に右の拳を突き出した。

「……じゃあ、ヒューゴ。約束しようぜ」

「約束？」

「ああ。もう二度と、互いに傷つかない約束。先生が親友と果たせなかった約束を、オレらが果たすんだ」

ヴァンがそう言うと、ヒューゴはキョトンとした表情で、ヴァンと突き出された右拳を見比べた。そして、それから笑顔で自分の右拳を、ヴァンに向けて突き出す。

「分かった。約束する。僕は絶対に、ヴァンくんを守る」

「おう。オレだって、ちゃんとヒューゴを守ってやるぜ」

「僕たち、もう親友だからね」

「ああ。オレらは親友だ！」

ヴァンとヒューゴは、そう言って笑顔で互いの拳を突き合わせた。そんな二人の光景を、ベンケイは羨ましそうに見上げていた。

第十四話 『赤王』の怒りと二人の約束（後書き）

クック第二戦をすっ飛ばしてのお説教シーンです。

え？ 何故書かないかって？

ハハハハハ。あの兄弟がクックに遅れをとるわけないじゃないですか！ それより、こっちの方が重要だったので省いたんです。

訓練編を書く上で、旅がらす書きたかった最後の一つを、書くことができませんでした。

狩りをする上で、必ず狩猟目的よりも強く見なければいけないものがあると、旅がらすは思っています。

まあ、実際のゲームではそんなことなど考えませんが、ヴァンたちには考えてほしかったんです。

訓練編、多分もうすぐ終わります。（多分かい！

行間 二(前書き)

書き直しました。

投稿した後で読んでみたら、やっぱりちょっと違和感があったので

……(汗)

行間 二

草木も眠る丑三つ時。ミミルの町から五分程歩いたところに、高い丘はあった。

テノスの丘に比べると高さはだいぶ低いが、ランゴスタ避けに常に甲虫種が嫌う香を焚いているため、ここには時折草食動物のアプトノスやケルビが来るだけだ。そのアプトノスたちも、今はいない。

そこが、ミミルの墓地である。

大小様々な墓石が建ち並ぶ墓地のやや東よりに建てられた墓石に、フラディオは背中を預けていた。勿論、今のフラディオは普通に考えれば、かなり罰当たりなことをしている。しかし、フラディオはそんなことなど全く気にはしていなかった。普段は吸うことなどない煙草を燻らせながら、フラディオは更に墓石に体を預ける。

『トオイ・マ克蘭サ』

それは、フラディオがかつて『親友』と呼ばれた、ただ一人の男が眠る場所。フラディオが唯一、自分のすべてをぶちまけることができる場所だ。

「トオイ、俺の生徒はまったくもって困った奴らだよ……」

誰に話しかけるでもなく、フラディオはただ一人ごちる。無論、墓石からは返事など返ってはこない。フラディオは小さくため息をついた。

「だーれだ？」

そこへ、突然誰かがフラディオの両目を後ろから塞いできた。しかし、フラディオはその聞き慣れた声に、口元を綻ばせる。

「エレノア」

「ピンポンピンポン。やっぱりここに来てたのね」

フラディオの後ろから、魔法瓶を提げたエレノアが顔を出した。エレノアは魔法瓶から白い液体をカップに注ぐと、それを墓に供える。

すると、それを横からフラディオがクイツと飲み干した。

「……相変わらず美味しいな。ハチミツミルク」

「あ、コラ！ これはトオイの！」

「あいつは飲めないから、俺が代わりに飲んでんの」

フラディオが笑いながら言うと、エレノアは頬を膨らませた。

「……飲みたいなら飲みたいって言えばいいのに。可愛くない人」「可愛くなくて結構。お前もそんな顔したら嫁の貰い手なくなるぜ」

フラディオがツンツンとエレノアの頬をつつくと、エレノアは更に頬を膨らませた。

「煙草、吸うなんて珍しいじゃない」

「たまには吸いたくなるのさ。元々吸ってたし」

「不健康！ ……あーあ、どうしてこんな人に惚れたかな、私」「俺もどうしてこんな口うるさい女に惚れたのかね？」

二人は同時に顔を見合わせ、また同時に小さく噴き出す。

「……それで、トオイに何の相談があつて来たの？」
「……ん？ 別に」

フラディオがそう言って再び煙草に口をつけると、エレノアがそれを奪つてポケットから取り出した携帯灰皿に捨てる。

「……エレノア。まだ吸い途中」

「あなたが無表情で煙草をここで吸っているときは、大抵トオイに相談があるときつて相場が決まつてるのよ」

「……勝手に決めるなよ」

「決めるわよ。で、何相談してたわけ？」

エレノアは、フラディオが言うまで引き下がらないようだ。フラディオは本当に面倒臭そうに頭を掻く。

「………言いたくない」

「子供かアンタは！ ……まあ、ヴァンくんたちのことだつてのは分かつてるんだけど」

フラディオの頭を叩きながら、エレノアは微笑む。一方、フラディオはバツが悪そうに顔を顰めた。

「ヒューゴはそこまで問題はない。でもヴァンは、あいつは、トオイに似すぎている……」

「トオイも昔、ドスランポスもまとともに相手にしたことのないくせに、ヘビィボウガンで单身クツクに挑みに行ったわよね。あの子見て、思い出しちゃったわ」

エレノアは楽しそうに微笑んでいるが、フラディオは難しい顔で

しかめっ面をしている。

「レラからリオレイアのことを聞いていたときから、引っかかってはいたんだ。しかし、まさか本当にやるとは思わなかったぞ……」
「弟のアレンは、全く似なかったのにねえ。まさか、他所から来た子がそっくりだななんて」

「……俺は怖いんだ。ヴァンたちの事を聞いた瞬間、あのときのこと、真っ先に思い浮かんじまった」

フラディオは両腕で顔を覆った。その表情を見ることは出来ない。しかし、エレノアにはフラディオがどんな気持ちでいるのかが、よく分かった。

「フラディオ」

「……出来る限りのことはしたいと思っている。でも、ハンターの仕事に『命の保障』なんかない。狩るか狩られるか。ただ、それだけだ」

フラディオの言葉はすぐに消えてしまいそうなくらい、とても弱弱しかった。

『理解』と『納得』は違う。フラディオにとって、それは大きなことだ。テオ・テスカトルに狩られた親友と、そのテオ・テスカトルを狩った自分。『炎王竜』を討伐した代償は、あまりにも大き過ぎた。

フラディオは、自分の弟子たちに、自分と同じ経験だけはさせたくなかった。

そんなフラディオに、エレノアが静かに体を預ける。

「大丈夫よ。誰よりも大切な人を失うことの重さを知っている貴方

が、師匠なんだもの。自信を持って」

「……………」

「トオイだって、見守ってくれるわ。だから、大丈夫」

「ああ……………」

二人は、淡く光る月を見上げながら、互いの体に腕を回した。

行間 二(後書き)

はい。フラディオとエレノアさんのワンシーンでした。

訓練編は、ヴァンとヒューゴだけでなくフラディオの物語でもあるので。まあ、彼自身が旅がらすのお気に入りキャラということもあるのですが(笑)

いつか、フラディオの過去話も書いてみたいとは思っていますが、それにはまず、旅がらす自身がテオに挑む必要があるわけで……() (. . . ;) ()

書くとしたら、ずっと先になります。というか、彼に人気が出るか否かにもよるとは思いますが(何

次回からは普通に訓練編再開します(. . .) (ノ

第十五話 試される二人と森に舞う嵐（前書き）

あけましておめでとございます！

2009年、一体どんな年になるのか楽しみです^^

そんな感じで、今年も『たまじゆけ』始まります！

第十五話 試される二人と森に舞う嵐

二体の怪鳥の襲撃から、一ヶ月が経った。

舞台は、そんな昼下がりの午後のドルウィドの森。街道を挟んで北と南に分かれた森の北側で、一頭のモンスターがケルビの肉を貪っていた。

青い鱗に覆われた表皮に、嘴のような顎。一般にそれはランポスと呼ばれるモンスターであるが、しかし、頭頂部にあるオレンジ色の鶏冠と、通常よりも鋭く、そして長く発達した鋭利な爪が、それがただのランポスではないことを如実に表していた。

『ドスランポス』

それが、そいつの名前だ。ランポスの中でも、特に強力な個体。ハンターや学院の書士官たちの報告によって、通常の個体と区別するために付けられた名前。

しかし、それは確かにその名の通り、ランポスよりもはるかに強大であり、また、手強いモンスターである。このモンスターによってどれほどの命が奪われたのか、数え切ることには難しい。

(いた……)

ケルビの肉を貪り続けるドスランポスを、一人の青年が睨むように見つめていた。

聡明そうな顔には似合わない鉄製の防具を身に纏い、その背中にはこれまた鉄製の巨大なハンマーを背負った青年は、腰のポーチから淡く光る球体を取り出した。心なしか、その手は震えている。青年はそれに気づいて苦笑いを浮かべると、目を瞑った。

(落ち着け。チャンスは少ない……ここで必ず討伐する！)

青年は腹を括ると、目を開き、自分の『真下』にいるランポスに向けて、球体を落とした。

「!?!」

ドスランポスが、突然視界に飛び込んできた球体に驚き、小さく泣き声を上げる。次の瞬間、球体が弾けて閃光が迸った。ヒトよりも遙かに視力の優れたモンスターは、この閃光のせいで一定時間の間、その視界を奪われる。もちろん、ドスランポスも例外ではない。

(今だ！)

目の前で弾けた閃光に怯むドスランポスの隙を狙って、青年はドスランポスの頭上にある木から飛び降りた。そのまま、落下時に出るエネルギーを上乗せしたハンマーの一撃を、ドスランポスの脊椎に喰らわせる。

骨の碎ける、嫌な音が辺りに響いた。運動神経伝達経路の要たる脊椎を折られたドスランポスは、完全に動けないわけではないが、それでも体の自由が利かないらしく、グシャリとその場に倒れ伏した。

「……ごめんよ」

頭上から響いた声に、ドスランポスは視線だけを上に上げる。そこには、たった今ドスランポスの体の自由を奪った青年 ヒューゴが立っていた。

ヒューゴは悲しそうな瞳でドスランポスを見つめた後、手にして

いたハンマー『ウォーハンマー』を振り上げる。

「僕のことは、赦さないでくれ」

ヒューゴはそれだけ呟くように言うと、ドスランポスの頭にハンマーを振り下ろした。再び頭蓋の割れる音が、辺りに響き、ドスランポスは最期にもう一度だけ鳴くと、ゆっくりと息絶えた。

あれから、一ヶ月。まず、ヴァンの怪我が完治するまでの一週間の間、実地訓練は中止となり、ヴァンとヒューゴの二人は、フラデイオから一週間の謹慎処分を下された。

ヴァンの怪我が完治した後も、最初の一週間は訓練所での闘技訓練に戻り、ようやく先週から再び実地訓練にスケジュールが戻ったのである。

事の発端は、昨夜の夕食の席でのことだ。ブルファンゴを一人五頭ずつ、計十頭の討伐依頼をこなしたヴァンとヒューゴに、フラデイオがこう提案したのである。

「二人とも、そろそろ認定試験をしようと思っているんだが」

「え!？」

「本当ですか!？」

案の定、二人は目を大きく丸くさせた。確かに二人とも実力は以

前に比べて格段に上がってはいたが、一ヶ月前に説教を受けたばかりで、ハンター認定試験などまだずっと先のことだと思っていたからだ。

しかし、フラディオは首を縦に振った。その顔は、この一ヶ月の中で一番穏やかな、以前のものと同じ笑顔に戻っていた。

「ああ。親父やギルドマスターとも相談したが、もう試験を受けさせても良い頃合と判断した。試験に使うのにちょうど良い依頼も見つけたし、明日にでもやろうと思っている」

「じゃあ、その依頼を成功できれば……」

ヒューゴの言葉に、フラディオは大きく頷いた。

「晴れて二人とも、一人前のハンターだ」

そして、現在に至るわけだ。ヒューゴは腰からマカライト鋼製の剥ぎ取りナイフを取り出してドスランポスを丁寧に捌き始める。

(剥ぎ取れるのは皮に爪に竜骨を少し、か。頭はダメだな。もう完全に潰れちゃってるし)

既に、死体を捌くことに対する嫌悪感は消えていた。慣れとは恐ろしいものである。しかし、慣れなければいけない。これが、ドス

ランポスの命を奪った自分に出来る、唯一の贖罪なのだ。

(お前の命は、絶対に無駄にはしないよ……)

「良くやったな、ヒューゴ」

ヒューゴが誓うその後ろから、赤い防具を身に纏った青年が声をかけてきた。ヒューゴは振り向くと、照れくさそうに苦笑いをして、青年　フラディオに小さく頷いた。

「はい」

それを確認して、フラディオがニコリと微笑む。それから、森の南に視線を移した。

「問題はあつちか……仲良くやってるといいんだけどな」

「難しいですね。依頼は大丈夫だとは思うんですけど……」

先程とは違う、呆れた気持ちを半分含ませた苦笑いを浮かべながら、ヒューゴも森の南側を見た。

おそらく今そこで狩りをしているであろう、親友とその試験官役に抜擢された少女のことを考えながら。

「だーかーら！　何でオレの試験官がお前なんだよ！」

「それはこっちが訊きたいくらいよ！　何で私がアンタみたいなの

ケベの試験見なくちゃいけないわけ!？」

一方、こちらはドルウイドの森の南側。森の中で、二人の少年と少女が、怒りを露わにしながら怒鳴り散らしていた。

その内の一人、ミカン色の髪少年　ヴァンが、少女を睨みつける。

「それこそ知るか!　ってか、誰がスケベだと!」

「人のスカートの中見る奴のどこがスケベじゃないっていうのよ!」

しかし、銀髪に桜色の鎧を身に纏った少女　レラも、負けじとヴァンを指差しながら鋭い瞳で睨み返す。

二人はしばらく互いを睨みあつた後、同時にフンとそっぽを向いた。

今回の試験内容となっている依頼は、ドスランポスの討伐だ。ドルウイドの森は、街道を挟んで北側と南側に分かれている。その両方に一頭ずつ、ランポスの中でも特に強力なドスランポスが現れたのだ。

そこで、北側をヴァンが、南側をヒューゴが相手取ることになった。ちょうど、ギルドの規定でもハンター認定を受ける基準が『単独で中型モンスターを狩れる実力を持つていること』であるので、好都合の依頼だったというわけだ。

しかし、今回の試験には一つの不具合が生じていた。試験官が足りないのだ。ミミルの訓練所にいる教官は、フラディオ唯一人だ。当たり前だが、フラディオが二人に分身できるわけがなく、一年間のハンター修業を終え『単独で飛竜を相手取れる実力』を持つレラに、白羽の矢が立ったのである。

レラは、小さくため息をついた。

「だいたい、兄さんもどうして私とヴァンなんかを組ませたのかしら。こいつがバカやったら、私じゃ止められないのに……」
「バカなんてしねえよ」

レラの言葉に、ヴァンが間髪入れずに答える。その目は真剣なものであったが、レラはいまいち納得できなかった。

「私の言うことはおろか、兄さんの言いつけまで無視したくせに、よくそんなこと言えるわね」

「……それは」

「とにかく、一度でもバカなことやったりしたら、即失格にするからね！ 肝に命じておきなさいよ」

「……はいはい。分かった分かった」

もうこれ以上言い争っても仕方ないと判断したのか、ヴァンはレラの言葉を適当にあしらった。それから、ゆっくりと精神を集中させ、『千里眼』を発動させる。

ヴァンの『能力』を知らないレラは、その行動に首を傾げた。

「何してるの？」

「……」

レラの問いに、ヴァンは答えない。北側だけとはいえ、ドルウイドの森は広い。出来る限り『千里眼』の精度を高める必要があった。ヴァンの双眸が、モンスターの『気』を捕らえる。近距離にいるケルビから、少し離れた場所にいるランポスまで、少しずつ形が見えてくる。

(違つ……どこにいる……)

ヴァンは集中しながら、『千里眼』の範囲を少し広げていく。東側に、一瞬巨大な『気』を感じたが、ドスランポスの姿ではない。気にはなったが、今はそんなことを気にしている場合ではなかった。それから数秒後、ヴァンは北東にランポスと同じ形の、しかしそれよりも大きな『気』を確認した。

「……いた。北東の方だ」

「え？」

わけが分からず戸惑うレラを尻目に、ヴァンは察知した『気』に向かって走り出す。

「行くぞ！ 飛ばすから置いてかれんなよ！」

「え、ちょ、何がなんなのよ！」

突然猛スピードで走り出したヴァンに驚きつつも、レラは慌ててその後を追った。

「……いた……」

「ウソ……本当にいた……」

数分後、二人の目の前には、一頭のドスランポスと数匹のランポスがアプトノスに群がっていた。バリバリと音を立てながら、巨大な餌に齧りついている。

二人は、ランポスから少し離れた茂みで、その様子を見ていた。

「……で、ランポスらもやるのか？」

「ん……そうね。というか、多分ドスランポスを討伐する上でものすごく厄介になると思うから、討伐するのがベストだと思うわ」

「そっか……あんまり殺したくはないけど、仕方ないか」

ヴァンは小さく呟くと、腰のポーチから光蟲とネンチャク草を取り出し、それを矢筒から取り出した矢に貼り付ける。それを見て、レラが眉を寄せた。

「それ……何する気？」

「見てりゃ分かるさ。やるぞ！」

ヴァンはそう言って、矢を弓に番えると茂みから飛び出した。突然現れた『敵』に、ランポスたちが甲高い声を上げる。

だが、ヴァンは構わずに一頭のランポスに向けて矢を放った。

「全員怯め！」

ヴァンの放った矢が、一頭のランポスの眉間に突き刺さる。脳を貫かれランポスが絶命した瞬間、同時に矢に貼り付けられた光蟲が絶命し、辺り一帯に閃光が弾ける。ドスランポスと四体のランポスが、突然発生した閃光に視界を封じられ、その場にふらつき出した。ヴァンはそのまま、素早く二本の矢を弓に番えて放つ。ヴァンの手から放たれた矢は、まずヴァンから見て右にいる二体のランポスの眉間や心臓を正確に射抜いた。

続けてヴァンは、再び二本の矢を今度は左側にいるランポスに向けて放つ。残りの二本の矢も、先程と同じように残ったランポスの眉間を射抜く。

残りはドスランポスただ一匹となった。ヴァンは腰のポーチから白い液体の入ったビンを取り出すと、それを弓に組み込まずに矢筒から抜いた一本の矢に中身をぶちまける。そして、それを弓に番えず、片手剣のように構えてドスランポスに向かって走り出した。

「……やっぱり、弓の扱いだけは本物ね……」

茂みの向こうでヴァンの戦いを見ていたレラは、感嘆のため息をついていた。

彼が放った『閃光矢』は、通常ハンターが扱う『閃光玉』と違い、殺傷能力もある。リオレイアなどの飛竜には『閃光玉』の方がいいかもしれないが、今のように複数の敵を相手取る時など、使いどころを上手く考えれば、時には『閃光玉』よりは使えるだろう。

それに、弓の扱いも上手い。正確で、且つ弓にしては強力な攻撃力を秘めている。人間よりも強固と言われる竜人族の筋力を受け継いでいるからこそ、できる芸当なのだろう。

「……なんか、ずるいなあ……」

今度のため息は、不満のため息だ。レラは様々な潜在能力を秘めたヴァンが、羨ましくて妬ましかったのだ。

我ながら呆れてしまう。以前フラディオだってレラの『力』を認めてくれているというのに。一体、自分は何が不満なのだろうか。

(どうしてかな。ヒューゴには別にそう思わないのに、ヴァンだと悔しくなるなんて……)

自分一人では收拾の付かない想いに、レラは戸惑いを覚える。そもそも、ヴァンは初めて会ったときから、初対面には見えなかったのだ。そう、初めてドンドルマで言い争っている彼を見たときから……。

「……？ 風……？」

そのとき、森の中に一陣の風が吹いた。ドルウイドの森に風が吹くことは珍しい。近くに大型のモンスターでもいるのだろうか。

「……あ……」

風の吹いてきた方向を見て、レラは言葉を失った。風の『主』とレラの目が合う。風の『主』は、レラを一瞥した後、ゆっくりと踵を返した。

「だめ……お願い、待って……！」

レラは風の『主』が去ろうとするのを見て、思わず弱弱しい言葉を口にする。そして、無意識に風の『主』の後を追いつつ始めた。

「……あー、結構きつっ！」

数分後、ヴァンは大きく息をついてその場にしゃがみ込んだ。ヴァンの目の前には、既に死体と化したドスランポスが横たわっている。死体には、胸に開いた風穴のほかにも、幾つかの切り傷が刻まれている。

ヴァンが矢に塗ったのは、キラアジと呼ばれる、その名の通りよく切れるアジの鱗を粉状にしたものを少量の水で溶いた、つい最近発明されたばかりの、矢の近接攻撃力を上げる『接撃ビン』という薬品だ。

ドスランポスについた切り傷は、すべてこの接撃ビンで強化された矢によって傷つけられたものだ。

ヴァンは額の汗を拭くと、ドスランポスの尻尾を掴んで持ち上げた。こちらは自分が倒したことを示すために、亡骸をベースキャンブに持っていく必要があるのだ。

「おーい、レラ。戻ろう、ぜ……？」

ヴァンはレラを呼ぼうとして、その場に自分以外の『気』がないことに気づいた。おかしい。あの生真面目なレラが、いくらヴァンの試験官だからといって、兄から託された仕事を放ってどこかに行くわけがない。

しかし、いくら見回しても、銀髪も桜色の鎧も見当たらなかった。

「レラ？ レラ！ ……アイルーパンツー！」

三回ほど名前 最後のは完全に悪ふざけだが を呼んでみたが、返事は返ってこない。

ヴァンは首を傾げた。そこへ、ヴァンに向かって一陣の風が吹い

てくる。

「？ 珍しいな、風なんて……」

突然吹いた風にヴァンが眉を顰めると、更に強い風がその場に巻き起こった。続けて、前触れも無しに雨が降ってくる。草が、花が、樹が、この森、自然そのものが、まるでこれまでないほどに強大な『何か』の到来に打ち震えているようだ。

それは、ヴァンも例外ではなかった。ヴァンの中にある『生物としての本能』が、今この森にいる『何か』を強く警戒している。

「なんなんだよ、コレ……」

体中から、冷や汗が流れる。ただのモンスターではない。これは、適切とは言い難いが、そう、例えるならば……、

「『神』……！」

いつの間にか、息が荒くなっていた。自分が怯えているのが分かる。一体なんだというのだ。

「！ ？ ！」

そのとき、ヴァンの耳に聞き慣れた声が届いた。

「……レラ？」

雨が強すぎて、何と言っているかまでは聞き取れなかったが、それは確かにレラの声だった。何かを必死になって叫んでいるのが分かる。何を叫んでいるのだろうか。

「……こっち、か……」

ヴァンは、レラの声が聞こえた方に向かって歩く。そこへ向かって歩いたびに、雨と風が強くなる。だが、近づくほどにレラの声は段々と鮮明になっていった。

「お願い、教えて……！ 貴方が、貴方が私の……！」

一体、レラは『誰』と、否、『何』と話しているのだろうか。ヴァンは『それ』を知ることに対する恐怖の念を抱きながら、それでもゆっくりと歩を進める。

そして、それを目にした瞬間、ヴァンは言葉を失った。

「……………！」

そこにいたのは、『嵐』そのものだった。

風の鎧を身に纏ったその表皮は、まるで美しく丁寧に磨かれた鋼のよう。遅しい四肢は、そこら辺に生えている樹など、簡単に砕いてしまうだろう。背中から生えた大きな翼は、何よりも速く風を斬り、他の追隨など許さないに違いない。

『鋼竜』 クシャルダオラ

ヴァンの言葉に間違いはなかった。

まさに『神』と呼ぶべき存在、古竜の一つが、ヴァンの目の前にいた。

(……………こいつ……本当に生き物なのか……………?)

それは、自分と同じ生き物だと思うにはあまりにも神々しかった。ドスランポスなどまだ可愛げがある。あの『陸の女王』と呼ばれるリオレイアですら、その姿の前では塵に等しい。そう思わせるに相應しい、美しく、そして気高い姿だった。

「……そうだ、レラ！」

ヴァンはそこでようやく我に返った。いくら『桜火竜』を一人で討伐できるレラでも、この古竜に敵うとは思えない。ヴァンは急いでレラを探した。

レラは、クシャルダオラのすぐ目の前に立っていた。武器を構えてすらいない。ただ、クシャルダオラの前で棒立ちになっている。それを見て、ヴァンは大きく舌打ちをした。

「あの、バカ！」

ドスランポスの亡骸を投げ捨て、ヴァンはレラの元へと走る。しかし、次の瞬間、クシャルダオラは突然踵を返した。そのまま、何事もなかったかのように翼を広げ、空へと飛び立つ。そのとき、レラの叫びが森に響いた。

「待つて！ お願い、行かないで！」

「……え？」

レラの最後の言葉を聞いて、ヴァンは思わずその場に立ち止まった。レラはクシャルダオラしか見えていないのだろう。ヴァンなど目もくれずに、クシャルダオラに向かって最後に言った言葉を再び叫ぶ。

しかし、クシャルダオラは振り返らなかった。そのまま、大空へ

と向かって飛び去っていく。レラはその場にしゃがみ込んでしまった。両手で顔を覆い、小さく嗚咽を堪えているのが聞こえる。

「どういう、意味だよ……」

ヴァンは自分の耳を疑っていた。確かにあの強風だ。聞き間違えることもあるだろう。しかし、確かにそれが聞き間違いでなかったとしたら……。

ヴァンの脳裏に、先程のレラの言葉が蘇る。

お願い、行かないで！ 『お母さん』！

あれは一体、どういう意味なのだろうか。

第十五話 試される二人と森に舞う嵐（後書き）

書きたいこと書いたら、アクションシーンがめっきり減った旅がらすです。2009年書初め小説がこんなので大丈夫か？

訓練編がようやく終わる！ と思ったら、重大なことに気づきました。

『この小説、主人公とヒロインの絡み少ない！？』

今更でした。なので、今回は絡みますよ。ってか、喧嘩ばかりの二人ですね。なんつー険悪な絡みシーンだよ……（汗）

そして、訓練編が終わると思ったら、ヒロインに変なイベントが発生しました。まあ、コレが書きたくてヴァンのアクションを減らしたんですけど（何最後の部分については、まあ、これからまた徐々に小出しにしていきます）。

キャラのそれぞれに謎つつーか、裏の多い『たまじゆけ』ですが、これからもよろしく願います。

予定では、次回で訓練編終了する……？（訊くな）

第十六話 酒宴と深まる謎

ミミルの町の中心部。かつて、町の大半を失ったある『事件』を忘れない為に造られた石碑。その石碑の前に、ハンターズギルド・ミミル出張所はある。

ギルドの中は、厳かな空気に包まれていた。

そこには二十人ほどの人々が集まっていたが、誰一人として口を開かずに、受付も兼ねているカウンターの上を見つめている。

全員の視線の先にいるのは、顎に白く長い髭を蓄えた小柄な竜人の老人。このギルドのギルドマスターだ。マスターの目の前には、二人の青年が立っている。

マスターは口に加えた煙管を吸うと、ゆっくりと息を吐いた。吐息と共に漏れ出た紫煙の向こうから、二人をじっと見つめ、それから小さく頷く。

「ヴァン・ドラゲニル」

「はい！」

マスターと呼ばれ、青年の内の人。ヴァンが、一步前に進み出る。その表情はいつもの気楽そうなものとは違い、緊張で少し強張っていた。

マスターはヴァンに小さく微笑みかけると、今度はもう一人の青年の名を読み上げる。

「ヒューゴ・レペンス」

「はい！」

続けて、もう一人の青年。ヒューゴが前に進み出た。こちらは

完全に固まっている。

そんな彼を見て、後ろで二人を見守っていたフラディオが、小さく肩を震わせた。

マスターは、進み出た二人を見やると、カウンターの上に立ち上がり、横に置いていた杖でカウンターを二回叩いた。

「両名を只今この時を以て、ハンター養成所ミミル支部、主任教官『赤王』フラディオ・グランエストの推薦により、Fクラスハンターと任命する。他の命を狩ることの重さとその責任を忘れることなかれ。世界の調和の為、その力を振るわれたし」

「はい！」

二人はほとんど同時に返事をし、胸の前に右の拳を添え、マスターに恭しく礼をした。

マスターは、カウンターの向こう側にいるルーシイに視線を送る。ルーシイは頷くと、二枚のカードをマスターに渡した。マスターは、それらをヴァンたちに差し出す。

「これが、主たちがハンターたる証、ギルドカードじゃ。常に携帯し、無くさぬようにの」

「はい！」

「ありがとうございます！」

二人は顔を上げ、笑顔でそれを受け取った。鞣したケルビの皮に細かく砕いたマカライト鉱石を混ぜたカードは、見る角度によって美しい輝きを放っている。

ギルドカードをヴァンたちに手渡すと、ギルドマスターは皺だらけの顔を優しく綻ばせ、辺りを見渡した。ルーシイがその手に酒の入ったグラスを持たせる。

「皆の衆。お待たせした。たった今生まれた二人の若きハンターの門出を祝い、酒を酌み交わそうぞ！」

マスターがグラスを高々と持ち上げると、ギルドにいた全員が、歓声を上げながら自分のグラスを高々と上に上げた。それから、先ほどまでの敵かな空気とは打って変わって、賑やかで騒がしい空気が、ギルド内に流れる。

ヴァンはそんな空気の中、自分の手の中にあるギルドカードを見つめた。モノクロの写真に写った自分の顔。その横に書かれたハンター登録番号と自分の名前。

遂にヴァンは、ハンターになったのだ。

「なんか、まだ実感沸かないね」

隣で、ヒューゴが苦笑いをしながら呟いた。ヒューゴもヴァンと同じように、自分のギルドカードを手の中で弄んでいる。

ついさっきのことなのに、まるで夢のように思えた。ヴァンも、小さく頷くと後頭部をバリバリと搔いた。

「ああ。今、『夢だったらどうしよう』って思ってる」

「あら、なら確かめてあげるわ。ほら」

「いで！ あだだだだだだっ！」

いつの間にかいたのか、突然レラがヴァンの両頬を思い切り引っ張り始めた。不意討ちに対応できなかったヴァンは、されるがままに頬を引っ張られている。

「主役の二人が湿気た顔してどうすんのよ。これは現実なんだから、しっかり楽しみなさい！」

レラはそう言っつて、ヴァンとヒューゴの手を取ると、二人が少しだけ頬を赤く染めるのも気にせず、フラディオとゴードン、それにピリカたちが囲んでいるテーブルへと向かった。

テーブルには既に、ポポ肉と彩り野菜のテリリーヌを始めとしたつまみや、普段は滅多に飲めない高級なお酒が所狭しと並んでいる。

「お、来たな主役共」

そう言っつて一番に顔を上げたのは、フラディオだ。その右手にあるグラスに注がれているのは、滅多に手に入らない黄金魚のヒレ酒。フラディオはアプトノスの肉と激辛ニンジン、それに五香セロリの入った生春巻きを美味しそうに口に頬張ると、近くにあった二つの空のグラスに手近にあった酒を注いで、ヴァンたちに差し出す。

「飲みな。今日はお祭りだからな」

「あ、どうも」

「ありがとうございます」

ヴァンは恐る恐るフラディオからグラスを受け取ると、その中身を覗き込んだ。澄んだ液体から、アルコール特有のツンとした匂いが鼻を刺激する。

「でも、本当に良かったわねえ。ハンターになれて」

サシミウオのカルパッチョに舌鼓を打ちながら、ノンノがのんびりと微笑む。その横で、ノンノの肩に腕を回したアレンが、シモフリトマトとマイルドハーブのブルスケッタを頬張りながら頷いた。

「だなんだな。一ヶ月前にアニキに怒られてた奴らが、もうハンター

「なったんだもんな」

「それだけ実力『だけ』は高いということですから……ってアレン！
お姉さまの肩に腕を回してんじゃねえですわ！」

丁寧なのか乱暴なのか分からない口調でアレンを叩くのは、ピリカだ。既に酒が回っているらしく、その顔はほんのりと赤い。

それを見て、アレンは楽しそうに笑う。

「なんだよピリカ。お前もやってほしいのか？」

「な！？ 貴方馬鹿！？ 馬鹿ですわね！ わたくしの肩は、貴方
ごときが腕を回して良いものではありませんわ！」

「まあまあ。そう照れるなって」

「照れてなどいませんわ！」

「おぶっ！」

ピリカの右アッパーがアレンの顎へ綺麗に決まり、アレンは顎を
押さえて悶絶する。アレンの隣でノンノが、ピリカの隣でゴードン
がそれを見て吹き出した。

ピリカはフンとそっぽを向くと、兜ガニとヤングポテトに幻獣チ
ーズをかけたグラタンを食べ始める。いつもなら丁寧食べるもの
を、完全に酔っているらしく豪快に頬張っていた。

ヴァンとヒューゴはそれを見て、苦笑いをしながらフラディオの
隣に腰を下ろす。

すると、ヴァンたちとピリカの目が合い、ピリカがムスツとした
表情で二人を睨んだ。

「貴方たち、お酒はどうなさったのですか？」

「へ？」

「フラディオ様に注いでもらっておきながら、その酒を飲まれない
とはどういうことかと訊いているんですのー！」

ピリカの怒りの矛先が、ヴァンとヒューゴに変わった。ピリカは近くにあった酒瓶を逆手で一本ずつ掴むと、ゆらりと立ち上がって二人に近づく。

ちなみに、ピリカが持っているのはアルコール度数九十パーセントを誇る超最高級品『大黒正宗』という酒だ。

「ちょ、待てよオイ……」

「び、ピリカさん、落ち着きましょう。話せば分かりますから、きつと……ね？」

身の危険を感じたヴァンとヒューゴは、後ろにずり下がる。しかし、それもすぐに掛けていた長椅子と壁に逃げ道を塞がれた。

今度は同時に立ち上がって逃げようとしたが、両脇からヒューゴはフライオに肩をがっしりと掴まれ、ヴァンはレラに左足を思い切り踏みつけられ、その場から動けなくなる。

そんな問答を繰り返しているうちに、ピリカが二人の目の前にやって来ていた。その目は既にトロンとしていて、口元に不気味な笑いを浮かべている。ピリカは逆手に持っていた酒瓶を上振り上げた。

「お二人とも、今度はわたくしがお酌をしてあげますわ！」

次の瞬間、ヴァンとヒューゴの口に、アルコール度数九十パーセントの化物酒モンスターがビンごと突っ込まれた。

それから、数十分後。

「教授は僕のことなんかどうせ眼中にないんです〜！」

『大黒正宗』をらっぱ飲みし、完全に酩酊したヒューゴが、アルコール度数五十パーセントの『菊一文字』を片手に、涙をぼろぼろと溢しながらテーブルに突っ伏している。

そんなヒューゴを、フラディオとゴードンが優しく介抱していた。だがしかし、その顔には、労りとは随分とかけ離れた、楽しそうな表情を浮かべている。

フラディオはヒューゴのグラスに酒を注ぐと、その肩を数回叩いた。

「で、ヒューゴは一体グレンジャー教授に何をしたんだい？」

フラディオが差し出したグラスの中身をヒューゴは一気に空けると、大きなため息をついた。

「僕は、僕は教授をですな……」

それからヒューゴは、普段の落ち着き払った彼からは想像ができない昔の暴露話を話し始めた。

一方、同じく度数九十パーセントの化物をらっぱ飲みしたヴァンはとていっしょ、

「へえ〜。ヴァンって、意外とイケるクチなのね」

「んー、そうなのか？　ってか、酒って結構美味いんだな」

ザルを通り越して、ワクであった。

ヴァンは、自分たちに酒を無理やり飲ませておきながら、自分はさっさと夢の中に落ちてしまった。ピリカをノンノとアレンに預け、カウンターでレラと飲んでいた。

ギルドの中はとても騒がしいのにも関わらず、二人の周りはとても静かな空気に包まれている。

カウンターの向こうから、ルーシイがヴァンにライムを添えた黄緑色の酒を、レラにはカシスを浮かべた赤紫色の酒を出した。

「お口直しのカクテルでもいかが？ 若きハンターさんたち」

「ん、サンキュー」

「ありがとう。ルーシイさん」

ヴァンとレラが、ルーシイからグラスを受け取ると、ルーシイは楽しそうにウインクをした。

「どういたしまして。でもヴァン。アンタ、私の目の前でレラに手を出してみなさい。ピコちゃん秘伝のフライパンを、その頭にお見舞いしてやるわよ」

「誰も手え出さねえよ。こんな女」

ヴァンが悪態をついた瞬間、ルーシイの鉄拳がヴァンの頭に命中し、ヴァンは痛みに悶絶する。一方、レラは頬をぶくつと膨らませた。

「やだ失礼ね。これでもドンドルマではそこそこにモテたのよ」
「なぬ！ 私の可愛いレラが『そこそこにしか』モテなかったなんて……！ そいつらの目、節穴だらけだったんじゃないの！」

「ルーシイさん、そこに突っ込むのね……」

怒りに震えるルーシイにレラが苦笑いを浮かべると、キッチンの向こうから、もう一人の受付嬢がルーシイの名前を呼ぶのが聞こえた。ルーシイは受付嬢に返事を返すと、レラににこやかな表情で手を振り、キッチンの向こうへと消えていく。ルーシイが見えなくなると、ヴァンは小さく息を吐き、騒がしいギルドをゆっくりと見回した。

「なーんか、みんな結構楽しそうだな」

「……アンタ、自分が主役なのに、楽しくないの？」

ヴァンの言葉に目を丸くするレラを見て、ヴァンは苦笑いを浮かべた。

「楽しいさ。祭とかお祝い事とか、結構好きだし。でも、オレはなんか、『取り残されてる』って感じがするんだよね」

「取り残されてる？」

「うん。なんつーか、オレはその内側に入れなくて、いつも外側からそれを覗き見てる感じ」

そう。ヴァンはこういう空間が嫌いではないし、楽しいとも感じる。だが、決してその空間に馴染むことができないのだ。レラの隣に来たのも、唯一、レラの隣だけがギルドの喧騒からかけ離れて『静か』に感じたからなのである。

まあ、レラの隣に来たのは、それだけが理由ではないのだが。

『お母さん』

あのととき、レラはクシャルダオラをそう呼んでいた。自分たちと

は種そのものが違うモンスターを、『母』と呼んでいた。
一体、どういう意味なのだろう。

「……なあ、レラ。昼間のことだけど」
「ヴァン」

昼間のことを話そうとしたヴァンを、レラの言葉が遮った。レラは困ったような笑みを浮かべると、ヴァンと自分のグラスを手に席を立つ。

「ちょっと付き合って」
「へ？」
「いいから、ちょっと散歩するわよ」
「お、おい！」

戸惑うヴァンを尻目に、レラは外に向かって歩き始めた。ギルドの中はまだ宴会の真っ最中で、誰もレラが外に出ていくのを見ていない。

ヴァンは小さくため息をついて後頭部をバリバリと搔くと、レラの後を追った。

酒場の外へと出ていく二人を、騒ぐ人々の中でゴードンだけが見つめていた。フラディオは完全に酩酊してしまったヒューゴの介抱に追われ、二人とゴードンの視線には気づいていない。

ゴードンは、幻と名高い黄金芋の焼酎の入ったグラスを傾けながら、自分にしか聞こえないくらいの声で小さく呟いた。

「運命、か……」

一方、ヴァンとレラは町外れにある川に来ていた。二人の近くでアプトノスの親子が草を食んでいたが、立ち去る気配はない。

レラはヴァンにカクテルを渡すと、小高く造られた芝生の土手に腰を下ろし、夜空を見上げた。

「きれい。こういつのを見ると、心が洗われるような感覚にならない？」

「なんで散歩なんてするんだ？」

レラの言葉に答えず、ヴァンはレラに訊ねた。さすがにヴァンもそこまで鈍くはない。レラとはまだ数カ月の付き合いだが、ヴァンはレラの微妙な変化に気づいていた。

そう。まるで何かに怯えているようなレラの表情に。

レラはしばらく黙っていたが、ヴァンがそれ以上何も言わないことを察すると、小さくため息をついた。

「昼間のこと、ギルドには報告しないで」

「……は？」

「『風翔龍』のこと。この町ではある意味禁忌タブーだから」

「禁忌？ でも、古龍なんだぞ。天災級の化け物だ！」

ヴァンがそう言うと、レラはヴァンを振り返り、自虐的な笑みを浮かべた。

「じゃあ、その天災級の化け物を母と呼ぶ私も、化け物なのかしら

ね？」

「!？」

レラの言葉に、ヴァンは思わず詰まってしまった。途端に風が吹き、レラの銀髪が月に照らされて美しく輝く。

それは、幻想的でこの世のものとは思えない美しさを秘めていた。レラは自虐的な笑みを浮かべたまま、小さく呟く。

「……は、私と……たのに……」

「え？」

レラの呟きはとても小さく、ヴァンは全てを聞き取ることができなかった。

ヴァンが首を傾げると、レラは自虐的な笑みを消し、先ほどとは打って変わって邪気の全く感じられない笑みを浮かべる。

「何でもない！ アンタになんか、絶対教えてあげない！」

そう言って、レラは楽しそうに大きな声をあげて笑い始めた。

ヴァンには分からなかった。今日、自分の知らないレラを見過ぎた。自虐的な笑みを浮かべたり、それでもそのすぐ後に楽しそうに笑ったり……。

一体、どれが本当の彼女なのか。それとも、今まで見てきたすべてが道化でしかないのか。ヴァンには皆目見当もつかないのだ。

「ヴァン」

不意に、レラがヴァンの名前を呼ぶ。ヴァンがその顔を見ると、レラはもう自虐的な笑みでもなく、無駄に楽しそうな笑みでもない、いつも通りの表情に戻っていた。

「……アンタ、故郷に戻るの？」

「へ？」

「もう一人前のハンターになったんだし、武具職人としての修行も、向こうでするのがいいんじゃないの？」

それを聞いて、ヴァンは苦笑いを浮かべながら首を横に振った。

「いや。あそこにはもう、帰らない。行くことはあっても、帰らな

い

「………」

「オレはあの村に帰る気は更々無い。それに修行なら、ばあちゃん
とどこでもできるからな」

ヴァンはそう言って笑うと、手に持っていたカクテルを半分ほど
一気に流し込んだ。

「……そう」

少しして、レラが小さく呟くように言った。それからコクリと頷
くと、自分の半分ほど残っていたカクテルを一気に飲み干した。

「……戻りましょ。そろそろ、誰かが私たちがいないことに気づく
かもしれないし」

「ん、そだな」

レラの言葉にヴァンが頷くと、レラはヴァンの前を歩き出した。
ヴァンも、ゆっくりとその後に続く。

結局レラは、ヴァンに何も語ってはくれなかった。『風翔竜』と
レラのこと、そして、今日見せた表情が何を示すのかも。

二人が去った後、川原に一陣の風が吹いた。

第十六話 酒宴と深まる謎（後書き）

どもです。一週間ぶりに更新しました旅がらすです。

訓練編、これにて終了です！

……ここまで長かったなあ。本当に長かった。予定では去年のうちに終わってたはずなのになあ……。

ここまで話進めておきながらイヤンクックすら狩れない主人公、たぶん他にはいないだろうなあ（苦笑）

とまあ、多少感慨深くなるものがある今日この頃です。

今回は最後の締めというか、ヴァンの物語における大事な一つの区切りであったため、今までで一番悩まされました。

本当はこれもちょっと不安要素がいっぱいです（何
ヒロイン若干壊れてますしね）。当初の予定ではもっとマトモなはずだったのに……。

何か不自然なところがあったら、ビシバシ指摘してください。

旅がらすは辛口コメント大歓迎です（笑）

いよいよ次回からは、ヴァンとヒューゴの本格的なハンター生活が始まります。

訓練所を出てそれぞれに一人暮らしを始めた二人。

武具職人としての修行や『秘境探し』として勉強などを再開しつつも、ハンターとして生計を立て始める。

そんな二人の元に、様々な依頼と懐かしき人々が次々とやって来る。レラやアレン、それにノンノやピリカたちなどと共に切磋琢磨しあう日々の中で、二人は何を学び、何を得ていくのか。

ようやくモンハンらしく(?)なってきた『たまじゅけ』を、これ

からもよろしくお願いいたします m ((m

行間 三

初夏の爽やかな朝日が、部屋に優しく射し込む。窓側に寝返りを打ったフラディオは、窓から射し込んできた朝日に、ゆっくりと目を覚ます。

「ん……」

フラディオは二、三度瞬きをすると、身を起こしてゆっくりと伸びをした。

今朝は、ここ数年でも五本の指に入るくらい、目覚めの良い朝である。

「あいつら、起きてるかな……」

フラディオは誰に言うでもなく呟くと、窓を開けた。フラディオの部屋のすぐ前は川が流れていて、そこではいつものように、白い毛並みのアイルー　ファーが洗濯物を洗っていた。

ファーは窓を開ける音に気づき、洗濯を止めて後ろを振り向く。

「ウニヤ。おはようございますニヤ、坊っちゃん」

「ああ。おはよう、ファー」

フラディオに可愛らしい笑顔を向けるファーに笑顔で返した後、辺りを見回した。ここ最近、毎朝のようにファーの隣でモンスタアの素材を洗う、ミカン色の髪にツナギを着た少年と、黒髪の青年の姿が、どこにも見当たらない。

フラディオの視線を不思議に思ったのか、ファーが小さく首を傾げた。

「坊っちゃん。どうかいたしましたかニヤ？」

「……いや、ヴァンとヒューゴの姿が見当たらないと思ってな……」

フラディオが答えると、ファーは黒目がちの丸い瞳を更に丸くし、それから小さく吹き出した。

「坊っちゃん。お二人は先週に引越されたではありませんかニヤ。坊っちゃんまは最近そればかり申されておりますニヤ」

「あ……」

ファーに言われ、フラディオは思い出す。そう、あの二人はもうここにはいないのだ。

町、もしくは村つきハンターになると、その町や村の自治体は、ハンターに無料で家を提供してくれる。

ハンターは家賃などを考えずに済むし、町や村も、近辺で強力なモンスターが現れても、彼らが討伐してくれるので、安心して暮らせるという、どちらにとっても美味しいシステムなのだ。

ヴァンとヒューゴもそれを選択したため、ここから少し離れたハンター用の平屋に移ったのである。

「……度忘れしてたよ」

「二ヶ月足らずとはいえ、お二方がいた時は、とても賑やかでしたニヤ。坊っちゃんも、とても楽しそうで……。ピコちゃんが、『トオイ様がいた頃を思い出す』と言っていましたニヤ」

「そっか……」

ファーの言葉に、フラディオは顔を綻ばせ、それから朝日を見上げた。優しい光が、ミミルの町を包み込む。

「……俺も、久しぶりに狩りに行くかな」

「遠出の支度なら、お手伝いしますニヤ」

「ああ、頼むよ」

巢立っていった二人の弟子のこれからを案じながら、フラディオは昇っていく太陽を見つめていた。

行間 三（後書き）

久々の連日投稿。フラディオ兄さん書きやすくて好きです。な、旅がらすです！

ハンター編入ってないじゃん。という、以前と似たような状況ですが、これは『行間』なので、まあ、その……大目に見てください〇
— —

ハンター編に行く前の、そして本当に最後の行間。訓練編のエピローグであり、ハンター編のプロローグでもあります。

フラディオ兄さん、しばらく出番なくなるかもな。勝手に動いてくれるから、一番書きやすかったのに……（；；）
ちなみに、レラが一番書きづらいです。ゴードンさんやルーシーさんなどはちゃめちゃんな人々は、めっちゃめっちゃ書きやすいですけど（笑）

ヴァンは書きやすいと書きづらいが交互に出てきます。ヒューゴは意外と書きやすい。

最後に話が脱線しましたが、次回からは、ちゃんとハンター編が始まります。

第十七話 巨大猪と困った人(前書き)

一週間ぶりの更新。

ども、旅がらすです。

遂に、ハンター編がスタートします。

何故か調子にノって書いていたら、一万文字を超えました。
やーうそー。

なので、ちよいちよい読み進めるか、暇なときに一気に読みをオススメします(ー)

そして、今回と次回はちよつとしたコラボストーリーでもあります。
恐らく、この小説に行き着いた方々の大半が知っているであろう、
あの方のあのキャラが登場します。

第十七話 巨大猪と困った人

武器を作るとき、ドーラ村の職人たちが最も重んじているのは、『使用者の実力に合わせてものを作る』ことだ。同じ種類の武器でも、使用者の『現在、もしくは少し成長した後程度』の実力に合わせて物を作る者こそ、良い武器職人とされる。

しかし、ヴァンはその『暗黙の了解』を真つ向から切り捨てた。ヴァンの信念は、『使用者の成長を無理やりにも促す武器を作る』ことだ。

故に、彼は使用者の実力など全く計算に入れない。彼が武器に込める想いは唯一つ。

『俺を使い！』

イレエヌ・ホペット 通称『鍛冶バア』の武器工房で、ヴァンは検査用の小さな木槌で今しがた出来上がったばかりの武器を叩いていた。

骨を基盤にした、鉤状の形が特徴の『サイクロプスハンマー』の鉤部分を削り、先端を鉄鉱石で強化。それに、風化して元の生物を判別できない頭骨を被せ、さらに雪山に生息するブランゴという牙獣種の毛皮で覆う。すると、ハンマーはブランゴの素材によって、氷の属性を持つのだ。

そうして作られたハンマーの名は、『コーンヘッドハンマー』と

言う。

「ん。持ってみて、ヒューゴ」

ヴァンは表面の滑らかさや中の鉄鉱石の固さを確認すると、それを傍らにいたヒューゴに渡した。ヒューゴはハンマーをヴァンから受け取ると、両手で握り、軽く二、三回ほど振るう。

「……もう少し、柄が太いと持ちやすい、かな」
「じゃ、貸して」

ヒューゴからハンマーを受け取ると、ヴァンは柄の持ち手部分にケルビの皮を巻きつける。クモの糸で仮止めすると、もう一度ヒューゴにそれを渡す。ヒューゴが笑顔で頷くと、今度は皮の裏に接着剤として使われるセツチャククロアリの体液を塗り、柄に完全に皮を張り付けた。

「ほい。ヒューゴのハンマー、強化完了ー」
「ありがとう、ヴァンくん」

調整をし終えた『コーンヘッドハンマー』を受け取ったヒューゴは、それを軽く振る。ハンマーが振るわれる度に、冷気が放出され、部屋の空気が若干低くなる。

二、三回ほど振るうと、ヒューゴはそれを背中に納めた。
「どうだ？」

「何か、武器を背負ってるというか、背負わされてる感じがするよ」

感想を訊かれたヒューゴは、苦笑いを浮かべながら頬を掻いた。
すると、後ろでお茶を飲んでいたイレーヌが小さく笑う。

「相変わらず、ヴァンの武具は面白い性格をしとるねえ。ドーラの武具職人には見えないよ」

「ん〜、そう？ あ、でもオレあそこのやり方、あんまり好きじゃないしなあ。よくジンのジジイに言われたよ。『お前の作る武具は自分勝手極まりないわ！』ってさ」

ヴァンは笑いながら木槌を手のひらでクルクルと回す。
一方、ヒューゴはイレーヌの言葉に目を丸くしていた。

「……武具にも性格があるんですか？」

「そりゃああるよ。武具は作る職人によって、色々な性格が生まれる。ドーラの武具は、どちらかと言うと腰が低くて、『どうか、私をお使いください』と言う感じだねえ」

「オレの武具は、全く真逆で『俺を使い！』だけどな。腰が低い武具なんて絶対ゴメンだね。ちょっとじゃじゃ馬なくらいが、使いがいがあるもんさ」

イレーヌの言葉にヴァンが続けると、ヒューゴは納得したように両手を合わせた。

「それなら、何となく分かる気がします。このハンマー、使いこなすまでかなり時間がかかりそうですし。でも、『何くそ！ 絶対に使いこなしてやるからな！』って気持ちになれますね」

「お。ヒューゴ、結構イケるクチだな」

ヒューゴの言葉に、ヴァンは嬉しそうに微笑んだ。作った相手が喜ぶ武具を作れたことほど、職人にとって嬉しいことはない。

「お疲れ様ですニヤ、若君。お茶をどうぞニヤ」

そこへ、湯飲みが二つ乗ったトレイを手にした一匹のアイルーが、部屋の向こうから現れた。通常のアイルーよりも小柄な、赤虎模様のアイルーの名前はベンケイ。以前、二人が青怪鳥と遭遇した際に出逢った、流浪のアイルーだ。

「サンキュー、ベンケイ」

「ありがとう。ベンケイクン」

「いえいえ。若君の為に尽くすことこそ、我が喜びですニヤ。これくらい、当然のことですニヤ」

二人はベンケイに礼を言ってから湯飲みを受け取ると、中の緑茶に口をつけた。緑茶独特の渋みが、体をリラックスさせる。

ベンケイは現在、ヴァンの家で働くキッチンアイルーだ。

あれは二週間前の話。二人が養成所を卒業し、村つきのハンターに提供される平屋に移った日のことだ。

ヴァンが自身に与えられた平屋のドアを開けると、なんと玄関にベンケイが正座で座っていたのである。ベンケイは、ヴァンが入ってきた途端に、深々と頭を下げた。

「このベンケイ、己の腕を犠牲にしてまで拙僧の命をお救いください、ヴァン・ドラグニル氏にお仕えしたく、以前よりこの平屋でドラグニル氏がお越しになられる日を待っておりますニヤ。無断で家にいたご無礼をお許しいただき、よろしければこのベンケイを給仕アイルーとして雇ってはいただけませんかニヤ！」

そう言ったベンケイは、ただただ床に頭をこすりつけるくらいに下げて、ヴァンに懇願した。

さすがに対処に困ったヴァンは、フラディオに相談をし、給仕ア

イルーの斡旋を生業とするネコバアなる人物からの了解をいただき、ベンケイを雇うことにしたのだ。

実際、一人暮らしがはじめてのヴァンにとっても、家族ができるということ、願ったり叶ったりだったのである。

「……先生、まだ帰ってこないな」

緑茶を啜りながら、ヴァンは思い出したように呟いた。ヒューゴも、ああ。と小さく頷く。

「そう言えば、もう十日くらい経ってるね」

現在、二人の師匠であるフラディオは、ハンターとしての仕事で、十日ほど前からドンドルマの更に西にあるクルプティオス湿地帯に出かけている。

クルプティオスはドンドルマでは一般に『沼地』と呼ばれている場所で、地形にあまり大きな特徴はないが、夜になると、点在する沼から致死性の毒が噴き出すという危険極まりない場所だ。今回、フラディオはそこに現れた『霞籠』オオナズチを狩りに行ったのである。

その話を聞いたベンケイは、尊敬の眼差しで目をキラキラと輝かせた。

「ウニヤア。若君たちの師匠は、とても勇ましいですニヤ。身一つで古龍種に挑むニヤんて、中々できることはありませんのニヤ」「本当だねえ。僕らにはまだまだ遠い道のりだよ……」

ベンケイの言葉に、ヒューゴが賛同する。しかし、ヴァンは二人とは違うことを考えていた。

(古龍……か……)

その言葉で彼が思い出すのは、以前ドルウイドの森に現れた『風翔龍』のことだ。レラはそれを『母』と呼び、また、『この町の禁句』であると言っていた。

(一体、この町に何があったんだよ……)

ヴァンの中で、謎は深まるばかりだ。しかし、このことにばかり感けてはいられない。夢を叶えるためにしなければならぬことは、山のようにあるのだ。

ヴァンはお茶を飲み干し、一度だけ伸びをすると、今度は横に立て掛けていた弓を取る。以前まで使っていた『ハンターボウエ』を、ドスファンゴの大きな骨やドスギアノスの爪で強化した『ハンターボウエ』だ。見た目は以前とさほど変わってはいないが、その攻撃力は以前よりもだいぶ上がっている。それでもまだ改良の必要があるのだが。

ヴァンは強化し終えたばかりの『ハンターボウエ』の骨がはみ出ている部分を、鑢で丁寧に削っていく。

「あ、そういや、ヒューゴのハンマー、もう一つ強化し終わってるぜ」

「本当!？」

ヒューゴがその言葉に顔を輝かせる。ヴァンはコクリと頷くと、ベンケイを一瞥した。

ヴァンの視線に気づいたベンケイが、ビシッと敬礼をする。それから、近くにあった大きな包みをヒューゴに差し出す。

「ウニャ! ヒューゴ殿、こちらがその鉄鎚ですニャ!」

「ベンケイクン、どこにそんな力があるの……」

明らかに人間がようやく両手で持つそれを、ベンケイが軽々と持ち上げていることに冷や汗をかきつつも、ヒューゴはその包みを受け取る。包みの中から、薄茶に輝くハンマーがその姿を現す。

「『アイアンストライク』無属性でそこそこに威力のあるハンマーだよ。次の強化武器と素材リストも付けてあるから」

「ありがとう！ …… ねえ、本当にお金渡さなくていいの？」

新しい武器に喜びつつも、ヒューゴは少し不安そうにそう訊ねてきた。それに対し、ヴァンは笑顔を返す。

「いいんだよ。オレはまだ見習いだから、人様から金はもらえない。ヒューゴは素材以外はタダで武器手に入るし、オレも良い修行になるで、一石二鳥じゃんか」

そう。ヴァンはヒューゴから一切金を受け取っていないのだ。

元より、ヴァンは鍛冶職人ではあるが、見習いだ。その実力が同じ年代の職人よりも群を抜いているとは言え、まだ一人前とは認められていない。

鍛冶職人は、自分が師事する職人に認められて初めて一人前となる。ヴァンが師事する職人、ジン・ドラグニルは、まだヴァンを認めてはいない。ならば、ヴァンはまだ見習いであり、人様から金を貰って武器を作ることは許されないのである。

しかし、以前、武器を強化する際に説明したとは言え、ヒューゴはまだ納得がいかなかったらしい。小さく、でも……と呟く声が聞こえる。ヴァンは後頭部をバリバリと搔いた。

と、そこへ、

「ギニャアアアアアアアア！」

狩猟笛の高周波に負けず劣らずの、ものすごく馬鹿でかい叫び声
が、外から聞こえてきた。何事かとその場にいた全員が工房から売
り場に出ると、そこへナタリーが飛び込んできた。

「ナタリー？ どうしたんだよ、一体」

「ど、どど……どすどすどどどどど……」

「は？」

「どどどど？」

ヴァンが訊ねてみたが、ナタリーは呂律が回らないらしく、ただ
ガタガタと震えているだけだ。

ナタリー以外の全員が揃って首を傾げると、今度は水色のキャミ
ソールワンピースを着たレラが中に入ってくる。

「ナタリー。大丈夫だって言ってるじゃない」

「だ、旦那さん、正気かニヤ！？　ウチはアイツが苦手だってこと、
旦那さん知ってるはずニヤ！」

「知ってるわよ。でも、彼女はとっても大人しいから大丈夫よ。い
きなり突進とかはしてこないから」

「絶対ウソニヤー！　アイツら、正に猪突猛進をそのまんま体现し
てるヤツらニヤよ！　信じられないニヤー！」

レラが優しく諭すも、ナタリーは聞く耳すら持てないらしく、ガ
タガタと震えながら両手で抱えた頭をものすごい勢いで横に振る。
話についていけない一同は、一体なんなのかと再び首を傾げた。

「H A H A H A H A。キャットガール、そう怖がるな・Y O。

ポニーちゃんは俺が抜かりなく教育してあるから、襲われることは

ない・Z E。安心しろ・Y O」

そこへ、聞き慣れぬ野太い男の声が、外から聞こえてきた。その声を聞いて、ナタリーが今までで一番疑い深く眉に皺を寄せる。

「貴殿のその言い方で言われても、信用できないニヤ！」

「こら、ナタリー！」

外に向かって怒鳴りつけるナタリーを、レラが叱る。一体、外に何がいるのかと、ヴァンたちは外に出た。

「いつ！」

「うわ……！」

「ニヤニヤッ！」

外に出た次の瞬間、二人と一匹は「それ」を見て奇声を上げた。ただ一人、イレーヌだけが、おお。と冷静に小さく声を上げる。

三人と一匹の前には、通常はアプトノスや馬が引つ張る馬車に繋がれた、見上げるほどの大きさを持つ、巨大な茶色の塊がいた。その毛並みは良質で、顔に当たる部分の毛だけは白い。巨体に似合わない小さな瞳の下には、左右不揃いのこれまた巨大な牙が生えている。いかにも硬そうな蹄は、カツカと地面を掻いていた。

ドスファンゴが、そこにいた。

「……なに、これ？」

「サーカスの出し物……じゃないですよね？」

開いた口が塞がらないとでも言うように、ポカンとするヴァンと、冷や汗の出血大サービスとでも言わんばかりの量の汗を流すヒュー

ゴ。ベンケイに至っては、何も言えずにヴァンの左足にしがみついている。

しかし、ドスファンゴは二人と一匹を見ても、そこから一步も動かなかった。そこで感じる違和感。すると、ドスファンゴの上から、野太い笑い声が響いた。

「そのボウズたち、そうビビるな・ＹＯ。さっきも言ったが、ボニーちゃんは俺が抜かりなく教育してあるから、襲われることはない・ＺＥ。何なら、後でトツテオキのショーを見せてやろう・ＫＡ」

そう言っつて、御者台からドスファンゴ、もといボニーちゃんの頭を撫でるのは、オレンジ色のパンチパーマに褐色の肌。そしてそれに負けず劣らずの濃ゆい顔という、お笑いパンチ連撃の要素を兼ね備えた、四十代前後のオヤジであった。ゴードン以上のキャラの濃さに、ヴァンたちは目を合わせた瞬間に吹き出しかける。

と、そこへ、

「ボニーちゃん！」

「ブフォーー！」

暇なのか、頭をぶるぶると振るわせていたボニーちゃんの鼻っ面に、レラが飛びついてきた。ボニーちゃんも満更でもないらしく、飛びついてきたレラをブンブンと上下に振り、嬉しそうに嘶いている。

一通りボニーちゃんと愛で合った後、レラはパンチパーマの男を見上げた。

「バナナナさんも、お久しぶりです！」

「半年ぶりだ・ＮＡ。こっちに戻って来たの・ＫＡ？」

「ええ。ね、また家に泊まってくれるんですね？」

「そのつもりだ・Z E。あそこの演習場なら、ボニーちゃんも安心だから・NA」

「やったあ！」

「イヤニヤー！」

バナナと呼ばれた男の言葉に喜ぶレラのずっと後ろで、ナタリーの悲痛な叫び声が聞こえる。見ると、ナタリーは未だに加工屋から外に出ようとすらしていなかった。

と、そこで、突然バナナナの後ろにある客車を覆う幌が、バサバサとデコボコに動いた。続けて、グスン。と鼻を齧る音が聞こえてくる。

「うー。出れない出れない出れないー！ 何で？ これ出口ドコよー！」

聞こえてきたのは、女性の声だ。イラついている女性の声に比例して、幌のデコボコ動きが激しくなる。

その声を聞いた瞬間、一人だけ、妙な反応を示すものがいた。ヒューゴだ。ヒューゴは持っていた『アイアンストライク』から手を離し、それが落ちるのも気づかずにガタガタと震えながら、ゆっくりと後ずさる。

「ヒューゴ？」

「う、嘘だ……！」

「へ？」

「何が嘘なのよ、ヒューゴ」

ヒューゴは震えながら、小さく呟いた。突然変化したヒューゴに、ヴァンとレラは首を傾げる。ヒューゴはゆっくりと震えながら自分の頭を両手で抱えた。

「お、王都にいたんじゃないのかよ……」

「……ヒューゴ殿？」

尚も震えを止めないヒューゴに、ベンケイも不振がる。

すると、ぐずっていた声が、急に不気味な笑い声を上げ始めた。

「そつだ。この幌、アタシを出さないつもりなんだあ。なんだなんだそうなのかだとしたらお仕置きしなくちゃだねこりゃ超どぎついお仕置きが必要だよねうんうん」

一体どこで息継ぎをしているのか分からない勢いで、声は不気味に喋る。その場にいたバンナナ以外の全員が、頭の後ろにマンガのように大きな汗を一つ流した次の瞬間、ガシャンと何かが展開される音と、グイツと何かを引っ張る音が、幌の向こうから聞こえてくる。

それは、ヘビィボウガンを展開し、弾を装填する音によく似ていた。

「えへへへへへ。アタシを出さんかコンチク」

「出す出す出しますから徹甲榴弾を打つなあああああ！」

しかし、声の主が発砲を始める一瞬前に、それを阻止すべく動く影があった。ヒューゴだ。

ヒューゴは、それまで震えていた人間とは思えないスピードで客車の後ろに回ると、幌を捲って中に入っていた。そして、何やらドタバタと暴れる音が数秒した後、客車からヘビィボウガンを構える女性と、その女性の物らしき、大きなトランクを抱えて出てくる。

女性は、露出度の高い銀色の装備、『幻獣』キリンの中でも、特に良質な素材から作られる『キリン×シリーズ』と呼ばれる防具を

着ていた。その手に握られているのは、『黒狼鳥』の最上素材でできた『カホウ【凶】』だ。それを見る限り、女性がハンターとしてかなり上位に位置することが分かる。

その女性は、ヒューゴの腕の中でバタバタと暴れまくっていた。

「何よー！　せつかくの超印象に残る再会計画をぶち壊しにしゃがつてー！」

「今もかなり印象に残ってますから！　っていうか、学院はどうしたんですか！」

「んなもん、抜け出してきたに」

「アンタこれで何度目ですか！　頼むから止めてくださいよマグレガー教授に怒鳴られるのは僕なんだぞ！」

あーもう！　と、ヒューゴは女性とトランクを地面に降ろすと頭を抱えて唸り始める。一方、女性はそんなことなど目もくれずに、バナナと楽しく会話を始めた。

頭を抱えて唸るヒューゴに、ヴァンが恐る恐る近づく。

「なあ、あのおねーさんって、誰？」

「もうやだよマグレガー教授は怒ると本当に怖いんだまた僕の助手っぷりがなくてないとか怒られてでも僕は何も悪くないのにあの人の自由奔放っぷりに誰がついていけるっていうんだよ……」

ヴァンの言葉は、ヒューゴに届いていないようだ。辛そうに小さく呟くその言葉は、文法すらまともに成立していない。

すると、バナナとの会話を終えたらしく、女性がヴァンたちにクルリと向き直る。

「なんだ少年。今アタシの名前を訊いたわけ？」

「ん、そうだけど……」

女性の問いかけにヴァンが頷くと、女性は誇らしげに鼻をフフンと鳴らした。

「よおし、じゃあ、耳の穴キレイに大きく開いて聞きなさい！ アタシはシュレイド王国王立学術院、古生物学および考古学研究室の准教授にして、王立特別書士官『秘境探し』、そして、Aクラスハンターのロビン・グレンジャーよ！」

麒麟装備の女性　　ロビンは、そう言って誇らしげに胸を張った。

「ほほう。テロス密林に調査に行きたいのか」
「ええ。それでここに寄ったんです」

あれから一時間後、ヴァンとヒューゴ、それにロビンの三人は、ハンター養成所にやって来ていた。ピコが出したコーヒーとクツキーを摘みながら、ヘルムを脱いだロビンが頷く。燃えるような赤毛をカチューシャ編みで纏めた髪が、ロビンの動きに合わせて揺れる。ヘルムはというと、只今ヴァンが絶賛を浴びせながらキラキラとした目で見ているところだ。

聞けば、ロビンもこの養成所出身で、フラディオヤレラとも面識があるらしい。ヒューゴにドンドルマではなくここを勧めたのも、

それが理由だ。

「まあ、フラディオくんはともかく、レラちゃんはそのときまだ二歳くらいだったし、覚えてないっしょ」

ちなみに、そのレラはというと、

「M A T E」

「プギイイ！」

「おおおおおっ！」

「ボニーちゃん可愛いー！」

バナナナ&ボニーちゃんの、サーカスも超ビックリ度肝を抜くようなショーを大勢の人間と見ていた。いつの間にか、養成所の前は人でごった返しになっている。アレンにノンノ、そしてピリカの姿も見える。

ゴードンは窓の外に見えるショーに拍手を送ると、再びロビンに向き直った。

「……で、一人で調査に行くにはいろいろと不安だから、ヒューゴも連れて行きたいと」

「さっすが先生。分かってるう」

「ガツハツハ。お前さんのことならよく知つとるわ！ ……しかし、こやつらはワシではなく、フラディオの弟子。アイツは今クルプテイオスにいるから、許可を取ろうにも連絡がのぉ」

最初こそ豪快に笑っていたが、ゴードンは少し悩むように腕を組む。テロス密林は、ミミルから東に馬車で一日くらいの場所にある、ドンドルマのハンターから一般的に『密林』と呼ばれている場所で、凶暴なモンスターの溜まり場だ。それに最近、コンガの群れが増え

ているという情報もある。

「ヒューゴだけがダメなら、ヴァンくんも連れて行きますよ。二人で狙撃した後でヒューゴがハンマーで倒せば、リスクは少ないです」

「え！ オレ？」

突然名指しをされ、ロビンの頭防具を見させてもらっていたヴァンが、目を丸くする。一方ロビンは満面の笑みで頷いた。

「そ。ヒューゴの手紙で聞いたけど、すごく弓が上手いらしいじゃん。アタシは寧ろ来てほしいくらいだし」

「しかしのお……」

「僕は行きたいです。というか、行きます」

それでもはつきりと許可を出せず唸るゴードンにきっぱり言い放つたのは、ヒューゴだった。ゴードンが驚いた目でヒューゴに視線を移す。

ヒューゴの表情は、先程の鬱屈したものは打って変わって、真剣な表情に変わっていた。

「僕はハンターである以前に、書士官で『秘境探し』、そして、この人の弟子なんです。教授が研究の為に行くのなら、僕はそれに着いて行きたい」

ヒューゴの瞳に、迷いはなかった。ゴードンはそれを聞いて、少しでも表情を緩める。しかし、まだ決めかねているようだ。

それならば。とヴァンは立ち上がった。

「オレも行きます。ちょうど、新しく弓の素材を集めに行こうと思

ってましたし」

「ヴァンくん！」

「それに、ヒューゴに死なれたら実験台が無くなっちまうしな」

「え、そっち!？」

最後の方でニカツと意地悪く笑うヴァンに、ヒューゴが突っ込む。それを見て、ロビンがほくそ笑んだ。そして、そのままゴードンに向き直る。

「先生、お願いします！ 何かあったら、私が守りますから！」

「……しょうがないのお」

二人の孫弟子とロビンに言われ、ゴードンは遂に観念したようだ。小さくため息をつくと席を立ち、窓を開ける。

「愛の投げ KISS！」

「ブビィイッ！」

『おおおおおおおー!!!』

外では、まだバナナナ&ボニーちゃんのショーが続いていた。ちなみに、どんなものかというのは、ヴァンたちにはまったく想像がつかない。

ドスファンゴもとい、ボニーちゃんに投げキッスをされてもなあ

……。

「ボニーちゃんもう最高ー！」

しかし、レラにはなかなかウケが良いらしい。レラは手が腫れるのではないかと思うくらいに拍手をしている。

「レラ。ちょっと来い」

そんなレラを、ゴードンが手首をパタパタと振りながら呼び寄せる。

レラは最初はボニーちゃんに集中していたせいか、気づいていなかったが、隣にいたアレンに小突かれてゴードンに気づく。

「なあに、父さん」

なるべく観客の邪魔にならないように窓に近づきながら、レラは自分呼び寄せた父に訊ねる。ゴードンは小さく頷くと、手短に用件を告げた。

「明日、ロビンたちと一緒にテロス密林に行つてはくれんか？」

ロビンは銃撃士じゃから、前衛がヒューゴだけではなんか心配でのお
「えー！ 私、明日からレクメーア砂漠でキモを取りに行くのに！」

もちろん、レラの返答はノーだった。そりゃそうだ。レラだってハンター。暇ではない。

そこで、ゴードンはふむ。と腕を組む。

「ロビン、テロス密林へはどう行くんじゃ？」

「もち、バンナナっちのボニーちゃん特急で」

「行く！」

「む、決定じゃな」

あまりにも簡単にレラは食いついた。

うん。エビで鯛は釣れるのである。とにもかくにも、これで四人のメンバーが集まった。

パーティーが決まったことに安心したのか、ロビンはゆっくりと

伸びをした。

「ん、じゃあ私は旅の疲れでも癒しますか。先生、お風呂借りていいですか？」

「構わんよ」

「やрий」

ロビンはゴードンの返答に満面の笑みを浮かべると、部屋から出ていこうとする。

「教授」

そこへ、風呂に行こうとしていたロビンに、後ろからヒューゴが声をかけた。ロビンは、首だけを回して猫のような黒目がちな瞳をヒューゴに向ける。

ヒューゴは指を三本立てた右手をロビンに向けた。

「服を脱いでから風呂に入る。頭と体を洗ってから湯船につかる。湯船にタオルは入れない。……いいですね」

まるで、小さな子供が風呂にはじめて入るときに言うような台詞を、ヒューゴは言った。しかし、ロビンは特に気に障ったという表情は見せずに、逆に素直に頷く。

「了解りよーかい。何ならアンタも一緒に」

「入りません」

「…… 学院では」

「入りません」

「……」

「……」

端から見れば可笑しいとしか思えないやり取り。しかし、当の二人は結構真面目にしばらく睨み合い、先にロビンが頬を膨らませた。

「……フーンだ！ 意気地無し！ 枯れ草野郎！ ムツツリスケベ！」

「ちょ、最後はおかしいでしょうが！」

「いいもん。暫く会わない内に磨きのかかったアタシの魅惑的ボディを見れなかったこと、いつか絶対後悔するし！」

ロビンはプリプリと怒りながら、部屋を出ていく。しかし、ヒューゴが小さくため息をついて席についた途端、今度はファアの叫び声が家中に響いた。

「ニヤー！ ロビン様、ここで服を脱いじゃ駄目ですニヤー！」

「……あんのバカ教授があ！」

ファアの叫び声を聞いた次の瞬間には、ヒューゴが猛スピードで部屋を飛び出していった。

数秒後、再び二人の暴れる音と、

「ちょ、風呂に入る前に服脱げって言ったのアンタじゃんか！」

「ええ、確かに言いましたね！ だがしかしここで脱ぐ奴がいるかあ！ アンタには常識がないのか！？」

「ヒューゴ。学問に携わる者に、常識など必要ないのよ。囚われない思考を持つことこそ何より」

「ああ、じゃあ言い直すよ！ アンタに足りないのは人としてのモラルだあ！」

という、あまりに馬鹿馬鹿しい口喧嘩が、養成所に響き渡った。

第十七話 巨大猪と困った人（後書き）

えー、まず、一万文字超えたことは、本当にすみませんm（
ー）m

いや、だって二話にしたら密林行くまでに時間かかるし、フラディ
オ兄さん出るはずだったのに、あの人、でしゃばるから……！

一応、マジで書きたかったとこだけを絞った結果でもあります（汗）

はじめてのコラボは、七星河一休先生の『虹髪の英雄』より、バン
ナナ&ボニーちゃんでしたー。はい拍手ー。

すみません。ようやく書き上がったせいでテンションおかしいです。

バンナナ&ボニーちゃんは、旅がらすも大好きな、でも自分では書
けないキャラクターです。こういうキャラを思いつけない自分が若
干憎い……（苦笑）

そして、ヒューゴのもう一人の師匠も登場です。ロビン姉さんは、
『三十路前でスレンダー系のカッコいいけど軽くブツ飛んでる女の
人』
という設定の元、書いています。

『秘境探し』としてもハンターとしても優秀なのに、日常では欠陥
だらけの姉さん。ヒューゴは基本的に身の回りの世話要員でもあり
ます。

ちなみに、彼女がポカしたときも怒られるのはヒューゴです。酷い
ですねー（笑）

ハンター編の序章となる密林では、そんなヒューゴの恵まれなさ
と苦勞もピックアップしてお送りします。

では、また次回で。

第十八話 お弟子さんの厄日（前書き）

今回はそんなに間をおかずに更新できました。

ども、一人カラオケに行ったら空いていた部屋がパーティールームのみで、一人淋しく広い空間で三時間歌い続けた旅がらすです。

いや、からすは基本的にロックでも悲しげな曲とか、バラード系の沈む曲ばかり歌ってしまうので、友達と歌うにはいろいろ問題があるんですよ。だからと言って、明るい曲はあまり歌えないのですが

（オイ

閑話休題。

今回はコラボ第二弾です。さあ、ヴァンとヒューゴよ、酔いしれて来い！（何

第十八話 お弟子さんの厄日

何故、自分はこの人の隣にいるのだろうか。

それは、ヒューゴ・レペンスにとって、人生最大の謎であった。自分以外の学生は長くて三日、短ければ半日も持たずに研究室を後にしていた。特に、ここの二年の学生の入退場は激しかった。

そんな中、たった一人で五年も居続けたヒューゴは、かなり貴重な、いや、他に類を見ない学生なのだろう。一部の学生からは『今世紀最大のマゾヒスト』とまで呼ばれていた。

若干二十三歳の若さという、異例中の異例でシュレイド王国の最高教育機関、王立学術院の、更に最難関とされる古生物学および考古学の准教授に就任したロビン。

元々のハンターとして、更には書士官としての能力も高く、准教授に就任してからの五年間で、『秘境』を二つも探し当てた彼女を羨望しながらも、畏怖し、蔑み、その権威の失墜を狙う輩は少ない。

しかも、彼女には最大の欠点が存在した。

自己管理能力の欠落である。

ロビンには、日常生活において最も必要とされる、自己管理をすすめるための力が備わっていない。寝ることや用を足すことはともかく、食べようとすれば口に入る量よりも床に落とす量の方が多く、風呂に入ればどんなに浅かろうと確実に溺れる。まるで、若くして『稀代の天才』と称されるほどの能力を得た代償に『生きる力』を奪われたかのように。

要は、ヒューゴは彼女を見ていられないのであった。

それは、彼女の受け持つ授業を受講していたときから感じていた

こと。学院に来てすぐ、自分が如何に井の中の蛙であったかを知らされた頃。彼女の破天荒としか言い様のない授業をたった一人で受講している時間が、ヒューゴにとってある意味『息抜き』のようなものだった。

二人きりの授業で、自ずと彼女と会話をする機会が増え、彼女を知り、彼女を支えたいと自覚するようになりながらも、彼は長いこと悩むことになるのだ。

どうして、彼女はこんな自分を弟子に選んだのだろう。と……

ロビンがバナナナ&ボニーちゃんとミミルの町に突然来訪してきた次の日、

「ヒューゴヒューゴ。お腹空いたー」

「はいはい。じゃ、座ってください」

「うー」

ヒューゴが暮らす町つきハンター用の平屋で、Aクラスハンターであり、ヒューゴの『秘境探し』としての師匠でもあるロビン・グレンジャーが、ヒューゴに勧められた椅子にチョココンと座る。その燃えるような赤毛は、今朝ヒューゴによって綺麗なカチューシャ編みに結われていた。

あの風呂騒動の後、ロビンはヒューゴの家に泊まることになった。……と言うと、どこからか大人の階段が見えてきそうだが、二人の

間に全くそんなことはなく、ロビンはいつもヒューゴが使っているベッドで眠り、ヒューゴは居間で予備の枕と毛布を片手に雑魚寝だった。おかげで、今日は身体中がギシギシと痛む。

まあ、養成所で暴れられてゴードンやピコたちに迷惑をかけるよりは、百倍マシだが。

「お待たせしたニヤ。朝ごはんですニヤー」

二人が食卓に着くと、てってって。と自分よりも大きな皿を持ちながら、ブラウンの毛並みのアイルルがキッチンから駆けてくる。皿の上には、マスターベীগルに色々な野菜や肉類などをサンドしたサンドイッチが盛られていた。

サンドイッチを見た瞬間、ロビンの瞳がキラキラと輝く。

「美味しそう！ ソフィーちゃん、うちに欲しい！」

「欲しがらないください」

「ニヤ。まだまだあるから少し待っててくださいニヤ」

ロビンに手放して褒められたイルル ソフィーは、満更でもない笑みを浮かべながら、再びキッチンに戻っていく。今度は、少し大きめのポウルに砲丸レタスやシモフリトマト、ふたごキノコなどを盛ったサラダ、それにミカンやリンゴ、バナナなどを混ぜたドリンクが運ばれてきた。

小さなテーブルは、完全にソフィーの料理で埋めつくされる。ヒューゴはロビンに前掛け代わりに大きめのナプキンを掛けてやると、右手にフォークを持たせ、左手に取り分けたサラダを渡す。

「では、どうぞ」

「いったただっきまーす！」

ヒューゴに許可をもらったロビンは、まるで子供のように口いっぱいにはサラダを頬張った。

「んおおいしいー！」

「あ、また口の周り汚して。拭きますからちよつとストップ」
「んー」

サラダに舌鼓を打つロビンの口元は、一口目で既にドレッシングで汚れている。ヒューゴはまた新しいナプキンを取り出すと、ロビンの口元を丁寧に拭いた。不意に、ロビンの薄い桃色の唇を見て、ヒューゴの手が止まりそうになる。

(……つと、いけないいけない)

ロビンに気付かれないように小さく頭を振ると、ヒューゴはナプキンを綺麗に畳んでテーブルに置く。危なかった。もう少し見ていたらヤバかったかもしれない。

しかし、ロビンはそんな風に思っているヒューゴのことなど全く意に介していないらしく、再びサラダを頬張り続けていた。しかし、半分以上がフォークから零れ落ち、皿に戻っていつてしまっている。どうやればそうなるのか、ドレッシングも前掛け代わりのナプキンにこれでもか。と言うくらいに大量に付着していた。

それを見て、ヒューゴはハッと我に返る。ロビンとの食事中に、考え事は許されないのだ。

「あーあー、またそんなことして。相変わらずですね、教授は」

「うー。食べづらいー。ヒューゴ、食べさせてー！」

「……はいはい」

自分の師の余りにも情けない姿に苦笑いを浮かべつつ、ヒューゴはロビンからサラダを受け取り、キレアジのフライが挟まれたサンドイッチを手取る。

「はい。口開けてください」

「あーん」

「……アンタ、いくつですか」

年甲斐も無く、ヒューゴの手にあるサンドイッチを頬張るロビン。それでもヒューゴより八歳も年上と言うのだから、世界はそこそこに広いと言える。

実際、ロビンに持たせたら、サンドイッチは僅か数秒で中の具材を床に溢すだろう。はじめての食事で見えて以来、ヒューゴは右手でロビンに食べさせ、左手で自分の食事を行う術を身につけさせられた。

「うまうまい。ねね、もう一個食べたい」

「はいはい。えっと、さっきのは魚だったから……」

ヒューゴは小さく呟きながら、今度はアプトノスの肉を薄く炙ったものと一緒に、西国パセリとレアオニオンなどの野菜類を挟んだサンドイッチを選ぶ。ロビンの栄養管理も、ヒューゴの仕事なのだ。そこで、ヒューゴはふと思った。自分がいなかったこの数ヶ月の間、彼女はどうやって暮らしていたのだろうか。他の人間が、こうやって彼女の世話をしてきたのだろうか。

無意識のうちに、ヒューゴの手に力が入る。もし、その世話人が男だったら。と考える。そんなのは絶対に嫌だった。ロビンとこうする権限を、他の男に易々と渡すなど……。

「ヒューゴー。今日のことだけどいつ出……発……」

そこへ突然、ヴァンがノックもせず、ヒューゴの家に入ってきた。工房からの帰りなのか、ツナギ姿で頭にはタオルを巻いている。

ヴァンがノックをせずに入ることなど、日常茶飯事なので、ここでは特に問題はなかった。

問題があるのは、ヒューゴの方だった。

まず、この平屋は玄関と居間が合体しており、居間は食卓としての機能も果たしている。そして、そんな作りの場所であるため、ヴァンはまず最初にヒューゴとロビンの朝食風景を、嫌でも目にしてしまうのだ。

端から見れば、どうやってもアチチなバカツプルのような食べ方をしている二人を。

「……………」

「……………」

当たり前のように流れる沈黙。ヴァンは中途半端に開いた口の端をひくつかせ、ヒューゴはあまりの恥ずかしさに頬を一気に紅潮させた。

しかし、ヒューゴにとっての不運は、これだけに留まらなかった。

「あむっ」

「っ！ー！」

ヴァンが入ってきたことなど、気にも止めずに食事を続けていたロビンが、最後の一口をヒューゴの指ごと口に入れたのだ。

突然のことにヒューゴは指を抜こうとするが、食事中のロビンは『食べる』ことにしか興味を持たない。つまり、ヒューゴの指が口に入っていようと、気にせずに咀嚼をするのだ。ロビンが咀嚼をしようとする度に、ヒューゴの指に彼女の舌が触れ合う。

「っ！ き、教授！ ダメです、口を開けてください！」

気持ち悪いのかそうでないのかよくわからない感情を抱きつつ、あたふたと指を抜こうとしているヒューゴを見て、ヴァンはゆっくりと後ずさった。

「……あー、わりい。オレ、めっちゃめっちゃ邪魔したわ」

「え、ちよ、ヴァンくん行かないでよ！ 助けて！ ヴァンくん、ソフィー！」

「いやあ、オレだって空気くらい読めるし」

「ニヤ。旦那さんも意外と大胆ニヤ」

助けを求めようとしても、二人は決してヒューゴに手を差し伸べようとはしなかった。ヴァンに至っては、隣の自分の家で家事をしているベンケイを呼ぶ始末。

完全に、今の状況を楽しんでいた。

「二人とも、空気の読み方がおかしいでしょ！ あ、あーっ！ 教授もこれ以上は頼むから止めてくださいいーっ！」

数分後、ヴァンに呼ばれてやってきたベンケイが慌ててヒューゴからロビンを引き剥がすまで、騒動は続いた。

「じゃあ、全員準備は万全だ・NA？」

町の入り口で、御者台に乗り、手綱を手にしたバナナが、全員に最終確認をする。それに、ケルビの皮やカラ骨などを使った防具
『バトルシリーズ』を着たヴァンが、コクリと首を縦に振って答えた。

「いつでも良いぜ、バナナのおっちゃん」

「H A H A H A H A H A。お前は威勢がいい・N A。ところで、ランポスの坊主は大丈夫なの・K A？」

「ん、平気だろ。多分」

ヴァンはそう言うてから、後ろで蹲ったままの『ランポスシリーズ』を身に纏った青年 ヒューゴに、軽く視線を投げかける。ヒューゴからは返事はないが、別に問題はないだろう。うん、多分。
ヴァンに続いて、『リオハートシリーズ』に『飛竜刀【紅葉】』を背負ったレラも、バナナに微笑んだ。

「バナナさん、私もいつでもオツケーよ」

「アタシも。ほらあ、ヒューゴもシャキツとする！」

「……誰のせいだと思ってるんですか誰のお！」

お腹が膨れてご機嫌なのか、ヘビイボウガン『カホウ【凶】』を背負ったロビンがヒューゴの背中をバシバシとはたく。ヒューゴはあまりの理不尽さに嘆きつつも、何とか立ち上がった。

「そんじゃあ、気をつけて行けよ」

「お土産楽しみにしてるわあ」

「ナタリーちゃんのご事は任せてください。ワタクシたちがしっかりと預かりしますから」

見送りに来たアレンとノンノ、それにピリカが四人に微笑む。その顔は、どこか別の楽しみを含んだ笑みだった。そう、まるで面白い悪戯を思いついた子供のような、そんな笑みだ。

「お、おう」

「善処します」

どうして三人がそんな笑みを浮かべているのか分からず、ヴァンとヒューゴは苦笑いを浮かべながら客車に乗り込むために荷物を整える。一方、レラとロビンは意味が分かっているらしく、二人ともアレンたちと同じ笑みを浮かべていた。

ヴァンが客車に乗り込むとしたとき、ベンケイがヴァンに両手に抱えるくらいの大きさの包みを渡してきた。

「若君、少ニヤいですが、保存食の干し肉ですニヤ。皆さんでお分けくださいニヤ」

「サンキュー、ベンケイ。ありがたく頂くぜ」

「若君、御武運を」

ベンケイは恭しくお辞儀をすると、スツと後ろに下がる。全く持って、ヴァンにはもったいないくらいに出来たアイルーだ。

一方、ヒューゴはソフィーに小さく耳打ちをしていた。

「ソフィー。分かっていると思うけど……」

「ニヤ？」

「……今朝のことは、内密に頼むよ」

ヒューゴが懇願すると、ソフィーは小さくうな垂れた。

「……旦那さん、それに関して悲しいお知らせがありますのニヤ」

「へ？」

「もうナタリーちゃんに話しちゃったニヤ」

「……なんだとおお！」

ヒューゴはしまった。という表情で、アレンたちの足元にいるナタリーの方を見る。すると、ナタリーが身振り手振りを交えながら、何かを楽しそうにアレンたちに話しているのが見えた。

次の瞬間、アレンたちの呆れた顔が、ヒューゴに降り注がれる。

「あらあ、優男みたいな顔してるのに、意外とやるのねえ」

「朝っぱらから何してんだか……」

「ふ、不純ですわー！」

「誤解だああああ！」

ヒューゴの叫びが辺りに響き渡る。ボニーちゃんが不思議そうに小さく首を傾げたが、後の全員は楽しそうに笑っていた。

そこへ、ロビンがフラフラと後ろからヒューゴに近づき、その右肩に顎をチヨコンと乗せた。

「ヒューゴヒューゴ。早く乗ろー。ってか、おぶってー。アタシ一人じゃ乗れないしー」

「アンタ赤ん坊ですか！？　っていうか、くつつかないでくださいー！」

またもアレンたちから氷点下の視線を浴びるヒューゴが必死になつて引き剥がそうとすると、ロビンは頬をぶくつと膨らませた。

「なにおう。五年間もお風呂入ったり一緒のベッドで寝たりした仲間じゃなか。冷たいー」

「ええええ、アンタが一人で入りゃ溺れるわ、ベッドで眠りゃあ落

「つこちるわでいろいろ世話焼かされてましたねえ！」

既に半ギレ状態だった。今日は厄日だ。何故ここまで酷い仕打ちを受けなければならぬのだろうか。

「おい、そのバカップル。早くしねえと置いてくぞ」

「誰がバカップルだ！ ヴァンくん、後で君には話があるぞ！」

「とりあえず中に入ってよね、出発できないじゃない」

「レラさんはどっちの味方なんだー！」

「どっちでもないわ。でも、しいて言えば面白いからヴァンかしら？」

「ひどっ！ 皆ひどすぎる！ 僕が何をしたって言うんだよ！」

「とにかく入れー。ゴーゴー、ヒューゴ！」

「教授、元はといえばアンタのせいだろ！」

「ランポスの坊主。早くしろ・ＹＯ。ボニーちゃんが待ちくたびれてる・ＺＥ」

「ブフォーー！」

「うわ、マジで僕の味方いないんですね！ 予想はしてたけど本当にがっかりですよ！」

全員の言葉にキツチリ突っ込みを入れつつも、ヒューゴはロビンを首に引っ掛けたまま、客車に乗り込んだ。なんだかんだ言っただけ、面倒見の良い部分を捨てきれないのだ。

ヒューゴが乗り込んだのを見て、バナナナは手綱でボニーちゃんに合図を出し、ボニーちゃんが地面を二、三回ほど掻く。アレンたちが別れの合図に片手を上げた。

「じゃ、マジで気をつけてな、特に道中」

「道中？」

「それって一体どういう意味」

アレンの言葉にヴァンとヒューゴが首を傾げようとした瞬間、二人はアレンの言葉の意味と、彼らが始終楽しそうに笑っていた意味を知る。

ポニーちゃんが走り出したのだ。

もう、人間の耐えられる限界速度をブツチで無視したくらいの猛スピードで。

「ギャアアアアアアア！」

「おち、落ちるつつつつつつ！」

四人を乗せたポニーちゃん超特急は、すぐに見えなくなった。

町の入り口に、笑い転げる三人の少年少女と二匹のアイルー、それにアワアワとうるたえる赤虎のアイルーを置いて。

「し、死ぬかと思ったぞ、オイ……」

「厄日だ、今日は本当に厄日なんだ……」

テロス密林の東南に位置するジャンボ村のハンターズギルドで、ヴァンとヒューゴは完全にダウンしていた。無理もない。ポニーちゃんの引く馬車ならぬ猪車は、人間の限界地点を完全に無視した上にもものすごく跳ねるのだ。

まあ、普通ならこここまで丸一日かかるところを、半日足らずで到

達しているのだから、速いと言えば速いのだが。それでも、一度オアシスで休憩を挟まなかったら、二人は確実に痔になっていたに違いない。まだ若くていろいろ未経験の二人にとって、それはあまりにも酷である。

「二人とも、男のクセして情けないわね」

「ホントホントー。ほれ、バナナナっちが置いていったバナナでも食べて元気だしなー」

さすがにテロス密林までバナナナの手を借りるわけに行かず（そうなると帰りもバナナナに頼む必要があるため。運び屋の彼に、村でしばらく待つているとは言えない）、アプトノスの竜車の手続きをしていたレラとロビンが戻ってきた。レラははまだグロッキー状態の二人に呆れ、ロビンは楽しそうに笑いながら、ヒューゴの頭をバナナで突いている。

ちなみに、バナナナとボニーちゃんは、既に北の方へと爆走していった。なんでも、この辺りが元々のバナナナのホームグラウンドなんだそう。バナナナはお近づきの印にと言って、各々に一房ずつバナナをくれた。バナナナはもつとあげたがっていたのだが、荷物になるといち早く判断したヒューゴと何度も貰っている為に対処に慣れているレラが丁重にお断りしたのだ。

わざわざテロス密林まで一本道で行かずにこうして遠回りになるルートでここまで来てくれたバナナナとボニーちゃんには一応感謝をしている。しかし、もう二度と乗るものかと誓うヴァンとヒューゴであった。

「……なんで、アンタらそんなに平気な顔してんだよ」

「え？ ああ、私、あれ何度も乗ってるし。ナタリーはバナナナさんと最後にあつた後で知り合ったから知らないんだけど」

「元々はフラディオくん……っていうか、彼の親友のトオイくんが

バナナナっちと仲良しだったんだよねー。その繋がりで、ミミルにはよく行くって聞いてたし」

「バナナナさんが来るといつも町がバナナ祭りになるのよね。ギルドの酒場じゃバナナのフルコースが本気で考えられたこともあったし」

「……さいですか」

ヴァンは呆れ半分に頷くと、ゆっくりと起き上がり、自分のバナナから一本もいで食べ始めた。うん、美味い。

「そつえば、竜車は取れたんですか？」

まだ完全に復活しきれしていないヒューゴが、ロビンたちに尋ねる。すると、二人は少し難しい顔をした。

「ん、借りたには借りれましたよね、ロビンさん」

「うん。ただ、問題が一つあったり」

「問題？」

バナナを食べ終えたヴァンが、小さく首を傾げる。もう一本食べようかと思っただが、ロビンが一瞬だけものすごくもの欲しそうなお目でこちらを見てきたため、思わず手を引っ込める。

それを見て、ヒューゴがロビンを小さく睨んだ。

「教授、人のものを欲しがらないでください。後で食べさせてあげますから。話を続けて」

「……うー、分かったあ。……んとね、今、テロス密林には『桃毛獣』がいるんだってさ」

「……マジですか？ 教授」

「マジマジー。しかも、コンガもたーんといるってよ」

ロビンの言葉に口をポカンと開けるヒューゴ。同じくヴァンも、開いた口が塞がらなかった。

『桃毛獣』ババコンガ。

密林や沼地に主に生息するピンク色の牙獣種、コンガ。その親玉がババコンガである。イヤンクックに比べてスピードもあり、攻撃範囲が広いため、初心者ハンターが苦戦しやすい相手の一つでもある。

「え、じゃあ、調査するのはどうすんだ？」

さすがに、イヤンクックにすら挑んだことのないヴァンやヒューゴには荷が重い相手である。ここは一旦退いて、別のハンターに討伐してもらってから調査に行くのが得策だろう。

しかし、ロビンが二人に返したのは、満面の笑みだった。

「ん？ 何言ってるんのヴァンくん。やるに決まってるじゃん。ついでにババコンガも討伐しちゃうからー」

「はああ!？」

「ちょ、それどういうことですか!？」

予想外の答えに、ヴァンとヒューゴの疲労が一気に吹き飛ぶ。思わず椅子から立ち上がってロビンとレラを睨むと、レラが小さく肩を竦めた。

「今、ジャンボ村のハンターですぐにババコンガを討伐しに行けるハンターがいないのよ。私たちだって、あまり町を空けるわけにはいかないし、仕方ないじゃない」

「……僕、今本当に厄日なのかも……」

レラの言葉に、ヒューゴはうな垂れる。しかし、ヴァンは腕を組んでしばらく何かを考えるようにした後、小さく頷いた。

「面白そうじゃん。その話、オレは乗ったぜ」

「ええ！？ ヴァンくん、本気なの！？」

これまた予想外のヴァンの返答に目を丸くするヒューゴに、ヴァンはニカッと笑いかけた。

「本気本気。それに、新しい弓の素材にはババコンガの毛皮が必要だしな。オレからすれば棚ぼただぜ」

「いやいやいや。僕らまだイヤクックにすら挑んでないんだよ！いきなりババコンガはレベルが高いつて！」

「あら、いつ誰がアナたちだけで行行って言ったの？」

そこへ、二人の会話にレラが乱入してきた。

「私とロビンさんだっているわ。前衛のヒューゴは私が手助けするし、全面的なサポートはロビンさんがしてくれる」

「ふふふー。アタシだって弟子を死なせるつもりはないしー。まあ、あんまり助けてもアンタらの為にはならないから、必要最低限に抑えるけどー」

言って、レラが『飛竜刀【紅葉】』を、ロビンが『カホウ【凶】』に手を添える。確かに、この二人がいれば死ぬことはないだろう。それに、ヴァンはもう行く気満々だった。

ヒューゴに残された道は唯一つ。腹を括ることだった。

「……分かりました。行きましょう」

観念したヒューゴを見て、ロビンが「よっしゃあ！」と嬉しそうにその場でジャンプをする。

「よおし！ほんじゃ、ここで道具の調整をして、一時間後に出発するから。ババコンガ対策に消臭玉を各自必ず持つてくことね。あと、通常の罨だけじゃなく、肉系の罨もかなり効くから、持って行くと吉ー。閃光玉も効果があるよー」

ロビンの言葉に、三人は頷く。ヴァンとヒューゴだけでは頼りないが、ここにはレラとロビンがいる。ババコンガ退治もそこまで苦労することはないだろう。

だが、ヒューゴはこのとき何も気づいていなかった。

彼の厄日が、実はまだ序章を告げたにしか過ぎないことに……。

第十八話 お弟子さんの厄日（後書き）

元々は『お弟子さんは一流家政夫』だった今回の話。最初しかそれらしい表記がなかったので、こちらに変えました。

実際にポニーちゃん特急に乗ったらどうなるんでしょうね。きっと旅がらすは途中で振り落とされると思うんですよ（え

ロビン姉さんは書いてて楽しいですね。いや、あの暴走具合がたまらんです（何

未だに口調がきちんと定まらずに四苦八苦しておりますが^^；うまいことヒューゴも振り回されてますし。ヒューゴはおそらくこの作品で最も報われないキャラでしょう（酷いわぁ、私

まぁ、彼も満更ではない……のかな？
つてか、今回の表現、別に危なくないですよ？ 年齢制限かけられそうで若干びくびくしております。

そしてそして、密林編はからすが一番嫌いなモンスターが出てきます。ヤツのばつちい攻撃がからすは大嫌いです！ モラルがないですからね。

ヴァンたちは果たして糞まみれになってしまうのでしょうか！？
あー、つてか、ババコンガの動き若干忘れつつあるから、狩りに行かないとなぁ。しかも、ロビン姉さんがボウガン使いにも関わらず、旅がらすはヘビイ使えませんし（オイ

……まぁ、何とかなるでしょう！（コラ！

つてなわけで、また次回お会いしましょう！

（・・）ノシ

第十九話 お弟子さんの苦悩（前書き）

今回物語に登場するテロス密林の地図は、ゲームに出てくる密林の地図を右に90度回転させたものを想像してください>>

第十九話 お弟子さんの苦悩

テロス密林は、ジャンボ村から竜車で半日弱、大陸の東側にある沿岸部に位置した、かなり広い密林だ。水と太陽光に恵まれ、様々な生命に溢れている。

洞窟にはマカライト鋼の鉱脈があり、薬草やキノコ類も多く生育しているため、近隣で暮らすハンターたちから、武器や道具の材料を採取する場所としても重宝されている。

その日、ヴァンたちを乗せた竜車は昼過ぎにジャンボ村を出発し、夕方近くにギルドの指定する拠点^{ベースキャンプ}に着いた。

夜の狩りは、視界が制限されるため、昼間以上に危険だ。それにテロス密林は木々の楽園。昼間すら限定される視界は、更に狭められてしまう。そんな狩り場で初心者はその足手まといだというレラの意見で、その日はそのまま野営となった。

まあ、昼間のポニーちゃん超特急で体力を著しく消耗したヴァンとヒューゴの意見でもあったのだが。

「上手に焼けましたー」

打ち捨てられた小船を利用したテントの外で、ヴァンが今しがたこんがり焼きた上がった肉を高々と持ち上げた。肉から漂う美味しそうな匂いが、鼻と昼からバナナ以外口にしていない腹を刺激する。

「ヒューゴ！何か釣れたかー？」

こんがり肉を皿代わりの大きな葉に乗せ、近くの狩り場で取れたキノコを剥ぎ取り用のナイフで慣れた手つきで切りながら、ヴァンは小船に向かって呼びかけた。その傍らには、既にバケツいっぱい新鮮な魚が置いてある。すると、小船の縁から、ヒョッコツとヒュ

「ゴが顔を出した。」

「え、足りない？」

「いや、でも、明日の朝飯の分も釣ってくれよ」

「分かったー」

ヒューゴが顔を引つ込めると、ヴァンは肉焼きセットの支柱に鉄の棒を通し、そこに水とウマイ米で満たされた鍋を下げる。しばらくして、中の水が沸々と気泡を出し始めた頃合いに、ヴァンは出汁用に骨タコの粗を入れた。通常は捨てる部位に当たる粗だが、実は骨に近い部分ほど旨味成分が詰まっております、スープや鍋の出汁にするとかかなり美味なのである。

出汁を取り終えて粗を除くと、ヴァンはそこに刻んだキノコやジヤンゴウネギなどの野菜類、それにヒューゴが釣ったくの字エビなどの魚介類を入れる。はじけイワシは、鱗を取った後、少量の塩と一緒に骨ごと擦ってつみれにした。

材料を全て入れ終えたヴァンは、鍋にフタをする。これでしばらく待った後、レッドオイルを少々加えれば、ヴァン特製スペシャル雑炊密林風（今命名）の出来上がりだ。

実家の工房は男所帯で毎日の飯はお世辞にも美味しいとは言えず、いつの間にか料理に凝るようになったヴァンは、ベンケイを雇った今でも、時折こうして料理を作っている。

「んー、すつごおく美味しそうな匂いー！ 早く食べたいー！」

スライスしたレアオニオンと先ほど焼いて切り分けたこんがり肉を、マスターベールに挟んでいると、岩場の向こうから水浴びを終えたロビンとレラが戻ってきた。ロビンが元気に飛び出してくる一方で、体を休める意味もあったはずなのに、レラが肩で息をしていた。明らかに疲弊している。

「ありがとうございます、レラさん」

「ヒューゴ……よく、五年も、こんな、風に、お風呂に、入れた、わね……」

レラを見て苦笑いを浮かべながら礼を言うヒューゴに、レラはある意味尊敬と呆れの混ざった表情でヒューゴを見ながら、切れ切れに言葉を発する。相当デンジャラスな水浴びだったに違いない。

しかし、ロビンは全く意に介していないらしい。レラのことなど全く気にせず、呑気にてくてくとヴァンの横に歩み寄ってきた。

「ヴァンくんヴァンくん。アタシ、チョースゴイもの見たー！」

「んあ？ チョースゴイもの？」

まだ挟み途中のサンドイッチを頬張ろうとするロビンからベーグルを遠ざけながら、ヴァンは小さく首を傾げた。ロビンは首を縦にブンブンと振ると、ヴァンの耳に口を近づける。それから、とても小さな声で囁いた。

「レラちゃん、すっごいボンキュッボンだったー。特に胸はすごいよー」

「ぶっっ！」

ロビンの言葉に、一瞬だけ（一瞬だけだ）レラの体を想像してしまったヴァンは、思わず吹き出しながら顔を真っ赤に染めた。それを見て、ロビンは楽しそうに大きな声で笑う。

「ヴァンくん顔真っ赤ー。やっぱり男の子だねー。想像しちった？」

「ば、ばばばばばばっか！ あんなガサツ女の事なんか誰が！」

「照れるな照れるなー。健全な証拠だしー。ひよっとして、まだ経

験無かったり？」

「ナニ訊いてんですか、アンタは」

いつの間にいたのか、ロビンの後ろに立ったヒューゴの右手が、ロビンの頬をつまんだ。そのままぎゅうっと引っ張ると、ロビンは痛そうに顔を顰める。

「いひやいいひやい！ ひゅーほのばはー！」

「バカはどっちですか？ それで何人の学生泣かせたと思ってるんです？」

半ば呆れ顔でロビンの頬を引っ張りながら、ヒューゴは小さくため息をついた。それから、左手に持った魚の入ったバケツをヴァンに向けてクイツと持ち上げる。

「明日の朝の分。このくらいでいいかな？」

「あ、おお。そんなくらいで十分だと思う。浜辺に生簀作つといたから、そこに入れて」

ヒューゴの言葉に何とか平静を取り戻したヴァンが何度か頷くと、ヒューゴはにっこりと笑って右手をロビンの頬から腕に移動させた。そのまま、ヒョイツと彼女の体を持ち上げる。

「ん、分かった。……ほら、教授も手伝ってください」

「えー。お腹すいたー」

「ワガママ言わないで。ほーら」

「うー」

面白いおもちゃ（赤面したヴァン）を取られそうになったロビンは、不服そうに頬を膨らませたが、単純な力では敵わないらしく、

そのままズルズルとヒューゴに引き摺られていった。

ヴァンはロビンから解放されたことに胸を撫で下ろし、再び料理を再開させた。だが、それも突如背中を駆け抜けた悪寒によって、すぐに中断される。

「……で、ロビンさんは何をアンタに話してたわけ？」

「……………」

まるで、油の切れたブリキのおもちやのようにガチガチになった首を何とか後ろに回すと、背中にどす黒い殺気オラを漂わせたレラが、ヴァンのすぐ後ろで仁王立ちに立っていた。

先程まで疲弊しきっていたはずの顔に、妖艶な笑みを浮かばせながら、レラがヴァンの顎を人差し指でクイツと持ち上げる。

「ヴァン。正直に言えば、許してあげなくもないわよ？」

「お、おいおいおい。それはかなり理不尽だろ？ オレはただ訊いただけで向こうが勝手に話してきただけなんだぜ？」

あまりに理不尽な話に、ヴァンはガクガクと震えながらも異議を唱えた。だが、レラの怒りは治まらないようだ。ゆっくりとした動作で顎に添えていた指を離すと、それを拳に作り替えていく。

「なら今すぐにその記憶消去してくれるわ！」

次の瞬間、ヴァンのこめかみにレラの右ストレートが炸裂した。

「うー。美味しかったあ！ お腹いっぱいー」

胡坐をかいたヒューゴの足の間に座ったロビンが、大きく伸びをした。食後のお茶を飲んでいたレラが、少し不服そうにはあるが、首を縦に振ってそれに同意する。

「悔しいけど、美味しかった」

「一言余計だバーカ」

レラの言葉に悪態をつきながら、ヴァンは先ほど殴られた右のこめかみを押さえた。まだ防具を着けていたおかげでたんこぶはできていないが、それでもヒリヒリと痛む。銃撃士の防具は耐久性にあまり優れていないことくらい、考慮してほしいものだ。

「でもでも、男の子でこんなに料理が上手いってすごいよー。ヒューゴも見習うといいしー。そんで、アタシにご馳走作って」

「あなたが汚さずに食べれるのはサンドイッチくらいしか無いから、作りがないんですけどねー」

ヒューゴの頬をつつこうとするロビンの人差し指を手のひらでガードしながら、ヒューゴは小さくため息をついた。

「んなことより、明日からの計画を立てませんか？ 遺跡の調査が先か、ババコンガ討伐が先か。そのくらいは決めないと」

「ババコンガの討伐を先にした方がいいと思う。調査中に襲われたりしたら、堪ったもんじゃないもの」

ヒューゴの言葉に、早速レラが答える。ロビンは首を縦に振ると、

一旦立ち上がり、船の横にある青い支給品ボックスに歩み寄る。そこから一巻きの紙を取り出すと、再びヒューゴの足の間に腰かけ、それをヴァンとレラに見えるように広げた。どうやら、ここの地図のようだ。

ロビンは、地図の東にある浮き島のように海に浮かんでいる場所を指差した。

「アタシが今回調査したい遺跡があるのは、ココ。元は祭壇か塔の土台だったみたいで、中の壁には古代文字で書かれた石碑があるの。この拠点から行く場合、北側から回るように海岸線沿いに行けば、一時間もかからずに着ける」

でも、と言葉を区切り、ロビンは遺跡のある小島の手前の区域^{エリア}を指差した。

「ババコンガの発見報告が一番多いのはココ。コンガもたくさん集まってるってジャンボ村で聞いたし、まずはココでババコンガを迎え撃とう」

的確にヴァンたちに計画を話すロビンの口調は、先ほどと違って真剣そのものだった。Aクラスハンターの称号はやはり伊達ではない。

だが、そう思ったのも束の間、ロビンはくるくると地図を巻き直すと、それを持った手を空に向けて高々と上げた。

「はい、じゃあ今から、コンガでも分かる簡単ババコンガ攻略解説をはじめます。拍手ー」

ロビンは声高らかに言うと、地図を持ったままヒューゴの両手を取って無理矢理拍手をさせた。ヒューゴは慣れているのか、それに

対し、ただ大人しく従っている。

だが、ロビンのテンションをよく知らず、まったくついて行けないヴァンとレラは、その場で固まった。なんだこれは。という表情で、ロビンとヒューゴを見つめると、ロビンが頬を膨らませ、持っていた地図を地面にバシバシと打ち付ける。

「はくしゅ！ 拍手するのー！」

「うあ、はいいー！」

「お、お願いします！」

訳の分からない気迫に圧され、二人は軽く萎縮しながら拍手を返す。それで満足したのか、ロビンはすぐに満面の笑みを浮かべた。それは、欲しかったおもちゃをようやく手にして喜ぶ子供によく似ていた。

「まず、レラちゃんはババコンガを倒した経験は？」

「一度だけ。二度と戦いたくなかったんですけど……」

ロビンの質問に、レラは淡々とした口調で答える。嫌なことでも思い出しているのか、苦虫を噛み潰しているような顔をしていた。それに対し、ロビンは小さく頷いた。

「まあ、それなら問題ないねー。ババコンガを相手取る際、まず念頭に置くのは『正面から立ち向かわない』、『後ろに回るな』の二つ。確実に嫌な攻撃を喰らっちゃうからー」

「嫌な攻撃？」

ロビンの言葉をオウム返しにヴァンが返すと、ヒューゴがそれを口にするのも嫌だとも言いたげな表情で呟くように言った。

「放屁と糞投げだよ。あいつら、自分の排泄物まで攻撃に使うんだ」
「……マジで？」

ババコンガのあり得ない攻撃を聞いて、一気にヴァンの士気は右下がりに急降下した。さすがにそんなものは喰らいたくはない。

だが、ヴァンの意欲が下がるのを見て、ロビンはにこやかに笑っていた。

「大丈夫。亜種じゃなきゃ糞は一方方向にしか飛ばないし、銃撃士の攻撃範囲に屁は届かないからー。ヒューゴやレラちゃんが横から足を主に狙って、アタシらは遠くから頭や腕を狙う。長丁場の消耗戦だけど、安全且つ確実な方法だから、今回はそれがオススメー」

ヒューゴはハンマーだし、隙を見てめまい目的に頭を狙うのもアリだけどねー。と言いながら、ロビンは砂浜に鍋を提げていた棒でゴリラのような生き物を描いている。頭に角のように尖った毛を頂いた尾の長い猿。砂浜に書いているにも関わらず、それはかなり細かく、また綺麗に描かれていた。

「あと、ババコンガはニトロダケや毒テングダケなんかに含まれる劇物や毒素を胃の中で特別な酵素を用いて変性、ゲツプの要領で吐息レスに混ぜて放射するから、気をつけるべしー」

「酵素？」

「変性？」

ロビンの言葉に、ヴァンとレラは首を傾げた。突然ロビンの口から出た聞き慣れない言葉。ロビンが二人の反応にきよとした顔を返すと、代わりにヒューゴが口を開いた。

「酵素っていうのは、生体内で起こるあらゆる反応の反応速度を速

める所謂『触媒』のこと。変性は言葉の通り、性質を変えることだよ」

「あらゆる反応？」

ヒューゴの説明に、こちらもきよとんとした顔で返すヴァンに、ヒューゴが頷く。

「そ。例えば、ヴァンくんがさつき食べたこんがり肉。それを体内で分解し、栄養を吸収、要らない不要物を排泄するまで、そのすべてに酵素が関わってるって考えればオツケー」

ババコンガの場合は、自分の身を守る手段として、ニトロダケなどに含まれる劇物を自分の都合のいいように分解し、プレスとして吐くために酵素を使っているのだと、ヒューゴは付け足して説明をくれたが、ヴァンは結局話の半分も理解できなかった。

とりあえず、ババコンガはめんどくさい攻撃をするのだと、適当に解釈をしておく。

「あれ、でも変よね。劇物や毒素を無効化できるはずなのに、何で畏肉の麻痺毒が効果あるの？」

ヒューゴの説明を黙って聞いていたレラが、小さく首を傾げる。今度は、ロビンが答えた。

「それは、調合の段階で熱が加えられたりするせいで、毒素が変性しちゃうからー。酵素は簡単に言えば、カギと錠前の関係。人工的に変性された毒素の錠前は、ババコンガの酵素っていうカギとは一致しなくなっちゃうわけー」

「ふーん……」

まだ完全にすべてを理解したというわけではなさそうだったが、レラはコクリと頷いた。ロビンはそれに満面の笑みを返すと、程なくして大きな欠伸をする。

「んー、何かねむねむするー」

「昨日今日と、移動ばかりでしたしね。疲れが溜まったんですよ」
「うー」

眠そうに目を擦るロビンに、ヒューゴが優しく声をかける。それは、師匠というより、手のかかる小さな妹に話しかけているようだ。まあ、ロビンが実際の年齢よりもずっと幼く見えるというのもあるのだが。

やがてうつらうつらと舟を漕ぎ始めたロビンを見て、レラも顔を綻ばせる。

「……寝ましょう。なんか、ロビンさん見てたら私も眠くなっちゃった」

「だな。寝るか」

珍しくレラの提案に素直に賛成しながら、ヴァンも大きく伸びびをした。

その夜。

ヒューゴは腹の辺りに重みを感じ、目を覚ました。それが柔らか

腕だと分かれると、不意に心が和らぐのを感じる。顔を横に向けると、月明かりに柔らかく照らされながら、ロビンが自分の右腕を枕にして、小さく鼾をかいているのが見えた。

拠点に備えられたベッドは、四人で寝るには少し狭かった。

最初は男二人が雑魚寝で、女性陣にベッドが宛がわれたのだが、その話になった途端、急に覚醒しヒューゴと寝たいと主張したロビンと、その様子を見てレラがロビンと寝ることに不安（とそこから来るであろう疲労感）を感じたことにより、結局全員でベッドに入ることになったのだ。

まあ、もちろん女子と男子に一応は区切られているのだが。

「……………ヒューゴお……………」
「……………」

ヒューゴの腕の中で、ロビンが小さく寝言を呟いた。幸せそうな笑みを浮かべているから、きっと美味しいものを食べている夢でも見ているのだろう。

いとおいしい。

そう思い、無意識に空いた左手でロビンの髪を撫でる。絹のような触り心地を感じた瞬間、体の奥底が熱くなり、全身の毛が逆立った。徐に足の間に見線を通し、自己嫌悪に陥った。

（……………最っ低だな……………）

久しぶりに髪を撫でただけでこれだ。数ヶ月の時間は彼を落ち着かせたと思っていたのに、全く真逆だったのだと思い知った。

体を冷やさなければ。そう思い、ヒューゴはロビンに気づかれないように腕を抜いた。抜いた瞬間、ロビンの顔が悲しそうに歪み、罪悪感を駆り立てたが、今彼女の隣にいたら我慢できるか分からない。

「違う！」

「っ!?!」

突然、ヴァンが大声を出した。一気に身体中から熱が引く。しかし、

「その鉱石はあっちだ……。こっちはそっちの鉱石だったの……」

寢言のようだった。一気に肩の力が抜ける。なんつうタイミンで叫ぶのだ。ヒューゴは苦笑いを浮かべながら、そっとベッドを降りた。今ので熱は引いたが、平静まで取り戻せているかは分からなかった。

「あー……」

下のインナーだけ身につけたヒューゴは、海にぶかぶかと浮かんでいた。そうしていると、先ほどまでであった熱や焦りなどが入り交じった、どうしようもない感情が徐々に引いていく。

「うー……」

ようやく元に戻った頭に、ロビンの寝顔がフラッシュバックする。白く透き通る肌に、薄桃色の唇。睫毛は長く、目元に青い影を落としていた。

「何でなんだよ……」

ヒューゴの口から漏れたのは、苛立ちだった。どうして、ロビンは自分にあんなに無防備でいられるのだ。これなら、いっそのこと

無関心を装われた方が救われたかもしれない。

抱きしめたかったのに、引き裂いた。

包みたかったのに、切り刻んだ。

本当は優しくしたかったのに、抱いた感情は憎しみだった。

学院を出ていく少し前、ヒューゴはロビンを壊しかけた。いや、壊したのは彼女ではない。それまでヒューゴが必死に積み重ねてきた、彼女との五年間だ。たった一度、最初で最後の感情の爆発が、ヒューゴの五年間を簡単に壊した。

そうなる少し前に、ヒューゴはロビンからハンター修行に行かないか。と言われていた。最初はロビンを置いていくことに逡巡したが、その後すぐに渡りに舟の状況になった。あぁなってしまった以上、もう彼女の隣にすることができなかった。単純に言えば、自分は逃げたのである。

しかし、久しぶりに会ったロビンは、以前と全く変わっていないかった。全くだ。ヒューゴは最初、あときの自分の行動は自分の夢だったのかと疑ったくらいだ。それくらい、彼女は以前と同じように彼に接してきた。

「何考えてんだよ、一体さあ……」

ヒューゴは顔を両腕で覆った。塩辛い海水が目染みだが気にしない。

分からない。彼女が分からない。どうしてこんな自分に、あんなに無防備でいられるのか。どうして、あの屈託のない笑顔をこんなに汚い自分に向けてくるのか。分かりたいのに、同時に理解するのを恐れている自分がいた。

「ユージン……」

不意に、ヒューゴは一人のハンターを思い出した。

まだ、『二人』が『三人』だった頃。真つ赤な『空の王』の鎧を身に纏った、強くて優しい、彼女の兄。ヒューゴが男として最も尊敬していた、今は亡き人。

「僕は、どうすればいいんだ……」

海に体を預けながら、ヒューゴは自分にしか聞こえないくらいの声で、小さく呻いた。

第十九話 お弟子さんの苦悩（後書き）

お久しぶりです。不定期更新が目立ちまくりの旅がらすです（笑）
今回書いていて思ったこと。

『ヒューゴ……可哀想に』

自分で書いておきながら、何ほざいてんでしょね〜ハハハハハ。
今回はヒューゴの苦悩を描く上で全く作者が未経験な『恋愛』要素
を盛り込むのに四苦八苦しました。

完全にまだまだ少年のヴァンと違い、大人と少年の狭間にいるヒューゴの気持ちを描くために、持っている恋愛小説を貪るように片っ端から読み漁ったり、モンハンを始めるきっかけとなった先輩に助けを求めたりと……。

まだまだ作者自身こういった心情描写が苦手ですので、

『いや、この部分は普通はこう思うだろ』

と思う点がありましたら教えてください。

今回は遂にあのばつちいモンスターが登場します！

ヒューゴの命運やいかに！？

……あ、ちなみに『たまじゅけ』の主人公はヴァンです。ヒロインはレラです（何

第二十話 お弟子さんの不運（前書き）

新コーナー・旅がらすの《きつとこんなだ！ モンハン世界観予想！》

はい。ぶっちゃけどうでもいいコーナーが発足しました！。まあ、読んで字の如くって前書きです。

記念すべき（？）第一回のモンハン予想は、『強走薬』と、今回の狩猟対象であるババコンガ戦で最も必要な『消臭玉』についてです！

『消臭玉（落陽草含む）』

- ・シダ科植物で、胞子に消臭効果がある。
- ・石ころを砥石で丸く加工した後、ネンチャク草を巻きつけて作る『素材玉』に落陽草を巻けば、『消臭玉』の完成！
- ・使用法は、消臭玉に火を着けて目標物に投擲するだけ。熱によって胞子が弾け、消臭効果が発生するのだ！

『強走薬』

（注）『たまじゆけ』の世界に出てくる強走薬は、ゲームでいうところの『強走薬グレート』を指す。

- ・ゲリヨスの常識はずれなスタミナの根源である『狂走エキス』に、ハンターのスタミナ源である肉を一昼夜浸した後、日影干しにしたもの。
- ・固形物。ゲームのように液体ではない。
- ・効果は大体一時間。スタミナの持続力を高めてくれるのだ！

はい、たまにこんな感じで作者なりに考えた世界観設定を書いていこうかなー。と思案中です。

そんなノリで、第二十話スタートです！

第二十話 お弟子さんの不運

鬱蒼と茂る木々。その間から漏れ出る強烈な日差し。その下で、密林の中ではお世辞にも保護色とは言えない、鮮やかな桃色の体毛を持った獣が四体、キノコを頬張っていた。

それが、この密林や沼地を主な生息地とする『牙獣種』コンガだ。コンガは真つ赤なキノコを長い尻尾で器用に掴み、口に放り込んでいる。

コンガたちは知らない。彼らがランチを楽しんでいるその少し離れた場所から、凶悪な『銃口』が自分たちを狙っていることなど。

「ちゅ、どーん！」

変な掛け声と共に、コンガたちの後ろにある岩陰に隠れた『何か』から、小さな弾が飛び出す。弾は、何かと振り向いたコンガたちの内、一体の眉間を見事に貫通した。眉間に弾を受けたコンガは、そのままパタリと地に伏せた。突然起こった仲間の死に、コンガたちは警戒するように後ろへと跳び、岩陰から距離を置くこととする。しかし、

「だあぁっ！」

コンガたちの後ろにある茂みから、青い鎧を纏った青年が飛び出してきた。青年は持っていたハンマーを思いきり強く一体のコンガの頭に叩きつける。頭蓋骨に強い振動を受けたコンガは、軽い脳震盪を起こしたのか、フラフラとその場で体を揺らした。

「これでも喰らいなさい！」

続けて、近くの茂みから桜色の鎧を身に纏った少女が太刀を上段に構えながら飛び出してきた。太刀は真つ赤な光を発しながら、本来は筋肉で引き締まり、硬い鎧と化しているはずであるコンガの腹部を深く抉った。目眩を起こしていたコンガは、腹から大量の血を吹き出しながら絶命する。

たった数秒の内に仲間を二体失ったコンガたちは、目の前に現れた二人を敵と認識したらしい。太刀とハンマーを構えた二人に突撃を仕掛ける。

だが、

「お前らの敵は」

「こつちにもいるしー」

岩陰から再び声が聞こえたのとほぼ同時に、コンガに向かって弾と矢が飛び出した。それは後ろからそれぞれにコンガの頭を貫く。コンガたちは何が起こったのかも理解できないまま、ゆっくりと絶命した。

「ちょあーっ！ コンガ四体、討ち取つたりー！」

しばらくして、そう言いながら岩陰から飛び出すのは、ヘビイボウガン『カホウ【凶】』を担ぎ『キリン×シリーズ』を身に纏った女性　ロビンだ。右手でヘビイボウガンを担いだまま、ロビンは左手を天に向けて伸ばしながら右に体を傾けるようなポージングを取る。決めポーズのつもりなのだろうか。

「教授！ そんなところに立たないでください！ み、見えちゃいますから！」

一方、岩の上で決めポーズを決めているロビンに、ハンマーを担

いだ青年があたふたと声をかけながら駆け寄る。青い鱗が特徴の『ランポスシリーズ』を身に纏ったヒューゴだ。

ヒューゴは顔を少し紅くさせながら、上を見上げるのを躊躇って俯き加減にロビンに話しかける。そこへ、岩影の後ろから弓を背負った少年　ヴァンが現れ、ロビンを見上げて小さく呟いた。

「見えるも何も、『キリンシリーズ』は元からかなり際どい路線だと思っけどな……」

「だからって見ていいもんじゃ……って何見てんの君は！」

「……アホらし」

ギアアギアと騒ぎながらヴァンの目を両手で塞ぐヒューゴを見て、桜色の『リオハートシリーズ』を着たレラが小さくため息をつく。

テロス密林は、大陸の東側、沿岸部に位置したかなり広い密林だ。水と太陽光に恵まれ、様々な生命に溢れている。

洞窟にはマカライト鋼の鉱脈があり、薬草やキノコ類も多く生育しているため、近隣で暮らすハンターたちから、武器や道具の材料を採取する場所としても重宝されている。

「うげ。コイツらニトロダケ食ってたのか。ゲテモノ食いにも程があんだろ」

ヴァンもその例に漏れず、既に動かないコンガたちの近くでキノコを採取しようとし、落ちていた食いかけの赤いキノコを拾って顔を顰めた。

ニトロダケは、ハンターたちが爆薬を調合する材料として用いる、発火作用を秘めたキノコだ。ヴァンのような弓使いにとっても、攻撃力の底上げをする強撃ビンの材料として重宝されている。

はつきり言って、食べることを憚られる劇物だ。

「昨日言ったじゃん。ババコンガレベルになると、これを吐息ブレスに混ぜて吐いてくるから気をつけよーって」

そう言いながら、ロビンもキノコの近くに落ちているカラの実を拾う。彼女が扱うヘイボウガンは、こうしたカラの実やカラ骨を使った弾を発射する武器だ。先ほどコンガを貫いたのは、ハリマグロの針をカラの実に仕込んだ『Lv. 2貫通弾』だ。

銃撃士ガンナーは砥石を使う必要が無い反面、こうした弾や瓶の素材にかなりの金がかかる。こうやって自然にあるものを採取して、少しでもお金の浪費を避けようと言うわけなのだ。

「あ。そういえばさー、さっきの戦闘でレラちゃんの太刀が真っ赤に光ってたけど、あれってなあに？」

拾ったカラの実を持ってきていたナツプサックに詰め込みながら、ロビンはレラに訊ねた。そう言えば。と、ヴァンも先ほどの戦闘のことを思い出す。本来、それは下手な鎧よりも強固だと言われるコンガの筋肉を、レラはいとも簡単に抉ったのだ。しかも、まだ発展途上の『飛竜刀【紅葉】』でだ。

だが、レラの答えはかなりあっさりと返ってきた。

「ああ。あれは『霸気』を纏わせていたんです」

「『霸気』？ 練気じゃないのか？」

一般的に、大剣や太刀を使うハンターは武器に自身の『気』を練り合わせ、それを放出することで武器の斬れ味を上昇させる。大剣ならば上段からの溜め斬り。太刀は武器に蓄積させた『練気』を気刃斬りとして爆発させる。

「私のは、『気』の更に上にある『覇気』よ。単純に言えば気迫み
たいなもので、『気』と違って練り上げる必要が無くて、自分の中
にある力を最初から爆発的に上昇させることができるの。その分、
結構体力を使っちゃうから、使い所を考えないと燃費が悪いんだけ
どね」

レラ曰く、『覇気』を扱える人間は少なく、更に彼女の『覇気』
は太刀が最も伝導率が良いのだそうだ。そう言えば。と、ヴァンは
レラと初めて会った日に遭遇したりオレイアのことを思い出す。あ
のときも確か、最後の一撃のとき、レラの『黒刀【弑の型】』は黒
刀なのに真っ赤に発光していたことを思い出す。

ロビンはふむふむ。と頷きながら、レラの腕を取った。

「『覇気』かあ。血液の流れを瞬間的に速めて酸素の伝導率を高め
て発揮するのかなあ？ でも、それなら鼓動が速くなってるはずだ
し、第一武器が赤く発光するワケないもんなあ……。む。分かん
ないよ〜！」

ロビンの頭をもつてしても、レラの『覇気』のことは説明できな
いらしい。うがー。と頭を抱えながらゴロゴロとのたうち回ってい
る。ヒューゴは既に諦めているらしく、小さくため息をつきながら
ヴァンに話しかけた。

「……ババコンガの位置は？」
「まだ洞窟にいる。……ん、昨日ロビンさんが言ってた区域^{エリア}に入っ
たぜ」

ヒューゴの問いに、ヴァンは『千里眼』を発動させながら答える。
ヴァンの目は、ここから少し下った場所にある海岸で尻尾に掴んだ

キノコを頼張る巨大なコンガの『姿』を感じていた。

本当は、昨日の作戦の通り、ロビンの言っていたババコンガの発見報告が最も多い海岸でババコンガを待ちつけるつもりだったのだが、その区域は木々が生い茂っており、ヴァンが視界が悪いと主張したのだ。視界が悪いのは向こうも同じことではあるが、ババコンガの腕力は密林に生えている木なら、平手打ち一発で簡単にへし折ることができる。地の利は向こうにあるし、木々が倒されてこちらの足場が安定しなくなれば、そこは完全にババコンガの独壇場と化す。

こちらにはAクラスハンターのロビンと戦闘経験のあるレラがいるとは言え、残りの二人はババコンガを見たことすらない。そんなメンバーでその状況に立たされたくない。

その結果、ジャンボ村で集めた情報を元に、ババコンガの巡回コースを予測し、その一つであるこの区域で待ち伏せすることに変えたのだ。ここなら、視界を遮る木はほとんど生えていない。まあ、向こうからもこちらは完全に丸見えなのだが。

そこで、それまでのたうち回っていたロビンが、ピタッと動きを止める。

「そいえばさー。ヴァンくんの『千里眼』もナゾだよ〜。光の感度を司る桿体細胞かんたいが関わってるのか、色彩を司る錐体細胞が関わってるのか……。ん〜、でもそれだどうやって物体をすり抜けてモンスターモンスターの位置を探るのか説明できないし、だとしたら温度感知？ 後頭葉の一次視覚野のパターン認識もしくは情報処理能力が異常発達してるのか……。うががががー！ イヤだイヤだ分かんないのヤダー！」

「……………あれ、どこの国の言葉？」

「この国の言葉」

ヴァンからすれば全く意味不明な言葉を撒き散らしながら、ロビ

ンは今度は駄々っ子のように仰向けに寝転がったまま、四肢をジタバタと動かした。本当にこのメンバーの中で年長者なのか、疑ってしまう。

だが、このままここでのたうち回ってもらって困る。メンバーの中で唯一ロビンの御し方を知っているヒューゴが、ロビンを起こそうと彼女に近づいていく。

そのとき、突然空気が何重にも揺れた。まるで、すぐ近くで特大の花火か太鼓を連発しているような、連続的な轟音。

ヴァンはそれを聞いた瞬間、小さく舌打ちをした。ロビンに気を取られてそっちの方へと気を回していなかった自分を恥じる。『そいつ』は既に、ヴァンたちがいる区域に侵入していたのだ。

「散開しろ！ 来るぞ！」

『そいつ』の位置を確認したヴァンは、その場から大きくバックステップを取りながら、矢筒から矢を三本取り出す。ヴァンの『千里眼』は、四人の目の前にある崖の上からヴァンたちを見やる『気』を感知していた。

だが、ヴァンの初撃よりも速く、向こうの攻撃がこちらを襲った。

ベチャ。

「うわっ！」

『そいつ』の初撃を喰らったのは、ロビンを起こそうと彼女に近づいていたヒューゴだった。ヴァンの声に一瞬たじろいだその瞬間を狙われたのだ。

ヒューゴが背中から喰らい、今現在押しつぶされているのは、大きくて茶色い塊だった。初撃にしては随分とあっさりした、ぶつちやけて言えば『めっちゃめっちゃ低い威力』のそれに、ヒューゴは眉を

ひそめる。一方、ヒューゴを見る三人の顔に浮かんでいたのは、恐怖だった。あのロビンですら、急いでその場から後ずさっている。

次の瞬間、起き上がるうとして『それ』から漏れ出した『臭い』を感じ、ヒューゴは己の過ちを知った。

彼が受けたのは肉体への小さなダメージなどではない。

己の小さなプライドと、精神へのあまりにも大きすぎる傷だった。

「……………うつぶ……………」

「くっさー！」

あまりの酷さに言葉を失ったヒューゴの代わりに、ヴァンが言葉を代弁した。

ヒューゴが喰らったのは、ババコンガの糞だったのだ。周りに言いようのない悪臭が広がる。

「き、気持ち悪……………！」

「いやー！ こっち見て吐かないでー！」

激しい嘔吐感に襲われたヒューゴに向かって、レラが絶叫しながら薄青色の草を巻いた球に火をつけて投げつける。消臭効果を持つ落陽草を使った消臭玉だ。辺りに落陽草の消臭効果を持つ胞子がばら撒かれ、糞の悪臭は消え去るが、ヒューゴの心についた傷までは消えない。

「あ、ありがとうございます……………」

「いや！ 近づかないで！ こっち来ないでー！」

「……………」

「やー！ ヒューゴばっちいいー！ ばっちいいー！」

「くはっー！」

女子二人から思いきり強く拒絶され、ヒューゴは一気に撃沈した。そこへ、ヴァンが怒鳴るように突っ込みを入れる。

「いや、二人の気持ちはもの凄くよく分かるけど、今はそれどころじゃねえぞ！」

「ばつちい……教授がばつちいって……」

「ヒューゴも撃沈してんじゃねえ！ 傷は男の勲章だ！」

「……こんな勲章いらぬ……」

当たり前の返答が返ってきたが、本当に今はそれどころではない。あまりにコメディチックなゴングではあるが、戦いは確かに始まっているのだ。

ヒューゴに向かって糞を投げつけてきたババコンガは、轟音を響かせながらヴァンたちに向かって飛び降りてきた。

腹はまるでボールでも入っているかのように膨らんで、肥満体のように見えるが、それは全て無駄の無い筋肉の塊だ。あれに潰されでもすれば、圧死は確実である。腕も一人分の太さ。密林に生える木など、ババコンガにとっては小枝に等しい。

「ちよ、コイツ大きすぎない？」

「ひゃー。意外と大物が釣れちったなー」

目の前に現れたババコンガを見て状況を再確認したレラとロビンが、その大きさに驚愕の声を上げた。四人の前に現れたババコンガは、確かにでかい。メンバーの中で一番長身なヒューゴが、縦に二人並んでようやく等しい大きさはあった。

ババコンガは今一度、自分の敵である四人を見回すと、まるで今からが本番だとも言つように後ろ足で立ち上がり、お世辞にも上品などと口が裂けても言えないような音を出しながら、盛大に屁をこいて雄叫びを上げた。

「汚なっ！」

「ばっちいばっちい！ ……ま、とにかく作戦通りに行くよー」

ヴァンの悪態に便乗しながら、ロビンは背中に背負っていた『カホウ【凶】』を展開する。その言葉に、レラが頷きながら背中の中の『飛竜刀【紅葉】』を抜いた。

「了解！ ヒューゴ、絶つつ対に近寄らないでよー！」

「……分かりました善処しますよしますとも！」

もうやけくそだと言わんばかりの苛立ちを抱えながら、ヒューゴも『アイアンストライク』を構える。

レラが向かって左側を駆け抜け、ヒューゴはババコンガの意識を向けるように大きく右側を旋回するように駆ける。ババコンガの意識がヒューゴに向かっているのを見て、ヴァンは強撃ピンを弓に組み込んだ。

その隣で、ロビンが小さく切り分けた干し肉のようなものをポーチから取り出し、口に放り込んだ。ロビンはそれを二、三度咀嚼をして呑み込むと、今度は同じものをヴァンに差し出す。

「？ なんだ、それ？」

「ゲリヨスの狂走エキスに浸したお肉を干した、『強走薬』っていうの。めんどいから説明省くけど、それ食べれば一時間くらいはスタミナ切れとは無縁になれるよー。前の二人はもう食べてるはずだから、ヴァンくんも食べとくと良いー」

「ふーん」

『強走薬』をヴァンに手渡しながら、ロビンは『カホウ【凶】』にし、V・2徹甲榴弾を装填した。ヴァンは手渡された強走薬を少し

だけ訝しみながらも、それを口に放り込む。

ヴァンが強走薬を口に入れたことを確認したロビンは、『カホウ【凶】』の銃口をセラとヒューゴに攪乱されているババコンガに向けた。

「それじゃあ行くよー。ちゅ、どーん！」

ロビンの掛け声と同時に、高い威力を秘めた徹甲榴弾がババコンガの額に向かって飛び出す。

戦いが、始まった。

第二十話 お弟子さんの不運（後書き）

ども！ ロビン姉さんに難しいことを言っただけで、ほしくてちょっとという難しいことを調べた旅がらすです。

結局のところ、レラの『覇気』とヴァンの『千里眼』については、旅がらすも理解不能ツス。ってか、現代科学で解明できるわけがねえええ！

そして、ヒューゴがババコンガの餌食になりました。あれはゲームでやられてもかなりしんどいのに、実際にやられたらマジで最悪だろっなあ……。からすだって、あんなもん受けたくないです（笑）

ババコンガ戦、次回に続く！

第二十一話 お弟子さんの庇護（前書き）

えー、サブタイトルは一応（仮）です。
もしかしたら、変えるかもです。

……というか、誰かいいの考えてください（えええ

第二十一話 お弟子さんの庇護

あれはまだ、ヒューゴとヴァンがミミルの町に来て、間もない頃のこと。

ヒューゴは、自分の武器を何にするかでひたすら悩んでいた。フライオはゆっくり考えるといいと言っていたが、早く決めてその武器に慣れておくに越したことはない。自分は一度悩むとなかなか決められない、優柔不断な性格であることを知っていたヒューゴは、あまりこの悩みを長引かせたくはなかった。

(…………でも、やっぱ決められないんだよね)

ヒューゴはフライオから借りた二種類の武器を見て、小さくため息をついた。彼の目の前にあるのは、大剣とハンマーである。

開拓団で、現在ココット村に住んでいる両親の手伝いを幼いころからしてきたこともあり、体には自信があった。学院でも、勉強はどん底にいたが、肉体労働なら他の学生には負けない。……誇れる話ではないのだが。

今日、フライオから武器の説明を一通り聞いたヒューゴは、数ある武器の中でもこの二つに特に魅力を感じていた。超重量と攻撃力を誇る武器として、他にもガンランスがあったのだが、射撃の腕が悪いヒューゴに砲撃が扱えるとは思えなかったので止めたのだ。

「どっちも魅力的なんだけどなあ……………」

言いながら、ヒューゴは徐に大剣を手に取り、片手で一閃する。感触を確かめると、今度はハンマーを手に取り同じように片手で軽々と振るった。

本来、『両手』で扱う武器である二つを『片手』で振るうその脅

力は計り知れないものであるのだが、ハンターとしての知識が少ないヒューゴは、自分の器の大きさをまだ知らない。

いっそのこと両方使うことにしてしまおうかとも考えたが、それだと何だか結局どちらも極められないままの器用貧乏になってしまいうそで、ヒューゴは嫌だった。どうせやるなら、きちんと一つの道を極めたいと思う。

「……………あ」

ふと、ヒューゴは机に立てかけていた写真立てに目をやる。そこに映っているのは、まだ幼い部分が残っていた昔の自分と、相変わらずどこも変わっていない彼の師匠、ロビン。そして、その間で二人の肩に手を回しながら、とても楽しそうに笑う巨漢。

「……………ユージーン……………」

写真立てに手を添えながら、ヒューゴは巨漢の名を呟く。

それは、ロビンのたった一人だけの兄。実家で両親からも忌み嫌われ、勘当同然で学院に追い出された彼女に、唯一普通に接してきた唯一人の『家族』。ロビンにハンターとしての生き方を教え、『イックスロイヤ秘境探し』という生きがいを与えた人。

よお、ヒューゴ！ 遊びに来てやったぞ！

遊びに来たって、ここ、学院ですよ……………。それより、また狩りですか？ ユージーンさん。

つれねえヤツだな。オレのことは呼び捨てで呼べよ！ ……で、どうだ？ ロビンとは何か進展あったか？ もちろんコッチの方で。

な、あるわけ無いでしょ！ 何言ってるんですか！

……………お前、つまんねえヤツって言われねえ？

余計なお世話だ！

あ、にーにーだ！ やほー！

確かにあった幸せな日々。

ロビンに惹かれながらも、このまま彼とロビンの『三人』で時を過ごすのも悪くないなと思っていた。

しかし、それはヒューゴの過失によって、失われてしまった。

ヒュー……ゴ……。

嫌だ！ ダメだよ、ユージーン！ 死なないで！

頼む……。ロビンを……。頼むぞ……。ヒューゴ……。

最期まで最愛の妹の身を案じていた彼。彼の言葉を、ヒューゴは今でもはっきりと覚えている。そのときのロビンのあまりにも痛々しい表情も、はっきりとヒューゴの脳に焼き付けられていた。

(そういえば、確かユージーンが使っていたのって……)

写真立てに添えていた手を戻しながら、ヒューゴは壁に視線を戻す。そこには、先程までヒューゴが振っていた二振りの武器が立ってかけてあった。

ヒューゴが男として最も尊敬していた彼は、その巨漢に見合った、巨大な槌を振るっていたことを思い出す。

(……うん、決めた！)

ヒューゴは、二振りの武器のうち、ハンマーを再び手にした。

(固っ……！)

ハンマーをババコンガの足に振り下ろしながら、ヒューゴは心の中で小さく悪態をついた。

思っていた以上に、ババコンガの筋肉は強固なものだった。逆にハンマーを振り下ろした自分の腕が痺れる。

(なら、脊髄を……！)

恐らく、ドスランポスのように一発では折れないだろう。だが、十発は入れる前に叩き折ることができるはずだ。

「だあぁっ！」

ヒューゴはババコンガの背中側に移動すると、その脊髄に向けて『アイアンストライク』を振り上げる。

だが、背後に敵を察知したババコンガは、突然尻を突き出すように体を丸めた。その動きを見て、ヒューゴは先程の苦い記憶を思い出す。

「やばっ……！」

ヒューゴが急いでバックステップでババコンガと距離を取った瞬間、ババコンガの尻から茶色いガスが噴霧された。瞬間、離れたはずのヒューゴの鼻腔を形容しがたい『悪臭』が刺激する。

ババコンガの二大下品攻撃の一つ、放屁攻撃だ。

「くさっ！……っというか、痛っ！」

「いやー！ 下品下品下品ー！」

ババコンガを挟んで向かい側にいるレラの叫び声が、ヒューゴの耳に届く。うん。男のヒューゴでこれだけ嫌悪感を感じるのだ。女子には更に耐え難いものに違いない。

「背中がダメか……」

振り下ろした直後にあの放屁は喰らいたくない。見たところ、風圧もかなりある。ヒューゴは自分の体に多少の自身はあったが、あれに吹き飛ばされないように耐えられるかは分からなかった。

まあ、まず受けることを拒絶したいが。

(やっぱり狙うとしたら、関節か……)

ババコンガの鎧の正体は『筋肉』だ。収縮した筋肉は、鍛えようによつては岩石の如く強固な堅さを誇る。

通常のコンガで、成人男子以上の筋肉を誇るのだ。それより二回り以上はあるであろうババコンガの筋肉がどれほどの硬度を誇るのか、想像がつかない。

だが、どれだけ筋肉を鍛えたとしても、決して鍛えられない場所がある。それが、関節だ。

関節部分の筋肉や靭帯だけは、どう鍛えようともその太さを変えることは出来ない。関節部分まで太くなってしまつと、逆に動きが弊害されるからだ。更に、その動く方向、大きさはある程度決まつており、それを超える曲げ方があつた場合には障害を起こす。

足の関節を痛めさせれば、転倒を狙うことができるかもしれ

ない。

そう思ったヒューゴは、左足に狙いを定め、ハンマーを構えなおした。

その時、ババコンガの左手がヒューゴに向かって振り上げられた。長く伸びた鋭利な爪。例えランポスの鱗を使った鎧と言えど、無事で済むか分からない。

「くっ！」

（後ろに飛ぶか。いや、それだと追撃が……。前に逃げても放屁が来るし……）

考えるという、人間の最大の長所が逆に仇となった。判断に迷い立ち止まったヒューゴに対し、ババコンガの左手は迷うことなくヒューゴに向かって振り落とされる。

「止まんじゃねえ、ヒューゴ！」

そこへ、ヴァンの怒号が響き、続けてババコンガの左腕に三本の矢が刺さる。突然襲った痛みに、ババコンガの動きが一瞬だけ止まる。

ハツとして我に返ったヒューゴは、急いでバックステップで距離を取った。遅れて、ババコンガの左手がヒューゴがいた地面を抉った。

「ず、どーん！」

今度は、ロビンのヘビイボウガンからLv.2散弾が放たれる。散弾はババコンガの左手に命中し、鋭利な爪を砕く。

「ヒューゴ！ 考えながら止まるな！ アンタの悪い癖！」
「は、はい！」

珍しく滑舌の良いロビンの声が、ヒューゴの耳を叩く。そう言えば、一度狩りが始まると、ロビンは性格が変わるのだ。普段の彼女からは想像ができないくらい、動きも素早く、またヒューゴの助けなど必要のないくらいにしっかりとる。

「これでも喰らいなさい！」

ヒューゴの向かい側で、レラが太刀に『覇気』を纏わせながら、ババコンガの右膝を斬りつけた。柄に仕込まれた火竜の体液が刃沿いに空気中に発散され、小規模の爆発を起こす。

筋肉の繋ぎ目でもある関節を斬られたババコンガは、膝から血を吹き出しながら盛大に転び、先程のロビンのようにその場をのた打ち回った。まあ、可愛さで比べれば断然ロビンの圧勝だが。

「ヒューゴ、頭！」

「あ、はい！」

のた打ち回るババコンガを見て、そんなことを考えていたヒューゴは、ロビンの掛け声で意識を現実に戻す。既にレラはもう一方の足に向かって太刀を振るっていた。

いかんいかん。これではまたロビンに怒られてしまう。

「その角、キレイにカットしてやるぜ！」

ヴァンがババコンガの背後から、続けざまに三本の矢をババコンガの頭頂部に向けて放つ。矢は一本残らずババコンガの頭頂部にある極彩色の毛を貫き、リーダーの象徴たるババコンガの角を破壊す

る。

「これで、どうだ！」

続けて、ヒューゴがババコンガの頭に向けて渾身の一撃を振り下ろす。頭頂部の毛を失い、更にそこへ脳への強い振動を喰らったババコンガは、めまいを起こしたのかフラフラと頭を揺らしていた。ヒューゴは続けてババコンガの鼻っ面にもう一撃打ち込むと、後ろに一步下がった。そこで武器を構えるのは、ロビンだ。

「まだまだクラクラしてもらおうよー。ちゅ、どーん！」

ロビンの掛け声と共に、『カホウ【凶】』から弾が放たれる。弾はスコンと軽い音を立てながら、ババコンガの頭に着弾した。

数秒後、撃ち込まれたLv.2 徹甲榴弾が時限で爆発し、ババコンガの顔面が炎に包まれる。ババコンガは立て続けに喰らった衝撃にバランスを完全に崩し、その場でのた打ち回った。そこへ、更にヴァンが矢を連射する。

「やれるか!？」

「あんまり油断しないで！ そろそろ怒り状態に入るかもしれない！」

ヴァンの言葉に、レラが叫ぶように答えた。

どの生物でもそうであるが、自身の命に危険が迫ったとき、生物は力を制御することを止める。脳の制御装置リミッターが外された状態の生物は、本来ならばあり得ないはずの力を発揮することができるのだ。

モンスターももちろん例外ではなく、特に大型のものになると、その状態に陥ったときに体に顕著な変化を表すようになる。炎を吐くモンスターなら、口から可燃性物質が漏れ出てきたり、ババコン

ガヤティガレックスなど、白兵戦を主とするモンスターならば、血流が速くなることで体の一部や全体が真っ赤に変色する。

ハンターたちは、一般にその興奮状態を『怒り状態』と呼んでいた。自身の命を守るためならばどんな手段も厭わなくなるその状態になったら、何が何でも必ず逃げ切り、時間を置いて再び立ち向かうことがある意味『暗黙の了解』として、ハンターたちの間で広まっている。

ようやく意識を取り戻したババコングは、見る見るうちに顔を真っ赤に紅潮させた。

怒り状態に入ったのだ。

「！ 散って！」

すぐさまレラの声が区域中^{エリア}に響き渡る。レラは太刀を背中に納めてポーチから閃光玉を出すと、ババコングの正面に向かって弧を描くように旋回しようとした。

だが、ババコングは尻尾を臀部に突き刺したかと思うと、尻尾の先についた茶色の塊をレラに向かって投げつけてきた。

「ひいっ！」

「レラ！」

糞投げに怯み、レラの動きが一瞬だけ止まる。近くにいたヴァンは急いでレラの腕を掴むと、自分の方へと引き寄せた。

次の瞬間、レラが止まった場所に、ババコングの糞が着弾し、酷い悪臭が辺りに漂う。

「立ち止まんな！ 糞まみれになりてえのか！」

「いっ、ごめん！」

レラに怒号を浴びせながらも、ヴァンは矢をババコンガに向けて放った。しかし、ババコンガはヴァンの矢をその巨体からは想像できないほどの素早い身のこなしで避けると、突然その場で飛び上がり、少し離れた場所にいたヒューゴに向かってボディプレスを仕掛けてきた。

「うわああっ！」

ヒューゴは慌てて前のめりにスライディングをしながら、それを何とか間髪で避ける。ズウンと重たい音と揺れが周りに響き、ババコンガが落ちた地面があり得ないへこみ方をしていた。

「うあっ……」

ババコンガの形どおりにへこんだ地面を見て、ヒューゴの全身から冷や汗が湧き出る。こんな常識はずれの攻撃、例え剣士タイプの強固な鎧を着ていたとしても、簡単に圧死してしまう。

「ヒューゴ、走って！」

「は、はい！」

すぐにムクリと起き上がったババコンガに向けて、Lv.2散弾を撃ちながら、ロビンが叫ぶ。ヒューゴが駆け出すと、ババコンガが今度はロビンに狙いを定め、猛スピードでロビンに突っ込んだ。

「わわあっ！」

猛スピードで突っ込んでくるババコンガを、何とか横に転がりながら避けると、ロビンは弾倉に残っていた散弾でババコンガを撃ち抜いた。

身体中から真っ赤な鮮血を吹き出しながら、ババコンガがロビンに向き直る。ロビンは弾を装填すべく、バックステップを取り、ババコンガから離れようとした。

だが、そこでロビンは自分の過ちに気づく。

彼女の後ろは、切り立った崖。普通なら決して背を向けたりしない場所に、彼女はいた。

「やばっ！」

「ロビンさん！」

「畜生！」

ロビンとババコンガに向かって駆け出すレラの後ろから、ヴァンが悪態をつきながらババコンガの右腕に向けて矢を放った。

矢はババコンガの右腕に命中したが、怒り状態のババコンガはそんな小さな痛みなど全く気にせず、ただ目の前にいる敵ロビンに向けて手を振り下ろす。

ロビンはヘビイボウガンを自分とババコンガの間に挟むが、ババコンガは怒り状態だ。

『強走薬』でドーピングを行い、相手の間合いの外から狙撃をする戦法でこれまで生き残ってきたロビンに、ババコンガの一撃に耐えきる自信はない。シールドをカスタマイズしていないボウガンでは防御も儘ならない上に、いくらキリンの最上素材を使っているとはいえ、腹を露出させた防具ではババコンガの爪は受けきれない。

（油断した……！）

ロビンは心の奥で小さく悪態をついた。いつもの彼女なら、決してしないミスだ。

(「にー」が死んでから、狩りにあんまり行ってなかったからなあ)

二年前に兄を失ってから、ロビンは研究室に引きこもることが多くなった。ブランクを感じたくはなかったから、何回か狩りには出かけていたが、それでも今思えば簡単なものばかり受けていたなど感じる。

その結果がこれか。ロビンは今までの自分を恥じた。これでは、弟子にも示しが見つからない。

(とにかく、なるようになるしか……！)

ヘイボウガンを盾代わりにしながら、そうロビンが思ったときだった。

どうやって、ロビンとババコンガの間に割って入ったのだろう。先程まで彼は、ロビンたちから少し離れた場所にいたはずなのに。

ヒューゴが、両手を大きく広げながら、ババコンガの前に立ち塞がっていた。

「え……」

ロビンの驚きなど意に介さず、容赦なく振り下ろされるババコンガの右腕。ハンマーという武器で防御などできるはずもなく、ヒューゴの身体をババコンガの爪が、ランポスの鱗ごと抉るように切り裂く。

次の瞬間、ヒューゴの身体から真っ赤な鮮血が散った。それと同時に、ロビンの脳裏に二年前の出来事がフラッシュバックする。

自分とその弟子をかばい、『一角竜』の角に貫かれて死んだ兄の姿が、ヒューゴと重なった。

「……いやあああああああああああ！」

「ヒューゴ！ ロビンさん！」

「ちいっ！」

ゆっくりと倒れるヒューゴを見て、ロビンが絶叫を上げた。ババコングはもう一度、右腕を振り上げる。

しかしそこへ、ババコングとロビンの間に淡く光る球体が飛びこんだ。球体はババコングの目の前で破裂し、強烈な閃光を発する。レラの投げた閃光玉だ。

閃光で目を焼いたババコングが、苦悶の雄叫びを上げながら、両手で目を覆う。その隙に、ヴァンとレラはヒューゴたちの元に駆け寄った。ヴァンが、胸から血を流してぐったりとしているヒューゴを抱き起こす。

「ヒューゴ、返事しろ！ おい、ヒューゴ！」

「とにかく拠点に戻るわよ！ ロビンさん、立って！」

「でも、ヒューゴ……ヒューゴがあ……」

レラがボウガンを構えたままのロビンに声をかけるが、ロビンは目から大粒の涙を流したままヒューゴにすがりつくこうとした。それを、ヒューゴに肩を貸すヴァンが怒鳴りながら止める。

「逃げる方が先だ！ 武器持って走れ！」

「ロビンさん、早く！」

「うぐっ……うーっ……うーっ……っ！」

レラに急かされ、ロビンは嗚咽を堪えながらも何とか武器を持って立ち上がった。

その瞬間、視界の戻ったババコンガが憤怒の声を上げるが、すかさずヴァンが二発目の閃光玉を投擲し、もう一度ババコンガの目を焼く。

「走れええっ！」

ヒューゴに肩を貸しながら走るヴァンの声に、レラがロビンの手を取って駆け出した。

逃げる四人の後ろで、ババコンガの咆哮が密林中に響き渡った。

第二十一話 お弟子さんの庇護（後書き）

二話一挙掲載！

本当はこの二話が一話で纏まるはずでした。

予想以上に長くなったんです（汗）

実は、二人まででしか狩りに行ったことがない旅がらすです。なので、今回の四人プレーはかなり四苦八苦しました。

うん。ソロが一番書きやすい！

今回、ヒューゴにはマジでいろいろ大変な目に合ってもらっちゃってます。

思えば彼、登場したときから結構不幸な目に合っているような……

気のせいですよね（何

誰か彼に愛の手を差し伸べてやってください（え

次回は恐らく一週間は間を置くと思います。何故なら、旅がらす学生最後のテストが待ち受けているからです。

卒業のかかったヤツなので、ちよっとサイトから……多分離れませんが。もしかしたら、また今週中に書き上がっちゃう……どうだろう？（オイ

気長な目でお待ちくださいm（|（|（m（結局ソレか！

第二十二話 お師匠さまの本気（前書き）

旅がらすの《きつとこんなだ モンハン世界観予想！》

はい、またまたやってきたこのコーナー。シリーズ化しようかどうかどうしようか迷っている旅がらすです。

今回のテーマは、モンハンやってる人なら確実にお世話になっている『救護アイルー』です！

『救護アイルー』

・ハンターが傷ついたとき、どこからともなく駆けつけてくれる、勇気あるアイルーたち。

・大体、二丁四匹のチームで構成されている。

・呼び方は、支給されている特製の打ち上げタル爆弾もしくは特殊な発煙筒（携帯可）を打ち上げて呼ぶ。ハンターが一人の場合は、結構そばで監視しているとかいないとか……。

・もちろん、ゲームと同様に報酬の三割をかつぱらってから去っていく。

旅がらす的予想はこんな感じです。

彼らはかなり愛らしいですよねw

では、そんな感じに二十二話、スタートです。

第二十二話 お師匠さまの本気

ババコンガと戦った区域エリアから走り続けて二十分程して、四人はようやく拠点に戻ってきた。

ババコンガの一撃に倒れ、気絶したままのヒューゴに半分背負う形で肩を貸しながら走ったヴァンは、肩を上下させながらも、ベッドのある小舟までヒューゴを運ぼうと歩を進める。しかし、その足取りはフラフラと覚束ない。強走薬の効果が切れ始めていた。

「……………そういや……………救護って、どうやって呼ぶんだよ……………」

「支給品、ボックスの中に、小型の、打ち上げタル爆弾が、あるはず……………それで、呼べるよ……………」

同じく、強走薬の効果が切れ始めたロビンも、肩を上下させながら切れ切れに言葉を発する。既に泣き止んではいたが、まだヒューゴを辛そうに見つめていた。

ロビンの言葉に、ヴァンはヒューゴを背負い直しながらゆっくりと頷く。

「よし……………、じゃあまずはヒューゴを運んで、止血だけでもやろう。ロビンさんも手伝ってくれ。レラは救護を頼む」

「ういー……………」

「分かった……………」

ヴァンはヒューゴをズルズルと引き摺りながら、小舟に向かって歩き出す。ロビンがその後につき、レラは外にある支給品ボックスに向かった。

ヒューゴの傷は、左肩から右脇腹にかけて走っていた。ランポスメイルは見事に切り裂かれて半壊状態、下に着ていた灰色を基調と

したインナーも、真っ赤に染まっていた。インナーを脱がそうとすると、ベリベリと渴いた血糊を剥がす嫌な音が響く。後ろで、レラが打ち上げたらしいタル爆弾の発射音が小さく耳を叩いた。

鎧をすべて脱がし、ベッドに横たわらせたヒューゴの傷を、周りに付着した血糊を拭いながら、ロビンが触診する。少しして、ロビンが小さく胸を撫で下ろした。

「……良かった。傷、思ってたより浅い。鎧と筋肉のおかげで、内臓にまで爪は届いてない」

「そっか……」

傷の具合を聴いて、ヴァンはとりあえず安心した。息もすっかりしているようだし、これなら全治するのにそう時間はいらないう。う。

「……うっ……ひくっ……」

「ちょ、何で泣いてんだよ!?!」

しかし、無事だと自分で診断したにも関わらず、ロビンは再び泣き崩れた。訳が分からず、ヴァンはあたふたと両手をばたつかせる。ロビンはしばらく嗚咽を漏らした後、小さく弱々しい声を絞り出すように言った。

「だって、アタシのせいで、ヒューゴが死んじゃうんじゃないかって……こ、怖くて……」

「でも……、良かったよ……!」

そのまま、ロビンはヒューゴの手をギュッと強く握りしめた。本当に怖かったのだろう。『二人は自分を守る』とゴードンと約束し

たのに、それを守れなかったことが悔しいのだと、ヴァンは判断した。

「……オレ、ちょっと外見てくる。救護が来たら言うよ」

何でかその場に居づらくなったヴァンは、そう告げると舟から降りた。船頭の部分で、レラが小さく蹲っているのを見つける。

「ヒューゴの傷、浅いってさ」

「そう……」

ヴァンの言葉に、レラは小さな声で答える。いつも元気いっぱい、何かあればヴァンと口喧嘩を繰り返す彼女にしては、珍しい反応だった。

だからか、ヴァンは不安を隠そうと無理におどけてみせた。

「でも、お前も危なかったよなあ。あと少しで糞まみれだったじゃん。な、アイルーパンツ」

「……………」

ノーコメントで返された。元気づけようとしてやったのに、この仕打ちはあんまりだと思ったヴァンは、口を尖らせる。

そこで、自分は彼女を元気づけたかったのだと気づかない所は、まだまだ子供なのであるが。

「んだよ。お前らしくねえなあ。そこは『五月蠅いわね、このドスケベ』ってぬおおあつ!?!?」

頭を小突いてやろうとして、しゃがんでレラの顔を見た瞬間、ヴァンは思わず奇声を上げてしまった。

レラも、泣いていたのだ。

「お前まで何泣いてんだよ!? らしくねえぞ!」

「……だって、私があのととき閃光玉を投げたら、ヒューゴはあんな目に合わなかったのに……」

いつもの彼女では考えられないくらいに弱々しい声で、レラはそう言っ、再び顔を埋めた。心なしか、その体は小さく震えている。それに対し、ヴァンは何も言えなかった。はつきりと否定はできなかったし、適当な励ましは逆にレラを傷つけるだけだ。

「あのなあ……もう終わっちまったことを、あんまり引きずるなよ。ああなっちまったものは、もうやり直しはきかないんだ。だから、あんま自分を責めんなって」

そう言いながら、ヴァンは腹の奥に何か熱いものが生まれたのを感じた。それはヴァンの奥で煮えたぎるようにどんどんと熱く、そして、みるみるうちにどす黒くなっていく。

それが何なのか分からず、しかし外に出してはいけないと直感したヴァンは、なるべくいつも通りを装おうと言葉を続けた。

「とにかく、救護が来てヒューゴが目を覚ましたら、ババコンガのところにまた行こうぜ。怒り状態に入ってたってことは……」

ドサツ。

不意に、何か落ちるような音で、ヴァンの言葉が遮られた。それまで蹲っていたレラが、顔を真っ青にして砂浜に倒れていたのだ。

「なっ……！　おい、レラ！」

突然レラまで倒れ、ヴァンは思わず声を荒げた。レラを抱き上げ、予想に反して華奢で軽いレラの体に驚きながら、何度か呼びかける。

「おい、どうしたんだってんだよ。レラ！　返事しろ、レラ！」

「ウニヤアー！　遅くなりましたのニヤ！」

そこへ、紐で何枚か繋げた板に小さな車輪を二つくっつけたような、質素な手押し車を引いた二匹のアイルーがやってきた。ギルドお抱えの救護アイルーだ。

アイルーのうち、向かって右側にいた一匹が、ぴよんぴよんと跳びはねながらレラを抱えるヴァンに近寄る。

「ウニヤニヤ。こちらのお嬢さんが、怪我人ですかニヤ？」

「あ、いや違う。怪我人は今ベッドで寝ているんだ。でも、コイツも見てくれ！　いきなり真っ青な顔して倒れちまって……」

しどろもどろになって説明をするヴァンに、アイルーはコクリと力強く頷いた。

「分かりましたのニヤ！　コナン、まずはベッドの怪我人からニヤ！」

「ハイニヤ！」

コナンと呼ばれたアイルーは、ビシッと敬礼をすると、やはりぴよんぴよんと跳ねながら小舟に上っていった。

「では、あなた様もお嬢さんをベッドにお願いしますニヤ！」

「お、おう……」

テキパキとアイルーに指示を出され、ヴァンもレラを抱えて小舟に上った。

「コナン、造血剤と消毒薬を用意するニヤ！　こちらのお嬢さんには栄養剤ニヤ！」
「了解ニヤ！」

おそらくリーダーなのであろうアイルーの指示に、コナンと呼ばれたアイルーがポーチからいくつかの小瓶を取り出す。リーダーのアイルーは、同じようにポーチから袋に入った注射器を取り出すと、小瓶の一つに入った水色の液体を注射器に入れ、レラの白い腕に注射した。

「まったく、過労と貧血って……驚かせやがってさあ……」
「それだけで良かったじゃん。ヴァンくんも素直じゃない」

一方、レラの診察結果をアイルーたちから聞いたヴァンは、小舟の下で胡座をかきながら小さく悪態をついた。その横で、ロビンが淡く微笑む。

ヴァンが救護アイルーたちと小舟に上ったとき、ロビンは救護が来たことに喜んだのも束の間、ヴァンが抱えたレラに目を丸くし、アイルーたちと一緒にヒューゴを少し横にずらしてレラのためにスペースを作った。それから、治療の邪魔にならないよう、ベッドか

ら下りてアイルーたちの手当てが終わるのを待っているのである。

「つつーかさあ。『覇気』は体力を消耗するから燃費が良くないって自分で言ってたくせに、強走薬がおつつかないくらいに使って、何考えてんだか……」

診察中、途切れ途切れにレラが言っていた言葉を思い出して、ヴァンは居心地悪そうに防具を外した頭をバリバリと搔いた。

レラの倒れた理由は至極簡単に言えば、単なる『覇気』の使い過ぎだったのだ。先ほどの戦闘の際、強走薬が追いつかないくらいの勢いで、自身の体力を限界まで削るほどの『覇気』を放出したのである。

レラは、確かに短気でどちらかと言えばクールとは言い難いが、こういう判断は間違えない少女だ。何が、少女をそこまで追いつめたのだろう。

「多分、ヴァンさんとヒューゴを守りたかったんじゃない？」

「……へ？」

ロビンの言葉に、ヴァンはすっとんきょうな声を出した。しかし、それと同時に、自分がロビンと全く同じことを考えていたことに驚く。

「アタシの見立てがハズレてなければ、あのババコンガ、多分上位クラスだったし。レラちゃんもそれに気づいて、『私が皆を守るんだ』って思ったんじゃないかな。あの子、ドコか自己犠牲みたいなトコあるみたいだし」

「あ……」

言われて、ヴァンははじめてレラと出逢ったときに戦ったりオレ

イアを思い出す。あのときも、自分の武器がどれだけ跳ね返されても、彼女は後ろの自分たちを気遣い、リオレイアの注意を自分に引かせていた。ロビンの言うことは強ち間違っていないだろう。

(……オレのせいで……)

ヴァンはレラの気持ちを知り、再びあのどす黒い『何か』が自分の中に溢れ出すのを感じた。それが何なのか、今ならはつきり分かる。

ヴァンは、無意識に拳を爪が食い込むくらいに強く握りしめていた。

「悔しい？」

不意に、ロビンがそう訊ねてきた。ヴァンが目を丸くすると、ロビンはにっこりと微笑む。

「ヴァンくん、分かりやすいー。今も拳をすんごく強く握ってたしー」
「……………」

しかし、素直じゃないヴァンは、正直に自分の気持ちを言えなかった。

悔しくないはずがない。青怪鳥に襲われ、フラディオの怒りと想いを知ったあの夜、ヴァンはヒューゴと『互いに互いを守る』と約束を交わした。フラディオが果たせなかった親友との約束を、自分たちが果たそう。と。

しかし、現実はこれだ。ヒューゴを守りきれず、更にレラまで倒れた。自分だけが何もできず、ただ二人に無理をさせてしまったのだ。

これで悔しくないのなら、そいつは人としてどうかしている。

「ねえ、悔しい？ 人の質問にはちゃんと答えるー」

何も答えないヴァンに、ロビンはツンツンとヴァンの頬を突つきながらもう一度訊ねてきた。聡明な彼女なら、ヴァンの考えなど疾うに見透かしているはずだ。どうやら、ヴァンが言うまでは自分から答えを導くつもりがないらしい。

「……悔しいに決まってるじゃん」

数秒ほどして、ヴァンは小さくそう呟いた。

本当はしばらくだんまりを決め込もうと思っていたのだが、ロビンの性格を考えて止めた。今度は頭を叩かれそうな感じがしたからだ。

「あ、ホントのこと言ったー。言わなかったら頭ペシペシしよーと思ってたのに」

本当にするつもりだったらしい。ヴァンは今度は呆れて何も言えなかった。

ロビンはヴァンがきちんと答えたことに満足するように笑うと、膝立ちになって舟を覗いた。それから、何かを決心したように立ち上がると、支給品ボックスの隣に置いていた荷物　ロビンは研究の道具が入っているのだと言っていた　中から、数えきれない量の銃弾が詰められたガンベルトを取り出した。

「……ロビンさん？」

てつきり、たくさんの本や羊皮紙でも入っているのかと思ってい

たヴァンは、ロビンが取り出したそれを見て、目を丸くした。一方、ロビンは腰に付けていたポーチを外すと、代わりに取り出したガンベルトを装着する。更にもう二つ小型のガンベルトを荷物から取り出し、今度は左腿にそれらを括り付けた。

「ホントはサポートオンリーで行く気だったんだけど、相手が上位クラスなら、ちょっと本気出さないとねー」

「……本気？」

ヴァンが首を傾げる中、ロビンは先ほどのよりも小さめのポーチを取り出し、消臭玉と強走薬だけを移して右腿に括り付けた。そして、強走薬を一つ取り出すと、それをヴァンに投げて寄越してくる。

「へ？」

突然強走薬を渡されて更に戸惑うヴァンに、ロビンはまるで太陽のように笑いかけた。

「着いてきて。銃撃士の戦い方、教えてアゲル」

ババコンガは、天井が吹き抜けになった洞窟で、仰向けになって寝転んでいた。

今日は、彼にとって厄日だった。群れの何匹かを四人の脆弱な人

間に殺され、自身も爪を折られたり頭の毛を撃ち落とされたりと、かなりの傷を負った。何とか一人を重傷に追いやってやったが、止めを刺そうとした瞬間、二回も目を焼かれ、取り逃がしてしまった。しかし、彼は戦いに勝ったのだ。また奴らがやってきたとしても、彼には勝つ自信があった。群れのリーダーになつてかなり経つ彼は、これまでも何人も人間を瀕死に追いやっていた。奴らもどうせ、これまでのハエどもと同じだ。次は一撃のもとに葬りさつてやろうと、彼は思っていた。

とりあえず、今は体を休めよう。この程度の傷ならば、今から眠れば一晩で完治する。頭の毛は、在り合わせをどうにかすれば威厳を保つ程度のものできるだろう。また生えてくるのだし、気長に待てば良い。

寝ぼけ眼でそんなことを考えながら、彼が寝返りを打った、次の瞬間だった。

洞窟内に突然風切り音が鳴り響き、何かがババコングの腹を貫いた。

突然自身を襲った激痛に、ババコングは完全に覚醒した。最高に悪い寝覚めである。痛みを堪えながら腹を見下ろすと、丁度臍の上辺りに人間の拳大ほどの穴が空いていた。

その穴を見て、ババコングは驚愕した。彼の鞠のような腹は、超硬度を誇る筋肉の塊だ。今まで、彼の腹にこのような傷を与えるほどのダメージを、彼は受けたことがなかった。

「ちゅ、どーん！」

続けて、変な掛け声と共に再び空気が鳴り響き、今度は彼の額に何かが当たった。数瞬後、突然目の前で何かが爆発し、彼の顔面を燃やす。

「んぐ。やっぱり『千里眼』って超不思議！。ねね、アタシと一緒に王都に行かない。是非とも謎を解明したいしー」
「慎んで断る」

倒れたババコンガの目の前で、二つの声がした。彼が顔を上げると、先ほど撃退はずのハエの内、二匹が彼の前に立っていた。

ハエを見た瞬間、怒りが彼の身体を包み込んだ。ちよこまかとうざい奴らだ。爪を砕いたり頭の毛を奪われたりした記憶が、彼の怒りを最高潮にさせる。彼は二人のハエに向かって高らかに吼えた。

「おー。キレたキレた。じゃー、ヴァンくん。さっき話したこと、遵守してねー」
「分かった」

ハエは互いに一言ずつ会話を交わすと、別々に散った。

(すげえな……)

ロビンの戦い方を見て、ヴァンは息を呑む。

それは、あまりにも一方的だった。

ロビンは洞窟に入る前に、ヴァンにたった一つだけ指示をした。

「キミが入れるのは、最初の一撃だけ。後はアタシが戦うのを見て」

最初は附に落ちなかったが、今なら理由が分かる。

要は、自分は足手まといなのだ。しかし、先ほどとは違い、自分に怒りを感じてはいなかった。今は何もしないことで、逆にロビンの足を引っ張らない。それが最良であることを、ヴァンもよく理解していたのだ。

ババコンガの視界に入らないよう気をつけながら、ヴァンはロビンの戦い方を見た。

「ほらほら。アタシはこつちだし！」

ロビンがわざと叫びながら、ババコンガの身体に貫通弾を叩き込む。ババコンガの気がこちらに移らないようにしているのか、彼女はババコンガの視界に常に自分を入れていた。

ババコンガが、ヒューゴのときのように、右手を振り上げる。

「遅いよ！」

しかし、ロビンはババコンガが手を振り上げた瞬間に、ヘビイボウガンを抱えたまま斜め前を抜けるように前転した。一瞬遅れて、ババコンガの平手打ちが地面を抉る。右手を難なく回避したロビンは、ババコンガの横で新たに弾を装填していた。

ほんのコンマ数秒の判断力と、それを実行に移すだけの行動力。

ロビンの体捌きは、明らかにレベルが別次元だ。女性が重量のあるヘビイボウガンを扱うだけでも一苦労だろうに、ロビンはまるで自分の体の一部のように、それを扱っている。

「おサルちゃん。アタシはこっちだしー。それとも、もうギブアップするのー？」

今度は散弾を撃ち込みながら、ロビンが不敵な笑みを浮かべた。ババコンガの頭は、既に火傷と傷で真っ赤に染まっている。もう血で目は見えないのだろう。耳と鼻をフルに使ってロビンを追いかけているに違いない。

ババコンガが突然その場に立ち上がった。その口から赤い煙が昇った。仄かなガス臭がヴァンの鼻腔を刺激する。

(ブレス！)

ロビンも同様に判断したのだろう。ババコンガの真横に行くように回転回避をしたとほぼ同時に、ババコンガが地に伏せ、二トロダケの成分を含ませた火炎ブレスを吐いた。しかし、真横にいるロビンには、ババコンガの前方に向けて放射されるブレスは当たらない。ロビンは左腿のガンベルトから特大の銃弾を取り出すと、それをヘビイボウガンに装填した。

「さあ、これでラストだよ！　ちゅ、どーんっ！」

ロビンの掛け声と共に放たれる銃弾。それは、ちょうどブレスを吐き終えたばかりの大口を開けたまま、ロビンの方を振り向いたババコンガの口内に吸い込まれた。突然入ってきた異物に、ババコンガが反射的に口を閉じる。

ロビンはそれを見て、自分の右手を銃に見立てながら、ババコンガを撃ち抜く真似をした。

「ど、かーん」

ロビンがそう呟いた刹那、ババコンガの口内でLv・2徹甲榴弾が爆発した。衝撃に耐えられずにババコンガの上顎から上が吹き飛んだ。そこらじゅうに、血が飛び散る。司令塔たる頭を失ったババコンガは、脊髄反射でビクビクと動く体を、ゆっくりを地面に倒した。

「……………」

今まで、こんなに激しい戦いを見たことなどなかった。

人間とモンスター、本来の弱肉強食の関係が覆される瞬間を、ヴァンははじめて目の当たりにした。それが、ヒューゴに手伝って貰わなければ食事すらマトモにできないロビンによって成されたのだと思うと、無意識に体が震える。

一方、ロビンはヘビイボウガンを背中に仕舞うと、手の甲で額を拭うような仕草をした。

「ふいー。ちよつと本気出しちったー」

(あれで『ちよつと』かよ……………)

そのポテンシャルに、ヴァンはただ驚くことしかできない。彼女の『本気』を計り知ることなど、今の自分には無理だろうと直感した。

(すげえ……………すごすぎる！)

しかし、ヴァンの中に生まれたのは、不安でも恐怖でもなかった。

純粹な、憧れ。

いつか自分も、彼女のようなハンターになりたい。ただ純粹に、

そう思ったのだ。

元来、銃撃士という者は、狩りに於いてチームの補助要員として見られがちだ。

『攻撃力が低いから』

『決定打と言える攻撃を持っていないから』

常に後方から剣士の隙を埋めるように攻撃を仕掛け、補助に回る。そんな戦い方が目立つ銃撃士は、血気盛んな若者ハンターには、あまり人気がないらしい。

レラに聴いて知ったが、男性が大半を占めるハンターで、意外なことに銃撃士に於いてはその比率が逆転すると言うのだ。もちろん、男性にも銃撃士はいるが、やはり重量系のヘビィボウガンが人気のようだ。

しかし、ロビンの戦い方は、その常識を思い切り覆っていた。確かに、ヘビィボウガンは遠距離タイプで最も威力がある。しかし、その重量故に、動きが制限されるためにやはり援護に回る人が多いのだ。

それを、回転回避とバックステップのみに動きを制限することで問題を片付け、ロビンは嵐のような戦いを繰り広げたのである。

「ちょあーっ！ ババコンガ一体、討ち取ったりー！」

バンザイしながらぴよんぴよん跳び跳ねるロビンの後ろで、ヴァンは銃撃士の新たな可能性に打ち震えていた。

第二十二話 お師匠さまの本気（後書き）

ども。

何気に今テスト期間真つ最中な旅がらすです。

頭冷やしたくて、ちよつとつつ書き足してきたヤツがよつやく書き上がりました。

……え？ 今はテストだろ？

……仰る通りであります。……でも、勉強も怠ってないツス！ 今日も夕方までは勉強してました、長官！（誰？

……とまあ、そんな話は置いて（コラ

ロビン姉さんにちよつと活躍してもらいました。

例え上位ババコンガでも、G級ハンターにとっては赤子同然ですね！ 旅がらすはまだ上位の一番下ですが。最近、ヘビィボウガンに目覚めて、意外とかかる弾費用に泣きながら少しずつ馴らしているところです。弓チヨー楽しいツス。

ついでに、初のモンスター視点。モンスターってどんなこと考えてるんでしょうね。めっちゃめっちゃ想像でモノ書いてます（笑）
そもそも、ヒトとは思考回路自体が違うと思いますが（汗）
どうなんだろうなあ、実際。

では、次回またお会いしましょう（・o・）ノシ

第二十三話 お師匠さまの本音（前書き）

ども。先日、たまじゅけのこれからのプロットを整理していたら、

『あれ、ちょっと待って……。これ、あと何話で終わんの？』

と、マジで焦った旅がらすです。

やべえ。何か軽く超長編になる気がしてきた・ZE

……まあ、完全に自己満で書いてる小説だし、気にしないっ！
（オイ）

ってな感じで、第二十三話、スタートです。

第二十三話 お師匠さまの本音

テロス密林でのババコンガ騒動から、二日が経過していた。

「M A T E」

「プギイイイイイイ」

「おおおおおおお」

ミミルの酒場で、ドスファンゴが前足を折って頭を垂れた。その隣で彼女 ボニーちゃんに指示をするのは、オレンジパンチパーマの濃ゆい顔のオヤジ バンナナ・ゲリゴリーだ。

酒場は完全にバンナナとボニーちゃんの独壇場だった。

しかし、ボニーちゃんはギルドが定めているモンスターのサイズ査定では銀冠サイズ（かなりデカイ）のはずだ。

……どうやって酒場の中に入ったのだろうか。

「……帰りもボニーちゃんだなんて……今回のクエスト、行って良かった」

「旦那さん、絶対に変ニヤ……」

「……以下同文……」

カウンター席でウツトリとした表情を浮かべながら、レラが小さくため息をつく。それを見て、彼女のオトモアイルーであるレモン色の毛並みをしたナタリーは、理解できないと言いたげな表情で首を横に振った。

さらにその横では、椅子を何個か繋げた上に文字通り真っ青な顔をしたヒューゴが寝そべって口元を押さえていた。

ババコンガをロビンが討伐した後、ヒューゴたちはそのままジャ

ンボ村に発った。

ヒューゴとしては、そのまま遺跡調査に乗り込みたかったのだが、ケガをしている上に胸鎧も身に着けずに狩り場を歩き回るのは良くないとロビンに忠告されてしまった。

それでも抵抗して大丈夫だと言いつつ放ったのだが、今度はヴァンがヒューゴに反対の意を述べたのだ。

「お前の武具を作った職人として、命の保障もできない防具でお前を狩り場に出すことはできない。オレはお前を死なせる気は毛頭無いしな」

命を預かる防具を作る者としての信念なのだろう。ヴァンの眼差しは、いつにも増して真剣なものだった。ヒューゴは改めて、親友が自分の仕事にどれだけの誇りを持っているかを知った。

ちなみに、そのヴァンはというと、

「オレ、ちょっとやることあるから。ギルドに報告頼むなー」

と言って、ババコンガやコンガの素材と（何故か）ヒューゴのハンマーを持って、何処かに行ってしまった。

そして、自分たちは今、ギルドへ今回のクエストについて報告をし、つい先日一足先に帰ってきていたフラディオの狩りの打ち上げとバナナナ&ポニーちゃんのショーを兼ねた酒盛りに参加しているのだ。

無論、ケガをしている上にポニーちゃん超特急で疲弊しきったヒューゴは、一杯も飲んでいないが。

「……？」

突然、ヒューゴの視界に黄色い液体の入ったグラスが現れた。目

を動かすと、今度はそのグラスを持つルーシイが視界に入ってくる。

「絞りたて新鮮の柑橘ジュースよ。お酒は入ってないから大丈夫」

「あ、ありがとうございます」

起きあがってそれを受け取ると、ルーシイは微笑みながらスカートを掴まんで軽く頭を下げた。

「いえいえ。ギルド嬢の務めだしね。今はレラに絡めなくてつまらないし」

「それできちんと働くのもどうかと思いますが……」

ヒューゴが苦笑いをしながら返すと、ルーシイはエプロンのポケットから飴玉を幾つか出してヒューゴに渡してくれた。それを見て、ヒューゴは首を傾げる。

「……これは？」

「ペパーミントっていうハーブの抽出液を砂糖と一緒に煮詰めて作った飴よ。酔いに効くから舐めといたら？」

「え、すみません。こんなものまで……」

いつもはレラにべったりでマトモにきっちり働くのをあまり見ないギルド嬢の気遣いに、ヒューゴはただただ感謝しながら飴玉を口に放り込む。確かに舐めた瞬間に鼻を抜けるような感覚が口の中で弾け、気分が落ち着く。

すると、ヒューゴが飴玉を舐めたのを確認したルーシイが何故かほくそ笑んだ。

「よおしつ。じゃあ、後でオネーサンにロビン姉さんとどこまでやつちゃってるのか、詳細なレポートにして提出しなさいね！」

「ぶほっ！」

それを聞いた瞬間、ヒューゴは舐め途中の飴玉を思わず飲み込んでしまった。急いで胸を叩いて気道を確保する。

「な、なななな！」

顔を真っ赤にして言葉すらまともに言えていないヒューゴに対し、ルーシイはウツトリとした表情で両手を合わせた。

「アンの顔見れば、ロビン姉さんに対する想いくらいすぐに気づくわよ。それに、血気盛んなオトコノコだしね。あー、オネーサン今日は最高に良い夢見れそ〜」

「今日中ですか！　っていうか、僕と教授はそういうのじゃないですから！」

顔は相変わらず真っ赤にしたまま懸命に否定するヒューゴを見て、ルーシイは面白くなさそうに口を尖らせた。

「あらそうなの？　じゃあ、早くにつてか今夜にでも襲っちゃえば？」

「何で！？　というかそれ以前に襲いませんか！」

「ニヤ？　誰が誰を襲うニヤ？」

ルーシイの言葉に更に顔を赤らめるヒューゴの肩に、ナタリーがよじよじと登ってきた。

主人やその他大勢がボニーちゃんシヨーに賑わっていて暇なのだろう。ヒューゴはバンナナとボニーちゃんを軽く恨んだ。恨みながら、ナタリーをカウンターに座らせる。

「誰も襲いません！　っていうか、何でそんなに目をキラキラさせてるんですか！？」

「もしイメトレが必要ななら、小説でも貸そうかしら？　確か今日はかなりイイのを持ってきてるのよね」

「いりません！　それ以前に何でそんなもの仕事場に持ってきてるんですか！？」

「是非とも参考にして実践してほしいニヤ。明日のソフィーちゃんの報告が楽しみだニヤ」

「何で今日！？　っていうか、何でもう決定事項になってるんですか！？」

「O S U W A R I」

「プギイイ」

「「おおおおおー」」

「ボニーちゃん素敵！」

「バナナナっち、もっとすごおいの見してー！」

ああ、何故同じ酒場でこんなに温度が違うのだろうか。ロビンだつてある意味当事者であるのに今はボニーちゃんシヨーを楽しんでいる。

しかし、一方で何故自分はこの様な拷問まがいな仕打ちを受けているのだろうか、ヒューゴは頭を抱えた。

それを見て、ルーシイは小さくため息をつく。

「まったく、だらしない子ねえ。ロビン姉さん、明日にでも帰っちゃうんでしょ？　それなのに、何もしないでそのまま別れちゃって良いワケ？」

「え……」

ルーシイの言葉に、ヒューゴは言葉を失った。その言葉の意味を

理解するのに、数秒を要してしまった自分がいた。

「教授が、帰るって……」

「王都に決まってるじゃない。やだ、もしかして忘れちゃってたの？」

「ウニヤア。それは一大事ニヤ！ ヒューゴ殿、ここでやらなきや男が廢るニヤ！」

そんなことで男は廢りませんと突っ込みを入れながら、ヒューゴはルーシイの言葉を自分の中で反復させた。

(明日で、教授はいなくなる……)

当たり前のことだ。

ここは学院ではない。ミミルだ。ヒューゴはこの町に住んでいて、ロビンは学院の准教授職。彼女の家はあの研究室なのだ。自分の居場所は、もうあそこではない。別にできてしまったのだと気づかされた。

「僕は、馬鹿か……」

「ニヤ？」

「ヒューゴ？」

突然自嘲を始めたヒューゴに、ナタリーとルーシイが首を傾げる。しかし、もうヒューゴの視界にはだれも映っていないかった。

学院のことで最初に思い出すのは、いつも『あのとき』の光景だ。自分が犯した罪の記憶。本当はもっと楽しかった思い出だつてたくさんあるはずなのに、いつも最初に思い出すのはそれだった。

それは、ヒューゴが自分で『居場所』を捨てた記憶。

それは、ヒューゴが誰よりも大切な『彼女』を壊しかけた記憶。

それなのに、自分は勘違いをしていた。

彼女と再会し、たった数日間を共に過ごしただけで、以前のようにずっとこんな日々が続くもののだとばかり思っていた自分がいたことに、ヒューゴは気付いていなかった。

なんという、愚かさ。なんという、罪深さ。

彼女が自分を許すわけがない。あんなに傷つけておきながら、何も言わずにあの場所を去った自分を、彼女が許しているわけがない。そう思っていたのに、たった数日間の出来事で、ヒューゴはそれを完全に忘れ去っていた。

「ヒューゴヒューゴー」

「っっ!?!」

考え事をしていたせいで、対応できなかった。

いつの間にそこにいたのか、ロビンがヒューゴの体に文字通り巻きついていて。酔っ払っているらしく、その頬は少しだけ紅潮している。既に普段着に着替えており、むき出しになったしなやかな腕が背中に回る。その柔らかな感触にヒューゴの体も若干熱を帯びた。だが、ヒューゴは堪える。平静を装いながら、ヒューゴはロビンの頬を引っ張った。案の定、ロビンの顔は少しだけ痛そうに歪む。

「うー、いひゃい」

「自業自得ですよ。酒弱いのに飲むほうが悪いんです」

「らっへ、ひもひよくなれるんらもん」

知っている。ロビンは酒に弱いくせにがぶ飲みをする上、酔うと

いつも以上に甘えるのだ。

ヒューゴはため息をつきながら、ロビンを起こそうとその体を抱き抱える。横に視線を移すと、カウンターでルーシィとナタリーがキラキラとした目でこちらを見ていた。ナタリーに至っては何故か拳闘の素振りまでしている。

全く、いったい何を期待しているんだか。

ヒューゴは一切二人の視線には何も答えずに、ロビンを近くの椅子に座らせようとした。

しかし、ロビンは一体この細腕のどこにそんな力があるのだろうか。離れるものかとも言いたげな位に強い力でヒューゴにしがみつく。

まあ、半分は自分の希望でしかないのだが。そう考えると呆れてしまう。

自分はいつまで彼女に甘えて生きていくのだろうか。

「まったく。その後であなたの介抱するのは誰かってことも考えてほしいですね」

「ヒューゴ。ヒューゴが介抱してくれるー」

ロビンはヒューゴの気持ちなど全く考えずにそう答える。

そう、今まではそれが普通だった。ユージーンがいたときも、いつもロビンの世話は自分がやっていたのだ。

だが、それも学術院にヒューゴがいたときの話だ。今は違う。そんな日々は半年以上も前に、ヒューゴ自らの手で壊したのだから。

だから、ヒューゴは特に何も考えずに呟くように言った。

「教授。僕だって、いつまでもあなたの傍にいられるわけじゃない

んですよ。頼むから少しはシャキツとしてください」

何気ない一言だった。何となく、無意識に口を突いて出た一言だった。

だが、その言葉を聞いた途端、ロビンの体がピタリと硬直した。ヒューゴの体に腕を回したまま、まるで石にでもなってしまったかのように、指一つ動かさない。

一方、ヒューゴはロビンの変化に気づいていないらしく、小さくため息をついた。

「大体、ご飯くらいきちんと食べましょうよ。毎度毎度食べさせなきゃいけない僕の身にも」

「……さいなあ」

「……え？」

ロビンの呟きに、ヒューゴが小さく首を傾げた。

「うるさいー！」

突然、ロビンはヒューゴの体を思い切り強く突き飛ばす。

いきなりのことにヒューゴは受身も取れず、椅子から崩れ落ちた。一瞬遅れて、ルーシイが小さく叫び声をあげる。

それまで騒がしかった酒場が、一気に静まり返った。

「ヒューゴ、大丈夫！」

「いっつう……ちょ、なにすんですか教……」

情けなく尻餅をついたヒューゴは、抗議しようとして顔を上げて、言葉を失った。

ロビンの顔が、今までに見たことないくらいに歪んでいたのだ。

しかも、その顔に浮かんでいるのは、ヒューゴが今まで見たことのない感情だった。

ロビンが、怒っていた。

「うるさいなあ！ アンタの身にもなれ？ アタシの身にもなれないくせに、なんでそんなこと言えるの！？」

「……教」

「アタシだって、ご飯くらいちゃんと自分で食べたいよ！ お風呂だって一人でゆっくりつかりたいって思うし、洋服だって簡単なのばっかじゃなくて、もっと綺麗なやつを着たいよ！ でも、でもできないんだもん！ どんだけがんばろうとしたってアタシの体は言うことを聞いてくれない！ その気持ちも、アンタには分かるの！

「？」

「……………」

酒場の視線が、ヒューゴとロビンに集中していた。さすがのバナナもボニーちゃんを止めてその場に立ち尽くしている。

ロビンはその場にしゃがみ込み、顔をぐしゃぐしゃに歪ませながら、目から大量の涙を溢れさせた。

「なんでみんな分かってくれないの……アタシだって、ずつつとのはほんと生きてきたわけじゃないのに……。分かってたよ、自分が一人じゃ生きてけないことくらいさあ……。もう小さい頃から分かってたもん……。生まれてきたことが間違いだったって……」

ロビンの言葉が、ヒューゴの胸に突き刺さった。それは、今までで一番深く、鋭く、ヒューゴの胸を刺す。

『生まれてきたことが間違い』

ロビンがそう思っていたなんて、知らなかった。

「……だった、のに……」

「え？」

「ヒューゴが、はじめて、だったのに……」

いつの間にか、ロビンの声はとても弱弱しくなっていた。まるで壊れた水道管のように、涙が次々と目から零れ落ちている。

だが、ロビンはそれを拭わずに話し続けた。

「ヒューゴがはじめて、ずっと傍にいてくれた……。男の子だから、絶対に嫌だろうなって分かってたけど、ヒューゴは普通に、接してくれた……。アタシのこと、全然馬鹿にしないで、いつも一緒にいてくれた……」

もう既に頭が回っていないのだろう。嗚咽を混じらせながらも、ロビンの口は次々と言葉を吐き出していく。

「嬉しかった……。今までの人は、アタシのこと、馬鹿にして、ウザいって言って、すぐに突き放して、出て行っちゃったから……。ヒューゴもいつかそうなるのかなって思いながら、そうならなくてほしいって、ずっと、あの授業のときから、ずっとそう思ってた……」

「あ……」

ロビンの口からその言葉が出た瞬間、ヒューゴの中に生まれたのは場違いな喜びだった。

まさか、彼女が自分とまったく同じことを考えていたなんて、思いにも寄らなかった。

「教授……」

「なんで、なにも言わないで出てったの……？　なんで、あのとき全部ぶち壊してくれなかったの……？」

「……え……」

「ヒューゴの気持ちがやっと分かるって、にーにーの遺言に縛られてるわけじゃないんだって、分かるかと思ってたのに……。突然泣き出してさあ、人のこと置いてけぼりにして……。あれならいつそのこと、壊してくれたほうが、良かったよお……」

「……っ！？」

許してくれていないかと思ってたのに。それどころか、ロビンはあんな自分を受け入れようとしてくれていたのか。

自分だけが苦しんでいたわけではなかったのだ。自分ばかりが、あの研究室で悩んでいたわけではなかったのだ。

考えてみれば当たり前前のことだったのに、どうして今まで気付かなかったのだろうか。

「……教授……」

ヒューゴはゆっくりと立ち上がり、しゃがんで涙を零し続けるロビンに歩み寄った。その体を起こそうと、そっと彼女の腕に手を差し伸べる。

だが、

「触らないで！」

ロビンの手が、ヒューゴの手を振り払った。ロビンの真っ赤に腫れた双眸が、ヒューゴをギッと睨む。

今まで向けられたことのない激しい感情に、ヒューゴは思わず萎縮した。

「アンタなんか……だいつきらい!!」

それだけ言うと、ロビンはスクツと立ち上がり、クルリと踵を返すと、猛ダツシユで酒場を出て行った。ロビンの勢いに、酒場のドアがキイキイと何回も往復する。

ヒューゴはただ、呆然としたまま、動けなかった。

ロビンは、夜のミミルを猛ダツシユで走っていた。十年以上も前に、同じように時々こうしてこの町を走っていたことを思い出す。

(嫌われ、ちゃったかなあ……)

兄以外の人間に癪癢を起こしたのは、これがはじめてだった。幼いころ、ロビンはいつも苛々していた。

何故、誰も自分の言葉を理解してくれないのだろう。

何故、自分ですら易々と解けてしまう間に、皆は悩んでいるのだろう。

何故、自分は誰でもできることを満足にできないのだろう。

両親は既に、ロビンに見切りをつけていたらしい。

ジオ・ワンドレオの上流家系であったロビンの家族は、彼女が十になるかならないかの頃に、ロビンを飛び級で王都の王立学術院に入学させた。

聡明なロビンは、それが家族との縁切りであることを悟っていた。学院でも、彼女は一人だった。学はあるが常識の欠けた彼女を疎み、遠巻きにする輩は少なくなかった。あのとき、おばあちゃんマグレガー教授が手を差し伸べてくれなかったら、自分は今の自分ではあり得なかっただろう。考えるだけでぞつとする。

それに、もう一人彼女に手を差し伸べてくれた人物がいた。ロビンの三兄であるユージーン・グレンジャーだ。彼は幼いころ、一番年の近いロビンによく構ってくれていた。ロビンが学院に行く少し前に、ハンター修行に出ていた彼は、ロビンが学院に行ったと知ってから、できる限り顔を出してくれるようになった。

彼らに支えられながら、生きることをはじめて楽しく感じ、その幸せに浸りながらも、いつか訪れるであろう別れに奮えている自分がいた。

ヒューゴと出逢ったのは、そんなときだった。

「はあっ……はあっ……」

いつの間にか、町外れにある川沿いにまで来ていた。近くには、竜人の老婆が一人で営む工房が見えた。

昔、ユージーンで紹介でこのハンター養成所に来ていたとき、まだ当時は無口で気難しかったフラディオに睨まれたり、同期の訓練生たちに苛められたりして、よくここで泣いていたことがある。時折、竜人の老婆が泣きじゃくるロビンに温かいお茶を飲ませてくれた。

あの老婆はまだ元気だろうか。

「ばーちゃん。オレ、ちょっと外の空気吸ってくる」

と、そこで工房の裏口のドアが開いた。中から、ツナギ姿に軍手、

ミカン色の髪の毛にタオルを巻いた少年が現れた。

ヴァンだ。そういえば、彼は用があるとかでギルドに来ていなかったことを思い出す。

ヴァンは外に出た途端、外に立っていたロビンを見て目を丸くした。

「ロビンさん？　なんでこんなとこ……」

「……ヴァンくん……」

少年の顔を見た途端、先ほどのヒューゴの顔を思い出した。

ロビンが拒絶した瞬間に見せた、驚きながらもどこか寂しげな表情。それと、『あのとき』の彼の苦悩に満ちた歪んだ表情が重なった。

重なった途端、ロビンの両目から涙が溢れた。

「……ううっ……ひぐっ……」

「えー？　ちよっと、いきなりどうしたんだよ、ロビンさん！」

泣きつかれることに慣れていないのだろう。ヴァンは突然泣きだしたロビンにあたふたしている。

すると、今度はヴァンの声を聞きつけたらしいイレーヌが、ヒョコツと顔を出した。

「どうしたんだい、ヴァン……あら、ロビンちゃんじゃないか。こちんちん来ていたのかい？」

「うっ……おばあちゃん……」

泣きじゃくるロビンを見て、イレーヌは何かを察したようだ。ゆっくり小さく頷くと、イレーヌはロビンに駆け寄ってその手を優しく握りしめた。

「まずは、お茶でも飲もうねえ。ヴァン、ベンケイちゃんにお茶の準備を頼んできておくれ」

「お、おう」

ヴァンが頷いて工房の中に入っていくのを確認すると、イレーヌは優しくロビンの手を引いて工房に戻った。

(何なんだ、一体……)

ヴァンは戸惑っていた。

十三も年上のロビンが突然泣きじゃくり始めたときは、訳が分からなかった。イレーヌは慣れているのか、のんびりとベンケイの淹れたお茶を啜っている。

「ロビン殿。熱いうちにどうぞニヤ」

未だに泣きじゃくるロビンの目の前に、ベンケイがマグカップに入った緑茶を差し出した。

ロビンは嗚咽を堪えながら、震える手でマグカップを持ち上げ、とてもゆっくりとした　かなり慎重とも見れる動作でお茶を一口だけ啜った。

「……美味しい。あつたかい」

「それは何よりですニヤ」

ベンケイはニツコリと微笑むと、お茶菓子をお持ちしますニヤ。と言って、居間を出ていった。

部屋に、少しだけ重い空気が流れる。少しして、ロビンがゆっくりと口を開いた。

「アタシ、ヒューゴのそばにいちゃ、いけないのかなあ……」
「え？」

ロビンの言葉に、ヴァンは首を傾げる。酒場で何かあったのだろうか。一方、イレーヌは何も言わずにただロビンを見つめている。

ロビンは言葉を続けた。

「アタシ、こんなだから……。ヒューゴには迷惑ばかりかけて、優しくしてくれてもどう返せばいいか分からないし、結局、ヒューゴのこと、ものすごく傷つけて、さっきだって手を出してくれたのに、アタシ、触らないでって……。だいつきらいつて言っちゃって……」

もう頭もはつきりと回っていないのだろう。まるで小さな子供のように、ロビンはずっと泣きじゃくっていた。

本当は触ってほしいのに、それを拒絶した。

本当は大好きなのに、大嫌いだと言ってしまった。

天の邪鬼のようだ。もしくは、ヤマアラシ。

互いの気持ちを反対に言ってしまったり、愛し方を分からずに互いの棘で互いを傷つけあってしまったり。その結果、自分から相手を遠ざけてしまう。

ヴァンはまだ子供だったし、そういうことには疎い方であったが、ロビンの想いは何となくではあるが、理解できた。

どういふ経緯でそんな想いを抱くに至ったかまでは分からなかったが、ロビンがヒューゴにどのような想いを抱いているかは理解できた。

「なあ、ロビンさん。一つだけいいかな？」

ヴァンは、できるだけ優しくロビンに話しかけた。泣きすぎて目の下を真っ赤に腫れさせたロビンが、小さく首を傾げる。

これで自分よりも十三も歳上だとは思えない、あまりにも無垢な表情だった。

「オレ、まだガキだし、そういうのよく分かんないけど……、でも、ヒューゴはロビンさんと一緒にいるときに一番穏やかな表情かおをしてるよ」

「……え……」

「ヒューゴとの付き合いはまだ半年くらいだし、ロビンさんに比べたら全然短いけど、オレの知る限りでは、ロビンさんが来てからのアイツは、今までで一番良い顔してると思う」

それと同時に、時折思い悩むような表情も見られたが、今言う必要はない。それだけ、ヒューゴがロビンを想っているということなのだ。

今言わなきゃいけないことは、まだ別にある。

「きつと、ヒューゴもロビンさんと同じ気持ちなんじゃないか？」

……まあ、経験のないオレが言っても説得力はないけどさ」

「……………」

ヴァンの言葉に、ロビンは信じられない。とても言いたげな表情で自分の手の中にあるマグカップを見つめていた。すると、今度はそれまで黙っていたイレーヌが口を開く。

「ロビンちゃん。さっき貴女は『優しくしてくれてもどう返せばいいかわからない』って言ってたけど……、別に無理に返す必要はないんだよ」

「……おばあちゃん……」

イレーヌはロビンの手からマグカップを外すと、その両手を自分の小さな両手で優しく握った。

「人はね、別に見返りを求めて優しくするわけじゃあないんだよ。

その人が自分の大切な人だから、優しくしたくなるんだよ」

「……あ……」

「だから、返すものなんてないんだよ。無理に返す必要なんて、ないんだよ」

イレーヌがもう一度優しく両手を握る。やがて、ロビンの目からまた大粒の涙が溢れ出した。

そこでヴァンは、外から聞こえてくる足音に気づき、顔を綻ばせた。なかなかナイスなタイミングだ。

「ロビンさん。迎えが来たっばいぜ」

「ふえ？」

また泣き出しそうになったロビンが、ヴァンの言葉に動きを止めた。

しばらくして、工房の店側のドアを叩く音が三人の耳に届く。ベッケイが開けたのか、ノックはすぐに止み、ヴァンたちのいる部屋

に一人の青年が飛び込んできた。

その姿を見た途端、ロビンの目がこれでもかと言つくらいに大きく丸くなった。

「…………ヒュー、ゴ…………」

「教授…………」

肩で息をするヒューゴが、ロビンを真っ直ぐな瞳で見つめていた。

第二十三話 お師匠さまの本音（後書き）

……ヒューゴ。あんだ、ロビン姉さんに何したさ……？
作者ですらきちんと細部まで想像できません。

ヤバイ。ロビン姉さんがああ〜！

……自分は未経験ツスから、想像できません！（ええ）

まあ、彼もお年頃ですから

何気に姉さんももうすぐ三十路。あの人は外見も中身も年齢サバ読
みされるので、作者もたまにビビります（笑）

そしてそして。今回もコラボしちゃてました！

大半の方は、前書きで微妙に察知してたかと思いますが。

ん〜、ヒロインの嗜好が変になってきているのは気のせいかな？

……ま、いつか。（えええ）

次回、ヒューゴとロビンの行く末はどっちだ！？

あー。何か、外伝書きたくなってきた……。

第二十四話 お弟子さんとお師匠さま（前書き）

……長かった。

ここまで本当に長かった……。

前回に引き続き、モンハンらしくない展開の『たまじゅけ』です。

更に、二回連続で一万字突破&史上最長の長さとなりました。

一切、野生のモンスターは出てきません。

なのにこの長さ。

まあ、ストーリー重視のつもりなので無問題。

そんな感じ（どんな感じだよ）で第二十四話、スタートです。

第二十四話 お弟子さんとお師匠さま

ヒューゴは、苦しそくに肩で息をしながらも、真っ直ぐな瞳でロビンを見つめてきた。

「教授、こんなところで何してるんですか……」

「あ、えっと……その……」

しどろもどろになるロビンに対し、ヒューゴはゆっくりと、だがしっかりとした足取りでロビンに近寄った。

「鍛冶バア。あとヴァンくん。うちの教授が、ご迷惑をおかけしました……」

ヒューゴはロビンの頭に手を添えると、彼女に無理矢理頭を下げさせた。自分もそれに倣ってイレーヌとヴァンに謝罪を述べる。

それに対し、イレーヌとヴァンは首を横に振った。

「いいええ。私たちは別に迷惑なんて思っちゃいないよ。ねえ、ヴァン」

「ん。オレも思ってたねえし。でもヒューゴ」
「……？」

ヴァンの言葉にヒューゴが首を傾げると、ヴァンはニカッと笑いながら続けた。

「ちゃんと話、してやれよな」

「……分かってるぞ」

ヒューゴは苦笑いを返すと、まだ少しだけ震えているロビンの手を引いて、工房を後にした。

出ていった親友とロビンの背中を見送った後、ヴァンはボソリと小さく呟いた。

「大丈夫かな、あの二人……」

「心配なら、見に行くかい？」

ヴァンの呟きに小さくイレーヌがそう提案したが、ヴァンは首を横に振った。

「見に行きたいのは山々だけど、ちょっと今回はなあ……」

「あら。ギャラリーが多いなら、私らが行っても数に大きな変化はないよ？」

「へ？」

首を傾げながらお茶を啜るヴァンの横で、イレーヌは微笑みながら窓の外を指差した。

イレーヌの指につられて窓の外を見た瞬間、ヴァンはお茶を思いっきり嘔くことになる。

何故なら、窓の外にはボニーちゃんに跨がったレラを先頭に、ギルドの酒飲みメンバープラス がヒューゴとロビンの後を尾行して（つけて）いたのだから。

ヒューゴに手を引かれながら、ロビンは彼が何を言うのか気が気ではなかった。

あんなことを言ってしまった自分に、彼が何と言ってくるのか、検討もつかなかったし、検討をつけたくもなかった。

(もし、ヒューゴに嫌われたら……)

考えるだけで恐ろしい。むしろ、考えたくすらない。そうなら、自分は本当に独りになってしまう。

心の拠り所が見つかった今、再びあの奈落の底に突き落とされるのだけは、嫌だった。

と、そこで、ヒューゴの足取りが少しだけ崩れた。空いている手で、腹部を擦っている。

「どしたの？」

「あ、いや……。実はさっき、ボニーちゃんにど突かれちゃいました……」

「えー!? ちょっと大丈夫なのそれ!」

ロビンの記憶違いでなければ、ボニーちゃんは銀冠サイズだ。その突撃を生身で受けて無事に済むはずがない。

しかも、ヒューゴは怪我人だ。

「ヒューゴ、ちょっとドコかで休も」

「平気ですよ、傷口開いてないし……」

「アタシが平気じゃないの! 休むったら休むー!」

大丈夫だと言ひ張るヒューゴの手を今度はロビンが引つ張りながら、二人は川沿いの土手に腰を下ろした。ロビンは有無を言わせずにヒューゴを座らせると、その服に手をかけた。

「え、ちょ、教授!？」

「脱いで。本当に傷が開いてないか診るから」

「嫌ですよこんなところで!」

「脱ぐの!」

「いやだ!」

ヒューゴの傷を触診するはずが、ギヤアギヤアと軽く取っ組み合の形になりながら、二人は口喧嘩を始めた。

「大体さあ! 何であのときあんな無茶したわけー? アタシらめちやめちや心配したし!」

「あのとき僕がああしなかったら、貴女がこうなっていたかもしれないじゃないですか!」

「なつてないし! アタシ、ヒューゴみたいに弱くないもん!」

「うっわ。僕が一番気にしてること言いやがつてこのバカ教授!」

「バカあ!? アンタにだけは言われたくないし、このチキン! 根性なし!」

「誰がチキンだと! このあっぱらば!」

「あっぱらば!?! あっぱらば! 何よムツリスケベ!」

「そのまんまの意味だよつてか、僕はスケベはスケベでもムツリじゃないつつの!」

「あ、スケベは認めるんだ!。にやはははは!」

「思春期終えた青年舐めんこの年増!」

「あ、年増つて言つた! ひどおい! アタシまだピチピチだもん!」

「自分の歳数えてからピチピチとか言えやあ!」

もはや、子供の喧嘩だ。いつの間にか、怪我のことなど忘れて互いに頬をつねり合っている。

喧嘩の中身は、最初の目的とはだんだんずれていき、やがて半年前のことにまで遡っていった。

「何さー！ 人のこと襲っておいて途中で逃げ出したくせにー！」

「そっちだって、襲われておきながら悲鳴一つ上げないで、逆に怖かったんだからな！」

「ん何よー！ いきなり研究室で襲ってきた人にそんなこと言われる筋合いなし！」

いきなり。

その言葉に、ヒューゴはカチンときた。ふざけるな。どれだけ自分は彼女を想っていたのかも知らなかったくせに。

「だって、ずっと苦しかったんだ！ 貴女はユージンがいなくなつてから、ずっと何処かに行っちゃいそうな気がして！ 僕はずっと想っていたのに、貴女は僕を見てなかったから！」

「アタシだって、にーにーが死んでから、ヒューゴがアタシのこと何かビミョーに避け始めて、それで、いつも、ヒューゴがいつかいなくなっちゃうんじゃないかって、ずっと怖かったんだもん！」

二人が互いにここまで本音でぶつかり合ったのは、これがはじめてだった。

二年前にユージンという存在を失ってから、二人の間にはそれまでなかった見えない壁が生まれてしまった。

ヒューゴは、尊敬する男性を自分の過失で失った責任から。

ロビンは、唯一の家族を自分の身代わりに殺めてしまった悲しみ

から。

それ以来、互いをまるで壊れ物のように扱ってしまい、二人の壁は更に分厚くなってしまった。

今、それが少しずつ崩れかけていたのだ。

やがて、取っ組み合いは力の勝っているヒューゴがロビンを地面に押し倒す形で終わりを告げた。二人はまだ互いの頬をつねり合っていたが、その目には互いに大粒の涙を溢れさせていた。

「……教授、泣いてる」

「ヒューゴも、泣いてるよ……」

「……うるさいなあ」

「お互いさまでしょお……」

互いの頬をつねり合ったまま嗚咽を漏らす二人は、端から見ればかなり滑稽なものであったが、それでも当の本人たちは真剣そのものだった。

涙が枯れ、互いの頬から手を放すと、二人の間に穏やかな時間が流れた。ただじっと互いの目を見つめ合うほどに静かな時間を二人ははじめて共有していた。

しばらくして、どちらからともなく相手の背中に腕を回した。ヒューゴの腕がロビンを優しく抱き上げ、ロビンの腕がヒューゴにしっかりとしがみつく。

理由は特になかったが、二人は互いにそうすることを望み、知らず知らずのうちに互いの望みを掬い上げていた。

しばらくして、ヒューゴが意を決したようにロビンの耳元で囁くように言った。

「……好きです」

ヒューゴの弱々しい告白が、ロビンの耳から脳髓に向かって駆け抜ける。それはたった一瞬でロビンの中に浸透したが、彼女はそれを永遠に感じていた。

「ヒューゴ……」

「あのとき、はじめて貴女と出逢ったころから、ずっと好きでした……」

今、どんな人間も自分には敵わないとロビンは思った。そのくらい、幸せを感じていた。

ロビンは、再び涙を溢れ出させながら、ヒューゴに更に強くしがみついた。

「ヒューゴ……！ アタシも、ずっと好きだった……！」

「教授……」

「あんなアタシの講義を、『息抜きにちょうどいいし、面白い』って言ってくれたときから……」

しかし、自分はヒューゴよりずっと歳上だった。彼だって、もっと若くて御しやすい女性を選びたいだろうと思いい、しかしそれならば自分に縛りつけてしまおうと、彼を弟子に誘った。

自分は卑怯な人間だ。諦めが悪くて、意地汚い。

しかし、そんな彼女を、ヒューゴは選んでくれたのだ。

「教授……泣かないでください……」

体を少しだけ放し、ヒューゴはロビンの涙を指で拭った。ロビン

がヒューゴの顔を見上げてくる。ヒューゴは無意識に目尻に置いていた指をロビンの唇に移動させた。

「ユューゴ」

ロビンがヒューゴの名前を口にすると、僅かに唇が震えた。ヒューゴは手をロビンの頬に滑らせながら、ゆっくりと自分のそれを彼女に近づけていく。

あと一センチ。互いの息づかいを、間近に感じた。

と、そこで、

「うわっ、ちよ、押すなっアイルルパンツ！」

「だって見えないって何言っのよこのドスケベ！ ボニーちゃん！」
「ブフォーー！」

「ギニャー！ 旦那さん止めてニャー！」

ヒューゴたちのすぐ近くにある物陰から、レラが跨がったボニーちゃんとそれに吹き飛ばされたその他大勢が飛び出してきた。

「……………」

「……………」

突然のことに顔を放してそれを見つめる二人を他所に、その他大勢のうちの一人 ルーシイがガバツと起き上がる。

「ブハツ。死ぬかと思った！ って、あとちよつとでキスシーン見れたのにムキーツ！」

どこから取り出したのかハンカチを噛んで引つ張るルーシイの横で、ヴァンとナタリーがガクガクと震えていた。

「……ボニーちゃん怖いボニーちゃん怖いボニーちゃん怖い……」

「以下同文……グハニヤツ」

「あ、ナタリーまでやつちやった……」

一方、ボニーちゃんに跨がったレラは、気まずそうに頭を掻いている。他にも吹き飛ばされた何人かがしばらく色々とブーイングをかました。彼らはすぐに己の過ちに気づき、一斉に静まりかえった。

ヒューゴが、両手をパキポキと鳴らしながら、仁王立ちで彼らを鬼の形相で睨みつけていたのだ。

「……一体何しとんだアンタたちはああああっ！」

次の瞬間、ヒューゴの怒号が町中に響き渡った。

その後、後を尾行してきた皆に散々冷やかされながらも、ヒューゴとロビンは自宅への道を歩いていた。

しばらく歩いていると、酔いと疲労でロビンの足取りが危つくなり始め、ヒューゴは仕方なく彼女をおぶさることにした。

程なくして、背中からロビンの寝息が聞こえてくる。ヒューゴは

思わず顔を綻ばせた。

「まったく……あなたって人は……」
「……ウニヤア」

アイルーか！ と内心突っ込みを入れながら、ヒューゴは小さく苦笑いを浮かべた。昔も、研究に集中しすぎて途中で落ちてしまったロビンをこうしてベッドまで運んでいたことを思い出す。

家に帰ると、ソフィーがロビンをおぶさるヒューゴに目を丸くさせながらも、すぐに寢床の準備を整えてくれた。ソフィーとおやすみの挨拶を済ませて、ヒューゴはロビンをゆっくりベッドに降ろしてやる。

ソフィーがいつも綺麗にしてくれるおかげで常にふかふかクツシヨン性抜群のベッドに体を委ねたロビンは、気持ち良さそうに眠りながら微笑んだ。

酒がまだ残っているのか、ほんのりと紅潮した頬と薄桃色の小さな唇が、白く透き通る肌を彩っている。長い睫毛が目元に青い影を落としていた。

ヒューゴはしばし、ロビンの寝顔に魅入られていた。
ゆっくりと視線を移動させると、フレンチスリーブの袖からのぞく、眩しいまでの白い二の腕がヒューゴの視線に飛び込んできた。

重量のあるヘイボウガンを軽々と扱う彼女の腕は、のびやかで発達した筋肉を有しながらも、女性特有の柔らかな丸みも兼ね備えている。ショートパンツデニムからは、ケルビ顔負けのスラリとした美脚が、惜しげもなくその輝きをヒューゴに投げかけてくる。

そんなものを間近で魅せられて何も感じない男は、きっと不感症か同性愛者だ。しかも、彼女はヒューゴが五年間も想いを寄せ続けてきた相手。自然と体の奥深くから熱情が込み上げてくるのをヒューゴは感じていた。手を出しそうになって、慌てて堪える。大脳ははっきりと理性を残しているのに、制御できない。少しずつ、鼓動

が速く、そして強くなっていた。

こんな自制心と欲望の狭間で、これまで自分は幾度葛藤してきたのだろうか。

落ち着け。ダメだ。落ち着け……！

そう自分に言い聞かせながら、ヒューゴはゆっくりと立ち上がる。今はこれ以上彼女のそばに入れない。頭を冷やそうと、慌てるように踵を返した。

あまりに急いだせいで、ロビンに毛布をかけてやることも忘れて。

ハンターに与えられる平屋には、訓練所のような風呂は備え付けられていない。こんな夜更けにロビンを一人にして（ソフィーもいるが）公衆浴場に行く気にもなれず、仕方なくヒューゴは台所の蛇口をひねり、頭に思いつきり水をぶっかけた。

普段の彼ならあまり進んで選ぼうとは思わなかなり豪快な手段ではあるが、それでも確実に頭は急速に冷えていった。

冷えていく頭で、ヒューゴは先程の酒場でのやり取りを思い返していた。

彼女の言葉は、気持ち伝えたなんて表現は適切ではない。

彼女は、感情を吐き出したのだ。とんでもない痛みを伴いながら。

ロビンは、一人で食事を摂れない。風呂に入れない。確かに、ロビンは人と普通に話すことぐらいはできるし、用件を伝えることもできる。

だが、それが通常の二十九歳の成人女性レベルで、ということかなり疑問だ。その上、彼女は自分の本心を上手く人に伝えることは、殊更苦手なのだ。

聡明な彼女が、自分の欠陥を理解していないわけがない。理解していて、辛いと思わないわけがない。そんな気持ちを上手く伝えられずに、言葉にできずにいた。それが、溜まりに溜まってあんな形で吐き出してしまったのだ。

何故、気づけてやれなかったのだろう。もつと早く気づいていれば、彼女にあんなことを言わずに済んだのに。あんな風に、彼女を傷つけることはなかったはずなのに。

(……やめよう。今更後悔したって意味がない……)

水を止めて、ヒューゴは濡れきった頭を軽く振る。そうだ。後悔していても何も変えられない。あとは、これからの自分自身が決めていかなければならない。

部屋に戻り、戸棚から取り出した真新しいタオルで頭をガシガシと拭きながら、ヒューゴはベッドに視線を移した。ロビンは相変わらず無防備な格好で眠りこけている。そのあまりにも幼さの残る姿に、ヒューゴは苦笑いを零した。

はじめて彼女の隣で眠ったとき、すぐにヒューゴの目の前で眠りに落ちた彼女を見たときはあまりのその無防備さに目を剥いてしまったことを思い出す。

あのときは、よくこれで今まで襲われなかったものと半ば呆れながら思ったのだ。まあ、彼女を襲えるような勇士がいたかと言われると、いないとしか言えないのだが。

案の定、ヒューゴがベッドに入ってもロビンは目を覚まさなかった。一度眠ると決まった時間まで決して目を覚まさないロビンだが、それでもベッドにわずかに伝わる振動とか、シーツの擦れる音とかは彼女に届いているはずだ。それでも目を覚ますどころか、気にする仕草すら見せない。どれだけ深い眠りについていいるのだろうか。

ロビンの隣で横になりながら、ヒューゴは二人の体に毛布を掛ける。

水を頭から被ったせいで、ヒューゴの目はすっかり覚めてしまっていた。右肘について頭を支えながら、ロビンの寝顔を覗き込んだ。

「ヒューゴ……」

不意に、ロビンがヒューゴの名前を呼んだ。突然のことにヒューゴは体を強張らせたが、ロビンは再び小さな寝息を立てている。随分はつきりした口調であったが、寝言のようだった。続けて、ロビンの手が空を掴むように動いた。徐にその手に触れてやると、ロビンは満足したように微笑み、その手を握り返してくる。

彼女の微笑みと握り返してくる手の温もりを感じながら、ヒューゴは考えていた。

明日　もう今日か　には、彼女は王都に帰ってしまう。彼女が帰ってしまう前に、ヒューゴは自分の心を決めたかった。

朝、ロビンは柔らかな温もりを感じながら目を覚ました。

右手を誰かが握ってくれているらしい。まだ半分寝ぼけ眼で、ロビンは右手を覗きこんだ。白いロビンの肌とは違う、小麦色の大きな手。彼女はこの手の主を知っている。ロビンが世界で一番大好きな手だ。

「ヒューゴ……」

「おはようございます。教授」

頭の上から、優しい声が聞こえてきた。横になっっているロビンの隣で、ヒューゴが上半身を起こした形でロビンの右手を優しく握り返していた。

昨日のことが嘘のようだ。あんなに互いに傷つけあったのははじめてだった。でも、互いの本音を言い合ったのも、はじめてだった。

好きです。

こんな自分に、彼が言ってくれた言葉。自分は彼より八歳も歳上で、更に問題だらけだ。それでも彼は、自分を選んでくれた。

「教授、大事な話があるんです」

その彼が、いつになく真剣な面持ちでロビンを見つめてきた。オニキスのように澄んだヒューゴの瞳に、ロビンの顔が映っている。

「なあに……？」

一体、大事な話とはどういう意味なのだろう。ロビンには想像がつかなかった。

一方、ヒューゴは優しく瞳を細めると、空いている手でロビンの頬に触れた。

「僕は、まだ貴女の隣を歩けるほど立派な人間じゃない。もちろん、今すぐに貴女とまた一緒に暮らしたいけれど、でも僕はハンターとしても書士官としてもまだまだ未熟で、貴女を支えるだけの力がな
い……」

「……ヒューゴ……そんなことないよ。アタシはヒューゴがいれば」

ヒューゴの言葉に抗議するロビンの口に、ヒューゴの人差し指が

触れる。言葉を遮られてロビンが非難の混じった目で睨むと、ヒューゴは小さく苦笑いを溢した。

「貴女がよくても、僕が許せないんです。僕にだって、そのくらいのプライドはある。僕は、貴女を支えたいんだ」

先日のババコンガ討伐で、ヒューゴはロビンを守りたい一心で、彼女の楯になった。

しかし、まだ弱い自分は、それを完遂することができなかった。結果としてヒューゴは負傷し、皆の足を引っ張る原因になってしまったのだ。

もう、皆にあんな思いはさせたくない。

もう、ロビンにあんな顔をしてほしくない。

だから、ヒューゴは決めたのだ。

「待っていてください。教授」

「……………」

「僕は、一人前の男になって、必ず貴女を迎えにいきます。だから、それまで待っていてほしいんです」

もちろん、ロビンをあまり待たせる気はなかった。ヒューゴとしても、一刻も早く一人前になって彼女を迎えに行きたいのだ。

しかし、ロビンは何も答えずに、ただただ悲しげな瞳でヒューゴの目を見つめていた。今なら、彼女が何を言いたいのか分かる。だが、ヒューゴはそれに応える気はなかった。

しばしの間、二人の間に沈黙が走る。お互いに、互いの言葉に対する答えを待っていた。

沈黙を破ったのは、ロビンの方だった。

「ヒューゴ、アタシは……！」
「旦那さん、ロビン様。朝ニャ！起きて食卓に着くニャ！朝ごはんが冷めちゃうニャ！」

そこで、ドアの向こうからソフィーの声が二人の耳を叩いた。アイルーは、殊更食事と爆弾には口煩い種族だ。自分たちの技術に誇りと信念を持っている証であり、ソフィーもその例に洩れず食事の時間にはかなり煩いのだ。

「分かったよソフィー。今行く！」
「ウニャ！今日は奮発したから早く頼みますニャ！」

ヒューゴが答えると、ソフィーは満足したように言った。ヒューゴはそれに苦笑いを返すと、ロビンに向かって微笑みかける。

「行きましょう。朝ごはんが冷めちゃいます」
「……ん」

まだ話は終わっていないかったが、ヒューゴはもう続ける気はないようだ。そのままロビンの手を引いてベッドから起こすと、食卓に向かつて行った。

ロビンは、何も言えずにただヒューゴを見つめていた。

自分は彼に何と答えれば良いのだろうか。

「バナナさん。教授をよろしく願います」

「任せとき・NA。ロビンちゃんはしっかり王都までお届けする・ZE」

「ブフオオオツ！」

丁寧に礼をするヒューゴに、バナナが歯をキラリと輝かせながら答える。更に、それに同調するように、ボニーちゃんが大きく鳴いた。

ロビンの見送りには、ゴードンにレラ、フラディオの他に、アレクソンとノンノとピリカ、そしてルーシイがやって来ていた。

ヘビイボウガンを背負い、『キリンXシリーズ』を着たロビンは、見送りに来た人々にペコリと頭を下げた。

「じゃあ、短い間だったけどお世話になりましたあ」

「ロビン。またいつでも遊びに來い。ワシらはいつでも大歓迎だ」

「ま、それまでもう少し常識をわきまえて貰えればいいかって痛いっ！」

「フラディオ！ アンター言多い！ ロビン姉さん。私もまた会える日を楽しみにしてるわ」

「うん。またいつか来るからね！ フラディオくんはもう少しレディの扱いを覚えといてねー」

「黙れこの年増サバ読み女」

「黙るのはそつちだしこの陰険石頭」

ロビンはルーシイに微笑みつつも、一方でフラディオを強く睨んだ。

よく分からないが、昔いろいろあったようだ。

フラディオと睨み合うロビンに、今度はアレンが笑いかける。

「今度来るときはもっとゆっくりしてってくれよな！ ロビンのアネキ！」

「今度は師匠せんせいの昔話やロビンさんのこと、もっと聞かせてくださいねえ」

「うん！ フラディオくんがクツク見て気絶した話とか、フラディオくんにゼロ距離射撃して遊んだ話とか、いっぱいしたげるね！」

「じゃあ、俺は貴女が間違えて男湯に入った話とか、トオイと野球拳やって負けそうになった話とかしてあげましょうか」

「黙るがいいし陰湿猫かぶり」

「そちらこそ黙ってるこの頭でっかち」

「……ダメだこりゃ」

結局再び火花を散らす二人に肩を竦めるアレンの横で、レラがほうつとため息を漏らした。

「ボニーちゃん、次はいつ来るのかしら……」

「ってレラ！？ 貴女何一人だけ別の場所見てますの！？ 今はそうではないでしょう！」

既にボニーちゃんしか見ていないレラに、ピリカが目を丸くして突っ込みを入れる。その光景に、思わず周りから失笑が洩れた。

と、そこへ、

「おーい！」

「あ、ヴァンくん！ やほー！」

町外れの方向から、ツナギ姿のヴァンが何かを抱えてこちらに走ってきた。ヴァンは全速力で駆けてくると、持っていたものをロビンに差し出してくる。

ロビンは差し出されたものを見て、目を丸くした。

「ふえ？」

「弓の素材で余ったコンガの毛で作ったんだ。道中で着てくれよ」

ヴァンが差し出したのは、ピンク色のロングコートだった。サイズはロビンにピッタリだったし、デザインもなかなか素敵だ。

案の定、ロビンは突然のプレゼントに顔を綻ばせた。

「すごおい！ ヴァンくん器用だねー」

「オレは武具職人だけ。縫い物くらい朝飯前さ。サイズは大体目測で分かるし」

「アンタ、何気に所帯染みた特技が多いわね」

胸を張るヴァンの横で、正気に戻ったレラがボソリと呟く。ヴァンがレラに拳骨を入れた直後にルーシイのぐりり攻撃を喰らっている横で、ロビンが戻ってきたヒューゴにコートを見せた。

「ヒューゴヒューゴ。ヴァンくんがコートくれたー。着せて着せてー！」

「え？ うわ、ヴァンくんありがとう！ すっごく良いコートじゃないか！」

コートを見せられ、その出来に感嘆の声をあげるヒューゴに、ようやくルーシイから解放されたヴァンは笑い返した。

「別にそのくらい簡単だって。礼はいらねえよ」

しかしすぐに、ヴァンはヒューゴに近づいてこっそり耳打ちをする。

「それに、キリン装備なんかで街中歩かれてナンパされたりしたら、ヒューゴだって気が気じゃないだろ？」

確かにそうだった。ヒューゴはすっかりそのことを忘れていた自分に苛立ちを覚えると同時に、気が利く親友に感謝の念を覚える。口パクで『ありがとう』とだけ伝えると、ヒューゴはロビンにコートを着せてやった。

「なになに。二人で何の話してたのー？」

「内緒です。それより、挨拶が済んだなら乗りますよ。忘れ物はないですね？」

「ん。ないー」

コクリと頷くロビンに向けて、ヒューゴは指を三本立てた。

「道中、バンナナさんに迷惑をかけない。宿屋は必ず個室にシャワールームのある場所を選ぶ。帰ったらまずはマグレガー教授に謝る。……いいですね？」

「ういー。分かってるよー。ヒューゴ、ホントにアタシのお母さんみたいー」

「はいはい、どうせ僕は口煩いですからねー」

いちいち細かく指示をするヒューゴに頬を膨らませるロビンを、ヒューゴ軽くあしらいなから客車に上らせた。そうすると、自分がもう彼女としばらく会えなくなるのだと、改めて感じた。

待っててください。

ヒューゴの言葉に、彼女はまだ答えていない。しかし、彼女の答

えが何であろうと、ヒューゴの決心が揺らぐことはない。
これだけは、譲れなかった。

「それじゃ、道中気をつけてくださいね。手紙、書きますから」
「あ、待って、ヒューゴ！」

砂煙を被らないように後退するヒューゴに、ロビンが慌てて声を掛けてきた。ヒューゴはきよとした顔でロビンを見つめる。

「どうしました、教授」

「えっと……んと……こっち来て！」

「へ？」

「いいから来て！ はーやーく！」

珍しくどもりながらもいつも通りに客車をバシバシと叩くロビンに、ヒューゴは小さく肩を竦めながら近づいた。二人は一人一人分くらいの距離まで縮まる。

しかし、ロビンは再び客車を叩いた。

「もつと。もつと近くまで来てよ！」

「何ですか……」

「いいから！ もつと近くまで来て！」

「……はいはい」

駄々を捏ねるロビンに苦笑いを溢しながら、ヒューゴが更に近づいた。

二人の距離が、ついにあと十数センチのところまで縮まる。

ロビンの呼び掛けの意味が未だに分からないヒューゴは、小さく首を傾げた。

「一体どうしたんですか教じ」

次の瞬間、いきなりロビンがヒューゴの両頬に手を添え、身を乗り出してきた。

柔らかな感触が、ヒューゴの唇に触れて重なった。

「……………!?!」

一瞬、何が起きたか全く分からなかった。

目を開いたままのヒューゴの視界には、ロビンだけが映っていた。長い睫毛が、目の前で僅かに揺れている。

唇に触れていた柔らかな感触が離れた。そこでようやく、触れていたものが彼女の唇であることを悟った。

いきなりの接吻にヒューゴが顔を真っ赤にする一方で、ロビンが満面の笑みでヒューゴを見つめてきた。

「ヒューゴ。アタシ、待ってる」

「……………」

「でも、なるだけ早く迎えに来てね。アタシ、早く一人前になったヒューゴに会いたい」

「教授……………」

ロビンの満面の笑みを見て、ヒューゴの中に彼女に対する愛しさが一気に溢れ出した。ヒューゴは、ロビンにもう一度触れようと無意識に手を差し出す。

しかし、

「バナナナっち、ボニーちゃん。出てちょーだい!」

「了解した・ZE!」

「ブフォー！」

触れるその僅か一瞬前に、ボニーちゃんが一気に駆け出してしまった。ロビンの顔が、すぐに見えなくなる。

呆然とするヒューゴの後ろで、その場にいたゴードンとフラディオを除く全員が、顔を真っ赤にしていた。

一気に遠くなっていくミミルの町を見ながら、ロビンは心の中でガッツポーズをしていた。

やった。やってやった！

ヒューゴが自分を迎えに来るのを、あの研究室で待つ。きっと彼ならすぐにハンターとして大成し、そう遠くないうちに自分を迎えに来てくれるだろう。

しかし、ヒューゴのいない学院は、あまりにも淋しい。マグレガー教授には悪いが、彼女の一番はヒューゴなのだ。彼のいない場所にはあまりにも物足りない。

だから、せめて彼の温もりをこの体に刻んでおきたかった。だが、彼は臆病者だ。きっと、必要以上に自分に触れてきてはくれない。

ならば、こちらから触れてやろうと、ロビンは別れ際の接吻を思いついたのだ。

ヒューゴの唇は、柔らかく、それに僅かにだが震えていた。自分の唇に触れながら思い出すその感触は、きっと淋しさを覚えたとき

に温もりを与えてくれる。あとは、それが薄くなってしまいう前に彼が迎えに来てくれるのを待つだけだ。

それなら、自分はきつと彼を待てる。

澄みきった青空を見上げながら、ロビンはいつか必ずやって来る最高の幸せを思い描いていた。

第二十四話 お弟子さんとお師匠さま（後書き）

あい。今回でヒューゴとロビン編は一先ず終了です。
うん。ハッピーエンド最高！

ロビン姉さんは意外にも人気があったので、またいつか必ず出した
いです。

ヒューゴ、頑張って一人前になってくれ。

今回は、作者自身がまず未経験の『恋愛』を書くのにものすごく苦
劳しました。

ええ。村山由佳の偉大さを改めて知りました。彼女なしに今回の話
は書けなかった。

恋愛もののバイブルですよ、アレ。

更に、大人と少年の狭間にいるヒューゴの心理を書くのも大変だっ
た。うん。やっぱり村山由佳は偉大だ。

そして、バナナナ&ボニーちゃんと、彼らを提供してくださった一
休先生に、この場で感謝を申し上げます。

彼らがいなかったら、ロビン姉さんを描くのに更に苦勞してた気が
します。

素晴らしいキャラクターを貸してくださり、本当にありがとうございました。
いました。

あと、前回の最後にてからすが呟いた一言、

『外伝書きたくなってきた』

あれ、やってみちゃおうかな。と思っています。

まあ、もう少し本編が進んでからの話になると思うので、大体四月以降を予定していますが。

いくつか案はあるのですが、とりあえず、まずは読者の方々の意見を聞いてみようかなと。

もし、外伝として読んでみたいキャラクターがいましたら、メッセージ感想で教えてください。

頑張ってください。

文字数ヤバ気なので、今回はこの辺で。

また次回お会いしましょう(・o・)(ノ)

第二十五話 試練の幕開け（前書き）

ども。現在、三月中旬までに免許を取ろうと四苦八苦している旅が
らすです。路上怖い教習生の車怖い……。ん。頑張ろう！ 負ける
な自分！

はい。今回からまた舞台が変わります。

ヴァンとビューゴには、もっともっと強くなってもらわねばね！

そんな感じで、第二十五話、スタートです。

第二十五話 試練の幕開け

交易都市・ドンドルマ

シュレイド地方からヒンメルン山脈を越えた、険しい山間に切り開かれた土地。

大陸の中央に位置するものの、立地条件から発展は難しいといわれていた場所だが、大長老と呼ばれる指導者の下、周辺に生息するモンスターとの共存を掲げ、今ではハンターたちが最も集う場所として発展した町だ。

ドンドルマにはハンターが数多く集うための様々な施設が揃い、彼らが必要とする薬品や道具などが売られ、逆にハンターたちが手に入れてきたモンスターの素材や各地域の特産物が商人に買われ、交易の拠点としても大きな成長を遂げている。

今では、西シュレイド地方のミナガルデと並ぶ『ハンターの街』なのだ。

「でつけえ……。これが中央ギルドか……」

草食獣モンスター、ケルビの皮やマカライト鉱石などを用いて作られた防具、『バトルシリーズ』を着たヴァンは、目の前に建つ建物に目を丸くしていた。

ハンターズギルドの総本山・中央ギルドだ。ドーム状に造られたそれは、規模だけでもミミルの街にあるギルドの倍以上、いや、十倍近いかもしれない。お抱えのハンターも軽く三桁は超えているとフラディオオから聞いてはいたが、それは田舎育ちのヴァンの想像を遥かに超えていた。

「はあぁ。世界にはこんなでつけえ建物があるんだな……」

「大きさはら学術院も負けてないけどね」

いつの間にいたのか、ヴァンの横で緑と銀で彩られた甲冑を着込んだ男がそう口にした。がっちりヘルムと兜を被っているため、顔は見えない。緑色の甲殻や鱗によって造られたその鎧は、『陸の女王』リオレイアの素材を使った『レイアシリーズ』だ。男は背中に回転式リボ連発拳銃を模したハンマー『工房試作品ガンハンマ』を背負っている。

ヴァンは、レイアシリーズを着込んだ男を見て、ニカッと楽しそうに笑った。

「なかなか似合ってるじゃん。ヒューゴ」

「そうかなあ……。僕は何か着てるって言うより着せられてる感じがめちゃくちゃするんだけど……」

ヴァンが笑いかけた男　ヒューゴは、兜の脱ぐと少しだけ怯えた表情をヴァンに見せた。それに対し、ヴァンは笑顔でヒューゴの背中を叩く。

「大丈夫だって！　チョー似合ってる！　やっぱ、がたいが良いと鎧がかっこよく見えるな！」

「いや、僕まだFクラスだよ？　そんなハンターがレイアシリーズ着ることがまず異例なのに……」

「俺だって『クイーンブラスターE』を背負ってるぜ？　ほら」
「むう……」

ヴァンが背負っていた緑色の弓を展開すると、ヒューゴは少しだけ不服そうにしたものの何も言い返せずに黙ってしまった。

ヒューゴが着ている『レイアシリーズ』は、二人がはじめて出会ったその日に遭遇したりオレイアの素材を使用して、ヴァンが一週

間かけて拵えたものだ。先のババコンガ討伐でランポスシリーズの胴鎧を壊してしまったヒューゴにと、ヴァンはレラに了解を得て造ったのである。

もちろん、リオレイアの討伐に参加していなかったヒューゴは、最初は受け取りを拒否した。しかし、ヴァンが既にヒューゴのサイズで防具を作ってしまったこと、また、ヴァンも余った素材で『クインブラスターⅠ』を造っていたことを受け、しぶしぶ防具を受け取ったのである。

「最近、やたらとアイツを討伐してこいだのあの鉱石を掘ってきてくれたの言ってたのは、このためだったんだね……」

「ゼーんぶオレが調達したら、ヒューゴは絶対に受け取らねえしな。自分で持ってきた素材が入ってるなら、問題ないだろ？」

「まったく、文句を言いたくてもこれじゃあ言えないよ」

小さくため息を溢すヒューゴの背中を、もう一度ヴァンが叩いた。

「ハツハツハ！ やったもん勝ちだな！」

「いいさ。絶対早く昇格して、この鎧着ても可笑しくない実力になってやる」

しかし、もうヒューゴの顔に不満の色は無く、固い決心を抱いた強い瞳でギルドを見上げていた。

それを見て、それまでふざけていたヴァンも一気に心を引き締める。

「おう。じゃあ、気張っていこうぜ、昇格試験！」

「うん！」

二人は互いに強く頷き合うと、ギルドの大きな扉を開いた。

ハンターランク昇格試験

年に四回行われる、ハンターランクの昇格を目的とした名前通りのイベントだ。ハンターランクはハンターとしての実力を見る大体の目安となっており、これによって依頼の上限が決められている。

ヴァンたちの現在のハンターランクは最下位のFクラス。クエストの上限は『ドスランポスおよびその派生モンスター、同レベルの中型モンスターの討伐』だ。当たり前のことだが、このランクで留まるハンターは普通いない。皆、ハンターになってすぐの昇格試験でランクアップを目指すのだ。

ロビンがミミルを去ってから一ヶ月が過ぎ、レラやアレンたちと共に護衛依頼をいくつか経験した二人に昇格試験の通知が届いたのは、八月の終わり、ちょうど一週間ほど前のことだ。

「昇格試験って、内容どうやって決めるんだろうな？」

「アレンくんたちの話だと、ギルド側がランク昇格に適した依頼をハンターに課して、その結果で審議するらしいよ」

昇格試験の内容は、もちろん『狩り』だ。更に、その相手はそれまで経験したものは明らかにレベルが上のモンスターである。

昇格したいなら、このくらいのモンスターを狩って己の実力を示せ。ということらしい。

ちなみに、Eクラス昇格に必要な実力の目安は『大型鳥竜種の討

伐を単体狩猟ソロハントでこなす実力』だそうだ。狩猟対象も大概は一貫している。

『怪鳥』イヤンクックだ。

「クックかあ。あんときは嫌な目に会ったよなあ……」

「あのときの先生の怒った顔。本当に怖かったよねえ……」

試験参加の受付を済ませ、酒場を兼ねたホールの端の席に腰掛けた二人が思い出すのは、まだ互いに訓練生だった頃の記憶だ。

あの夜、『青怪鳥』イヤンクック亜種の襲撃を受け、アレンの言うことを聞かなかった二人は怪我を負い、フラディオの怒りを買ってしまった。今思えば、あれが二人の絆を強めたのではあるが、やはり亜種とはいえイヤンクックに白旗を振った記憶は、あまり良い思い出ではない。

「ちょっといいかい？ その若造どもよ」

クックの苦い思い出とこれからの試験について物思いに耽っていた二人は、自分たちに声をかけてきた老人に全く気づかなかった。

おおよそ子供と大差ない小柄な竜人族の老人は、リスのように顔を膨らませると、ヴァンが座っている椅子によじ登り、彼の髪を持ち上げて耳元で大きく叫んだ。

「これ！ 立場弱きジジイが話しかけるとのに、無視するんじゃない！」

「どわあっ！」

老人としては、自分の言葉が無視されて悔しいのだろう。気持ちは分からないでもないが、耳元で叫ばれた方は洒落にならない。

案の定、突然耳元で響いた大声に思わず声を上げたヴァンは、すぐに叫ばれた方の耳に手を当てた。その声に、ヒューゴも現実を意識を引き戻す。

「え、どうしたの？ ヴァンくん」

「おおお……。鼓膜破れたかと思ったぞ……」

「うぬ？ お主、耳が変な形じゃのお。なんじゃ、ハーフかえ？」

「って、謝らねえのかよ、爺さん！ あと人の耳いじくんじゃねえ！」

一方、二人の会話など完全に無視し、ヴァンの耳の形に興味を示した超マイペースな老人は、ほんの少しだけ尖った彼の耳を引っ張ったり摘まんだりして遊び始めた。

ヴァンは何とか老人を引き剥がすと、まるで不良のような目つきで老人を睨む。

「おいジジイ。人の体で勝手に遊びやがって、一体何様のつも」

「そこの少年、何をしている！」

しかし、悪態をつこうとしたヴァンを、更に別の声が止めた。刹那、ヴァンと老人の間に片手剣の一種、細剣レイピアが挟まれる。

ヴァンに向けられたそれは、『陸の女王』リオレイアの上質な素材から作られる『クイーンレイピア』だ。それを手にしているのは、『空の王』リオレウスの上質素材から作られた防具『レウスシリズ』に身を包んだ、ヒューゴよりもやや年上の妙齡の女性だった。

「貴様、その方が誰かを知っての愚弄か！？」

「……………」

「え、ちょっと！ あなた一体誰ですか！？」

「質問に質問で返すな！」

「ひいつ！」

思わず抗議の声を上げたヒューゴに、女性はそれまでヴァンに向けていたレイピアの切っ先を向けた。ヒューゴはその鋭さと女性から放たれる威圧感に思わず萎縮してしまう。

しかし、ヴァンは一切何も言わなかった。ただ、黙ってジィツと女性のレイピアを見ている。

女性は何も言わないヴァンに痺れを切らしたのか、再びヴァンにレイピアを向けた。

「おい少年！　なぜ貴様先刻から何も言わないのだ！」

「……………」

「少年！　答えぬのならつてきやあ！」

突然、老人を離して女性の手ごとレイピアを引つ張ったヴァンに、それまで威勢の良かった女性は小さく可愛らしい悲鳴を上げた。ヴァンはそんなことなど一切に気にせず、女性の手に掴まれたままのレイピアをジツと観察し始める。

「あんなに分厚いレイアの堅殻をこんなに細く、しかも鋭く加工してる……………これ、霞竜の爪と紅玉を使って研磨されてるんだ……………」

「は……………！？」

突然武具の観察を始めたヴァンに、女性は目を丸くした。しかし、一端そういった目で武具を見始めるとヴァンは決して思考を止めない。

もう既にそのことに慣れてしまっているヒューゴは悪い癖が出たなあと言いたげな、半ば呆れた表情で、見慣れていない老人と女性は不可思議な目でヴァンを見つめていた。

「それにこの防具。甲殻に傷がほとんど見られねえ。レイピアの『斬る』のではなく、『突く』動作が成せる技なんだな……」

「しょ、少年……あ、あの、そのだな……」

真剣にまじまじと防具まで観察し始めたヴァンに、女性がたじろぐ。そんな女性のことなど全く考慮せず、ヴァンはキラキラとした目で女性を見上げた。

「なあなあ。籠手だけで良いから外してくんねえかな？ 初対面で申し訳ないのは分かってっけど、リオレウスの素材なんて滅多にお目に掛かれないんだ！ 頼むよ！」

「っ！ あ、あう……」

レイピアを向けられたことや老人に耳をいじくられたことなど既に蚊帳の外のような。ヴァンの目は女性の身につける武具にのみ向けられていた。あまり向けられたことのない類の視線に、女性は思わず顔を赤らめていた。

その横で、疾うにヴァンに忘れ去られた老人が、小さな声でヒューゴに訊ねる。

「青年よ。あの少年、いつもああなのか？」

「貴重な素材で作られた防具を見ると、完全に外界はシャットアウトしちゃいますね。彼にとつて、未知の素材との遭遇は人生で最も素晴らしい時間なんだと思います」

「ふむ。そうかそうか。そいつはまた、興味深い……」

ヒューゴの言葉に老人が満足そうに頷くその横で、ヴァンは更に女性ににじり寄っていた。

「なあ、頼むよ！ ホントに防具見るだけ！ ホントそれだけだか

「らさー！」

「！！……はうう……」

尚も目をキラキラと宝石のように輝かせるヴァンを見て、女性は突然ガノトトスの水ブレスにやられ撃沈した船のようにその場にしゃがみ込んだ。顔も下を俯いてプルプルと震えている。

しばらくして、女性から搾り出すような小さな声が聞こえてきた。

「……るな」

「へ？」

「そんなキラキラした目で私を見るなあああ！　べ、別に可愛いとかハグしたいとかなんて思っていないから！」

「……………はい？」

突然そう叫んだ女性は、目にも留まらぬ速さでヴァンの手から自分の左腕と『クイーンレイピア』を引き抜くと、バツと立ち上がった傍らにいた老人を抱き上げた。有無を言わさずに抱き上げられた老人は、首を傾げながら女性を見上げる。

「うぬ？　もう行くのかえ？」

「はい、行きます！　文句は言わせませんよ！　行きますからね！　少年。貴様、次はないぞ。覚えておけ！」

何を覚えておくのかよく分からない発言をした女性は、顔を赤らめたまま、結局名前すら名乗らずに老人とその場を立ち去っていった。その後姿を、ヴァンはまるで一番大切な玩具を盗られた子供のような目で追いかける。

「あっ、レウスの上質素材が……………！」

「……………ヴァンくん、何気に天然だよね……………」

そして、結局こちらでも女性ではなく素材しか見ていなかったヴァンに、ヒューゴは半分感心、半分呆れた念を抱きながら、小さく咳いた。

「ん。何か言ったか？」

「何も。あ、料理来たみたい」

ヒューゴが肩をすくめるのとほぼ同時に、二人の前に先程注文した料理が運ばれてきた。ポポ肉の煮込みを使ったシチューの香ばしい香りが、二人の鼻腔をくすぐる。

二人は先程の謎めいた二人組のことはとりあえず頭の隅に追いやりながら、目の前の料理に集中することにした。

「ん？ 今、オレら名前呼ばれたか？」

「え？ そう？」

昼食を終え、食後のお茶を飲んでいた二人は、カウンターから聞こえてきた声に耳を澄ませた。すると、人々の喧噪の合間から自分たちの名前を呼ぶ声が聞こえてくる。

「あ、ホントだ。ヴァンくん、耳良いね」

「竜人は結構人間よりも発達した器官が多いからな。っと、それよ
か行こうぜ」

ヴァンはそう言って立ち上がると、弓を背負い直してカウンターへと歩き出した。遅れて、ハンマーを背負ったヒューゴがその後を追う。

カウンターに行くと、栗毛の妙齢の受付嬢がヴァンたちを見て手元の書類を確認した。

「ハンターズギルド・ミミル出張所付きFクラスハンター、ヴァン・ドラグニル様ならびにヒューゴ・レペンス様でよろしいですか？」

「おう。合ってるぜ」

「はい。その通りです」

「では、本人確認のため、ギルドカードをご提示下さい」

受付嬢の言葉に、二人は自分たちのギルドカードを示した。受付嬢はそれを確認すると、コクリと頷く。

「確かに承りました。それでは、昇格試験のご説明をさせていただきます。まず、ドラグニル様はこれよりクルプティオス湿地帯へ、レペンス様はジオ・テラード湿地帯に向かっていただきます。試験内容となるクエストはこちらで既に受け付けてありますので、詳細は向こうに着き次第確認してください」

「え。別々の場所で試験を行うのですか？」

ヒューゴが首を傾げながらそう訊ねると、受付嬢はコクリと頷いた。

「はい。今回は単体狩獵ソロハンの技能を見ることも兼ねていますので。質問が以上ならば、一時間後にお二人とも西側の門に集合願います。試験官のアイルーがそこで待っている手筈になっています」

「アイルーが試験官!？」

今度はヴァンが奇声を上げた。しかし、受付嬢は「何か問題でも？」と言いたげな目でヴァンを見つめるだけだ。ヴァンは信じられないとでも言うように頭に右手を添えた。

「試験官って、人じゃねえのかよ……」

「我がギルドの試験官アイルーは、すべてDランク指定のクエストを単体狩猟でこなせる猛者たちです。あなた方の足を引っ張るようなマネは一切致しませんよ。……まあ、あなた方が彼らの足を引っ張ることはあると思われませんが……」

「んだとおっ!？」

「ヴァ、ヴァンくん! ダメだよ!」

軽い嘲笑を浮かべる受付嬢の最後の言葉に苛だちを覚えたヴァンはカウンターから身を乗り出そうとしたが、済んでのところヒューゴがそれを止めた。ヴァンは威嚇する猫のようにフーッと荒い息を吐いていたが、すぐにカウンターから身を引く。

それを確認して、受付嬢は笑顔を二人に向けた。絶対に営業スマイルである。

「では、そのようにお問い合わせいたします。ギルドを出て裏側に入ったところに、ハンター御用達の雑貨店がございますので、荷物はそちらで纏めてください。ホテルはギルド指定のもですよね?」

「あ、はい。そうです」

まだ受付嬢に掴みかかりそうな勢いのヴァンを押さえたまま、ヒューゴはブンブンと首を縦に振った。

「では、そちらの延泊料金はこちらが負担いたします。荷物もそのまま預けられて構いませんので」

「分かりました。丁寧にありがとうございます」

「いえ、ギルドの務めですので」

受付嬢はそれだけ言うと、一礼してカウンターから去っていった。ヴァンはそれを見てようやく力むのを止めたので、ヒューゴがヴァンの拘束を解いた。

しかし、ヴァンはすぐにダッシュで外へと一人飛び出していく。

数秒後、

「デュアアアアアアア！」

という謎の奇声とともに、誰かが思いつきり何かを蹴る音がギルドに響いた。ヒューゴは小さくため息をつく、周りにペコペコと謝りながらギルドの外に出る。

今ほどにロビンの奇行に慣れていたことに有り難みを感じた瞬間はなかった。まったく恥ずかしいとすら思わない自分も自分ではあるのだが。

外に出ると、案の定、ヴァンが近くに立っていた大木に鬱憤を晴らしていた。周りの好奇心な視線など全く気にせず、ヴァンは大木に跳び蹴りを何発か入れた後に、頭突きと正拳突きまでかましていた。それは、ヒューゴが外に出てからも、大体一分ほど続いた。

最後の頭突きを終えて、大木をミシミシと音が鳴るほどに握りしめるヴァンに、呆れ顔で近づく。

「……気が済んだ？ ヴァンくん」

「ぬおおおおおお。ぜってえに試験チョーブツチの余裕綽綽モードでクリアして、あの受付嬢に目にももの見せてくれるぞ！」

「……勝手にしてくれ」

呆れて肩を竦めるヒューゴの横で、ヴァンは決意の雄叫びを上げていた。

一方、ギルドの裏手では、先ほどの受付嬢が小さくため息をつきながら『本来の正装』に着替え直していた。

ギルドの制服から深紅の鎧に着替えなおした女性は、腰に深緑の小振りな武器 片手剣を納め、右手に対となる新緑の荊を模した楯を装着する。それは、先ほどヴァンに向けた『クイーンレイピア』だった。

「相変わらず、変装が上手いのお」

「っ!？」

着替え終わった女性が一息ついた瞬間、背後に突然、先ほどヴァンたちにちょっかいをかけていた竜人族の老人がひょっこりと現れた。

不意を突かれて身構えていた女性は、相手が老人であることを確認すると安堵のため息をつく。

「貴方様も、その気配を消して人の後ろに立つ癖を何とかしてください。驚くではありませんか」

「ほっほっほ。まだまだ現役のハンターには負けんぞえ」

脱力する女性と対象に、老人は楽しそうに微笑んでいる。しかし、

老人はすぐに真剣な眼差しで女性を見つめた。

「舞台の準備は？」

「万全です。すべて貴方様の指示通りに取り計らいました。しかし、腑に落ちないことがあるのですが」

そう言って老人の顔色を伺う女性に、老人は優しい笑みを向けた。

「進言を許そう」

「はい。まず、彼らはまだFクラスです。クエスト達成状況を見ても、あのような試験内容にするのはどうかと」

女性が神妙な面持ちでそう言うと、老人は顎に手を当てつつ、懐から煙管キセルを取り出して口にくわえた。女性はすぐにしゃがみ込んでそこに火を点けてやる。

老人はしばらく煙草を燻らせると、にんまりと笑った。

「あの者らが、『疾風迅雷』の息子であり、Sクラスハンターの『赤王』の弟子であるとしたら？」

「存じています。しかし、それでも」

「お主が気に入ったであろうミカン色の髪の少年」

女性の言葉を遮って、老人は言葉を続けた。女性は先ほどのことを思い出したのか、顔を赤らめてその言葉に抗議を唱える。

「気に入ってなどいません。あれは、その……気の迷いです」

「そうなのか？ まあよい。とりあえず話を聞け。……あの少年は

武器職人『神の手』ジン・ドラグニルの玄孫であり、『弓の賢者』

サジタリウス

レヴィ・エルフィードの息子じゃ。そして、もう一人の黒髪の青年

は『炎槌』ユージーン・グレンジャーおよび『至高の探検家』ロビ

ン・グレンジャーの弟子。ならば、その実力はFクラスながらも未知数であると言える」

若き力は叩いて伸ばせじや。と老人は楽しそうに言葉を終えた。しかし、女性はまだ納得がいかないらしい。難しい顔で老人を見つめていた。

「それでも、今回のクエスト内容。どちらにもレベルが高すぎるかと。普通はDランク認定試験、それもチーム戦の内容と相違ないものですよ？ それをまだハンターになつて半年の青年たちに単体狩猟として課するのはどうかと……」

「できぬのなら、それまでよのお」

老人はそれまでの楽しそうな笑顔から一変、厳しい目で虚空を見つめていた。ハンターの仕事は常に死と隣り合わせ。それは試験と言えど変わらない。

女性は老人の目の奥にある真意を悟ったのか、それ以上何も言うことはないと言を閉ざした。元より、この老人は一度決めるとなかなか考えを変えようとしなない。何も言ってももう無駄なのだ。

女性が半ば諦めの表情を浮かべていたことに気づき、老人は険しい顔を元に戻した。

「今ならまだ、彼らを止めることはできるぞ？」

老人は珍しく女性にそう進言したが、女性は間髪入れずに首を横に振った。

「……いえ。私は貴方様の剣であり楯。手であり足。主たる貴方様に逆らう気は毛頭ありません」

「うむ。そうか。その忠誠心、感謝するぞ、サーシャ」

「感謝など……。我が体は貴方様のためだけにあります。どうぞ、骨の髄までお使い下さい。会長」

女性　サーシャはそう言うと、腰に差していた剣を胸の前に構えて老人　ハンター協会会長、ゴールドバ・レッドフォックスに頭を垂れた。

ゴールドバとサーシャのすぐ脇に、先ほど彼女が受付所に扮していた際に見ていた書類が落ちていた。そこには、ヴァンとヒューゴの顔写真の他に、今回彼らに宛われたクエストの書類と一緒に纏められていた。

『クエスト名：電撃祭　2nd』

場所：クルプティオス湿地帯

受注者：ヴァン・ドラゲニル

狩猟対象：『帯電飛竜』フルフル』

『クエスト名：疲労知らずの石泥棒

場所：ジオ・テラード湿地帯

受注者：ヒューゴ・レペンス

狩猟対象：『毒怪鳥』ゲリヨス亜種』

第二十五話 試練の幕開け（後書き）

えー。早速登竜門のクックをすっ飛ばした『たまじゆけ』です。だって、訓練編で出しちゃいましたし。二度も出したらつまらないし。

それにヒューゴには早く彼女を迎えに行って欲しいし（え）

さあて、いきなり大型飛竜と対峙したり、ハンマーとは相性最悪な奴との勝負を突きつけられていることなど知らずにいる二人。どうなることやら、ホントに……。

また次回お会いしましょう（・o・）ノ

第二十六話 あり得ない試験（前書き）

突然ですが、ヒューゴがレイアシリーズになった経緯のお話。

元々、ヒューゴに最終的に着せる防具の中継ぎが欲しかった

あれ、そういや、最初に倒したレイアの素材……………使ってねえ！
？ あちゃ〜、どうしよう……………

ヴァンにレイア着せてもなー（既にこちらも決定していた）。レラ
はリオハート着てるから今更だし……………

そうだ。ヒューゴに着せちゃおう！

あ、でもあいつランポスどうやって脱がせよう。あの性格じゃ、絶
対に受け取らないだろうし……………

あ、そうだ。

ランポス壊しちゃえばいいんだ

こんな感じでした。完全後付けノリ設定です！ ロビン姉さん出る
時点では決めてましたが。

そんなノリで、第二十六話、スタートです。

第二十六話 あり得ない試験

クルプティオス湿地帯

ドンドルマのハンターが一般に『沼地』と呼ぶ場所。年間を通じたの降雨量が多く、日照時間も少ない気候のため、それに適した樹木や菌糸類が生い茂っている。

地形に特に顕著な特徴はないが、夜になると点在する沼から気化した毒ガスが噴き出す恐ろしい場所となる。この毒はイーオスが吐くものや毒テングダケに含まれる毒素に似た致死性のものであり、気体を吸うだけではなく皮膚に付着することでも汗腺を通じて体内に侵入するため、夜の狩りでは解毒薬は必須である。

また、沼地の東側にある洞窟は太陽光が一日を通して一切差さないため、入る際はホットドリンクを服用することが望ましい。この鉱脈から採れる鉱石には希少価値の高いものが多く、採集依頼も少なくない。

「おお、さすがヒューゴ。チョー分かりやすい説明文だけ」

ドンドルマでヒューゴと別れ、竜者に揺られること半日。無事にクルプティオスに到着したヴァンは、拠点に建てられたテントの中で小さな紙切れに感嘆の声を上げながらポーチに荷物を詰め込んでいた。

ヴァンが持っているのは、クルプティオスについて詳しく書かれたメモだ。書士官でもあるヒューゴの頭には、大陸中に点在する狩場の情報がぎっしり詰まっている。沼地にはじめて行くヴァンにと、買い物を素早く済ませて書き上げてくれたのだ。

「希少価値の高い鉱石かあ。そういや、親父も沼地には水晶クリスタルの鉱脈が多いって言ってたっけ。時間があれば採りに行きたいなあ」

「んなもん、クエストをクリアしてからにしるニヤ」

ヴァンの独り言に、ベッドの端っこにちょこんと座っていたアイルーが小さく肩を竦めた。緑色の兜と茶色い甲冑を着込んだ灰トラのアイルーは、今回の試験監督でベンジャミンというらしい。

「というか、フルフル討伐にバトルシリーズで挑む奴なんて、見たことも聞いたこともないニヤ。その上無属性の弓ときた。おミヤアはアレか、死にたがりかニヤ？」

「おいクソネコ。てめえもう少し可愛げのあるコメントできねえのか？」

ヴァンは悪態をつきながら、ベンジャミンを睨み上げた。さつきからベンジャミンはヴァンのことを見下した発言ばかりしている。

ベンケイの方がずっと可愛い。今回のクエストが終わって家に帰ったら、めいっぱい可愛がってやろうと、まったく相性の合わないベンジャミンを見てヴァンはそう思った。

「ってか、オレだって試験内容はここに来て知らされたんだ。いきなり相手がフルフルだって聞いたときは『マジか？』って思ったんだぜ」

そう、ヴァンとてその情報を聞かされたのは、クルプティオスに到着してからののだ。フルフルのことは、知り合いに愛用者がいるし故郷でも何度か素材として扱ったことはあるから知ってはいた。しかし、生きているフルフルをヴァンはまだ見たことが無かった。

が、それに対しベンジャミンはヴァンの言葉に鼻をフンと軽く鳴らすだけだった。実力はあちらの方が上とは言え、はっきり言っても気分の良いものではない。

「んなこと知らんのニヤ。ボキだつておミヤアの試験を見るとしか言われてないのニヤ」

どうやら、このアイルーは『ボク』と発音できないらしい。先ほどまでは何て最悪なアイルーなんだと思ったが、急に可愛げのある奴じゃないかと思えてきた。

「ボキは早く帰つてごろごろしたいのニヤ。早く救護に報酬せーんぶ取られてクエストリタイアしてくれニヤ」

気のせいだった。

今すぐにその生意気な口を叩く頭を掴んで目の前の池に放り投げたい衝動に駆られたが、ヴァンは両頬を叩いてその考えを霧散させた。受付嬢のみならずアイルーにまで馬鹿にされたままでは、男が廃るというものだ。今はクエストに集中しなければ。

「あ、ところでさ。フルフルってどんな奴なんだ？ オレ、実物は見たことないんだよね」

「気持ちの悪い奴ニヤ。超グロテスクニヤ！」

「……わりい。チョー意味不明なんだけど」

フルフルの名前を聞いた途端に体を震わせるベンジャミンを見て、ヴァンは頭にクエスチョンマークを浮かべた。すると、ベンジャミンはベッドの脇にある小さな箱から、小さな本を取り出してヴァンに放り投げてきた。

ヴァンはそれを受け取ると、本を見て首を傾げる。

「これは？」

「沼地に生息するモンスターの図鑑ニヤ。その真ん中より少し後のページにフルフルが載ってるニヤ」

「ふーん……」

ヴァンは適当に相槌を打ちながら、言われたページをめくる。視界に飛び込んできた絵を見た瞬間、ヴァンは大きく目を見開いた。そこに書かれていたのは、この世のものとは思えない程にグロテスクな生物だった。

真っ白くブヨブヨとした表皮に太いホースのような首。目はなく先端に割れたような口が存在するだけ。耳なのか、先端のすぐ近くに小さな穴が開いていた。足や翼爪はカエルのようにひどく不恰好だ。短い尻尾は、何故か先端が平べったい円状になっている。

『帯電飛竜』フルフル

第一印象、

「グロツ！ 何コレ生き物!?!」

「ウニヤ！ グロテスクニヤ!」

はじめて二人の意見が合致した瞬間だった。

「皮見てたときは全く感じなかったけど、コイツかなりホラーチックだな……」

「ボキはこいつが一番嫌いニヤ！ バインドボイスなんて、この世のモンじゃないニヤ！ ビリビリはもっと最悪なのニヤ!」

「ビリビリ?」

ヴァンがベンジャミンの言葉に首を傾げると、ベンジャミンはベツドから降りてヴァンに近づき、フルフルの絵の隣を肉球のついた愛らしい手でぺちぺちと叩いた。それに倣って、ヴァンは本に目を戻す。それは、フルフルの生態について書かれた文章だ。

フルフルは雪山や沼地など、主に洞窟のある寒冷地に生息する。

その姿かたちも他の飛竜と一線を越えるものがあるが、最も大きな特徴は吐息^{ブレス}である。ほとんどの飛竜種が火炎を放出するのに対し、フルフルは『電気』を放出する。

天災ともいえる雷を支配下に置くモンスターは、他に『幻獣』キリンが上げられるが、キリンが角を避雷針として雷を呼ぶことに対し、フルフルは体内に発電器官を持っており、尻尾を地絡^{アース}として口や表皮から電気を放出する。これは、フルフルにしか見られない特徴であり、またハンターが最も注意すべき点である。近接武器を扱うものは表皮からの放電、遠距離武器を扱うものは電気ブレスに注意せよ。

また、怒り状態に陥ると口から白いと息を吐き始め、尻尾の地絡を使わずに放電をしながら体当たりをすることがあり、危険極まりない。掠っただけでも致命傷に値する場合があるので、下位ランクといえどDクラス以上のハンターで対応すべきである。

「……………ん？ オレ、目でも悪くなったか？」

文章を全て読み終わったヴァンは、小さく唸りながら目頭を押さえた。それを見て、ベンジャミンが首を傾げる。

「ウニヤ？ いきなり何を言うニヤ？」

「いやさ。今ものすつごく不吉な文章が読んだ気がすんだけど……………」

気のせいか？ 気のせいだよな。とブツブツ呟きながら、ヴァンは再び文字の羅列に目を通し、最後の一文を見て固まった。

『下位ランクといえどDクラス以上のハンターで対応すべき』

『Dクラス以上』

ヴァンの現在のハンターランク、Fクラス。

「……なんだとおおおおおおおおおおおっっ！」

次の瞬間、近くにいたベンジヤミンが思わず耳を塞いでしゃがみ込むほどのバインドボイス並みの叫びが、拠点中に響き渡った。

時を同じくして、ジオ・テラード湿地帯。

こちらはミナガルデのハンターに一般に『沼地』と呼ばれる場所だ。辺境最大の町、ジオ・ワンドレオの北にあるジオ・クルーク海のさらに北方にあり、ドンドルマからも比較的近い場所にある。

気候は冷温帯に属しており、こちらもホットドリנקを必要とするくらいに寒い洞窟があり、独特なモンスターの巣窟にもなっている。

「ハアツ……ハアツ……！」

ぬかるみの多い洞窟の外にあるエリアで、『工房試作品ガンハンマ』を構えたヒューゴは大木に身を隠しながら息を整えていた。

（おかしい……。この試験、おかしすぎる……）

ヒューゴのランクは最下位のFクラスだ。例えレイアシリーズを着ていようともその事実は変わらない。

(この試験、絶対に何か仕組まれてる……っ!?)

息を切らしながら兜を脱ぎ、ポーチから元氣ドリンクを取り出して煽るように飲み干したヒューゴは、既に聞きなれてしまった奇声に身を竦ませた。試験官のアイルは、狩猟対象と相対した瞬間、邪魔になるからと既にどこかに消え去っていた。

「もう、ここまで来たのか……!」

ヒューゴは舌打ちをして兜を被り直すと、そつと大木から顔を覗かせる。少し離れた場所に、今回の狩猟対象がいた。

打ち鳴らすと強い閃光を発する石を頂いた鶏冠。アヒルのような外観はゴム質の表皮に覆われており、あまり愛嬌のある顔とは言えない。

羽は蝙蝠のような形状で、羽ばたくというよりもバタつかせて飛んでいるという印象を受ける。

『毒怪鳥』ゲリヨス

しかも、それはただのゲリヨスではなかった。通常、ゲリヨスの表皮は濃紺に近いグレーをしているはずだ。

しかし、そいつの表皮は赤紫色をしていた。亜種、別名『紫怪鳥』だ。

(よりもよって、ハンマーの単体狩猟^{ソロハント}でゲリヨスの亜種だなんて……)

ゲリヨスの特徴。多くのハンターがまず取り上げるのは、その表

皮の性質だろう。

ゲリヨスの表皮に、打撃属性の武器は効かないのだ。まるでゴムのように弾力性のある表皮は、打撃を完全に吸収する上にほとんどの飛竜が苦手とする雷属性も効かない。

（唯一の救いは、武具の相性……か。ヴァンくんには感謝しないとな）

ヒューゴは自分が握り締めているハンマーと着ている鎧に目を落とした。

『陸の女王』リオレイアの素材から作られた防具は、装着者を毒から守ってくれる性質を持っている。下位クラスのレイア装備ではその効力は本来半減されているが、ヴァンは抗毒珠など毒耐性を付加する装着品で鎧を強化、毒を一切受け付けないようにしてくれたのだ。ゲリヨスの中で特に危険性の高い攻撃の一つ、毒液はコレで完全に遮断できる。

さらに、レイアの余った『火竜の体液』とヒューゴが採掘したマカライト鉱石を用いて、ヴァンが『アイアンストライク』を強化させた『工房試作品ガンハンマ』は、火属性を秘めた武器だ。ゴム質の皮を持つゲリヨスとは、唯一相性がいい武器と言える。

事実、目の前にいるゲリヨスには傷が一切無いが、それでも焼け焦げた痕がいくつもあった。ヒューゴのハンマーが掠めたものだ。

しかし、それには一つの欠点があった。

「せめて、もう少し火力があれば……！」

そう、火力不足だ。

ヒューゴの『工房試作品ガンハンマ』は、名前の通りまだ発展途上の武器なのである。つまり、付加されている炎の威力も弱い。それでもヴァンの腕で通常のものよりは強い火力を持っているが、ゲ

リヨスの表皮にはまだ敵わない。どうやら、ゲリヨス自体も相当強め、上位に近い下位ランクに位置するのかもしれない。

ゲリヨスは大木に隠れているヒューゴには気づかず、猛スピードで毒液を吐きながらはるか遠くへと走り去っていった。

「『疲労知らずの毒怪鳥』とは、うまいこと言う人もいるよな……」

ゲリヨスの血液は別名『狂走エキス』と呼ばれ、赤血球中のヘモグロビンが人よりも遥かに多く、血液からの酸素供給を活発化させる効能を持っている。ヒューゴの師・ロビンが狩猟をする際に常に携帯している『強走薬』は、このエキスをを用いたものだ。

奴の辞書に『スタミナ切れ』という言葉は無い。それは、超重量を誇るハンマーを扱うヒューゴには致命的だ。いくらなんでも、ゲリヨスの如くハンマーを構えたまま走り続けるなど無理な芸当。短期決戦に持ち込みたくても、あのゴム質の皮は厄介以外の何者でもない。

まさに、八方塞がりの状態だった。

不意に、鼻腔が刺激臭を感じ取り、しゃがれたアヒルのような雄叫びが辺りに響いた。続けて、何かを打ち鳴らすような音が聞こえてくる。

「……っ!？」

思わず、ヒューゴは音のした方を振り向いてしまった。

それが、間違이었다。次の瞬間、沼地一帯に閃光が迸ったのだ。

「うああっ!」

目が焼ける。閃光玉よりも遥かに強い光が、ヒューゴの視界を塞いだ。思わずハンマーを手から落とし、目を押さえるように兜に手

を当ててしまう。

それが、二つ目の間違い。威嚇で閃光を発したゲリヨスは、ヒューゴの叫び声を聞いて敵の位置を完全に察知した。ゲリヨスはヒューゴのいる方を向くと、毒液を撒き散らしながらヒューゴに向かって走り出す。ゲリヨスの頭が、ヒューゴの腹部を直撃した。

「がはっ！」

耐え切れず、吹き飛ばされる。やっと回復した視界の隅で、まだ真新しいハンマーがゲリヨスの足元に転がっていた。立ち上がったゲリヨスは、まるで人を小馬鹿にするかのように尻尾をこちらに向けてブンブンと振るっている。取れるモンなら取ってみる。と言っているようにも見えない。

ヒューゴは兜の中で口に溜まった血を吐いた。少量だが、兜の中で鉄臭い匂いが立ち上る。自分の血とは言え、あまり気分の良いものではなかった。

（クソツ。あんなに素早いと、畏に嵌めることも儘ならない……閃光玉も効かない。ハンマーも効かない……。せめて、何か突破口さえあれば……）

ヒューゴの頭が、現在ある手持ちの道具から策を練ろうと思考を開始する。しかし、なかなか良い案は思いつかない。

ロビンがいつか言っていた、ヒューゴの『悪い癖』が出てしまった。

自身の中にある知識をフルに生かし、様々な事象を突破する『道筋』を瞬間的に見破る能力に長けているヒューゴだが、まだその能力は発展途上だ。自身の力に気づいていない彼は、その能力を使用する際にすべての意識を遮断してしまう。

その時間差は、ハンターにとって命取りの瞬間になりかねない。

事実、考えることに意識をすべて預けていたヒューゴは、ゲリヨスの嘴が頭上に落ちてきたことに気づけなかった。鈍い音が、辺りに響き渡る。

「あがつ……………」

兜のお陰で大事には至らず、何とかその場でふらつくだけに留まったが、ゲリヨスは続けてその場で回転する。遠心力をつけたよくなる尾が、ヒューゴの頭を直撃した。

「う……………あつ……………！」

今度は耐えきれなかった。打たれた勢いのまま、ヒューゴは地面にゴロゴロと転がっていく。

朦朧とする意識の中で、ヒューゴは『死』を間近に感じていた。

（死ぬ……………のか……………）

今のままでは、そうなっても何ら不思議ではなかった。武器のない状態でヒトよりも遙かに強いモンスターに勝つなど、到底無理な話だ。それに、ヒューゴにはもうハンマーを振るえるほどの体力は残っていないかった。

ゲリヨスは既に動かなくなったヒューゴに興味を無くしたのか、そつばを向いて近くのキノコをついばんでいた。

（夢、叶ってないのになあ……………）

様々な思い出が、走馬灯のように次々と思い浮かんでいく。

開拓団で両親を手伝う傍ら、様々な文献や口伝を通じて、様々な物事を『知る』楽しさを覚えたこと。

両親がそんな彼の為に、こつこつと貯めたお金で学院院を受けさせてくれたこと。

書士官となつて、開拓団の両親が無事に旅を進めるようにしたいと思えた。しかし、ヒューゴには足りないものが多すぎた。

このままでは進級すらできず、途方にくれていたとき、ヒューゴは『彼女』に出逢つたのだ。

そこで、それまで一ミリ足りとも動かなかつたヒューゴの体が、ピクリと反応を示した。

ヒューゴ。アタシ、待ってる。

思い出すのは、最後に会ったときの彼女の言葉。『待っていてください』と言つた自分に、別れ際に口づけて彼女はそう言つたのだ。今、あの広い本だらけの研究室で、彼女は自分の迎えを一人で待っている。

「教……授……」

そうだった。自分はまだ、こんなところでは死ねない。

ヒューゴの体に、静かに力が流れ込んでくる。ゆつくりと浸透していくそれは、彼女　ロビンが与えてくれた想いだ。

「僕は……負けられない……」

こんなところで倒れるわけにはいかない。彼の迎えを待つ彼女の元へ行くまでは、立ち止まってなどいられない。

ヒューゴは最後の力を振り絞つて、立ち上がった。それに気づいたゲリヨスが、ヒューゴを振り向いて大きく鳴いた。

「迎えに行くんだ……」

ゲリヨスと再び対峙しながら、ヒューゴはこの状況を突破する『
道筋』を見出だしていた。ゆっくりと、しかし徐々にスピードを上
げながらゲリヨスに向かつて駆け出す。

ヒューゴの脳裏に浮かんだのは、口づけを終えた後の、彼女の太
陽のような笑顔だった。

「教授を、迎えに行くんだ！」

ヒューゴの叫びに、ゲリヨスが呼応するように突進を仕掛けてき
た。ヒューゴはすぐに身を低くする。

「ああああああああっ！」

ヒューゴはそのまま、ゲリヨスの足の間を前転をしながら通り抜
けた。すれ違い様に、腰のポーチからピンク色の玉を取り出してゲ
リヨスに投げつける。玉はゲリヨスの下腹部に当たって潰れると同
時に、刺激臭を発生させた。

しかし、ヒューゴはそれ以上何もしなかった。ゲリヨスの足の間
を走り抜け、少し離れた場所に落ちている『工房試作品ガンハンマ』
を拾い上げると、ゲリヨスに背中を向けたまま走り続けた。

そう、ヒューゴが見出だした『道筋』とは、『逃げる』ことだっ
たのだ。

今のままでは、作戦もへったくれもない。まずは身体を休める場
所を確保し、作戦をゆっくり練る必要がある。自分には生きる理由
がある。そのために、今は無理は禁物だ。

もちろん、対策としてペイントボールを当てることも忘れてはな
らない。ヒューゴには親友のヴァンと違い、モンスターの位置を正
確に把握できる能力はない。ペイントをしなければ、いくら作戦を
立てても無に帰してしまう。

ゲリヨスの嘶きを背中越しに聞きながら、ヒューゴは拠点に向かって走り続けた。

第二十六話 あり得ない試験（後書き）

片やおふぎけ。片や真面目な二十六話でした。

あ、まだ外伝募集続けてます。

一応、旅がらす自身が考えているものをいくつか載せますので、参考に見てみてください。

- ・若き日のフラディオ（テオとの死闘・今は亡き親友との話）
- ・学院でのロビンとヒューゴ（ヒューゴがミミルに行く日までの出来事）
- ・ドンドルマでのレラ（ナタリーとの出会い）

今のところはこんな感じです。

ただし、ロビン姉さんとヒューゴのお話は、九十%恋愛ものかと…

…ユージーンがたまに姉さんと狩りをする程度かと…。

他にも読みたいのがあれば、どしどし教えてください。

また次回！

第二十七話 狩人の咎（前書き）

どもです。最近頭の中に貯めていた話を一気に書いて、ストック無視で更新を続けている旅がらすです。

いや、そろそろヒロインを目立たせないと。と思っているのです。まあ、試験終わるまでは出番無さそうですけど（ええ）頑張っつてそれなりのペースで書いて行こうと思います。

あ、今回はかなり懐かしいキャラが出てきます。では、第二十七話、スタートです。

3 / 8

修正しました。

我ながら凡ミスだったな、アレ……（遠い目）

第二十七話 狩人の咎

「あーっ、もうどうしようー！」

何とか命からがらゲリヨスを撒いて拠点にたどり着いたヒューゴは、ベッドの上でゴロゴロと転がりながら頭を抱えていた。

（ハンマーはあのゲリヨスには効かないし、火属性とはいえ火力不足。長期戦に持ち込まれたら、こっちのスタミナが持たない……）

「どん詰まりって、正にこのことだよな……」

無理だ。いくら何でも分が悪すぎる。

いつそのこと、長期戦に持ち込んでハンマーで焼ききれるだけ焼ききってやろうかとも考えたが、それはすぐに霧散した。

クエストには、大概二日間という制限時間が設けられている。二日間（もう残り一日半となってしまう）のうちに、そんな作戦でのゲリヨスを討伐できるかと言われると難しい。本当ならば、こうして考えている時間すら惜しいのだ。

「だあぁっ！ こんなことしてる場合じゃないのにいいー！」

このままでは不合格になってしまう。そうすると、次の試験は三カ月後だ。それはつまり、ロビンを迎えに行くのが三ヶ月先延ばしになってしまうことを意味していた。

（うわああ。それだけは絶対勘弁したい！）

ヒューゴの脳裏に、別れ際にロビンと交わした接吻の記憶が蘇る。

それは、時折寂しさを覚えてしまうヒューゴの心に温もりを与えてくれるが、それ以上に欲望も呼び覚ましてしまう。ロビンのあの無防備な寝姿とか、柔らかそうな肌とか、猫のそのように指に絡みつく髪の毛とか……。

まあ、ヒューゴも男の子なのだ。無理もない。

(って、今はんなこと考えてる場合じゃないってば自分！ 今は試験のことだけ考えるおお……！)

危づく脱線しかけ、ヒューゴは慌てて頭を振った。本当にそんな場合ではない。

「でも、本当にどうしよう……」

万策尽き、途方にくれていたそのときだった。

「あれ。お前ヒューゴか？」

「え？」

突然名前を呼ばれ、ヒューゴはベッドから起き上がった。ヒューゴの目の前に、砂竜ガレオスの素材を用いて造られた装備『ガレオスシリーズ』を身に纏い、背中に锚を模したハンマー『イカリハンマー』を背負った男が立っていた。

面識のない相手に名前を呼ばれ、ヒューゴは首を傾げる。

「あの……どちら様ですか？」

「つねねえなあ、ヒューゴ！ 俺だよ俺……っておっと、兜被ってりゃわかんねえか」

男はそう言うと、ゆっくりと兜を脱ぎ去った。

その下から現れたのは、今ヒューゴが着ているレイアシリーズの元になったリオレイアに遭遇したときに出会った青年……

「ワットさん!？」

「おう、正解だぜ!」

青年、ワット・グールはヒューゴの驚いた顔に満面の笑みを浮かべながら、ヒューゴに向けて親指をグツと立てた。

ヒューゴはベッドから立ち上がると、ワットの手をギュツと握った。

「お久しぶりです! お元気でしたか？」

「ああ。あのとときの腕のケガも大したことなくてな。今も元気にハンターやってるぜ。お前も昇格試験か？」

通常、クエストを受注すると、依頼が完遂されるまでの期間は狩場の一定区域には受注時に登録したハンター以外の立ち入りが禁止されている。

しかし、試験中になると狩り場の数よりも受験人数が上回るため、時折この二人のように狩り場で出会うことがあるのだ。

ワットの『試験』という言葉に、ヒューゴは苦笑いを溢しながらも頷いた。

「ええ、まあ。ワットさんも試験なんですか？」

「ああ。Dランク昇格試験で、岩竜を相手にしてきたところさ!」

ヒューゴの質問にワットは笑顔で答えると、後ろに引いていたらしい荷車をヒューゴに見せた。そこには、灰色の岩のようなものがいくつか積みまれている。

「『岩竜』……バサルモスですか？」

「そうさ。こいつ、ずうつと洞窟の中に居座りやがってよお。危うくホットドリンクが尽きかけるところだったぜ」

苦笑いを浮かべつつも、ワットの顔は嬉しそうに輝いていた。Dクラスと言えば、ハンターとして一人前と認められるランク付けとなる。彼もようやくハンターとして胸を張っていけるのだ。それは嬉しいことに違いない。

(いいなあ。ワットさん、すごく輝いているや……)

楽しそうにバサルモスとの戦いを話すワットを見て、ヒューゴは少しだけ悔しかった。あのととき、ゲネポスシリーズを身に纏っていた彼が、それよりも強固なガレオスシリーズを着ている。それは、彼がハンターとして成長している何よりの証だ。

しかし、自分はどうかだろう。ランポスシリーズからレイアシリーズに防具は変わったが、このレイアは自分の力で手に入れたものではない。今背負っているハンマーも、親友が自分のために彼の素材を使って強化してくれたものだ。

このままでは、自分はただ他人にすがり付いているだけの人間になってしまう。試験を受ける前に言った言葉すら、意味のないものになってしまう。

と、そこで、ワットがヒューゴの顔の前で手の平を上下に振った。

「おい、ヒューゴ？ なーに明後日の方向向いてんだよ？」

「ふえ？ あ、ごめんなさい。えっと、なんでしたっけ？」

「おいおい。お前大丈夫か？ にとだな。せつかく爆弾大量に持ってきてたのに、最初の一回しか使わなかったって言ったんだよ」

「……爆弾？」

ワットの言葉にヒューゴが首を傾げると、ワットは頷きながら荷車の後ろを指し示した。バサルモスの甲殻の後ろに、大小様々な大きさのタルが所狭しと積んである。ハンターが使う罫系道具トラップツールの一つ、爆弾だ。と言っても、爆薬を詰めたタルに信管を取り付けたと言う超簡単な造りのものなのだが。

「バサルモスって、岩に擬態する習性があるからさ。擬態しているところをドカーンとやって奴に大ダメージを食らわせる作戦だったのに、あいつずっと同じ場所に居続けるもんだから、最初の一回しか必要なかったんだよ。爆弾は処理に困るから、あんまり持ち帰りたくないんだけどなあ……」

あー、もったいねえことした。とワットは苦笑いを浮かべた。

しかし、ヒューゴの耳にワットの話は入っていなかった。爆弾を見た瞬間、彼の思考が一気にフル回転する。

爆弾、火薬、ゲリヨス、ゴム質の皮、打撃は吸収するが、火に弱い……。

それらの情報が一気にヒューゴの脳内を駆け巡り、更に先ほど逃げる途中で見たケルビの情報がそこに収束していく。

今あるものを使ってゲリヨスを打ち破る『道筋』が、完全に見えた。

「そつだ！ その手なら！」

「ん？ 何がそうなんだ？ ヒューゴ」

突然叫んだヒューゴに、それまで苦笑いを浮かべていたワットが頭の上にクエスチョンマークを浮かべた。ヒューゴはそれに構わず、ワットの腕をグツと掴む。もちろん、ワットは目を丸くした。

「ヒューゴ?」

「ワットさん。その爆弾、僕にください!」

「へ?」

「お願いします! どうしてもその爆弾が僕には必要なんです!」

訳が分からずポカンと口を開けるワットに、ヒューゴは深く頭を下げた。たった今思いついた『道筋』は、ワットが持ってきた爆弾がなければ成立しない。彼の持つてきたものは、ヒューゴにとってこれからの左右する重要な要素^{ファクター}だった。

ヒューゴのあまりの熱心な声に、しばらく口を開けたまま呆けていたワットだったが、何かを察したのか握られていない方の手でヒューゴの肩をポンと叩いた。

「分かった。やるよ、ヒューゴ」

「本当ですか!?!」

ワットの言葉を聞いた途端、ヒューゴの顔に笑顔が飛び出した。これで、あのゲリヨスを討伐できるのだ。ヒューゴは腰のポーチから財布を取り出す。

「えっと、いくらぐらいですか? それ」

「タダでやるよ、ヒューゴ」

「……へ?」

今度は、ヒューゴがポカンとする番だった。呆けるヒューゴに、ワットはニカッと笑いかける。

「お前は俺を助けてくれた。そのおかげで、俺は今回の試験に参加できたし、バサルモスを倒すことができた。恩人のお前の頼みなら、

爆弾くらい無償でやるよ！」

「……ワットさん」

ありがとうございます。と言おうとしたところで、ワットがストップとでも言うように手を前に出した。

「おっと、礼は言うなよ。逆に、ずっと礼が言えなかったのは俺のほうなんだ。……あのとき、助けてくれてありがとな、ヒューゴ。本当に感謝してる」

「……………あの、えっと……………」

「お待たせしましたニャー！　ワット・グール氏をお迎えに上がりましたのニャー！」

何と言えば良いのか分からず、言葉に詰まるヒューゴを他所に、アプトノスの竜車を引いたアイルーが二人の前に現れた。どうやら、ワットはここに来る前に迎えの信号弾を打ち上げていたようだ。

ワットはやってきたアイルーにハンドシグナルで返事を返すと、ヒューゴの肩をもう一度叩く。

「お前が何を相手にしているのかは知らないけど、絶対に負けんじやねえぞ。がんばれよ、ヒューゴ！」

じゃ、爆弾は置いてくからな。とだけ言い残すと、ワットはバサルモスの素材を竜車に詰め込んで、自分も客席に乗った。ヒューゴは慌てて竜車の傍に駆け寄る。

「ワットさん、本当にありがとうございます！」

「おいおい。礼は言うなつつつたのに……まあ、いいや。俺、レクサーラに住んでんだ。もし砂漠に来ることがあれば、俺んちに寄れよ。宿代わりの部屋と食事くらいなら用意できるぜ」

「はい！ 今度行くときは、ぜひ寄らせていただきます！」

「はは。そのときまでに敬語じゃなくてタメ口で話してくれると尚更嬉しいぜ。じゃ、またな！」

最後にワットがそう言うと、竜車がゆっくりと湿地帯から離れていった。ワットたちの姿が見えなくなるまで手を振っていたヒューゴは、彼が置いていってくれたタル爆弾セット　大タル爆弾が三つに小タル爆弾が十個の計十三個の爆弾と爆薬　を振り返る。

「……よし、まずは分解だ！」

ヒューゴは何かを決意したようにそう頷くと、防具を脱いで爆弾の分解を始めた。

夕方、ヒューゴは拠点を出てすぐのエリアで、剥ぎ取りナイフを振るっていた。彼がナイフを向けているのは、小型の草食獣、ケルビだ。

「……ごめんよ」

ヒューゴは小さく呟くと、すれ違い様にケルビの右目にナイフを突き立てた。ヴァン特製のマカライト鋼製ナイフは、頭蓋を越えてケルビの脳を易々と貫く。ケルビは断末魔の声すら上げることができずに、ゆっくりと地に伏せた。

ヒューゴはケルビが息絶えたのを確認すると、その腹部にナイフを沿わせてゆつくりと引いた。丁寧に腸を捌きながら、ヒューゴは目的の白い物体を取り出す。

「取れた、ホワイトレバー！」

ヒューゴがケルビから取り出したのは、ケルビの肝臓『ホワイトレバー』だ。通常、肝臓は赤色をしているが、ケルビやガウシカなどの肝臓はその一部が脂肪に置き換えられた脂肪肝である。

脂肪肝は、必要以上に餌を与えることで人工的に作られることが多いが、野生の草食獣の中には自然にこの脂肪肝を作る個体がいる。食材としても有名で、とろりとした食感に病み付きになる貴族も多いとか。

しかし、ヒューゴの目的は食べることではない。これも、ゲリヨスを倒すために必要な素材なのだ。

「まだ、あと少し狩る必要があるかもな……」

ケルビの皮や角も丁寧に剥ぎ取りながら、ヒューゴは呟くように言った。ケルビは大人しい生物で、人に危害を加えることなど滅多にない。その生き物に刃を立てることに、ヒューゴは小さな罪の意識を感じていた。

「お前の命は、きちんと次に繋げるよ……」

ヒューゴは今しがた自分が摘み取った命に敬意を払うと、再び剥ぎ取りナイフを構えて走り出した。

夜、拠点でケルビの肉を食べながら、ヒューゴは分解し終えた爆弾から取り出した爆薬を、拠点に置いてあった調理用の油と一緒に小さなボウルに放り込んだ。そこに、更にペイントボールを分解してその中にある白い植物　ネンチャク草を加えて混ぜ込む。

「ん、このぐらいかな……」

ヒューゴは混ぜ棒で粘度が高くなったことを確認すると、それを再び空洞になったペイントボールに詰めなおした。同じような操作が何回も続き、やがてペイントボールだったそれは、十五、六個ほど溜まった。

「こっちはこのくらいでいいかな……じゃあ、次はこっちだ」

ヒューゴは数を確認して頷くと、今度はホワイトレバーを手に取った。剥ぎ取りナイフでホワイトレバーに切り込みを入れ、そこに爆薬を少量詰め込む。

爆薬を詰め込み終わると、それを『工房試作品ガンハンマ』の弾倉に詰めた。一つの弾倉に一つずつ、計六個の爆薬入りホワイトレバーを詰める。そこにケルビを狩っているときに採取したニトロダケを磨り潰したものを上に乗せ、さらにホワイトレバーを磨り潰してペースト状にしたもので蓋をした。

「これでよし……と」

ヒューゴは改造した『工房試作品ガンハンマ』を背負うと、爆薬

入りポイントボールをポーチに詰め込んで立ち上がった。ヒューゴの鼻腔を、『どんな場所に居ようともその位置をほぼ正確に示してくれる』匂いが微かに刺激する。

（まだペイントは効いている……。おそらく、今は奴も眠っているはず）

叩くなら今しかない。ヒューゴは最後に丸い装置を腰にぶら下げると、拠点を飛び出した。

ゲリヨスは、湿地帯のほぼ中央に位置する区域で、気持ち良さそうに眠っていた。それを見て、ヒューゴは小さくガツツポーズを取る。

（よし……。まずは、アイツに全弾命中させなくちゃ……）

ヒューゴはハンマーを構えずに走り出すと、ポーチから特製ポイントボールを一つ取り出し、ゲリヨスに向かって投擲した。

（まずは、一つ目！）

ヒューゴが投げたポイントボールは、狙い通りゲリヨスの頭部に当たって砕けた。その瞬間、ポイントの実特有の刺激臭と共に、ヒューゴが仕込んだ爆薬と油がネンチャク草によってゲリヨスの頭部

に付着する。

モンスターは、外部からの刺激にとても敏感だ。ゲリヨスは頭部に喰らったわずかな刺激に目を覚ました。そして、ヒューゴの姿を確認すると、しゃがれた声で大きく鳴いて威嚇をした。

ヒューゴはそれに構わず、今度は三つ同時にペイントボールを投擲した。ペイントボールが、先ほどと同様に右腹部に当たって砕ける。大きく左に旋回しながら、更に二つのペイントボールを左腹部に当てた。

(まだまだ……)

「こつちだ！」

わざと声を張り上げて、ゲリヨスに自分の位置を知らせる。ゲリヨスは猛ダツシユでヒューゴに突進を仕掛けてきた。

(うわぁっ！)

自分から呼んでおきながらゲリヨスを間一髪の距離で避けるヒューゴは、勢い余って転ぶゲリヨスの背中にペイントボールを四つ投擲した。続けて、右翼と左翼に二つずつペイントボールを投擲する。ゲリヨスの体は爆薬と油、それにネンチャク草でかなり汚れていた。

(あと二つ……！)

残りのペイントボールを取り出してゲリヨスに近寄ろうとしたそのとき、起き上がってヒューゴを憎々しげに睨むゲリヨスは、不意に頭上の石を強く打ち鳴らし始めた。その行動に、ヒューゴの脳裏で苦い記憶が蘇る。

「まずっ！」

ヒューゴが慌てて地面に伏せた瞬間、夜目にはかなり痛い閃光が当たりに迸った。

先の戦闘でそれをまともに喰らって逃走を余儀なくされたヒューゴは、何とか直視をしないことで目が焼けるのを防いだ。しかし、ヒューゴが安堵しているのはまた別の点だった。

（あぶなっ！ 火花が散らなくて本当に良かった……）

もしあそこで少しでも火花が散っていたら、ヒューゴの作戦が全て無駄になってしまうところだった。もう後には引けない。それにこれが失敗したら、恐らくヒューゴもタダでは済まないのだ。

ヒューゴは素早く起き上がると、ゲリヨスの下腹部に残ったペイントボールを投擲した。

（よし、後はあの場所に誘導するだけ……っと！）

ペイントボールを当てた次の瞬間、ゲリヨスの口から突然紫色の煙が漏れ始めた。心なしか、目元も変色しているように見える。怒り状態に入ったのだ。

「えー！ ペイントボール何発か当てただけじゃないか！」

さすがにそれにはヒューゴも驚いた。通常、モンスターが怒り状態に入ったということは、命の危険を感じ脳内のリミッターを外したということになるはずだ。しかし、ヒューゴの当てた十六個のペイントボール程度でそんな状態に入るなんて、普通は考えられない。まあ、ゲリヨスからしてみれば、昼間から自分の表皮に小さいとはいえいくつかの火傷を負わせたり、安眠を貪っていたところを邪魔されたりとイラつくことばかりされて向かつ腹を立てているので

あるが、モンスターの言葉を理解できないヒューゴがそのことを知る由はない。

ともかくにも、怒り状態に入ったということはヒューゴにとって都合が良かった。大概のモンスターが怒り状態に入った場合、攻撃方法はほとんど絞られるからだ。

すなわち、自身の持つ中で最も攻撃力の高い攻撃。

ゲリヨスの場合は、先ほどのパニック走りによる突撃なのだ。

「鬼さんこちら！ 手の鳴るほうへ！」

わざと声を出しながら、ヒューゴはゲリヨスに背を向けて走る。

わざとふざけた物言いをしたのは、わずかに残っている恐怖を拭い去るためだ。いつだかヴァンが、

「狩りのときでもたまにふざけておかねえとな！ 気付け薬代わりだぜ！」

と言っていたのを思い出す。そのときは緊張感に欠けてるなあ。とも思ったが、今ではその気持ちに分からなくもなかった。

たまにこうして道化を演じなければ、本当にただの死神になってしまう。命のやり取りをする上で感情を表に出さないのは大事なことでだが、しかしそれでも『人間らしさ』だけは失いたくはなかった。

（まあ、ただのエゴなんだけどね……）

そう思いながら、ヒューゴは小さく苦笑いを溢した。ただの独りよがり、自分は他者の命を刈り取っているのだ。

生きるためではない。自分の夢に一步でも近づくためという、理由に値しない理由だ。

それでも、ヒューゴは生きたいのだ。夢を覚えてくれた両親と彼女に、再び笑顔で出会うために。両手いっぱい抱えきれない感謝の想いを伝えるために。

ゲリヨスはまずヒューゴの目を潰すつもりだったらしい。背後で再び閃光が迸る。しかし、後ろを向いていたヒューゴにそれが直撃するはずもなく、それは不発に終わっていた。

「さあ、もう終わりか？ 僕はここだぞ！」

もちろん、ヒューゴの言葉がゲリヨスに理解できるわけがない。それでも自分の位置をゲリヨスに教えるには十分な効力を発揮した。ゲリヨスはヒューゴの方を向くと、しゃがれた声で怒りを露にする。

（さあ、来い。こっちに走ってくるんだ！）

もう、あとは賭けだった。突撃をしてくれれば、もうゲリヨスはヒューゴの策に完全に嵌まりきる。飛んだりされたら厄介だが、既にヒューゴは勝利の尻尾を掴んでいた。

願いが届いたのか、ゲリヨスは叫びながらヒューゴに突進してきた。毒液を撒き散らしながら、ヒューゴの体を噛み砕こうと頭を突き出してくる。

しかし、それすらも不発に終わってしまった。

ボスン！

あと一步でヒューゴにぶつかる直前で、ゲリヨスの真下の地面が陥没し、ゲリヨスは見事にそこに嵌まってしまった。もがいて抜け出ようにも、周りから砂状になった土が隙間を埋め込み、更にゲリヨスの動きを封じる。

ハンターが用いる罠系道具トラップツールの一つ、落とし穴。クモの巣とツタの葉を用いて作られたネットと、少量の爆薬を仕込んだ簡単な罠だ。罠を作動させれば、少量だけ仕込んだ爆弾が土の密度を変化させて簡易的な落とし穴を造ることができる。

同じように、ネットに仕込んだ小さな突起から染み出たゲネポス牙から取れる麻痺毒がモンスター動きをほんの少しの間だけ封じてくれるシビレ罠もある。どちらも捕獲の際に必要なとされる重要な道具だ。

落とし穴によって動きを封じられたゲリヨスは、それでも生気の溢れる双眸でヒューゴをギツと睨んでいた。しかし、既に自分の策の中に入ったゲリヨスにヒューゴは恐れを感じてはいなかった。

「……ごめんよ。僕は僕のエゴで、キミを殺す」

申し訳なさそうにゲリヨスを見ながら、ヒューゴは背負っていたハンマーを構え、上に振り上げた。そのまま、気を練ってハンマーの攻撃力を上昇させる。時間はあまりない。怒り状態のモンスターを止めておけるのは、僅か数秒足らずだ。

ヒューゴはハンマーに気を溜めきると、ゲリヨスの頭に向かって思い切り強くハンマーを振り下ろした。

「爆ぜる！」

ヒューゴの『工房試作品ガンハンマ』が、ゲリヨスの頭部一番初めにペイントボールを当てた箇所だ に当たる。二つが触れ合った瞬間、『工房試作品ガンハンマ』の火打石が弾ける。轟音と共にハンマーの前半分が衝撃でひしゃげ、ゲリヨスの頭をものすごい量の炎が包み込んだ。

ゲリヨスは慌てて炎を振り払おうとするが、その甲斐も空しく、全身に付着した油と爆薬を伝って、断続的に小さな爆発を起こしながら、ゲリヨスの上半分を炎が完全に包み込む。ようやく落とし穴から解放されたが、炎は更にゲリヨスの下腹部にまで回り、遂に全身を包み込んだ。

ヒューゴはというと、衝撃に耐え切れずに後方に吹き飛んでいた。

しかし、背中を強く打ちつけただけでほとんどケガは見られない。唯一、ハンマーを持っていた手の装甲が少しだけはげている程度だった。

「いたたたた……。あー、死ぬかと思った……」

前半分が完全に壊れてしまったハンマーを持ったまま、ヒューゴは炎に包まれて苦しそうに叫ぶゲリヨスを見ていた。

ヒューゴは、タル爆弾の爆薬とレバーに含まれる油を使って、ハンマーの火力を無理矢理に底上げしたのである。更に、ペイントボールに爆薬と油を仕込むことで、『火の通り道』を形成したのだ。それにより、たとえ発展途上の武器といえども、大爆発を起こしてゲリヨスの皮を短時間で焼ききることができる。

ゲリヨスのゴム質の皮は、耐火性に優れないため、打ち立ての金属と合わせることができない。以前、ヴァンはそう言いながら、ゲリヨスとフルフルの皮は扱いにくいとヒューゴに教えてくれた。これらの知識がなかったら、今回の作戦は思いつかなかっただろう。

「……………」

今しがた自分のやった行いには、はつきり言って吐き気がする。人間の所業とも思えなかった。しかし、こうしなければ自分は生き残ることができなかった。

以前、まだ訓練生だった頃に、師であるフラディオが言っていたことが脳裏に蘇る。

『命を刈り取ることの重さ。ハンターは常にそれを背負って生きるんだ』

続けて、ランポスを討伐して吐きそうになった自分に親友が言っ

た言葉。

『確かに、こいつらを殺すのはオレたちのエゴだよ。でも、それでもオレたちは生きたいんだ』

『オレたちは、こいつらを次に繋げていかなくちゃいけない。自分のしたことから、逃げちゃいけないんだ』

たとえそれが、多くの命の上に立つことであろうとも。

夢を叶えるために、大切な人を迎えに行くために、自分は後悔を
してはいけないのだ。

「キミの命は、絶対に無駄にはしないから……」

既に黒焦げになって息絶えているゲリヨスに、ヒューゴは小さく
呟くようにそう言った。

第二十七話 狩人の咎（後書き）

えー。爆弾をくれたワットくんを忘れているもしくは知らない読者様は、第三話および第四話をご覧ください。ヒューゴが助けたゲネポス青年がワットくんです。

今回はかなり真面目に書きました。

というか、ゲームじゃ明らかに無理な芸当に挑戦しちゃいました。

まあ、小説ですから。何でもありません。（違）

もし、

『ココ、ちょっと変だろ』

って思うところがあつたら、教えてください。結構初の試みなので。

今回はヴァンvsフルフルです。

おふざけ満載でお送りする予定です。頑張つて地位を取り戻せよ主人公。

では、また次回で。

第二十八話 電撃祭と職人の誇り（前書き）

ども。最近本当にストツク無視で突っ走っている旅がらすです。きつと、今の自分は猪突猛進という言葉が似合う気がします。

今回はヴァンの狩りです。ヒューゴと違い、おふざけ度高めです。

それでは、第二十八話、スタートです。

第二十八話 電撃祭と職人の誇り

場所は変わって、クルプティオス湿地帯。

ヴァンは、湿地帯の東側に位置する洞窟に足を踏み入れた。入っ
てすぐ、人間の耐えられるレベルを超えた冷気が彼を包み込む。思
わず、大きなくしゃみが飛び出した。

「へつくしょ！ 寒っ！ えっと、ホツトドリンクはっと……」

寒さに震えながら腰のポーチを漁り、中から赤い液体の入ったビ
ンを取り出す。トウガラシと様々な効能を引き上げる性質を持つに
が虫を磨り潰して水を加えて煮詰めただけの簡単な防寒飲料、ホツ
トドリンクだ。

煽るように一気に流し込むと辛味で舌が少し痛かったが、すぐに
体の内側から暖かくなっていく。

「おお、すげえ即効性。もうかなり平気になったぞ」

初試飲の感想は、意外と悪くなかった。ヴァンは根っからの甘党
ではあるが、この程度の辛さならまだ平気だ。

火山島の村であるドーラは、バテ対策や気付け、眠気覚まし代わ
りとしてとにかく辛い食べ物が重宝される。ヴァンはあそこの郷土
料理がそんなに好きではなかった。

料理は趣味だが、あそこの郷土料理は一切覚える気になれなかつ
たっけと思いつく。

「って、あんまり向こうのこと思い出さねえようにしてたのに、こ
こで思い出すなって、オレ……」

危うく嫌なことまで思い出しそうになっていたヴァンは、小さくため息をついて頭を振ると、辺りを見回した。既に、ベンジャミンはどこかに消えている。クエスト中まで奴の悪口は聞きたくなかったので、ヴァンはありがたいと思っていた。

「つかしいな。確かにこの辺りにでっけえ『気』が見えたんだけど……」

ぐるりともう一度見回すが、やはり何もいない。ヴァンの『千里眼』は、あまり頻繁に使うことができないし、使えば使うほど感度が弱くなってしまう。

こちらはまだ、発展途上の能力なのだった。

「今度、誰かに効率の良いやり方でも教わっかな……」

だとするとレラかなあ。と思いながら、ヴァンは洞窟の中を進んだ。あの凶鑑の通りならば、フルフルは主に洞窟を罫としているはずだ。ここにいないなら、もっと奥の方にいるのかもしれない。そう考えて、洞窟のちょうど真ん中辺りまで来たときだった。

ピチヨン

ヴァンの肩に、水滴が落ちてきた。落ちた瞬間は気にしなかったが、次の瞬間、突然ケルビの皮を用いて作られた肩当てが煙を上げて剥がれ落ちた。続けて、真上から随分と荒い息遣いが聞こえてくる。

………真上？

「っ！？」

ように突然開いた穴から鮮血が溢れるように吹き出ると同時に、ポトリと大きな塊が落ちる。

「……ブハアツ！ やべえ！ 何か人生振り返っちまった！ コレってあれか？ 走馬灯ってやつなのか！？」

フルフルの腹から落ちた塊　ヴァンは、唾液やら胃液やらをべつとりと纏わりつかせながらも何とか生還した。その手に握られているのは、新調したばかりの弓『クイーンブラスターⅠ』だ。

ヴァンは、何とか動ける範囲　胃に到達した後、それでもきつい胃の中でどうにか貫通矢の会を作り、フルフルの腹を穿つたのだ。十年間という幼い頃から弓を扱ってきた経験と、ヴァンの持つ弓の中でも攻撃力の高い『クイーンブラスターⅠ』が合わさったからこそできる芸当だ。まだ攻撃力が弱い『ハンターボウⅠ』では難しかったかもしれない。

「おええ、チヨーべつちよりしてる……。気持ち悪う……。風呂入ってえ……」

フルフルの消化液に塗れたヴァンは、パツパとできる限り消化液を振り払いながら小さく呟いた。今のところは問題ないが、本当に早く洗わないと皮膚が爛れてしまう。本人はあまり自覚していないが、まだ危険なことには変わらなかった。

と、そこで、腹を貫かれたフルフルが尻尾を地面に貼り付けた。表皮から青白い電流が迸る。

「っ！？ やばっ！」

その電流が何かを悟ったヴァンは、すぐさまフルフルの足元から離れた。次の瞬間、フルフルが吠えるのと同時にその表皮が青白い

電流に包まれる。フルフル二大危険攻撃の一つ、放電だ。

「ベンジャミンの言ってたビリビリって、コレのことかよ！」

危なかった。あと少し反応が遅れていたら、痺れるだけでは済まなかっただろう。電気は火炎と違い、掠めた瞬間にコンマ一秒で全身を駆け巡る。あの量の電流をバトルシリーズなんかで喰らったら、二度と立ち上がれなくなる。感電死は免れないだろう。

「とにかく、あいつの傍に行ったら死亡確定だな……」

ヴァンは冷や汗を掻きながらも適当に顔に付着していた消化液を拭い去ると、改めて自分を餌にしようとしたフルフルと対峙した。

ファーストコンタクト
第一接触の感想。

「気持ち悪っ！ っていうか、でかっ！」

フルフルの見た目は、凶鑑に載っていた通り、超グロテスクなものだった。更に、その体躯はかなり大きい。フルフルのサイズの基準は知らないが、先に出会ったイヤンクックと大差ないのであれば、銀冠サイズに値するかもしれない。

そして、そのサイズはフルフルの大方の実力を示していた。

（見たところ、上位にはいかねえけど下位の中でもかなりの実力って感じだな……。うっひゃあ、コレ反則じゃねえ？ オレFクラスだっつのまったく）

幼い頃から火山に行かされ、様々な大型モンスターと相対してきたヴァンは、緊張と言うものを既に持っていなかったが、それでも体は震えていた。

それは、自分よりも遙かに強いモノと対峙している証拠。これから自分が狩るか狩られるかの命のやり取りを行うのだという予感から生まれる『死』への恐怖。

しかし、体の震えに反して、ヴァンの表情は明るいものだった。無意識のうちに顔がにやけてしまっている。

「…………面白くなってきたじゃん…………！」

それは、純粹な『力』の渴望から来る笑みだった。

自分よりも強い相手を征することで、新たな高みに上っていける喜び。それは、ヴァンにとって夢へ一歩近づくことを示す。

高祖父、ジン・ドラグニルへと向かう長い長い道のりが、少しだけ縮まるのだ。ヴァンの人生に於いて、これ以上に大きな喜びがない。

「ほんじゃま、せいぜい狩られないように注意すつか！」

そう言いながら、放電を終えたフルフルに向けて矢を番えようとしたそのときだった。

ピチヨン。

再び、ヴァンの肩に水滴が落ちてきた。先ほどと同様にそれはバトルシリーズの肩当てを焦がす。続けて、まるで奈落の底から叫んでいるような超高音の叫び声が真上から響いてくる。

……………またも真上。真上？

「んだとお！？」

今度は上など見上げなかった。慌てて弓を展開させたまま後ろに

跳躍する。ヴァンが跳躍するのとはほぼ同時に、白い塊が上から落っ
こちてきた。

『帯電飛竜』フルフル

……二頭目。

「……うそお」

開いた口が塞がらない。いや、どうやって塞げばいいんだ。そし
て、この状況は一体全体どうということなのだろうか。

「……ん？」

しかし、そこでヴァンは自分の目を疑った。一度だけ目を瞬かせ
て今度は穴が開くのではないかと言うくらいに二匹を見比べる。先
にヴァンを喰らおうとしたフルフルに比べ、新しく現れたフルフル
には、どこか違和感があった。

改めて見てみよう。

先に現れたフルフルは、ヴァンの背丈など軽く越えている。もと
もと成長期真っ只中で少し小柄なヴァンだが、フルフルは全高だけ
でもヴァンの二倍以上はある。目測ではあるが、おそらく銀冠サイ
ズ。

転じて、新しく現れたフルフルはというと……。

全高、ヴァンのおよそ半分。

「……ちっさ！ 何コレ、チョーウケるんだけど！」

そう、二頭目のフルフルはかなり小さかったのだ。おそらく、ま
だ成体になって日が浅いのだろう。鳴き声もまだ先のフルフルに比
べて高音だった。

思わずその場で笑い転げたくなったヴァンだが、命のやり取りが始まったばかりの場所でそんなことは許されない。

銀冠サイズのフルフルが、首を大きく上にもたげた。口の端からバチバチと白い光が弾けている。と同時に、ちびフルフルもヴァンに向かって同じように首をもたげた。

次の瞬間、二頭の口からほぼ同時にヴァンに向かって真っ白な電気プレスが襲い掛かってきた。

「どわああっ！」

危機一髪。どう避けたかなんて記憶にない。二頭同時の電気プレスは反則だろ！ と心の中で突っ込みを入れながら、ヴァンはフルフルたちの後ろを走り抜けた。

（やべえ、これはマジにガチで死ぬ！ 両方ちびならまだしも、一方が銀冠サイズは絶対に無理！ つっ！か、Eクラス昇格試験じゃねえってのー！）

とにかく、二頭が離れなければまともに殺り合えない。そう察知したヴァンは、ひとまず洞窟の外に向かって走り出した。

（ウニャア。銀冠サイズのフルフルが出たときもビビッたけど、まさかもう一頭出てきちゃうニャんてニャア……）

拠点のすぐ脇にあるまだ綺麗な水質の沼の水で体を洗いながら防具を拭っているヴァンを見ながら、ベンジャミンはため息をついた。ベンジャミンは、つい最近試験官アイルーに起用されたばかりだ。経験は浅く、何よりクエスト詳細を狩場に来て知ったというハンターの試験官を任されたのは、これがはじめてである。というか、前代未聞だろう。少なくとも、ベンジャミンは先輩アイルーからそんな話を聞いた覚えはない。

（多分、仕掛けたのは会長とサーシャさんニヤんだろうニヤア。一体あの二人、何を考えているニヤ……）

ちなみに、ベンジャミンは予めクエストの内容を聞かされていた。しかし、そのときは確かフルフルは一頭だけという話だったはずだ。おそらく、情報が遅れたのが、ゴルドバが口封じを行ったのだろう。様々な変則イレギュラーが重なっている今は、後者の方が正しいとも思えてくるが。

（しかし、アイツもよく生還したのニヤ……。片手剣や双剣、ライトボウガンニヤらまだしも、ハンマーや狩猟笛じゃあ、あの芸当はきつと無理だったニヤア）

ベンジャミンは、ただひどく感心していた。普通、あんな風にフルフルに食われるのは間抜け以外の何者でもないし、あんなった以上待っている末路はフルフルの栄養と化すことだ。しかし、ヴァンはそこから見事に生還した。走馬灯が見えたと言っていたが、それでもよくやった方だと言える。

あの時はさすがに、ベンジャミンも開いた口が塞がらなかった。

（さて、あの馬鹿。一体どうやってこのクエストをクリアするかニヤ……って、ボキは奴の成功を視野に入れてるニヤか？）

いつの間にか、ヴァンがクエストを成功するかもしれない。と無意識のうちに考えていたことに気づいた。いやいやまさか。Fクラスハンターでドスランポスくらいしか倒したことのない弓使いが、フルフル、しかも二頭を討伐できるなんてあり得ない。

だが、もしかしたら。とベンジャミンは考えていた。フルフルの表皮は、だぼだぼしているように見えてかなり頑丈だ。ベンジャミンはフルフルを何度か一人（一匹？）で討伐したことがあるから、その厄介さは身に沁みている。

しかし、ヴァンはそれをフルフルの体内から一気にぶち抜いたのだ。下位クラスの弓の中でも、あまり攻撃力が高いと言えない初歩の弓で。筋力が他の同クラスハンターと比較してもずば抜けて高いことが伺える。

それが、日頃の鍛錬と武器職人として重たいハンマーを扱っている賜物なのだが、まだ顔を合わせて数時間足らずしか経っていないベンジャミンが、そのことを知る由はない。

（……ま、ボキは結果を見て公正に判断するだけニヤア……）

ベンジャミンはそう結論づけると、小さくあくびを漏らした。

「うっ！ とうやらばらけたみてえだな」

防具に着いた消化液を拭い、自身の体も綺麗に洗い終えたヴァン

は、支給品ボックスに腰掛けながら携帯食料を頬張ると、洞窟の方を見てニヤリと笑った。再び発動した『千里眼』が、先ほどまでいた洞窟にフルフルの『気』が一頭のみであることを教えてくれる。大きさからしても、後から出てきたちびフルフルのようだ。

「でっかい方は……げ、通り道に居やがる」

しかし、銀冠フルフルは洞窟に行く一つ手前の区域にいた。非常に面倒くさい。迂回している間に、ちびフルフルが移動する可能性もある。

そこでヴァンが考えた作戦は、

「ん……ま、なるようになるだろ！」

THE・ノープラン

(ブニヤア……馬鹿かアイツ！)

これには影で見ていたベンジャミンもすっ転んだが、そんなことをヴァンが知る由もない。もともと頭脳戦が苦手なヴァンは、作戦立てなどはすべてヒューゴに任せっきりだったのだ。

「うしっ！　なら善は急げ！　急がば回れだ！　待ってるフルフル！」

(急がば回れニヤら、何で迂回しないのニヤ！)

ベンジャミンの遠い突っ込みを完全に無視(というか耳に入っすらしない)して、ヴァンは洞窟に向かって駆け出した。

結論から言おう。

ヴァンのノープラン作戦（作戦じゃない）の結果は、

「ラッキー！ あいつ寝てらあ」

（う、運の良い奴ニヤ……）

銀冠フルフルが寝ていたため、そのまま素通りできた。どうやら、ヴァンの最初の一撃は意外と深手だったようだ。まあ、内側から腹をぶち抜かれたのだ。出血量は洒落にならないだろうし、無理もないと言えなくもない。

本来なら、モンスターが昼夜問わず睡眠状態に入るのは弱っている証拠なのだが、ヴァンは深追いするのを止めた。ここで銀冠フルフルが倒れる前にちびフルフルが現れたら、袋の鼠になるのはヴァンの方だ。

銀冠が眠っている間にちびの方を討伐する。ヴァンはそう決めた。

（コイツのデビュー戦だからな……得意分野をフルに生かして、最高のデビューを飾ってやらねえと！）

ヴァンは背中の『クイーンブラスターE』を展開させると、にんまりと笑いながらそこに紫色の液体が入ったピンを組み込んだ。

「待ってるよ、ちびフル！ てめえで最高の武器を造ってやる！」

ヴァンはホットドリンクを一気に飲み干すと、洞窟に向かって駆け出した。

ベンジャミンは、驚愕の表情を浮かべていた。

(アイツ、本当にFクラスハンターかニヤ？ なんつう動きだニヤ……)

「おい、ちびフル！ オレはこっちだぜ？ おめえの目ン玉は節穴かつつの！」

(……フルフルには元々目は無いニヤ)

一瞬感心してしまったことに後悔しながらも、ベンジャミンは引き続きヴァンの戦いを観戦した。

ヴァンの放った矢が、ちびフルフルの背中を掠める。貫通矢として放たれたそれは、挟るようにちびフルフルの背中を通り抜けた。遅れて、ちびフルフルの背中に血しぶきが舞い散る。ちびフルフルは電気ブレスを放出するが、予備動作が大きいせいで簡単に避けられてしまう。

その間にも、ヴァンは先ほどと同じ箇所に向けて矢を放った。再び洞窟内に舞い散るフルフルの真っ赤な血。弓には毒ビンが仕込んであるのか、傷口から僅かに腐敗臭と煙が立ち上っていた。

(最小サイズのフルフルとはいえ、完全に後手に回ってるニヤンて……。アイツ一体何者ニヤ？)

そう。戦闘はほぼ一方的な展開を示していたのだ。

フルフルと遠距離武器が向こうの攻撃さえ当たらなければ相性が良いことを差し引いても、ヴァンの動きは洗練されたものだった。無駄が少なく、且つ常にこちらに有利な状況を作り出す動きだ。

ヴァンは、常に動き回っていた。ちびフルフルの周りを旋回するように動き、常に自分にとって最適な『安全地帯』を位置取っ

る。

いくら動きが遅いとはいえ、フルフルの攻撃は一撃一撃が直接死に繋がる攻撃だ。立ち止まれば、命がいくつあっても足りなくなってしまう。

（ハンターになったのはまだ数ヶ月前ってホントかニヤア……。あの動きは普通数ヶ月やそこらで会得できるもんじゃないニヤア）

もちろん、ベンジャミンはヴァンが幼い頃から武具職人として火山に通い続け、その過程で弓の扱いを覚えたことなど露とも知らない。彼の動きは、若いハンターにはなかなか見られない、かなりの手練れとほぼ同じものだった。

（弓の扱いだけなら上位クラスにも引けを取らないかもニヤア。でも、多分それだけニヤね）

しかし、それだけだ。ヴァンの戦法は、あくまで弓を扱っている状態のものだけに止まる。動きはいい。取るべき戦略も間違っていない。

しかし、彼の動きは完全に銃撃士ガンナーのそれだ。それ以上でもそれ以下でもない。ベンジャミンはまだヴァンと出会って数時間足らずしか経っていないが、それでもその程度のこととは見破れた。

ヴァン・ドラグニルは、遠距離武器 特に弓 へのみ超特化したハンターなのだ。おそらく、このままでは他の武器を扱えなくなるだろう。そしてそれは、いつしかヴァン自身を強く悩ませる要因となる。

そんなことを思案している間に、ちびフルフルは息を引き取ったようだ。断末魔の叫び声を上げながら、ゆっくりと地に伏せていく。背中が完全に抉れて骨まで見えていた。おそらく死因は失血死だろう。

ヴァンは、ちびフルフルがもう二度と動かないことを確認すると、ゆっくりと近づいてその頭を優しく撫でた。

「……ごめんな。苦しかったら」

そう言って二、三回ほど頭を撫でた後、ヴァンはちびフルフルの亡骸の前に右手を胸に当て、静かに目を閉じた。冥福を祈っているのだろうか。ベンジャミンはしばらくその光景を見つめていた。

と、そこで、ベンジャミンの鼻孔を生臭い匂いが刺激した。ヴァンたちの方からではない。後ろ、いや、真上？

「まさか!?!」

思わず声に出し、上を見上げる。気づかなかった。完全に存在すら忘れ去ってしまった。

銀冠フルフルが、ヴァンの頭上にぶら下がっている。ベンジャミンは無意識のうちに声を張り上げた。

「逃げるー！ 後ろに逃げるんだニャー！」

ベンジャミンがそう叫んだ次の瞬間、銀冠フルフルがヴァン目掛けて落下攻撃を仕掛けた。

「ぬおわっ!」

間一髪。なんとか銀冠フルフルの落下攻撃を避けたヴァンは、背中に冷や汗を掻きながら落ちてきたフルフルと対峙していた。

さっきの声はベンジャミンだろうか。試験官だから戦闘には関わらないと言っていたのに、ベンジャミンは銀冠フルフルのことをヴァンに教えてくれたようだ。最も、あの声がなかったら確実に圧死されていただろうが。

(アイツむかつくけど、あとでお礼言わなきゃな……)

借りができてしまった。苦笑いを零しながら、ヴァンは背中に戻っていた弓『クイーンブラスターE』を展開させる。そこに仕込むのは、先ほどと同じ紫色のビン 毒ビンだ。

先ほどの戦闘でヴァンは、毒で体力を奪い、貫通矢によって血管を筋繊維ごと切断、失血させてショック死を目論んだのだ。

リオレイアの素材から造られた『クイーンブラスターE』は、毒の効力を引き上げる力を持っている。また、ヴァンが愛用し続けている『ハンターボウ』に比べ、強度も強い。

それは、弓使いにとって最も攻撃力の高い貫通矢を放つのに適した条件を有していると言える。貫通矢は会を作る際に矢自体に弦を巻き付け、さらに力の限り限界にまで弓を引く必要がある。より強固な作りをした弓ではないと放てない、弓使いにとって、正に必殺の矢なのだ。

(残りの毒ビンはあと十個……あんまり、毒に頼れないな)

弓に組み込む毒ビンやボウガンの毒弾、そしてハンターが畏として扱う毒生肉に含まれる毒素は、致死性の高い毒だ。

しかし、環境適応能力が人間よりも遙かに優れている彼らは、毒が入ってきたその瞬間に、毒に対する抗体を形成してしまう。よっ

て、毒の効力はあまり長続きしないのだ。さらに、抗体が作られることよって次に付加させなければならぬ毒素の量は少しずつ増えていく。

しかも、ヴァンが相対しているのは先ほどのちびフルではない。銀冠サイズの特大フルフルなのだ。毒素が全身に回る量だって、ちびフルと比べたら倍以上は必要だろう。よくて一度毒状態にできれば良い方に思えた。

(なら、狙うは腹！)

先ほどヴァンがぶち抜いた腹を主に狙って、失血死を狙う。火力の少ない弓で確実に狩るには、今はこの方法しかなかった。

(その口開けっ広げたところを溜めに溜めきつた貫通矢でぶち抜くのもありだけど、フルフルは正面から向かうと痛い思いしかしねえからな……って、ん?)

貫通矢の会を作ろうと矢を番えたヴァンだが、銀冠フルフルがこちらを向いていないことに気づき、首を傾げた。

先ほどの戦闘ではちびフルなど目にもくれていなかったのに、今は動いているヴァンではなく、もう既に息を引き取ったちびフルを見下ろすように(見えていないが)している。

と、銀冠フルフルはいきなりちびフルに首を伸ばし、その頭にかぶりついた。

「っ!?!」

さすがに、言葉を失った。しかし、銀冠フルフルはそのまま先ほどのヴァンと同じようにちびフルを体内に飲み込んでいく。

「……………」

ヴァンが見ていく中で、先ほど討伐したちびフルが銀冠フルフルに喰われていく。

銀冠フルフルの体内にちびフルの死体が完全に消え去った瞬間、ヴァンの中にどす黒い感情が生まれた。

「おい、でかフル」

弓を構えたまま、ヴァンは銀冠フルフルに呼びかけた。もちろん、フルフルに人間の言葉が理解できるわけではない。しかし、銀冠フルフルはヴァンの方向に向き直った。その光景に、影から見ていたベンジャミンは思わず身を乗り出す。

(あの馬鹿！ 何を考えてるニヤ！ あのままじゃ……………ニヤ？)

致し方ないとベンジャミンが武器を構えて走り出そうとした瞬間、突然銀冠フルフルが後ずさりを始めた。まるで、何かに怯えているように。目の前に、自分よりも遥かに強い『敵』がいるかのように。

(一体何に怯えて……………っ!?)

前触れも無しに態度を変えた銀冠フルフルに首を傾げそうになったベンジャミンだったが、自身も身の毛のよだつ悪寒を感じ、悪寒の発信源を見やった。

そこに立っていたのは、ヴァンだ。左手に『クイーンプラスターⅠ』、右手に矢を持ったヴァンが、少年とは思えないほどに怒気に満ちた表情で銀冠フルフルを睨んでいる。

その目は、全てを灼熱の業火によって焼き尽くす『災厄』のごとき熱を持っていた。

「てめえ、ふざけたことすんじゃねえよ」

ヴァンが、呟くように、しかしはつきりとした怒りを含んだ声で、銀冠フルフルに語りかけた。ヴァンが一步進めば、銀冠フルフルは距離を保とうと一步後退っていく。バトルシリーズに初期段階の弓と言う出で立ちのFクラスハンターが、銀冠サイズのフルフルを圧倒するほどの怒気を放つ光景は、異様としか言えなかった。

だが、確かにその光景が示すように、二つの関係は今逆転していたのだ。どちらが強者でどちらが弱者か。本来ならあり得ない構図が、この場で成り立っていたのだ。

それは、ベンジャミンも同様だった。ほとんど無意識のうちに、ベンジャミンは目の前に立っている少年に言い様のない恐怖を抱いていた。

(何ニヤ、本当に一体コイツ何者なのニヤ……)

一体あの小さな体躯のどこからそんな怒気を発しているのか分からなかった。そもそも、何故ヴァンがあそこまで怒っているのかも分からなかった。

すると、そんなベンジャミンの心の声に答えるかのように、ヴァンが口を開いた。

「そいつはオレが摘み取った命だ。オレが責任を取る命を、横から入って喰らってんじゃねえよ」

(………はあ！？ アイツ馬鹿ニヤ！ 正真正銘の大馬鹿者ニヤ！)

さすがに開いた口が塞がらなかった。その程度の理由で、ヴァンはあるに怒っているのか。ベンジャミンは想像以上のくだらなさ

に頭を抱えた。

普通に考えて、ハンターは自身の命を第一とすべきである。たかが素材の一つや二つに拘っていても、いつしかくだらない理由で命を落としかねない。

ヴァンのハンターとしてのあり方に、ベンジャミンはただただ頭を抱えていた。

ヴァン・ドラグニルは、幼い頃からある夢を抱いていた。

『高祖父、ジン・ドラグニルを超える武具職人となる』

それは、果てしなく遠い道のりだ。それに、ヴァンの中には人間の血が混じっている。自分は高祖父や父親のように長い時を生きることができない。

だからこそ、他人よりも努力をする必要があった。他人よりも、一歩でも先んじている必要があった。

父親もそれを察してくれたのか、本来ならば十歳にならなければ行かせてもらえない鉱石掘りに、六歳の息子に行かせてくれたのだ。最初は何て父親だと憤慨したものだったが、あとで工房の見習いたちにその話を聞かされ、それからは寡黙で口下手な父親に感謝の念を抱くようになった。

やがて、高祖父を超える方法として、高祖父がやるうとしなかったこと。武具の素材も自分で調達することを思いついたヴァンは、武具職人以外にハンターを志すようにもなった。

しかし、当時のヴァンはまだ職人として高祖父から学ぶことが数多くあった。ドーラの村を早く出たいと言う願望はあったが、それよりも高祖父や父、工房の職人たちの背中から多くのことを学びたいと思う気持ちの方が強かった。

そんなある日、ドーラの村を出る一週間ほど前に、高祖父がヴァンにこう言ったのだ。

「ヴァン。ワシら武具職人は、失われた命を次の命に繋げる者じゃ。ハンターとして生活していく上で、お前は多くの命を奪っていくだろう。だが、お前はその命を次に繋げる腕を持つておる。その術を知っている。だから、自分の摘み取った命に、お前は他のハンター以上に敬意を払い、責任を負わねばならん」

分かっているさ。と面倒くさそうに答えるヴァンに、高祖父は持っていた杖で彼の頭を叩きながら話を続けた。

「全ての命は一つの『樹』に咲く『花』なのじゃ。ワシら武具職人は、言わば『風』や『虫』のようなもの。花と花の架け橋であり、新たな『種』の運び手なのじゃ。……よいか、ヴァン。摘み取った『花』を捨ててはならぬぞ。自身で摘み取った『命』に責任をとるのは、他の誰でもない、お前だけの使命なのだ」

あのときは、いつものふざけた口調から一転して真剣に話す高祖父に、ただただ目を丸くして驚いていたものだ。

だが、ハンターとして、武具職人としてミミルの町で暮らしていくうちに、それまでぼやけていた高祖父の言葉が、少しずつ彼の中で輪郭を帯び、形を成していくのが分かった。

自身で摘み取った命に責任を取るのは、誰でもない己自身。
失われた命を次へと繋げる、命の架け橋となる者。

それが己の生き様なのだと、ヴァンはそう思うようになっていた。

だからこそ、ヴァンは今、目の前のフルフルに対して怒りを抱いていた。

あのちびフルの命に責任を取るの自分自身の役目なのだ。それを横から掠め取るなど、決して許されることではない。

素材が取れないとか、そんな些細な問題ではない。これは、ヴァンの『生き様』であり、また『自身の仕事に対する誇り』であるのだ。

例え、それがただのエゴだとしても。ヴァンの中にあるのはちびフルの命に対する責任感と、それを横から掠め取るうとする愚か者に対する怒りだけだった。

「返してもらうぞ。そいつの命に責任を取るのはためえじゃねえ。このオレだ」

そう言いながら、ヴァンは弓に矢を番えた。狙うのはただ一点。こいつにくれてやる矢など、一本で十分だ。

銀冠フルフルは、ヴァンが大勝負に出ることを感じ取ったらしい。尻尾を地面に貼り付け、首を大きく上にもたげた。電気ブレスの予備動作だ。

「まずい、避けるニヤ！」

思わず、ベンジャミンは叫んでいた。ヴァンが最後の大勝負に賭けることに銀冠フルフルも勘付いているはずだ。となれば、向こうも確実に最大パワーでブレスを吐いてくることは容易に予想できる。バトルシリーズ程度の防御力である電気ブレスを受ければ、間違いなく死ぬ。

しかし、ヴァンはそこから微動だにしなかった。矢に弦を巻きつけ、弓が壊れるのではないかと思うくらいに大きくしならせている。どれだけの力で弓を引いているのだろう。たかが十六歳の少年が引くにはあまりにも大きすぎる力だった。

「ニヤにしてるニヤ！ 死ぬぞ！ 早く避けるのニヤ！ おミヤアならできない芸当じゃニヤいはずニヤ！」

ベンジャミンは先ほどよりも声を荒げながら叫んだ。確かに自分は最初の頃、布団でゴロゴロしたいから早くリタイアしろと彼に言った。

だが、目の前で死なれてそのまま布団に入ってぐっすり眠れるほど、まだベンジャミンの心は強くない。もはや一人のハンターとして、無干渉のままこの勝負を見過ごすことなど、ベンジャミンにはできなかった。

と、不意に、少年が静かに口を開いた。

「……………ごめん、ベンジャミン」
「ニヤ？」

ヴァンが、ベンジャミンを見た。悪態をついてばかりだった少年にしては、随分と綺麗な微笑を浮かべて。

「オレ、馬鹿だから」

それだけ言うと、ヴァンはフルフルと向き直った。電力を最大に溜めた銀冠フルフルの口から、先ほどとは比べ物にならない量の電気が溢れている。

その後の顛末を予想したベンジャミンの口から、悲痛な叫び声が漏れた。

「駄目ニヤアアアアアアアアアア！」

銀冠フルフルの口からブレスが放たれるのと、ヴァンの手から矢が放たれるのは、ほぼ同時だった。

クルプティオス湿地帯の洞窟に、すさまじい轟音と悲鳴が木霊した。

第二十八話 電撃祭と職人の誇り（後書き）

はい。おふざけ七割、真面目三割の第二十八話でした。

ちなみに、今話が『たまじゆけ』最長を更新しました。久しぶりに主人公メインで書いたら調子に乗っちゃいました（コラ）

ヴァンの試験内容は、ゲームにもある集会所クエストから取りました。

ええ、アレに弓で行ったとき、奴を見た瞬間に吹き出した自分がいいます。あれはマジで笑える。

旅がらすはフルフルは断然弓派です。

大剣で行くと確実に二十分以内に三死します（ええ）

時に、最近モンハン小説が増えてまいりましたね。旅がらすもちょくちょく覗きに行っています。

旅がらすはライトからずっしりまで広く読む方ですが、特に最近のお気に入りは

『Dolphinのとある狩猟レポート2 〓おサルさんを追え〓』

（作：七星河 一休先生）

『天際に届く時』（作：哥月先生）

の二つです。

『Dolphinの〓』は、他にもナマズ狩りがあります。かなり笑えます。楽しく読めます。バナナナ&ポニーちゃんが登場する『虹髪の英雄』もオススメです。

『天際に届く時』は、戦記に近い感じの話です。『なるつ』内のモンハン小説ではなかなか珍しい類の小説で、それがまた新鮮さを感じます。渋いです。個人的にツボです。

短い紹介ですが、モンハンの小説をたくさん読みたい方は是非読んでみてください。

またゆっくり宣伝するつもりですウケケケケ（何この笑い…）

では、また次回！（携帯の文字数少な！）

第二十九話 試験結果と新たな試練（前書き）

旅がらすの《きつとこんなだ！ モンハン世界観予想！》

いやー、久々にやってきたこのコーナー。

……え？ 別に楽しみにしてなんかないから、さっさと本編始める？ …… 八八八八八。無問題無問題！ からすはきつとモンスターに例えたらフアングですから（意味不明）

今回のテーマは、現在ヴァンたちが参加中の『昇格試験』です。

『昇格試験』

- ・年に四回。つまり三ヶ月に一回行われる。
- ・場所はドンドルマ。何処のハンターでも共通。
- ・大体、クラスに応じたクエストを試験として行う。最初のF E昇格では、総じてイヤンクックの狩猟。
- ・それまでのクエスト達成記録に応じて、単体狩猟か複数狩猟かに分類される。F Eのみ、単体狩猟である。
- ・大体、『単体狩猟で飛竜種またはそれに相当するモンスターを狩れる』実力のDクラスで本当に一人前のハンターとして認められる世界中のハンターの半数近くがDクラスである。

・注：たまに、ゴールドバ会長の気まぐれでとんでもねえクエストに行かされる場合あり。

こんな感じですかね。最後の注は、実際数は少なめです。マジで超気まぐれおじいちゃんだものあの入。

では、そんな感じに第二十九話、スタートです。

第二十九話 試験結果と新たな試練

ヴァンたちが試験のため、ドンドルマを出て四日後の昼。

ドンドルマの町に、一台の竜車が到着した。手綱を取るアイルーが、客車に向かって呼びかける。

「ドラグニル氏、ドンドルマに着きましたのニヤー！」
「おー。ありがとな」

アイルーの呼びかけに答えて、客車の幌からミカン色の髪の少年ヴァンが顔を出した。その顔にはいくつか絆創膏が貼られている。

ヴァンは客車から飛び降りると、大きく背伸びをしながら盛大に欠伸までした。

「くあぁーっ、なげえクエストだったー」
「……ボキはおミヤアが生還していることにめちゃくちゃに疑問を感じているんニヤけど、突っ込んじゃ駄目かニヤ？」

ヴァンに続いて客車から飛び降りたのは、どんぐりメールを着込んだ灰トラのアイルー ベンジャミンだ。まるで化け物か珍獣を見えるような目でヴァンを見上げている。

クルプティオスでフルフルとの大勝負に出たヴァンは、電気ブレスの直撃を喰らい、そのまま意識を失った。もちろん救護アイルーにより拠点に戻され、そのまま二日間もの間、ずっと意識を取り戻さなかったのだ。

「ん〜、きつと勝利と生命の女神がオレに微笑んだんじゃねえの？あれさ、運も俺の手の中にあったってヤツ？」

「だとしたら、おミヤアどれだけ女神に愛されちゃってるのニヤ。運良すぎにも程つつうもんがあるのニヤ」

暢気に笑うヴァンに、ベンジヤミンは小さく肩を竦める。ベンジヤミンから言わせれば、今回のクエストは運まかせだらけであったらしい。

実は、ヴァンがフルフル渾身の電気ブレスを喰らったのとはほぼ同時に、フルフルもヴァンの放った貫通矢を口に放り込まれ、そのまま息を引き取ったのだ。どうやら、ヴァンの矢はフルフルの心臓を貫いたらしい。意識不明のヴァンに変わってフルフルの様子を見に行ったギルドお抱えのアイルーたちが言うのだから、間違いはないのだろう。

アイルーは嘘をつかないのだ。自分の好き勝手に捻じ曲げた噂話を嘘とは呼ばないことを前提とした場合だが。

「ちなみに、今回のクエストは救護一回分しよっ引くから、報酬は二四〇〇ゼニーニヤ。まあ、救護を受けた回数試験には考慮しニヤいから、そこは安心するといいいニヤ」

「おう。サンキューな、ベンジヤミン」

珍しく悪口を言わないベンジヤミンに、ヴァンも素直に礼を言った。というよりも、ベンジヤミンも既に悪口を言うことすら面倒になっけてきているのだろう。疲れたように肩を落としながら息を吐いている。

「ボキ、さつさとおうちに帰って寝たいニヤ……」

「あ、それオレも賛成……宿帰ってとりあえず寝てえ」

「意識飛ばして二日間寝たヤツが何言ってるニヤ！ ボキはおミヤアのせいで全然眠れなかったのニヤ！」

ブンブンと頬を膨らますベンジャミンに、思わずヴァンは苦笑いを溢した。ヴァンが目を覚ましたとき、ベンジャミンは目に隈を作ったじつとヴァンを見つめていたのだ。それを見たとき、ヴァンの中でベンジャミンの印象ががらりと変わった。コイツもなかなか可愛いやつだったのだ。

ヴァンの視線に気づいたのが、ベンジャミンは両手でヴァンをペチペチと叩いた。

「そんな顔でボキを見るニヤ！ ボキは別におミヤアの心配ニヤんかしてないのニヤ！」

「あー、はいはいそーですね。ベンジャミンはそういうヤツだもんなん。可愛すぎんじゃねえかこのヤロー」

「むきニヤー！ 何するニヤ！ ボキを抱きしめるニヤ！ やめっ、ちよ、何で兜取るニヤ！？ ギニヤー！ 頭を撫でるんじゃないニヤー！」

ベンジャミンをがっちり抱きしめながら撫で回すヴァンの腕から、なんとか逃げようと必死にもがくベンジャミンだが、単純な力では勝てないらしい。バタバタと暴れるだけで、兜を取られた頭をがしがしと撫で回されている。

と、そこで、

「きゃうう……」

「え、ちよつとサーシャさん！？ どうしたんですかいきなり！」

ヴァンたちのすぐ近くから、女性と青年の声が聞こえてきた。二人とも、聞き覚えのある声だ。ヴァンはハツとなって顔を上げた。

ヴァンとベンジャミンの目の前に、何故か前半分がひしゃげている工房試作品ガンハンマを背負い、レイアシリーズを身に纏った青年と、レイアの片手剣にレウスSシリーズを身に纏った女性が立つ

ていた。何故か女性の方は顔を両手で覆ってその場にしゃがみ込んでいる。僅かにだが全身もプルプルと震えていた。

「……………（可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い！ 私もあの中に入ってわいわいしたいいいい！）」

「……………何を呟いているんですか、一体……………」

女性の呟きを聞き取れなかった青年は、そう言いながら肩を竦めた。そして、ヴァンの方を振り返って兜を脱いだ。兜の奥から、黒髪のゲネポスシヨートがよく似合う、優しい顔立ちの青年が現れる。青年はそのままヴァンに微笑みかけた。

「お帰り、ヴァンくん」

「……………」

青年 ヒューゴが笑顔でヴァンを出迎えたのに対し、ヴァンはただその場に立ち竦んでいた。心なしか、腕がプルプルと震え、口の端がピクピクと引きつっていた。

もちろん、ヴァンの異変にヒューゴはいち早く気づいていた。しかし、その理由が分からずに小さく首を傾げている。

「？ どうしたの、ヴァンくん」

「……………ヒューゴ」

「え？」

不意に、ヴァンが小さく呟いた。そこには、先ほどまであった笑顔はない。ヴァンはベンジャミンを下ろすと、ものすごく怒気のもった目でヒューゴを睨んだ。

「往生しろやこの大馬鹿野郎があ！」

そしてそのまま、ヴァンは一気に距離を詰めてヒューゴの横つ面に跳び蹴りを炸裂させた。当たり前だが、ヒューゴは慌ててそれをガードする。

「うわああっ！ え、ちよつと何いきなり!？」

「いきなり？ てめえ、まさか自分のやったことすっかり忘れてるんじゃないよな、このタコ」

先ほどまで笑ってネコと戯れていた少年とは思えない、そのくらいに凄まじい怒りを込めながら、ヴァンはヒューゴににじり寄った。そのまま、頭一つ分上にあるヒューゴの顔をがっちり両手で掴む。どれだけ力を込めているのだろうか、ミシミシと骨が軋むような音がかなり大きく聞こえてきた。

「いいいいいいいいいい！ ちよ、待って！ 本当にミシミシ言ってるんだけど!？」

「お前オレに謝ることあるだろ？ あるよな？ ねえなんて言わせねえぞ?」

「ふえ？ 謝ること……って、待って待って待って！ さつきより力強くなってる！ いだだだだだ!」

「その背中に背負ってるのは何だ？ ん？ 棒切れか？ 棒切れなのか？ おかしいよなお前の得物って確かハンマーじゃなかったっけ？ そのひしゃげた棒の説明を今すぐここで二百文字以内にまとめて簡潔に説明しろやあ!」

そこで、ようやくヒューゴも合点が行ったらしい。あ、と口を開きながら、顔一面に冷や汗を掻き始めた。

「うあああ、そうだった！ 本当にごめん！ でも、今回の敵はこ

ゼエゼエと肩を上下させるサラと、やっこのことで解放された頭を押さえて顔をしかめるヒューゴ。それを見て小さくため息をつきながらも、話の内容に目を丸くするベンジャミン。

だが、ヴァンだけはその空間にいなかった。意識が、遠い昔の記憶に引きずり込まれる。

あれは、何年前のことだったか。かつて、自分がまだ純粹で、幼く、そして浅はかだったころ。ドーラの火山の頂上で起きた惨劇の記憶。

ヴァン……私の、可愛い子……。

脳裏に浮かぶのは、ミカン色の長髪を地面に散らして倒れる母。その横にあるのは、黒焦げになった小さな塊。母は黒焦げの塊に手を伸ばし、それを優しく抱き寄せた。

守れなくて……ごめんなさい、ティーダ……。

それだけ言うと、自分の目の前で、母の瞳からゆっくりと生氣が失われていった。

「……はっ……はっ……！」

無意識のうちに、息が荒々しくなっていた。手足が痺れ、動悸が激しくなり、目眩がした。息苦しい。胸が押し潰されるようだ。

「……少年？ どうしたのだ？」

そこで、ヴァンの異変に気づいたサーシャが、ヴァンに手を伸ばした。その瞬間、ヴァンの脳裏にある光景が浮かんだ。

自分を罵る声。投げられる石つぶて。決まって最後に言われる言

葉。

人殺し！ 村から出て行け！ この×××！

「いやだああああああああああ！」

突然、ヴァンが大きな声で叫んだ。その声に、一斉に周りがビクつく。頭を抱えて唸っていたヒューゴも、その声に驚きつつも慌ててヴァンに駆け寄った。

「ヴァンくん！？ 一体どうしたの？」

「少年！ おい、しっかりするんだ！」

「ヴァン！ しっかりするニヤ！」

ヒューゴの隣で、サーシャとベンジヤミンが必死にヴァンに呼びかけた。しかし、ヴァンは駄々を捏ねる幼子のようにその場にしゃがみ込み、頭を抱えて首を振り続けた。

「ゴメンナサイゴメンナサイイヤダイヤダイヤダイヤダチガウチガウチガウ……」

まるで呪文を唱えるようにそう言うヴァンの呼吸は、明らかに上がっていた。咽喉元から、ぜひゅっ、ぜひゅっ。とおかしな音が聞こえてくる。

その音で、ヒューゴはヴァンが陥っている状態をいち早く察知した。

「まずい、過呼吸を起こしてる！ サーシャさん、何か袋はないですか！？」

「え？ 袋？」

ヒューゴの言葉にポカンと呆けるサーシャに、ヒューゴは口調を荒げた。

「はやく！ 急がないと、もっと酷くなる！」

だが、いきなり袋といわれても、サーシャは何も持っていない。どうすればいいのかわからず、オロオロと辺りを見回してしまった。その間にも、ヴァンの呼吸はさらに酷く上がっている。

と、そこへ、ヴァンの顔を小さなタルが覆った。ベンジャミンだ。腰にぶら下げていたタルを使ったらしい。傍に分解されたタルや爆薬が散乱していた。

「こ、これじゃ駄目かニヤ？ ボキ、これしか持ってないのニヤ」「あ、ううん！ これで良い！ サーシャさんはすぐに担架を！」「わ、分かった！ ベンジャミン殿、先に医者の方所に行ってくれ！」「了解ニヤ！ ヴァン、がんばるニヤ！」

タルをヴァンの顔からずれないように押さえるヒューゴを置いて、サーシャとベンジャミンが逆方向に駆け出した。

「……………ん……………」

目を覚ましたとき、ヴァンは布団の中で横になっていた。何故ドンドルマの入り口にいた自分がベッドで横になっているのだろう。

ヴァンは首を傾げながらゆっくりと起き上がった。
すると、

「若君いいっ！」

「うわっ！？……って、え？ ベンケイか？」

突然、赤虎模様の小柄なアイルーがヴァンの胸に飛び込んできた。ヴァンと一緒に暮らすアイルー、ベンケイだ。しかし、ミミルにいたはずのベンケイが自分の胸に飛び込んできたことによって、更にヴァンの頭は混乱した。

「え、ちよつと待った。これは夢か？ 何でベンケイがここにいる？ んでもって、ここはどこよ？」

「ここはドンドルマの病院よ。ベンケイちゃんは私たちと一緒に来たの」

そこへ、聞き覚えのある声がヴァンの耳を叩いた。顔を上げると、目の前で桜色の鎧を身に纏った銀髪の少女が、腕を組んで壁に寄りかかりながらヴァンを見ている。

「……なんでお前がここにいるんだ？ アイルーパンツ」

「もう一回寝ときなさいこのド変態！」

すかさず少女 レラがヴァンに向かって近くにあつたマグカップを投擲した。それは寸分狂わず、見事にヴァンの顎に炸裂する。
もちろん、痛い。

「つてええええ！ 何だよお前！ 近くにあるものぶん投げるのはガキまでの特権じゃねえのか！？」

「アンタに投げるマグカップや椅子はあっても、アンタを殴る手は

無いのよ」

そういうレラの手には、小さな木製の椅子が握られていた。注意するが、椅子はハンマーのように持ち上げたり振り上げたりするものではない。

「おいおいちょっと待て！ オレは今突っ込みどころ満載のこの状況について質問したいのに、なんでリンチに合わなきゃいけないんだああ！ 言っとくがSっ気はあっても断じてMなんぞに興味はゴフウツ」

問答無用で椅子を頭に喰らったヴァンは、呻き声を上げながら頭を痛そうに抱えた。ちなみに、ベンケイはおいおいとヴァンの胸に縋って泣いており、今の状況に全く気づいていない。

「若君い。このベンケイ、若君が突然倒れたと聞いたときは生きた心地がしませんでしたのニヤ。本当に、本当にご無事で何よりでしたのニヤア……！」

「いや、全つ然大丈夫には見えないのニヤよ……」

びいびいと泣き叫ぶベンケイと、顎と頭を押さえて唸っているヴァンを見て、近くの椅子に座っていたベンジャミンが小さく突っ込みを入れた。フウ。と小さくため息をつきながら、肩を竦めるベンジャミンの目は、心なしか赤く腫れている。

「あ、ヴァンくん！ 気がついたんだね！ ……って、レラさんその椅子何なの！？」

そこへ、ヒューゴが洗面器を持って病室に入ってきた。ヒューゴは慌てて洗面器を近くのテーブルに置くと、レラの手から椅子を取

り上げる。

「もう！ 一応ヴァンくんは病人扱いなんだから、暴力は振るわな
いって言ったじゃないですか！ 何でもものの数分で忘れてんです！
？」

すごい剣幕で怒るヒューゴに、さすがのレラもたじろいだ。ヴァ
ンと同じくらいしかない身長のレストランでは、頭一つぶん大きいヒュー
ゴの視線はどうしても下から見ることになる。上から視線は結構威
力があるのだ。

「……だって、ヴァンが私のことアイルーパンツって」

「だってじゃないですよ！ また過呼吸起こしたらどうするんです
か！」

「……うう」

言い訳すら、耳に入れてもらえないようだった。ヒューゴは小さ
くため息をつくとき、今度はヴァンの胸にしがみつくベンケイを優し
く引き剥がした。

「ベンケイくんも、そろそろ離れて。まだ一応安静にしないとけ
ないんですから」

「ウニヤア……。すみませんでしたのニヤ。若君、お見苦しいとこ
ろを見せてしまい、申し訳ありませんのニヤ」

こちらは素直にヒューゴに従うようだ。ヒューゴに抱き上げられ
たまま、ベンケイはヴァンにぺこりとお辞儀をした。

「いや。ベンケイは何にも悪くねえ。素直に謝るし、言い訳しねえ
し」

「……………悪かったわね、素直でなくて言い訳までして！」

ヴァンの言葉に、レラが怒ったようにそう言った。言っていることは全く可愛くないが、むすつと頬を膨らませながらそっぽを向く姿は、どこか嗜虐心をそそられる。だが、これ以上痛い目に合いたくはなかったので、ヴァンはそのことに触れるのを止めた。

ヒューゴはベンケイを床に下ると、洗面器から湿ったタオルを取り出した。

「ヴァンくんもとりあえず横になって。気分はどう？ 胸に圧迫感とかはない？」

「ん、大丈夫だ。っていうか、何で俺はここにいて、ベンケイとレラがドンドルマに来てるんだ？」

額にタオルを寄せられたヴァンは、唯一この場で自分に優しいヒューゴにそう訊ねた。ちなみに、ベンジャミンは疲れてしまったのか、ベンケイに突っ込んだ後、椅子の上で舟を漕いでいた。

「覚えてない？ ヴァンくん、いきなり過呼吸を起こしたんだよ」「過呼吸？」

聞きなれない言葉にヴァンが首を傾げると、ヒューゴはコクリと頷いた。

「話すとき長くなるから端折るけど、呼吸のし過ぎで酸欠に近い状態になっちゃったんだ。で、サーシャさんとベンジャミンくんが手伝ってくれて、君をここに運んだんだよ」

本当に覚えてない？ とヒューゴはヴァンに訊ねてきた。言われれば、いきなり息が上がって苦しくなったのを覚えている。ど

うしてそうだったのかまでは記憶になかったが。

「じゃあ、ベンケイとレラがここにいるのは？ さすがにオレが倒れたからってのはないんだろ？」

「それは……」

今度は、レラが質問に答えようと口を開いたそのときだった。

「ぎゃあああああ！ お、お主、何をする気じゃあああ！」

突然、ドアの向こうから老人の叫び声が聞こえてきた。続けて、聞きなれた男の声が辺りに響き渡る。

「おかしなことを訊くのですね、会長。いや、俺はただ単に新しい剣の切れ味を試そうと、人の弟子に無茶苦茶な試練を課しておいて、自分のはんびりと煙管なんか吸っちゃまっている老人をちょっとぶつた切ってやろうと思っただけですよ？」

ブンブンと風を切る音に続き、再び響き渡る老人の叫び声。今度は女性の半泣きに近い悲鳴が響いてきた。

「ちよ、グランエスト氏！ 頼むからそれだけは止めてくれ！ ここは病院だ！ けが人を出してはならないし、何より静かにしなければならぬ！」

「ほお、病院。ならば問題はないでしょう。ここの病院ならば医師も施設も充実している。たとえ瀕死の重傷に追いやったとしても助かる確率が高い。……というわけで、検査は続行させてもらう！」

再び聞こえてくる風切り音。今度は悲鳴が二つに増えていた。

「……………」
「分かった？ 大体の事情」

呆気に取られているヴァンに、レラが小さくため息をつきながら言った。大体の事情は飲み込めたが、ヴァンの背中に嫌な汗が伝う。

「……………なあ、まさかまた？」
「うん。こつてり絞られた」

イヤンクツクの襲撃を受けたときのことを思い出したヴァンは、恐る恐るヒューゴに訊ねた。それに対し、ヒューゴはガタガタと震えながら頷いている。つまり、ヒューゴは既に折檻を受けた後だということだ。

しばらくして、病室のドアがゆっくりと開いた。そこから入ってくるのは、満面の笑みを浮かべた般若である。

「目が覚めたのかい？ ヴァン」
「……………」

既に、ヴァンは言葉を口にすらできなかった。グロッキーになっているレウスSシリーズを着込んだ女性　サーシャと小柄な竜人族の老人をそれぞれ両方の手で抱え込んでいる真つ赤な般若　フラディオが、爽やかさ百二十パーセントの笑顔とこの世のものとは思えないほどにない悪質^{オーラ}な怒気を纏いながら、ゆっくりとヴァンに近づいてくる。

断言しよう。あんなもの、人が纏える怒気の範疇をブツチで超えている。

フラディオは抱えていた二人を無造作に床に投げ出すと、笑顔のまま両手をポキポキと鳴らしながら遂にヴァンの真横にまでやってきた。ヴァンの全身から嫌な汗が一気に噴き出すのを感じる。布団

が湿っぽくなっていた。

「……どもつす、先生」

「ああ、数日振りだな、ヴァン。……で、何か言うことはあるか？」
「……」

いつの間にか、レラたちが倒れているサーシャたちを連れて病室からいなくなっていた。椅子の上で眠りこけていたベンジャミンもいない。彼の一番の味方であるはずのベンケイすら姿を消していた。もはや逃げ道を断たれたヴァンは、布団に包まりながらガタガタと震えていた。

「……えと、その……」

「依頼に行ってしまったことは不可抗力だから構わない。だが、それでもクエストをリタイアすることもできたはずだ。それがどうだ？ お前たちはクエストをそのまま続行し、自分たちの命を危険に晒した。俺はお前たちにまず守るべきは自身の命だと教えたはずだよな？」

「……あい……」

「……ヴァン、ちょっと起きろ」

「あ、あの、オレ、今日は安静って……」

「おきろ」

「……うす」

数秒後、ミシミシと頭蓋が割れるような音と、少年のかなり悲痛な叫び声が病院中に響き渡った。

「あゝ、では、この場で申し訳ないが、クエストの詳細を聞こうかのお」

フラディオの折檻を受けて完全にグロッキー状態のヴァンを見ながら、竜人族の老人　ゴルドバは冷や汗を掻きつつもそう口を開いた。その隣には、クエストの詳細について書かれた紙を持つ女性

サーシャが立っている。ヴァンのベッドを囲むように、ヒューゴとレラ、ベンケイにベンジャミン、そしてフラディオが腰を下ろしていた。

最初、ゴルドバがハンター協会会長であることを聞いたヴァンとヒューゴは目を剥いた。しかし、レラとベンジャミンが敬語を使って接しているのを聞いて、ようやく合点がいったのだ。

悪いが、最初のときのあの大人気ない態度からして、ゴルドバの人柄をそういう風に判断することはできなかった。

「では、まずヒューゴ・レペンス氏のクエストから報告させていただきます。クエストにかかった時間はおよそ十時間。ゲリヨス亜種の死因は、表皮を全て焼失したことによる焼死でした」

「……ふむ。して、次は？」

「ヴァン・ドラグニル氏のクエストにかかった時間はおよそ五十九時間です。しかし、こちらは意識不明だった時間も含まれており、実質的にはレペンス氏とほぼ変わらない時間でクエストをクリアしています。フルフルの死因は失血死。喰われていたフルフルも同様の死因と判明しました」

サーシャの報告に、ゴルドバは小さく頷くと、満足そうな笑みを浮かべた。

「……なるほどのお。やはり『赤王』の弟子だけはあったの。面白い結果じゃ」

「面白がるなクソジジイ」

笑みを浮かべるゴールドバに、すかさずフラディオが口を挟む。さすがにまだ傷が癒えていないのだろう。ゴールドバは一瞬だけビクツと飛び跳ねた。

「と、とにかくじゃ。今回、お主ら二人はFクラスながらも見事敵を打ち破った。ただし、今回のことに関してそれぞれに一つずつ訊ねても良いかのう?」

ゴールドバの質問に、ヒューゴは無言で立ち上がった。グロツキーになっっていたヴァンも、ベンケイに助けられながら何とか上半身だけ起き上がる。

それを肯定と踏んだのか、ゴールドバはまずヒューゴと向き合った。

「今回、ワシはお主がハンマー使いであることを知りながら、ゲリヨス亜種の単体狩猟ソロバントを課した。クエストの詳細を聞いた時点でリタイアすることも可能じゃったはずなのに、お主はそれを受注し、更に自身の命を危険に晒してまで敵を打ち破った。ワシが訊きたいのは、お主が何故諦めずに最後まで立ち向かったか、ということじゃ」「どうしても叶えたい夢と、迎えに行かなくちゃいけない人がいるからです」

ゴールドバの問いに、ヒューゴは間髪いれずにそう答えた。それを聞いて、ゴールドバの目が細くなる。

「ほお。して、その夢とは?」

「書士官として、開拓団である家族が無事に旅を続けられるようにすること。そして、『秘境探し』として、自身の自身の力で誰も見たことのない場所を探すことです。この大陸は、人間の知らないことがまだまだ多くある。僕はそれを自分の目で見てみたいんです」

ヒューゴの瞳は、揺るぎない想いをそこに湛えていた。決して揺るぎない、ヒューゴの夢。そのために必要な力ならば、何をしてでも手に入れる。そんな決意を秘めていた。

「では、もう一つの迎えにいかねばならない人とは？」

「こんな僕を、好きだと言ってくれた人です。あの人の役に立つために、あの人の隣を堂々と歩けるようになるために、今回のクエストで逃げるわけには行かなかったんです」

彼女と同じ場所で同じときを過ごすために。ヒューゴに立ち止まっ
つていられる余裕などないのだ。

それを察したのか、ゴルドバはゆっくりと頷くと、今度はヴァン
に向き直った。

「少年、クエストの詳細に関してはベンジャミンから報告を受けて
おる。お主は最後の一撃の際、避けられるはずの攻撃を避けようと
しなかった。今回は運が良かったとしか言いようがない。何故あの
ようなハイリスクな賭けをしたのじゃ」

「半分はヒューゴと同じだ。叶えたい夢がある。それと、あれはオ
レの信念だからだ」

「信念、とな？」

「こちらの間髪いれずに答えたヴァンに、ゴルドバは目を丸くした。
避けるべき攻撃を受けることの、何が信念だというのだろう。」

「あのフルフルは、オレが摘み取った命を横からしゃしゃり出てきて喰いやがった。オレが摘み取った命に責任^{ケリ}つけんのは、オレのやることだ。オレは、あのちびフルの命を次に繋げる責任があつたんだ。だから、横からしゃしゃり出てきたアイツには落とし前つける必要があつた」

「……だから、あのようなことをした、と？」

「そうだ。これはたとえ先生に怒られたって曲げる気はない。オレはハンターでもあるけど、でも、武具職人でもあるから」

誰かに言われて変えるような考えなど、信念ではない。十六歳の少年が言うにはかなり重い決意を秘めた言葉だった。

だが、ゴルドバはそれを聞いた途端、突然楽しそうに大笑いを始めた。その場にいた全員が、突然笑い始めた老人に目を剥いて驚く。ゴルドバは数分ほど笑った後、ゆっくりと煙管を吸い込んだ。口から紫煙が漏れ出る。

「いやあ、愉快愉快。最近はそんな命知らずなヤツなど滅多に出んからのお。いやあ、実に愉快じゃ」

ゴルドバはそう言うと、さて。と先ほどまでの笑顔から一転させて真剣な表情を浮かべた。

「実は、ワシがお主らに課した試練、あれはワシの独断で決めたことじゃ。本来ならば、Dクラス認定試験に使われる内容であり、評議会は現在カンカンに怒っておる。無理もなかるうて。ルール違反を会長自ら行ったからのお」

しかし、それでも。とゴルドバは続けた。

「お主らは見事クエストを達成した。これに対し、評議会は更に頭

を悩ませておる。お前たちにどのような判定をすれば良いのか、迷っているのじゃ」

そこで、とゴルドバはサーシャの方を見た。サーシャはゴルドバの視線にコクリと頷くと、ヴァンとヒューゴに一枚の紙を差し出した。そこには、大型モンスターの名前が羅列されている。

紙の文字を一通り読んだヒューゴが、小さく首を傾げた。

「あの、これは？」

「お主らを、Dクラスに仮認定し、半年間の試験期間を設けることにしたのじゃ。試験期間は半年。お主らには半年間でそこに書かれておる大型モンスターのうち、十頭を狩ってもらうことになった。

そのうち半分の五頭は、単体狩猟で狩ることが条件じゃ」

「は！？ ちよつと待ってくれ、会長！ これ、かなり強力なモンスターだらけだぞ！ これを半年でこの二人に十頭も狩れというのか！」

これに、ヒューゴの紙を覗きこんだフラディオが反論を述べた。無理もない。そこに書かれているのは、まだ二人が直に目にしたこととすらない飛竜種の名前も数多く並んでいたからだ。しかも、そのうち半分は一人で狩らなければならぬ。ちよつと無理がないかと思えるのは当たり前だろう。

そこへ、それまで口を挟まなかったレラが、おずおずと口を開いた。

「会長。私もそれはちよつと無理があるんじゃないかって思います。二人はまだハンターになって半年です！ 飛竜種を半年で十頭も狩るなんて……Dクラスハンターでもこんな無茶はしません！」

「評議会はこうでもしなければ黙ってくれなかつたんじゃよ。ワシが見込んだ者たちが、本当にそれに値する実力を身につけられるの

か、この期間で試せ。そう言われたのじゃ」

レラの言葉に、ゴールドバは小さくため息をつきながらそう答えた。無論、ゴールドバが無理を言っただけで押し切ったものなのだが、あえてサ―シャはそのことを言わなかった。知らない方が幸せなこともあるのである。

ゴールドバの言葉にしばらく黙っていたヴァンとヒューゴだったが、やがて二人とも何かを決意したように顔を上げた。

「やるぜ！　こうなりや意地でもDクラスに昇格してやる」

「僕もやります。異存はありません」

「ちよ、アンタたち本気なの！？」

二人の言葉に、レラが驚きの声を上げた。しかし、二人の表情は変わらない。

「お前なあ。これは俺たちにとつちやチャンスなんだ。もっぱら、人とおんなじペースで歩く気なんか更々ねえっての」

「僕も同じ。早くDクラスに上がれば、その分早く彼女を迎えにいけるしね」

夢のため、交わした約束のため。

二人の意思はかなり固いようだ。それを見て、レラは小さく肩を竦め、フラディオはもう何も言うまいとでも言うように小さくため息をつき、ゴールドバはにんまりと微笑んだ。

「では、ハンター協会会長、ゴールドバ・レッドフォックスの名の許に、ヴァン・ドラグニルならびにヒューゴ・レペンスの両名を、Dクラスハンターに仮認定する。世界の調和のため、ひいてはヒトの安寧なる未来のため、その力を振るわれよ！」

「拝命いたします！」

「拝命いたします！」

こうして、前代未聞の長い長い長い試験が、幕を開けた。

第二十九話 試験結果と新たな試練（後書き）

先の『ヒューゴとロビン編』に比べ、短めでしたがこれで『昇格試験編』は終了です。

いや、本当はロビン姉さんもあんなに書くつもりはなかったのですが、みんな予想外に動き回ってしまい……。もはや主人公とヒロインが空気という、とんでもねえ状況を作り出してしまいました。

そして、久しぶりのフラディオ兄さん。だんだん昔のキレキャラに戻りつつあります。最初は爽やか兄さんだったのに。今や過保護なキレキャラ……。哀れ。

結局、性格を根本的に変えるのは難しいってことですね！（オイ）

あ、フラディオ兄さんで思い出しましたが、まだ外伝アンケートは続いております。

改めて、現在の状況確認を。

- ・フラディオの過去話：一票
- ・ロビンとヒューゴの学院での話：一票
- ・レラとナタリーの出会い：0票
- ・ベンケイの苦労話（新卒）：一票

です。

メッセや感想などで受け付けております。

また、『 $\times\times$ が見たいぜ！』つてのも募集してます。

人気のあるやつからゆっくり書いていくつもりです。

おそらく、4月から書き始めて、公開は5月以降になるかと。

さて、これまで散々空気呼ばわりされてきた主人公とヒロインですが、次回からはこの二人にスポットが当たります。久々に、ゴードンの弟子たちも活躍です。

では、また次回！

第三十話 帰郷（前書き）

ども。最近、ペンネームを旅がらすから猪突猛進野郎に変えようか検討中の旅がらすです（ウソ）

いや、何か手元にストック置けないんです。ワードで書き終えてサイトに保存してケータイで確認し終わると、

『え？ まだいんの。いやそろそろ出ていってくれよ』

と言いたくなるのです。

そんな旅がらす。久しぶりに主人公をメインに書こうとしてみたら、かなり（精神的に）疲れました。

最近、本当にヒューゴよりで書いていたんだな。としみじみ。

そんな感じで、久しぶりの主人公メインな第三十話、スタートです。

第三十話 帰郷

北エルデ地方は、今日も晴天だ。久しぶりに見る光景に、ヴァンは目を細めていた。

「若君！ 久方の帰郷。楽しみですニヤ！」

そう言いながら甲板でポケットと呆けているヴァンにニコニコと微笑むのは、小柄な赤虎のアイルー、ベンケイだ。しかし、ヴァンは相変わらず明後日の方向を向いてポケットと突っ立っているだけだ。

さすがに、いつも元気の有り余っている主君が無反応とはおかしいと、ベンケイは首を傾げた。

「若君？ どうしましたのニヤ？ 若君ー！」

愛らしい肉球のついた手でペチペチと足を叩かれ、ようやくヴァンは我に返った。

「……ん？ あ、ベンケイか。何だお前いつからいたんだ？」

「ウニヤア。若君、ベンケイは若君とずうつとご一緒させていただいておりますのニヤ。お忘れでしたかニヤ？」

「えあ？ そうだったっけ？ ……わりい。ずっと考え事してた」

「ウニヤ！ 若君が考え事など珍しい。……ニヤ！ まさか若君、故郷に待ち人がおりますかニヤ？」

ベンケイがキラキラとした目でヴァンを見上げるが、ヴァンは首を横に振った。

「そんなんじゃないやねえよ……。オレ、寝るわ。ヒューゴとかに会った部屋にいて言っておいてくれ」

「承知。ドーラに到着しましたらお知らせいたしますのニヤ」

「ん、よろしく……」

ヴァンは片手を上げて礼を言うと、そのまま船の中に戻っていった。

ドンドルマで昇格試験を受け、仮認定ではあるもののDクラスに飛び級できたヴァンとヒューゴは、ミミルのハンターズギルドで依頼書をいくつか手にとって見比べていた。

「なあ、これは？ 『激闘！ 蒼の火竜』。リオレウス亜種で報酬もかなり良いぜ？」

「それ死亡ルートが見えるんだけど……。ってか、いきなり亜種はないでしょ。それよりこっちは？ 『湿地帯の鎌蟹』。シヨウゲンギザミで場所はクルプティオス湿地帯」

「ええー！ どうせなら飛竜行こうぜー！」

「……別に何でもいい気がするんだけど……」

半年間で、飛竜種およびそれに相当する実力を持つ大型モンスターを最低十頭、うち五頭は単体で狩猟するという、長期の試験を課された二人は、ミミルに帰って早速クエストを受注しようと依頼掲トボード示板と睨めっこを始めることにしたのだ。
リクエス

どうせなら飛竜に挑みたいと駄々を捏ねるヴァンに、ヒューゴは小さく肩を竦めた。

「飛竜ー！ 飛竜がいい！ ぜってえ飛竜！」

「あのさあ、幼児じゃないんだから。それに、僕らの武器じゃまだ飛竜じゃなくて大型の甲殻種や牙獣種がいいとこだつてば。先に武器の素材を集めるべきじゃない？」

さすがに武器のことを指摘されたヴァンは、むう。と口をつぐんだ。確かに、今の自分たちの武器では飛竜に挑むのは難しい。ヒューゴの『工房試作品ガンハンマ』もまだ修理中だ。

ヴァンもそろそろ『バトルシリーズ』から防具を変えたほうがいかもしれない。今のままでは、一発で死ぬ方が確率が高いのだ。

「分かった。じゃあ、ギザミにでも行くか……」

「お、いたいた！ おーい！ その仮Dクラスの二人！ ちょっといいかー！」

まだ不満顔を遺したヴァンが、しびしびショウグンギザミの依頼を受注しようとしたところへ、白一色の防具『フルフルシリーズ』を身に纏った青年が二人に呼びかけてきた。二人の師、フラディオの父ゴードンを師事するハンター、アレンだ。

アレンは、掲示板のすぐ近くにあるテーブルを陣取っていた。そこには、『パピメルシリーズ』を身に纏った双子のハンター、ピリカとノンノもいる。

「仮って大声で言うなよな、アレン……。なんだよ一体？」

「んー、いや。ちょっと野暮用つつつか、話したい事があるんだけどさ。とりあえずこっち来いよ」

頭防具を外し、確実に染髪であろう深緑のレウスレイヤーをいじりながら、アレンは右手でジェスチャーを示した。今は昼間。酒場も昼食を食べようと集まるハンターでいっぱいだ。喧騒がすごく、アレンも声を張り上げている。

二人は頭にクエスチョンマークを浮かべつつ、アレンたちが陣取っているテーブルに向かった。ヴァンは席に座りつつ、悪戯小僧のような笑みをアレンに向けて浮かべる。

「何だアレン。アレか？ 昼間っから女二人も一気に侍らせて自慢してえってのか？」

「そうそう特にピリカがツンツン見せかけて実はデレで楽しく……って違うっつの！ ていうか、ロビンのアネキとアチチなヒューゴにんなもん見せても面白くねーし」

「ちよ、別に僕と教授はそんなんじゃないってば！」

「それ以前にアレン、ワタクシがツンデレって何言っていますの！？」

アレンのノリツッコミに思わず立ち上がって声を荒げるヒューゴとピリカ。その間に座るノンノは、一人のんびりとお茶を楽しんでいた。

「ああ。ピリカちゃんはずつつと前からそんな感じじゃなあい？」

「ちよ、お姉さま！？」

「でもお、ヒューゴくん。公衆の面前でキスしたのに、恋人じゃないっていうのはちょっと酷いわぁ」

ピリカの反論など完全にスルーしたノンノの言葉に、ヒューゴは更に顔を真っ赤にして抗議の声を上げた。

「あれは教授が！ ぼ、ぼぼぼ僕は知らなかったんだ！」

しかし、そんなヒューゴの抗議もノンノの前では無力に等しい。

「ああ。それじゃあ夜の河原ではどうなの？ あれ、ヒューゴくんからしたように見えただけだ」

「なばっ！」

その言葉に当時のことを思い出したのか、ボンツ！ と盛大な音を立てながらヒューゴの顔が一気にドドブラリンゴの如く真っ赤に染まった。初なのかそうでないのかよく分からない男である。

そこへ、さらにアレンが茶々を入れた。

「なあなあ。お前らどこまで行つてんの？ もうアレか？ あんなことやこんなことまでしちゃったのか？」

「な、ななな何想像してんのさ！？ 僕は別に」

「ああ。アレンは『あんなこと』や『こんなこと』としか言っていないわよ？ それとも、想像しちゃいけないような事でもしたのお？」

「うぐあ……」

ノンノの言葉に更にたじろぐヒューゴ。アレンもニヤニヤと悪魔の笑みを浮かべている。もはや勝利の女神は二度とヒューゴには微笑まないのだろう。

そんな光景を見ていたヴァンとピリカは、それぞれに小さく呟いた。

「オニだ（ですわ）……」

「……昼間から何の話してるのよ、アンタたち……」

と、そこへ、如何にも『呆れてものが言えません』とでも言いた

げな表情で、桜色の鎧を身に纏った銀髪の少女がこちらに歩いてきた。レラだ。その後ろを、どんぐりメイルを装着したレモン色のアイルー、ナタリーがちょこちょこついて来る。

「ウニヤア。旦那さん旦那さん。『あんなことやこんなこと』って、いったい何ニヤ？ ウチ、すつごく知りたいニヤ」

「そうね。あとでヒューゴに教えてもらったら？ 私はとりあえずココに呼ばれた理由を聞きたいし」

「あ、そついやそつだ。オレたち何で呼ばれたんだ？」

「そつですそつちが本題じゃないですか！ ってナタリーさん、僕の背中によじ登らないでください絶対に教えませんから！」

すつかり話を捻じ曲げられて痛々しい思いしかなかったヒューゴは、ナタリーを背中から下ろしたりテーブルを叩いたりとやたらと忙しそうだ。そんなヒューゴを、呼び出した張本人であるアレンが馬をあやすようにどつどつと両手を前に出して静める。

「まま。役者も全員揃ったことだし、とりあえずは飯食おーぜ。話はそれからだ」

「^{チーム}猫団？」

マスターベーグルにワイルドベーコン、砲丸レタス、それにシモフリトマトを挟んだBLTサンドを頬張ったヴァンは、アレンが口にした聞きなれない言葉に首を傾げた。

「そ。まあ簡単に言えば、仲の良いハンター同士が集まって作るグループのこと。チーム作つとけば、複数で狩りに行くときとか、メンバー集めに困らなくて済むってわけさ。複数の方が危険率も低く

なるしな」

アレンの話 요약するとこうだ。

今、アレンはチームを作ろうと思っているが、如何せんメンバーが集まらない。

ミミルの町のハンターは総勢で三十数名と町付きハンターの規模としては小さい方で、そのハンターたちも既にチームに加入している者ばかりで、今更年若いアレンがチームを作ろうとしても、人間が集まらないのだ。

「中には、兄さんみたいに獵団には入らないで単体狩獵ソロハンに徹するハンターも少なくないけどね」

「っていうか、フラディオ様は別格ですわ。古龍討伐で真つ先に名前が挙げられるG級ハンターなんて、まずリーダーでなくてはなりませんもの」

オニマツタケとワイルドベーコンのカルボナーラをつつくレラに、熟成チーズとミックスピーーンズのリゾットを食べていたピリカが小さく肩を竦める。

G級とは、モンスターの中でも特に危険とギルドが指定したモンスターおよび、そのモンスターの討伐を可能とする、ハンターの中でも特にずば抜けた実力を持つ猛者たちの総称である。ハンターランクで言うならば、Aランク以上。フラディオはその中でもわずかな十数人しか存在しないSクラスのハンターなのだ。

ちなみに、ミミルの町にはG級ハンターはフラディオ唯一人である。

「……とまあ、そんな話は置いてだ。俺がみんなを呼んだのは、ここにいる七人で獵団を結成したいからなんだ！」

またも話が脱線しかけた話題を本題に戻したアレンは、そう言っ
てニカツと歯を見せて笑った。その言葉にまず反応したのは、それ
までオンブウオのムニエルに舌鼓を打っていたナタリーだ。

「ニヤ？ それってウチも入ってるニヤ？」

「もちろん入ってるぜ。ヴァンとヒューゴは半年で飛竜を十頭は狩
らないといけないんだろ？ 悪い話じゃないと思うぜ？」

確かに、アレンの言う通りであった。ヴァンとヒューゴ以外は、
確実に三ヶ月以上前にDクラスになったハンターだ。場数は確実に
多いし、何より仲間として心強い。決して悪い話ではない。

「ま。理由はそれだけじゃないんだけどな」

「え？ 他に何かあるんですか？」

ヒューゴがアレンの言葉に首を傾げると、アレンはニヤリと笑い
ながらヴァンとヒューゴを見やった。

「知らないと思うけど、実はお前ら、今いろんな獵団から目えつけ
られてんだ。無理もねえよ。Fクラスのハンターがフルフルとゲリ
ヨス亜種に挑んで無事生還した上に、討伐までしちまったんだ。こ
れほどの逸材を引き込みたいと思わない方がおかしい」

次に、とアレンはレラとナタリーに視線を移した。

「レラ。お前は俺が知っている同期のハンターでおそらく一番強い。
わずか十七歳で『覇気』を操るポテンシャルと太刀の扱い。腕力で
男に勝てなくても、得物さえ持つちまえばお前に勝てる奴はなかな
か出てこないだろう。ナタリーの爆弾や罠の扱いもかなりイイ線い
ってるし、何よりタイミングが的確で効率がイイしな」

「褒めすぎ。私だって、いくらなんでも敵わない相手はたくさんいるわ」

「いいだろ？ 別に減るもんじゃねえし」

謙遜するレラに、アレンは小さく肩を竦めながら笑う。それから、アレンはテーブルの上はどこから出したのか、一枚の書類と羽ペン、インクを取り出し、ペンにインクをつけたかと思うと紙の上をスラスラと走らせた。

「ほんじゃま、そういうわけで全員加入な！ ナタリーの苗字はレラと同じでいいの？」

「え、おいちよつと待てよ！ まだ返事してねえだろ！？」

「ほいほい。ヴァン・ドラグニル、Dクラス仮認定つと」

「つてブツチで無視すんな！ あと仮つてでつけえ声で言うんじゃねえ！」

「あ、アレン！ アナタ人の話を聞いたらどうですか！？」

「ピリカ・ユニフローラはツンデレDクラスつと」

「変な言葉をつけないでくださいまし！」

ヴァンやピリカの言葉などシャットアウトしているのだろう。アレンは二人の言葉を完全に無視してスラスラとペンを走らせた。テーブルに座る何人かが呆気にとられる中で、アレンは七人分の名前を書類に書き込んだ。その独断っぷりに、呆気にとられなかった数少ない人間の一人、ノンノがお茶を飲みながら小さく笑う。

「久しぶりに見たわねえ。アレンの独断マイペース」

「こんなところだけトオイお兄ちゃんに似てるんだから、まったく……」

もう一人の呆気にとられなかった人間のレラは、ノンノとは対照

的に小さく肩を竦めた。アレンはそんな二人の言葉すら耳に入っていないらしい。羽ペンを持ったまま、うぐん。と唸っている。実に都合のいい耳だった。

「次はリーダーと獵団の名前だな……。どうしよっかなー。結構ピンとくるのが欲しいんだけど」

「ウニヤ、名前を考えるなんて楽しそうニヤ！　ウチも考えるニヤ！」

「ナタリーさん、楽しそうですね……」

一人ノリノリのナタリーに、ヒューゴが小さくため息をつく。ノンノ以外の全員も、それに倣った。

と、そこへ、

「若君ー！　探しましたのニヤ！」

一匹の小柄な赤虎模様のアイルーが酒場に駆け込んできた。

そして、今に至る。

「にしても親父のヤツ。いきなり帰って来いって何だよ……」

赤虎のアイルー、ベンケイが持ってきたのは、ヴァンの父親からの手紙だったのだ。手紙の内容なんかいちいち覚えていない。ただ、

帰って来いとだけ書いてあったことはきちんと頭に入っていた。

そんなわけで、現在ヴァンは北エルデ海を進む船の上にいるのである。

ドーラは火山島で、砂漠のオアシス・レクサーラから出る船に乗るのが唯一の行き方だ。ちなみに、レクサーラに行くにはミミルからドンドルマまで竜車で一日、ドンドルマからジオ・ワンドレオまで船で一昼夜、さらにそこから竜車で一日と非常に面倒な方法を取らねばならない。ドーラは武具職人だらけという以外では寂れた村なので、レクサーラから出る船の本数自体少なかった。

半年のうちの一週間をこんな旅に使わなければならないのか。と、ヴァンは船室のベッドに飛び込むと欠伸を掻きながら小さくため息をついた。

その上、何でか今回の旅にはおまげがいる。アレンたちだ。どうやらベンケイが持ってきた手紙をその場で読んだのがいけなかったらしい。アレンはヴァンの手紙を覗き込むとニヤリと笑ったのだ。

「お、ちょうどよくね？ よし、獵団初の遠征だぜ！」

ちょうどよくない。しかし、見られた時点で後の祭だった。ヴァンが口出しする前に、ミスター独断ことアレンは、レクサーラまでの竜車の切符をきっかり七人分もぎ取ってきたのである。

連れていきたくなかったのに。と、ヴァンは再びため息をつく羽目になったのだ。

「あーあ、めんどくせー」

今更帰って、何になると言うのだろうか。もちろん、まだ武具職人としてのヴァンの腕は未熟だ。もっともつと工房の男たちから学びたいことはたくさんある。だが、ハッキリ言っただけであの場所にそれ以上の思い入れなど無い。行くのにやたら時間がかかるだけで、これ

まで全く帰らなかったのに、どうして今更帰らなければならぬのだらう。

「……眠」

もう考えるのも嫌だった。今度は大きな欠伸を漏らすと、ヴァンはそのまま眠りについた。

火山に行こう。火の神様に頼んで、お母さんの病気を治してもらおうだ！

ダメだよ、ヴァン。お父さんがきつと怒るよ。僕らはまだ…、

なんだよ！ ティーダはお母さんが死んでもいいの！？

ヤダ！ でも、僕らだけじゃ危険だってば……。

行ってみなきゃ分かんないだろ！ どうせお父さんは僕らを連れて行ってはくれやしない。僕らが行かないで、誰が行くんのだ！

……分かった。行こう、ヴァン。

だが、それが間違いだった。

あああああああああああああああああああああああああああ！

…… どうして…… どうして…… 何で僕じゃないんだ…… どうして…… どうして……

あのとき、自分があんなことをしなければ。
こんなことにはならなかったのに。

息苦しい。海の底にいるようだ。酸素。酸素が欲しい。
手足が痺れているようだ。辛い。辛い。助けて。誰か助けて！

「……ン！……か……て！」

……誰だ？ 誰かが呼んでいる。不思議だ。痺れている右手が、
ほんの少しだけ温かい。

「おね……！ しっ……して！」

何故だろう。苦しいのに、苦しくてたまらないのに、右手から伝
わる温もりが心を落ち着かせてくれる。まるで、母に抱かれて眠っ
ていたときのようだ。

少しずつ、意識がはつきりしてきた。ゆっくりとだが、呼吸も安
定してくる。胸の圧迫感が消えていくのが分かった。それと同時に、
自分に呼びかける声もはつきりと聞こえてくる。時折嗚咽を漏らす
ような音も耳に入ってきた。

「ヴァン！ お願い、しっかりして！」

ああ、そんなに泣かないでくれよ。別にオレは平気だから。そう
言いたいのに、うまく口が開かなかった。

朦朧とする意識の中、ヴァンはゆっくりと目を開いた。風に流れ
るようなきれいな銀髪を振り乱した少女が、マカライトブルーの瞳
に涙をいっばいに溜めて自分の右手を握っている姿が視界に飛び込
んでくる。いつもヴァンに怒って物を投げつけているのが嘘のよう
だ。

息苦しさがまだ少し残る中で、銀髪の少女 レラに向けて、ヴ
ァンは何とか絞り出すように小さく呟いた。

「はじめ……も、だい、じよぶ……」

それだけ呟くと、ヴァンは再び眠りについた。

ドーラに向かう船の一室で、ようやく呼吸が安定し小さく寝息を立てて眠るミカン色の髪の少年、ヴァンを見て、レラは小さく安堵の息を漏らした。

船室の横を通った時は、いったい何事かと思った。ぜひゅっ、ぜひゅっという不可解な音と、苦しそうな呻き声。まさかと思って飛び込んでみれば、ベッドの上で見知った少年が苦しそうに喉を押さえていたのだ。

ヒューゴから話を聞いておいて良かった。ドンドルマで過呼吸を起こしてからヴァンが腰にぶら下げるようになった小さな袋。あれがなかったらどうしようかと思った。

袋を口と鼻に当ててから最初は、なかなか呼吸が安定しないものだから自分がパニックに陥りかけた。どうにか左手で袋を押さえ、もう一方の手でヴァンの左手をギュッと強く握りしめた。

お願い、しっかりしてよ。アンタらしくない。こんなの全然アンタらしくない。

いつの間にか、涙があふれていた。怖かったのだ。目の前で苦しむ少年が、もしかしたらとんでもないことになってしまうのではないかと思ってしまった。そうならどうしようと、本当に怖かつ

ただ。

どうしてなのだろう。幼馴染のアレンが風邪をひいたときですら、こんな風に必死になって祈ったことはない。ヴァンが辛そうに息をしているのを見た瞬間、本当に恐怖を感じてしまった。

「……ん……ん……」

不意に、ヴァンが小さく呻いた。心臓が飛び跳ねるかと思うくらいに驚いたが、ヴァンはそれきり何も言わなかった。ホツと胸を撫で下ろす自分が、なんだか滑稽だ。いつもだったら、絶対にマグカツプで彼の顎を痛めているに違いないのに。

「……あ」

そこで、レラはようやく自分がまだヴァンの左手を握り締めていたことに気づいた。気づいた途端、なぜだか変に意識してしまった。別に、レラだって男の子とお付き合いくらいならしたことはある。手だって何度も繋いだし、一応……まあ、今は関係ない。

だが、ヴァンと手を繋いでいることが何故だかとても恥ずかしく思えた。

「……外そ！ そう！ 外せば良いんだわ！」

自分でも無意識のうちに声に出してそう言ったレラは、それまで強く握っていた右手を緩めた。こんなに強く握っていたのか、と自分でも驚いてしまう。

しかし、

「……や」

手を緩めた途端、いきなりヴァンがそう呟いてレラの手を握り返してきた。それはもう強い力で。

もちろん、レラは目を剥いて驚いた。心なしか、ヴァンの両目がうつすらと開いているのが見えた。

「え、ちよ、ヴァン！？ やだ、離してよ！」

「……………なんで？ やだよ……………」

慌てて手を離そうとするレラだが、ヴァンの方が腕力はあるようだ。ムギユーツとさらに強い力で握ってくる。寝ぼけているのか、力加減など完全に無視していた。結構痛い。レラは思わず顔を顰める。

「いたっ！ ねえ、お願いだから離して」

「……………や」

まるで駄々を捏ねる幼子のようだ。ヴァンはもぞもぞと動くと、レラの手を布団の中に潜り込ませて両手で強く握りしめた。さすがにいつものヴァンにはあり得ない行動に、レラは顔を赤らめながら握られている手を引っ張った。

「ちよっとヴァン！ ねえ、お願いだから離して。痛いよ」

「……………や。離れたらお母さん、どっか行っちゃうでしょ？」

どうやら、完全に寝ぼけているらしい。レラの手を母親の手と勘違いしているようだ。

それを聞いた途端、レラの中に安堵とほんの少しだけ残念に思う気持ちが生まれた。

「……って、何で私残念がってるの？ ……っていつか、今はこの手をどう

にかしなきや！)

しかし、ヴァンは相変わらず手を離す気がないらしい。寝ぼけ状態はまだまだ続きそうだった。

観念したレラが小さくため息をつくとき、ベッドから鼻を吸る音が聞こえてきた。

何と、ヴァンが涙で目を潤させているではないか。

「え、こ、今度はどうしたのよ!？」

「……ため息」

「え?」

「ため息ついたから、嫌われたと思って……」

ヴァンは嗚咽混じりに拙い声でそう言うと、ちょっとだけ手の力を緩めた。レラのため息を、呆れられたのだと勘違いしたらしい。そうすると、いつもは悪態と冗談ばかり言っている小憎たらしい少年が可愛く見えてきた。

レラは、小さく苦笑いを溢すと空いている左手でミカン色の髪の毛を撫でてやった。ナタリーを撫でているときと似たような感じの、柔らかい猫っ毛が指に絡みつく。

「嫌ってないよ」

優しくそう呟いてやると、少年はパツと顔をあげてレラを凝視していた。十六歳の少年にしては愛らしい瞳だ。まるで今にも葉から落ちてきそうな水の粒のように、綺麗に澄んでいる。

「ほんと?」

そう訊ねてくる声は、幼子そのものだった。レラの口から、勝手

に言葉が紡がれる。

「うん。嫌ってない。むしろ大好き。でも、あんまり強く握ると痛いから、ちょっとだけ緩めてくれない？」

「うん！」

少年はその言葉に安心したのか、今度は優しくレラの手を両手に包み込んだ。それを額に当てられると、少年の温かな息がレラの右手に当たる。ちょっぴりくすぐったいが、でも悪くはなかった。穏やかな時間が流れ込んでくる。

しばらくそうしていると、少年が視線だけを上にあげてレラを見つめてきた。

「……もう少し眠ってもいい？」

「うん」

「手、握ってていい？」

「うん。いいよ。起きるまで握っててあげる」

「約束だよ？ 僕が起きるまで、離れたらやだからね？」

「うん。約束」

「……へへ。お母さんと約束しちゃった。あとで自慢しよ」

少年は満足そうに笑ってそう呟くと、再びゆっくりと目を閉じた。数秒ほどして、少年の口から小さく寝息が漏れてくる。それを聞いた瞬間、レラはこれまでの出来事を一気に思い出して顔を真っ赤にした。

（わ、私、さっきむちゃくちゃ恥ずかしいこと言ってなかった！？）

言った。覚え違いでなければ、自分は目の前の少年にこう言っていた。

『うん。嫌ってない。むしろ大好き』

(……いやいやいや！ あれは口から出まかせ！ そんなこと微塵にも思っていない！ っていうか、きつとあれは私じゃなくてヴァンのお母さんの言葉なんだわ！)

そう思い立った瞬間、あれ？ とレラは首を傾げた。そういえば、ヴァンの母親とはどんな人なのだろう。人間ということだけは知っているが、それ以外は何も聞いたことがない。

(……そいえば、ヴァン、家族のこととか故郷のこと、ほとんど話さないなあ……)

自分だつてろくに話す方ではないが、それは父と兄があまりに有名すぎるからだ。自分が説明する前に、名乗ってしまったら家族の情報だつてすぐに明るみに出てしまう。母はずっと前に流行り病で亡くなっていたし、特に自分が離す必要などないのである。

でも、ヴァンはどうだろうか。彼の高祖父が著名な武器職人であることは知っている。しかし、それは職人と一部のハンターだけが知っていることだ。一般人に高祖父が『神の手』だと説明したところで、一発で理解する人間は少ない。父親の名前はそれほど広まっていけないらしいから尚更だ。

しかし、ヴァンは故郷の話をほとんどしない。する必要がないのかもしれないが、訓練所でも家族の話題が出たときには完全に聞き手にまわっていた。

(それにしても、僕って……)

レラは先ほどの拙い声で話すヴァンを思い出して、小さく吹き出してしまった。あのヴァンが、自分のことを『僕』というだなんて。

ちょっと可愛すぎる。ヒューゴのように礼儀正しい印象の『僕』ではない。あれは完全に幼子が発音する『僕』だ。

(昔の夢でも見てたのかしら……)

でも、だとしたらどうして過呼吸など起こしたのだろうか。先ほどの寝ぼけていたヴァンの声からして、穏やかな夢だったとしか思えない。穏やかな夢で過呼吸を起こすなんて、いったいどういう状況だ。

(それとも……)

とても恐ろしい夢だったのだろうか。だから、あんなに苦しそうだったのか。でも、じゃあ一体何を思い出していたのだろうか。それとも、なにがそんなに怖かったのだろうか。

レラが思索していると、不意にヴァンの方から鼻を嚼る音が聞こえてきた。見ると、レラの手を両手で握ったまま、ヴァンが涙を流している。また寝ぼけているのか、と思ったレラは、左手で涙を拭いてやった。

「……ごめんなさい」

「え？」

ヴァンが、小さな声で謝っていた。寝言なのか、レラの声には一切答えない。

再び、ヴァンの口から小さな声が漏れた。

「ごめんなさい……僕が……僕が……」

次に、ヴァンの口から紡がれた言葉。

それを聞いた瞬間、レラは言葉を失った。

第三十話 帰郷（後書き）

こんなところですが、注意点を一つ。

現在、作中でヴァンがたまになっている『過呼吸』は、実際には『過換気症候群』もしくは『呼吸性アルカローシス』というものになります。あまり聞き慣れない言葉のため、話中では総じて『過呼吸』と書いてありますが、実際には違わらしいのです。

とまあ、堅苦しい話は以上で。

久しぶりの主人公&ヒロインメインのつもりが、若干ヒューゴいじめも入っていた第三十話でした。
だってあのこいじめると楽しいから（笑）

以前、からすはモンハンの楽しさを教えてくださいました先輩から、
『からすはヒューゴに似ている』
と言われて軽く憤慨。からすは断じてあんなになよつちくねえ！
チキンだけど（オイ）

そして、せっかく久々にアレンたちが登場したのに、獵団の名前が決まらず軽く流した程度に。次回から彼らにも頑張ってもらいませう。

時に、ヴァンたちの獵団の名前を読者の皆様から募集をしたいのですが如何でしょう。ぶつちやけ、からすはネーミングセンスが欠片もないんです（ええ）
感想やメッセで受け付けます。何か響きのいい言葉あったら教えて

ください（<人>）

漢字で書いて英語で読むとか大歓迎です！
外伝募集もまだまだ受け付けしてますので。

それではまた次回！

第三十一話 村はずれの工房（前書き）

ども。何気に十日ぶりな旅がらすです。

いや、実は卒業式やら引越しの準備やらで忙しくて……。

実は旅がらす、明日から神奈川県民になるのですよ。

ええ、就職の関係で。工場に勤めるのです。こんな人間が社会人になっちゃいますw

なので、これが静岡から投稿する最後の『たまじゆけ』になります

……とちよつぴり感慨深くなつてみたり。

電車で二時間程度の距離なんで、ぶつちやけそんなに離れた場所に行くわけでもないんですけどね。

そんなノリで、第三十一話スタートです。

第三十一話 村はずれの工房

火山島 ドーラ

北エルデ海に浮かぶ、火山によって形成された島。

かつて、ン・ガンガに住んでいた鍛冶職人の一派が目をつけ、移り住んだ場所。火山は現在でも活動しており、一年を通して暑い。火山は開拓から五百年以上経った今でも鉱石の採掘が盛んに行われている。

武器以外にこれといった産業はないが、職人たちは皆手先が器用なため、装飾品なども手掛けている工房も少なくない。これらの装飾品は貴族の一種のステータスともなるほどに高価なものから、庶民が嗜める程度に安価なものまで様々である。ハンターも庶民も一度は訪れてみたい島だと言われている。

「へええ〜。ドーラって結構良いところじゃん！ ちょっとあちいけどな」

レクサーラで手に入れたガイドブックを片手に、白い防具を身に纏った緑髪の青年、アレンがドーラ火山を見上げている。その隣で、ヴァンが面倒臭そうに欠伸をしながら肩を竦めた。

「そおか？ オレは別にそうは思わないけど」

「ああ。でもこの装飾品はぜひ見てみたいわあ」

「ワタクシもですわ！ もし本当に良い品でしたら、我が『ユニフローラ商会』で取引をさせていただきたいですもの！」

アレン同様にガイドブックを見ながら笑顔でそう言うのはピリカ

とノンノだ。二人とも武具よりも装飾品の方に目が行っているらしい。女の子らしいと言えはらしいが。

一方、ヒューゴは心配そうな瞳でヴァンに小声で話しかけてきた。

「ねえ、レラさんから聞いたけど、もう大丈夫なの？」

おそらく、過呼吸のことだろう。眠っている間になったことなので、当の本人であるヴァンはよく覚えていないが、船室で昼寝中に起こしてしまったらしい。偶然部屋の前を通りかかったレラが応急処置を施してくれたため、大事には至らなかつたようだ。

ヴァンはぼんやりとしか覚えていないが、レラがああしてくれなかつたら多分今頃は大変なことになっていただろう。

ちなみにそのレラはというと、船を降りる前から、一人でずっと何かを考え込んでいるようだ。相棒のナタリーがたまに話しかけているが、それにもほとんど返事を返していない。様子がおかしいレラに首を傾げつつも、ヴァンはヒューゴに微笑みかけた。

「ん、たぶん平気だ。わりいな、心配かけさせて」

「別に気にしてないよ。ただ、これで二回目だし、三回目があるかもしれないって考えるとさ」

「ダイジョーブだって！ オレ、体が丈夫なのだけが取り柄だし！」

そう言っつてふざけて力こぶを作るが、ヒューゴはまだ心配そうな目でヴァンを見ていた。しかし、それ以上踏み込まうとはしてこない。

ヴァンは心の中で、距離の取り方がうまい親友にただただ感謝した。ヴァンにとって、これ以上は踏み込まれたくない領域だった。それを察してもらえたのは良かった。

ヴァンは一度だけ伸びをすると、ベンケイを見下ろす。

「ベンケイ。手紙に地図が入ってたよな」

「ウニヤ。入っていましたニヤ」

「じゃあ、その通りに進んで、みんなを工房に案内してくれよ」

ヴァンがそう言うと、隣にいたヒューゴが目を丸くした。

「え？ ヴァンくんは？」

「んあ？ …… あー、オレは野暮用。そんなに遅くならないうちに合流するから。先行っててくれ。オレの名前とその手紙渡せば多分分かると思うから。頼んだぞ、ベンケイ」

ヴァンはそれだけ言い残すと、荷物片手に村とは反対方向に走り出した。

ドラグニル工房は、村からおよそ一キロ離れた火山の麓に腰を据えていた。

二階建てでレンガ造りの可愛らしい建造物。近くには井戸と小さな畑がある。家から少し離れた場所に、まるで鳥の巣箱のようなポストと『ドラグニル』と書かれた看板が立っていた。

そんな景色に、ピリカがうっとりとして表情を緩める。

「まあ、とっても可愛らしいですねわ！」

「本当。おとぎ話に出てきそうだわあ」

ベンケイの地図に案内されてドラグニル工房にたどり着いた一行は、メルヘンチックな外観に思わず笑みを零していた。

レラもまた、ドラグニル工房を見上げてポツリと呟く。

「ここが、ヴァンの生まれた家……」

一体、どのような少年時代を過ごしていたのだろう。毎日元気に村中を駆けずり回っていたのか。それとも、日がな一日工房で父親たちの背中から何かを学んでいたのか。

「ごめんくださいニヤ」

ベンケイが、工房のドアを何度かノックした。しかし、誰も出てこない。ベンケイがもう一度呼びかけたが、うんともすんとも返ってこない。

「お留守………なんでしょうか？」

「げ、マジで！？ おれ疲れたのにー」

ヒューゴが首を傾げると、その隣でアレンが小さくため息をついた。別にアンタの都合なんかどうでも良いでしょうに。とレラが小さく肩をすくめようとしたそのとき、

「お嬢ちゃん。いくら何でもこの歳でアイルー柄のスパッツは無かるっ」

レラの足元で、老人の声が響いた。

正確には足元。真下………真下？

「いやあっ！ 痴漢！」

レラがそう叫ぶのとほぼ同時に、桜色のスカート状を模した防具

の下から、小柄な竜人族の老人が出てきた。白い顎鬚をたつぷりと蓄え、その眼には小さなサングラスをかけている。老人はほっほっほ。と上機嫌に笑っていた。一方、レラは顔を真つ赤にして防具を両手で押さえていた。

「お、おじいちゃん、いつから入っていたのよ!？」

「いやあ、久々の若い女子の太ももはやっぱり綺麗じゃったのお。

お尻の形も良いし、腰もキュツとくびれておって、お主、なかなかの『ないすばでい』じゃのお」

「ちよ、そんなとこまで見てたの!? っていうか言わないで!」

「……何か、ものすごくオープンな痴漢ですね」

「ってか、マジで気付けなかったんだけど」

レラが顔を真つ赤にして抗議をするのに対し、老人は相変わらず上機嫌だ。老人の態度にヒューゴとアレンが苦笑いを浮かべていると、レラの叫び声を聞きつけたのか、今度は若い竜人の男が工房の裏手から飛び出してきた。

「何事ですか!? って、工房長! アンタそこで何してるっす!」

工房長と呼ばれた老人は、青年を見てまた笑いだした。

「おおおお、レオンジか。いやのお、ここにピチピチの女子が三人も居るから、こりゃ身体検査をしに行かにかい! と思つてのお」

「アンタのそれは痴漢行為と同義っすよ! また年甲斐もなく女の子の胸とか触ったりしたんじゃないでしょうねえ!」

レオンジと呼ばれた青年が耳まで真つ赤にして怒っているが、老人には馬耳東風のような。呑気に口笛なんか吹いている。レオンジ

はダツシユでレラのもとにたどり着くと、老人を担ぎあげて腰を直角に折った。

「もーしわけないっす！ この人、若い女の子が大好きで……ごめんなさいっす！」

「え、あ、いえ。そんな別に大丈夫ですので」

レオンジの気迫に押され、レラは少しだけ後退りながら両手をブンブンと左右に振った。すると、老人がパツと顔をあげる。

「お、じゃあ今度はその胸を」

「黙ってくださいエロ爺さん」

今度は、全部言い終える前にピシヤリとレオンジに怒られていた。残念そうに項垂れる老人に、思わず笑みが零れる。

「あ、あの、ちょっとよろしいでしょうか？」

そこへ、それまで蚊帳の外にいたピリカがおずおずとレオンジに話しかけてきた。レオンジは、ピリカに向き直るとニコリと笑いかける。

「はい。何っすか？」

「えと、ワタクシたち、ヴァン・ドラグニル氏の付き添いでこちらにお邪魔いたしましたの。ドラグニル氏からはお手紙をお預かりしています。名前と手紙を示せば分かると言われたのですが……」

ピリカが紡いだ名前を聞いて、レオンジと老人が目を見ん丸にして驚いた。

「ヴァンくん、帰ってきてくれたんすか！」

「え、ええ。そうですわ。今は別行動をとっているのですが……」

ピリカがそう言うと、レオンジは首を何度も縦に振った。

「分かりましたっす！ 皆さん、どうぞお入りください！ 自分はレオンジ・ヴェリスと言います。すぐにエドガーさんも呼び出すっす！」

レオンジはそう言うと、急いで工房の裏手へと駆け出して行った。

エドガー・ドラグニルは、屈強な顔つきだがどこか優しい雰囲気気を纏った男だった。歳は七十九になると言っていたが、はつきり言って三十代半ば程度にしか見えない。それでも竜人としては老けて見える方らしく、レラたちと同じ年にしか見えないレオンジが既に六十を過ぎていると言っていたので、確かに彼は老けているのだろう。やはりそれでも若いのだが。

「ほお。君がレラちゃんか。ゴードンは元気か？」

エドガーは、銀髪のレラを見てすぐにゴードンの娘であることに気づいたらしい。にこやかにそう笑うと、ゴードンが十年以上前にここを訪れたとき、美人の娘がいると自慢していたことを教えてくれた。

「え、ええ。ピンピンしています」

まったく、余計な事を言ってくれる。とレラは恥ずかしくなってしまうた。その答えに満足したのか、エドガーはヒューゴたちに視

線を移す。

「……で、君らがヴァンの友達なのかね？」

エドガーの質問に最初に頷いたのはヒューゴだった。

「はい。僕はヒューゴ・レペンスと言います。ヴァンくんとは兄弟弟子なんです」

「では、君がロビンちゃんの弟子ということか。彼女は元気かね？」
「教授を知ってらっしゃるんですか？」

ヒューゴが目を真ん丸にすると、エドガーはレオンジと顔を見合せて楽しそうに微笑んだ。

「知ってるも何も、彼女の武器と防具を作ったのは、ここにいるレオンジと私だ」

「ええ！？ そうなんですか！？」

「そうっすよ。キリンの最上素材を使えるなんて、夢のようでした」

レオンジは当時のことを思い出しているのか、うっとりとした表情でくるくると踊っている。

つむ。どつやらヴァンはレオンジの影響をかなり受けているらしい。レラたちはそのことを思い出して、小さく吹き出した。

「でも、まさかそちらにいる御仁が、あのジン・ドラグニルとは思いいにもありませんでしたわ」

そう言って小さくため息をつくのはピリカだ。頭防具を外しているため、金色のウインドボブが絹のような煌めきを放っている。そ

れに對し、先ほどレラの腰鎧シオハートコイルの中に入っていた老人が楽しそうに笑った。

彼こそが、ヴァンの高祖父にしてこの工房の長、『神の手』ジン・ドラグニルその人であるのだ。

「どつじゃ？ お茶目で親しみの湧くじじいじやろ？」

「そうですねえ。とつても可愛らしいと思いますう」

ジンの悪ふざけに便乗するのはノンノだ。こちらもピリカと同じウインドボブが美しい輝きを放っている。金髪と同じ色の瞳も、にこやかに細められていた。ノンノの言葉にジンも気を良くしたのか、笑い声が少しだけ大きくなった。

「あ、ダメつすよノンノさん。工房長、すぐに調子に乗っちゃうんすから」

「レオンジはうるさいのお。ちょーっとくらい気を良くしたくらいでいちいち突っかかりすぎなんじゃー！」

「それでスカートめくらられる女も数知れず。つてか？ すっげえ精力漲った爺さんだなあ」

レオンジの言葉にプリプリと頬を膨らませるジンに、アレンが呆れたような声を出す。ヒューゴはそれを聞いて失笑を漏らした。レラは思わず無意識のうちに腰鎧に手を当てる。また捲られては堪らない。

するとそこで、ベンケイが棚の上に置いてある写真立てに目をやった。写真立てに飾られている写真を見て、ベンケイがエドガーに訊ねる。

「ウニヤ。もしかしてこれは幼き頃の若君ですかニヤ？」

「ん？ ああ、そうだよ。十三年ほど前の写真だ」

エドガーはベンケイの問いに優しく答えると、写真立てを取って皆に見えるようにテーブルの真ん中に置いてくれた。

そこには、今と全く変わらないジンとレオンジのほかに、まだ今より少し若いエドガーと長髪の中性的な容姿の女性が写っていた。エドガーと女性は、それぞれ一人ずつ男の子を抱き上げている。女性は、ヴァンと顔立ちがよく似ていた。

「この女性、もしかしてお母様ですか？」

レラが写真を覗き込んだまま訊ねると、エドガーは小さく頷いた。

「ああ。私の妻、レビイだ。私が抱えているのがヴァン。レビイが抱えているのはティーダだ」

「ティーダ？」

エドガーが言った名前に、レラは首を傾げた。はじめて聞く名だ。すると、それにはレオンジが答えた。

「ヴァンくんの双子の弟っすよ。ティーダっていうのは、はるか昔にいた極東の島国の一部族に伝わる言葉で『太陽』って意味っす。ヴァンくんは火の神『ヴァルカン』から文字を頂いたんすよ」

そう言ってレオンジが胸を張ると、ジンの杖がレオンジの頭を叩いた。

「いった！ 工房長、何するんすか！？」

「かーっ！ 名前を付けたのはワシとレビイじゃろっが！ 何でお前が胸張っとるんじゃバカもん！」

二人のショートコントを無視しつつ、レラはもう一度写真を見た。ミカン色の髪を美しく伸ばした活発的な印象の女性。これが、ヴァンの母親なのだ。

ヴァンの双子の弟だというティータは、自分を抱く母に一生懸命にしがみついている。甘えん坊だったのだろう。とても愛らしい姿だ。一方でエドガーに抱かれているヴァンは、今にも父の手から飛び出しそうなくらいに手足をいっぱい伸ばしている。きっとこのころから元気が有り余っていたのだろう。

だが、そこで妙な違和感を抱いた。母親とティータは、今どこにいるのだろう。

「あの、他のお二人は今どちらに？」

すると、レラと同じ疑問を抱いたのだろう。レラの隣でヒューゴがエドガーに訊ねていた。エドガーは、ゆっくりと目を瞑って俯く。急に部屋が静かになった。

「……今、ヴァンが会いに行っているのだろうよ」
「ウニヤ？ それってどういう意味？」

エドガーの言葉に首を傾げたナタリーだったが、全部言い終える前にその手をアレンに塞がれてしまった。ナタリーが抗議を訴えるような眼でアレンを睨みあげる。

「むぐぐがぼがぐにやぼがあ」

「んあ？ わりいおれ古代アイルー語なんて聞き取れねえよ。それよか、工房の中って見せてもらえるんすか？ おれ、前から聖地と呼ばれる場所の工房って見てみたかったんだ！」

ナタリーの抗議を完全に無視し、アレンはエドガーにそう懇願し

た。エドガーはアレンのマイペースぶりに軽く面喰いながらも、コクリと頷く。

「ん、あ、ああ。構わんよ。何なら、防具の調子も診ようか？」
「マジで!? エドガーのオヤジさんイイ人だな！」

アレンがキラキラとした眼でエドガーを見上げると、エドガーは突然納得がいったかのように笑い声をあげた。

「はっはっは。なるほど、思い出したぞ。君はトオイ・マクランサの弟だな」

「え!? エドガーのオヤジさん、兄ちゃんのことまで知ってんの!?」

「ああ。フラディオくんと一緒に何度か顔を合わせたことがある。

彼もかなりのマイペースぶりでフラディオくんを振り回していたよ。今の君そっくりだ」

「あら。本当にお兄様譲りでしたのね、その性格」

「困ったところだけ似るのもどうかと思うけどねえ」

「おいコラその双子! てめえら一言多いぞ！」

「……困った兄弟だね」

「うお、おいヒューゴ! てめえまで何言っつてやがる!」

アレンの突っ込みに場の空気がそれまでと一変し、和やかなものに変わった。レラも思わず失笑を溢す。しかし、頭は別のことを考えていた。

ヴァンのお母さんと弟のお墓、どこにあるのかしら。

皆が工房へと姿を消していく中、一人レラは窓から見えるドーラ火山を見上げていた。

一方、そのころヴァンはドーラ火山の山腹に足を踏み入れていた。切り立った崖のようになっていて地形。ここまで来るには、正規の道筋ルートではない危険な道を通らなければたどり着くことができない。来るのには相当の度胸と慣れが必要だったが、そのおかげかモンスターもほとんど近寄ることがない。

そこに、ヴァンの大切な人々は眠っている。

「……久しぶり」

崖に囲まれたその場所は、昔ヴァンが自分の片割れと秘密基地としてよく遊んでは父に怒られた場所だ。そこに、仲良く並ぶように二つの墓石が建てられている。

『レビイ・ドラグニル』

『ティード・ドラグニル』

十二年前、二人は亡くなった。自分の片割れは、たった四年しか生きることができなかった。母もまた、三十に入る前にその命を落としていた。

「なあ。オレ、Dクラスハンターになっただんだけ。親友もできた。無理矢理だけど、獵団にも加入したんだ」

それぞれの墓石に、持ってきたオレンジを一つずつ供えたヴァンは、自分の片割れが眠る隣に腰を下ろした。オレンジは二人の大好

物だった。花を供えてもすぐに風で吹かれてしまったため、ヴァンは大抵二人が共通して大好きだったオレンジを供えることにしているのだ。

ヴァンはそれから、今度は小さな箱とジッポライターを取り出した。煙草だ。

「……これ、どうやって点けんだ？」

はじめて使うジッポライターに四苦八苦しながら、ようやく煙草に火を点ける。実は、今回が煙草初体験のヴァンである。何を考えたのか一気に煙を吸い込み、案の定むせた。

「ゲーツ。まずっ！ 何でこんな的美味そくに吸う奴いんだろ」

まずいまずいと言いながらも、ヴァンはゆっくりと煙草を吸った。今度は少量で吸い込むのを止め、深呼吸の要領でゆっくりと息を吐く。紫煙が口から漏れ出た。

「……最近、昔の夢を見るんだ」

数回ほど煙草を味わった後、ヴァンは呟くように言った。

「なあ……何でオレを生かしたんだよ、お前」

あの時死ぬのは、自分のはずだったのに。自分は生き永らえ、片割れは命を落とした。母もまた、ヴァンを守るためにその命を散らせたのだ。

こんなに罪深い自分だけが、どうして生きているのだろう。彼らが生きていた方が、ずっと良いはずだろうに。

「……殺してくれ」

呻くように懇願するが、ここにいるのはヴァン一人だ。誰も答えることなどない。ヴァンはもう一度低く呻いた。

「誰でもいいから……オレを罰してくれ……」

誰でもいい。自分を罰してくれるのなら、たとえ見知らぬ相手でも良かった。

本来ならば生きていないはずだったのだ。他人の人生を終わらせた自分に、罰を恐れる権利などない。

「なあ、聞こえてんだろ？ 頼むよ……」

しかし、墓からは返事などない。当たり前だ。ヴァンは自身を嘲笑しながら、ほとんど残っていない煙草に口をつけた。

「うううまいっすううう！」

その夜、ドラグニル家の食卓は久しぶりに賑やかであった。大盛りに盛られたカレーに感激しているのはレオンジだ。

「やっぱりヴァンくんがいないと食事が儘ならないっす。自分たちの作る飯はどうも不味くて……」

「それは単にためえらが料理覚えねえだけだろが」

レオンジの言葉に悪態をつくのはヴァンだ。帰ってきて早々、高祖父に開口一番で「飯を作ってくれ！」と言われたヴァンは、現在最高潮に不機嫌である。それでも、三角巾とイヤンクックのプリント入りエプロンを荷物から取り出したので、おおよその予想をしていたということなのだろう。

最初はレラたち女性陣も調理を手伝っていたが、途中からヴァンの包丁さばきや手慣れた様子にシヨックを受けて手伝えなくなってしまう。彼のアイルー顔負けの料理の巧さにシヨックを受けなかったのは、同居人のベンケイとのんびり屋のノンノだけである。

「……なんかワタクシ、とーっても悔しくてなりませんわ……」

「私も……。男の子に料理で負けるなんて……」

「ウチ、オトモだからぜーんぜん気にしないニヤ」

「そうよお。美味しいものが食べられるならそれでオールオッケーだわあ」

がつくりと頂垂れるレラとピリカの隣で、ナタリーとノンノがのんびりとカレーに舌鼓を打っている。その横では、エドガーが無言で、しかし美味しそうにカレーを味わっていた。

「ってかオヤジ。おめえまさか飯作るために息子呼んだんじゃねえだろうなオイ」

「ヴァンくん、口の利き方モロに不良なんだけど……」

スプーンで自分の父親を指すヴァンに、ヒューゴが小さく突っ込みを入れる。アレンはというと、いつの間にかレオンジと意気投合しており、先ほどまで見学していた工房の感想を言い合っていた。

すると、ヴァンの側頭部に向かってスプーンが飛来してきた。ジンは、ジンを投擲したスプーンは、見事にヴァンの右こめかみにヒットする。

「あでっ！」

「かーっ！ 貴様それが父親に対する口の利き方か！ ワシやあ、こんな玄孫を育てた覚えなんぞないわ！」

「オレだって、あんたみたいに口うるさいクソ爺に育てられた覚えなんかねえっの！」

ヴァンが口答えをすると、ジンはバァンツ、と盛大な音を立てながらテーブルを叩いた。

「なんじゃやるのかガキンちよが！」

「やってやるうじゃねえかクソ爺！」

「表へ出んかい！」

「応！」

二人はそう言って立ち上がると、軽い取っ組み合いを繰り広げながら表へと出て行った。

数秒後、

「デュイアアアア！」

「ふんぬらばああああ！」

という掛け声とともに、何かと何かがぶつかり合う音が連続的に響き渡る。その一部始終を聞いていたレラは、恐る恐るといった表情でエドガーに訊ねた。

「……いつもあんな調子なんですか？」

「そうだな。毎日あんな感じだった」

信じられないという表情で外を見やるレラたちを余所に、エドガ

「は体を震わせて笑いを堪えている。ベンケイに至っては、どうすればよいか分からず自分の席と玄関とをウロウロと往復し続けた。」

「あ、あの、お父上殿。爺様は高齢では？ 若君は本当に力が強いのですニヤ！ もし爺様に何かあったりしたら……」

「ベンケイくん。その心配はないよ」

「ウニヤ？」

エドガーの言葉にベンケイが首を傾げるとほぼ同時に、外の音が止んだ。数秒程して、ドアを開けてきた人物に、その場にいた工房の人間以外の全員が目を剥いた。

「ん？ みんな一体どうしたのじゃ？」

ドアを開けたのは、ジン・ドラグニルだったのだ。その体には砂一粒すら付いていない。というか、暴れていた割にはめちゃくちやに元気だった。

その一方で、ヴァンはというと……。

ジンに首根っこを掴まれて、ボコボコのグロッキー状態になっていた。心なしか、全身が真っ白に見える。

燃え尽きているようだ。

「わ、若君いいいー！」

ベンケイの悲痛な叫び声が、食卓中に響き渡った。

第三十一話 村はずれの工房（後書き）

工房の皆さんが出てきました。ヴァンが工房の人間たちからちよいちよい影響を受けている描写を書きたくて、レオンジをあんなキャラにしました。

ヴァンが不良になりました。タバコは苦手な旅がらすですが、タバコ吸ってるのがカッコいい人ってすげえと思っっています。渡さんとか館さんとか。それに比べたらヴァンはまだまだダンディズムが足りてねえ！

特に意味もなく書いた描写であります。単にタバコ吸わせてみたかった。だからって、未成年がタバコ吸って良いってわけではないですが（苦笑）

そして、最強のジジイが登場。ジンじいちゃんは、平成狸合戦ぽんぽこの長老狸（御年999歳）の人間ヴァージョンをイメージしています。ジブリは偉大。

今回は、先日ちよろつと紹介した小説の細かな紹介をしようと思っ
ています。

実は作者の方々の了承は取っていませんが、多分問題なし（え）
こついうのもちよつと楽しかったりw w

記念すべき一作目は、旅がらすが大好きなバナナ&ポニーちゃん
の生みの親、一休先生の作品です！

『Dolphinのとある狩猟レポート2 〱おサルさんを追え』

モンスターハンターのモンスターハンターによるモンスターハンター
のための小説……？

モンハンの真骨頂である『狩り』を思いっきり楽しく書いている小説です。

主人公の住む町では、ハンターのために定期的に催されるイベントの真っ最中。

何か手ごろなクエストはないものかと依頼掲示板とにらめっこをしていた彼が見つけたのは、とんでもないクエストだった。

イベントの対象とされているそのクエストに、彼は猟団の新入りである少女と自身の師匠を連れて挑むが、果たしてその結果は……？

つてのが、大体のあらすじです。Dolphinが仲間とともに挑むモンスターは見てのお楽しみということw

教えたらずまらないですしね。

ちよっぴりゲームらしくない、でも現実にこんな風に狩りができたらさぞかし楽しいだろうな〜見てる方は(鬼)という戦闘シーン。もともとかなりアクションの描写が分かりやすく書かれているため、臨場感は抜群です。布団かぶって読んだとき、たまに枕に突っ伏して笑いを堪えている自分がいます。

個人的にDolphinのお師匠様が大好きです。仲良くなれるかどうかは別問題として、一度うちのキャラの誰かと話をさせてみたい。ロビン姉さん辺りだとお互いに引かない争いが始まりそう……。

そのほかにも、涙あり、ドキドキあり、そして笑いが盛りだくさん！主人公が読者に報告するように展開される物語の進行は、あまり見られない斬新なもので、かなりすんなり物語の世界に入り込むことができます。

モンハンの小説を見て笑いたい！という方、オススメですよ！

ちなみに、愛しのボニーちゃんが出ているのは『虹髪の英雄』。思いっきりキーワードにBAD ENDって書いてありますけど、

でも、完全にBADなENDじゃないと旅がらすは思っています。
BAD嫌いとかいうそのアナタ。一度読んで、泣いてきてください。
マジで感動します。ケータイで読むお話でここまで泣いちゃう
かってくらいに感動しますから。読んでみてくださいくださいな。

では、今回はこの辺で。

また次回！

第三十二話 夜の工房（前書き）

やっと書けたあ！

ども、もうすぐ新入社員研修のため、しばらく更新ができないとこ
こで報告させていただきます。

もしかしたら、研修中の合間を縫って更新するかもですが、ちょっ
と難しいかも……です。

今回も狩りには行きません。工房での夜の出来事です。

では、第三十二話、スタートです。

第三十二話 夜の工房

翌日の朝、レラは規則的に鳴り続ける何かを叩いているような音で、目を覚ました。

「ん……」

寝ぼけた眼を軽く擦りながら辺りを見回す。パンの焼ける匂いが、鼻孔をくすぐった。

「あれ？ ここ……」

「レラ殿。おはようございますニヤ」

状況を把握できていないレラに、小柄な赤虎のアイルー、ベンケイが声をかけてきた。青の板前スーツをきたベンケイは、オーブンから焼きたてのパンを取り出しているところだ。そこでようやく、レラは自分が食卓に突っ伏しながら眠っていたことに気づいた。

「ベンケイちゃん？ 何で、私確か」

「レラ殿。お静かに。若君が目覚めてしまいますニヤ」

レラが声を出したところで、ベンケイがこちらを振り向きながら口元に手を当ててレラを止める。レラが首を傾げた瞬間、その肩から何かが床に落ちた。作業着の上着だ。

「あ……」

レラは落ちたそれと自分の横で眠る少年に気づき、ようやく昨夜のことを思い出した。

昨夜、床に就いていたレラは不意に目を覚ました。理由は特にない。しかし、もう一度眠ろうとしてもなかなか寝付けなかった。試しに柵を飛び越えるケルビの数を数えてみたが、三百近く数えても

眠れなかったので止めた。

あれから、レラたちはエドガーの計らいで工房の空き部屋に泊まれることになった。意外とかかった旅費のせいで懐が寂しくなりかけていたので、レラたちにとっては渡りに船であった。

が、しかし、一つ問題が生じた。部屋割りだ。基本的に一部屋につき二人分の寝具しか用意されていないらしく、どうしても男女ともに一人ずつ余ってしまうのである。ちなみに、ベンケイとナタリ―はさっさとキッチン脇の小部屋を借りて夢の中に旅立ってしまった。

「こういうときはジャンケンでしょ！」

最初、レラはそう主張したのだが、

「んじゃあ、ピリカとノンノは二階。おれとヒューゴが一階で、レラはヴァンの部屋だな」

ミスター独断が無茶苦茶な部屋割りを提案してきた。もちろん、異性との組み合わせになった二人はというと、

「ざけんじゃねえぞ！　なんでこんなガサツ女と！」

「それはこっちのセリフ！　どーしてこんなスケベと一緒なの！？」
当たり前のように抗議をした。しかし、そんな程度の抗議で怯むミスター独断ではない。

「じゃんけんとかめんどくせえじゃん。それに、お前らそんなに嫌い合ってたらこれから獵団をやっつけていく上で必ずネックになっちまうだろ？　親交深めとけってことだよ」

案外正論だった。最初は「その組み合わせはどうか？」と首を傾げかけていた一同も、納得するように頷くと異論はないと告げたのである。

あまりに不利な展開に、ヴァンはヒューゴの胸倉を掴んで揺らした。

「ちよ、ヒューゴ！　てめえ裏切る気か！？」

「裏切るって……アレくんは正論しか述べてないしさあ」

微笑を浮かべるヒューゴの横で、レラがピリカとノンノに泣きつ

いている。

「ピリカ、ノンノ！ 私床でも良いから二人と寝るう！」

「あら。殿方よりも同性を選ぶなんて、貴方女性として失格ですわ！」

「そうよお。ふふふ。素敵な一夜になりそうだわあ」

だが、あっさりとは断られた。というより、ピリカは今まで苛められていた分を返すかの如く楽しそうな笑みまで浮かべている。

ノンノの言葉に、レラの顔が一気に真っ赤になった。

「ちょ、ちよつと待って！ それってどういう意味！？」

「あらあ。年頃の男女が同じ部屋で寝るのよお？ 何も無い方がおかしいわあ」

「ないに決まってるじゃない！」

間髪入れずに否定をするが、ノンノの笑みは消えなかった。ノンノが、レラの耳元で小さく呟く。

「今日の船で、何かあったんでしょお？ 頑張ってたねえ」

「んなつ！？」

次の瞬間、船での一件を思い出したレラは、顔をドドブラリングの如く真っ赤に染めた。一方、そんなことなど露とも覚えていないヴァンは、びーびーとヒューゴに泣きついている。

「ヒューゴ頼む！ 部屋割り変わってくれよ！」

「いやあ。教授って結構嫉妬深い性格でさあ。自分以外の女の子と同じ部屋で一夜を過ごしたなんて知れたら、何されるか分からないし。ってワケで却下」

「裏切り者おお！ そこで都合よく姉さん楯にしてんじゃねえよ！」
軽く惚げるヒューゴの首を絞めようとするヴァンの首根っこを、隣にいたアレンが掴んだ。

「ほらほら。もうおれ眠てえんだから、サッサと部屋に案内しろよ」
「うぐうぐ……レオンジい、助けてくれよ……」

ヴァンは涙目で事の一部始終を見ていたレオンジに訴えた。しかし、

「ヴァンくん……ファイトっす！」

親指を上にもグッと立てられただけだった。

「オヤジ……」

「ヴァン、何事も経験だ」

ただ一度だけ頷かれた。

「かーっ！ ずるいぞずるいぞ！ 何でお主だけ美味しい思いをするんじゃない！ 死ねい！」

高祖父に至っては、親指を下に向けてビシッと指してきた。

味方の人数、皆無。

「……お前ら全員嫌いだああああ！」

ヴァンの悲痛な叫び声が、夜の闇に溶けて消えた。

結局、あのまま部屋割りが変わることなどなく、レラはヴァンと同じ部屋で眠ることになったのだった。

「……このベッドが、ティードのベッド……」

レラが通されたのは、ヴァンがドローを出る前まで使っていた部屋だ。ティードと二人で使っていたらしい部屋は、レオンジかエドガーが定期的に掃除をしていたのか、埃一つなく、布団もシーツもパリッとしていて寝心地は最高だった。

レラが横になっているのは、二段ベッドの上、かつてティードが眠っていた場所だそうだ。下から、ヴァンの寝息が聞こえてくる。過呼吸は起こしていないようだ。今は穏やかな夢を見ているのだろう。ベッドから身を乗り出して下のベッドを覗くと、中性的で童顔な少年の可愛らしい寝顔が視界に飛び込んできた。

(……………)

起きている間は小憎たらしい口ばかり叩くくせに、寝顔が可愛いなんて意外だなあ。とレラは思った。なんとなく、ベッドから降りてヴァンの目の前まで行き、腰を下ろす。ミカン色の髪に触れてみると、船で触ったままの猫っ毛が指に絡みついた。

「……………」

この人のことを、知りたい。

不意に、そう思った。何故だか理由なんて分からない。ただ、レラは目の前で眠る少年のことを知りたいと思った。

ヴァンとは出会って半年が経過しようとしている。最初の頃よりは彼のことを知っているつもりだったが、それでもまだ知らない部分のことが多かった。

好きな色は？ 食べ物、景色、感情、音楽、本、他にも色々。どうして家に帰りがらないのか。どうして、今までティードのことを黙っていたのか。

彼に対する様々な疑問が頭に浮かんでは霧散していく。何でこんなに知りたいと思うのか、自分でもうまく見当がつかない。

しかし、何もここに来てからそう思うようになったわけでもない。前からずっと知りたかったのだ。そう、彼がハンターとなったときから、ずっと。

『オレはなんか、『取り残されてる』って感じがするんだよね』

『取り残されてる？』

『うん。なんつーか、オレはその内側に入れなくて、いつも外側からそれを覗き見てる感じ』

酒場で交わした会話。それを聞いたときから、レラの中にある思いが生まれていた。

この人は、どこか私に似ている

レラもまた、ヴァンと同じ気持ちを抱いていたのだ。レラは、お祭りや祝い事が嫌いではない。むしろ好きな方だ。町はいつも以上に賑やかになるし、人々の顔もまた明るい。誰かの笑顔が増えるだけで、レラの心は穏やかになるのだ。

だが、レラはどこかで自分と彼らの間に一本の線を引いていた。自分には決して入れない領域に彼らがいた。否、自分が『入ってはいけない領域』なのだ。

レラの脳裏に、幼いころの記憶が蘇る。

外を歩けば、石を投げられた。

仕返しに殴り返したら、周りの大人たちから非難を受けた。時には、両親や兄まで罵る人間がいた。

守ってくれる人もいた。それでも、少しずつ他人を信じるのが怖くなっていく自分を自覚していた。

死神！ お前のせいで、みんな死んだんだ！

知らない。そんなこと知らない！ うるさいうるさいうるさいうるさい！

「私は、死神なんかじゃない……」

無意識のうちに、そう呟いていた。そう言っただけでも、言われ続けた罵倒は、彼女の中に確かに浸透してしまっていた。

私は、死神……

違うと否定しても、その考えが完全に消えることはなかった。そして、その思いが彼女を人々から遠ざけた。

ドンドルマで修業をしている間、ある一人のハンターとレラは共に行動をしていた時期があった。ガンランス使用で、貴族の生まれなのかとても紳士的でレラの事をとて大事に扱ってくれた。

やがて、彼に思いの丈を告白され、周りから恋仲と認識される付き合いが三か月ほど続いた。紳士な彼は、狩り場では一人のハンターとしてレラを扱ってくれたが、プライベートでは淑女としての扱いをしてくれた。花を愛でるように、優しくしてくれた。

しかし、そんな風に彼が自分のことを扱ってくれている間ですら、レラは彼のことを信じることができなかった。

私のことを全部知ったら、この人だって私を嫌いになるに違いない。

そうとしか思えなかった。彼女の中にある『闇』を知れば、いくら紳士的な彼だって、自分を嫌いになるだろう。根拠のない自信がそこにあった。結局、このままでは優しくしてくれる彼を傷つけると感じたレラから、別れを告げた。

今まで、人を心から信じることができなかつた。信じたいけれども、いつも必ず頭に引つ掛かつて消えてくれない言葉が、レラの体を縛り続けた。

アレンが自分を猟団に誘ったのは、何も自分の能力を買っているからというだけではない。レラが一人になっていることに気づいていたからだ。

あれから十七年は経っているが、人々の中から完全に記憶が消えているわけではない。今ミミルの町で働いているハンターの九割があの『惨状』を目の当たりにした人間たちだ。それを知っていて尚、レラを誘おうとする輩などいない。アレンはそれに気づいていたのだらう。兄 トオイの親友、フラディオの妹であるレラを任せられている彼は、自分が一人にならないようにと、事情を知らないピリカとノンノを誘って猟団を作ってくれたのだ。

アレンのことは信頼している。あのトオイの弟だ。事情だつて誰よりもよく知っているし、それを知った上でレラに普通に接してきてくれる。でも、それでもレラは彼との間にすら線を引いてしまっていた。

もしかしたら、アレンは何かを感じているのかもしれない。野生の勘というか、そういう本能的なものにやたらと強く反応しやすいあの少年は、レラとヴァンの共通点を見抜いていたのかもしれない。だから、こんな部屋割りを思いついたのだらう。まあ、言っていたあの建前の理由も、あながち本音なのかもしれないが。

「……何触つてんの？」

不意に、不機嫌そうな少年の声がレラの耳を叩いた。我に返ってみると、目の前で眠っていたはずのヴァンが、薄く眼を開いてこちらを睨んでいる。

「や、やだ！ 起きてたの！？」

レラが驚いて手を離すと、ヴァンはブスツとした表情のまま、ゆっくりと起き上った。

「ついさっきだよ。起きたらお前が人の髪触ってるから、ちょっと

「ビビった」

「あ、ご、ごめん……」

慌てて謝ると、ヴァンは驚いたような表情でしばらくレラを見つめた後、小さく吹き出した。

「な、何！？ いきなり笑うなんて！」

「いや、いつものお前らしくないなって思ってたさ。すっげえ大人しく謝るから」

「わ、笑わなくなっただっていいじゃない！」

レラが顔を真っ赤にして怒ると、ヴァンは更に笑う。その顔には、先ほどまでのイラついた雰囲気は無くなっていた。

「ハハ。わりいわい。……で、何でお前、泣いてんの？」

「え？」

言われて、レラはようやく自分の頬に冷たいものが流れていたことに気づいた。

いつの間にか、泣いていたのだ。慌てて涙を拭う。

「べ、別に。アンタには関係ないでしょ」

レラがいつものようにプイツとそっぽを向いて答えると、ヴァンはつまらなそうに表情を崩した。

「……ふーん。ま、別に良いけど」

それから何を考えたのか、ヴァンはベッドから出て箆笥を開いた。
「……？」

ヴァンの行動にレラが首を傾げる間もなく、ヴァンは着ていた寝間着を何の前触れもなく脱ぎだした。

もちろん、突然目の前で男の子が服を脱ぎだしたことに、レラは瞬く間にパニックに陥った。

「ちょ、ちょちょちょ、アンタ！ 何してんのよー！」

「……着替え」

「いや、分かるけど！ 分かるけどちょっと！」

線の細い外見からは想像できなかった、意外にも逞しい体つきに、レラの心臓は一気に高鳴った。硬く引き締まった胸板と腕。服を着

た状態での体型はレラとほとんど変わらないくせに、一枚服を脱ぐだけでこんなに違うものなのか。改めて、彼が男性なのだと認識させられた。

「……パニくるなら何でまだ見てんだよ」

いつの間にか、凝視してしまっていたらしい。ヴァンが半ば呆れた顔つきでレラを振り向いていた。着替えも既に終わっており、ヴァンは普段着にも使っているツナギ姿になっている。

「あ、ご、ごめん！……って、どこか行くの？」

慌てて謝りながらも、レラはヴァンの格好に首を傾げた。まだ日が変わったばかりだ。いくら工房の朝が早いとは言え、ちよつと早すぎやしないだろうか。

すると、ヴァンはタオルを頭に巻いて小さく息をついた。

「何か眠れねえんだよ。ちよつと下で石の加工の練習でもしようと思つてさ」

ヴァンの言葉に、レラの心が動いた。そういえば、彼が職人としての仕事をするところをまだ見たことがない。

無意識のうちに、レラは言葉を紡いでいた。

「……一緒に行ってもいい？」

レラの言葉に、ヴァンが目を剥いてこちらを見つめてきた。

「……何で？」

「あ、えつと……」

理由を聞かれ、レラは視線を宙に泳がせた。ヴァンのことを知りたいから。とはつきり言えはいいのだろうが、素直にそう言うのは少し気恥ずかしくてできなかった。

「あの、きよ、興味があるの」

ようやく絞り出た言い訳を口にする、ヴァンは適当に頷きながら、レラの服を一度だけ見やると、筆筒から一組の作業着を取り出してレラに投げた。受け取れなかったレラは、それを顔で受ける。

「ひゃつ……ふえ？」

「奇声発してんなよ。……先行つてる。それ着て降りてきて」

作業着を持ったままポカンと口を開けているレラにそう告げると、ヴァンは部屋を出て行った。

レラが作業着を着て下に降りると、工房の方から微かに金属同士を打ち合わせる音が聞こえてきた。工房を覗くと、隅の方でハンマーを振り上げているミカン色の髪の少年の姿が見えた。

最初、レラはそのまま近づこうかと思ったが、ヴァンの表情を見た瞬間、その歩みを止めた。

目の前にいる少年が、あまりにも綺麗に映っていたのだ。

保護メガネなのか、ゴーグルのようにしっかりと目の周りを覆った少年の顔は見えなかったが、しかし、体中から真剣な表情を感じた。今、少年の世界はあの中だけなのだ、そう感じた。

夜の闇の中でも手元がよく見えるようにしてあるのか、ランタンを顔のすぐ近くにまで寄せている。そのせいで、ここに来て十分も経っていないはずなのに、少年の額からは大粒の汗が滲み出ている。ハンマーやノミを振るう度に、額の汗が空気中に飛び散った。

綺麗……。

触れてみたい。飛び散った汗が、少年のあどけない表情を職人のものへと変えていくのが分かる。その一瞬一瞬に触れてみたい。レラはそう思った。

無意識のうちに、足が進んでいた。裸足のまま、工房に降りる。

そこで、レラの足が転がっていた石を踏んでしまった。すぐさま足をどけたが、痛みはきちんと脳まで届く。

「いつっ」

「っ！？」

レラの声に、ヴァンが跳ねるようにこちらをバツと振り向いた。続けて、裸足のまま工房に降りてきたレラに目を剥く。

「ばっ……かやろう！ 工房に裸足で降りてくる奴、はじめて見たぞ！」

「っ、ごめんなさい」

今夜は謝ってばかりだ。レラが身を竦ませていると、ヴァンはレラに椅子を差し出した。

「謝んなくていい。座れ。足、切ってないか？」

「あ、えと、たぶん大丈夫……」

椅子に座ると、ヴァンは石を踏んだ方の足をひょいっと上げて足の裏を覗きこんできた。傷がないのを確認すると、レラの足元に黒い靴を置いた。

「それ履け。竜人ならまだしも、皮膚の軟い人間は履いてなきゃ駄目だ」

「う、うん……」

ヴァンの言うとおり、レラは差し出された靴を履いた。かなり頑丈な造りをしている。つま先が少し重い。何か金属を仕込んであるようだ。

ヴァンはというと、既に元の場所に戻って石の細工を続けていた。靴を履き終えたレラが近付くと、無言で自分が付けているのと同じ眼鏡を差し出してくる。

「……？」

「石の破片が飛んできて大丈夫なように。つけなきゃ見せねえからな」

レラを見ずに答えるヴァン。意識はほとんど石に向かっていようだ。随分と無機質で素っ気ない言い方だったが、不思議と苛立ちを覚えることはなかった。今の彼は、武器職人としてのヴァン・ドラグニルなのだ。いつもレラと喧嘩してばかりの彼ではないのだと自然と理解できていた。

レラが眼鏡を受け取ると、今度はポケットを漁ってゴムを差し出してくる。髪を纏めるということなのだろう。そこで、どうして彼がいつも頭にタオルを巻いているのかがようやく分かった。縛るには短い、武器を造る際には邪魔な程度には長いミカン色の髪。それを纏めているのだ。今度はすぐにそれを受け取ると、うなじの辺りで銀髪を結ってからヴァンの隣に腰かけた。

ヴァンが細工をしているのは、虹色に光る鉱石だった。名前も見
たまんまの『虹色鉱石』という、素材としてもかなり上質な素材だ。
ヴァンは、それを小型の細工用の刀で丁寧に削っていた。

何を造っているのだろう。削られている鉱石は、手のひらに乗る
程度の大きさだ。武器を造っているにしては、小さすぎる。まるで
見当がつかない。

レラが思案顔で作業を見つめていると、ヴァンが持っていたもの
をすべて机に置いて両手を握ったり開いたりした。手を解している
のだろうか。首を傾げながらそれを見ていると、ヴァンがレラの方
を向いた。

「何造つてほしい？」

「ふえ？」

突然の言葉に、レラはそれを理解するのに数秒を要する破目にな
った。ヴァンは小さくため息を一つついている。

「好きなもん、造つてやる。つっても、モンスターとかの場合はか
なりデフォルメされた奴になっちゃうけど」

何と、これまでの作業は下準備だったというのか。それ以前に、
あのヴァンが自分に何かを造ってくれるなんて、思いにも寄らな
かった。

「何で？」

希望を言う云々の前に、疑問が口を突いて出てきた。すると、ヴ
ァンは頬をほんのりと紅く染めながら、後頭部をバリバリと掻いた。
「……つてなかったから」

「え？」

よく聞き取れなかった。いつもとは打って変わってボソボソと咳
く少年の顔を見ようと、身を乗り出す。すぐに、ヴァンに顔を掴ま
れた。

「見んじゃねえ」

「減るもんじゃないでしょ？ ねえ、何て言ったの？」

ようやく、会話の主導権を握れた。手をどけてヴァンの顔を覗き

込むと、少年の顔は年相応の幼さとあどけなさを残しながら紅潮していた。そこに、それまでであった職人としての表情はない。

今度は、少し口調を強めに見てみることにした。

「言いなさいよ」

「……………」

しかし、ヴァンはまだ抵抗するようだ。顔に手を当ててきたりはしないが、プイツとそっぽを向かれた。右手を顎に添え、グイツと無理矢理顔をこちらに向けさせる。

「ヴァン」

名前だけ口にした。それだけでこちらの言わんとしていることは伝わるはずだ。ヴァンは数秒程視線を泳がせていたが、やがてまたボソリと呟くように言葉を紡いだ。

「……………まだ、船での礼、言ってなかったから……………」

「……………」

呆気にとられてしまった。予想だにしていなかった返答だったから。しかし、すぐに笑みが零れた。ヴァンもまだ十六歳の少年なのだ。いくら武具職人として高度な技術を持っていても、弓の扱いが同期のハンターと比べて群を抜いていようと、その本質はまだ子供っぽさの抜けない少年なのである。

「あ、わ、笑うなよ！」

レラが笑っているのに気づいたのか、ヴァンが耳まで真っ赤にしながらレラを睨んできた。しかし、どう見ても焦りが隠し切れていないその表情に、レラは更に笑ってしまう。

「笑うなって！」

「だって、だってさ、すっごく可愛いんだもん。笑うなって言われても無理」

可愛い。という言葉に恥ずかしさが増したのか、ヴァンの顔は更に紅潮した。

「可愛いってな……………。造るのやめたくなってきた……………」

「あ、それやだ。造ってほしいのあるもの」

盛大にため息をつきながら頂垂れるヴァンの背中を、レラは優しく撫でた。せつかく造ってくれると言ったのだ。この機会を無駄にはできない。

何とか機嫌を直してもらおうと、レラは両手を合わせた。

「ね、お願い！ 造ってよ」

「……………」

ヴァンは数秒程手を合わせて「お願い」のポーズを取るレラを見つめると、小さくため息をついた。

「分かった。造るよ。……で、ご希望は？」

「クシャルダオラ」

レラがそう即答すると、ヴァンはそれまで紅潮していた顔をサツと元に戻してレラを振り返った。無理もないだろう。クシャルダオラと言えば、二人がかつてハンター認定試験の時、ドルウイドの森で出会った古龍だ。

更に、ヴァンにはあの言葉を聞かれてしまっている。

待って！ 行かないで！ 『お母さん』！

あのとき、自分が放った言葉に対する疑問は、まだこの少年の中に残っているはずだ。あの夜、レラはヴァンに口封じを頼んだ。全てを語らずに、否、語れずにいたレラには、ああするよりほかに方法が思いつかなかった。

しかし、あの時と今は違う。レラは、どこか妙な確信を抱いていた。

もしかしたら、私と彼は似ているのかもしれない。

ようやく会えたのかもしれない、自分と『同じ』人間になら、すべてを話せるかもしれない。すべてを話しても、大丈夫かもしれない。そんな確信が、レラの中に生まれつつあった。

ヴァンは驚いた表情でレラを見ていたが、レラがそれ以上言わないことを感づいたのか細工用の刀と下準備のできた鉋石を手に取った。

「承った」

それだけ言うと、ヴァンは職人の顔に戻って鉱石を削り始めた。
レラは、黙ってそれを隣で見ている。

そして、今に至る。レラのリクエスト通りにクシャルダオラの飾りを造ったヴァンは、レラが淹れたココアを飲むと、そのまま食卓に突っ伏して寝てしまったのだ。それを見ているうちに、レラも寝てしまっていたようだ。

レラの首には、ヴァンが二時間ほどかけて作ってくれたクシャルダオラの形を模した虹色鉱石の入った袋が提げられている。袋からそれを取り出して朝日にかざすと、見事なカツティング技術が施されたクシャルダオラが、光の加減によって七色に煌めいた。

「レラ殿」

不意に、ベンケイが小声でレラに話しかけてきた。虹色鉱石に見惚れていたレラは、ハツとなってベンケイを振り返る。

「どうしたの？ ベンケイちゃん」

「あ、いえ。そろそろ朝餉の準備が整いますゆえ、よろしければ皆さんを呼びに行ってもらいたいですニヤ。若君とナタリー殿は拙僧が起こしますので、お願いできますかニヤ？」

相変わらず丁寧で礼儀正しいイルーだ。きっと、厳しく両親から躰けられていたのだろう。レラは微笑むとその頭を優しく撫でてやった。

「分かった。すぐ呼んでくるわ」

レラはそう答えると、食卓を後にした。

レラが食卓から出ていくのを見送ると、ベンケイは自分の主君を見つめた。穏やかな顔で眠っている。いつもなら起きている時間帯のはずだが、きっと長旅での疲れがここに来てやってきたのだろう。

「若君……」

そつと、その頭を撫でてやる。ヴァンは起きなかった。

ベンケイは、まだヴァンと知り合って半年程度しか経っていない。ヴァン自身が自分のことを話そうとしてくれないため、料理の好みや武具に対する思いの強さは知っていても、それ以上のことをベンケイは知らなかった。

しかし、ベンケイは自分の主君が、何か暗いものを抱えていることには薄々気づいていた。この主君は、隠すのが上手い。しかし、ベンケイはヴァンが時折見せる表情を敏感に感じ取っていた。

この人は、自分をお嫌いなのだ……。

ヴァンは、どこかで自分という存在を疎んでいる。武具職人として、ハンターとして少しずつ形を成していつていることに喜びを抱いているようだが、それでもどこかで自分の存在に苛立ちや嘲りに近い感情を抱いているのではないかと、ベンケイは感じていた。

それは、先ほど出て行った少女にも言えることだ。レラもまた、ヴァンに近い感情を抱いているのではないか。とベンケイは感じていた。何というか、この二人は纏っている空気がよく似ているのだ。おそらく、二人は互いにそれを無意識のうちに感じ取っているのだろう。簡単にいえば、同族嫌悪に近い感情を抱いているのだ。よく似ているから、どこかでそれを否定したくてたまらなく、ああしてぶつかり合ってしまうのだろう。二人の性格が素直でない部分も起因しているのだろう。

もう少し互いに素直になれば良いのに。ベンケイは二人がケンカをする度に常にそう思っていた。もつと自分たちをさらけ出していけば、きっとこの二人は互いに互いが唯一無二の存在であることを知ることができるだろうに。そうすれば、あんなに暗い思いを抱く必要だつて、無くなるのだろうに。

だが、それはベンケイから進言するべきことではない。これは、二人が自分で気づかなければならないものなのだ。

まだ眠りの淵にいる主人を見つめながら、ベンケイは小さくため

息をついた。

第三十二話 夜の工房（後書き）

今回、特に書くのに苦労したのは、主人公とヒロインの立ち位置。今まで散々険悪なムードだった二人をどう近づけていこうかめっちゃくちゃ考えました。

あー、何であんなに今までぶつけ合っていたのかな。おかげで書きづらじゃないか君たち！ まったく、困った子らだよホント！（オイ）

結局、レラの方が一歳年上なので、ヴァンの子供っぽい部分を強調させてレラに主導権を握らせる形で。いつか逆転させてみたいとも考えていますが。

さて、今回も旅がらすお気に入りの作品を紹介しようと思っっています。

今回ご紹介するのは、哥月先生の作品です！

『天際に届く時』

『なるう』内のモンハン小説ではちょっと異色な、戦記に近い小説です。

雪山にモンスターが集結するという異常事態の発生。さながら軍隊の如き動きを見せるモンスターたちによって、周辺の村々は壊滅の危機に瀕していた。

これを受けたドンドルマのハンターズギルドは、王立書士官、更には国軍と提携してこの問題に取り組んでいく。

国軍の指揮官に任命された元軍人のハンター。ハンターたちの纏め役に抜擢された戦闘凶のハンター。彼らを纏める凛々しき女書士官と、死にたがりの男ハンター、また、彼らの弟子たちである少年少

女。率いられしハンター、そして軍人たち。

極寒の地で、いったい何が起こっているのか。何によってそれが引き起こされているのか。

さまざまな思いを胸に、彼らは彼の地を目指す。

比較的ライトな物語が多い『なるう』内の小説と比べると、結構重たい内容です。

しかし、その分きちんと深く掘り下げられていて、一話一話読むたびに、

「次は何が起きるのだろう」

とドキドキが続くいい作品だと思います。

また、文章の完成度が今まで見た小説の中で群を抜いて高いのも特徴。それでいて、まだ天井が見えないのですから、すごい。と本気で思えます。私自身、見習いたいと思う部分が多々あり、学ぶべきものが多い作品です。

モンハン小説の作者の方々はもちろん、今まで読んだことのないモンハン小説に触れてみたいという読者様にもお勧めの作品です。

「私は重たい話は苦手だから……」

という人は、このお話の後日談でもある短編集『断章の砌』から入るといいでしょう。『天際に届く時』を読まずとも世界観にうまく入り込める書き方となっています。また、『天際』にはなかったほのぼの感が、読みやすくていいと思います。

ちなみに、この『天際に届く時』は既に完結しています。続編である『狩人の河清』が、現在連載中です。そっちはまだ始まったばかりですが、旅がらすはかなり大好物なお話でした。

それでは、また次回！

第三十三話 忌み嫌われし児（前書き）

お久しぶりです。

何気に五月に入っちゃってるよ。あれ？

この一か月何をしていたんだゴルア！ ですか？

社会人一年目で新人研修に追われ、休日に「よし書くかあ！」と思いきや、近所のボウリング場に遊びに行ったり、8時間半もカラオケで歌っていたり、川崎駅の地下街で、初任給入ってウツハウ八だからってちよつと高めの洋服に手を出したり、その後ストレスによるものなのか腹痛を起こしたり食欲が激減したりして有給取っちゃったりしていました……。

……ごめんなさい！ 四月はほとんど遊んでいました！ 暇な時間には全部遊んでいました！

執筆久しぶりにやったらすぐ下手になっていました……orz
そんなこんなで、めちゃくちゃに荒削りな第三十三話です。

第三十三話 忌み嫌われし児

村を歩けば、石を投げられた。

逃げ回っても、罵倒は追いかけて続けた。

毎日のように言われた言葉。家族にすら及んだ差別。

誰か、誰か答えてくれ。と、いつも空を見上げては泣き、海を望んで叫んだ。

僕は、穢れているのか？

レラは憤っていた。

どうして、こんなに大事なことを、あの少年は話してくれなかったのだろうか。そんなに自分たちは、自分は、信頼されていないのだろうか。

そこで彼女は、自分が彼に信頼して欲しいと願っていることには気づけないでいた。心の本音とは、時に本人が気付けず他人に汲み取られてようやく理解するものが多い。

ピリカが横で何かを言っているのが聞こえる。が、それが彼女の脳内にまで届くことはなかった。今はそんなことに気を割いている場合ではないのだ。

しかし、それと同時に、レラは場違いな喜びを抱いている自分には気づいていた。不謹慎であることは重々承知している。しかし、それは確かにレラの心の隙間を埋めてくれた。

ああ、やはりヴァンと自分は、似ていたのだ。

「まあ、このマカライト製のペンダント、とっても素晴らしいですわ！」

ショーウィンドウに飾られた装飾品に目を輝かせているのは、金髪に同色の瞳、更には黄色い揚羽蝶を模した防具『パピメルシリーズ』を身に纏った少女、ピリカだ。その隣では、ピリカと全く同じ顔に同じ防具を身に纏った少女、ノンノが小さく頷いている。

「さすがは職人の聖地^{メッカ}ねえ。ドンドルマと比べても、かなり上質な出来上がりだわあ」

幼い頃より『ユニフローラ商会』の会長である父によって様々な商品を目にしてきたせいで、この二人は品を見る目が肥えている。彼女たちがそう言うのだから、その言葉に嘘偽りはなく、更には怪しげな露店を開いている商人たちよりも信頼度は高い。

(でも、ヴァンが造ってくれたクシャルの方が、私は好きだな……) 鏡越しに職人たちが手がけた装飾品に感嘆し続ける双子の横で、銀髪のガウシカテールに桜色の鎧『リオハートシリーズ』を身に纏ったレラは、首に提げている小さな袋を手のひらの上で転がしていた。

ドーラに来て二日目の午前中。レラたちは村を観光していた。クエストを受注する前に、是非ともドーラの装飾品を見定めておきたい。と、ピリカが進言したのだ。どちらにしろ、クエストを受注するためには、村唯一の小さな酒場に行かなければ行けないため、通りすがりに見る程度ということ、全員が了承したのである。

まあ、現在その条件はブッチで無視されているのだが。そもそも、「おお、見るよヒューゴ！ この武器超カッコ良くねえ!？」

「うわ。これすごい値段ついてるよ。一式揃えるのに二〇万ゼニーって……」

その提案をしたミスター独断が、あの状態なのだが。自分もすっかり楽しんでるではないか。

「旦那さん旦那さん！ あそこにすっごく立派なアイルーの像があったニヤ！ 一つ五万ゼニーニヤ！」

レラのオトモアイルー、ナタリーも、しっかりと観光を楽しんでいた。元より、ナタリーはピリカの提案に最初からノリノリであった。イベントが大好きな性格なのだ。

「五万つて、ちよつと無理ね……。それより、そろそろ行かない？ クエストを受注するなら、午前中に済ませたいし」

苦笑いを浮かべながらナタリーの頭を撫でると、レラは小さくため息をつきながらそう提案した。ちなみに、ヴァンはというと久しぶりの実家の工房に懐かしさを覚えたのか、今はジンたちと一緒に工場でハンマーを振るっている。彼の従者アイルーであるベッケイも向こうに残っているのだ。

「あら、お嬢ちゃんたちハンターなのね。若いのに立派だわあ」

レラの言葉に反応したのは、三人が覗いているアクセサリー工房の売り子をしている、恰幅の良い中年の女性だ。女性は、近くで売り物の整理をしている自分の息子らしき少年の背中を思い切り強く叩く。

「まったく、アンタも若いんだから武器の扱いを覚えて、少しは生活を楽しめよ！」

「いつてええええ！ 何すんだよクソババア！ 俺は工房の仕事で忙しいんだ！ ハンターが欲しけりゃレクサーラまで行けよ！」

真っ黒く焼けた肌の少年は、むき出しの背中を叩かれてうっすらと涙を浮かべながら母親を睨んだ。どうやら、ドーラではこの恰好が普通のようなのだ。何でも、竜人族の肌は人間よりもずっと頑丈らしい。レラは、工房の中で一人だけツナギ姿に軍手と安全靴を身に着けたヴァンを思い出し、彼の中には竜人だけでなく人間の血も混じっているのだということを出した。

「そっぴや、お嬢ちゃんたち見ない顔ねえ。最近レクサーラからの船も少ないから、外からのお客は少ないっつのに」

「船が少ない？ どういうことですか？」

母親の言葉に、それまで装飾品に目を輝かせていたピリカが首を傾げる。すると、母親は小さくため息をつくと、重そうに口を開い

た。

「今ねえ、ジオ・クルーク海の方からやって来たらしいガノトトスが、このドーラの近海で暴れているのさ。おかげで船を出すタイミングが今まで以上に減っちゃまって、商売上がったりなんだよ」

『水竜』ガノトトス。別名『水の王者』と呼ばれる、大型の魚竜だ。飛行能力はないが、その遊泳速度と口から発せられる超高压の水プレスは比類なき威力を持っている。しばしば自分の領域^{テリトリー}である海域を進む船を襲撃し、幾度となくそれらを沈没に追いやった強力なモンスターだ。

「ガノトトス……。確かにそれは厄介ですわね。早急に討伐した方が良いでしょう」

ピリカが小さく唸ると、その横でノンノもコクリと頷いた。

「そうねえ。この村の唯一の交易路が塞がれているなんて、勿体無さすぎるわあ」

すると、その会話を聞いていた息子が、小さく肩をすくめた。

「海路だけならまだマシだったさ。今は、並大抵の職人じゃあ火山にも行けないんだ」

「ニヤニヤ？ どういうことニヤ？」

息子の言葉に首を傾げたのは、ナタリーだ。息子は母親と全く同じ仕草で小さくため息をついている。

「グラビモスだよ。しかも亜種。サイズもかなりでかめらしいし、参っちゃうぜホントにさあ」

グラビモス。別名『鎧竜』と呼ばれる、火山を主な生息地をするモンスターだ。動きは鈍重だが、活火山の溶岩流すら撥ね退ける岩のような外殻が特徴のモンスターだ。その口から発せられるプレスは、表現するならば『光線』のごとき威力を誇り、また身を守る手段として体外へ昏睡作用を持ったガスを噴射する能力を有している。

通常その皮膚は、白とも灰色ともつかない色をしているのだが、稀にそれよりも更に溶岩に耐性及び排熱能力の高い黒い皮膚を持つた黒化個体。亜種が出現することがある。生物学上、亜種とは突

然変異体を指し、この場合は『亜種』ではないのであるが、ギルドでは判別がしやすいようにそう称されているのだ。

「グラビモスの亜種に、ガノトトス。確かに一大事ですわね……」

どちらも、Dランク以上、それも幾分か飛竜と戦い慣れたハンターが討伐するのにちょうどいいとされている相手だ。武器の扱いを知らない者にとっては脅威と言える。ピリカの呟きに、レラも賛同するようにコクリと頷いた。

「じゃあ、受注依頼はそれで決定ね。急いで酒場に行きましょう。きつとヴァンもそろそろ到着している頃合いだろうし」

レラの言葉に、双子が頷いたそのときだった。

「ヴァン……?」

それまで親しげに話してきた息子が、突然表情を変えた。隣に佇む母親も、同様に顔を険しくしている。それにいち早く気づいたナタリーが、小さく首を傾げた。

「ウニヤ? お二方、一体どうしたのニヤ?」

「……ヴァンって、まさか、ヴァン・ドラグニルのことか?」

ナタリーの問いに、険しい顔のまま息子の方が訊ねてきた。その名前に、周りの裏の人間たちも目を剥いている。しかし、その表情の意味を知らないナタリーは、頷きながら笑顔で答えた。

「そうニヤ! ウチの獵団^{チム}の凄腕弓使いニヤ! リオレイアの目だつて簡単に穿てちゃうのニヤ! それにそれにニヤ」

「黙れ!」

「ウニヤツ!」

次の瞬間、息子がナタリーに向けて怒号を浴びせた。それまで楽しげに話していたナタリーは、突然豹変した息子に思わず体を震わせ、レラの足にギョツとしがみつく。レラも息子の豹変ぶりに目を剥きつつも、ナタリーを庇うように前へと進み出た。

「ちよ、何ですか!? いきなり怒鳴りつけて!」

レラが息子をギツと睨みあげると、息子も負けじとレラを睨みつけながら、小さく呟いた。

「……出てけ」

「え？」

「今すぐにこの村から出て行けって言ったんだよクソ尼！」

再び響く怒号。ピリカはもちろん、普段はその程度の怒号すら受け流すノンノまでもが、目を丸くさせながら二人を見つめている。その声を聞きつけたのか、少し離れた場所にいたアレンとヒューゴも、こちらを振り向いていた。

息子の言葉に、レラの表情が一変した。

「はあ！？ いきなり何よそれ！ ワケ分かんないわ！」

「錠破りのドラグニル家、その上、忌み児とつるんでいるような奴らに、村を歩いてほしくねえんだよ！」

「……いみ、ご……？」

一瞬、息子が口にした言葉の意味を、レラは理解することができなかった。錠破り？ あの温厚そうなドラグニル家の人々が、何を犯したのだろう。それに、あのヴァンが『忌み児』……。

「何よ……、何なのよそれ……。もっとワケ分かんないじゃない……」

「……」

「お嬢ちゃん」

不意に、それまで黙っていた母親がレラに話しかけてきた。その表情は、息子と同様に険しい。

「悪いけど、さっさと出て行ってちょうだい」

「そ、んな……」

「あんたたちには悪いんだけどね。これがこの村のしきたりなのさ」
母親の言葉に、ピリカが眉に皺を寄せた。

「そんな、あんまりですわ！ せめて理由だけでも」

「イテエッ！」

抗議しようとしてピリカが口を開いた瞬間、後ろからアレンの小さな叫び声が聞こえた。振り向くと、こめかみを押さえてその場にしゃがみ込むアレンを、ヒューゴが慌てた表情で見ている。そばには、手のひらに収まる程度の石が転がっていた。

「アレンくん、大丈夫!？」

「ん、ああ。一応な……」

そう言っただけでアレンが立ち上がると思ったとき、近くの民家にある二階の窓から、小さな子供がアレンに向かって何かを投げつけるのが見えた。レラはすぐさま駆け出し、背負っていた『黒刀【弐の型】』を抜刀すると同時に、子供が投げたそれをアレンの目の前で弾き返す。石だ。先ほどより少し大きい。

「……この村では、人に石を投げて良いって教えているわけ？」

鋭い双眸で石を投げてきた子供を見上げると、すぐに窓が閉まった。

今度は外で遊んでいた子供たちがレラに向かって石を投げってくる。しかし、それらもレラに到達する前に短い発砲音とほぼ同時に弾けて飛んだ。視線だけを動かすと、『メラルーラグドール』を構えたピリカが立っていた。

「まさか、人里で発砲するなんて予想だにしていませんでしたわ」

「出てけ! この村から出てけ!」

「忌み児の仲間! また『わざわざい』をこの村に呼ぶな!」

「でーてーけ! でーてーけ!」

ピリカの声を遮るように、子供たちから普通は聞かないような言葉が飛び交ってくる。石を投げることはもうなかったが、周りの大人たちも自分の年齢さえ考えなければ、同じようなことをしてきそうな空気を醸し出していた。

「……………」

その光景に、レラは腸が煮えくりかえる思いを感じると同時に、かつての自分を重ねていた。

道を歩けば、まるで逃げるように遠ざけられた。同じ形をした生き物なのに、窺知しがたいものを見ているような眼で見られ続けた。時折、大人たちの話し声が幼い少女の耳を叩いた。

あれが、ゴードンさんのところの？

ナタリーたちを無視して、普段なら使わない言葉遣いでそう叫ぶと、レラはクルリと踵を返した。そのまま、元歩いた道を競歩に近いスピードでずんずんと歩いて行く。その後を、ナタリーたちが慌てて追いかけてきたが、レラは気にせずにとんどん歩いた。

ドラグニル工房に向かって、歩き続けた。

「ヴァン！」

ドラグニル工房に着いてすぐ、レラはヴァンを探した。台所の方から、ベンケイがひよっこりと姿を現す。

「レラ殿。一体どうなさったのですかニヤ？ 昼餉はヒューゴ殿たちと村の酒場で食べる予定だったのでは……」

「ベンケイちゃん。ヴァンはどこ？」

ベンケイの言葉を無視して、レラは訊ねた。その眼から何かを読み取ったのか、ベンケイはすぐに真面目な表情に切り替わった。

「若君ならば、工房で弓の打ち直しをしておりますニヤ」

「そう。ありがとうございます！」

ベンケイに短く礼を言うと、レラは防具も脱がずに工房へと足を踏み入れた。

ベンケイの言う通り、ヴァンは工房の隅で愛用の弓『ハンターボウエー』の打ち直しをしていた。レラは無言でヴァンの元へと歩み寄ると、言葉もかけずに後ろから首根っここの辺りを掴んで無理矢理立ち上がらせた。案の定、いきなり首根っこを掴まれて上に力がかけられたヴァンは、咳き込んだ。

「げほっ！ ちょ、何だ何だ！？ って、レラか？」

相変わらずの調子で無垢な瞳を向けてくるヴァン。それを見た途端、レラの中に深い悲しみが過ぎった。

この人は、道化を演じているんだ……。

先ほどまで腸の辺りでぐつぐつ言っていた怒りが、不意に霧散す

る。そこにあるのは、ただの空虚だった。

どうして私は、こんなに虚しいのだろう。

どうして私は、こんなに悲しいのだろう。

どうしてこの人は、こんなに綺麗な瞳をしたままなのだろう。

「……レラ？ レラー？ ……アイルーパンツ？」

先ほどまでの鋭い眼光とは打って変わって呆けたような表情をしているレラの目の前で、ヴァンが手の平を振っている。それでも何も言わないレラの鼻を摘まんだり、頬を抓ったりもしているようだが、レラはそれが他人事のように見えてしまった。

それが一層、レラの中の虚しさを増幅させた。無意識のうちに、頬を冷たいものが伝って床に落ちた。

「……レラ？」

「……うっ……ひっっ……うあああああああああああああ
ああっ！」

そのまますぐに、レラは崩れるようにその場に膝を落とし、ヴァンに縋るように大声で泣き始めた。

「えー!? ちよ、はああ!？」

訳が分からず、泣きじゃくるレラを見て、ヴァンはただただ目を丸くしていた。

「……そうか。聞いてしまったんだね」

食卓で、エドガーが深いため息をついていた。レラはというと、相変わらず理由を話さずに泣きじゃくるばかりで、現在はヴァンと一緒に二階に上っている。

食卓には、ドラグニル工房の三人、ヒューゴ、アレン、ピリカにノンノ、そしてナタリーが椅子に腰かけていた。ベンケイはヴァンとレラに付き添っている。

「あの、この村は一体……」

「話すと長いぞ、青年」

ヒューゴの質問に、重ねるようにジンがびしゃりと言いつつ放った。

その態度にムツときたのか、ピリカが鋭い目つきでジンを睨みつけるが、ジンはどこ吹く風。とでも言うようにキセルをゆっくりと吸った。それを見て、更にエドガーがため息を重ねる。

「爺さん。この子たちには知る権利がある。この子らはおそろくヴァンと長い付き合いになるだろうし、アレくんが怪我までした。いつまでも隠しているわけにはいかないだろう」

「ふん。世の中じゃあ知らんていいこともたくさんあるだろうが」「工房長！」

プイと拗ねるジンに、レオンジも思わず声を荒げる。それを見て、こめかみに絆創膏を貼ったアレクが仲裁に入った。

「あーもう。言い争いになるのはゴメンだぜ。話しにくいなら話さなくてもいいしよお。聞きたいっちゃん聞きたいけどさ。ジンのじいちゃんの言い分も正しいしさあ」

「でも、私は聞きたいわあ。あれはいくらなんでもおかしいものお」しかし、アレクの言葉にノンノが反論の意を示した。それに合わせて、ピリカとナタリーもコクコクと頷く。ヒューゴも賛同するように眼を伏せた。ジンの深いため息が、食卓に下りた。

しばらくして、エドガーが口を開いた。

「事の始まりは二十年ほど前に遡る。私がジオ・ワンドレオでの修行を終え、レヴィと共にこの島に戻ってきたことが、すべての始まりだった」

「この村の竜人は、昔の考えを捨ててきれてないんだとさ」

その頃、二階ではようやく落ち着きを取り戻し始めたレラの頭を自分の肩に預けながら、まるでおとぎ話を子供に聞かせるような口調でヴァンが淡々と話を始めていた。

今から五百年前。ちょうど、ジンが三十後半ぐらいの頃のことだ。その頃に、ン・ガンガの辺りに住んでいた職人の何人かがこの島に移り住んだ。当時、北エルデ地方では竜人の迫害があったのだそうだ。ジンを含め、迫害にあった十数人の竜人は、島流しのようになっ

の場所に隔離されてしまったのだという。

そのせいで、ここに住んでいる竜人は『人間は我々とは違う生物なのだ』っていう考えを持つようになってしまったらしい。

「人間を忌み嫌っているのさ、この村は。だから、親父がお袋を連れて島に戻って来た時は、村が総出で二人を島から追い出そうとしたんだってさ」

自分たちを迫害した人間を伴侶として迎え入れる。そんなことなど、到底許されるわけがなかったのだ。しかも、その暗黙の了解を破ったのが、当時迫害を受けた張本人、ジン・ドラグニルの曾孫であつたことも、村にとっては大きなショックだつたのだ。

何故だ。ジンは曾孫にそんなことも教えなかったのか。自分が一番辛い目に合っているというのに。そうさせたのは他でもないあの女と同じ人間なのに。

「結局、ドラグニル家は村を出て環境の厳しい場所に移り住むって条件で村人と交渉し、手を打った。で、その数年後にオレとあいつが生まれたわけな」

それは、望まれない出産だつた。レビイが妊娠してからというもの、ドラグニル家への迫害は更に激しさを増し、遂には血の繋がりなど微塵もない弟子のレオンジすら、村に立ち入ることを禁ぜられたのだ。

人間を今に迎え入れるだけでは飽き足らず、その間に子まで儲けたエドガーを。更にはそれを止めようとしなかったジンを、村人は蔑み続けた。

「……とまあ、そんなわけで、その混血児であるオレとあいつは、村の奴らから『忌み嫌われし穢れた血の児』っていう意味を込めて『忌み児』って呼ばれるようになったのさ」

「そんな、そんなの、あんまりではありませんかニヤ！」

ヴァンが話し終えると同時に、ベンケイが声を荒げた。

「生まれなど、子には操作のできぬこと！ ただ単に、混血児として生まれただけで迫害を受ける理由になるといいますかニヤ！」

ベンケイとしては、自分が主とする若者がそんなくならない理由で差別や迫害を受けているのをただ傍観することしかできないことが、齒痒いほどに悔しいのだろう。

この小柄なアイルーは、見ているこちらが放つてはおけないくらいに生真面目で、また責任感の強いアイルーだ。それは裏を返せば、何でも背負おうとするとも言える。他人の傷ですら、このアイルーは共に背負おうとしてくれるのだ。

「ベンケイ。世の中にはさ、オレ一人の力なんかじゃ変えることのできないものなんてたくさんあるんだ。これもその一つだよ。オレはただ、現状に耐えることしかできない……」

それに、これはヴァン一人が背負うべきものだ。このアイルーに、そんな汚いものまでは背負わせたくなかった。

まだ静かに泣き続けるレラの頭に軽く手を添えたまま、ヴァンは小さくため息をついた。

第三十三話 忌み嫌われし児（後書き）

鬱だ……。うまく書けなくて鬱だ……。うががー！ な、旅がらすです。

ちよこつとだけ、主人公とヒロインの過去と共通点を出せました。ようやくスポットライトが二人に当たり始めています。次からは狩りのシーンです。ようやくモンハンらしいシーンが書けます。

と、ここで、読者の皆様にひとつお願いがあります。感想、書いてくださって本当にありがとうございます。体調を崩した時も、皆様の感想を読み返すと元気が湧いてきます。しかし、わがままを言うようですが、感想を書く際に一つお願いがあるのです。

できれば、一言感想はやめてください。ただ単に『面白かった』『や』『良かった』だけでは、どこが面白くて何が良かったのか、わからないのです。

こうして様々な人から評価を頂ける場があるので、できれば皆様の意見をどんどん活用していきたいと思っています。その上で、できれば一番好きなシーンやキャラクターなどを言っていたら、とても分かりやすいんです。その方が、私も返信がしやすいので。

何卒、よろしくお願いしますm()m

第三十四話 古いしきたり（前書き）

お久しぶりです。

前回の投稿から、実に二ヶ月という長い期間を得て、ようやくこの話を投稿することができました。

この物語を楽しみにしてくださっていた読者の皆様、長らくお待ちせいたしました大変に申し訳ありませんでした。

しかも、久しぶりの投稿なのに何だよ、この文章……。自分の文章レベルがどんどん下がっているのが良く分かります。

い、いやだああああ。恥ずかしすぎて穴があったら入りたい。というか、誰かからすに穴を提供してください！（何

そんなこんなで、ようやく狩りが始まるうとしています、な第三十四話です。

第三十四話 古いしきたり

ピリカ・ユニフローラは憤っていた。

何故、同じ『ヒト』であるはずなのに、蔑んだりしなければなら
ないのだろうか。ピリカの知る限り、そんな酷い迫害を受ける人を
見たのは今回がはじめてであった。

それは実際にはかなり幸せなことであることを、十七になったば
かりの少女はまだ知らない。

ピリカの家は、代々続く商人の家系だ。父がある『事件』によつ
て壊滅の危機に瀕したミミルの町の復興を手がけたことから、ユニ
フローラ商会は今のようなお客様の要望に応えた商品と真心の提
供』をスローガンとした大規模な会社に発展した。

そんな父の背中を見ているうちに、ピリカはいつからか『父の手
伝いがしたい』と強く願うようになった。

この世界には、人間のほかに『モンスター』と呼ばれる生物が蹂
躪している。彼らは人間と比べて知性で劣るものが多いが、しかし
単なる『力』のみを比べた場合、人間は彼らの前では塵にすら劣る
存在となる。

商会をやっていく上で、最も命の危険を感じるのは、商品を仕入
れたり輸出したりするときに町を出ることだ。町の外は、モンスタ
ーの巣窟である。狙われたりしたらひとたまりもない。

だからこそ、ピリカはハンターとなることを志した。

実際に商会を継ぐのは、ピリカではなく弟のセネルだ。三つ下の
まだまだ頼りない弟ではあるが、幼い頃よりピリカたち以上に帝王
学や経済学を父から叩き込まれた彼は、確かに商人としての腕はピ
リカたちよりも優れたものと成長している。文句の付け所がなかつ
た。

そこで、ピリカは考えたのだ。

『ならば、私は彼らを守ろう』

それが、ハンターを志すきっかけだった。自分が彼らを守り、彼らは人々の暮らしを守る。これほど嬉しいことなど、ピリカにはほかに想像もつかなかった。

他にも、ハンターならばさまざまな依頼で辺境に赴くことも少くない。そこで良い商品を見つければ、ユニフローラ商会に持っていくこともできるし、新たな商用ルートを造り上げることもできる。それは、世界の人々を更に潤してくれるだろう。ピリカの夢はどんどん膨らんでいくのだ。

最初、ドーラに来たときも、常々耳にしていた装飾品の素晴らしさをしかと目に焼き付けておこうと息巻いていた。実際に、目にした商品は素晴らしく、また繊細で美しかった。

しかし、ピリカは彼らの作品をユニフローラ商会に持って帰る気には、もうなれなかった。

仲間であるヴァン、そして彼の実家であるドラゲニル家に対する村人たちからの迫害が、彼女の頭の中で何度も繰り返し再生されていたのだ。

「ピリカちゃん。あなたがそんな風にしても、何の解決にもならないわよお」

ムスツと頬を膨らませながら海を見つめるピリカの隣で、双子の姉、ノンノが釣り糸を垂らしながら、相変わらずののんびりとした口調でピリカに話しかけてきた。

「しかしお姉さま！」

「静かにしてちょうだい。ガノトトスは大きな音に敏感なんだから

あ

憤った勢いで立ち上がりかけたピリカを、ノンノがやんわりと制した。その体は、いつもの黄色い蝶をあしらった『パピメルシリーズ』ではなく、真つ赤な防具。甲殻種『ダイミヨウザザミ』から作られた女性に人気の防具『ザザミシリーズ』を纏っていた。今回の狩猟対象であるガノトトスの必殺技でもある水ブレス対策である。二人が通常着ている『パピメルシリーズ』は、虫から作られた防具のため、水には極端に耐性が低いのだ。もちろん、ピリカもほとんど同じデザインの防具を今は身に纏っている。

数刻前にあんな酷い話を聞いておきながら調子を全く変えないマイペースな姉に、ピリカは苛立ちを覚えながら、姉の制止を振り切ってその場で立ち上がった。

「けれども、あの村の連中は確かにレラの言う通りにクソ野郎だからでしたのよ！ 五百年も昔のことを未だに引き摺っているなど、馬鹿馬鹿しいにも程がありますわ！ ヴァンにそれを当たり散らすなど、言語道断ですわ！ 当時、彼は生まれてすらいなかったのですよ！」

迫害されたから、やり返す。どうしてそう考えることしかできないのか、ピリカには理解できなかった。もつと他に、やるべきことがあるのではないのだろうか。

苛々と怒りのオーラを纏わせるピリカの腕を、ノンノが優しく掴んで座らせた。

「ピリカちゃん。だからと言って、あなたに何ができるの？ 何もできないでしょお？ ワタシだって腹は立つわよお。でも、ワタシたちが腹を立てたところでヴァン君への迫害が無くなるわけではないし、それに、ドラグニルの皆さんが村に帰れるわけでもない。なにもできないのならば、今は考えないほうがいいわあ」

「しかし！」

「それよりも、ワタシたちはいつもどおり彼に接してあげましょお。その方が、ヴァン君もきつと喜ぶわあ」

「っ！」

言われて、ピリカの頭にようやく冷静な部分が戻った。

十六年間、石を投げられ、罵られ、辛い思いをしてきたであろう少年に自分たちができること。それは確かに、ノンノの言う通り、彼と普通に接することなのだ。

あの少年は、家族以外から『愛情』を受けて育ったことがない。他人は恐怖すべきものだと考えていたのかもしれない。それならば、自分たちが彼に出来ることは、そういう小さな気持ちを少しでも彼に見える形で示すことなのだ。

「……………分かりましたわ」

納得はできないが、理解はできた。腹は相変わらず煮えくり返ってはいるが、先ほどよりは幾分か冷静さを取り戻せている。

そうだ。今はそんなことをグダグダ考えていても仕方がない。それよりも、彼と普通に接すること、そして、今目の前にあるクエストをしつかりとこなすことを考えよう。ピリカは頭をすっきりさせるため、二回ほど自分の両頬を手の平で打った。

「お二方。頭がすっきりしたらお腹が空いたと思うニヤ。ちょうど良い具合に焼けたから食べると良いニヤ」

そこへ、どんぐりメイルを身に纏ったレモン色の二足歩行ネコアイルーのナタリーが後ろから話しかけてきた。ピリカの鼻腔を美味しそうな匂いがくすぐる。

その匂いで思わず涎が出そうになったのを何とか堪えながら、ピリカはナタリーを振り向いた。

「確かに小腹が空きましたわ。一体何を焼きましたのってぎゃああああ！」

が、しかし、振り向いた瞬間、ピリカはお嬢様らしくない悲鳴を上げてしまった。

ピリカの目と鼻の先にあったもの。ナタリーが突きつけてきたであろう『それ』のあまりのグロさに、我を忘れてしまったのだ。

THE・美味しくこんがり焼けた、大きくて真っ赤な『カエル』

「嫌ですわ！ そんなもの、そんなもの死んでも食べたくないですわー！ というか、それはガノトトスの餌ですわよ！ どーしてそんなにこんがり上手に焼いてしまっているんですの!？」

そう、ナタリーが焼いていたのは、これから討伐する予定であるガノトトスの大好物であるカエルだったのだ。ちなみに、今現在ノンノが握っている竿の先についている真っ赤な物体がそれである。

もちろん、釣り以外に使用方法を知らないピリカは食したことで一度もない。その焼けた香ばしい匂いに思わず食欲をそそられてしまった自分に寒気を覚えたほどだ。

しかし、怯えるピリカに対して、ナタリーはこんがり焼きガエルをぶんぶんと振り回しながら満面の笑みを浮かべている。

「ウニヤア。カエルって意外と美味しいんニヤよ？ 鶏肉みたいな味がするのニヤ！ 滋養強壮にも良いし、力をつけたいときにはもってこいの食材なのニヤ もっかい焼いてあげるニヤ ……」

…ウルトラ上手に」

「焼つけましたー ……ではありませんわよ！ というより、

G!？ こんがり焼きガエルGなんて聞いたことありませんわよ！」

「おお。ピリカ殿。ナイスノリツッコミですニヤ では、その調子で」

「ぎゃー！ 無理無理無理ですわー！ 近づけないでくださいましー！」

ナタリーがカエルをピリカに近づけるたびに、ピリカは必死になつて近づけまいと後ずさる。それを見て、釣竿を握ったままノンノがのんびりとため息をついた。

「ピリカちゃんの偏食癖も困ったものねえ。…あら、ほんとお。

鶏肉みたいで美味しいわあ」

「お姉さま!？ 何普通に食していますのってぎゃあああああ！」

ナタリーさん！ 私にそれを向けなくて下さいましー！」

昼下がりの海辺。釣り糸を垂らす少女とこんがり美味しく焼けたカエルを突き出すアイルーにそれに怯えるもう一人の少女。先ほどのまでの険悪な空気はどこに行ったのか、とてもものほほんとした空気にそこは包まれていた。

と、そこで、カエルによって錯乱状態に陥っていたピリカはようやく我に返った。

本来ならば、こんなことをしている場合ではないのだ。

「お二人とも！ 今回の目的はガノトトス討伐！ こんなに騒いでいては、奴に気づかれますわ！ というか、先刻お姉さまはワタクシに注意したばかりではありませんか！」

だがしかし、そんなピリカの主張も空しく、ピリカたちの眼前に広がる海から巨大な咆哮が響き渡った。

「っ！？ この声、まさか……」

「ガノトトスね。しかも、ちょっと大きいわよ」

咆哮に一瞬だけ身を縮めたピリカの横で、ノンノが釣竿を砂浜に放り投げた。要らない。と判断したのだろう。

口調もいつもののんびりしたものとは違う、ハキハキとした本来の口調に戻っている。釣竿を放り投げた右手は、背中に納めている大剣『カースオブキャット』に添えられている。

姉のしっかりとした立ち振る舞いに、ピリカは戦慄を覚えながら、自身のライトボウガン『メラルーラグドール』に弾丸を込めた。ハンターとしての気概と覚悟。それをきちんと兼ね備えた姉に、倣いたかったのだ。

「申し訳ありません。少々取り乱しかけてしまいましたわ」

ボウガンを構え、少し余裕を取り戻せたピリカは、隣に立つ姉に微笑みかけた。ノンノも、やんわりとした微笑みをピリカに返してくる。

「いいえ。ハンターといえど、人間だもの。怖いって感情はあって当然よ。それに……」

ノンノはそこで言葉を切ると、未だ海から出ようとしなないガノトスを睨みつけた。おそらく、今ピリカが思っていることと同じことを考えているに違いない。

（大きいですわね……）

背びれ、否、すでに背中がほとんど水面より上に見える『それは、二人が今までに見た中では最も巨大なガノトスだった。』

そこから、二人はこのガノトスが幾戦もの生存競争を勝ち抜いてきた、所謂『勝ち組』のモンスターであることを悟る。

すなわち、上位レベル。

「ブニヤハハハ！ 上位レベルのガノトス！ 腕が鳴るニヤ！」

と、そこで、あまり品があるとは言えない笑みを溢れた。ナタリーだ。

ナタリーはこんがり焼きガエルGを頬張ると、自分も腰に納めていたピツケルを抜き放ち、構えた。ピツケルの切っ先から、黄色い液体が滴っている。ゲネポスの麻痺牙から抽出した麻痺毒が、ピツケルに仕込まれているのだ。

「お二方。作戦通り、お願いしますニヤ」

「了解よ。ピリカちゃん。いつでもスタートしていいわ」

「はい！ では、ご武運を祈りますわ！」

頼もしい二人の仲間の声に、ピリカはボウガンを構えたまま、砂浜を海岸線沿いに駆けだした。

自分は銃撃士だ。近接攻撃型の二人とは、役目も戦法も違う。安全圏内より、モンスター^{ガナー}の追撃を許すことなくその命を叩き折る。

『晴れることのない驟雨』

近接攻撃タイプの仲間を支援し、且つ止む事のない攻撃の要となる。それが自分のやり方のなのだ。

二人から十数メートルほど距離を取ったところで、ピリカはボウガンを眼前に構え、スコープ越しに海中のガノトスを睨みつける。「風向き確認終了。角度、飛距離、共に良好。狙うは背びれの根元

……」

しっかりと狙いを定めたピリカは、ボウガンの引き金トリガーに指を添えた。

「さあ、『水の王者』！ 覚悟なさい！」

自らを奮い立たせるようにそう叫んだピリカは、反動に堪えるように体勢を整えると同時に、引き金を引いた。

メラルーの尻尾の先端 銃口から、特大の弾丸『Lv.3 徹甲榴弾』が発射、ガノトトスの背びれに着弾する。数秒後、ガノトトスの背びれから激しい爆音と鳴り響くのと同時に、真っ赤に染められた海の水が水柱を形成した。

狩りが、始まった。

ドーラ火山

麓に鍛冶職人の聖地ができるほどに豊富な鉱脈を湛えたその場所は、それと同時にドンドルマの南東に位置する北エルデ地方の活火山、ラティオ活火山と並ぶ、大陸中に存在する狩場の中で一、二を争うほどに過酷な環境だと謳われている。

噴火を絶え間なく繰り返す、常に鳴動する大地。噴火に伴い、まるで間欠泉のように噴き出す熱気と溶岩は、大気をも熱し、更に後者は真紅の河となって地表を滑り降りていく。それは既に、生命の鼓動を断つかのような荒々しさを持っていた。

しかし、そのような過酷な環境においても、モンスターたちはそこに生息するために進化を続けた。通常では焼け焦げてしまうような高温にも耐えられる皮膚、植物の生育すら難しいといわれる大地で、少しでも多くの栄養を得るために鉱石に含まれるわずかなミネラル分で数日を乗り切ることに成功した内臓器官、更には摂氏数

千度にまで及ぶこともある溶岩を耐え得るほどに頑強な甲殻を得た彼らは、生命の進化が時には母なる大地すらも凌駕することを示すように、そこで命を育んでいた。

「あぢいいー……。バカみてえにあちぞこのヤロー……」

「アレン。あんまり暑い暑いって言わないで。忘れようとしているのに、思い出しちゃうじゃない」

拠点のテントに凭れながらだるそうに呟く緑髪の青年 アレンを、桜色の鎧を纏った銀髪の少女 レラが窘めた。だが、その額にもアレンと同様に玉のような汗が浮かんでいる。

一歳年下の幼なじみに窘められ、アレンは小さく頬を膨らませた。「あぢいもんをあぢいって言って何が悪いんだよー！ チクシヨー。こうなるとは分かっていたから一応フルフル以外にも防具を持ってきてはいたが、それでも暑い！ そう、暑い！ 暑いんだ！ おれはそう感じるんだぞー！」

そう言うアレンは、確かにいつもの『フルフルシリーズ』とは違う防具を身に纏っていた。

灰色にも似た白い輝きを放つ、『岩竜』バサルモスの甲殻を鍛えて造られた防具『バサルシリーズ』だ。火山地帯や沼地に生息するこの飛竜は、今回の狩猟対象である『鎧竜』グラビモスの幼体である。

アレンは、自分の愛用武器である『フルフルホルン改』に頼ずりをした。以前、イヤンクツク亜種によって折られた『フルフルホルン』を、ヴァンが試験の際に討伐したフルフルの素材を用いて修復・改良したものだ。

「フルフル。お前だけはおれの気持ち分かるよな。おれと同じで暑いのが苦手だもんな、お前」

「ウルサイわねえ。っていうか、人の言うことなーんにも聞いてなかったでしょ」

「アレンくん。そう感じるから更に暑くなるんじゃない？ 『病は

気から』とも言つし、ようは気持ち次第だよ。それに、こついう暑さにも慣れなくちゃ」

アレンの言い分に呆れるレラの横で、緑色の鎧『レイアシリーズ』に大きな鎧を模した鎧『イカリハンマー改』を背負ったヒューゴが苦笑いを浮かべながらそう言った。そう言つヒューゴも、やはり玉のような汗を額に浮かべ、耐えきることは難しいのか兜を脱いでいる。

それを聞いて、アレンはそれまでのだるそうな顔を一变、ニヤニヤと不気味な笑顔を浮かべた。

「そかそかー。ヒューゴはロビンのアネキともつとアチ」

「それ以上発言するならば問答無用で君をマグマの河に放り投げるけど、それでも構わない？」

「……あのさ。マジな顔で言われると冗談に聞こえねえからやめてくんね？」

両手をパキパキと鳴らしながら笑顔を浮かべるヒューゴを見て、さすがのミスター独断も唾を呑むほどの恐怖を覚えたようだ。いつも大人しい人間こそ、本気で怒ったときに怖いものなどない。

一方、久しぶりに形勢逆転のチャンスを得たヒューゴは、笑顔のままで腕を組んだ。

「え？ 結構本気なんだけど」

「バカかお前おれを殺す気がつつの！！」

「ヒューゴ。やるなら手伝うわよ」

「ああ、ありがとう。レラさん。そう言えば、ここの近くにマグマの吹き溜まりがあつたよね？」

「ええ、あつちにあつたわ」

「ちょ、待て！ 早まるな！ ってか一人そこで傍観してんじゃねえよヴァン！ 助ける！」

笑顔のままにじり寄る二人に思わず後ずさりながら、アレンは一人焚き木と格闘している、ミカン色の髪に『バトルシリーズ』と呼ばれる軽装の鎧を纏った少年 ヴァンに助けを求めた。

元々ここの出身だからか、ヴァンだけは汗一つ掻いていない。元より、竜人族は生存可能な温度範囲が人間よりも広いのだ。混血といえど、その体に流れている血の半分は父である竜人族のもの。父たちほどではないが、ヴァンも暑さや寒さには人一倍強いのである。三人に背を向けながら作業をしていたヴァンは、面倒くさそうに振り向くとその場から動かさずにアレンを睨みつけた。

「丁寧に断る。そもそも助ける義理もない。っつーか、遊んでいる暇があつたら手伝えつての」

「そういえば、ヴァン。アンタ、一体何してるの？ ご飯なら来る途中でベンケイちゃんの作ってくれたお弁当を食べたじゃない」

特に料理をするわけでも寝る支度をするわけでもないのに火を焚く準備をしているヴァンに、レラは首を傾げた。今はまだ昼を少し過ぎたくらいの時間。寝支度をするには早すぎる。

すると、ヴァンはレラの質問に呆れているかのように、小さくため息をついた。

「メシじゃねえ。村のしきたり。竈の神でもあり、火の神の住まう火山に入るときは、あるものを差し出して入山の許可を貰わないといけないんだよ」

「許可あ？ なんもん必要なのかよ！？ っっていうか、お前あんだけ嫌味なこと言われときながら、結構しっかりしきたりとか守っちゃってんのな。意外だぜ」

ヴァンの言葉に、アレンがようやくその場から立ち上がってヴァンの元へと歩み寄った。にへらにへらと笑いながら、ヴァンの頭をぺしぺしと叩いている。しかし、ヴァンは振り向かず、火おこしの作業を続けた。

「……無視かよ」

「てめえが言うか、このミスター独断が。……よし、点いた」

小さく頬を痙攣させているアレンに、ヴァンが小声で毒づいた。それから、腰にぶら下げているポーチから四枚の紙を取り出すと、それを三人に手渡ししてくる。それはどれも、簡単ではあるがヒトの

形をしていた。

「……何、この紙？」

「人間の形してんな。結構デフォルメされてるけど」

渡された紙の意味を知らないレラとアレンは、互いに頭上にクエスチオンマークを浮かべながら首を傾げている。一方、ヒューゴは数秒ほど紙を見つめたかと思うと、ハツとなって顔を上げた。

「これ、もしかして『ヒトガタ』？」

「ああ、そうだ」

ヒューゴの質問に短く答えるヴァンに、レラが再び首を傾げた。

「『ヒトガタ』？ 何それ？」

「古い土地に伝わる呪いの一種だよ。形代かたしろとも言っただけど、人間の代わりに厄災を引き受けてくれるって言われているんだ」

ヒューゴの説明に、ヴァンがもう一度頷く。そして、腰から小振りのナイフを取り出した。

「ドーラの村では、この『ヒトガタ』に自分の血で名前書いて火で燃やすことで、『ヒトガタ』がその者の魂の一部を預かり、火の神に入山の許しを請いてくれると伝わっているんだ。逆に、それを拒めば自分の命を火の神に奪われるとも言われている」

ヴァンはそれだけ説明すると、右手の籠手を外して、その人差し指にナイフで小さな傷を付けた。赤い鮮血が、ジワリと滲む。しかし、ヴァンは躊躇することなくそれを紙人形に押し付け、自分の名前を書き、それを今しがた焚いたばかりの炎の中に放り込んだ。

「へえ。そういう呪いがあるのね……」

レラもヴァンに倣いながら、自分の名前を渡された『ヒトガタ』に書き、それを炎の中に放った。続けて、ヒューゴも同様に『ヒトガタ』を燃やす。

「うし。二人の分は燃えたな。……ヒューゴ。悪いけど、テントの中にレクサーラの支部から届いている支給品があるはずなんだ。ちよっと確認してもらっていいか？」

「あ、うん。いいよ」

『ヒトガタ』が全て燃え落ちるのを見届けると、ヴァンはヒューゴにそう頼んだ。ヒューゴは二つ返事でそれを了承すると、一人テントの中へと入っていく。

あとは、アレンが『ヒトガタ』を燃やすだけだった。しかし、アレンは名前を、それ以前に籠手すら外さずに、『ヒトガタ』を手中で玩んでいる。

「へええ〜。こういうしきたりってあるところはあるんだな〜。ってか、散々村の連中から酷いことされてんのに、こういうのはきちんとして守るのな。結構意外だぜ」

「もたもたしてねえで早く名前書いて火に放り込め。ちゃんと燃えないと、意味がないんだからな」

おどけながら話すアレンに、ヴァンが少々きつい口調で言った。

だが、アレンは『ヒトガタ』に名前を書こうとしない。『ヒトガタ』を掴むように持つと、呆れた声でヴァンに話しかけた。

「大体さあ。お前マジでこれ信じてんの？ 古いつつっても、ただか五百年程度の歴史なんだろ？ それを古いしきたりって言われども、そんなに実感分かねえよ」

「ちょ、アレン！」

アレンに、レラが抗議の声をあげた。しかし、それでもアレンは『ヒトガタ』に名前を書く気配すら見せようとしない。

アレンはしばらくして、小さくため息をついた。

「なあ、ヴァン。お前は何でこのしきたりに大人しく従う？ お前なら、こういうのはあんまり信じないで、むしろ否定したがりそうなくちだとおれは思ってたんだけどよお」

「……………」

ヴァンは、答えない。アレンに背を向け、燃える炎をじっと見つめている。

「……………お前、ここに来てから変だぞ。何を隠してる？ 何を言わないでいる？」

「ちよっと、アレン。今はそんな話」

「レラは黙ってる」

レラの制止を上から押さえこむように、ピシヤリとアレンはレラに言い放った。その言い方に、レラは思わず口を噤む。

アレンは普段は軟派でかなり自己中心的な振る舞いをしてはいるが、実際には仲間を想い、更にはその内に潜む『何か』を見抜く鋭い観察眼を持っている。そして、何より頑固だった。しかし、今回は一体何を嗅ぎつけているのだろうか。

「なあ、ヴァン。お前は一体おれたちに『何』を隠しているんだ？
……………れよ」

アレンの言葉に、ヴァンが小さく何かを呟いた。聞き取れない。アレンもそうだったのか、もう一度言葉を重ねた。

「ヴァン。おれたちは『獵団』^{チーム}なんだぞ。隠し立てとかは
「黙れよ！」

突然、ヴァンが吼えた。振り向いたその顔には怒りが満ち満ちている。ヴァンはアレンの傍まで早足で歩み寄ると、その胸倉を掴んだ。

「黙ってやれ！ しきたりはしきたりだ！ この山で死にてえなら止めはしねえよ！ でもな、死にたくなきゃやるしかないんだ！」

ヴァンの言葉に、今度はアレンの手がヴァンの胸倉を掴む。

「ああ？ ワケ分つかんねえ！ そのしきたりとやらに従わなかった奴がまるで死んじまったみてえな」

「死んだんだよ！ オレの片割れと母さんは……………それをやらなかったから……………『アイツ』に、殺されたんだ……………！」

「んな……………！？」

ヴァンの咆哮に、アレンの表情が固まった。信じられない。とても言いたげな顔で、ヴァンを見ている。一方ヴァンは、荒く呼吸をしながら、鋭い視線でアレンを睨みあげていた。

と、そこへ、支給品を手にしたヒューゴが、テントの中から出てきた。

「支給品、そんなに数が多くないみたい。とりあえず、クーラード

リンクは各々に持てる限りの数は用意してあるみたいだけど……って、どうしたの、二人とも!？」

事の一部始終を知らないヒューゴは、今にも喧嘩を始めそうな二人の状態に目を丸くしている。しかし、ヒューゴの登場に落ち着きを取り戻したのか、ヴァンはゆっくりと一度だけ深く息を吐くと、胸倉を掴んでいた手を離し、アレンから視線を逸らした。

「……とにかく、名前書いてさっさと燃やしてくれ。グラビモスの居場所ならもう視えているからよ……」

それだけ言うと、ヴァンは一人火山の入り口に向かって歩き始めた。途中で、ワケが分からない。とでも言いたげなヒューゴの肩を叩き、二人で山道に入る道に向かって歩いていく。

一方、アレンはというと、右手に『ヒトガタ』を握りしめたまま、ヴァンの背中を目で追っていた。その後ろで、レラも同じように目を丸くしてヴァンの背中を見ていた。

「アレン……。今、ヴァンが……」

「……どういう、意味だ……?」

二人の聞き間違いでなければ、最後のヴァンの咆哮には、謎めいた言葉が含まれていた。

オレの片割れと母さんは……『アイツ』に、『殺された』んだ……。

『アイツ』とは、いったい誰なのか。

『殺された』とは、どういう意味なのか。

二人の疑問と不安を象徴するかのようには、ドーラ火山の頂上には暗雲が立ち込め始めていた。

第三十四話 古いしきたり（後書き）

はい。今回の狩りのコンセプトはずばり！

ガノス コメディタッチ

グラビ シリアスタッチ

です！ ガノスは十分面白おかしく書く分、ヴァンの秘密に迫るグラビ戦は、完全シリアスタッチでお送りする予定満々です！

この話は、連載当初から決めていた話なので、今から文章に起こすのにワクワクしております。

ガノス編では、双子と猫が大活躍します。

グラビ戦では……果たしてどうなることやら（オイ

原作のモンハンにはない要素も絡めて行こうと模索しております。

せめて、今回よりは早いうちに更新する予定でありますので、どうか長い目で待っていてください！（8月より交代勤務に入り、時間に余裕もできるかと思われるので……）

では、また次回！

第三十五話 流星を伴いしもの（前書き）

お久しぶりです。

結局またほぼ1ヶ月ぶりの投稿となつてしまいました。

交替勤務に入り、夜勤明けの生活リズムガタガタの旅がらすです。

しかも、何故かシフトと資格取得のための講習が見事にダブルブッキングしまくっているせいで、公休の振り替えやら何やらがたくさん発生し、16日までの間、会社に出勤するのがたったの二日間と言つとんでもない状態に……。

わ、私のせいじゃないですよ。私は普通にお休みを振り替えただけなのですよ。

さて、今回も原作ではあり得ない戦い方が出てきます。自由人の作者です。

それでは、第三十五話。スタートです。

第三十五話 流星を伴いしもの

火山。

その環境は、最早常人が呑気に過ごせるものではない。

一言で言えば、過酷すぎるのだ。

気温は常に昼間の砂漠よりも高く、更に火柱を上げる噴火口などはそれ以上になることもある。そんな地帯に鎧を纏って入るのだ。熱が鎧の内側と肌の間を籠り、否応なしに体力はゆっくりと蝕まれていく。

炎天下の日の下、サウナスーツを着せられて歩かされているのを想像すれば良いかもしれない。火山とはまさに、そのような環境なのだ。

とある調査師が雪山の万年氷から採取される『氷結晶』を、様々な物質の効用を引き上げるという特殊な酵素をもった『にが虫』を混合させて水で溶いた『クーラードリンク』を発見しなければ、おそらく人は火山に入ることすら儘ならなかったであろう。

しかし、それも一時の気休めでしかない。その効能も、持って二、三時間が限界であろう。

だからこそ、火山でのクエストでは短時間で攻略しなければならぬ。クーラードリンクも、ハンターズギルドの規制によって持てる数が限られているのだ。

ハンターたちの間では、火山はこうも呼ばれていた。

『火山とは、最も過酷であり、最もハンターとしての才を見られる場所である』

と……。

レラは、集中していた。必要のない情報を自分の内側から消し去る。

静かに、冷静に。心を乱さず、ただ、己の感覚だけを頼りにするのだ。

「レラ！ そっちに行ったぞ！」

幼なじみの声が、レラの耳を叩いた。続けて聞こえてくる、小さく且つ連続的な地鳴り。こちらに向かって来ていた。

分かっている。少し静かにしてくれ。

レラはそう心の中で呟くと、左の腰元に右手をやった。そこには、いつもは背中にぶら提げているはずの相棒がいた。

自分の真正面に向かって接近してくる音。レラは右に一歩だけずれてそれを往なす。

「……………せいっ！」

音が自分の横を通り過ぎる数瞬前に、レラは真っ赤な『覇気』を纏わせた『黒刀【弐の型】』を素早く抜いた。そこから再び鞘に収まるまでの時間は、ほんの一瞬。音は自分の真横を通り過ぎ、しばらくして地を滑る音と砂埃を舞い散らせながら止まる。

「やったのか!？」

続けて、弓を構えているであろう少年の音が聞こえてきた。確かに、『アレ』を初めて見た者ならば、分からないのも無理はない。しかし、レラの手の中には確かな手応えがあった。

一瞬の間を置いて、『黒鎧竜』グラビモス亜種の左足から、血飛沫が舞った。続けて、グラビモス亜種の口から苦悶の咆哮が轟く。流石に『鎧竜』の二つ名は伊達でなく、いつもと比べて感覚は弱かったが、それでも相手に与えたダメージは少なくなかった。

『居合』

そう呼ばれる技術がある。居合術、抜合、居相、鞘の内、抜剣などとも呼ばれるが、それは西域の更に西、もしくは極東と呼ばれるかつて存在した小さな島国で発展した護身用や危機回避のための技術である。

『弥和羅（やわら、柔術）と兵法（剣術）との間今一段剣術有る可しと工夫して、刀を鞘より抜くと打つとの間髪を入れざる事を仕出し、是を居合と号して三尺三寸の刀を以て、敵の九寸五分の小刀にて突く前を切止る修業也』

間合いを長く取る必要のある長刀を以って、相手が間合いを詰めてきた際にそれを打ち破る動作。それが『居合』である。

ドンドルマでの修業時代、師と仰いでいた太刀使いのハンターにその技術を教わったレラは、わずか半年でその技術を体得した。

元々の武器との相性も良かったのである。初撃と発剣には速度も伸びも申し分ないものの、片手持ちで放つ動作故に諸手持ちよりも威力の低い『居合』であるが、レラはそれを『覇気』を瞬間的に最高出力で纏わせることにより、解決させた。

火球や光線を放つ以外は、モンスターの攻撃動作は実に単純だ。自分の体を武器にする以外に術を持たない彼らと対峙するにあたり、レラにとって間合いの調整が難しい太刀の威力を申し分なく発揮する術を持つことは、絶対条件であったのだ。

師匠に教わり、それを見事体得して以来、『居合』はレラにとって一撃必殺の『刃』^{やいは}となっていた。

「ナイス、レラ！」

そう言いながら、『黒刀【弐の型】』を鞘に納めるレラの横を、『バサルシリーズ』を完全装備した青年　アレンが駆け抜けていく。

アレンはそのまま、背中に背負っていた『フルフルホルン改』を抜き放つと同時に時計回しに振り回した。『フルフルホルン改』は

グラビモス亜種の負傷した左足を捕らえると、紫電を走らせながら掬うようにその巨体のバランスを崩させる。

痛みに悶えたばかりのグラビモスにとって、更なる追撃は辛い。成す術もなくグラビモス亜種はその場に転んでしまった。

グラビモス亜種の右側頭部に、大きな錨を模した『イカリハンマー改』を両手で構え、思いつきり腰を捻った緑色の青年が待ち構えていた。

「これでも、喰らええっ！」

緑色の鎧『レイアシリーズ』を身に纏った青年　ヒューゴが、ハンマーを横に振るった。それは、溜めに溜めた力を爆発させてグラビモス亜種の顎を捕らえる。

元より、人並み外れた膂力を持つヒューゴが更に溜めた力を爆発させたのだ。超重量を誇り、全武器中最高の攻撃力を誇る鎚ハンマーを使ったヒューゴの一撃は、グラビモス亜種の顎をまるで玩具の振り子のように左右に揺らした。

脳を狙ったわけではないにも拘らず、グラビモス亜種は何とか立ち上がるものの、その場でふらついている。眩暈を起こしているのだ。

全ての生物は、『核』コアと呼ばれる一本の線を持っている。

『正中線』せいちゅうせんとも呼ばれる、生物体の前面・背面の中央を頭頂から縦にまっすぐ走るそれは、所謂『急所』の集まりでもある。脳天、額、顎、喉元、頸椎、心臓、エトセトラ……。

それは、生物の命を司る他、生物のバランスを保つ役割をも担っている。

試しに、『顎を引き、背筋を伸ばして立った状態』と、『顎を突き上げて後ろに反れた状態』とを比べてみると良い。どちらがバランスを保ち続けていられるか、一目瞭然である。

更にそこで顎を誰かに軽く押されてみれば、もっと簡単に結果は

出る。前者は耐えきることができるとは、後者は対応することも儘ならないうちに地に伏せるであろう。

つまり、ヒューゴはそれを利用したのだ。顎に振動を加えれば、正中線上でその真上に位置する脳も同じように振動が加わる。頭を直接狙うよりも効果や威力は低い、脳震盪に近い現象を起こすことが可能なのだ。

怪物モンスターと言えど、根っこの部分は人と同じ生命体ではない。いくら頑強な甲殻を持っていても、内側に伝わる攻撃までは受けきれないのだ。

「レラさん、ヴァンくん！」

「ええ！」

「分かってる！」

ヒューゴの声に、レラとヴァンが答える。グラビモスの背後にいたレラは、柄に右手を添えたまま駆け出すと、再び『黒刀【弐の型】』に覇気を纏わせた。グラビモス亜種の尾の真下に立つと、足を開き、腰を落として重心を下にする。

「せいっ！」

再び『居合』の構えを取ったレラが、上に向かって太刀を振り抜いた。

甲殻と甲殻の繋ぎ目を狙ったそれは、銀冠サイズに匹敵するであろうグラビモス亜種の尾を、完全とは行かなかったが半分近く抉る。いくら『鎧竜』と呼ばれるほどに硬い甲殻を有していても、体全体を完全に覆いきつてはそれはただの錘おもりであり、動きを阻害させる原因でしかない。そのために、どうしても甲殻を何枚かに分裂させる必要がある。そしてそれは、唯一ヒトが刃物でその鎧を看破する糸口であった。

体のバランスを保つために必要な尾を抉られ、グラビモス亜種が苦しげに吼える。次の一撃に備えるため、レラは素早くそこから右側に退避した。

「ほれもっつちよ！」

続けて、もう一度アレンの『フルフルホルン改』がグラビモスの左足を捕らえた。傷口に『フルフルホルン改』から発せられる紫電がグラビモス亜種の体を突き抜ける。

外部から神経に電撃を喰らったグラビモス亜種は、一瞬だけ体を硬直させた。電気信号によって筋肉の収縮や肉体の動きの制御を行う神経を損なわれた巨体は、小さな存在の振るった棒きれによって再び左側に倒される。

「そんでもって更にもういっちょっと！」

そう言いながら、ヴァンが『ワイルドボウ』から矢を放った。ババコンガの丈夫な毛に強靱な筋繊維、更にあの大重量の巨躯を支えていた骨を用いた弓から放たれた矢は、先ほどレラが斬りつけた尾の傷口の中央に深く埋まる。

続けて、その両脇に二本ずつ、計五本の矢がグラビモス亜種の尾レラが斬った箇所に沿って見事一直線に埋まった。

「ヒューゴ！ ぶっ叩け！」

「了解！」

そこへ、旋回していたヒューゴが、先ほどまでレラが立っていた場所で止まり、その場で腰を捻って鎚に力を込め始めた。

最高にまで溜められた臂力は、グラビモス亜種が立ち上がるうとした瞬間、爆発する。

「千切れるおおっ！」

斜め下から振り上げられた『イカリハンマー改』は、見事にヴァンが埋め込んだ五本の矢すべてを捉えた。ブチブチブチ。と、筋繊維と肉が引き千切れる音が周囲に響き、尾に埋まっていたはずの矢が空に向かって飛び抜けた。

それを後ろから見ていたヴァンは、小さくガッツポーズを取った。

「よっしゃ！」

「まだまだよ！ まだ骨が残ってる！」

喜ぶヴァンに対し、険しい表情でヒューゴが叫んだ。ヒューゴの言う通り、グラビモス亜種の尾はまだ完全に切断するまでには至っ

ていなかった。外殻とその内側の筋繊維は見事に切れていたが、唯一骨だけがそれをまだグラビモス亜種の身体に繋げていた。

「もう一度……って、あ、あれ？」

もう一撃。そう思ったヒューゴはハンマーを再び構え、腰を捻ろうとした。しかし、先ほどまでの力はどこに消えたのか、突然ヒューゴはその場にへたりこんでしまった。

「ヒューゴー！」

ヴァンの中に、焦りが生まれた。急いでポーチから掌サイズの玉を取り出し、グラビモス亜種の鼻先に向かって投げつける。不憫なことに、何度も転がされ、ようやく立ち上がったグラビモス亜種は、今度は眩い閃光に目を焼かれ、その場で地団駄を踏んだ。

火山の中腹でグラビモス亜種を発見してから、かれこれ三時間が経過しようとしていた。ヴァンならまだあと半日近くは耐えられるが、ヒューゴは違う。

ヴァンの記憶違いで無ければ、ヒューゴは今回が初めての火山での狩りだ。普段と同じ加減で力を使ってはすぐに消耗してしまうことを失念していたのだろう。その証拠に、ヒューゴは荒々しく肩を上下させていた。

咄嗟にヴァンが投げた玉を閃光玉だと気づいていたのだろう。ヴァンよりも先に、アレンとレラがヒューゴの元にたどり着いていた。アレンがヒューゴに肩を貸し、レラは再び『居合』の構えを取る。

「せええいっ！」

レラの放った一閃が、今度こそグラビモス亜種から尾を分断した。しかし、痛み悶えながらもグラビモス亜種は何とかその場に踏み留まり、そのまま、首を大きく空にもたげる。そこから放たれるのは、『如何なる地形をも無視して貫通する』という、ある意味超無慈悲なまでの威力を秘めた熱線だ。

「ちよ、のわあああっ！」

幸か不幸か、それはヴァンのすぐ横を突き抜けた。そのまま、熱線は背後にいたアプケロスやランゴスタを文字通り『焼いた』。

「まじかよ……！」

久しぶりに見たが、相変わらず無茶苦茶な威力だ。あんなものを『バトルシリーズ』などで喰らった日には、二度と立ち上がることもできないであろう。

「おい、ヴァン！ もたもたすんな。一時撤退するぞ！」

そこへ、アレンの怒号がヴァンの耳を叩いた。見ると、ヒューゴに肩を貸すアレンと『イカリハンマー改』を抱えたレラは、既に頂上へ続く道に向かって駆けていた。

下山方向には未だ閃光玉による目眩ましから解放されないグラビモス亜種がその場で旋回したり地団駄を踏んだりしている。ヒューゴの体調を考えると下山したい気持ちがあつたが、致し方無い。ヴァンは小さく舌打ちをすると、アレンたちを追いかけようと一歩踏み出した。

「……！？」

瞬間、ヴァンの背中に悪寒が走った。ヴァンの中にある、『生物としての本能』が、何かをヴァンに警告している。しかも、何故かヴァンは、この悪寒を『よく知っている』ような気がした。

（何だ、この感じ……？　すごく、ヤな気分だ……）

「ヴァン！　死にてえのか馬鹿野郎！」

「急いで！　グラビが回復しちゃう！」

二人の声に、ヴァンの意識が元に戻る。後ろでは、ようやく目が回復したグラビモス亜種が、怒りの咆哮を上げながらヴァンたちの方を振り向いた。

「やっば！」

とりあえず先ほど感じた悪寒を頭の隅に追いやり、ヴァンはその区域から逃げるように駆け出した。

「……面目ない」

「謝るくらいなら、早く回復しろ。お前は攻撃の要なんだから」

ヴァンによってクーラードリンクで携帯食料を無理矢理流し込まれたヒューゴが、済まなそうに項垂れている。それに対しヴァンはいつものように悪態をついた。しかし、そこには親友を気遣う少年の不器用な一面が見てとれる。

「そういえば、ヒューゴは今回がはじめての火山だったんだっけ。ごめん。私たちも全然気遣ってあげられなかったわ」

「だな。はじめてじゃ、力の加減が分かんなくてもムリねえよ」

こちらもそろそろ効き目が切れ始めたのか、二本目のクーラードリンクを飲みながらレラとアレンがその場に腰を下ろした。

レラは先ほどの戦いで血潮を浴びた『黒刀【弐の型】』を砥石で研ぎ、アレンは『フルフルホルン改』を吹いて音の確認をしている。

『狩猟笛』は、本来は前線タイプではなく、支援を得意とする得物だ。打撃武器としても使えるし、その威力もハンマーと比べても遜色ない。しかし、あまり酷使すると、チューニング変形などによって音が出なくなってしまう。なので、狩りの間と言えど、調律は必須であった。

辺り一帯に、不気味としか言い様のない音色が響き渡る。洞窟の奥から何かを誘うような、深く、高音なのに暗い音色。ヴァンはフルフルとの攻防を思い出した。

そこで、ヴァンは自分の身体に起きた変化に気づいた。何かしたつもりでもないのに、身体の内側から力が湧き上がるのを感じる。

「これ、一体……」

「身体が、軽い……？」

ヒューゴも気づいたらしい。目を丸くしながらその場に立ち上がると、小さく首を傾げている。

その横で、研ぎ終えた『黒刀【弐の型】』の刃を見ていたレラが、

何でもないように答えた。

「あ、ヴァンとヒューゴははじめてだったわね。狩猟笛の旋律効果よ。多分、【強化】と【強走効果】かしら」

「お、当たり。効果は大体三時間くらいだけど、重ね掛けしたからもうちょい持つと思うぜ」

『フルフルホルン改』から口を離れたアレンが、レラの言葉に得意気に頷く。調律ついでに、狩猟笛の本領を發揮してみた。ということだろうか。

狩猟笛の奏でる旋律は、耳から脳に伝わり、自律神経系の一つである交感神経に働きかけ、アドレナリンの放出を促せる。それにより、普段はヒトが無意識のうちに抑えている制御機構リミッターを無理矢理にこじ開けるのだ。

筋力を上げるのではなく、元ある力を内側から引き出す。ある意味、催眠に近い作用である。

「でも、あんまり連続で使いすぎると、聞いたヤツの寿命はどんどん縮んでく。当たり前だよな。制御してるイコール危険って意味なんだから」

だからこそ、解けたときの反動も大きい。

アレンの言葉の通り、旋律の聞きすぎによるアドレナリンの異常分泌は、身体に支障を来しやすくしてしまう。ある程度の間を置いて、アドレナリンの分泌を抑えなくてはならないのだ。

「ん。でも助かったよ、アレンくん。……また、足手まといになるところだった」

旋律効果によって、力が戻ったのだろう。ヒューゴがゆっくりと立ち上がった。

「グラビの尻尾は斬った。回転動作と尻尾による薙ぎ払いはもうないよね」

「でも、油断は禁物よ。まだ睡眠ガスと熱線がある」

『鎧竜』グラビモスの最大の武器は、体内に存在する特殊な器官で生成された、催眠作用を持ったガスの放出。そして、先ほどヴァ

ンを掠めた熱線だ。

後者の熱線は新陳代謝の一環でもあり、過熱した身体を冷やす働きを持っている。また、同様に熱線を吐いた後で全身から爆炎を噴き出すこともある。

正に、近遠どちらの距離をも征服する能力を持っているのだ。

「救いは、前動作があることだな。いきなりあんなもん放たれたら、避けきれねえ」

「ヴァンの場合は、突進にも注意すべきだ。動きはレイアなんか比べると遅いけど、ホーミング能力は高いぜ」

ヴァンの言葉に、アレンが口を挟む。確かに、あの超重量の巨体でぶつかってこられたら、人間などひとたまりもない。足の大きさだけで、ヴァンを軽く超えるのだ。

「とにかく、向こうも相当に体力を削られているはずよ。次にあったとき、勝負は決まるわ」

レラの言葉に、三人は頷いた。ヒューゴとアレンの武器によって、既にグラビモス亜種の腹部の甲殻もかなり傷ついて皮下組織が曝け出されているのだ。あの状態では、マグマに潜るだけでかなり辛いはずだ。

次が、最後の決戦となる確率は高かった。

「……それにしても、酷い雲だね。雷雲かなあ……」

そこで、ヒューゴが心配そうに空を仰いだ。確かに、ドーラ火山を包むように、空には暗雲が広がっている。

「ホント。酷い雲ね。一雨来そうな雰囲気だわ」

「にしちゃあ、空気は乾いているけどな。こういう時って、湿度は高いもんじゃねえのか？ まあ、どっちにしろ、あんまし雨は歓迎できねえけどな」

アレンとレラも空を見上げ、不安そうな言葉を漏らした。

しかし、ヴァンは空を見上げようとはしなかった。脳裏に、十二年前の記憶が甦る。

ねえ、やっぱりかえろうよお……。

バカいうなって！ もうすぐちようじょうなんだよ！ 『ひのかみさま』におねがいしなきゃ、おかあさんはしんじやうんだ！ でも、なんか、こわいんだ……。ぼくらのうしろを、ずっと『なにか』がついてきている……。

ええ？ たしかにすっこいくろいくもでそらはいっぱいだけど、ほかにはなにもいないじゃないか。

それがおかしいんじゃないか。どうして、何も『いない』のさ……。なのに、どうしてこんなものが『みえる』の……？

なんだよ、わけわつかんないなあ！ じゃあおまえだけかえればいいじゃん！ ぼくはやだからな！

……。
な、お、おこったってむだだぞ！ たしかにおまえのほうがおこつたらこわいけど、でも、ぼくはぜったいにちようじょうまでいくってきめたんだから！

……。
おかあさんのびょうきを、なおしてくださいって、むらびとたちが、おかあさんにやさしくしてくれますようにって、そうおねがいするって、きめたんだ……！

……。わかった。いこう。ちようじょうまで……。

かつて、まだ『二人』だったころの最後の記憶を思い出していたヴァンは、誰に言うでもなく小さく呟いた。

「あのときも……こんな空だった……」

「ねえちよつと！ ヴァン！」

「っ！？」

突然、視界いっぱい銀髪の少女が入り込んできた。びっくりして顔を引きつらせると、レラが不思議そうに何度か瞬いているのが見えた。

「やだ。こんなときに何ボケケツとしてるのよ。天气が崩れそうだ

から、早く追いかけてよって言ったの、聞いてた？」

「え？」

言われて、ヴァンは辺りを見回した。既に、アレンとヒューゴは頂上に続く道で二人が来るのを待っている。どうやら頂上に行く一歩先の区域で待ち伏せを行うようだ。

グラビモスは純度の高い鉱石を好む。回復するためにおそらくそこに向かうはずだとヒューゴが提案したのだろう。慌ててヴァンは立ち上がった。

「え、あ、わりいわりい。すぐ行く……」

「もう、しつかりしてよね！」

レラの憎まれ口を適当に無視しつつ、ヴァンは一歩前に踏み出した。

その瞬間、ヴァンの体を『恐怖』が走った。

「……………!!」

ビクリと体を大きく震わせたヴァンは、すぐさまに空を見上げた。すぐ前を歩くレラが、ヴァンの異変に気づいて振り向いてくる。

「？ どうしたの、ヴァン」

レラの声も、既にヴァンの耳には届いていなかった。ヴァンの『千里眼』が、グラビモスではない、別の『何か』が空を飛んでこちらに向かってきているのを捕らえる。

それは、ヴァンがよく『知っている』ものだった。

「そんな……なんで、今……？」

「ヴァン？ ねえ、どうしたのよ、ヴァン」

レラが近づいてくる。しかし、ヴァンは空を見上げたまま固まっていた。

「おーい！ ヴァンくん、レラさん！ どうしたのー？」

ヒューゴが遠くから二人に声をかけてきた。しかし、それでもヴァンは一歩もそこから動かない。

「……お、おい！　なんだ、アレ！？」

そこで、アレンが空を指差した。ヒューゴとレラが、その声に反応して空を見上げる。

その瞬間、雲から雷鳴が迸った。

続けて、それに呼応するかのように火山の噴火口から溶岩が飛び散る。

「きゃあっ！」

噴火口から発せられた溶岩が、レラとヴァンの目の前に落ちてきた。更に、その後ろにあった岩の壁を破壊する。断崖絶壁と呼ぶべき光景が、二人の後ろに広がった。

「レラ！　ヴァン！」

アレンとヒューゴが二人に向かって駆け出した。しかし、四人の間に空から舞い降りてきた『何か』が割って入ってくる。

『それ』は、灼熱のマグマによく似た『龍』だった。赤と言うより赤黒い甲殻に覆われ、後肢のみで直立姿勢をとる姿は、それまで彼らが見たモンスターとは違い、『異様』そのものだった。

広げられるのは、あまりに巨大な翼。後肢とともに直立する体を支えるのは、その巨大な胴体に見合うほどに長い尾。下顎が発達したその口からは、幾本もの鋭い牙が垣間見えている。その上　頭部にあるのは、まるで王冠を模したかのような四本の角。

「……何、コレ……。こんな龍、見たことない……」

『それ』に見下ろされ、レラは呆然と立ちすくんでいた。

力が入らない。まるで『生氣』を目の前にいる龍に吸い取られているようだ。

その巨体にしてはつぶらな瞳をしていたが、それだけでもすべての生き物を圧倒させる『何か』を『それ』は放っていた。

レラは、何とか目を動かしてその巨体を見つめた。赤黒い甲殻はどこか『自然』とは違う何かをそこに孕んでいるようだ。何故かは分からないが、それはレラがよく知っているものようだった。

「……………」

そこでレラは、龍の脇腹の辺りの甲殻に『違和感』を覚えた。

（何だろう。よく見えないけど、あれは甲殻じゃない。何か、明るい色の……………毛？）

脇腹の辺りに生えた、一房の毛。どこかで見覚えのあるような……………。

ミカン色の、綺麗な髪の毛だった。

「え……………!？」

レラが髪を見て絶句するその横で、ヴァンが突然その場に蹲った。

「ヴァン!？」

「いやだ……………ごめんなさい……………ゆるして、おねがいだからゆるしてください……………」

レラの声も聞こえないのか、ヴァンは駄々を捏ねる子供のようにその場に蹲ったまま頭を抱えて泣き出してしまった。突然、子供に返ってしまったように泣きじゃくるヴァンに、レラの思考が追いつかない。

「ねえ、ちょっと、ヴァン! しっかりして!」

「いやだ……………どうして……………どうして殺すの……………おねがい……………やめて……………」

「ヴァン! ねえ、お願いだから応えて!」

正体不明の龍の前に、蹲ったまま自分の声に伝えてくれないヴァンに、レラは焦りを覚えた。続けて、ヴァンの呼吸が荒々しくなっていく。

(まずい。こんなところで過呼吸なんて……)

しかし、レラに考えている時間などなかった。

「レラさん！ ヴァンくん！」

響くヒューゴの怒号。目の前にいた龍が、劈くような咆哮を發したのだ。反射的に耳をふさいでも、その威力が振動となってレラの体を襲う。

「っあああああ!？」

続けて響くのは、ヒューゴの叫びに近い声。次の瞬間、レラとヴァンの周りに隕石が降ってきた。

「きゃああああ！ ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！ お願い！ 目を覚まして！」

もつなりふり構っていらなかった。レラは年甲斐もなく泣き叫びながら、ヴァンの方を揺らす。しかし、ヴァンは相変わらず蹲ったままだった。呼吸も酷い。

そして、

「馬鹿野郎！ 走れえええ!!」

アレンの怒号が聞こえた瞬間、レラの体に衝撃が走った。

「あっ……カハッ……」

肺に溜まっていた空気が、一瞬で外に吐き出される。そこで、レラは自分が龍の尻尾によって吹き飛ばされたのだと理解した。『桜火竜』の素材でできた鎧ですら受け止めきれないほどの衝撃が、少女と少年の身体をいとも簡単に宙に放り出した。

その先にあるのは、岩の壁を失った、断崖絶壁。

標高二千メートル付近の場所から、一気に急降下ダイブしていくのを、肌で感じた。

「レラーッ！」

アレンの叫び声が聞こえたのと同時に、レラの意識は途切れた。

第三十五話 流星を伴いしもの（後書き）

最後に出てきたあ奴、何者なのでしょわかねえ……。
あえてここでは公開しない旅がらすです。

読者様たちの想像にお任せします。そのうち公開しますのでw（そのうちかよ！）

さて、今回出てきた『居合い』とハンマーでの尻尾切断大作戦（結局切れていませんが）はいかがでしたでしょうか？

ヒューゴのところまで出てきた『核』の話は、旅がらすが高専時代にやっていた合気道を参考にしていきます。実際にやられてみると分かりますが、結構重要なんですよ、アレ。

『狩猟笛』の解説にも独自の設定が盛り込まれています。【自分強化】の旋律は、ただ単に【強化】の旋律に変更しました。攻撃がはじかれないくらいに筋肉を強化する。と言っイメージを持っていただければ良いかと思えます。

さすがに、攻撃力を上げても、防御力や耐性までは強化できるはずがないと思うので、その旋律は一切使わない予定です。

あり得ない技術である分、自分である程度説明できないものは省いていますので。双剣の【鬼人化】とかどうやって説明せいつちゅーねん。まあ、おそらく太刀の【練気】のときのように『素質』と言っ言い方で纏めるのでしょうけど……。ボウガンの『回復弾』とか『硬化弾』、それに『鬼人薬』は説明できても『硬化薬』は絶対に無茶だあああ。

……最近、モンハンの設定を一生懸命こじつけでやっている自分があります（汗）

そろそろいい加減長くなってきたので、今回はこの辺で。
では、三十六話でまた〜。

次回はちよつと時間巻き戻って、ガノス戦です。

第三十六話 乱心する商人と空飛ぶ爆弾狂（前書き）

後書きに馬鹿ばかり書いていたので、こちらで真面目な話をば。

今回の話はタイトルのまんまです。

このネタが書きたかったがために書いたガノス戦です。
マジです。

マジなのです。

……え、どこが真面目な話だった？

まあ、そこら辺はあまり気にしないでくださいw

そんな感じで第三十六話です。

あ、できれば、『爆弾狂』と書いて『ボマー』とお読みください。

8/27 修正しました。

ミラ系すべて『祖籠』だと勘違いしていた大馬鹿者ですorz

第三十六話 乱心する商人と空飛ぶ爆弾狂

『水の王者』ガノトトス

瑠璃色に輝く鱗を持つ、とてつもなく巨大な魚竜だ。彼らの生息する水中には、陸上と違って体重の制約が存在しない。そのため、時には飛竜を超える体躯を持つ者もいる。

断言しよう。ディアブロスやグラビモスが可愛く見えてくる。

ババコンガ？ ドドブランゴ？ 論外だ。

更には、その巨大な体躯から放たれる攻撃も、かなり桁違いと言える。グラビモス同様に『全ての地形を無視する』水圧を誇る水プレス、巨体から繰り出されるタツクル、そして、幾重にも生えた牙は、一度獲物を捕らえたら最後、相手が力尽きるまで決して離そうとしない。

縄張り意識の強いガノトトスは、時にはその海域に入ってしまった船を襲うこともある。そのため、ガノトトスは船の交通ルートに現れた際のみ、依頼の有無に関係なく狩りの遂行を許可する『第一級狩猟対象』に認定されていた。

ドーラの村からかなり離れた、もはや百八十度くらいの高位置にあるであろう海岸。近くに断崖絶壁とも呼べそうなくらいに高い崖が聳えているが、結構拓けたその場所です……、

「あら。ねえねえピリカちゃん。これってドラグライト鉱石じゃなあい？」

「まあ、本当ですわ！　ところでお姉さま、ワタクシこんなもので発見しましたのよ！　ほら、厳選キノコ！」

「あらあ。すごいわあ。確か近くにトウガラシが生えていたから、それでキムチを作れば素敵かもあ。……あら、あらららら？　これ、もしかしてエルトライト鉱石かしらあ？」

「うふふふ。この海岸、宝の山ですわ！　商人の血が騒いで騒いで仕方ありませんもの！」

何やら、ものすごく楽しんでいる二人の少女がいた。

何かがおかしい。今回のクエストは確か『ガノトトスの討伐もしくは捕獲』というクエストのはずだ。断じて素材ツアーなどではない。

「お二方、結構暴走キャラだったのニヤね……」

商人の血が騒いで仕方のない二人の少女　ピリカとノンノの様子に、レモン色の毛並みのアイルー、ナタリーは小さくため息をついた。

「ガノトトスが怒り狂ったもんニヤから逃げてみれば、今度はコレかニヤ……」

もう一つ、ため息。そう、数刻前までは、確かに三人でガノトトスと戦っていたのだ。

しかし、ガノトトスが怒り状態に入った途端、攻撃力が異常なまでに上昇し、現在の三人の装備では歯が立たなくなってしまったのである。やはり、あのガノトトスは上位クラスだったのだ。

そのため、一度立て直すために三人はガノトトスのいた海岸から少し離れた、この崖下まで逃げてきたのだ。

それが、幸か不幸だったのかは分からない。少なくとも、二人の少女には幸運だったのかもしれない。

たまたま偶然、崖下に落ちていた緑色の鉱石　ドラグライト鉱石と呼ばれるそれを見つければ、更に同時に、ピリカが小指ほどの小さなキノコ　特産キノコを見つけた瞬間、二人の表情が一

変したのだ。

つまり、狩人から商人の表情に変わった瞬間だった。

「コレって、所謂乱獲とかにならないのかニヤア……」

心配そうに呟くナタリーの視線の先には、荷車いっぱい詰まれた山菜や鉱石の類の山だった。そろそろナタリーが持参してきた狩りの道具まで邪魔だと言われそうだ。今のあの二人なら、言いかねない。

「ナタリーさん。申し訳ありませんが、その調合素材、少し降ろしていただけませんか？ コレが入りませんわ」

「あ、このトラップツールもお願ひねえ」

マジで言いやがった。しかも同時に。

「……分かったニヤ。……（旦那さんは絶対にこんなことはしないニヤ。旦那さんはもうちょっと節操ある採取を行うのニヤ。旦那さんならウチの調合素材が邪魔とか言わないのニヤ。絶対に言わないのニヤ！）」

小声でブツブツと本来の主人であるレラを思い返しつつ双子に悪態をつきながら、ナタリーは自分の調合素材を荷車から降ろした。

トラップツールやら腰のタル型ポーチには入らなかった爆薬などを荷車から少し離れた茂みに置こうとして……、

「あ、そこはまだ採取を終わっていないので、もう少し右の茂みに」

（……まだ採る気ニヤのか！？）

ピリカの発言に度肝を抜きつつ、ナタリーは小さく頷くと調合素材をピリカに指定された場所に置いた。ついでに、畏でも一つ作っておこうかとトラップツールに手を伸ばす。

と、そこで、耳を劈くような咆哮が海の方から聞こえてきた。

……海？

「まさか!？」

ナタリーが振り向いたのと、海からガノトトスが顔を出したのは、ほぼ同時だった。その吐息は、外気の気温がほんのり温かいにも関わらず、ほんのり白くなっている。怒り状態だ。

「こ、ここまで追いかけてきたのかニヤ!？」

首やら背ビレの根元やらに裂傷の刻まれたガノトトスは、間違いなく自分たちの狩猟対象のガノトトスだ。しかし、ここは先ほど殺り合った海岸から一、二キロは離れているはずである。キレたまま、ここまで追いかけてきたと言うのか。

「あらら。追いつかれちゃったわねえ」

「ああ、もう！　なんてタイミングですの!？　もう少しでこのお宝を全部持っていけましたのに！」

そこで、ようやく商人から狩人の顔に戻ってくれたノンノとピリカが、ナタリーの横に並んだ。二人とも、それぞれの武器を構えてガノトトスを睨み付けている。いろいろと突っ込みたい気を抑えつつ、ナタリーも背中からじゃんピツケルを抜刀する。

とは言え、

「さて、どうやって狩りますの？」

「さっきの討ち合いで、こっちの不利さ加減は身に沁みちゃったものねえ」

「ウニヤア。困ったものだニヤ」

そう、先ほどの討ち合いで、三人は自分たちと目の前にいるガノトトスとの圧倒的なレベルの差を思い知っているのだ。

ガノトトスの身体に刻まれている裂傷は、どれも浅い。休みなしに攻撃を続けても、雀の涙程度のダメージしか与えられていないのだ。

体躯がかなり大きいために、ノンノの大剣も立っている状態では切っ先が腹に届くのもやっと。ナタリーのじゃんピツケルも、ほん

のかすり傷を与える程度でしかない。ピリカの銃弾だって、弱点を集中して狙ってはいるが、ガノトトスの表皮を軽く抉るだけで、中にまでは到達していない。ダウンを成功させても、ダメージ自体は微々たるものだった。

自分たちの装備では、じり貧の戦いになる。そう判断せざるを得なかった。

だがしかし、

「ワタクシは、後ろから貫通弾で狙い撃ちを試みますわ。『火炎弾』の速射も背ビレにやってみます」

「ウチは爆弾と罠で動きを止めて見せるのニヤ！」

「じゃあ、わたしはナタリーちゃんが止めてくれたところを狙って溜め斬りをやってみるわねえ」

しかし、それでも自分たちは『狩人』^{ハンター}なのだ。

人々の生活を守るために、例えどれだけ不利な状況であっても、覆してやらなければならない。

三人はそれぞれの武器を手に、未だ水中でこちらを睨み付けているガノトトスに向かって駆け出そうとした。

その瞬間、ガノトトスが水中に潜った。

「え？」

「あらら？」

最初のように『Lv. 3 徹甲榴弾』を撃ち込んで陸上に誘き出そうと考えていたピリカは、ガノトトスの行動に拍子抜けしてしまった。隣にいたノンノも同様に軽く呆けている。そこへ、ナタリーの怒号が響いた。

「お二方！ ブレスなのニヤ！」

「っ！？」

「ちいつ！」

言われて気づいた。ピリカが水ブレスの射程範囲外に逃げようと

バックステップを取ったのとはほぼ同時に、ガノトスが再び水上に顔を出した。その口から放たれるのは、あまりにも無慈悲な『全てのあらゆる地形を無視する』超高圧の水プレスだ。

「くうっ！」

「きゃあっ！」

「ウニヤニヤ！」

横に薙ぎ払うように放たれたそれを、ノンノは大剣で何とかガードし、ピリカはどうか射程範囲外に逃げきり、ナタリーは小さな体軀を生かしてガノトスの水プレスを頭上に往なした。

先ほどまで何もなかった砂浜が見事に抉れていく様を見て、ピリカの全身に悪寒が走る。水と違って馬鹿にはいけない。一定以上の圧力が加わった水は、圧力の大きさによっては大砲に匹敵する威力を持つのだ。

例え、同様の攻撃手段を持つために水圧に強いダイミョウザザミの甲殻を持ってしても、無傷では済まないだろう。

「いつも思いますが、反則ですわ……」

ピリカが小さくそう悪態をついた時だった。

ドンガラガシャシャシャーン！！

盛大な音を立てて、何かが崩れた。一体なんだろうと全員で頭にクエスチョンマークを浮かべつつ、音源の方に目を向ける。

ピリカたちの荷車が、粉々になっていた。

文字通り、『粉々』だ。

「……………」
「……………」
「ウニヤ。確かに反則ニヤね」

まともに言葉を発せたのは、ナタリーだけだった。他の二人は、

何故かふるふると震えている。心なしか、そこには憎悪が含まれているようにも見えた。

「……あの、お二方？」

少しだけ嫌な予感がしたナタリーは、近くにいたピリカに話しかけ、近寄る。

「……ウギニヤ！」

近寄らなければ良かった。

ピリカがいつもの可愛らしい笑顔を一転させ、まるで般若のような形相でくつくつと笑っていたのだ。

断言しよう。普通、般若は笑わない。しかし、確かにピリカは笑っている。

ノンノの顔を伺う勇気が一瞬にしてナタリーの中から失せた。

「ぴ、ピリカ殿……？」

「全くもって本気でふざけていやがりますわねあの荷車に何が積まれていたか知っていていらっしやるのかしら厳選キノコですわよ厳選キノコ小指ほどの大きさしかなく採取に難しいわ見つけた途端モスのお腹に入ってしまうわでなかなかめんどくさい採取クエストの対象である特産キノコの中でも特に形や香りのよいキノコなんですわよその価値といえばたった一つで三万ゼニーにくだらない事だってありますのにそれにあれば鮮度が落ちやすいので野に生えた天然のトウガラシを使ってキムチにした方がお客様にも喜ばれ、更に値が張るといふ素敵な代物なんですわよそれをああも簡単に粉々にしておつてええ……」

ブツブツと何かを言っている。聞きたくない。自分が聞いているのは幻聴だ。ナタリーは耳を押さえようとした。

と、そこへ、いつの間にかやって来たのかノンノがピリカの隣に立っていた。もうその表情を伺う気力などナタリーには残されていなかった。

だって、ノンノからも計り知れないくらいに激しい憎悪が垣間見えたのだから。

「キノコだけじゃないわぁピリカちゃんあそこにはエルトライト鉱石も入っていたのよおエルトライト鉱石って知ってるかしらあ別名『緋鳶石』とも呼ばれる期待の新素材であのカブレライト鉱石よりも良質な金属が精製できるのよおつまりはハンターにかなりの高額で取引可能だいたいそうねえ拳大の大きさで一つ一千五百ゼニーはあるんじゃないかしらあでもさつき採れたのはだいたい拳よりも二回り以上は大きかった気がするし多分五千ゼニーはするわねえそれがつまりあんな状況ってことはもう完全に粉々だと思っしそれじゃあかき集めても金属が精製できないつまりは売り物になることなどもう二度とないということであ……」

もはや、何も言うまい。水ブレスの後でこちらを向かずに呆けているようにしか見えない三人を不思議そうに見ているガノトトスの視線だって、今のナタリーは完全に意識からシャットアウトしようとしていた。

不意に、ピリカがノンノを見る。ノンノも、ピリカを見た。

「お姉さま。確かガノトトスのトロって高級食材でしたわよね？」

「そのはずよお。それに、その更にも上に行く大トロは居住まいを正して食したいと言われるほどだわぁ」

「……トロってどの部位でしたかしら？」

「お腹よお。ちなみに、前の方が良いトロが取れるらしいわぁ」

「……決まりですわね」

「決まりねえ」

二人は不敵且つ美しく微笑むと、ランポスを見つけたリオレイアの如く鋭い眼光で背後のガノトトスを睨み付けた。ガノトトスは睨まれた瞬間にビククウと身体を奮わせる。

ビビッていた。

「生きている魚に用などない！ 貴様の腸抉り出し、頭の天辺から尾の先までの全てを売って売って売って売りつくしてくれろ！！」

キレた。

完全に、キレていた。

「コレでも喰らいなさいまし！」

ピリカの『メラルーラグドール』が火を噴く。そこから発射された弾丸は、ガノトトスの脳天に直撃すると、数秒後に盛大な爆発音を上げて爆ぜた。ボウガンの弾の中でも、特に高威力を誇る『Lv 3 徹甲榴弾』だ。

もちろん、そんなものをモロに脳天に喰らったガノトトスは音と衝撃と痛みに悶え、その場で大きく跳ねる。そしてそのまま、水中から飛び出して砂浜を這った。

「ぜええいつ！」

そこへ、ノンノの『カースオブキャット』が迫る。

どうやってガノトトスの着陸地点を予測し、先回りしたのかなどナタリーにもガノトトスにも分からない。だが、ノンノの立ち位置は見事にガノトトスの脳天にジャストフィットしていた。そのまま、細身の体躯からは信じられないほどの怪力が上乘せされた一撃がガノトトスの脳天を襲う。強固な鱗に覆われているため、斬ることはできなかつたが、それでもハンマーと同等の衝撃がガノトトスの身体には伝わっていた。

「お次はコレですわ！」

続けて、凄まじい速さで弾丸の雨がガノトトスの背ビレを襲った。放たれた弾丸『火炎弾』は、着弾と同時に幾本もの火柱をガノトトスの背中に形成した。

『速射』

ライトボウガンの最大の特徴である。機構については工房の企業機密のため公には言えないが、ある特定の弾 武器に使われている素材と特に相性の良い弾 を、本来にないスピードで複数発同時に発砲することができなのだ。

元来水中で生活するガノトトスにとって、皮膚の乾燥を助長させる火や電気は大敵だ。弱点でもある背ビレ近くに攻撃を受け、ガノトトスは苦しそうに悶えた。

が、しかし、

「う。結局倒すための決定打にはなっていないニヤね……」

遠目でナタリーはそう分析していた。

あの二人の連携は、見事なものだ。ナタリーが入る隙が見えない。むしろ、入ったら邪魔をしているかのような感覚にとられそうだが、それでガノトトスの体力を削れているかと問われれば、ナタリーは首を横に振るだろう。連携が取れている。だからと言って、それがダメージに繋がるわけではないのだ。

（外側からの攻撃は、鱗に弾かれてあんまり効いてないみたいニヤ。爆弾だって、ノンノ殿の大剣に比べたら雀の涙。唯一ピリ力殿の弾のみ相性が良いけど、そろそろ弾切れ起こしそうだしニヤア……）
ナタリーは、考えていた。考えること。それが何よりもモンスターに対してハンターが対抗できる術なのだと、ナタリーは主人が師と仰ぐハンターから教わったことだ。

（うまく体内にダメージを与えられれば……でも、どうやって中に攻撃ニヤんて……！！）

『体内に攻撃』その言葉に、ナタリーの中である一つの『奇策』が生まれた。だが、一緒に思い出された苦い記憶に、ナタリーはぶんぶん頭を振る。

（……いやいや駄目ニヤ！ あれは昔一回やったら旦那さんにめちやくちやに怒られた方法ニヤ。次やったら一体どんな折檻がやってくるか……）

「きやあぁー！」

「お姉さま！」

「っ！ ノンノ殿！？」

ノンノの叫び声が、辺りに響いた。砂浜に赤い影が一つしかない。「ガッ！」

続けて、頭上から響く鈍い声。見上げると、ナタリーの頭上から三、四メートルほど上に、ノンノが叩きつけられていた。そのまま、重力に倣ってノンノが落ちてくる。とっさに大剣を盾にして横になるように落下したノンノは、大剣を支えにしながら立ち上がった。

「ノンノ殿！」

「大、丈夫、よお……」

駆け寄るナタリーにノンノはいつものように言ったが、苦しそうに胸を押さえているのは隠しきれていなかった。おそらく、肋骨にヒビが入っているのだろう。脂汗が、滲んでいた。

（やるしか、ないニヤね！）

その姿に、ナタリーは決意した。これ以上の長期戦は、ノンノの身体に毒だ。まだ若い彼女の道筋をここで、このような相手のために手折ることはできない。

ナタリーは近くの茂みに隠していた丸い装置を取り出すと、それを背中に括りつけた。

「ノンノ殿。策がありますのニヤ」

「……え？」

「一撃。ウチがコレを作動させたら、あいつの首筋に一撃、一番キツイ奴をお見舞いして欲しいのニヤ。そしたらすぐに、退いてくだされニヤ」

そう言って不敵に微笑むナタリーを見て、ようやくご乱心モードから戻ってくれたノンノがゆっくりと微笑んだ。

「……分かったわあ。お願いねえ、ナタリーちゃん」

「了解したニヤ！」

頷くノンノを見てから、ナタリーは駆け出した。どうやら、ノンノが喰らったのは体当たりだったらしい。体勢を整えているガノト

トスに向かって、ピリカが『火炎弾』を続けざまに撃っていた。

「ピリカ殿！ お下がりにくださいニャー！」

「ナタリーさん！？」

ガノトトスの足元に向かって駆けたまま、ナタリーはピリカに叫んだ。ノンノが喰らった攻撃を見て、こちらもご乱心モードから元に戻ったようだ。ナタリーの言葉に特に異論を述べずにすぐに後退してくれた。

ナタリーはそのまま、暴れるガノトトスの足の間をすり抜け、ちょうどその中間の辺りの砂浜に頭に乗せていた円盤を設置する。

「ビリビリ痺れるのニャー！」

装置の安全ピンを抜きながら、ナタリーは叫んだ。

次の瞬間、装置からクモの巣を用いて造られたネットとそこにくくりつけられた小さな刃が飛び出す。刃に仕込まれているのは、ナタリーのピッケルに仕込まれているのと同じ、ゲネポスの牙から採れた麻痺毒だ。

罨系の狩猟道具『シビレ罨』

麻痺毒に耐性のないモンスターならば、大型でも十数秒はその動きを止めることのできる道具だ。

汎用性が高く、また『落とし穴』のように地形に左右されないため、砂漠や雪山などの捕獲クエストではかなり重宝されている。

もちろん、ガノトトスにもこの罨は有効だった。瞬時に足に絡み付いたネットから染み出た麻痺毒に、それまで暴れていたガノトトスの動きが止まる。

「やりましたわー！」

ナタリーの後ろで、ピリカがガッツポーズを取っていた。元より、足はノンノとナタリーによって傷つけられていたのだ。傷口を通じての麻痺毒の進行は、かなり辛いに違いない。

「ノンノ殿ー！」

「もう準備は万端よお！」

ナタリーの呼びかけに応じ、ノンノがガノトトスの側頭部のすぐ近くで『カースオブキャット』を上段に振り上げ、気を練る。最大限に溜められた気力が、大剣の威力を倍増させた。

「せえええいつ！」

ノンノの『溜め斬り』が、ガノトトスの首筋を斬り下ろす。血飛沫が舞ったが、それでもなお、ガノトトスの瞳から生命の炎が燃え尽きることはない。

「しぶといですわね……！」

ピリカが、苦虫を噛むような表情でガノトトスを睨みつけていた。ノンノは既に限界だ。あの怪我でこれ以上の無理はさせられない。

「ピリカ殿。ウチが合図をしたら、何でもいいからガノトトスの首筋に撃ち込んでくださいニヤ」

「え？」

そこへ、ナタリーの声がピリカの耳を叩いた。声のした方を見ると、ナタリーが何やら小さなタル型の物体を用意している。『小タル爆弾』と呼ばれるそれは、両脇にランゴスタの羽がくつつけられている。『小タル爆弾』とはまた別タイプの爆弾、『打ち上げタル爆弾』だった。

「ナタリーさん？ ……一体、何をするんですの？」

ピリカが不思議そうに首を傾げているのが、振り向かずともナタリーには理解できた。コレをはじめてやったときのレラの反応と全く一緒だったからだ。

さぞかし不思議に見えたに違いない。あろうことが、『打ち上げタル爆弾』（ちなみに、ただの打ち上げタル爆弾ではない。『打ち上げタル爆弾G』だ）の上に、ナタリーがしがみついているのだから。

ナタリーは、今自分が知っている限りで一番カツチョイイと思える笑みを浮かべ、ピリカを振り向いた。

よって作られた『シビレ罨』は、通常のおよそ二倍の拘束時間を持っているのである。

「ナタリー特製の罨系道具の数々！ まだまだあるんニャよ！」

そう言うナタリーは痺れているガノトトスの頭上で何やら作業を始めた。暢気に鼻歌まで歌っている。

だがしかし、ナタリーが手がけているそれは、恐ろしく強大な『物』だった。

思わず、それを見たピリカとノンノも唾然としてしまう。

「嘘ですわ……」

「あら。大きな爆弾」

そう。ナタリーが作っていたのは、彼女の体躯の二倍は軽く超える超巨大な爆弾『大タル爆弾』だったのだ。

ナタリーがそれを担ぐのと同時に、ガノトトスを縛っていた『シビレ罨』が爆ぜる。拘束時間を超え、壊れてしまったのだ。ガノトトスは、自分の上にいる邪魔な虫けらを振り払おうと頭を振る。

「おっとつと！ ニャ」

「ナタリーさん！」

ガノトトスの頭上でバランスを崩しかけているナタリーを見て、ピリカの背中を悪寒が駆け抜ける。いくらナタリーでも、あの爆発に巻き込まれたら一溜まりもないはずだ。

しかし、ナタリーは絶妙なバランス感覚でガノトトスの鼻先まで到達すると、クルリと回れ右をした。

「お魚さん！ ごはんニャ！」

次の瞬間、ナタリーはガノトトスの鼻先から飛び降りた。そして、水プレスを吐こうとしたガノトトスの口目がけて『大タル爆弾』を放り込む。突然異物を口の中に放られたガノトトスは、驚いたのかプレスを吐く直前で動きを止めてしまった。

「ピリカ殿ー！」

「了解ですわ！」

ナタリーの呼びかけに、ピリカは『Lv・3 徹甲榴弾』を『メラルーラグドール』に装填し、撃った。弾は、ガノトトスの首筋に埋まり、一瞬の間を置いて爆ぜる。

それと同時に、盛大な音を立ててガノトトスの首が吹き飛んだ。

ノンノが加えた首筋の一撃を伝って、ナタリーの『大タル爆弾』の爆撃の逃げ道が形成されたのだ。更に、打ち込まれたのは『Lv・3 徹甲榴弾』。いくら上位クラスのガノトトスでも、内側からの攻撃は防ぎようがない。

「……勝ち、ましたの……？」

司令塔たる頭を失って横たえるガノトトスを見ながら、ピリカがポソリと呟いた。そこへ、『カースオブキャット』を引きずってノンノがやってくる。

「勝った、みたいねえ……」

呆けるピリカに、ノンノがゆっくりと微笑む。そこへ、ちょこちよことまるで何もなかったかのようにナタリーが歩いてきた。

「勝ったのニヤ！」

その一言で、三人は目を合わせ、それから一度だけその場に蹲ると同時に飛び跳ねた。

「やりましたわー！」

「やったわねえ！」

「やったのニヤ！」

キャツキャとガノトトスのお頭を前に、三人は勝利の喜びを分かち合った。

瞬間、火山が吼えた。

「っ!?!」

「え!?!」

「何ニヤ!?!」

突然響いた咆哮に、三人は火山を振り向いた。頂上付近に、暗雲が立ち込めている。

おかしい。今自分たちがいる海岸の空は、とても青く澄み切っているというのに。

「お姉さま!」

「火山で、何かが起こっている……!」

「とにかく、工房に急ぐのニヤ!」

ナタリーの言葉に二人は頷くと、ガノトトスの死体をそのままに、ドラグニル工房に向かう道を駆けた。

同時刻、ドラグニル工房。

「い、一体何が起こっていますのニヤ!?!」

工房の前で慌しく動いているのは、小柄な赤虎模様のアイルー、ベンケイだ。その隣では、小柄な竜人族の老人、ジン・ドラグニルがパイプを吹かしている。

火山から咆哮が聞こえた瞬間、それまで依頼されていた武具の最終チェックを行っていたエドガーは、倉庫から頑丈な青い鎧『リオソウルシリーズ』を身に纏うと、同様に倉庫にしまっていた大きな銃槍『ガンランスガンチャリオット改』を手にして火山に駆けていった。レ

オンジも、同じく『リオソウルU』シリーズに漆黒のヘビイボウガン『ヒドゥンスナイパー』を背負うと、海岸の方へと駆けていってしまった。

「慌てるでない。ベンケイよ」

「しかし、爺様！」

「ここで待つワシらにできることは、ただ彼らの無事を信じ、帰還を待つことじゃ。お主は、自分の主人を　わが玄孫を信じておらんのか？」

「……………」

静かにそう諭すジンの言葉に、ベンケイは口を噤んだ。しかし、相変わらずその漆黒の瞳は心配そうに火山を見上げている。

「若君……………」

小さくそう呟くベンケイの隣で、ジンは静かに憎悪をその瞳に宿らせていた。

「またしても、あの子に苦しみを与えるつもりか……………紅龍」

第三十六話 乱心する商人と空飛ぶ爆弾狂（後書き）

やったー！！

8月中にもう一話アップできたー！

もうすぐポケモン最新作の発売日ですね。旅がらすはもちろん両方予約してきました！

アルセウスも映画館から貰ってきましたよ！ピカチュウカラーのピチューも近所のイトヨーで貰いました。

いや、あの時は恥ずかしかったなあ。平日だから子供連れなんていないだろうと思ってイトヨーに行ったのですが……。

今が夏休みだつて忘れていたぜいw

もろにいましたよ、子供連れ。しかも同じ目的の。

からす『あ、あの、これ、ダウンロードしたいんですけど……』

店員『あ、じゃあこっちでやりますので……』

子『お母さん、ピチューどうすれば貰えるの？』

母『ええ？……あ、あの人やってもらってるみたいだから、後ろについて』

……超はずい！！！！

私（今年で21w）の後ろに並ぶのは小学生でしたw

しかし、ポケモンセンターヨコハマでは、フツツにお姉さん方もピチューの受け取りやってみたいで……。

ら、来年からは横浜行くぞ！絶対！！

……とまあ、無駄な話はコレでおしまいにして。

コメディって書くの難しいです。

どちらかというところコメディ畑の人間ではないので、なかなかどうも良い『笑い』を追求できません。

今回の空飛ぶ爆弾狂ネタの元は、モンハンFに出てくる冒険ネコちゃんです。YouTubeで動画を見た瞬間、『打ち上げタル爆弾G』で空を飛んでいるナタリーが浮かんできたのです。

アイルーじゃなくてナタリー。ここ重要。

この瞬間、からの脳内で『ナタリー』爆弾狂』の構図ができあがりました。

もう一つ、豹変ネタ。ヴァンとフラディオ兄さんに続いたピリカとノンノ。どちらかというところ、ハイになるヴァン寄りではなくキレると恐ろしい兄さん寄りの双子ちゃんです。

もう少し余裕のあるときに、もっと細かく描写したいなと思っています。

では、また次回！

第三十七話 忌み児の真実（前書き）

さ、先に一言……、

何かいろいろもう本当にすみません！！！！！！

自分ワールド全開です。

『反論何でも来いやぁ！』の勢いで書きました。

だから、先に一言、

怒らないでください！！！！！！

そんなこんなで、第三十七話です。

第三十七話 忌み児の真実

おお、『災厄』がこの村に降り注ぐ。

神よ、迫害され、追い出された我らが何をしたというのだ。

人間は、狡い。

我らが唯、彼らよりも長い刻ときを生きるといっただけで、

それにより得た知識が少しだけ深いといっただけで、

我らを恐れ、線を引いた。

数では勝てない我らを、数で追い詰め、追い出した。

……彼らを許せるものか。彼らの存在を、意義を、我らは許すものか。

ドラグニルは我らの掟を破った。

人間の血と自分たちの血を交え、穢れし血を生み出した。

星が謳っている。あれは二つの凶星まがほしだ。並んで在ってはならないもの。

だが、我らとて鬼ではない。

問題は、どうやってあの二人を裂くか……。

……『災厄』の生け贄に？

なるほど。片方が死ねば、もう片方の『凶星』の力も薄まる
う。

では、『太陽』の名を授かりし子の命を、『災厄』に。

愚かにも、『全てを射抜く目』を持って生まれた哀れな子供
を、貴方に捧げよう。村はどうか、見逃してくれ。

これで、村は平和のままだ。ずっと、ずっと……。

ドーラ火山の中腹。

狩場として登録されていない、山の裏側にできた瓦礫の山の近く
にある小さな洞窟の中で、美しく輝く銀の髪を扇状に広げ、レラは
静かに横たわっていた。

「……………」

その右手が、ピクリと動いた。続けてゆっくりとその瞼が開かれ
る。マカライトブルーの瞳が捉えたのは、黒と白のツートーンが特
徴の隻眼の二足歩行ネコ。メラルーが自分を覗き込んでいる姿だ
った。

レラと目が合ったメラルーは、驚いたのか一瞬だけ身を引いたが、
再びレラの顔を覗き込んできた。

「……？」

レラはメラルーの行動に眉をひそめた。おかしい。普通のメラルーは、こんなことはしないはずだ。

メラルーは、アイルーの亜種だ。基本的な能力はアイルーと全く同じだが、何故かこの種は手癖が悪い。ハンターの持つ道具を珍しがり、狩場で遭遇すれば何かを盗んで自分たちの集落に持ち帰ってしまう習性がある。

だから、レラに触れようとせず、また逃げる仕草も見せないメラルーに、レラは違和感を覚えていた。

そこへ、新しい影がレラの視界を覆った。

「目、覚めたか？」

「ヴァン、つて、イタツ！」

新しい人影　ヴァンの登場に、レラは横たえていた身体を反射的に起こそうとして、体中に走り抜けた痛みにも顔を顰めた。まるで自分の身体ではないようだ。特に、左肩が酷く痛む。

それを見ていたヴァンが、静かに彼女の身体を押し戻した。

「無理に動くな。……悪い。お前、オレの下敷きになっちゃってみたいでさ。全身を酷く打ってたし、特に左肩は衝撃で脱臼起こしちゃってた」

言われて、気づく。確かに左腕の力が入りづらい。外れている感覚は無かったので、ヴァンが嵌めてくれたということか。

そこで、レラは自分の姿をようやく確認した。

防具を着ていない。白いインナー姿だった。

「……あの、私のリオハートシリーズは？」

「悪いとは思ったけど、左肩嵌めるときに脱がせた」

「……何で全部脱がす必要があるの？」

「落ちたときの衝撃で、かなり痛んじまって。……今、在り合わせの道具で修復中」

「なるほど……」

言われて、納得した。あの高さから落ちたのだ。命があって、五

体もほぼ満足だったのが不思議なくらいだ。

自分の防具『リオハートシリーズ』は、ヴァンの『バトルシリーズ』に比べて強度は勝る。が、それは、『下位ランク』だけで比べた場合だ。師匠や兄・フラディオの防具と比較すれば、ヤマツカミと一ゼニ硬貨だ。似ているようで、その違いは比較にならないほど大きい。

(さて、どうしたものかしら……)

ともかくにも、生きている。ヴァンも自分よりは無事な様子だし、ポーチを落としていなければ、『へそくり』も無事なはずだ。それさえ使えれば、走れる程度にはすぐに回復できる。

問題はその後、どう行動に出るか。だ。

とりあえず、ポーチのことをヴァンに聞こうと彼に顔を向けようとしたところで、

「アタイを無視するんじゃないのニヤー！」

レラは、隻眼のメラルーが振るったにゃんにゃんぼつを、モロに顔に受けた。

「きゃっ！」

「あ、こら、エリザ！」

直撃を受けた鼻を擦るレラの横で、ヴァンが隻眼のメラルーを咎める。エリザと呼ばれたメラルーは、プリプリと頬を膨らませていた。

「アタイを無視したコイツが悪いのニヤ！ アンタたちを見つけてオジジ様に報告したのはアタイニヤよ！」

「だからって、コイツは事情を知らないし、何より怪我人だ！ 謝れ、バカエリザ！」

ヴァンの言葉に、エリザが顔を真っ赤にして怒りの声を上げた。

「ムキニヤー！ アンタ、今アタイをバカ呼ばわりしたかニヤ！？ オジジ様に言いつけて、コイツの防具の修復に使ってる道具を取り上げて貰うニヤよ！」

「んなっ！ 汚ねえぞ、お前！」

武器を人質ならぬ物質に取られたヴァンが狼狽える。一方、エリザはそれで勝ちを確信したのか、小さく鼻を鳴らした。

「フフン。今すぐ謝れば、許してやってもほぎゃっ」

だが、エリザの言葉は背後から現れたにゃんにゃんぼうによって封じられた。

「謝るのはお主の方じゃ。エリザ」

エリザの背後から、年老いたメラルーが洞窟の中に入ってきた。かなりの高齢に見えるが、その背筋はピンとしており、どこか優しいながらも雄々しい印象を、レラはその老メラルーに覚えた。

「お嬢さん、エリザが悪いことをしたのう。体の具合はどうかね？」

老メラルーは、自分を見つめるレラに視線を動かすと、にんまりと優しい笑みを浮かべた。レラはそれに対し、何とか動く首を小さく縦に振ると、今の状況について訊ねようと口を開いた。が、老メラルーは静かに。とでも言うように口に手を添えた。

「ここは、儂ら獣人族の里にある隠し洞穴。儂は里長の爺じゃ。あんたらは、運良く里の近くに落ちたんじゃよ。……けが人のあんたは、本当はベッドに運びたかったのだが、今はちと危険での」

「危険？」

里長、オジジの言葉にレラが首を傾げるとほぼ同時に、一匹のアイルーが洞穴に飛び込んできた。

「オジジ様！ 物見台より連絡ですニヤ。ドーラの者が里に入ろうとしております！」

「やはり来たか……。通せ。儂が行こう。エリザはここで二人を」
「合点承知ニヤ！」

エリザがビシィッ。と敬礼をする。オジジはその姿に満足げに頷くと、連絡を入れに来たアイルーと外に出ていく。そして、

「大声を出しちゃダメじゃぞ。特に……」

「あのクソ長が何言おうと、騒いだりはしねえよ」

ヴァンが小さく悪態をつくように言ったことに微笑みを返し、オジジは洞穴の入り口を岩で塞いだ。

岩で入り口を塞がれた洞穴は、真つ暗で何も見えなかった。しかし、しばらくして、マツチを擦る音がしたと思うと、洞穴の中が少しだけ明るくなった。エリザがランプに火を灯したのだ。

「自己紹介がまだだったニヤね。アタイはエリザ。さっきも言ったけど、里の近くに落ちたアンタたちを見つけたのはアタイニヤ」

「あ。私はレラ。レラ・グランエスト。ハンターよ。助けてくれてありがとう、エリザ」

助けてくれたことに素直に礼を述べると、エリザは気分を良くしたのかそれまでの不機嫌そうな表情を一変させ、ニコニコと鼻歌を歌い出した。

エリザの右目は、何かに傷つけられたのか、縦に大きな傷を作っ
て開かなくなっている。しかし、それでもエリザの微笑みにはメラ
ルー本来の愛らしさがちゃんと残っていた。

「……さて、もうそろそろかニヤ」

「え？」

鼻歌を歌い終えたエリザが、じっと地面を睨む。すると、突然三人のちょうど真ん中に位置する地面が盛り上がり、そこから一匹の
アイルーが顔を出した。小さい。まだ子供のアイルーだ。

穴から出てきたアイルーは鼻に付いた土を可愛らしい手で拭くと、
穴から玩具のラップにホースを繋げたような物体　連絡菅を取り
出した。

「エリザ姉ちゃん！ 『とーちよーき』を持ってきたのニヤ！ 向こうも見えない場所にセツトしてきたのニヤ！」

「助かったニヤ。ヴァンはともかく、レラには聞かせたかったからエリザがアイルーを労うようにその喉を撫でてやる。アイルーはゴロゴロと喉を鳴らすと、今度は背負ってきたどんぐり型のポーチから、干し肉を何枚かと水の入った水筒、それに小さな麻の袋を取り出した。

「その袋……！」

麻の袋を見た瞬間、レラが目を剥いた。見間違いでなければ、それはレラの『へそくり』のはずだ。

すると、アイルーは小さな頭を一生懸命に縦に振った。

「うん。ねーちゃんのニヤ。とーちゃんが、『きつと必要だろうから、持ってってやれ』ってボクに持たせたのニヤ」

「そうなの？ ありがとう！ 良かった。これで動ける……」

麻の袋を嬉しそうに受け取るレラを見て、横で胡座をかくヴァンが小さく首を傾げた。

「何だ？ その袋」

「『秘薬』が入っているの。滅多に使わないようにしてるんだけど、これを飲めばどれだけ傷ついていてもすぐに良くなるのよ」

説明をしながら、レラは袋の中からビー玉位の大きさの黄色い丸薬を取り出した。それを口に放り、噛み砕く。苦いような、何とも言えない味が口の中に広がる。だが、我慢して何とか飲み下した。

これでいい。あと十分もすれば、歩けるくらいには回復するはずだ。

飲み下す瞬間の顔がそんなに酷かったのか、ヴァンが心配そうにこちらを見てきた。

「大丈夫か？」

「うん……」

『秘薬』は、『アオキノコ』と、千年生きると言われる『不死虫』から作る『栄養剤』にハチミツを混ぜ、そこに『マンドラゴラ』と

呼ばれる貴重なキノコを加えた薬だ。

『不死虫』と『マンドラゴラ』の持つ、細胞の働きを活発化させる成分を、増強作用のある『アオキノコ』で最大限にまで引き上げたそれは、一粒飲めば、どれだけ体が疲れていようと、たった数分で元の状態に戻してくれる。

だが、普通に考えれば不可能なことを可能にするこの薬には、強い副作用がある。それについて、今言う必要はないだろう。

「二人とも。静かに！ 村長がオジジ様と対面したみたいニヤ！」
そこへ、エリザの声が響いた。程なくして、オジジ様の声が連絡菅から聞こえてきた。

『ドーラの村長よ、久しいな。今日は山が怒りを露にしておる。こんな場所にお主が来て良いのか？』

『大丈夫だ。私の部下が纏めている。それより、ここに二人の人間が来なかったか？』

続けて聞こえてくる、若い男の声。これが、ドーラの村長の声なのだろうか。

男の言葉に対し、オジジは『はて？』と白を切るように惚けた声を出した。

『二人の人間？ さて、儂には何も知らせが来ておらんがのお』

『ふん。相変わらずの態度だな、族長よ。片方は貴様が懇意にしているドラグニルの忌み児だが、それでも知らないと言っのか？』

明らかに、村長の態度が変わった。見下したような言い方。敬意など、微塵にも感じられない。

しかし、オジジは怯まなかった。

『おお。ヴァンの奴、帰って来ておったのか。まったく、つれない

奴じゃ。ジジにも顔ぐらい見せて欲しいものじゃて』

「うっせ。ってか、来てすぐに顔は出したじゃねーかよ」

オジジの言葉に、ヴァンが小さく悪態をついた。そのふてくされた様子に、レラは思わず笑ってしまった。すると、エリザが険しい表情で二人を睨む。

「静かにするニヤ！ こっちの声が漏れたら大変ニヤよ！」

その言葉とエリザの表情に、二人の表情も固まった。その間に挟まれている子アイルーは、いまいち状況を理解しきれしていない様子であったが、大人しくしている。

程なくして、再び村長の声が洞穴に響いた。

『あくまでも白を切ると言うか、族長。『災厄』が再びこの地に降り立ったのだ。腹立たしいことこの上ないが、我らは奴によって生き延びる道しか残されていない』

「……どういう意味？」

村長の言葉に、レラが首を傾げた。ヴァンによって、村が生き延びる。意味が分からなかった。

しかし、ヴァンとエリザは意味を理解しているようだった。エリザは先程よりも眉間に皺を寄せ、ヴァンは何処か諦めているような表情をしていた。

連絡菅の向こうから、オジジのため息が漏れた。

『愚かしい。何故、『災厄』がここを襲うかも気づけぬ愚者が、罪無き者を』

『我らは間違つてなどいない！ 五百年前、先代が復活させた技術を畏れ、人間は我らをこの地に流した！ 人間こそ、何より愚かで、罪深き者。その血を持ち、あるうことか最も高潔だったドラグニルの血を受け継いだ忌み児こそ、生まれながらにして罪深い！』

オジジの言葉を塞ぐように、村長が声を荒げて言った。しかし、オジジから漏れたのは、またしても小さなため息だった。

『何故、その技術とやらが失われていたのか、知りもしないのか』
『知っている。だが、あれは素晴らしい技術だ。あれを完全に復活させ、改良を重ねれば、この世界を変えることができる』

最早、レラには彼らが何を言っているのかが分からなかった。『あれ』とは何なのか、どうして、そのためにかつてのドーラの竜人たちは迫害され、この地に流されたのか。

ただ、レラにも一つだけ、村長に共感できる部分があった。

(この人たちは、自分を否定されたんだ……)

恐らく、村長の先代たちとやらが復活させた技術とは、彼らにとって本当に大切なものだったのだろう。それこそ、自分の魂と同等と言える程に。村長の言い方から、それは予想できた。

だからこそ、彼らはそれを畏れた人間が憎くてたまらないのだ。それはすなわち、自分たち自身を畏れられたのに等しい意味を持っているのだから。

再び、オジジの悲しそうな声が洞穴に響いた。

『あれは復活させてはならぬ。だから、『災厄』はこの地に再び降り立った。……また生け贄を捧げたところで、惨劇は免れぬのだぞ』

「え……？」

オジジの言葉に、レラは言葉を失いかけた。今、オジジは何と言ったのだ？

しかし、レラがオジジの言葉を飲み込む間もなく、村長が鼻を鳴

らすのが聞こえた。

『免れる。十二年前に、『太陽』の名を授かり、あの女と同じく愚かにも『全てを射抜く目』を受け継いだ忌み児を生け贄に捧げたと
き、村は助かった。次は『炎』の忌み児の番。あれは何も持っていないが、確かに穢れた血の児だ。『太陽』の代わり程度は務まるだ
ろっ』

それ以上、村長は何も言わなかった。沈黙が、流れる。
数秒後、

『帰れ。貴様に言うことなど無い』

オジジが、短くそれだけ答えた。再び沈黙が降り立った後、村長の吐き捨てるような声が最後に響く。

『後悔しても、もう遅いぞ』

『……………』

オジジの声は、聞こえなかった。数秒後、何かが大地を踏む音だけが、虚しく響いた。

洞穴の中に、重たい沈黙が降り立っていた。連絡管とそれを持ってきた子アイルーは、既にいない。

レラは、秘薬によって何とか動けるまでに回復した体を起こし、目の前にいる少年を見つめた。

「ねえ。さっきの村長の言葉。十二年前に起きたことって……」
「てめえには関係ない」

レラの言葉を遮るように、少年は短くそれだけ言った。それから、ゆっくり立ち上がって洞穴の入り口まで歩いていく。

それを見て、エリザが悲しそうな声を出した。

「行くのかニヤ？」

「ああ。ようやく分かったこともあったしな」

そのやり取りで、レラは少年が何をしに行くのかを悟った。

いけない。止めなければ。

しかし、まだ完全に回復していない体は、立ち上がることすら容易ではなかった。悔しげに拳を握るレラを、少年が振り返って見る。その表情は、何故か酷く優しいものだった。

「巻き込んで、悪かった。後は、一人でやるから」

「ダメ……。ダメよ、そんなの……」

弱々しく、だが、はっきりと首を横に振った。先程のオジジたちの会話で、レラは確信を得たのだ。

脳裏に浮かんだのは、かつての幼い自分。

次に浮かんだのは、ドーラに向かう途中、船で少年が眠りながら呟いた意味深な言葉。

この少年を、今、行かせてはいけない。まだ訊いていないことがたくさんある。

ようやく見つけたのだ。『自分とよく似た存在』を。

しかし、そんなことを知らない少年は、オジジが閉じた入り口の岩を、片手で退けた。

ダメだ。行ってしまふ。

レラは、叫ぶように少年の『名前』を呼んだ。

「『ティータ』！」

レラの呼んだ『名前』に、少年の動きが止まった。振り返り、信じられないものを見ているような表情で、レラを見る。

「何言ってるんだよ、オレは」

「貴方は、『ヴァン・ドラグニル』じゃないわ」

少年の言葉を遮り、レラは言った。

「今、村長が言っていたわ。『太陽』の名前を授かりし児は『全てを射抜く目』を受け継いだが、『炎』の児は何も持っていない』つて。『全てを射抜く目』……、『千里眼』のことでしょ？ 貴方はそれを持っている」

「んなもん、あいつらが知らないだけだ。現に、オレがそれを発現させたのは、六歳の頃……」

「船で」

少年の反論を、レラは遮った。ドーラに来る途中から抱き始めていた疑問。彼に抱くようになった想い。その全ての点が、ようやく一つになったのだ。

だから、レラは言葉を続けた。

「船で、貴方が過呼吸を起こしたとき、寝言で貴方が、貴方自身が

言っていたのよ。

『生け贄になるのは僕だったのに』……」

少年が、目を見開いた。その仕草に、レラは確信を得る。

「貴方は、十二年前に自分を『殺した』。そして、死んだはずの自分の片割れとして『生まれ変わった』。そして今、『再び自分を殺すために』火山を登ろうとしている」

「……止める」

少年が、蚊の鳴くような小さな声で呟いた。だが、言葉を止める気など、毛頭無かった。

「貴方が抱いているのは、村人への憎しみでもなければ、忌み児として自分を産み落とした両親への憎しみでもない。……自分への、酷いくらいに大きな殺意。命と同等に大切だったものを自らの手で葬った自分への、深い憎しみ……」

「嫌だ……聞きたくない……止めてくれ！」

頭を抱えて唸る少年の懇願を無視し、レラは最後の言葉を放った。

「貴方は、『ヴァン・ドラグニル』じゃない。

貴方の本当の名前は、『ティーダ』。
『ティーダ・ドラグニル』」

「止めるおおおおおおおおおおおおおっっ！」

少年の 『ティーダ・ドラグニル』の叫びが、洞穴を覆った。

第三十七話 忌み児の真実（後書き）

ポケモン金銀、ポケモン（特に水）のレパードリー少ねえよう！
自分よりちっこいポケモンに波乗りさせられるかぁ！

な、旅がらすです。

発売日がちょうど夜勤明けだったので、寝ずに買いに行きました。

予約で完売してました。

……あ、もちろん自分は二本とも予約でしたけどねw
通信用にもう一個DSを中古で買った（うわ……）

今ん所、両方タンバで止まってます。HGのトゲチックをプラチナ
に送って進化させて戻した鬼畜です。

664

って、こんな話はどーでもよくて、

双子入れ替わりネタです。

主人公を双子に設定した時点で、決めていました。

ただ、かなり無理矢理なこじつけが多数あるのは自分でも重々承知

しています。

反論ばつち来いです。

むちゃくちゃな部分で切っちゃったので、

できるだけ早く次話を更新できるように頑張ります。

皆さん、次回で理由を納得してくれるかな！？（からの実力次第
というのが何ともビミョー……orz）

第三十八話 太陽と炎の児（前）（前書き）

たまじゆけ初の前後編構成です。

二万文字を超えかけたので、二分割してしまいました……。

火山編、十月までには終わるといいなあ……。

そんなこんなで、後書きにて重大発表（？）ありますよ。な、第三十八話です。

第三十八話 太陽と炎の児（前）

少年の叫びが洞穴に木霊する。レラはその様子に確かな確信を得た。

自分の推論は間違っていない。目の前にいる少年は、『ティータ』なのだ。

「ねえ、どうしてあなたは……」

「黙れ！」

言い切る前に、少年が声を上げた。続けて、少年は激しい怒りの感情を露にしながらレラを睨みつける。

「何も知らないくせに、でしゃばった真似をすんじゃねえよ！ お前には関係ない！」

「関係あるわ！ だって」

「うるさい！ これはオレの問題だ！ オレとヴァンの問題だ！ 何も知らないお前に何か言われる筋合いなんかはない！」

少年は、それまでの明るくて常に冗談染みていて、しかしそれでも真剣な輝きに満ちていた瞳を一変させて、真つ暗な虚空しか見えないかったかのように暗い何かをそこに宿していた。

仮面だったのだ。今まで彼が着けていたのは。

『ヴァン・ドラグニル』という仮面が、今剥がれ落ちかけていた。「断罪をするために、貴方は今まで生きてきたとでも言っつもり！？」

レラの言葉に、少年が身体を大きく震わせる。先ほどのエリザと少年のやり取りから、レラはこれから少年がしに行くことの予想を大方していた。

死ぬつもりなのだ。この少年は。

十二年前、本来は自分が死ぬはずだった運命を捻じ曲げた罪を償うために。

「……死んだら、終わっちゃうのよ……？」

レラの悲しい声が、洞穴に響いた。少年は、動かない。

「夢があるって、言ってたじゃない……。死んだらそれだって」
「あれは……。あいつの夢だったんだ」

少年が、短く答えた。そして、再び入り口の方へと向き直る。
「頼む……。オレは、死にたいんだ……」

最後の少年の言葉は、震えて、掠れていた。少年はそのまま、洞穴を出て行く。レラは必死にまだ回復しきっていない身体を起こし、少年に手を伸ばした。

「待って……。行つてはダメ、ティード！」

しかし、レラの手は届かず、少年は洞穴から出て行つてしまった。程なくして、洞穴の中にレラのすすり泣く声が静かに響き渡る。

(どうしよう……。どうしよう……。！)

あのままでは、本当に少年は死んでしまふ。あの得体の知れない龍の恐ろしさもそうだが、元より少年に戦う気は無いのだ。ただ、殺されに行くだけ。ただそれだけなのだ。反抗する気の無い獲物など、何の躊躇も、何の意思も無くとも殺すのは容易である。

でも、それだけは何としても止めなければならぬ。それがたとえ、レラ個人のエゴであつても。

レラは、あの少年を殺したくはなかった。

「ティード……」

「やはり、行つてしまったか」

「オジジ様!？」

少年と入れ替わりに洞穴に入ってきたのは、オジジだった。オジジは外を見て小さくため息をつく。レラとエリザにそつと歩み寄ってくる。

「どうせエリザのことじゃ。あの会話は聞いておつたじゃろ?」

「ニヤ、ニヤんでそれを!？」

『盗聴器』のことが筒抜けであることにエリザが驚いたが、オジジはそれを無視してレラの頬に優しく触れてきた。

「まあ、お主にはアレを聞かせたかったから、ちょうど良かったん

だかの。……知ったのじやろう？ あの子の真実を」

オジジの問いに、レラは無言で頷いた。それを見たオジジが、洞穴の外をチラリと見やった。それが合図だったのか、何匹かのアイルーやメラルーが何かを担いで洞穴の中に入ってくる。

それは、桜色に輝くレラの防具と太刀だった。目の前に置かれた自分の武具とオジジとを、レラは交互に見た。

「オジジ様、コレ……」

「最低限、応急処置程度のことしかできんかったが、火山の熱から身を守る程度には修復してある。……あの子を、追ってくれ」

「……どうしてですか？」

素直に、頷けなかった。行きたいという気持ちは確かに強くレラの中にあつたが、何故、この老メラルーがそんな大事なことを自分に託そうとするのかを知りたかつた。

すると、オジジの瞳が、レラの瞳を捕らえた。

「あの子が、お主のことを心配しておつたからじゃ」

「……え？」

「エリザがお主らを発見し、この洞穴に運んだ。知らせを受けた僕がここに来たとき、既に目覚めておつたあの子が、必死になってお主の名前を呼んでおつたのじゃ」

驚いた。あの少年が、まさかそんなことをしていただなんて。レラは、目を大きく丸くさせながら、小さく呟いた。

「……彼が、私を？」

「そうじゃ。『死ぬな。死なないでくれ、レラ』……涙をあの瞳いっぱいに溜めながら、皆で励ますまで、あの子は繰り返しそう言っておつたよ」

「そ、んな……」

レラの瞳から、一筋の涙が流れた。

嬉しかった。あの少年が、いつも小憎たらしいことばかり言っているあの少年が、レラをそんなに心配してくれていたことが、たまらなく嬉しかった。

そして、それと同時に、絶対に死なせたくない、レラは強く思った。死なせてなるものか。

「真実は、あの子の口から聞くべきじゃ。儂らが関わられるのはここまで。……そして、我らからも頼む。あの子を、救ってくれ」

オジジの愛らしい手が、レラの右手にそつと触れた。目を閉じて、それを感じる。

温かいぬくもり。これを、レラはあの少年に届けなければならぬ。

レラは目を開くと、強い決心をそこに抱いて、オジジを見た。

「……分かりました。必ず、彼を守ってみせます。絶対に……死なせない！」

『秘薬』の効果、ようやく全身に回った。レラは素早く立ち上がると、防具に手をかける。確かにまだ所々が頼りなさ気ではあるが、しかし着れないほどではなかった。

(お願い。もう少しだけ、私を守って)

防具に向けてレラはそう念じると、最後に愛刀の『黒刀【弐の型】』を背負った。ポーチを腰に着け、オジジとアイルーたちを振り向く。

その無言の瞳からレラの意思を悟ったのか、オジジが満足そうに頷いてくれた。レラも、それに答えるように頷く。

「アタイも行くニャ！」

そこへ、アイルーたちの中からエリザが飛び出してきた。にゃんにゃんぼつを携えた隻眼のメラルーは、強い眼差しでレラを見つめる。

「え、でも、危険よ！」

「アタイもあいつと一緒に『千里眼』を持っているのニャ！ アンタが一人で闇雲に追いかけるより、ずうっと効率が良いのニャ」「で、でも」

「レラ。エリザを連れて行ってやってくれ」

うるたえるレラに、オジジの言葉が降ってくる。レラは少しだけ

躊躇うようにオジジを見たが、オジジはそれ以上何も言う気はないらしく、ただ無言でレラを見つめていた。

レラに迷っている暇などなかった。こうしている間にも、あの少年は山を上っているのだ。腹を括るしかない。

「足手纏いになったら置いていくけど、いいわね!」

「それはこつちの台詞ニヤ! ついて来るニヤよ!」

「ええ!」

覚悟を決めたレラの言葉に、エリザが力強く頷く。二人はそのまま洞穴から飛び出していった。

「……オジジ様。本当に大丈夫でしょうかニヤ?」

二人が出ていった後、一匹のイルーがオジジに心配そうに訊ねてきた。オジジは静かにそのイルーを見てから、洞穴の外に出て火山を見上げる。

「儂の考えが……ジンの言葉から推測した儂の考えが正しければ、あの娘は必ずやティーダを救ってくれる」

「……?」

オジジの言葉に、訊ねたイルーは小さく首を傾げた。しかし、オジジはそれ以上何も言わずにただ山を見つめていた。

(今日、あのときに下されなかつた審判が、再び……)

オジジは静かに、十二年前のことを思い出していた。

十二年前 ドラグニル工房

「……おひめさまはいいました。『それでは、わたしはあなたをと

わにあいしつづけましょう。しんじつのあいをしり、わたしをあいしてくださったあなたとなら、どこまでもいけるとわたしはしんじています』」

小さいすに腰掛け、拙い話し方で絵本を読むのは、まだ四歳になったばかりの男の子だ。小さな手で、大きなページをゆつくりと捲る。それを、男の子と同じミカン色の髪を綺麗に伸ばした母親が、ベッドで横になりながらニコニコと聞いている。

「おうじさまは、おひめさまのことばになみだをながしました。ゆつくりとおひめさまにちかづいたおうじさまは」

「おかあさん！ みてみて！ すつごくじょうずにできたんだよ！」

だが、男の子の読み聞かせは、突然部屋に入ってきたもう一人の男の子によって阻まれた。男の子と全く同じ顔をした彼の手には、綺麗に丸く加工された水晶が乗っている。

母 レビイ・ドラグニルは、息子 ヴァンの持ってきた水晶に笑顔を浮かべた。

「まあ、上手にできたわね。すごいわ、ヴァン」

「えへへ。こんなの『あさめしまえ』だよ！」

ツナギ姿に軍手を着けたヴァンは、レビイの褒め言葉にすっかり舞い上がった。ちなみに、百回目にしてようやくここまでたどり着いたことなど、母のレビイにはお見通しであった。

「……えほん、よんでたのに……」

そこへ、椅子に座って本を読んでいた男の子 ティーダの不機嫌そうな声が降り注ぐ。片割れの怒りに気づいたヴァンは、小さく顔を引きつらせながら、それでも何とか笑顔を作った。

「なんだよ。おこるなよ、ティーダ」

「……あともうちょっとでおわるところだったんだ。もうちょっとでおひめさまとおうじさまは……」

絵本の続きを確認したティーダは、しかし最後の文章を読んだ途端に顔を真っ赤にして俯いてしまった。その様子を違和感を抱いたヴァンが、ティーダの手からサッと絵本を奪い取る。

「あつ、だ、ダメ！ よんじゃダメ！」

「なんでだよ。えーとナニナニ……。『おひめさまにちかづいたおうじさまは、そのからだをやさしくだきよせ、くちづけをかわしました』」

「ダメー！」

どうやらその文章に反応していたらしい。椅子から降り、必死になって絵本を取り返そうとするが、身体能力はヴァンの方が上らしく、どんなに頑張ってもティーダに絵本が戻る様子はなかった。

「うわー。このふたり、チューしてるよ！ チュー！ すっげー、すっすんでるう」

「チューとかいわない！ いわないのー！」

「なんだよ。ティーダもすけべだなあ。こんなのでかおまっかにしてんのー！」

「してない！ しーてーないー！」

「してるよー！」

片手に水晶、もう片手に絵本を持って笑うヴァンを、半泣きで追いかけるティーダ。よくある家庭の一風景に、レビイは顔を綻ばせた。

「……ッ！ ガハッ！」

だが、次の瞬間、その表情は崩れた。苦しそうに、胸を押さえて咳き込み始める。

母の異変に、二人の息子はすぐに反応した。

「おかあさん！」

ヴァンが急いで母のそばに駆け寄る横で、ティーダはベッドにすぐ脇にある棚の上から薬の入った吸呑みを取る。そしてそれを、苦しそうに喘ぐ母の口元に寄せた。

「おかあさん、おくすり」

ティーダが口元に寄せた吸呑みの中身を、レビイはゆっくりと口に運んだ。程なくして、咳も落ち着き、ゆっくりと息をついた。

先ほどよりも少し青い母の顔を心配したヴァンが、小さな声で

訊ねる。

「だいじょうぶ……？」

「ええ、大分楽になったわ。ありがとう、二人とも」

レビイは笑顔だったが、双子の顔は晴れなかった。

「レビイ。隠れ里のオジジが、薬を分けてくれたよ」

そこへ、小さな麻の袋を手にした屈強な体つきの竜人が部屋に入ってきた。レビイの夫であり、双子の父　　エドガー・ドラグニルだ。

エドガーは、レビイの顔色に気づくと慌ててベッドに駆け寄ってくる。

「また発作か？」

「ええ。でも、二人がいたから、すぐに治まったわ」

愛する息子たちを抱き寄せ、レビイは夫に微笑みかけた。エドガーも安心した様子で、小さく息をつく。

しかし、その表情は少し暗かった。

「……最近、間隔が狭まっているな」

「……そうね」

エドガーの言葉に、レビイは力なく頷いた。

人間と竜人は、姿形こそほとんど似ているが、身体づくりでいくつか違う部分がある。その間に子を宿し、産むのは至難の業と言われている。

それを、一気に二人も授かり、産んだのだ。運良く二人とも無事に産まれてくれたが、その代償にレビイは虚弱体質となってしまうた。

加えて、ドーラ島は火山の島だ。二人を産んで弱くなったレビイの身体を、過酷な環境が更に追い込んだ。

「島を出られれば、一番良いのだが……」

「でも、工房をまた一から造り直すのは大変よ。私なら大丈夫。何たって、昔は『弓の賢者』サジタリウスって呼ばれてたんだもの。病気なんか

「負けないわ」

そう言つて、レビイは微笑んだ。太陽のように明るいその笑みに、エドガーは小さな笑みを返す。

そこで、抱き寄せられていた双子は、パツと顔を上げた。

「そいえば、おかあさんつてハンターだったんだよね？」

「そおよ。弓使いだったの。で、ハンター協会つてところから、『弓の賢者』の名前を頂いたのよ」

「すごおい……。おかあさん、かっこいい！」

キラキラとした瞳で自分を見上げる息子たちを見て、レビイは微笑んだ。それから、ティーダの顔をじつと見る。

「……？ なあに、おかあさん？」

「ん〜。前から思つてたけど、ティーダは鍛冶職人よりも、ハンター向きの顔よね〜」

「ふえ？」

突然の母の分析に、ティーダは小さな瞳を丸くさせた。あまり意味が分かっていないのだろう。

「えつとね……。つまり、ティーダは私に似ているのよ」

「……そうなの？」

「えーっ！ ティーダはつかしずるいー！ ぼくはどうなのさ！？」

母の言葉に首を傾げるティーダの横で、ヴァンが小さな手で母の肩を叩いた。レビイは、そうねえ。と小さく呟きながら、ヴァンの顔を覗き込む。

「顔は私に似ているけど、やっぱり目はエド……というより、おじいちゃまに似ているわね。貴方、絶対にお父さんより良い鍛冶職人になれるわよ」

「ほんと！？」

母の分析に、ヴァンの顔が一気に明るくなる。そんな息子を愛らしく思いながら、レビイはその頭を優しく撫でてやった。

「あら。私が貴方に嘘なんてついたこと、ある？」

「ない！」

「でしよう?」

「おいおい。しかしそれじゃ、俺はヴァンにあっという間に追い越されるってことか?」

そこへ、エドガーが苦笑を浮かべながらおどけてそう言った。すると、ヴァンが得意気に鼻を擦る。

「こえるよ! ぼくはいつかかならず、おとうさんもじいじもこえた、『せかいいちのぶぐしよくにん』になるんだ!」

幼子が口にしたそれは、険しく長い道のりだ。『神の手』と呼ばれる職人を超える。一体幾人もの武具職人がそれを目指し、また挫折していったのだらう。

しかし、ヴァンの瞳は、そんなことなど考えてもいないようだった。彼は本当に高祖父が好きで、武具が好きなのだらう。もしかしたら……。という期待を抱いてしまいそうになる。

だから、エドガーは息子の頭をそつと撫でてやった。

「そうか。頑張れよ」

「うん!」

父の言葉にヴァンは元気良く頷くと、今度はそれまで黙って話を聞いていた片割れに視線を向けた。

「ねえ。そしたらさ。ティーダがそのぶぐをつかってよ!」

「え、ぼくが?」

突然の提案に戸惑いの色を隠せない片割れを他所に、ヴァンは話を進めた。

「うん! だって、せつかくつくつてもつかつてもらえなきゃいみないもん。それに、ぼくはティーダにつかってほしいんだ」

「……………」

「ティーダがハンターになって、ティーダがあつめたそざいでぼくがさいこうのぶぐをつくる! ぼくたちのゆめ。ふたりでひとつのゆめだよ!」

「ふたりでひとつ、ぼくたちの、ゆめ……………」

ティーダは、しばらく少し悩むようにヴァンの言葉を反復した。

しばらくして、何度か小さく頷くと、ヴァンに視線を戻して言った。
「そうしよう。ぼくたちふたりで、じいじをこえよう」

「そーこなくっちゃ!」

ティーダの答えに、ヴァンは嬉しそうな笑みを浮かべた。それを見て、両親もつられて微笑む。最後に、ティーダも小さくはにかんだ。

そこには、幸せな空気が流れていた。

その夜、

「……ダ、ティー……」

ティーダは、誰かに名前を呼ばれ、目を覚ました。

「んんう?」

「あ、やっとおきたあ」

「ヴァン? どうしたのさ、こんなよなかに」

ティーダは寝ぼけ眼を擦りながら、自分を起こした張本人　ヴァンを見やる。ヴァンの右手には、今日やっと成功した水晶の玉が握られていた。

「いまから、かざんにいこう」

「へっ?」

突然の提案に、ティーダは驚きを隠せなかった。この片割れが突拍子もないことを言うのはいつものことだが、今回は特にぶっ飛んだ提案だった。

「こんなよなかに? しかも、かざん?」

さすがに、今回ばかりはすぐに頷けなかった。しかし、戸惑うテ

イーダを他所に、ヴァンは嬉々としている。

「このまえ、むらびとがはなしているのをきいたんだ。『満月の夜に水晶を火の神に捧げれば、どんな願いも叶う』って」

「……ヴァン。またむらにいったんだね」

村人は、母を酷く嫌っているのを、二人はよく知っていた。ただ単に母が人間であるというだけでそうしていることも、よく分かっている。だから、ティーダは村が大嫌いであつたし、またそんな村には行く気など全く起こせなかつた。

しかし、ヴァンは違った。もちろん、ヴァンも村人を良く思つてなどいながつたが、それでも母には優しくしてほしいと願っているのだ。

ヴァンがちよくちよく一人で村の近くへ行き、子供たちから石を投げられて帰ってくるのを、ティーダはよく知っている。一度ティーダ自身もやられたからだ。しかし、その一度で諦めたティーダと違い、ヴァンは何度も挑戦している。呆れると同時に、羨ましい気持ち、ティーダは目の前にいる片割れに抱いていた。

「とにかくさ。きょうがその『まんげつ』のよる『なんだ。すいしゅうもある。だから、行こう』」

「……だめだよ。せめて、おとうさんかレオンジにいちゃんといっしょじゃないと」

火山は、鍛冶を生業とする者にとっては、聖地である。そのような場所に、まだ職人ですらない子供が単独で行くことは許されていなかった。

それに、確かドーラ火山に入る場合は、何か儀式が必要だつたはずだ。それを知らないで火山に入るとは自殺行為に等しい。ティーダはヴァンの提案に乗り気になれなかつた。

ヴァンは、ティーダの態度に憤慨したらしかつた。苛ついた表情で、ティーダを睨んでいる。

「なんだよ！ ティーダはおかあさんがしんじやつてもいいの!？」

「それは……」

もちろん嫌だった。だが、そのために自分たちが危険を冒したと母が知ったら。と考えると、やはり首を縦には振れなかった。

「ティーダ！」

「ヤダよ、あたりまえじゃないか！ でも、ぼくたちだけじゃ、きけんだよ……」

「やってみなきゃわかんないだろ！ おとうさんもじいじも、ぼくたちをかざんになんてつれていつてはくれない。なら、ぼくたちだけではないか。いつて、かみさまにおねがいしなくちゃ！」

ヴァンの決意は、固かった。何者にも屈するものかと意気込んでいるのが、よく分かった。

しばらくの間、二人は静かに睨み合っていた。互いに想うことは同じ、だが、その方向は微妙に違ってしまっていた。

最後に折れたのは、ティーダだった。

「わかった……。いこう、ヴァン」

「ティーダ……！」

ティーダの言葉に、ヴァンの表情が綻んだ。続けて、満面の笑みで大きく頷く。

「いこう、かざんへ！」

こうして二人は、大人たちの目を盗み、裏口から抜け出して火山を目指した。

それが、二人にとって運命の分かれ道であったことなど、まったく知らずに。

「……畜生！」

火山の中腹まで来て、少年は岩肌に拳をぶつけた。

あのとき、自分が折れていなければ、片割れも、母も、死ぬことはなかったかもしれない。そんな後悔が、彼を責め立てていた。

だが、もう過ぎたことだ。取り返せはしない。少年は静かに火山の頂上を見上げた。

十二年前と同じように、怒り、叫びを上げている火山を。

「待っている……！」

険しい表情に戻った少年は、再び頂上へと続く道を駆けた。

一方、火山の頂上では、紅い龍がただ静かに佇んでいた。龍が小さく唸る度に、火口が火を噴いた。まるで、龍そのものが、火山の意思であるかのように。

「審判の時は来た」

いつからそこにいたのだろう。龍の足元に、人影が一つ。

どう着るのかよく分からない、漆黒のローブを身に纏った人影は、龍を見上げた。

「時の流れとは早いものだ。もう、あれから十二年も経った」

フードですっぽりと覆われているため、人影の顔は伺えなかった。声も、あまりに中性的で、性別の判別がつかない。

「あの『太陽』の児は、どうしているのかね？」

人影の言葉に、龍がまるで答えるように小さく唸った。龍の唸り声に、人影から笑い声が零れる。

「そうか。帰ってきたか。そして今、再び相見えるため、ここに向かってきている……」

再び、龍が唸った。次に人影が見せたのは、驚きの声。

「……『彼女』の娘？ まさか……」

しかし、もう一度龍が唸ると、人影は思案するように腕を組んだ。「運命……。あの罪人の末裔が、『彼女』の娘と……」

人影はしばらく黙っていたが、ゆっくりとその口端を斜め上に上げた。

人影は、笑っていた。

「面白い……。ようやく来た裁きの時。やはりこうでなければ面白くない……！ さあ、再び相見えようか、『太陽』の児よ！ お前の『答え』、楽しみに待っているぞ！」

龍の足元で、人影はそう言いながら高らかに笑っていた。

第三十八話 太陽と炎の児（前）（後書き）

後編、なるべく早めに更新します！

そして、ここで旅がらすよりお知らせです。

外伝第一弾、執筆決定！

読者の方々からアンケートを頂いた結果、たまじゆけの外伝第一弾が決まりました！

記念すべき第一弾、主人公は最近全くと言って良いほど登場しないけど、実は作者お気に入りキャラクター、フラディオ兄さんです！

タイトルは決まっていますが、今言つのは面白くないので、もう少しお待ちを。

大体十話前後で書く予定です。

目標は十二月までに投稿すること！

旅がらすはぐうたらちゃんなので、こうして言うておかないと、多分一生書かないので。

ロビン姉さんに投票してくださった方々はもう少し待ってください。フラディオ兄さんの次に、ロビン姉さんを予定しています。

では、次回またお会いしましょう！

第三十九話 太陽と炎の児（後）（前書き）

えー。皆さま、お久しぶりです。

大変長らくお待たせしました。

たまじゆけ、完全復活というわけではありませんが、更新です。

回想はこれにて終了です。

今回は、たまじゆけでおそらく最もえぐいシーンが出てきます。
苦手な方、ごめんなさい。

第三十九話 太陽と炎の児（後）

それは、とても幸せな光景だった。

レビイの体調が良くなり、再び狩りにも行けるようになった。村の人々とも和解でき、村から依頼を受け、レビイが火山に向かう。傍らには、今より成長した息子の一人 ティーダがいる。息子もレビイと同じく弓を背負っていた。

狩りを終えて家に帰ると、工房でもう一人の息子 ヴァンが、先日レビイたちが狩ったモンスターの素材を使って何かを造っている。それを、夫を始めとする工房の面々が、微笑ましく眺めていた。ヴァンはやがて、二人が帰ってきたことに気づくと、嬉しそうに歯を見せて笑った。自分の隣で、ティーダが優しい微笑みでヴァンに応えた。

夢に向かって歩く息子たち。それを見守ることのできる幸せ。レビイも思わず笑みを溢し、息子と夫たちに言った。

「ただいま」

「ん……」

夜中、レビイは目を覚ました。それにより、今まで見ていたあの幸せな光景が夢だったことに気づいた。息子たちはまだ四歳だ。あれでは十四、五は行っていた。そんな訳がなかったのだ。

(……ちよいと残念だったなあ)

少し残念だが、でも確かに幸せな夢だった。本当にそうだったら、どれだけ幸せかを想像し、レビイは笑みを溢した。

(……まだ夜、か……)

しかし、珍しい。レビイは滅多には夜に起きたりしない体質だ。

いつもなら、一度寝れば誰かに起こされるまではなかなか起きない自分が、一人で、しかもこんな時間に目を覚ますとは。

「……珍しいこともあるわね」

誰に言うでもなくそう呟くと、レビイはもう一度眠ろうと寝返りを打った。窓の向こうに、ドーラ火山が映る。

瞬間、レビイの『千里眼』が『何か』を捉えた。

「……!?!」

一瞬で目が覚めた。今まで、ハンターとして生計を立てていた頃でさえ見たことの無かった、巨大な『何か』が火山の上空を飛んでいるのが見えた。形からして、恐らく『龍』。

「何、あれ？」

もつときちんと見ようと、レビイは窓を開け、目を凝らした。

火山に住まう飛竜種　グラビモスやリオレウスなどは形も大きさも違う。かと言って、火山に住まうモンスターの中でも特に大きな魚竜　ヴォルガノスは、マグマを遊ぶ。決して空を飛びはしない。一瞬、レビイの頭を一度だけ本で見た巨大な飛竜、アカムトルムの姿が過つたが、あれだって空は飛ばないはずだ。

得体の知れない『龍』。レビイは寒気を覚えた。

(エド……。エドを、呼ばなきゃ)

とにかく、夫を呼ぼうと窓から目を逸らしたレビイの『千里眼』が、再び意外なものを捉えた。

「…………え？」

最後に視界の端に映った光景に、慌てて再び火山に目を向ける。火山の麓を少し登った場所。そこに、頂上を目指して登る『気が二つ。』

モンスターならば、別に気にする必要などなかった。

しかしそれは確かに、ヒトの子供の形をしていた。

「まさか！」

嫌な予感がして、レビイはベッドを飛び出した。夫の部屋ではなく、息子たちの寝室にノックもせずに入る。

「……………あ」

嫌な予感が、的中してしまった。

ベッドは、もぬけの殻だった。

「そんな……………！」

レビイはその場にへたりそうになるのを、何とか堪えた。いけない。あれは間違いなく息子たちだ。村の子供なら、あんな場所に子供だけで行ったりはしない。

息子たちを、連れ戻さなければ。

しかし、それを夫に頼むのは危険だった。

火山はモンスターの巣窟だ。武器を造れても扱うことのできない夫には、危険すぎる。何より、頂上付近には得体の知れない『龍』がいるのだ。そんな場所に、夫を行かせるわけにはいかなかった。

レビイは、踵を返した。自室に戻り、ベッドのすぐ脇にある棚から小さな袋を取り出す。中には、漆黒の丸薬が入っていた。

「……………」

以前、ドーラ火山にある隠れ里の長老である老メラルーから夫たちに内緒で貰った丸薬だ。簡単に言えば、一時的に身体を騙すことができる、麻薬。どんな状態でも、これさえ飲めば健康な状態とほぼ同じ力を取り戻せる。

もちろん、その副作用は半端なものではない。老メラルーも、できることなら使わないように。と、レビイに強く念を押ししていた。

(オジジ様、ごめんなさい)

しかし、レビイはそれを破ることにした。今は自分の身体を一番大事に思っている余裕などないのだ。

レビイの脳裏に、今日の昼間にヴァンが言っていた言葉が思い出される。

ティーダが狩ったモンスターの素材で、ヴァンが武器を造る。いつか、二人で『神の手』と謳われる高祖父 ジン・ドラグニルを超える。

それが、あの二人の夢なのだ。

母として、それを今、得体の知れない『龍』によって潰えさせる訳には行かなかった。

レビイは、一気に丸薬を飲み下した。

火山の麓から少しだけ登った場所。ヴァンとティーダは小さな足をゆっくりとだが確実に頂上へと進んでいた。

左手に昼間に磨き上げたばかりの水晶を持ち、右手を自分の左手としつかり繋ぎ合ったヴァンの後ろを歩きながら、ティータは火山に起きている『異変』に首を傾げていた。

(どうして、モンスターがいつびきもあらわれないんだろう……)

ティータは、母・レビイの持つ『千里眼』を受け継いで生まれた母から少しだけ使い方を教わっていたティータは、自分たちの周り

少なくとも半径一キロ以内にモンスターが『一匹も』いないことを捉えていた。

(おかしい、おかしいよ……)

言いようのない恐怖が、幼子の心に纏わりついていた。ティータだって、この火山がどのような場所かは知っている。ハンターがモンスターと死闘を繰り広げる『狩場』なのだ。常にモンスターが自分の命を次代へと育むために自然の脅威と戦い続けている場所。そんな場所にモンスターが一匹もないという『違和感』は、少しずつティータの心を蝕んでいた。

(でも、じゃああれは……?)

だが、ティータの『千里眼』は、自分たち以外の存在を一つだけ捉えていた。

はるか上空、まるで二人を見下ろすようにしている『何か』。それをモンスターと呼ぶべきかどうか、何故か躊躇ってしまう『何か』が、いた。

「ねえ、ヴァン。やっぱりかえろう……」

おそろおそろ、ティータはヴァンにそう提案した。すると、やはり予想していた通り、険しい顔をしたヴァンがティータを振り向き、顔は自分とそっくりなのだが、どこか怒ったときの父や高祖父を連想させるような激しい瞳で、ヴァンはティータを睨んでいた。

「なんだよ！　ここまでできたのに、のこのこひきかえすっていうの！？」

「で、でも……」

必死に自分の感じている“恐怖”を説明しようと口を開くが、言葉が出てこない。幼いティードは、今抱える不安をうまく表す言葉を見つけられないでいた。

そここうする間にも、二人の足は頂上へと向かっていく。既に火山の中腹を過ぎた今、ヴァンの意識は頂上へと向かうことにのみ向けられているように見えた。

(……早くお祈りを済ませて、家に帰ろう)

結局、片割れを止める術を持っていなかったティードは、そう結論づけた。

早いところ頂上まで登り、神への祈りを終わらせる。モンスターのことは、常に『千里眼』で見っておけば、ある程度の対処を取れるはずだと。

だが、彼は知らない。

その結論こそが、彼の人生を完全に狂わせることになることを

「……は？」

ドラグニル工房で、ヒューゴが信じられない。とても言いたげな顔で、エドガーを見ていた。隣にいるアレンも、似たような顔をしている。

「その話、本当なんですか？」

「ああ。君たちの話す『龍』が、私の記憶にある『龍』と同一の存在なら、それはレヴィイとティードを殺した『龍』だ」

火山の麓の近くで、成す術なく下山したヒューゴたちは、火山にやって来たエドガーと落ち合った。

その後、二人の話を聞いたエドガーは、二人を工房に戻し、十二年前に起こったことを話したのである。

「あの紅い『龍』、一体何なんだよ!? 一応おれだってハンターだ。現在確認されている飛竜なら、頭には入れてある。でも、あいつは初めて見た。未確認のモンスターが、十二年前に一度現れてるってのかよ、オヤジさん!」

アレンがそうエドガーに突っかった。アレンはハンターを始め、てまだ一年と少ししか経っていないが、ミミルのギルドが所有するモンスターの図鑑には一通り目を通していた。しかし、あのように後ろ足だけで直立姿勢を取る竜を、彼は一度として見たことがなかった。

それに対し、エドガーは困ったように目を泳がせた。チラリと目をやった先で、ジン・ドラグニルがパイプを吹かしている。ジンは曾孫の視線に気づくと、小さく溜め息をつきながらパイプから口を離した。

「数多の竜を駆逐させ、数多の肉を裂き、骨を砕き、血を啜り、己こそが最上であると謳いし者、最も古き『龍』に身を砕かれた。

土を焼き、鉄を溶かし、水を煮立たし、風を起こし、木を薙ぎ、炎を生み出すは最も古く、最も気高き『龍』。

その者の名は宿命の戦い。避けられぬ死。生み出されたは災厄の顕現。

天と地とを覆い尽くす彼の者は、全ての龍の祖に連なりし者。

白光、紅炎、黒鉄。

喉あらば叫べ。耳あらば聞け。心あらば祈れ。

彼らは神の代行者。罪深き者をその身に秘めし『災厄』の力によって裁く者なり……」

まるで、歌を歌うように、ジンは静かに語った。その場にいた全員が、何故か誰一人として口を挟まずにそれを聞いていた。

語り終えたジンは、それ以上自分が言うことなど何も無い。とても言わんばかりに、再びパイプに口を付けた。

ジンの口から細く紫煙が漏れる。そこでようやく、ハツとなったように、ヒューゴが口を開いた。

「今の、まさか『ミラボレアスの謳』ですか!？」

「え、ヒューゴさん。知ってらっしゃいますの?」

ヒューゴの言葉に、ピリカが首を傾げる。ヒューゴは小さく頷いた。

「学院院にいたとき、伝承を調べていた知り合いが教えてくれたんだ。かつて、大陸を統べていた王国を一夜にして滅ぼした『龍』の話……。おとぎ話や子供のわらべ歌にもある、『黒龍伝説』の一説だよ」

ヒューゴの解説に、ジンが感心したように息をついた。

「ほお。知っているならば話が早い。又しらが見た『龍』は、その

『黒龍』 ミラボレアスの亜種、『紅龍』ミラバルカンじゃ」

「ミラバルカン……。はじめて聞く名前だわあ」

ジンが示した言葉に、小さく首を傾げるのはノンノだ。他も、同じ気持ちだったらしい。アレンとピリカも不思議そうに首を傾げている。

「確かにガキのとき、兄ちゃんから黒い龍の出てくる手まり歌を教わった記憶はあるけど……。そんな名前ははじめて聞くぞ?」

「ワタクシもです。一応、ギルドの所有するモンスターの情報には一通り目を通していたはずなのに……」

「ギルドも知る情報が少なすぎて、公表するまでに至ることの出来ないモンスターなんす。だから、知らないのも無理はないっすよ」

聞いたことのない名前に首を傾げる一同に、レオンジがそう答える。

と、そこで、ベンケイが身を乗り出した。

「お待ちくださいニヤ！ では、若君とレラ殿は、そのように危険な『龍』のいる火山に、今もいるということですかニヤ！？」

主君を心配し、居ても立ってもいられない様子のベンケイ。そのベンケイに放たれたのは、あまりにも非情な言葉だった。

「いるだけではない。おそらく、ヴァンの方はそやつを追って今も火山を登っておる」

「……………」

ジンの言葉に、絶句するベンケイ。それは、ヒューゴたちもまた同様であった。

やがて、ようやく我に返ることのできたアレンがゆっくりと口を開く。

「……………どういう意味だよ。それ……………」

「復讐だ。ヴァンは、ミラバルカンへの復讐を考えているんだ」

エドガーの短い答え。

その答えを皆が耳にした直後、エドガーに飛び掛かる影があった。ヒューゴだ。ヒューゴはエドガーの胸倉を掴み、激しい形相でエドガーを睨みつけていた。

「息子が復讐を企んでいると知って、山にいと確実に知っていて、貴方は何故止めに行かないんですか！」

「ヒューゴさん、止めてくださいっす！」

今にも殴りかかりそうな勢いのヒューゴを、レオンジが後ろから必死に抑えようとする。だが、ヒューゴは止まらなかった。

「子供を見殺しにする気か！ 貴方はそれでも、人の親か！」

「……………どうするかを決めるのは、あの子だ。私にその意思を止める権利はない」

「それ以前の問題だ！ 貴方は親として、子供をみすみす見殺しにしてもいいかって」

「やめい！」

工房の中に響くジンの声。それは、決して大きな声ではなかったが、ヒューゴは何故か言葉を止めた。

ジンは再びパイプに口を付けると、一度だけそれを吸い込む。そして、ゆっくりと吐いてから口を開いた。

「お前は、命と同等の存在を、目の前で消し炭にされた記憶があるか？」

「……………」

「あの子は、ヴァンは、たった四歳だった。ただ、母を救いたいと願い、山に登ったその先で、あの子は自身の片割れと母を見ず知らずの龍に消し炭にされたのだ。そのとき、あの子が何を感じたのか、お前には分かるのか？」

「……………」

言葉が、詰まった。

おそらく、それを理解できるものは多くはないだろう。それから十二年間もの間、彼が何を考え生きてきたのかもまた、ここにいる誰もが知ることはできない。

やり場のない想いを巡らせる一同に、ジンが言った。

「止めに行つたところで、あの子は止まらん。それに、お前たちでは死ぬ可能性の方が遥かに高い。……………今はただ、あの子を信じて待つてやってほしい」

バンッ！

ジンの言葉の一瞬後に、ドアが開いた。キィキィと情けない音を出して、ドアが前後に揺れる。

「ベンケイ！」

飛び出していったのは、ベンケイだった。ナタリーが慌ててドアを開けるが、もうベンケイの姿は見えなくなっていた。

「……くそおおおお！」

ヒューゴは、自身の拳を工房の壁に殴りつけた。

「ついたね。ちょうどじょう……」

幼いヴァンとティーダは、ようやく火山の頂上に到達した。二人とも竜人の血を半分受け継いでいるとはいえ、頂上の熱気はさすがに小さな身体に堪える。額には玉のような汗がいくつも流れていた。「はやくおいのりをしよう」

「うん……。いくよ」

ティーダの提案に、ヴァンが頷く。そうして、ヴァンは持ってきた水晶を火口へと落とす。

火口から少し離れて、二人で祈る。母の病が快方へと向かうようにと。家族が、村と仲良くやっていけるようにと。

だが、

ッ！

火口から響いた咆哮が、二人の祈りを中断させた。それと同時に、ティーダの『千里眼』が火口に潜む巨大な『影』を捕らえる。

(そんな、さつきまで、そらにいたのに！)

湧き出る冷や汗。まだこの時のティードは知らなかったが、彼の未発達な『千里眼』には発動に要するタイムラグという大きな欠点があった。その隙に、空から火口へと『影』は移動していたのである。

二人の目の前に現れたのは、巨大な紅い『龍』だった。発達した下顎と、王冠を模したような五本の角が、『龍』のまがまがしい様子を際立たせる。

ティードは、そのあまりの恐ろしさに、その場でへたりこんでしまった。

怖い。その感情だけが、今四歳の子供に襲い掛かる。

「ティード、にげよう！ ティード！」

そんなティードの隣で、膝を笑わせつつも何とか立っているヴァンがティードを起こそうとその身体を引っ張る。

分かってはいた。だが、身体は言うことを聞いてくれない。

『龍』が、笑った気がした。

ゆつくりとその顎を開いていく。その奥に見えるのは、地獄の業火とも呼ぶべき火球。

死ぬ。

そう、ティードは思った。間違いなく、自分はここで死ぬと。

きっと、罰なのだ。島の掟を破り、山へと登ったことが。

いや、もしかしたら、竜人と人間の間に生まれた子 『忌み児』として生まれてきたこと自体が、罪だったのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、『龍』がティードに向けて火球を放ってきた。いつの間にかいたのか、『龍』の頭上に見慣れない黒い人影が立っている。

「憐れな『太陽』の児よ。愚かな村の代わりにその命を捧げるんだ」
影が言っている意味の半分も理解できなかったが、ティーダはゆ
っくりと瞳を閉じた。

が、突然自分の身体が吹き飛ばされ、倒されるのを感じた。
誰かが押したのか、ティーダは慌てて起き上がり、自分が先ほど
まっていた場所を見る。

ヴァンが、両手を前に出した状態で、その場に突っ立っていた。
ヴァンの顔は、酷く歪んでいたが、ティーダと目が合った瞬間、
彼はなんと、涙を瞳いっぱいに浮かべながらも、綺麗に笑っていた。

「……ああああああっっ！」

名前すら、呼べなかった。

手を伸ばした瞬間、火球がヴァンを喰らった。

ヴァンの笑顔を、一瞬にして喰らった。

「ああ……、ああ……」

生き物が焦げる臭い。工房で当たり前のように嗅いでいたそれを、
今、自身の片割れが発している。

最早原形すら留めていないそれを前にし、四歳の幼子は自分に襲
い掛かる吐き気を堪えることができなかった。

吐く。

何度も。何度も。

吐くものが無くなっても、ティーダを襲う吐き気は納まることは

しなかった。

吐きたくない。目の前にいるのは、ヴァンなのだ。片割れを見て吐くなど、あつてはならない。

だが、それを幼い理性で留める術を彼は知らない。ただ、吐く自分への激しい憎悪と嫌悪感を抱いたまま、ティーダは吐き続けた。

「うぁ……、うぁぁぁ……」

言葉にならない。

何故、ヴァンが死ななければならぬ。

今朝、ヴァンは夢を語ったばかりだというのに。

その夢を、共に叶えようと誓ったばかりだったのに。

ティーダが愕然としている中で、『龍』の頭上に佇む人影の双眸が、ティーダを捉えた。

「ミラバルカン。もう一度だ」

短く指示を出す声。それに応じるように、『龍』の顎の奥で再び火球が生成される。

だが、それが放たれることはなかった。

何かが風を斬る音がしたその瞬間、『龍』の左目を数本の矢が射抜いたのだ。

続けて、ティーダを守るように、人影がティーダと『龍』の間に割り込む。

「息子は……、やらせないっ！」

「……お、かあさん？」

ヴァンは、驚愕していた。

病気で起き上がることも辛い母が、ラオシャンロンの甲殻を用いた鎧を身に纏い、左手にはクシャルダオラの素材を用いた弓を携えている。

有り得ない光景だった。

「ティータ、ごめんなさい……」

不意に聞こえる、母の声。意味が分からずに呆けていると、母は言葉を続けた。

「私がもう少し早く気づいていれば……、ヴァンは……」

違う。そう言いたいのにも、言葉が出なかった。

ヴァンは、自分のせいで死んだのだ。母は悪くない。

母が、優しい笑みをティータに見せた。

「貴方は死なせない」

強い言葉。母はそれだけ言うと、『龍』を振り返り、強く睨み上げた。

「覚悟しなさい！」

それからの戦いを、ティータは一生忘れはしないと感じた。

あまりにも凄まじかった。はじめて見た、ハンターとしての母の顔だった。

『龍』の放つ攻撃は、一撃で人を死に到らしめるものだ。それを母は次々と避け、『龍』の見せる僅かな隙について矢を穿つ。少しずつ、『龍』が圧されているように見えた。

だが、タイムリミットは無情にも母へと舞い降りる。

「うっ」

小さく唸る母。その身体からは、先ほどまで感じられたはずの生気がない。力無く、膝をつく。

ティーダは知らなかったが、母はここに到達するまでに先に飲んだ秘薬の他に、鬼人薬や強走薬などの薬も服用していたのだ。その反動は、病で抵抗力を失った身体には大きすぎた。

「おかあさん……！」

力無く叫ぶ我が子を振り返る母。無意識のうちに、空いている手をティーダへと伸ばしていた。

だが、ようやく訪れた好機を、『龍』が見逃すはずもなかった。

『龍』の顎から放たれる地獄の業火。

それは正確に、母を貫いた。

「……あ……」

今度こそ、本当に倒される母。その手は、まだティーダに向けて伸ばされていた。

幸か不幸か、二人の間には、かつてヴァンだったものが転がっていた。母はそれに気づくと、最期の力を振り絞り、ヴァンの元まで這っていく。

「ヴァン……。私の、可愛い子……」

ようやく我が子の元にたどり着いた母は、ヴァンだったものを優

しくその腕に抱き寄せた。

そして、母の瞳が、ティードを捉える。

その瞳には、涙が溢れていた。

「守れなくて、ごめんなさい。ティード……」

それが、最期の言葉だった。

母はそれだけ言うと、ゆっくりと目を閉じる。

その瞳が再び開かれることは、なかった。

「うああ……、うあああああああああああああ……」

火山に、幼い子供の叫び声が木霊した。

第三十九話 太陽と炎の児（後）（後書き）

幼い願い。

あんまりに残酷な結末にしてしまいました。

しかし、彼の本当の苦悩はここからです。

『ティータ』が『ヴァン』となった理由はもう少し後に伏線は幾つか張っているんですけど。

次回は現在の火山に。

頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5862f/>

魂の樹形図

2010年10月11日04時00分発行